主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書１

―千曲市内―

力石条里遺跡群

2011．3

長野県千曲建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

力石条里遺跡群遠景

弥生時代前期末の土器

はじめに

県道長野上田線は、長野市から千曲市、坂城町を経て上田市に至る、千曲川の左岸側を通る主要地方道です。この道路は、地域の生活を支えるとともに、千曲川の右岸側に並行する国道 18 号の代替道路として広域的な交通ネットワークの一端を担う重要な路線です。今回の千曲市力石から坂城町上五明の区間を結ぶ力石バイパスの事業地内には、二つの周知の遺跡があり、平成 13 年度から長野県埋蔵文化財センターが記録作成のための発掘調査を実施してきました。本書は、この内、千曲市上山田に所在する力石条里遺跡群の発掘調査報告書です。

力石条里遺跡群は、これまで千曲市（旧上山田町）教育委員会により発掘調査が行われており、縄文時代から古代・中世の集落跡や水田跡等が地中深くに埋もれていることが確認されております。

今回の発掘調査で新たに発見されました弥生時代の墓地跡は、“シナノ”の地に米作りが伝わった頃のもので、そこで使用されている土器は、様々な地域の特徴を持っていることが明らかとなりました。当時の地域間交流を探る上で、また“シナノ”での弥生時代の幕開けを知る上で欠くことのできない資料となりました。そうした調査成果の詳細につきましては、本書を御覧いただければと思いますが、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました長野県千曲建設事務所の方々、長野県教育委員会や千曲市教育委員会、坂城町教育委員会の方々、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

例　言

1　本書は、長野県千曲市に所在する力石条里遺跡群の発掘調査報告書である。

2　調査は、主要地方道長野上田線建設工事に伴う事前調査として実施し、長野県千曲建設事務所からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』18 ～ 23・26 ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図「坂城」「別所温泉」（1:25,000）、千曲（旧更埴）建設事務所作成の用地実測図（1：500）などをもとに作成した。

5　本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は 2002 年以前の日本測地系（旧測地系）による。

6　発掘調査にあたって、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。

測量・空中写真撮影：　㈱協同測量社、㈱写真測図研究所、新日本航業㈱

プラント・オパール分析、花粉分析、珪藻分析：　㈱パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ㈱

リン・カルシウム分析：　㈱古環境研究所

放射性炭素年代測定：　国立大学法人　東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究施設、㈱パレオ・ラボ、㈱加速器分析研究所

樹種および種子同定：　㈱パレオ・ラボ

石材鑑定：　国立大学法人　信州大学理学部教授　原山 智

人骨・獣骨の鑑定：　国立大学法人　京都大学名誉教授　茂原信生

黒曜石産地推定：　独立行政法人国立高等専門学校機構　沼津工業高等専門学校教授　望月明彦

遺物写真撮影：　信毎書籍印刷㈱

7　発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

青木一男、赤羽貞幸、石川日出志、石黒立人、小林謙一、小林青樹、佐藤由紀男、設楽博巳、永井宏幸、春成秀爾、平松弘孝、前田清彦、関東弥生研究会、国立歴史民俗博物館、古墳確立期の土器検討会、千曲市教育委員会

8　発掘調査の担当者、発掘補助員、整理補助員は第 1 表に記載した。

9　本書は、上田典男・町田勝則・西　香子が執筆を行い、上田典男が校閲し、大竹憲昭が総括した。上田・町田・西の分担は以下の通りである。

上田典男：第 1 章第 1 節、第 2 章第 1 節・第 2 節、第 3 章竪穴住居跡

町田勝則：第 3 章出土遺物（石器）

西　香子：上記以外

10　本書付録の CD には、以下の内容を収録した。

遺構一覧表、土器・土製品観察表、石器・石製品観察表、黒曜石産地推定結果報告書、放射性炭素年代測定結果報告書、自然科学分析結果報告書、本文の PDF

11　本書で報告した遺跡の記録類・出土遺物は、長野県立歴史館に移管される予定である。

凡　例

1　遺構番号は、遺構種ごとに付してあるが、発掘時の番号を変更しなかったため欠番がある。

2　実測図の遺物番号は、土器・土製品ごと、石器・石製品ごと１から通し番号をつけた。実測図の遺物番号は、表・写真とも共通する。

3　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下の通りである。そのほかの場合は図版中のスケールを参照していただきたい。

主な遺構実測図

竪穴住居跡　1：60　　住居内施設　1：40　　土坑　1：30

主な遺物実測図

土器　　個体　1：4　　破片 1：3

土製品　　1：3

石器　　石鏃　2：3　　磨製石斧・石鍬・敲石　1：3　　台石　1：4

4　遺物写真の縮尺はおおむね実測図と同縮尺である。

5　基本層序および遺構覆土の色調は『新版　標準土色帳』による。

6　実測図中の網掛け部分は、特に断りのある場合を除いて以下の事象を示している。

遺構図　　被熱赤変部分　　炭化物分布範囲　　赤色顔料分布範囲

遺物図　　土器　　赤彩　　黒色処理

7　本文中で使用した放射性炭素年代の測定値は、暦年較正年代で記した。

目　次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

目次

挿図目次・挿表目次・写真目次

第１章　発掘調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯…… 1

１　主要地方道長野上田線力石バイパスの建設計画…… 1

２　埋蔵文化財の保護協議…… 1

３　力石バイパス関連遺跡の発掘調査に係る受委託契約…… 2

第２節　発掘調査・整理作業の体制と方法…… 4

１　体制…… 4

２　発掘調査における記録の方法…… 4

(1) 遺跡の名称と記号　(2) 調査区（グリッド）の設定と略称　(3) 遺構の名称と遺跡記号

(4) 遺構検出と遺構調査の手順

３　発掘調査の概要と経過…… 7

４　整理作業の経過…… 9

(1) 基礎整理作業　(3) 本格整理作業

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境…… 10

第２節　遺跡の歴史的環境…… 10

第３節　基本層序…… 18

第３章　遺構と遺物

第１節　縄文時代…… 21

第２節　弥生時代前期末～中期中葉…… 22

１　遺構概観…… 22

２　溝跡…… 22

３　土坑…… 26

４　遺物集中…… 59

５　包含層出土遺物…… 64

第３節　弥生時代中期後葉…… 78

１　遺構概観…… 78

２　竪穴住居跡…… 78

３　溝跡…… 84

4　土坑…… 84
5　包含層出土遺物…… 86
第４節　弥生時代後期…… 89
1　遺構概観…… 89
2　竪穴住居跡…… 89
3　掘立柱建物跡…… 169
4　溝跡…… 176
5　土坑…… 179
6　包含層出土遺物…… 189
第５節　古墳時代～古代…… 192
1　遺構概観…… 192
2　溝跡…… 192
3　包含層出土遺物…… 196
第６節　中世以降…… 200
1　遺構概観…… 200
2　掘立柱建物跡…… 200
3　水田跡…… 208
4　土坑…… 210
5　包含層出土遺物…… 210

第４章　まとめ…… 213
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　調査グリッド設定図
第２図　周辺の遺跡分布図
第３図　土層
第４図　縄文時代の土器
第５図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図１
第６図　弥生時代前期末～中期中葉の遺構全体図
第７図　弥生時代前期末～中期中葉の遺構割付図（⑩区）
第８図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図２
第９図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図３
第10図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図４
第11図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図５
第12図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図６
第13図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図７
第14図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図８
第15図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図９
第16図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 10
第17図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 11
第18図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 12
第19図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 13
第20図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 14
第21図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 15
第22図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 16
第23図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 17
第24図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 18
第25図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 19
第26図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 20
第27図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 21
第28図　弥生時代前期末～中期中葉の土器１
第29図　弥生時代前期末～中期中葉の土器２
第30図　弥生時代前期末～中期中葉の土器３
第31図　弥生時代前期末～中期中葉の土器４
第32図　弥生時代前期末～中期中葉の土器５
第33図　弥生時代前期末～中期中葉の土器６
第34図　弥生時代前期末～中期中葉の土器７
第35図　弥生時代前期末～中期中葉の土器８
第36図　弥生時代前期末～中期中葉の土製品１
第37図　弥生時代前期末～中期中葉の土製品２
第38図　弥生時代前期末～中期中葉の石器１
第39図　弥生時代前期末～中期中葉の石器２
第40図　弥生時代前期末～中期中葉の石器３
第41図　弥生時代中期後葉の遺構全体図
第42図　弥生時代中期後葉の個別図１
第43図　弥生時代中期後葉の個別図２
第44図　弥生時代中期後葉の個別図３
第45図　弥生時代中期後葉の個別図４
第46図　弥生時代中期後葉の土器
第47図　弥生時代中期後葉の土器・石器
第48図　弥生時代後期の遺構全体図
第49図　弥生時代後期の個別図１
第50図　弥生時代後期の個別図２
第51図　弥生時代後期の個別図３
第52図　弥生時代後期の個別図４
第53図　弥生時代後期の個別図５
第54図　弥生時代後期の個別図６
第55図　弥生時代後期の個別図７
第56図　弥生時代後期の個別図８
第57図　弥生時代後期の個別図９
第58図　弥生時代後期の個別図10
第59図　弥生時代後期の個別図11
第60図　弥生時代後期の個別図12
第61図　弥生時代後期の個別図13
第62図　弥生時代後期の個別図14
第63図　弥生時代後期の個別図15
第64図　弥生時代後期の個別図16
第65図　弥生時代後期の個別図17
第66図　弥生時代後期の個別図18
第67図　弥生時代後期の個別図19
第68図　弥生時代後期の個別図20
第69図　弥生時代後期の個別図21
第70図　弥生時代後期の個別図22
第71図　弥生時代後期の個別図23
第72図　弥生時代後期の個別図24
第73図　弥生時代後期の個別図25
第74図　弥生時代後期の個別図26
第75図　弥生時代後期の個別図27
第76図　弥生時代後期の個別図28
第77図　弥生時代後期の個別図29
第78図　弥生時代後期の個別図30
第79図　弥生時代後期の個別図31
第80図　弥生時代後期の個別図32

第81図　弥生時代後期の個別図33
第82図　弥生時代後期の個別図34
第83図　弥生時代後期の個別図35
第84図　弥生時代後期の個別図36
第85図　弥生時代後期の個別図37
第86図　弥生時代後期の個別図38
第87図　弥生時代後期の個別図39
第88図　弥生時代後期の個別図40
第89図　弥生時代後期の個別図41
第90図　弥生時代後期の個別図42
第91図　弥生時代後期の個別図43
第92図　弥生時代後期の個別図44
第93図　弥生時代後期の個別図45
第94図　弥生時代後期の個別図46
第95図　弥生時代後期の個別図47
第96図　弥生時代後期の個別図48
第97図　弥生時代後期の個別図49
第98図　弥生時代後期の個別図50
第99図　弥生時代後期の個別図51
第100図　弥生時代後期の個別図52
第101図　弥生時代後期の個別図53
第102図　弥生時代後期の個別図54
第103図　弥生時代後期の個別図55
第104図　弥生時代後期の個別図56
第105図　弥生時代後期の個別図57
第106図　弥生時代後期の個別図58
第107図　弥生時代後期の個別図59
第108図　弥生時代後期の個別図60
第109図　弥生時代後期の個別図61
第110図　弥生時代後期の個別図62
第111図　弥生時代後期の個別図63
第112図　弥生時代後期の個別図64
第113図　弥生時代後期の個別図65
第114図　弥生時代後期の個別図66
第115図　弥生時代後期の個別図67
第116図　弥生時代後期の個別図68
第117図　弥生時代後期の個別図69
第118図　弥生時代後期の個別図70
第119図　弥生時代後期の個別図71
第120図　弥生時代後期の土器・土製品
第121図　弥生時代後期の石器・石製品
第122図　古墳時代～古代の遺構全体図
第123図　古墳時代～古代の個別図１
第124図　古墳時代～古代の個別図２
第125図　古墳時代～古代の個別図３
第126図　古墳時代～古代の遺物
第127図　中世以降の遺構全体図
第128図　中世以降の個別図１
第129図　中世以降の個別図２
第130図　中世以降の個別図３
第131図　中世以降の個別図４
第132図　中世以降の個別図５
第133図　中世以降の個別図６
第134図　中世以降の個別図７
第135図　中世以降の遺物
第136図　弥生時代前期末～中期中葉の墓壙
第137図　弥生時代後期の遺構分布図

挿表目次

第１表　調査体制
第２表　周辺遺跡一覧
第３表　墓壙一覧

写真図版目次

PL １　出土遺物
PL ２　弥生時代前期末～中期中葉の遺構
PL ３　弥生時代前期末～中期中葉の遺構
PL ４　弥生時代前期末～中期中葉の遺構
PL ５　弥生時代前期末～中期中葉の遺構
PL ６　縄文時代・弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL ７　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL ８　弥生時代前期末～中期中葉の土器

PL 9　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL10　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL11　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL12　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL13　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL14　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL15　弥生時代前期末～中期中葉の土器
PL16　弥生時代前期末～中期中葉の土製品
PL17　弥生時代前期末～中期中葉の石器
PL18　弥生時代前期末～中期中葉の石器
PL19　弥生時代前期末～中期中葉の石器
PL20　弥生時代中期後葉・後期の遺構
PL21　弥生時代中期後葉の土器
PL22　弥生時代中期後葉の遺物
PL23　弥生時代後期の遺構
PL24　弥生時代後期の遺構
PL25　弥生時代後期の遺構
PL26　弥生時代後期の遺構
PL27　弥生時代後期の遺構
PL28　弥生時代後期の土器
PL29　弥生時代後期の土器
PL30　弥生時代後期の土器
PL31　弥生時代後期の土器
PL32　弥生時代後期の土器
PL33　弥生時代後期の土器
PL34　弥生時代後期の土器
PL35　弥生時代後期の土器
PL36　弥生時代後期の土器
PL37　弥生時代後期の土器
PL38　弥生時代後期の土器
PL39　弥生時代後期の土器
PL40　弥生時代後期の土器
PL41　弥生時代後期の土器
PL42　弥生時代後期の土器・土製品
PL43　出土遺物
PL44　弥生時代後期の石器
PL45　弥生時代後期の石器
PL46　弥生時代後期の石器
PL47　弥生時代後期の石器
PL48　古墳時代以降の遺構
PL49　古墳時代以降の遺物

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯

１　主要地方道長野上田線力石バイパスの建設計画

県道長野上田線は、長野市から千曲市、坂城町を経て上田市に至る、千曲川の左岸側を通る主要地方道である。千曲川の右岸側には国道18号が並行してあり、県道長野上田線は、国道の代替道路としても広域的な交通ネットワークの一端を担う重要な路線である。そのため、１日の交通量が１万台を超え、特に千曲市力石地籍では、幅員が狭く、屈曲していることもあり、交通の難所となっていた。交通の円滑化と沿道地域の安全で快適な生活環境を創出するために、バイパス建設が計画された。国道18号についても千曲川の左岸側にバイパス建設計画があり、一部の区間で供用が開始されている。

力石バイパスの設計協議は平成７年度から開始され、平成10年度に千曲市大字上山田を起点に、坂城町大字上五明を終点とする全体延長1,820ｍのルートが決定した。平成13年度には、起点側の１期工区（920ｍ）の事業化が決定、平成16年度に終点側の２期工区（900ｍ）の事業化が決定し、平成22年３月６日に全線開通を迎えた。なお、２期工区は国道18号上田篠ノ井バイパスの計画線上に位置している。

２　埋蔵文化財の保護協議

力石バイパスのルート上には、力石条里遺跡群（上山田町―現千曲市）と上五明条里水田址（坂城町）という周知の埋蔵文化財包蔵地があるため、平成12年11月20日に、事業者である更埴建設事務所（現千曲建設事務所）と、上山田町教育委員会（現千曲市教育委員会）、長野県教育委員会の三者により、工事が先行する力石条里遺跡群についての保護協議がなされた。更埴建設事務所により提示された事業計画・内容に基づいて協議した結果、遺跡の内容を記録にとどめるために発掘調査を実施することとなった。ただし、調査主体者及び調査着手時期については決定を見ず、再協議となった。

平成13年４月17日に実施された更埴建設事務所、上山田町教育委員会、長野県教育委員会の三者による再協議で、調査主体者を当センターとし、当センターが13年度中には遺跡の内容を確認する調査ができる方向で調整することとなった。

平成13年８月27日の更埴建設事務所、長野県教育委員会、当センターの三者による保護協議で、13年度の11月～12月の間に確認調査を実施し、その調査結果を踏まえて、14年度の調査規模・調査体制を決めていくこととした。確認調査は平成13年12月５日～12月17日に実施され、縄文時代後期から近世に至る２～５枚の文化層が確認されたこと、水田址と集落跡がかかること等の調査成果が得られた。

平成14年３月14日、更埴建設事務所と当センターの二者協議で、確認調査の結果や14年度調査の着手時期は５月以降となること、１期工区の６～７割程度が用地買収調印済みであること等が報告・協議され、平成14年度から始まる力石条里遺跡群の本発掘調査を迎えることとなった。平成14年度以降は、更埴建設事務所、長野県教育委員会、上山田町教育委員会、当センターの四者による協議を年１回、定期的

に持ち、工事計画や用地買収の進捗状況、発掘調査の進捗状況及び成果を共有した。個別具体的な事案の協議については、更埴建設事務所と当センターの二者協議で調整してきた。

なお、平成 15 年 12 月 17 日に実施された、更埴建設事務所、長野県教育委員会、千曲市教育委員会、坂城町教育委員会、当センターの五者協議の際に、２期工区が事業化されたことが提示され、２期工区（力石条里遺跡群、上五明条里水田址）の本発掘調査も引き続き当センターで実施することとなった。

３　力石バイパス関連遺跡の発掘調査に係る受委託契約

千曲建設事務所と当センターの二者により、埋蔵文化財発掘調査業務の受委託契約を結び、遂行した。4 月当初から発掘調査に着手できるように、受委託契約の時期等を両者で調整したため、年度を越えた契約期間となった場合もある。契約期間と契約額は以下のとおりである。

平成 13 年度

業務名　　平成 13 年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　上山田町力石 (3)　力石条里遺跡群
契約期間　平成 13 年 12 月 5 日～平成 14 年 3 月 22 日　　契約額　　3,519,000 円

平成 14 年度

業務名　　平成 14 年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　上山田町力石　力石条里遺跡群
契約期間　平成 14 年 6 月 3 日～平成 15 年 9 月 30 日　　契約額　　130,500,000 円
＊14 年度事業費は、契約額の 130,500,000 から 15 年度への繰越額 42,803,000 を差し引いた 87,697,000 となる。

平成 15 年度

業務名　　平成 14 年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　上山田町力石　力石条里遺跡群
契約期間　平成 14 年 6 月 3 日～平成 15 年 9 月 30 日　　契約額　　130,500,000 円

業務名　　平成 14 年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　上山田町力石 (2)　力石条里遺跡群
契約期間　平成 15 年 3 月 5 日～平成 15 年 9 月 30 日　　契約額　　21,800,000 円

業務名　　平成 15 年度県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　平成 15 年 9 月 24 日～平成 16 年 3 月 10 日　　契約額　　49,047,000 円
＊15 年度事業費は、14 年度契約額 130,500,000 から 14 年度事業費の 87,697,000 を差し引いた繰越額 42,803,000 と 14 年度契約額 21,800,000、15 年度契約額の 49,047,000 の合計額 113,650,000 となる。

平成 16 年度

業務名　　平成 16 年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　平成16年4月1日～平成17年3月18日　契約額　54,401,000円

平成17年度
業務名　平成17年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　平成17年4月1日～平成18年3月17日　契約額　42,163,000円

平成18年度
業務名　平成17年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明(6)　力石条里遺跡群
契約期間　平成18年3月28日～平成19年3月20日　契約額　43,761,000円

平成19年度
業務名　平成18年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明(5)　力石条里遺跡群
契約期間　平成19年3月28日～平成20年3月20日　契約額　48,462,000円

業務名　平成19年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明(2)　上五明条里水田址
契約期間　平成19年9月18日～平成20年3月20日　契約額　24,476,000円

平成20年度
業務名　平成19年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明(3)　上五明条里水田址
契約期間　平成20年3月27日～平成21年3月10日　契約額　40,994,000円

業務名　平成20年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明　上五明条里水田址他
契約期間　平成20年8月1日～平成21年3月10日　契約額　32,514,000円

平成21年度
業務名　平成20年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明　上五明条里水田址
契約期間　平成21年2月3日～平成21年9月30日　契約額　23,455,000円

業務名　平成21年度地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石
契約期間　平成21年7月1日～平成22年3月31日　契約額　28,920,000円

平成 22 年度

業務名　　平成 21 年度地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明
契約期間　平成 22 年 2 月 8 日～平成 23 年 3 月 31 日　　契約額　36,950,000 円

第２節　発掘調査・整理作業の体制と方法

長野県埋蔵文化財センターでは、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため『遺跡調査の方針と手順』を作成し、これを基本に、それぞれの遺跡の内容・状況に応じた調査計画・方法を策定して発掘調査を行っている。

１　体制

平成 13 ～ 22 年度までの、調査体制は第１表に示した。

第１表　調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員			
平成 13 年	深瀬弘夫	小林秀夫	土屋　積	上田典男	西　香子		
平成 14 年	深瀬弘夫	小林秀夫	土屋　積	青木一男	太田秀保	西　香子	
平成 15 年	深瀬弘夫	市澤英利	廣瀬昭弘	西山克己	黒岩　隆	西　香子	
平成 16 年	小沢将夫	市澤英利	廣瀬昭弘	西　香子	入沢昌基		
平成 17 年	仁科松男	市澤英利	廣瀬昭弘	西　香子	山崎まゆみ		
平成 18 年	仁科松男	市澤英利	上田典男	西　香子	市川桂子		
平成 19 年	仁科松男	平林　彰	上田典男	贄田　明	寺内貴美子	山崎まゆみ	
平成 20 年	仁科松男	平林　彰	上田典男	西　香子	寺内貴美子		調査員　鈴木時夫
平成 21 年	仁科松男	平林　彰	上田典男	西　香子	寺内貴美子		調査員　鈴木時夫
平成 22 年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	西　香子	寺内貴美子		
平成 13 ～ 21 年度　発掘補助員							
赤羽利治	朝日奈富士子	池田豊一	石浦市郎	石田多美子	今井和男	上原美千代	牛澤政子
宇都宮義久	大橋廣司	大原はるゑ	沖田勝之	沖田松子	荻原勝子	長田宗之	尾島平一
落合孝市	風間貞男	金澤邦和	兼山忠晴	川崎輝美	北沢麻里枝	北沢やすい	木ノ瀬勝男
黒田清男	小林篤則	小林健治	小林作蔵	小林佐登美	小林武彦	小林哲三	小林奈美江
小林英子	斎藤庸介	坂口一誠	坂田昭二	坂田良人	佐藤昭子	塩原恵美子	澁谷安正
清水七郎	鈴木時夫	諏訪忠三	関口庸一	高桑豊治	高遠博	高野正道	高橋貫二
高橋元一	田島たか子	多門睦夫	塚田徳雄	塚原和子	中澤ヒデ子	中沢　幸	中澤　豊
中島裕子	中島祐子	仲田達也	中野隆平	中山健次	西沢貞雄	西澤美乃	西野入金巳
箱山喜洋	半田純子	深沢優子	間嶋美好子	増田益利	松崎とみ子	松林深水	松本　晃
水沢邦久	緑川うめ子	峯村静代	宮尾秋男	宮崎米雄	宮沢忠明	宮下容子	村上智見
村田宣子	望月勝二	森下和枝	柳沢栄治	柳沢悦子	藪　一義	山崎　忠	山田令子
横沢生枝	横沢　昇						
平成 14 ～ 20 年度　基礎整理補助員							
今井節子	上原美千代	荻原勝子	加藤周子	木ノ瀬勝男	倉島由美子	小林佐登美	小林奈美江
小林靖夫	鈴木時夫	滝沢久子	中島裕子	中山健次	深澤優子	緑川うめ子	
平成 17・21・22 年度　本格整理補助員							
阿部貴子	市川ちず子	宇賀村節子	丑山和江	大林久美子	窪田　順	小林知子	近藤朋子
塩野入奈菜美	鈴木時夫	鳥羽仁美	西島典子	半田純子	山崎みな子	渡辺恵美子	

２　発掘調査における記録の方法

(1)　遺跡の名称と記号

遺跡の名称と遺跡記号は、下記の通りである。遺跡記号は、記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字ア

ルファベット３文字で略表現した記号である。１文字目は長野県を９分割した地区記号で、千曲市を示す「B」、２文字目および３文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの二文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記にこの遺跡記号を使用している。

遺跡名称：力石条里遺跡群（ちからいしじょうりいせきぐん）

遺跡記号：BTJ

（2）　調査区（グリッド）の設定と略称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基準に、200 の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した（第１図）。

大々地区は、200 × 200 ｍの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を 40 × 40 ｍの 25 区画に分割したもので、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を８× ８ｍの 25 区画に分割したもので、北西から南東へ１～ 25 のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、大地区を２× ２ｍの 400 区画に分割したもので、西から東へＡ～Ｔのアルファベット、北から南へ１～ 20 のアラビア数字を組み合わせて番号を与えた。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、分割調査のために設定した仮地区は第３図に示した。

（3）　遺構の名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。ただし、主に平面形状や分布の特徴を指標として検出時に決定するため、以下に記した遺構記号と遺構の機能・性格が適合しない場合がある。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。発掘の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。遺構内施設についても同様である。

発掘作業および本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

ＳＢ：おおむね、一辺３ｍを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。
【竪穴住居跡、竪穴状遺構】

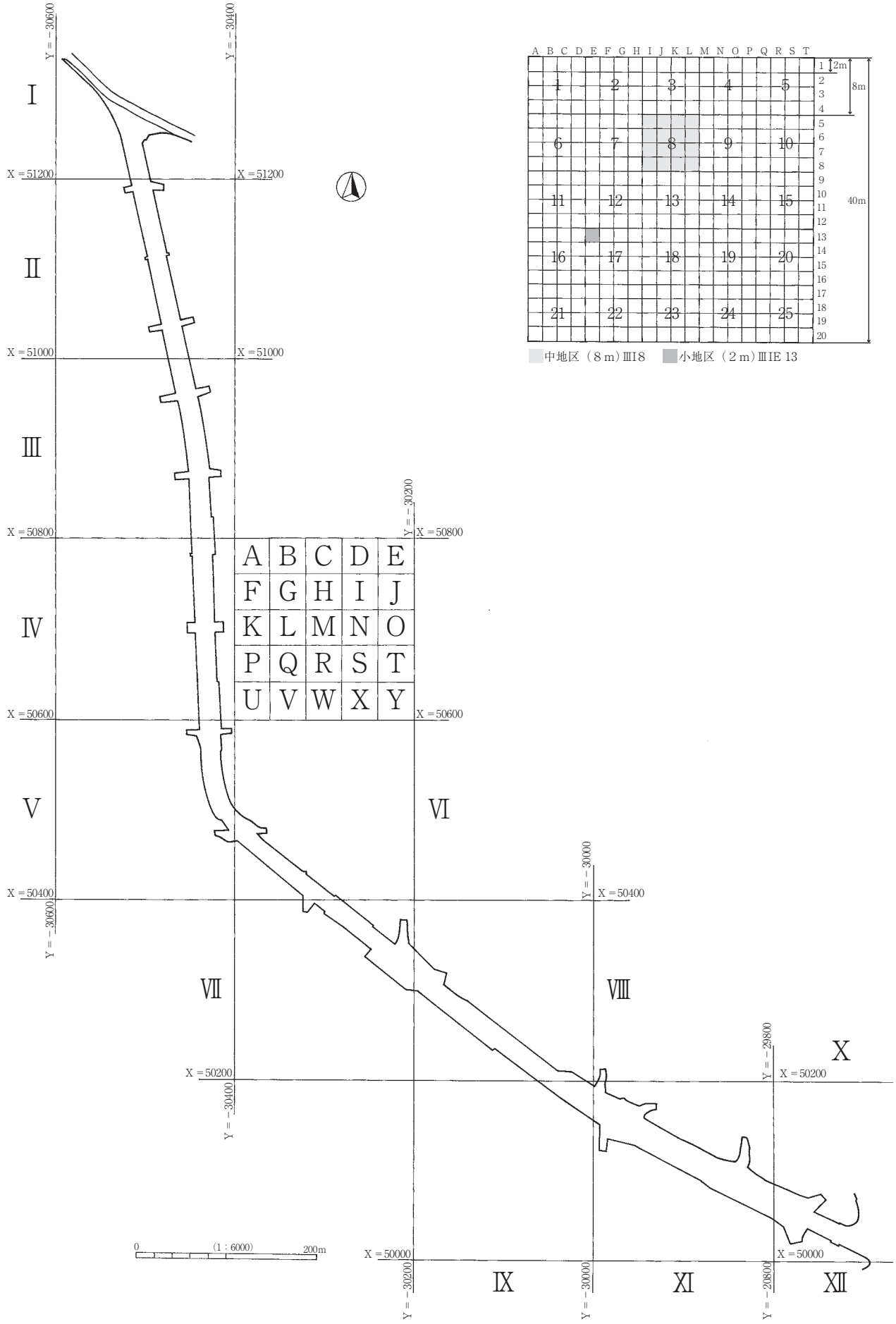
ＳＫ：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないＳＢよりも平面形が小さな掘り込み。
【土坑、井戸】

ＳＴ：ＳＢよりも平面形が小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。
【掘立柱建物跡】

ＳＡ：ＳＢよりも平面形が小さな掘り込みや石が列として配置するもの。【柵、築地】

ＳＤ：帯状の掘り込み。【溝跡、自然流路跡】

ＳＣ：連続する堅い面や帯状の盛り土、ＳＤに挟まれる帯状の面。【畦、畝】



第１図　調査グリッド設定図

ＳＬ：複数の帯状の掘り込みや盛り上がりが規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。【畑跡、水田跡】

ＳＦ：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床、被熱土坑】

ＳＨ：石が面的に出土するもの。【礫群、集積遺構】

ＳＸ：以上に記した以外の不明遺構。

なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴等やＳＴを構成する個々の掘り込みには Pit を付した。

（4）　遺構検出と遺構調査の手順

基本的な調査の進め方は、重機で表土を掘削した後、前述のようにグリッドを設定して人力で遺構検出を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名またはグリッド名あるいは、帰属遺構名を付して取り上げた。本遺跡では、遺構調査面が３～５面確認されていたので、上の調査面の調査が終了した後、次の調査面までの間層を重機により掘削する、という流れでそれぞれの遺構面の調査を行った。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、重複関係の新しい遺構から古い遺構へ、という流れで行った。平面検出で新旧のわからないものは、随時サブトレンチを入れて断面により土層堆積状況等を確認して作業を進めた。遺構はそれぞれに十文字方向あるいは単一の方向で土層を観察し、記録した。掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行ったが、遺物の出土状況に特徴のあるものなどは、調査途中の状況も、写真と測量の記録を行った。また、竪穴住居跡では、掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行った後に床面下（掘り方）の状況を確認して調査を終了した。

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘補助員が行った。また、前記の測量基準杭を基準とする簡易遣り方測量を基本としたが、業者委託の単点測量（杭の打設が困難な狭い地区の遺構図など）と空中写真測量（水田跡の測量）も併用した。遺構測量は、中地区（8m × 8m）単位に区切った割付図を基本としたが、必要に応じて住居跡などは個別の遺構図を作成した。遺構測量の縮尺はほとんどの場合１：20 で、必要に応じて１：10 で実測した。

発掘中の遺構等の撮影は、マミヤＲＢ・ペンタックス（6 × 7）とニコンＦＭ２（35㎜）を併用し、ともにモノクロネガフィルム（ネオパン 100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100 Ｆ）で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼付けは業者委託とした。また、調査区の遺構全体写真等の空中写真は業者委託により実施した。

３　発掘調査の概要と経過

力石条里遺跡群の発掘調査は、用地取得状況等から平成 13 年から 20 年にかけて、８年に渡る長期の調査となった。調査は、当時の現道等に区切られた①～⑮区を設定して行った（第３図）。年次別の発掘調査の概要と経過は以下の通りである。

平成 13 年度　①・②・⑤・⑧区でトレンチ調査を行った。調査期間は 12 月５日～ 17 日、調査地は旧上山田町大字上山田字薬師堂ほかで、調査面積は 260㎡である。次年度から本格的に始まる発掘調査の事前に、面的調査を必要とする範囲や調査面数を決定する資料とするために、８箇所のトレンチを設定して調査を行った。

それぞれの地点で、２～４枚（弥生時代後期～中世以降）の当時地表面を形成していたと思われる土壌化した層を確認し縄文時代後期～近世の遺物を採取した。竪穴住居跡などは、確認できなかったものの、

大量の遺物が採集できた地区（⑤区）や洪水による砂の堆積で覆われた水田跡などを確認し（②区）、地区により遺構の種類や分布状況に差異があることが明らかになった。

平成 14 年度　①区・②区北側・⑤区東側・⑥区西側・⑧区南側・⑩区北東側の面的調査と、⑨～⑪区でトレンチ調査を行った。調査期間は 6 月 1 日～ 12 月 26 日、調査地は旧上山田町大字上山田字薬師堂ほかで、調査面積は 6,250㎡である。

面的調査を行った⑩区では、弥生時代後期の竪穴住居跡・土坑などが確認され、その下部層からは千曲川流域では珍しい弥生時代前期末～中期中葉の墓壙もまとまって確認された。⑤・⑥区からは、弥生時代後期の竪穴住居跡・土坑などが多数確認された。また、②区からは中世以降の水田跡などが確認された。当初予定より検出面や、検出遺構が増えたことや、夏期の周辺水田からの湧水により調査が中断されたことなどで、⑥区で検出された弥生時代の遺構は、その規模等を把握したところで、また、⑧区は南側の弥生時代後期の遺構調査が終了したところで中断し、詳細な調査は次年度に送られた。

トレンチ調査は、⑨区・⑩区南東側・⑪区で行い、遺構分布範囲の広がりや、調査面の確認をして次年度の調査資料とした。

平成 15 年度　④区西側・⑥区・⑧区・⑨区西側・⑩区南東側・⑪区の面的調査を行った。調査期間は 4 月 7 日～ 12 月 22 日、調査地は旧上山田町大字上山田字薬師堂ほかで、調査面積は 8,948㎡である。

面的調査を行った⑩区では、昨年度と同様に弥生時代後期の竪穴住居跡・土坑などを確認したが、弥生時代前期末～中期中葉の墓壙は、南側に広がらないことが明らかになった。⑥区では、前年度から引き続き弥生時代後期の集落の調査を行い、新たに弥生時代中期後葉の竪穴住居跡も確認された。⑨区では、弥生時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡、古墳時代～古代の溝跡が確認された。④区では、古墳時代～古代の水田跡を確認し、その他の地区では、弥生時代～中世以降の溝跡や土坑などを確認した。

平成 16 年度　③区・⑨区東側・⑩区西側・⑪区南東側残地の面的調査を行った。調査期間は 4 月 13 日～ 11 月 30 日、調査地は千曲市上山田字薬師堂ほかで、調査面積は 2,795㎡である。

面的調査を行った⑩区では、既に調査済みの東側地区から続く弥生時代前期末～中期中葉の墓壙や・弥生時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡等を確認した。⑨区では、既に調査済みの西側地区から続く弥生時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡等を確認した。その他に、③区では中世以降の水田跡、⑪区では中世以降の掘立柱建物跡等を確認した。

平成 17 年度　②区南側・⑤区西側・⑦区西側の面的調査を行った。調査期間は 4 月 19 日～ 12 月 6 日、調査地は千曲市上山田字薬師堂ほかで、調査面積は 2,305㎡である。

面的調査を行った⑤区では、既に調査済みの東側地区から続く弥生時代後期の竪穴住居跡等を確認した。②区では、既に調査済みの北側の地区から続く中世以降の水田跡等を確認した。⑦区では、弥生時代中期～中世以降の溝跡等を確認した。

平成 18 年度　④区東側・⑧区南東側の残地・⑫～⑭区の面的調査を行った。調査期間は 4 月 17 日～ 12 月 15 日、調査地は千曲市上山田字岩井堂ほかで、調査面積は 6,100㎡である。

面的調査を行った④・⑧区では、既に調査済みの地区から続く弥生時代後期の竪穴住居跡・古墳時代～古代の溝跡等を確認した。⑫～⑭区では弥生時代～古代の溝跡や土坑、中世以降の掘立柱建物跡や土坑等を確認した。

平成 19 年度　⑮区のトレンチ調査を行った。調査期間は 10 月 2 日、調査地は千曲市力石字中村 449 ほかで、調査面積は 620㎡である。

⑮区は、古墳時代～古代にかけての集落跡がみつかっている坂城町上五明条里水田址と隣接する地区であるため、同時期の遺構の検出が予想されたがトレンチ調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった

ので、面的な調査は行わなかった。

平成 20 年度　⑦区東側の面的調査を行った。調査期間は 4 月 30 日～ 12 月 12 日、調査地は千曲市上山田大字力石 58 ほかで、調査面積は 266㎡である。

⑦区では、既に調査済みの西側地区から続く弥生時代後期～古代の溝跡や土坑などを確認した。

4　整理作業の経過

(1)　基礎整理作業

発掘調査年度の冬期に基礎整理作業として以下の作業を行った。

図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら矛盾を整理し記録漏れを補い、竪穴住居跡などの個別遺構図については、２次原図を作成した。また、遺構写真については、モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35㎜はマウントを付け、6 × 7 はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35㎜カラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡記号・地区・撮影内容・撮影方向を記している。

遺物は、注記を行い、材質（種別）・取り上げ単位ごとの数量・大まかな器種を確認して台帳に登録した。

(2)　本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成 17・21・22 年度に実施した。

図面類は、基礎整理作業で作成した修正図や２次原図をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図（全体図）などを作成し、製図ペンでトレースを行った。

遺物は、土器・土製品、石器・石製品、その他の遺物に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。出土遺物は遺構単位に観察し、全体像を把握した後に遺構内外の出土遺物ともできる限り図化・掲載した。実測は手実測により、1：1 縮尺で長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器・弥生土器を中心に、必要に応じて拓本も行った。トレースはすべて長野県埋蔵文化財センターで、製図ペンを用いて手作業で行った。掲載した土器については、観察表を作成した。

石器・石製品は分類と計測を行いながら、報告書掲載遺物を抽出した。実測は手実測により、1：1 縮尺で長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて長野県埋蔵文化財センターで、製図ペンを用いて手作業で行った。掲載した石器については、観察表を作成した。

その他の遺物は、材質別に分類し遺存度が良好でかつ器種判別可能なものを抽出し図化した。実測は手実測により、1：1 縮尺で長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて長野県埋蔵文化財センターで、製図ペンを用いて手作業で行った。

遺物の写真は、業者委託により実施した。撮影にはカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100 F）を使用した。

なお、今回の発掘調査で得られた出土品および実測図面・写真等の記録類は、報告書刊行後、長野県立歴史館に移管し、保管される。

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

力石バイパス建設に伴って調査を実施した力石条里遺跡群及び上五明条里水田址は、「坂城広谷」（本間 1931）と称される千曲川中流域に位置する。千曲川は、埼玉・山梨・長野の３県の県境をなす甲武信岳を源とし、南佐久地域を流れて、佐久平（盆地）を北に進み、上田盆地では北西に流路をとって流れ、上田盆地の西端、岩鼻の峡隘地を突破して坂城町にはいる。この岩鼻の峡隘地から千曲市の屋代付近までの間を、地形的な特徴から「坂城広谷」、または「千曲川貫通谷」（井上 1968）と称している。「坂城広谷」は、「全長約 16km、氾濫原をつくる谷底の幅は岩鼻付近で約 650m と最も狭く、（略）千曲市の一重山と湯ノ崎間で約 2,200m と広い。谷底の氾濫原は下流で海抜約 350m、上流は約 400m である。」（塩野入 1991）。千曲川はこの谷底を蛇行しながら北西方向に流れ、「坂城広谷」を挟んで、西側に三ツ頭山（1,164.3m）・大林山（1,333.0m）・冠着山（1,252.2m）を連ねた河西山地が、東側には太郎山（1,164.3m）・大道山（1,319.4m）・鏡台山 (1,269.0m) を連ねる河東山地が「坂城広谷」と同じ方向に走っている。両側の山系から流れ出る小河川は扇状地を形成するが、その扇端部は千曲川の氾濫原によって右岸・左岸とも切られている。力石条里遺跡群及び上五明条里水田址は、千曲川左岸の氾濫原上に立地している。

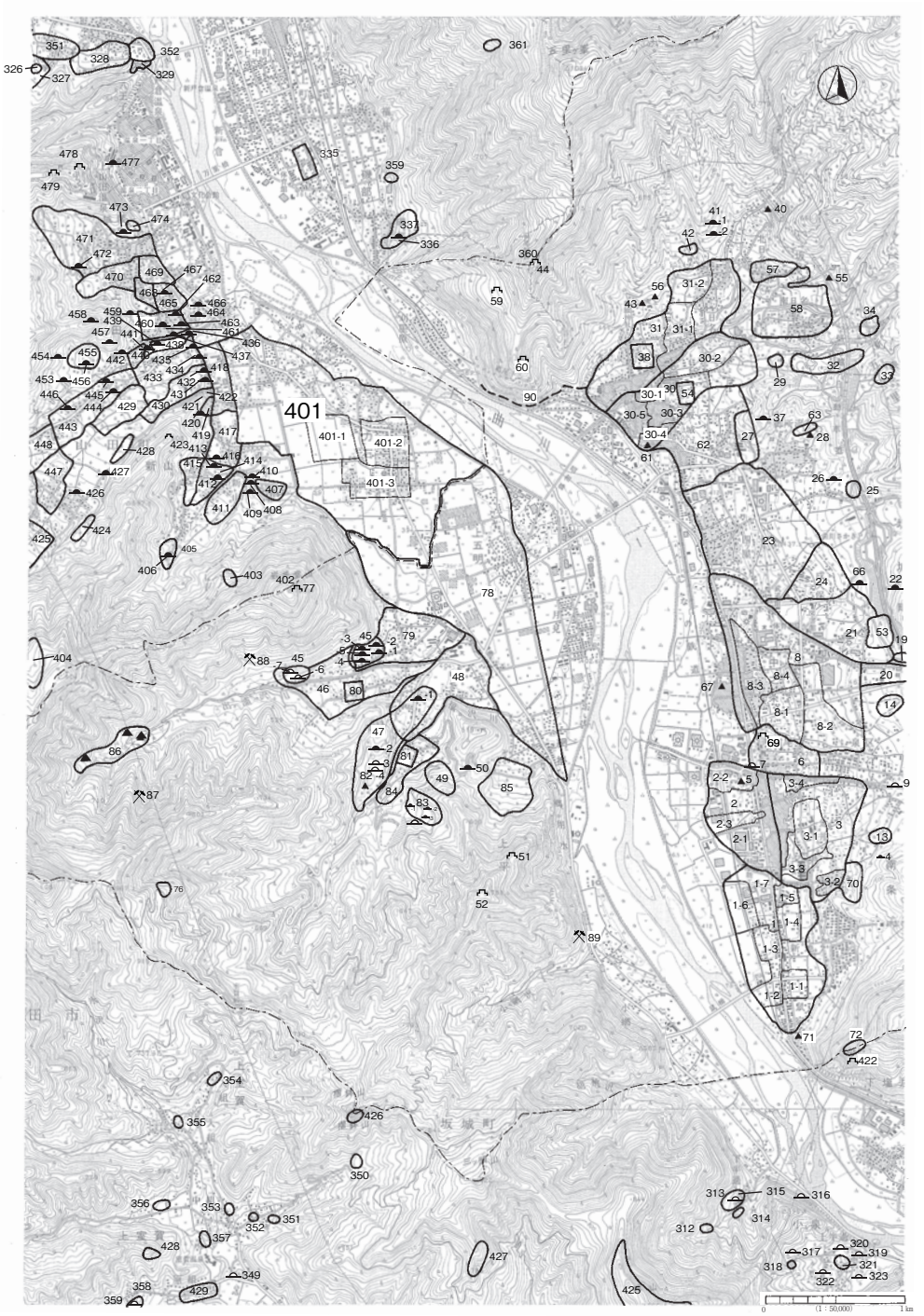
二つの遺跡は、千曲市と坂城町にそれぞれ所在し、行政区画が異なっているために別々の遺跡名で呼ばれるが、両者とも千曲川の氾濫により形成された後背湿地と自然堤防（微高地）上に連続して立地する広大な面積を擁する遺跡であり、力石条里遺跡群の範囲内には、弥生時代～中世の集落跡として登録されている薬師堂遺跡、力石西沖遺跡、桜宮遺跡が含まれている。いずれの遺跡範囲でも、現地表面にて条里的地割が窺い知れることから遺跡名に「条里」が冠されている。この条里的地割の起源は、これまでの上山田町教育委員会（現千曲市教育委員会）や坂城町教育委員会の発掘調査を経て、中世豪族村上氏の力によって 13 世紀代に部分的に完成したのではないかと推察されている。

第２節　遺跡の歴史的概観

両遺跡の所在する「坂城広谷」という地域の歴史的な変遷について、分布する遺跡を主に、時代を追って概観する。第２図は「坂城広谷」の上流部、上田市の半過岩鼻から千曲川に架かる大正橋（獅子ヶ鼻）周辺までの遺跡分布図である。なお、３市町にわたるため遺跡番号は煩雑となるが、各市町の番号をそのまま使用している。

旧石器時代　千曲川流域で最も注目されるのは、和田峠や霧ヶ峰等の黒曜石原産地と下流域の野尻湖遺跡群である。河川を通行ルートの一つと考えれば「坂城広谷」は両者を結ぶルート上に位置し、おそらく旧石器時代の人々も通過しただろうことは十分予想される。生活の痕跡である遺構や明確な遺物包含層が把握された遺跡は域内には認められないものの、幾つかの遺跡から旧石器時代の石器が採集されている。

千曲川右岸地域では、谷川の扇状地上に立地する保地遺跡（坂城 3-1）から 14,000 ～ 15,000 年前と想定



第２図　周辺の遺跡分布図

第２表　周辺遺跡一覧

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	326	箭塚遺跡										祭祀跡
	327	西洞古窯址						○				窯跡
	328	若宮遺跡			○	○	○	○				集落跡
	329	八王子山遺跡			○	○	○	○				祭祀跡
	335	清雲寺遺跡							○			社寺跡

市町村	番号	遺跡名	時代時期									種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	336	上ノ平古墳				○						古墳
	337	上ノ平遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	351	若宮西遺跡			○	○	○	○				散布地
	352	佐良志奈神社遺跡				○	○	○	○			城館跡
	359	福井焼窯址								○		窯跡
	360	葛尾城跡							○			城館跡
	361	しょうば池遺跡							○			散布地
	401	力石条里遺跡群		○	○	○	○	○	○			水田跡他
	401-1	薬師堂遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	401-2	力石西沖遺跡			○	○		○	○			集落跡
	401-3	桜宮遺跡			○	○		○	○			集落跡
	402	出浦城跡							○			城館跡
	403	御局遺跡							○			散布地
	404	穴場遺跡		○								散布地
	405	荒神原遺跡		○	○			○				散布地
	406	荒神原古墳				○						古墳
	407	天坂遺跡						○	○			集落跡
	408	矢塚南古墳				○						古墳
	409	矢塚古墳				○						古墳
	410	寄合古墳				○						古墳
	411	寄合遺跡							○			城館跡
	412	西山遺跡		○		○		○				集落跡
	413	西山古墳				○						古墳
	414	三昧古墳				○						古墳
	415	堂前畑遺跡			○	○		○				集落跡
	416	清水古墳				○						古墳
	417	新山清水遺跡						○	○			集落跡
	418	三本木遺跡				○		○	○			散布地
	419	新山・宿遺跡				○		○	○			集落跡
	420	越道古墳				○						古墳
	421	天神山古墳				○						古墳
	422	越道山古墳				○						古墳
	423	入山城跡							○			城館跡
	424	堤林遺跡						○	○			散布地
	425	新山山ノ神遺跡		○			○	○	○			集落跡
	426	富田入古墳				○						古墳
	427	姥塚古墳				○						古墳
	428	鍛冶在家遺跡					○	○				窯跡・散布地
	429	カロオケ遺跡				○		○	○			集落跡
	430	御屋敷遺跡		○	○	○	○	○	○			集落跡
	431	御屋敷１号古墳				○						古墳
	432	御屋敷２号古墳				○						古墳
	433	羽場遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	434	羽場２号古墳				○						古墳
	435	羽場１号古墳				○						古墳
	436	山伏塚古墳				○						古墳
	437	堀之内１号古墳				○						古墳
	438	堀之内遺跡				○	○	○	○			集落跡
	439	堀之内２号古墳				○						古墳
	440	牧ノ内遺跡				○	○	○	○			集落跡
	441	女涙坂古墳				○						古墳
	442	牧ノ内古墳				○						古墳
	443	釜屋遺跡		○	○	○	○	○	○			集落跡
	444	釜屋１号古墳				○						古墳
	445	釜屋２号古墳				○						古墳
	446	観音林古墳				○						古墳
	447	漆原遺跡						○	○			散布地
	448	原ノ前遺跡		○	○	○		○	○			散布地

市町村	番号	遺跡名	時代時期									種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	453	弥勤寺古墳				○						古墳
	454	四ッ塚古墳群				○						古墳
	455	弥勤寺遺跡				○	○	○				散布地
	456	堂上古墳				○						古墳
	457	富士塚古墳				○						古墳
	458	金毘羅山古墳				○						古墳
	459	東国寺裏古墳				○						古墳
	460	水上遺跡			○			○	○			集落跡
	461	水上２号古墳				○						古墳
	462	水上１号古墳				○						古墳
	463	藤木塚古墳				○						古墳
	464	丸山南古墳				○						古墳
	465	上山田丸山古墳				○						古墳
	466	宿遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	467	清水坂古墳				○						古墳
	468	上山田和合遺跡				○	○	○				集落跡
	469	新屋遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	470	上山田大門遺跡				○		○	○			集落跡
	471	城野腰遺跡			○	○	○	○	○			集落跡 (居館跡)
	472	天神原古墳				○						古墳
	473	宮沢川古墳				○						古墳
	474	波閇科神社裏遺跡		○		○	○	○				散布地・祭祀跡
	477	城山裏古墳				○						古墳
	478	荒砥城跡							○			城館跡
	479	荒砥小城跡							○			城館跡
坂城町	1	南条遺跡群			○	○	○	○				集落跡
	1-1	東裏遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-2	御殿裏遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-3	百々目利遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-4	中町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-5	田町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-6	廻り目遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-7	塚田遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-8	青木下遺跡			○	○	○	○				水田跡・祭祀跡
	2	金井西遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	2-1	金井遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	2-2	社宮神遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	2-3	並木下遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3	金井東遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	3-1	保地遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-2	山金井遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-3	大木久保遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-4	酒玉遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	4	栗ヶ谷古墳				○						古墳
	5	社宮神経塚							○			経塚
	6	町横尾遺跡		○	○	○	○	○				散布地
	7	北畑古墳				○						古墳
	8	中ノ条遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	8-1	寺浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-2	上町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	8-3	東町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	8-4	北浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-5	宮上遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-6	北川原遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	9	南条塚穴古墳				○						古墳
	13	前原墳墓群							○	○		墳墓
	14	御堂川古墳群山口支群				○						古墳
	19	御堂川古墳群山田支群				○						古墳

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
坂城町	20	豊饒堂遺跡		○	○							集落跡
	21	開畝遺跡			○	○	○	○				集落跡
	22	人塚古墳										古墳
	23	四ッ屋遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	24	戌久保遺跡				○	○	○				集落跡
	25	入田遺跡					○	○				散布地
	26	塚内古墳				○						古墳
	27	金毘羅山遺跡		○	○	○	○	○				散布地
	28	蓬平経塚							○			経塚
	29	岡の原窯跡						○				窯跡
	30	込山遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	30-1	込山Ａ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-2	込山Ｂ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-3	込山Ｃ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-4	込山Ｄ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-5	込山Ｅ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	31	日名沢遺跡群			○	○	○	○				集落跡
	31-1	日名沢遺跡			○	○	○	○				集落跡
	31-2	丸山遺跡			○	○	○	○				集落跡
	32	土井ノ入窯跡					○	○				窯跡
	33	平林遺跡		○								散布地
	34	垣外窯跡						○				窯跡
	37	金毘羅山古墳				○						古墳
	38	村上氏館跡							○			城館跡
	40	北日名経塚							○			経塚
	41	北日名塚穴古墳群				○						古墳
	41-1	北日名塚穴１号墳				○						古墳
	41-2	北日名塚穴２号墳				○						古墳
	42	梅ノ木遺跡		○								散布地
	43	栗田窯跡					○					窯跡
	44	葛尾城跡							○			城館跡
	45	出浦沢古墳群				○						古墳
	45-1	出浦支群１号墳				○						古墳
	45-2	出浦支群２号墳				○						古墳
	45-3	出浦支群３号墳				○						古墳
	45-4	出浦支群４号墳				○						古墳
	45-5	出浦支群５号墳				○						古墳
	45-6	島支群１号墳				○						古墳
	45-7	島支群２号墳				○						古墳
	46	島遺跡			○	○	○	○				集落跡
	47	福沢古墳群				○						古墳
	47-1	小野沢支群１号墳				○						古墳（御厨社古墳）
	47-2	小野沢支群２号墳				○						古墳
	47-3	小野沢支群３号墳				○						古墳（ヤックラ古墳）
	47-4	小野沢支群４号墳				○						古墳
	48	小野沢遺跡			○	○	○	○				集落跡
	49	福沢古墳群越堂支群				○						古墳
	50	福泉寺裏古墳				○						古墳
	51	狐落城跡							○			城館跡
	52	三水城跡							○			城館跡
	53	開畝製鉄遺跡							○			製鉄跡
	54	込山廃寺跡							○			寺院跡
	55	観音平経塚							○			経塚
	56	栗田小鍛冶跡							○			製鉄跡
	57	塩之原遺跡					○	○				集落跡
	58	南日名遺跡			○	○	○	○				集落跡
	59	葛尾城根小屋跡							○			城館跡
	60	姫城跡							○			城館跡

市町村	番号	遺跡名	時代時期									種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
坂城町	61	坂木代官所跡								○		屋敷跡
	62	田町遺跡群				○	○	○				散布地
	63	御所沢墳墓群							○			墳墓
	66	砥沢古墳				○						古墳
	67	中ノ条代官所跡								○		屋敷跡
	69	観音坂城跡							○			城館跡
	70	南鯉の川遺跡					○	○	○			散布地・寺院跡
	71	口留番所跡								○		屋敷跡
	72	和合城跡							○			城館跡
	76	籠岩遺跡						○				散布地
	77	出浦城跡							○			城館跡
	78	上五明条里水田址						○	○	○		水田址
	79	出浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	80	村上氏館跡							○			城館跡
	81	福沢氏居館跡							○			城館跡
	82	小野沢窯跡					○	○				窯跡
	83	福沢古墳群				○						古墳
	83-1	五狭支群１号墳				○						古墳
	83-2	五狭支群２号墳				○						古墳
	83-3	五狭支群３号墳				○						古墳
	84	荒宿遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	85	網掛原遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	86	祭祀跡						○				祭祀跡
	87	島黄銅鉱採掘跡									○	採掘跡
	88	島マンガン鉱採掘跡									○	採掘跡
	89	上平黄銅鉱採掘跡									○	採掘跡
	90	横吹北国街道跡								○		街道跡
上田市	312	下半過山遺跡		○								包蔵地
	313	清水下遺跡			○	○	○	○				包蔵地
	314	清水下窯跡						○				窯跡
	315	清水下古墳				○						古墳
	316	影通古墳				○						古墳
	317	北沢古墳				○						古墳
	318	堂の入遺跡					○	○	○			包蔵地
	319	中の沢１号墳				○						古墳
	320	中の沢２号墳				○						古墳
	321	中の沢遺跡						○				包蔵地
	322	中の沢３号墳				○						古墳
	323	前沢古墳				○						古墳
	349	塚田古墳				○						古墳
	350	三ツ頭遺跡		○								包蔵地
	351	中畑遺跡						○				包蔵地
	352	山脇遺跡						○				包蔵地
	353	片山遺跡		○								包蔵地
	354	鷹野遺跡		○								包蔵地
	355	宮原遺跡		○								包蔵地
	356	藤庄遺跡			○							包蔵地
	357	中島遺跡						○				包蔵地
	358	上洞遺跡						○				包蔵地
	359	五位塚古墳				○						古墳
	422	和合城跡								○		城跡
	425	小泉城跡								○		城跡
	426	伊勢崎城跡								○		城跡
	427	跡部城跡								○		城跡
	428	笹洞城跡								○		城跡
	429	原畑城跡								○		城跡

される上ヶ屋型彫器（黒曜石製）、頁岩製の小形の尖頭器・石核が、扇状地端崖上に立地する上ノ平遺跡（千曲 337）から黒曜石製の彫刻器が採集されている。

千曲川左岸地域では、扇状地端崖上に立地する千曲市三島 A 遺跡で硅岩製の尖頭器様石器と剝片が、崖錐状地形上に立地する千曲市中村遺跡からは輝緑凝灰岩製の尖頭器が採集されている。

縄文時代　時代的な変遷をみると、早期押型文期の遺跡が山沿いに分布し、前期に入り扇状地に、中期後半以降沖積地（千曲川氾濫原）へと進出してくる。千曲川の右岸・左岸とも同様な状況である。特に注目すべきは、縄文時代になると拠点的な集落が作られるようになることである。「坂城広谷」の長野盆地側出口付近に千曲市屋代遺跡群があり、「坂城広谷」内では、千曲川左岸地域の千曲市幅田遺跡群、右岸地域の保地遺跡（坂城 3-1）などが代表例である。特に、幅田遺跡や円光房遺跡を含む幅田遺跡群は、千曲川中流域屈指の遺跡で、住居址群のみならず、墓地や配石遺構等の遺構群を併せ持ち、まさに縄文文化ネットワークを構成したセンター的要素を担っていたと考えられる。回廊は単に通過するためのものだけでなく、居住や生産、精神世界を支える基盤として当時の人々の生活に位置づいたと言える。

千曲川右岸地域では、山地に立地する坂城町和平 A 遺跡・平沢遺跡で楕円押型文土器が確認されている。扇状地上に立地する込山 A 遺跡（坂城 30-1）では早期後半条痕文系土器群・前期後半諸磯式土器群、金井遺跡（坂城 2-1）で中期の土偶、保地遺跡（坂城 3-1）で後期から晩期の土器・石器群とともに特殊儀礼的遺構や再葬墓が検出されている。再葬墓からは遺存状況の良好な人骨が多数確認され様々な分析がなされている。

千曲川左岸地域では、山間地に立地する千曲市芝平遺跡や櫟葉遺跡で楕円押型文や中期・後期の土器が出土している。扇状地に立地する幅田遺跡群（幅田遺跡、円光房遺跡）は前期から晩期までの土器群や石器群とともに生活痕跡が確認されている。同じく扇状地上の堀之内遺跡（千曲 438）では前期初頭の尖底土器が確認され、新屋遺跡（千曲 469）では後期初頭の敷石住居跡が調査されている。千曲川の氾濫原上に立地する力石条里遺跡群（千曲 401）では後期・晩期の土器が確認されている。

弥生時代　「坂城広谷」という限られた範囲の中では、東海地方からの条痕文系土器群で代表される前期末～中期前葉の土器群が出土する遺跡が散見する程度である。こうした遺跡の在り方は、中期後半の栗林式期まで続いている。栗林式期は中部高地における弥生時代の確立期とも言われ、北信地域を中心に、松本平、諏訪湖盆、上伊那、佐久平と広域にわたる文化圏を形成しており、その影響範囲は群馬県にまで広がっている。そうした状況の中、「坂城広谷」と上田盆地は遺跡数が極めて少なく、後期箱清水式期に至らないと大規模な集落跡等は見いだせない。しかも、後期箱清水式土器の文様等にも地域色が生み出され、後期終末～古墳時代初頭にかけて最後まで箱清水式の独自色を保持した御屋敷式土器の標式遺跡である御屋敷遺跡（千曲 430）は「坂城広谷」に所在する。また、箭塚遺跡（千曲 326）からは朝鮮半島で製作されたと考えられる細形銅剣が発見されており、欠損後の再加工品として古くから注目を集めている。穿孔の状況から再加工は後期に行われたとの指摘があるが、こうした青銅器の来歴については不明な部分が多すぎる。以上のことの背景を考究することが今後の大きな課題の一つであるが、今回の力石条里遺跡群（千曲 401）の調査によって、新たな知見を得ることができた。一つは、条痕文系土器や遠賀川系土器が東海地方からもたらされ、在地の土器群と見事に融合し、そうした土器を棺として用いる再葬が確認されたことである。一つは、箱清水式土器が含まれる遺物包含層の下層に栗林式土器が含まれる遺物包含層が確認され、土層の堆積状況が良好な地点では、両者の間に無遺物層が確認されたことである。こうした層位的事実は長野市の松原遺跡でも確認されており、したがって、上田盆地から「坂城広谷」に至る地域では栗林式期の遺跡が見つかっていないだけという可能性も皆無ではない。いずれにせよ、中野市柳沢遺跡での青銅器埋納坑発見以来、青銅器に限らず、土器様式の意味するところや集落・墓域を含めた遺跡相

互の関係、土器の広域編年等の見直し作業が急務である。

千曲川右岸地域では後期にならないと人々の生活痕跡は見いだせない。千曲川の沖積面の微高地上に立地する中町遺跡（坂城 1-4 新地遺跡）、百々目利遺跡（坂城 1-3）、田町遺跡（坂城 1-5）、塚田遺跡（坂城 1-7）などから後期箱清水式土器、扇状地上に保地遺跡（坂城 3-1）、山間地に後期和平 B 遺跡がある。

千曲川左岸地域では、千曲市芝原遺跡や上田市の中の沢遺跡（上田 321）などで変形工字文をモチーフにした土器群や条痕文系土器群が散見され、八王子山遺跡（千曲 329）では長野市の松節遺跡と同様の土器群が出土しており注目される。中期後半では薬師堂遺跡（千曲 401-1）や桜宮遺跡（千曲 401-3）で集落跡が、後期になると、島遺跡（坂城 46）・小野沢遺跡（坂城 48）・力石西沖遺跡（千曲 401-2）・御屋敷遺跡（千曲 430）で集落跡が、堀之内遺跡（千曲 438）で土器棺墓等が確認されている。

古墳時代　「坂城広谷」の開口部である善光寺平南部には千曲市森将軍塚古墳をはじめとした前方後円墳が築造されているが、「坂城広谷」にはそうした首長墓は見られず、5 世紀代とされる右岸地域の仮称東平 1 号墳・2 号墳（当センター調査）や竪穴式石室を持つといわれる左岸地域の天神山古墳（千曲 421）が「坂城広谷」では最も古い古墳と把握される。前方後円墳等が築造されない「坂城広谷」でも、右岸地域では寺浦遺跡（坂城 8-1）・込山 E 遺跡（坂城 30-5 立町遺跡）、左岸地域では御屋敷遺跡（千曲 430）、中の沢遺跡（上田 321）で、古墳時代初頭から 4 世紀代に至る集落跡が確認されている。中でも御屋敷遺跡は、弥生時代後期終末段階から 5 世紀代まで継続する集落遺跡であり、土器型式（様式）の変遷とともに社会構造の変革を捉える上で重要な遺跡である。その後も左岸地域では、5 世紀代の集落遺跡として島遺跡（坂城 46）があり、今回の上五明条里水田址（坂城 78）の調査においても 5 世紀代・6 世紀代の集落跡が検出された。

一方、この地域で確認されている古墳のほとんどは、横穴式石室を主体部とする後期古墳である。後期古墳は千曲川右岸・左岸地域とも千曲川に流れ込む中小河川ごとに古墳群として捉えられ、それぞれ集落遺跡との対応関係を想定し得る。ただ、千曲川右岸地域の千曲川氾濫原に立地する東裏遺跡（坂城 1-1）などの集落遺跡に対応する古墳群が把握できない点や、祭祀遺跡として全国的にも注目を集めている青木下遺跡（坂城 1-8）を社会空間の中でどのように位置付けていくか等、追求すべき課題は多く残っている。なお、千曲川左岸地域の古墳群には、上流部から上田市半過古墳群（清水下古墳―上田 315、中の沢 1 号古墳―上田 319 ほか）、福沢古墳群五狭支群（坂城 83）・福沢古墳群小野沢支群（坂城 47）・出浦沢古墳群（坂城 45）、千曲市釜屋古墳群（釜屋 1 号古墳―千曲 444、観音林古墳―千曲 446 ほか）・新山古墳群（天神山古墳―千曲 421、西山古墳―千曲 413 ほか）があり、福沢古墳群小野沢支群の御厨社古墳（坂城 47-1）は千曲川水系最大の横穴式石室を持つ古墳として知られる。

古代　「坂城広谷」では、千曲川を挟んで右岸地域が埴科郡、左岸地域が更科郡となり、今回調査を実施した二つの遺跡は更科郡村上郷に比定される範囲に位置している。右岸地域・左岸地域とも奈良・平安時代を通して集落遺跡や窯業遺跡が分布し、山上部に祭祀的な性格を持つことが推定される遺跡も右岸地域に坂城町和平 A・C 遺跡、左岸地域に籠岩遺跡（坂城 76）がある等、総じて似通っている。ただ、右岸地域には郡内及び郡域を超えた瓦の流通ルートの中に位置づいている土井ノ入窯跡（坂城 32）があり、仏教関連の遺跡として込山廃寺跡（坂城 54）や北日名経塚（坂城 40）といった遺跡があり、大きな相違点として捉えられる。今回の上五明条里水田址の調査で、地表下３～４ｍから 10 世紀代の集落が発見され、地中深くに眠っていて、いまだ発見されてない遺跡（施設）が幾つもあることが予想できる。調査課題の一つとしておきたい。なお、村上郷は信濃国府や国分寺が造営された小県郡に接し、南方の山間部を東山道が通るという位置関係にある。したがって、通行ルートを千曲川沿いだけでなく、室賀峠を越えて東山道という通行ルートがあったことも想定しておく必要があり、東山道の開設は扇状地単位でまとまっ

ていた空間構成を大きく打ち破るものであったと考えたい。その結果、上五明条里水田址で集落を営んでいた人々が、一般の古代集落ではみられない鉄鐸や鈴、八稜鏡、猿面硯等を入手することができたのではなかろうか。

中世　歴史の表舞台では「村上氏」が大活躍する時代であるが、考古学的資料からこの地域の様相を明らかにすることは困難である。遺跡においても城館跡が中心となるが、千曲川左岸地域では集落遺跡として登録されている遺跡もある。その他、製鉄遺跡として著名な坂城町開畝製鉄遺跡（坂城 53）が千曲川右岸地域にある。また、千曲川右岸地域の日名沢川による扇状地上に蓬平経塚（坂城 28）、観音平経塚（坂城 55）があり、古代に属する北日名経塚（坂城 40）もこの地域に立地する。社宮神経塚（坂城５）のみ、沖積面に面した扇状地上に立地している。

「坂城広谷」と称されるこの地域は、千曲川に流れ込む中小河川によってつくられた扇状地扇端部が千曲川の氾濫原が切るにとどまらず、千曲川から供給される土砂が扇状地や山裾を埋めていると考えられる。このことは、扇状地以外の場所、すなわち、氾濫原に面している山が、ちょうど海面に浮かぶ島のような状態に見え、山裾がないことからも想定される。こうした状況は、力石条里遺跡群（千曲 401）・上五明条里水田址（坂城 78）に近接する岩井堂山（自在山）が最も顕著である。今回の上五明条里水田址の調査で発見された６世紀代の馬形埴輪等は、岩井堂山（自在山）の千曲川に面した側の山裾近くに、形象埴輪をめぐらす古墳が築造され、それが千曲川が運んだ土砂によって埋没した可能性を示唆している。また、古代更科郡の村上郷を研究しようとする時、これまでは古代の遺跡数や発見されている竪穴住居跡の数が少なすぎて、ともすればそれが研究を進める上で支障となっていた。今回の力石バイパス建設に伴う二つの遺跡の発掘調査は、まだ見ぬ遺跡が数多く地中に眠っていることを代弁するものでもあり、その調査成果は遺跡個々にとどまらず、地域に波及していくものと考える。今後も、既存の資料群をベースに、再検討や再構築を繰り返して、地形的な制約や地域的・時代的特殊性を見出していく必要があり、地域史を見直していく時期にきていると考えられる。

第３節　基本層序

層序は調査地区の壁面の土層観察により概略を把握し、本格整理作業時に層序を確定した。本遺跡の基本層序と遺構検出面を、地区ごとに対比できるように柱状概念図で表した（第３図）。分層は以下の通りである。なお、柱状概念図には、各時代の遺構検出面も合わせて表記した（1 中世以降、2 古墳時代～古代、3 弥生時代後期、4 弥生時代中期中葉、5 弥生時代前期末～中期中葉）。

Ⅰ層　表土（耕作土・造成土・攪乱を含む）。

Ⅱ層　褐灰色 10YR4/1 ～にぶい黄褐色 10YR4/3 砂層。中世以降の洪水による堆積である。

Ⅲ層　黒褐色 10YR3/1 土層。中世以降の包含層である。

Ⅳ層　黒色 10YR2/1 土層。中世以降の水田の床土になる粘性のやや強い層である。古墳時代以降中世までの間に連続した水田耕作による堆積と思われる。

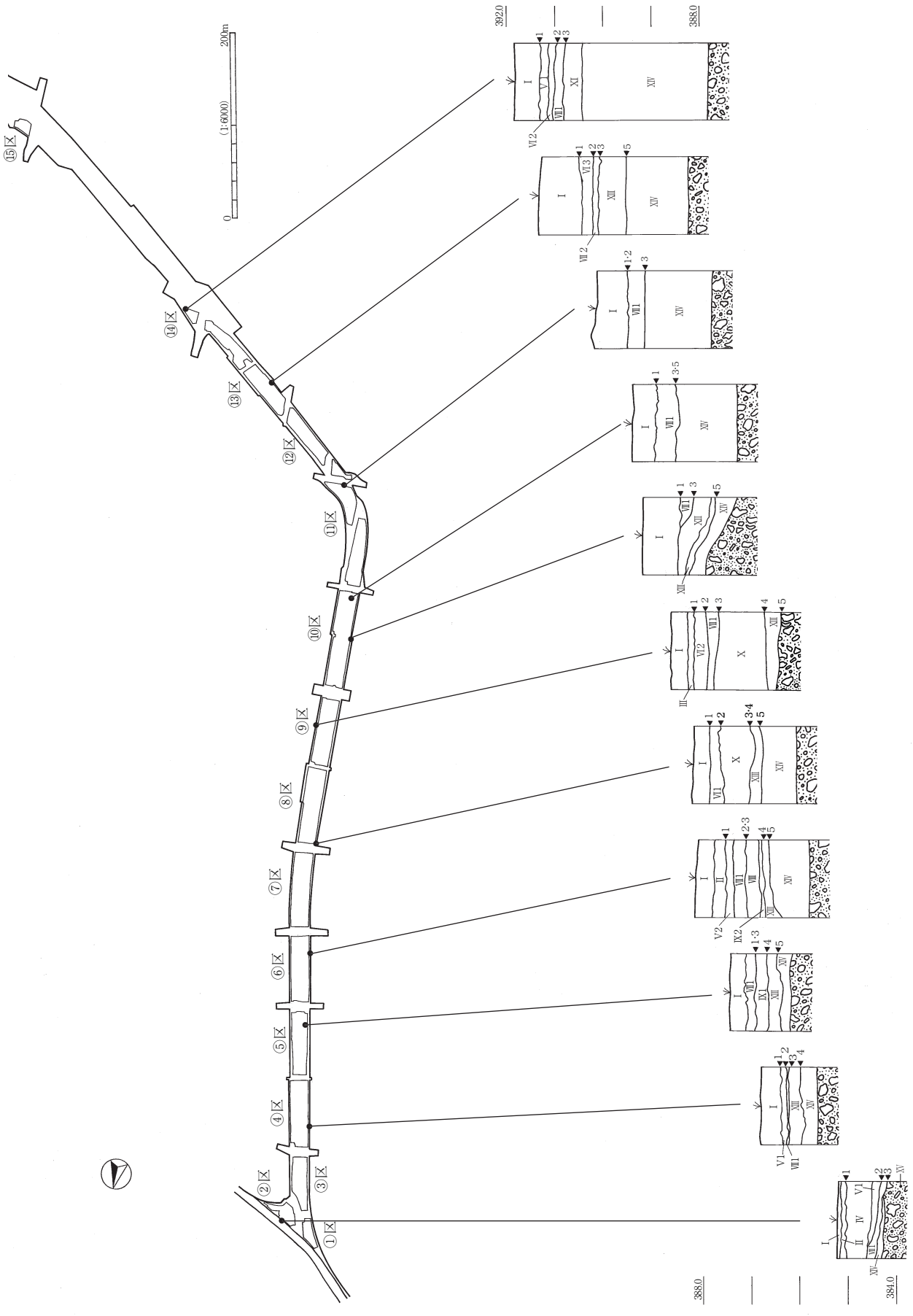
Ⅴ層　古墳時代～古代の洪水による堆積である。

Ⅴ１層　褐灰色 10YR4/1 砂層。②・④・⑭区で堆積が認められた。

Ⅴ２層　暗褐色 10YR3/3 砂層。⑥区で堆積が認められた。

Ⅵ層　古墳時代～古代の包含層である。

Ⅵ１層　灰色 5Y5/1 ～褐灰色 10YR6/1 土層。⑧区で堆積が認められた。


200m
(1:6000)
0
⑮区
⑭区
⑬区
⑫区
⑪区
⑩区
⑨区
⑧区
⑦区
⑥区
⑤区
④区
③区
②区
①区
392.0
388.0
384.0

第３図　土層

Ⅵ２層　灰黄褐色 10YR4/2 土層。⑨・⑭区で堆積が認められた。

Ⅵ３層　黄灰色 2.5Y6/1 土層。⑬区で堆積が認められた。

Ⅶ層　弥生時代後期の包含層である。

Ⅶ１層　黒褐色 10YR3/2 土層。④・⑤・⑥・⑨～⑪・⑭区で堆積が認められた。

Ⅶ２層　褐灰色 7.5YR4/1 土層。⑬区で堆積が認められた。

Ⅷ層　黒褐色 10YR2/3 砂層。

Ⅸ層　弥生時代中期後葉の包含層である。

Ⅸ１層　褐灰色 10YR5/1 土層。⑤区で堆積が認められた。

Ⅸ２層　黒褐色 10YR3/1 土層。⑥区で堆積が認められた。

Ⅹ層　褐灰色 10YR4/1 土層。

Ⅺ層　灰黄褐色 10YR4/2 土層。

Ⅻ層　にぶい黄褐色 10YR4/3 砂層。弥生時代前期以降の洪水による堆積である。

ⅩⅢ層　黒色 10YR2/1 ～暗褐色 10YR3/4 土層。弥生時代前期末～中期中葉の包含層である。

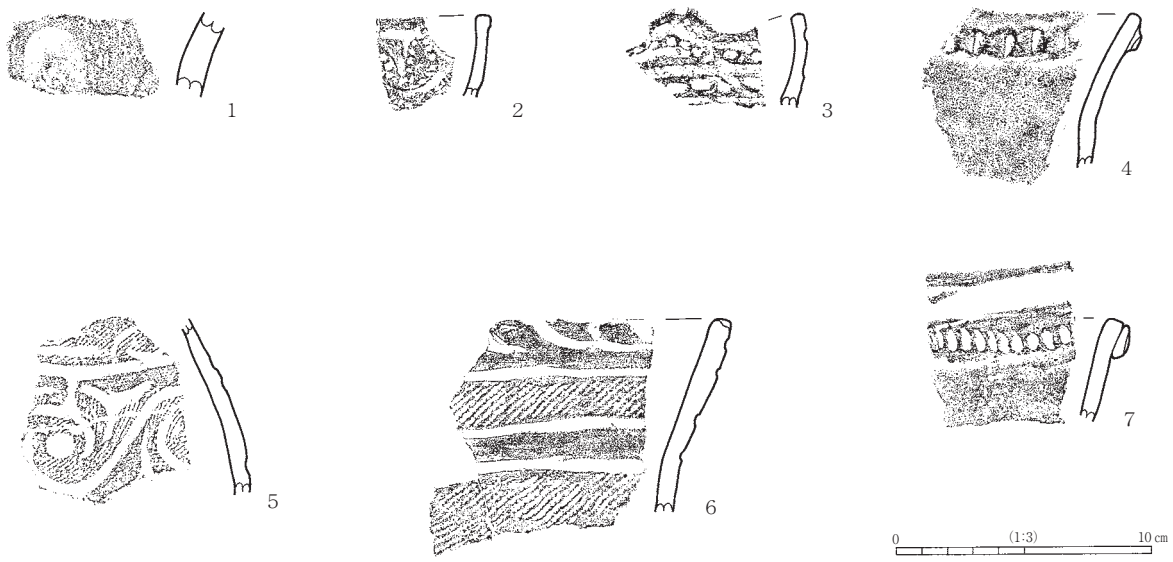
ⅩⅣ層　灰黄褐色 10YR4/2 砂層。弥生時代前期以前の洪水による堆積で、⑨区の一部を除くすべての地区で確認された。

ⅩⅤ層　礫層。すべての地区で確認された千曲川起源の礫層である。

第３章　遺構と遺物

第１節　縄文時代

調査区内から、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は、⑤・⑥・⑧・⑩区の遺構検出面及び弥生時代の遺構埋土から土器片がわずかに出土している。いずれも深鉢形土器の破片で、２～４・６・７が口縁部、１・５が胴部である。１は浅く幅広の沈線によって逆「U」字に区画された内側に縄文が施されている。２・３は口縁部がやや内湾する小形の土器で、２は口唇部が平坦でやや肥厚し、沈線によって区画された内側に刺突文が施されている。３は横方向の沈線と連続する刺突文が交互に施されている。４・６・７は口縁部が緩やかに外反し波状を呈する深鉢形で、４・７は口縁外側に隆帯を貼付け、隆帯の上には刺突文が施されている。６は平行沈線に囲まれた中を、縄文と磨り消しを交互に配している。５は全体に縄文を施した後、沈線により魚眼状三叉文を施している。１は中期後葉の加曾利Ｅ式に、２～７は晩期初頭の大洞式に併行すると考えられる。



第４図　縄文時代の土器

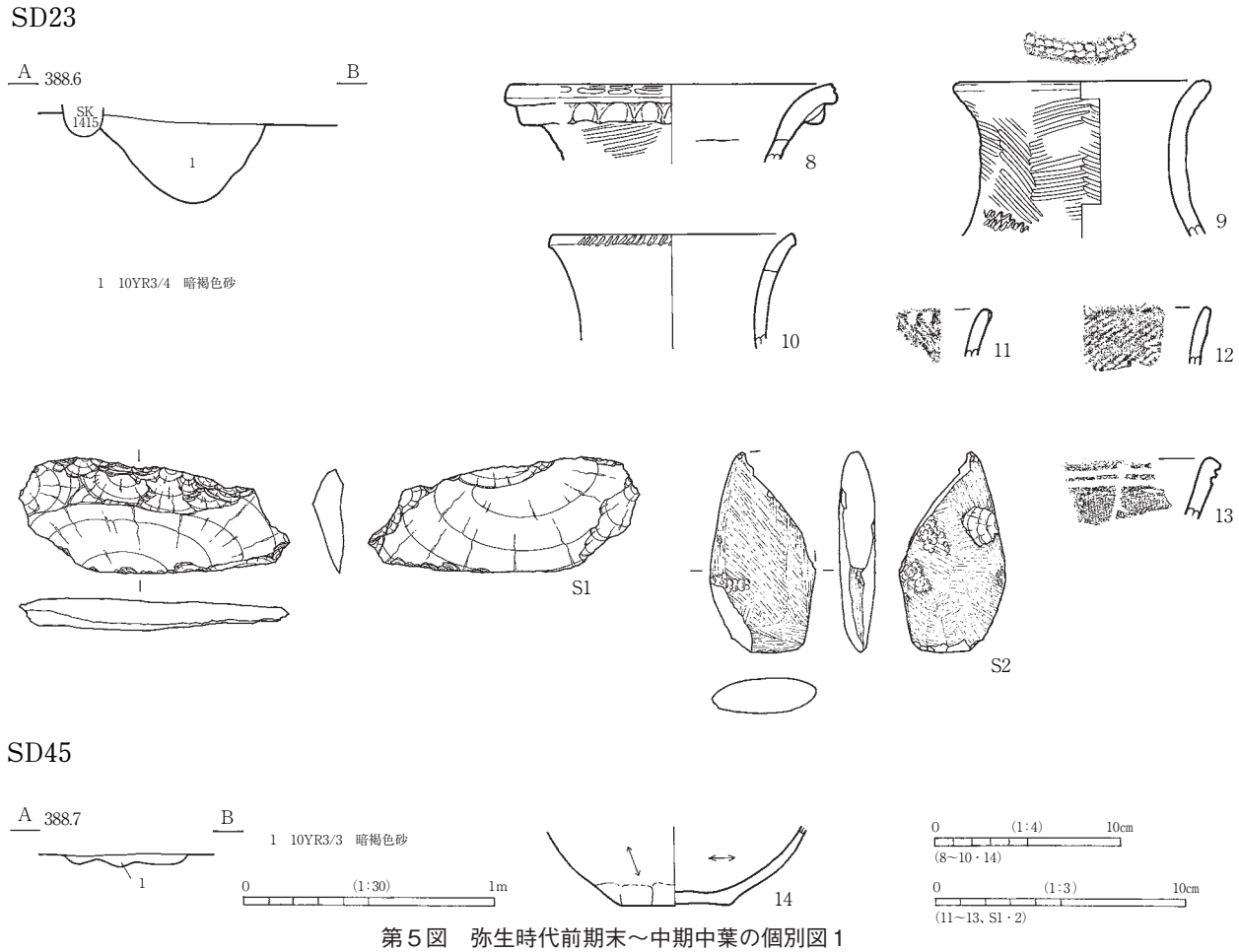
第２節　弥生時代前期末～中期中葉

１　遺構概観

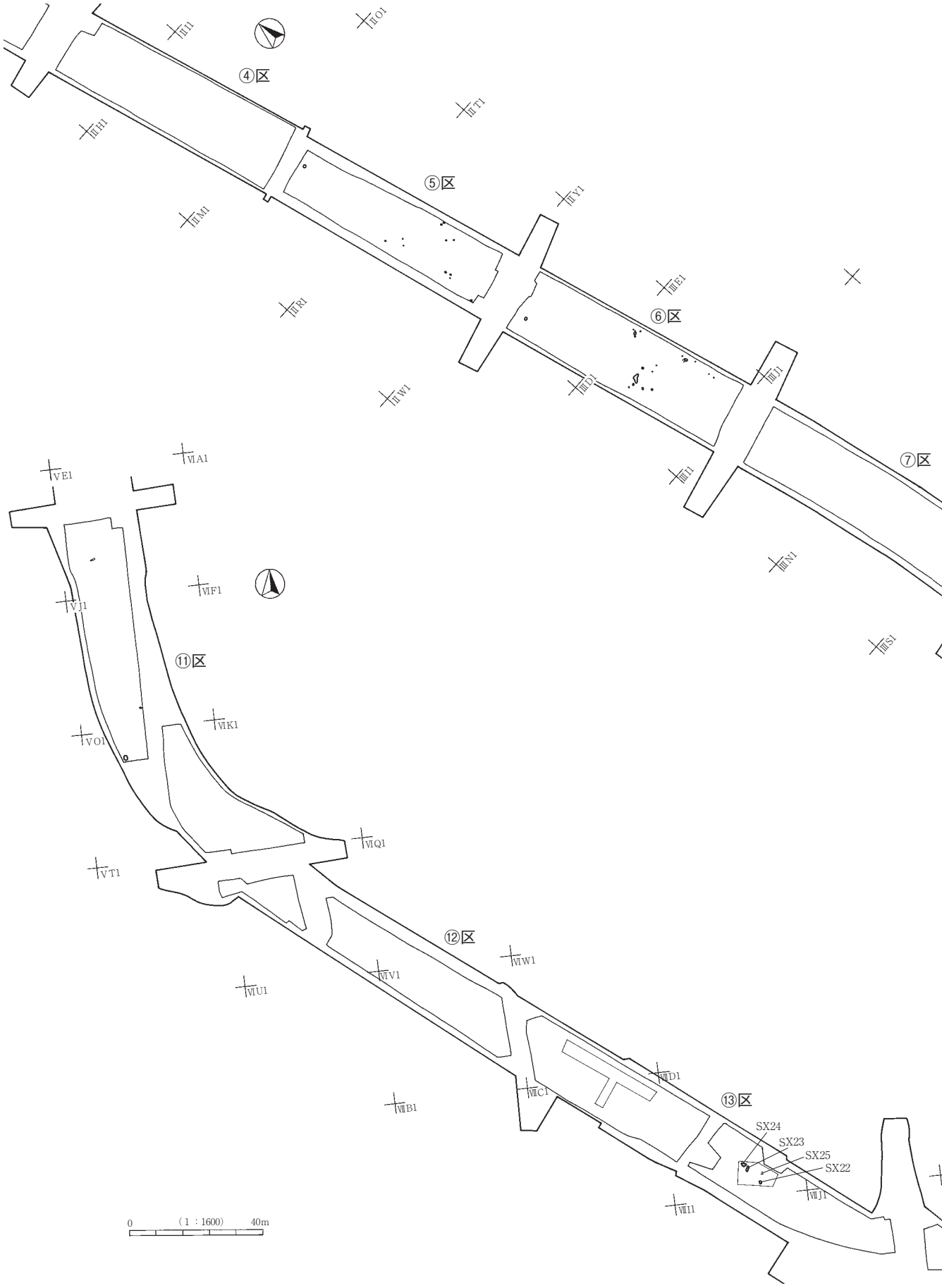
本項で掲載した遺構は基本土層のⅩⅣ層上面で検出された遺構で、弥生時代前期末～中期中葉に属する遺構である。微高地に当たる⑩区北側で墓と思われる土坑がまとまって検出された他は、⑤・⑥・⑧・⑨・⑪・⑬区で溝跡や土坑などがわずかに検出されただけである。当該期に属する遺構は、⑩区の墓と思われる土坑以外は遺物の出土も少なく、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。検出された主な遺構は、墓 56 基、溝跡 14 条、土坑 469 基、焼土跡 8 基などである。

２　溝跡

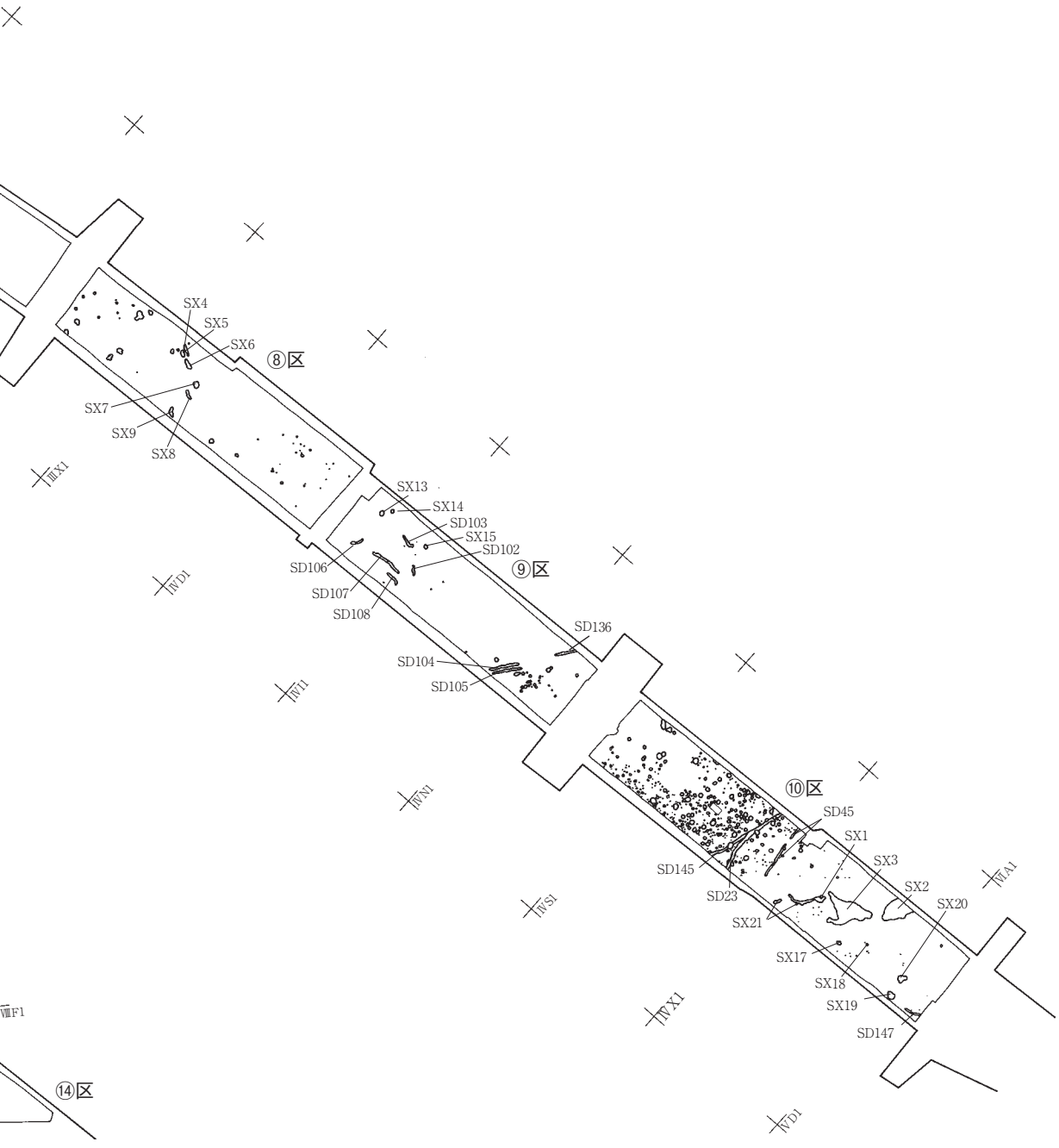
⑨・⑩区でのみ検出された。そのうち⑨区の南側で確認された溝跡（SD104・105・136）と ⑩区の中央付近で確認された溝跡（SD23・45・145）は、微高地の縁に沿うような方向でみつかっており、人工的な溝跡と思われる。

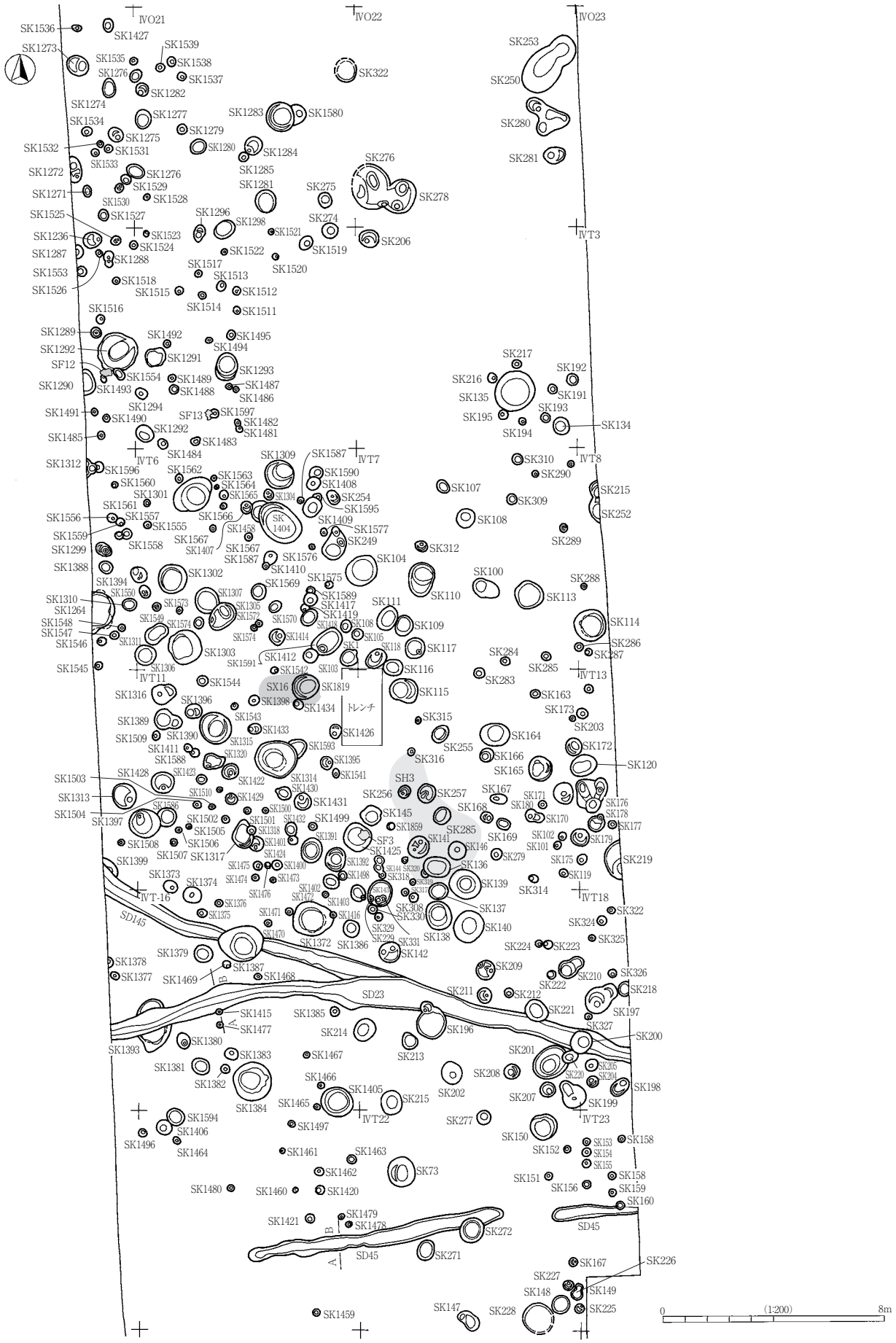


第５図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図１



第６図　弥生時代前期末～中期中葉の遺構全体図


⑧区
⑨区
⑩区
⑭区
SX4
SX5
SX6
SX7
SX9
SX8
SX13
SX14
SD103
SX15
SD102
SD106
SD107
SD108
SD136
SD104
SD105
SD45
SX1
SX3
SD145
SD23
SX2
SX20
SX21
SX17
SX18
SX19
SD147
ⅢX1
ⅣD1
ⅣI1
ⅣN1
ⅣS1
ⅣA1
ⅣX1
ⅣD1
ⅧF1



第７図　弥生時代前期末～中期中葉の遺構割付図（⑩区）

SD23　（第５～７図）　⑩区ⅣS20、T16 ～ 18

XⅣ層上面で明瞭に検出した。SK196・200・221・1415 に切られる。SD145・SK1393 を切る。切り合い関係は、平面では明瞭に確認できなかったため、断面などからわずかな土層の違いを観察し新旧の判断をした。東から西の方向に伸びる直線的な溝跡で、東西両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は単層で、自然埋没と思われる。墓域を区画する溝と考えられる。埋土中より土器片や石器が出土している。

出土遺物（第５図８～ 13、S1・S2　　PL6・17・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

8・9 は前期末条痕文系の壺の口縁部である。口唇部に押引文が施される。8 は、口縁下に突帯が巡らされる。10 ～ 13 は、中期中葉の壺である。10 は、口唇部にキザミを、13 は口縁部に二条の沈線を施した無文の壺の口縁部破片と思われる。11 は条痕 12 は、縄文を地文とする長頸壺の口縁部破片である。

S1 は、凝灰質砂岩材の横長剝片を利用した刃器。主剝離面側には調整加工をほとんど施さずに、剝片の長辺部を刃部としている。刃部には使用による摩耗がある。S2 は扁平片刃石斧の刃部破片。側辺の面取りは刃部周辺のみに施され、基部側の面取りは不明瞭で断面が長楕円形状となる。頁岩材。

SD45　（第５～７図）　⑩区ⅣT21 ～ 23

XⅣ層上面で明瞭に検出した。SK160・272 に切られる。東西方向の直線的な溝跡で、東端は調査区外へ延びる。断面形は浅いＵ字状を呈し、底面はやや凸凹が認められる。埋土は単層で、自然埋没と思われる。調査区の中央東寄りで溝が断絶しているが、検出面からの深さが 10㎝以下と浅く、残存していた部分は既に底部付近であると思われ、上面ではつながっていた可能性も考えられる。墓域を区画する溝と考えられる。埋土中より土器片や石器・骨細片がわずかに出土している。

出土遺物（第５図 14　　PL6）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

14 は、前期末浅鉢の底部破片で内外面ともミガキが施されている。

３　土坑

⑤・⑥・⑧～⑪区で検出された。遺構は⑩区に集中していて、⑩区で検出された土坑のうち径１～ 1.5m、深さ 0.5 ～ 0.7m 程の土坑 56 基は、墓壙であると思われる。墓壙が確認された⑩区北側は、多量の土器片・石器・礫が出土しており、遺構の掘り込みはその遺物包含層中（基本土層のⅦ・Ⅷ層）からと思われるが、埋土と包含層の差がはっきりしないため、その層を手作業でXⅣ層上面まで掘り下げて遺構を確認し、調査を行った。墓壙と思われる土坑埋土は、水洗して遺物を採集した。採集した骨片はほとんどが細片であったが、すべて茂原信生氏に鑑定していただき、種名が判明したものについてはその名を明記した。

SK110　（第７・８図）　⑩区ⅣT7

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、南側に浅い部分をもつ。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、１層は下層の堆積状態と異なり、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や土偶・石器・微細な炭化物・骨細片がわずかに出土している。

出土遺物（第８図15　　PL16）

15は、頭部と両腕が欠損した土偶である。胸部分の破片が遺構埋土から出土し、包含層から出土した下半身部分と接合した。

SK113　（第７・８図）　⑩区ⅣT7

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は壁面が垂直に近く立ち上がる部分と袋状を呈する部分とがある。底部は、外側がやや下がる傾向が認められるが、ほぼ平坦である。中層には、径10～20㎝程の礫が重なることなく、ほぼ全面に渡り水平に敷き詰められている。埋土は単層で、中層の礫層の上下で埋土の差ははっきりしなかった。その構造などから、再葬の残余焼人骨の埋納など、何らかの遺体処理の儀礼が行われた可能性が考えられる土坑である。礫層の上下の埋土を２箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・微細な炭化物・骨細片がわずかに出土している。

出土遺物（第８図16～18、S3～S5　　PL6・17・18・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

16・17は、中期中葉の土器で、16は浅鉢の胴部、17は無文の壺口縁部である。18は、前期末条痕文系の壺の口縁部で、口唇部には押引文が施され、口縁下には突帯が巡る。

S3とS4は加工痕のある剝片。S3は黒曜石の横長剝片を素材とすると考えられるが、長軸の両端は欠損している。自然面の残る表面及び主剝離面側の一部に平坦な押圧剝離が施され、刃器状の石器の可能性も考えられる。S4は凝灰質砂岩材で、刃器等の石器表面の剝落部分とみられる。S5は凹石。表裏面にアバタ状の凹部があり、摩耗痕を伴う。安山岩材で686gが測られる。

SK114　（第７・８図　　PL3）　⑩区ⅣT7～8

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は袋状構造を呈し、底部は平坦である。埋土は複層で、上位（1・2層）にレンズ状に落ち込んだ集石層がある。径３～5㎝程の河原石で構成され、中央部分に集中する。土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。1・2・6・7層の埋土を４箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果6・7層からリン酸・カルシウムの成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・微細な炭化物・シカの歯の破片が出土している。

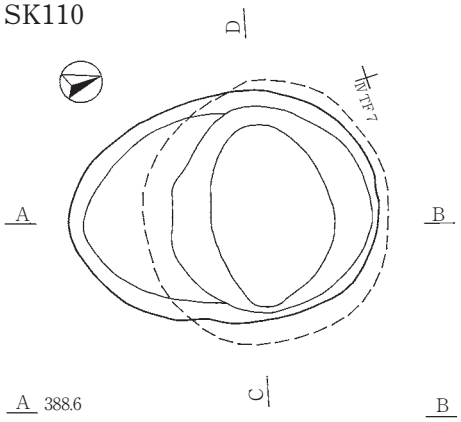
出土遺物（第８図19、S6・S7　　PL6・17・18）

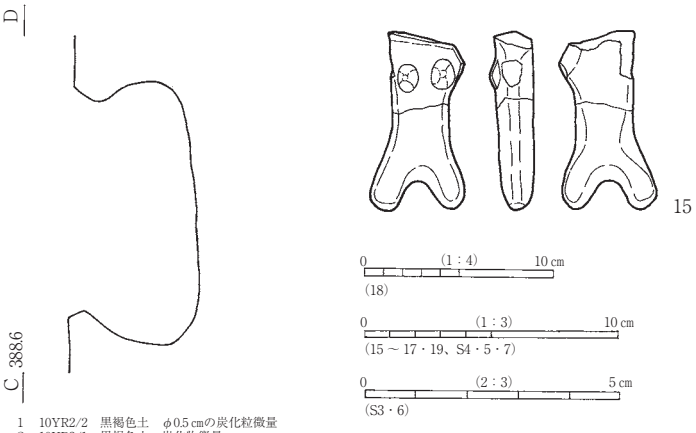
掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

19は、中期中葉の縄文を地文とする壺の胴部である。

S6は、黒曜石材の石錐。基部端の一部分を欠失するものの、ほぼ完形に近い資料である。錐部機能部を中心に押圧剝離で調整加工している。側辺には使用による摩耗痕がある。S7は、加工痕のある剝片。主剝離面側にもわずかながら剝離加工がみられ、刃器のような石器の可能性もある。凝灰質砂岩材。

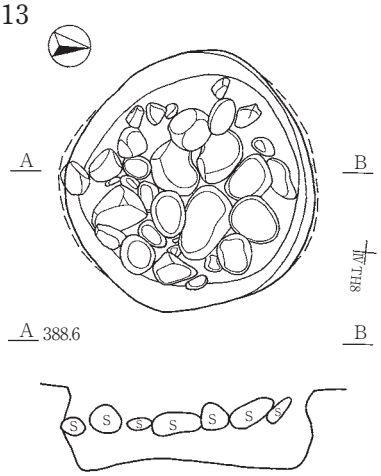
SK110

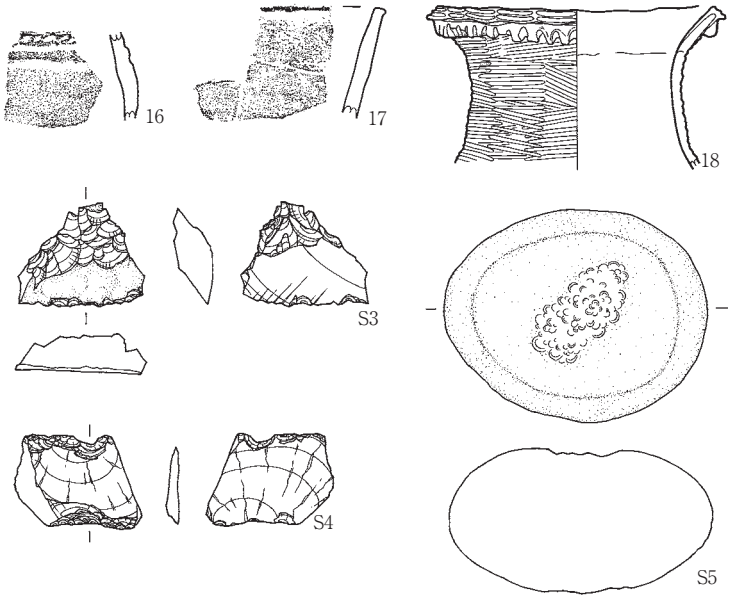




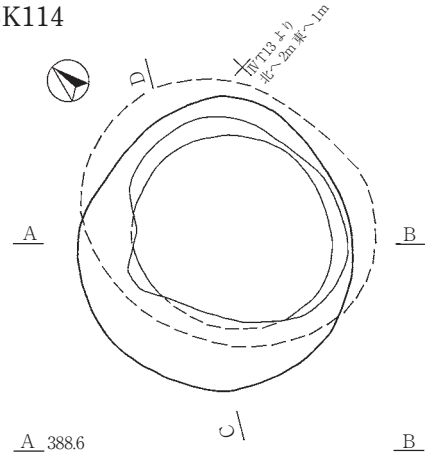
1　10YR2/2　黒褐色土　φ0.5cmの炭化粒微量
2　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
3　10YR2/2　黒褐色土　炭化粒微量、壁際に黄褐色土ブロック
4　10YR3/2　黒褐色土

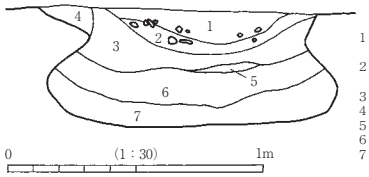
SK113



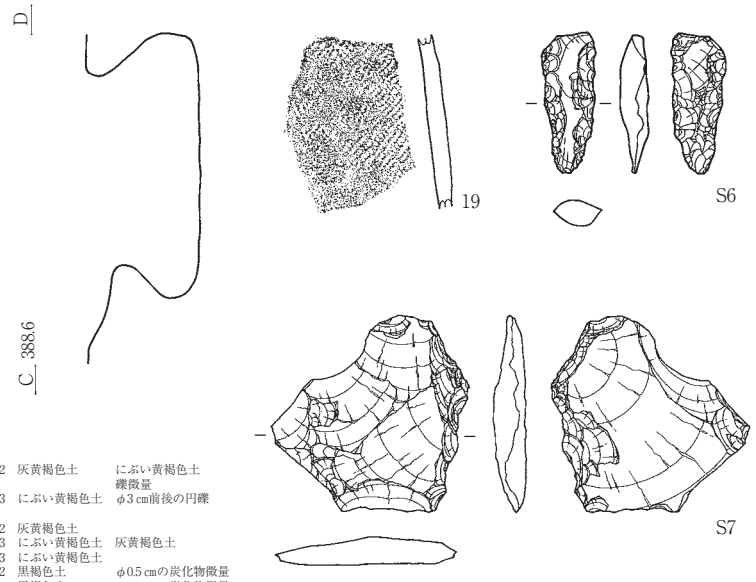


SK114





1　10YR4/2　灰黄褐色土　にぶい黄褐色土礫微量
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　φ3cm前後の円礫
3　10YR4/2　灰黄褐色土
4　10YR4/3　にぶい黄褐色土　灰黄褐色土
5　10YR4/3　にぶい黄褐色土
6　10YR2/2　黒褐色土　φ0.5cmの炭化物微量
7　10YR3/1　黒褐色土　φ0.5cmの炭化物微量



第８図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図２

SK115 （第７・９図　　PL3） ⑩区ⅣT12

XW層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、東側に浅い部分をもつ。西側の一段深い部分に、壺（20）が横位の状態で埋置されていた。断面形は、U 字状に近い形状で、底部は平坦である。埋土は単層で、上層に円礫の混入が認められた。人為的に埋め戻されたと思われる。墓と思われる土坑である。

壺は土坑底面に横位状態で据え置かれていたが、つぶれた状態で検出された。横位に置かれた上面の胴部分が意識的に打ち欠かれ、外面を下にして壺内部に敷かれていた。壺は、開口した状態で横位に据え置かれたと想定される。開口した壺の胴部内には、角礫が置かれていた。この角礫は被熱しており、被熱してはじけた剝片が埋土中に混入していた。壺内部の炭化の様子や礫の状況から、遺構内に壺を敷き、その上に礫を置いた状態で火がかけられたと推考される。埋土からは、わずかであるが焼骨片が出土しており、焼骨化が行われた可能性が考えられる。壺の頸部付近から、石製品（S8）が出土している。

礫の下の埋土をサンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より石器や炭化米・オニグルミの炭化核・被熱した骨細片がわずかに出土している。水洗して採取した炭化米２・オニグルミ１・炭化材１の４点で、炭素年代測定を行った。炭化材と種実では、測定結果にばらつきがみられたが、１年生の種実であるコメやオニグルミの測定結果である紀元前 405 ～ 350 年の中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第９図 20、S8 ～ S11　　PL6・17・19）

掲載した遺物は、20 が土坑内に埋置されていた壺で、その他は、埋土中からの出土である。

20 は、前期末条痕文系の壺で、ほぼ完形に復元された。口唇に面取りを施すもので、口縁下には、指による圧痕が施された突帯が貼り付けられ、二枚貝による条痕が器面全体に施されている。条痕は、単なる器面の調整から、文様帯を意識した段階に変化しており、頸部には横方向の、胴部には斜方向の条痕と、はっきりと文様帯を意識した施文が行われている。水神平式に相当する壺で、東海地方からの搬入品であると思われる（＊１）。

S8 は、有孔の円板状石製品。細粒の砂岩材で、側辺部にはわずかに潰れ状の痕跡がみられる程度。表裏面は研磨され、孔部は敲打後に研磨された可能性が高い。貫通孔は径 0.4cm ほどである。5.3cm × 5.2cm × 1.2cm で 33g が測られる。S9 は加工痕ある剝片。赤紫色の凝灰質砂岩材で、刃器等石器の剝落部分か。S10 は凝灰岩砂岩材の剝片、27.6g。S11 は凹石。表面にわずかながらアバタ状の敲打部が観られるほか、側辺部にも部分的に敲打部がある。表裏面は良好な摩耗面を形成している。花崗岩材で 498g ある。

SK117 （第７・10 図） ⑩区ⅣT7

XW層上面で明瞭に検出した。平面形は隅丸方形を呈する。断面形は、U 字状に近い形状で、底部は平坦であるが、南東側壁際に凹部がある。埋土は単層である。墓と思われる土坑である。埋土中より土器片がわずかに出土している。

出土遺物（第 10 図 21　　PL6）

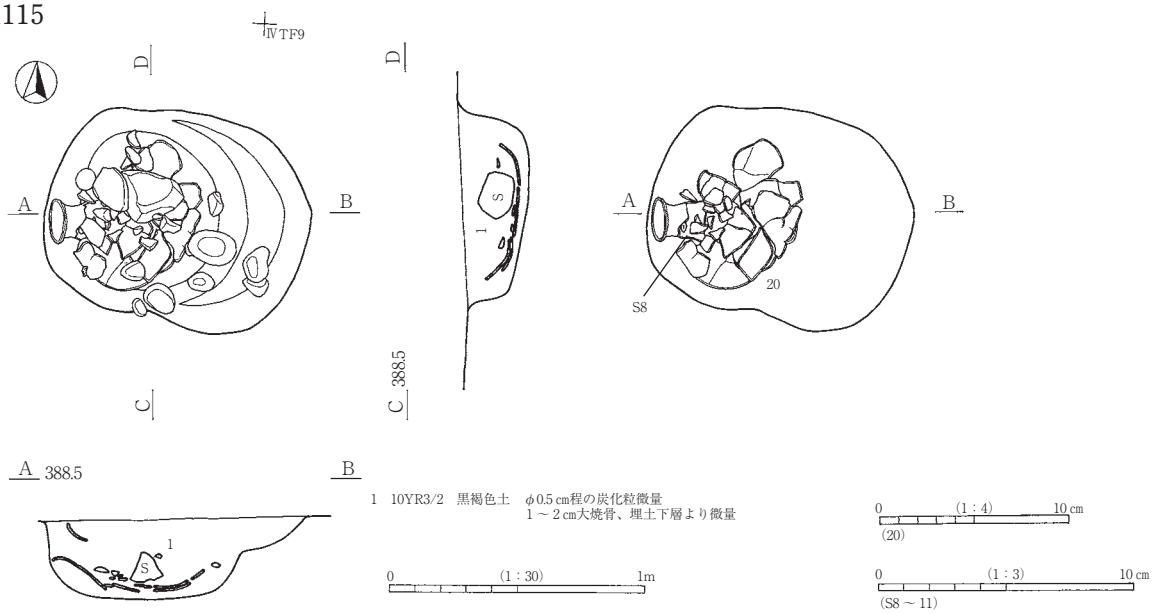
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

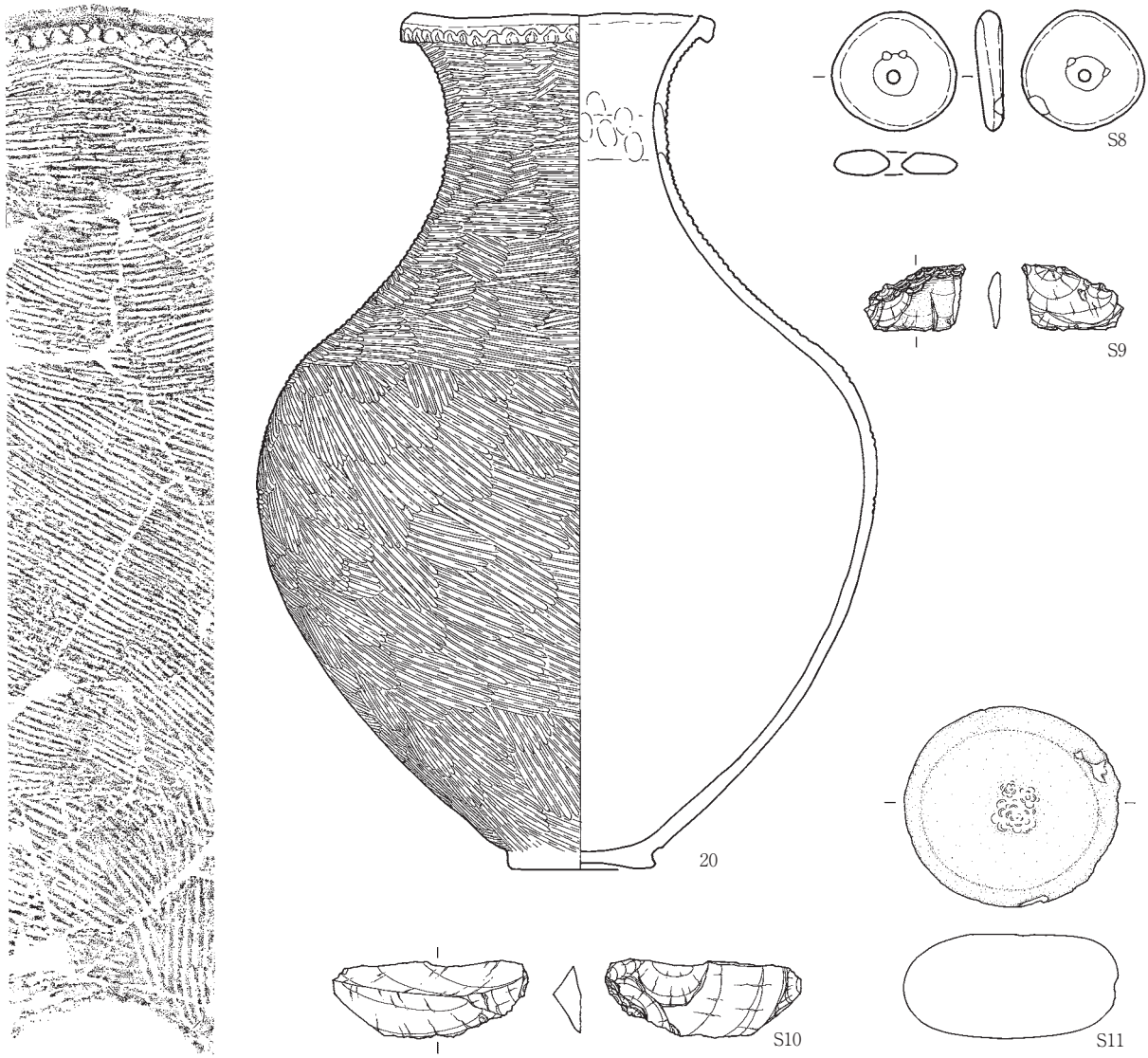
21 は、中期中葉の壺の胴部と思われ、撚り糸を転がして施文している。

SK118 （第６・10 図） ⑩区ⅣT7

XW層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、南側に浅い部分をもつ。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈し、底部は平坦である。埋土は単層である。東側壁際の浅い部分から、土器片（22）が押しつぶされたような状況で検出された。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

SK115





第９図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図３

出土遺物（第 10 図 22　　PL6）

22 は、中期中葉条痕文系の壺の口縁から胴部にかけての破片である。口唇に面取りを施す。口縁部と胴部には、櫛状工具によると思われる横位の細い条痕文が施され、頸部には無文帯を設けている。頸部無文帯と胴部条痕文の境には、一条の沈線が巡らされている。

SK120 （第７・10 図　　PL4） ⑩区ⅣT12・13

遺構はⅩⅣ層上面で検出したが、埋置された壺の状態などから、掘り込みはさらに高い位置からであったと思われる。平面形は楕円形を呈し、長軸の中央付近に一段深い部分をもつ。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、底部は平坦である。埋土は複層で、１層は下層の堆積状態と異なり、掘り返しが行われた可能性が考えられる。あるいは、土器棺が抜かれた痕跡・別の埋納土坑の可能性なども考えられる。人骨の出土は認められなかったものの、その構造などから選別した遺骸を壺に納め、埋納した再葬墓と思われる土坑である。東側壁際の一段浅い部分に、壺（23）が、正位の状態で埋置されていた。

１層の中・下層、２層の最下層の埋土を計３箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中から土器片や石器・玉・微細な炭化物・骨細片がわずかに出土している。

出土遺物（第 10 図 23、S12・S13　　PL１・７・18）

掲載した遺物は、23 が土坑内に埋置されていた壺で、その他は、埋土中からの出土である。

23 は、前期末在地系の無文の壺で、口唇部には指による圧痕が施されている。ほぼ完形で、底部には穿孔が認められる。

S12 は臼玉。1/2 程度の破損例で、推定径は 0.8cm ほど。石材は不明である。S13 は黒曜石の砕片、2.3g。

SK138 （第７・11 図） ⑩区ⅣT17

ⅩⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形に近い形状を呈し、開口部に浅い部分が一周する。断面形は、袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、間層にⅩⅣ層由来の埋土があり（３層）、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。１・３・６層の中央付近の埋土を各１箇所・計３箇所から埋土をサンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片と石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・焼骨細片が出土している。水洗して採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 782 ～ 511 年とかなり幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

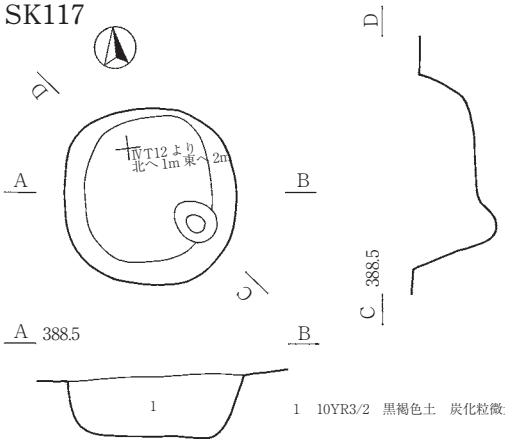
出土遺物（第 11 図 24 ～ 31、S14　　PL6・17）

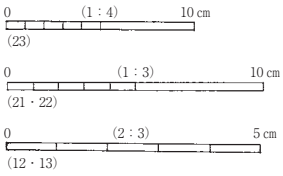
掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

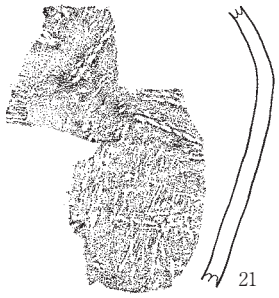
24・25 は前期末の土器で、24 は無文の甕の口縁部破片である。25 は無文の壺の口縁部破片で、口唇に１条、口縁部に６条、棒状工具による沈線が施されている。26 ～ 31 は中期中葉の土器で、26 は、壺の口縁部破片である。27 ～ 31 は甕である。27 ～ 30 は口縁部破片で、27 は波状を呈する。31 は、底部に布圧痕が残る。

S14 は、凝灰質砂岩材の横長剝片を利用した刃器。長さは 12.7cm が測られ、主剝離面側にほとんど加工を施さずに使用されている。刃部には摩耗痕が認められる。

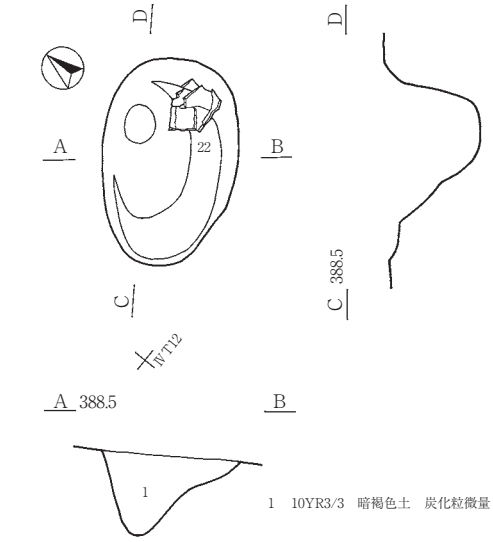
SK117



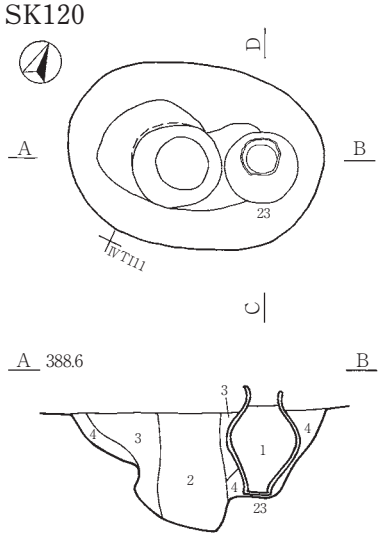


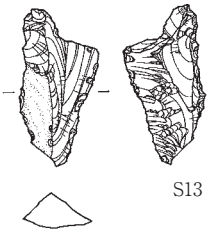


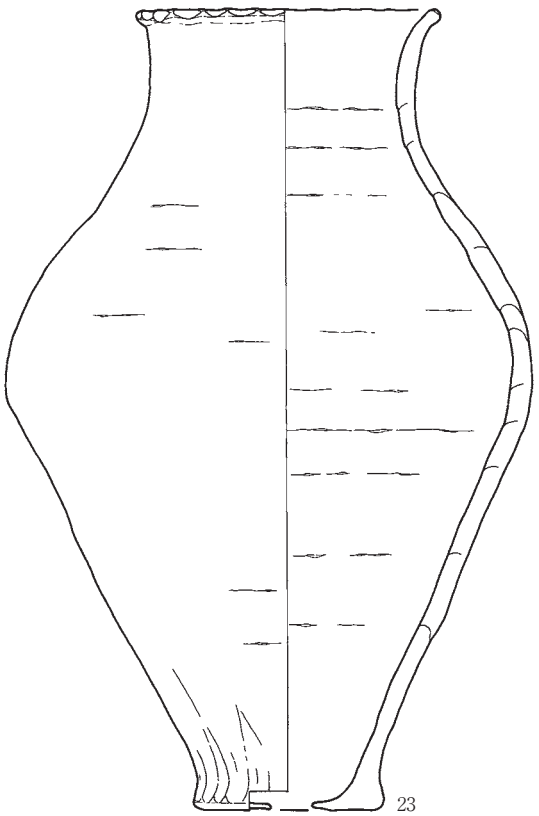
SK118



SK120







第 10 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図４

SK139　（第７・11 図）　⑩区ⅣT12・17

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。開口部に浅い部分が一周する。断面形は、底部付近で袋状を呈し、上部は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。埋土は複層で、中層にXⅣ層由来のレンズ状に落ち込んだ埋土があり（3 層）、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。1・3・4 層の中央付近の埋土を各 1 箇所・計 3 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・焼骨細片が出土している。

出土遺物（第 11 図 32 ～ 36、S15・S16　　PL7・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

32・33・35 は、前期末の土器で、32 は無文の壺の口縁部、35 は条痕文系の壺の胴部である。33 は、無文の甕の口縁部破片で口縁は波状を呈し、頂部には刺突を施す。34・36 は、中期中葉の土器片である。34・36 ともに壺の胴部破片で、34 は縄文を地文とする細頸壺であると思われる。

S15 は非常に小さな石鏃。黒曜石材で長さは 1.1cm、重さは 0.15g ほどである。S16 は黒曜石材の楔形石器。紡錘形に近い形状で上下の端部には両極剝離痕を明瞭に留める。重さ 4.74g。

SK145　（第７・11 図）　⑩区ⅣT12

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形に近い形状を呈する。断面形は、U 字状に近い形状で、底部は平坦であるが、北東側壁際に凹部がある。埋土は単層で、人為的に埋め戻されたと思われる。墓と思われる土坑である。埋土の上層と下層の 2 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物が出土している。

出土遺物（第 11 図 37、S17　　PL7・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

37 は、前期末遠賀川系の壺の頸部破片である。

S17 は小形の扁平片刃石斧。側面の面取りは曖昧で、断面長楕円形状を呈する。ほぼ完形に近い資料であるが、基部端は敲打により欠損している。

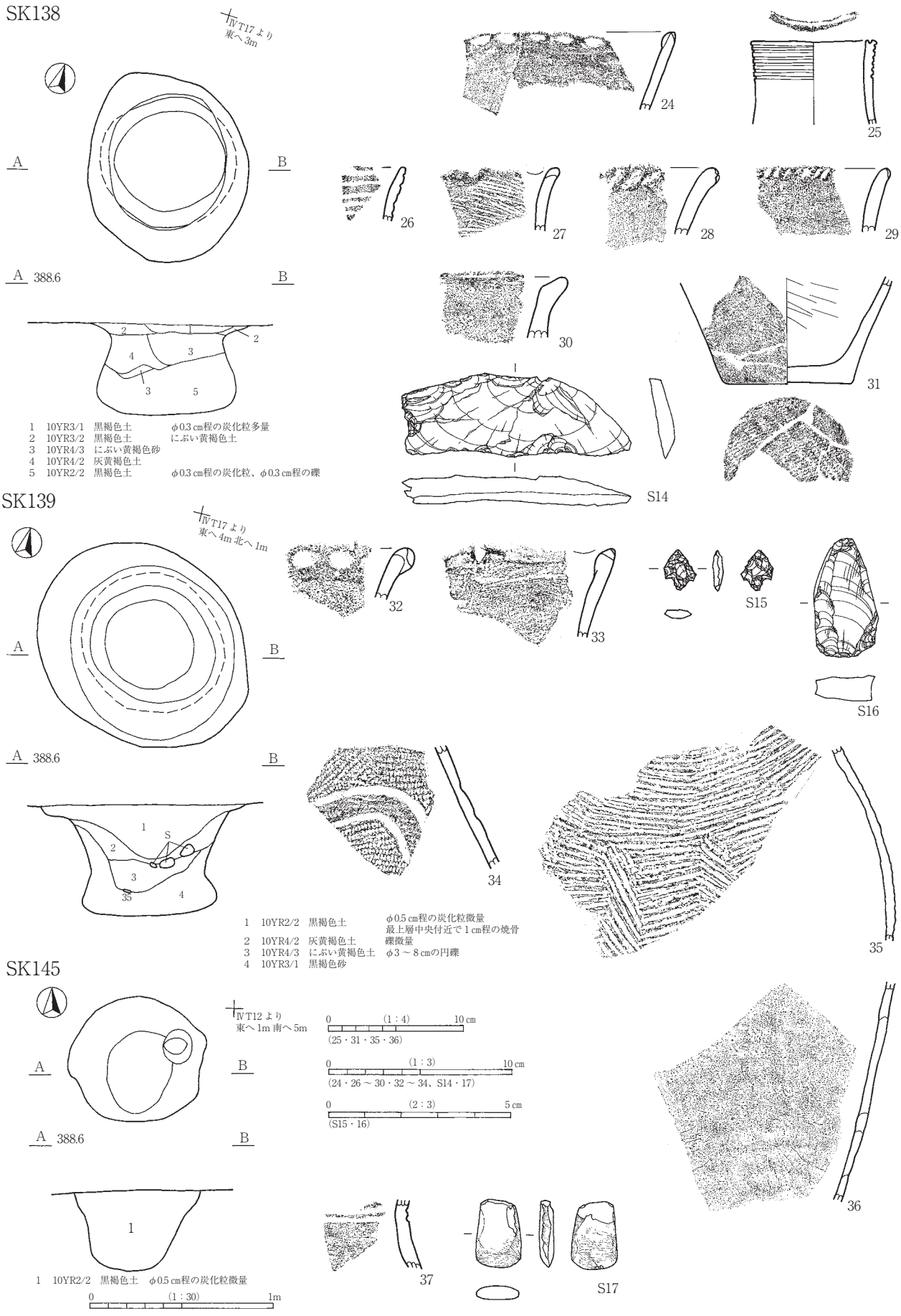
SK146　（第７・12 図）　⑩区ⅣT12

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は、V 字状に近い形状を呈する。埋土は単層である。埋土中より土器片や石器が出土している。

出土遺物（第 12 図 38・39　　PL7）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

38・39 は、前期末の土器である。38 は、小片ではっきりしないが、無頸壺の胴部であると思われる。39 は無文の壺の口縁部である。



第 11 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図５

SK148 （第７・12 図） ⑩区ⅣT22

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は、U 字状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。埋土中より土器片がわずかに出土している。

出土遺物（第 12 図 40　　PL7）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

40 は、中期中葉の無文の甕で、口頸部と胴部の境に稜をもつ器形である。口縁は波状を呈し、頂部には押圧が施される。

SK164 （第７・12 図　　PL4） ⑩区ⅣT12

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、上層にXⅣ層由来の埋土があり（2 層）、掘り返しが行われた可能性が考えられる。中層（3 層）には、径 10 ～ 30cm程の礫が重なることなく、ほぼ全面にわたり水平に敷き詰められている。その構造などから、再葬の残余焼人骨の埋納など、何らかの遺体処理の儀礼が行われた可能性が考えられる土坑である。1 層下層から埋土をサンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、リン酸・カルシウムの成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片やミニチュア土器・石器・微細な炭化物・骨細片が出土している。

出土遺物（第 12 図 41、S18 ～ S20　　PL7・17）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

41 は、中期中葉の条痕文系の甕の口縁部破片と思われ、口唇は面取りされる。櫛状工具によると思われる細い条痕文が施されている。

S18 と S19 は凝灰質砂岩材の横長剝片。ともに刃器の可能性もあるが肉眼では使用痕の観察は難しい資料である。S20 は凝灰質砂岩材の石鍬。完形品で、刃部の側面は明瞭に摩耗している。22.3cm × 8.4cm × 4.0cm、841.4g が測られる。

SK221 （第７・13 図） ⑩区ⅣT17

XⅣ層上面で明瞭に検出した。SD23 を切る。平面形は楕円形に近い形状を呈する。断面形は、U 字状に近い形状で、底部は平坦であるが、北側壁際に複数の凹部がある。埋土は複層で、上層にXⅣ層由来の埋土があり（1・2 層）、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。1・2・3 層の中央付近の埋土を各 1 箇所・計 3 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 13 図 42　　PL7）

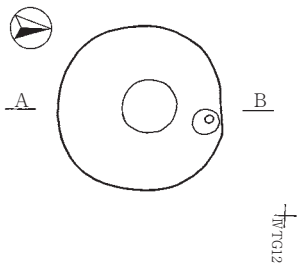
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

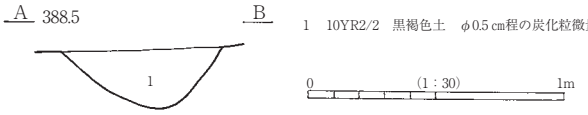
42 は、中期中葉条痕文系の浅鉢の底部破片と思われる。内面はミガキが施され、外面は赤彩されている。

SK250・253 （第７・13 図） ⑩区ⅣO22

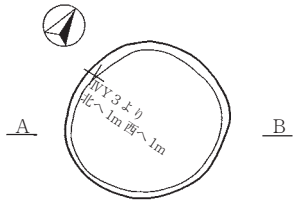
XⅣ層上面で明瞭に検出した。両遺構とも黒褐色の埋土で新旧関係は不明である。SK250 は、平面形が楕円形で、断面形は袋状を呈する。底面は平坦である。SK253 は、平面形が円形で、断面形はU字状を呈する。底面は平坦である。いずれも墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や加工円盤・石器・微細な炭化物・焼骨細片が出土している。

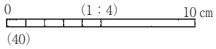
SK146

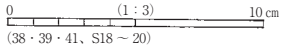


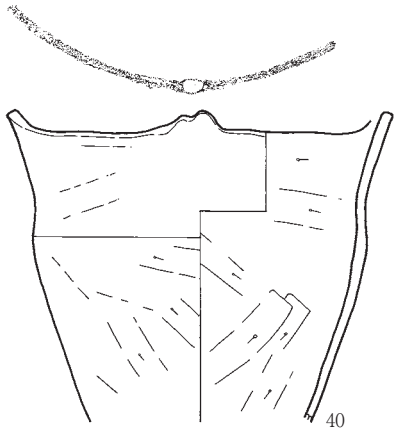


SK148

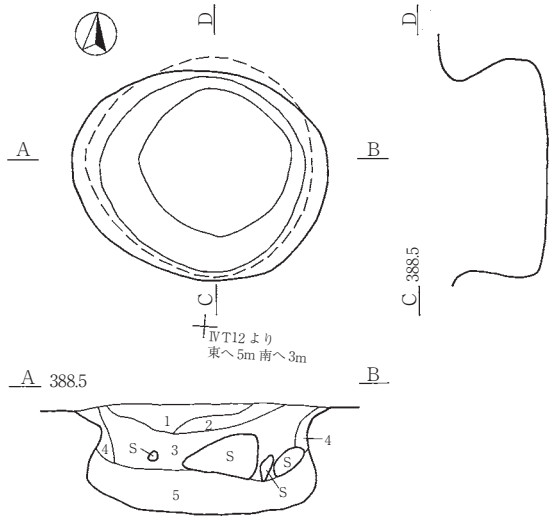


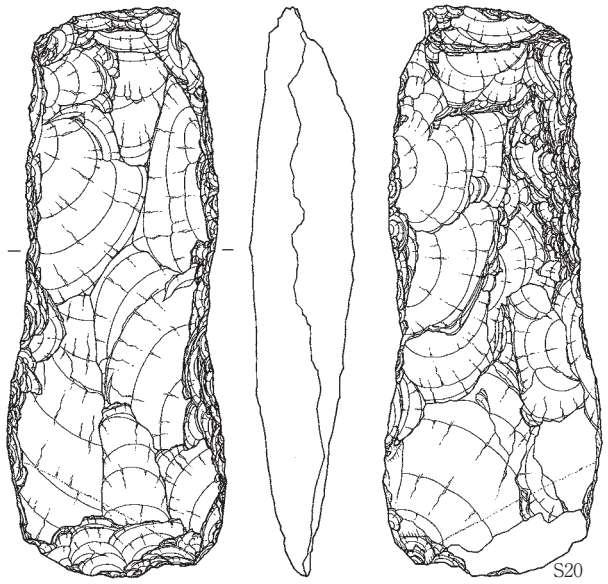


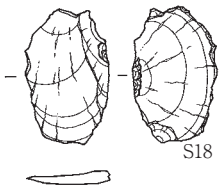


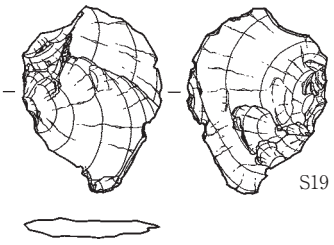


SK164



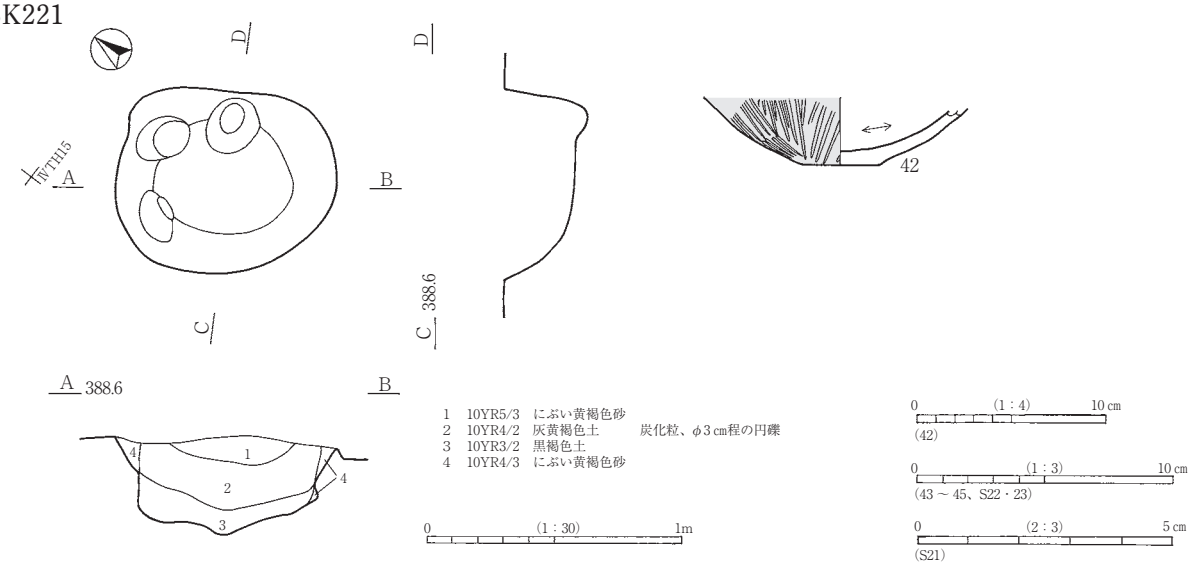




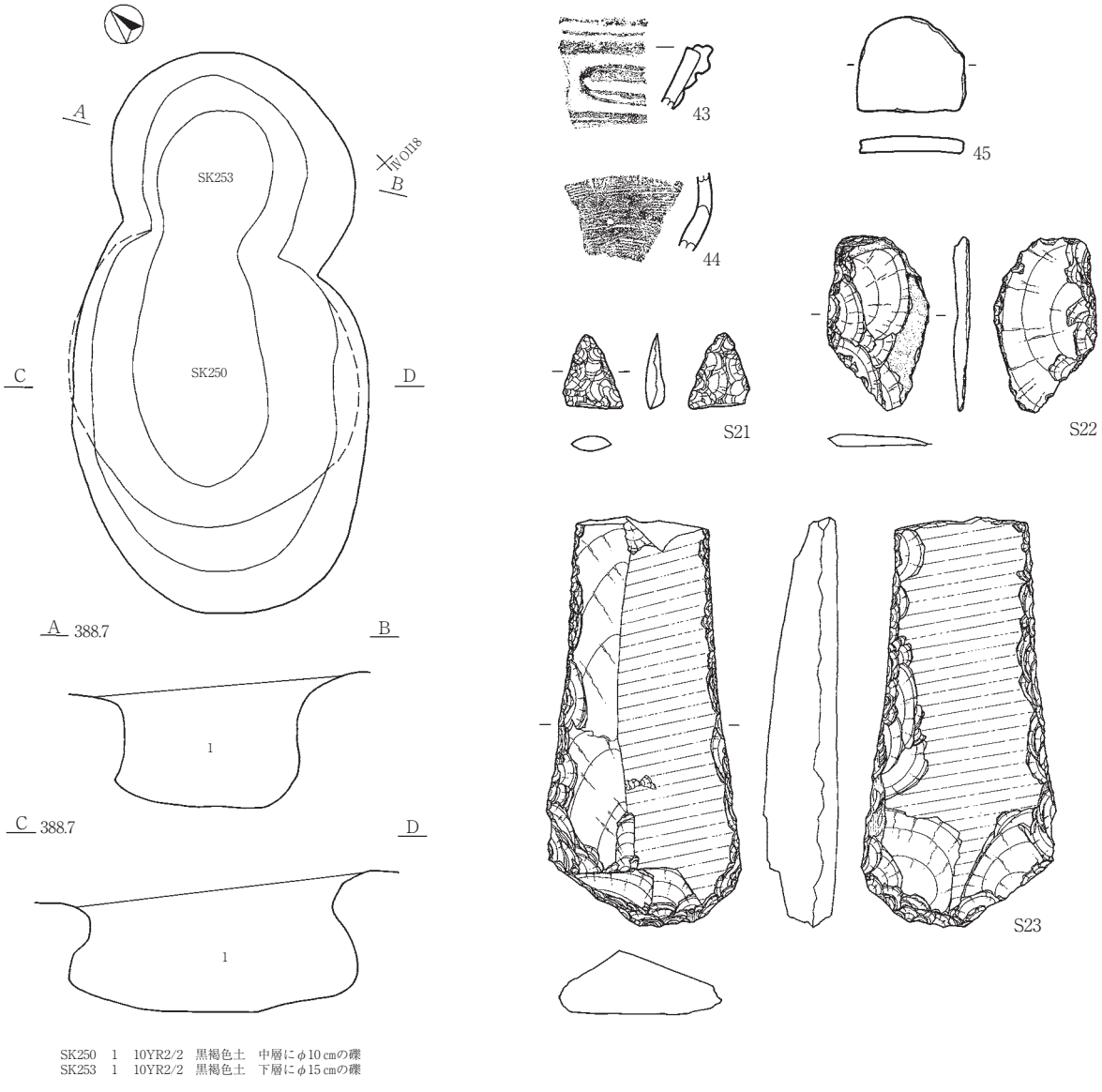


第 12 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図６

SK221



SK250・253



SK250　1　10YR2/2　黒褐色土　中層にφ10㎝の礫
SK253　1　10YR2/2　黒褐色土　下層にφ15㎝の礫

第 13 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図７

出土遺物（第 13 図 43 ～ 45、S21 ～ S23　　PL7・16 ～ 18）

掲載した遺物は、43・45・S23 は SK250、44・S21・S22 は、SK253 のいずれも埋土中からの出土である。

43 は、前期末の短頸壺の口縁部かと思われる。44 は中期中葉、小形の壺の胴部破片である。

45 は、壺の胴部破片を利用した加工円盤と思われる。

S21 は黒曜石材の石鏃で、図では分かりにくく表現されているが基部は欠損し、全体形は不明である。S22 は凝灰質砂岩材の横長剝片。刃器の可能性もあるが、明確な使用痕は確認できない。S23 は凝灰質砂岩材の石鏃。基部端を欠損する。刃部周辺の側辺部には、わずかながら摩耗痕がみられる。形状から石鏃とするが、刃器等の可能性もあるか。

SK1264　（第７・14 図）　⑩区ⅣS10

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、中層（4・5 層）に堅く締まった焼土層がある。一つの土坑として調査したが、底部の様子などから、複数の土坑が切りあっていた可能性や、複数回掘り返された可能性が考えられる。焼骨化が行われたと思われる土坑である。1・3・6 層や焼土部分などの埋土をそれぞれ 2 ～ 5 箇所、計 19 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った。焼土部分からリン酸の成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片やミニチュア土器・石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。

出土遺物（第 14 図 46 ～ 55、S24 ～ S28　　PL7・16 ～ 19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

46・52 は前期末の土器で、46 は条痕文系の壺の口縁部、52 は遠賀川系の壺の肩部である。47 ～ 51・53 は、中期中葉の土器で、47 は小形の壺の口縁部である。48 は、小形の甕の口縁部破片と思われる。49 は無文の甕の口縁部、51 は条痕文系の胴部破片である。50 は、小片ではっきりしないが、壺の胴部破片と思われる。53 は底部に木葉痕が残る壺と思われる。

54・55 は、ミニチュア土器の口縁部破片である。54 には、口縁部に円孔が設けられている。

S24 と S25 は凝灰質砂岩材の大形剝片。S24 は肉眼で使用痕を確認することはできず、刃器として使用したか否かは不明で、S25 は、わずかに摩耗痕とみられる痕跡があるか。S26 は楔形石器。裏面は自然面で、上下両端に両極剝離が認められる。S27 は石鏃の刃部破片。刃縁には使用による摩耗痕が認められる。S28 は凹石。表裏両面に溝に近い形状の凹部が 2 箇所あり、先端部は敲打により潰れている。敲き具と考えられる。

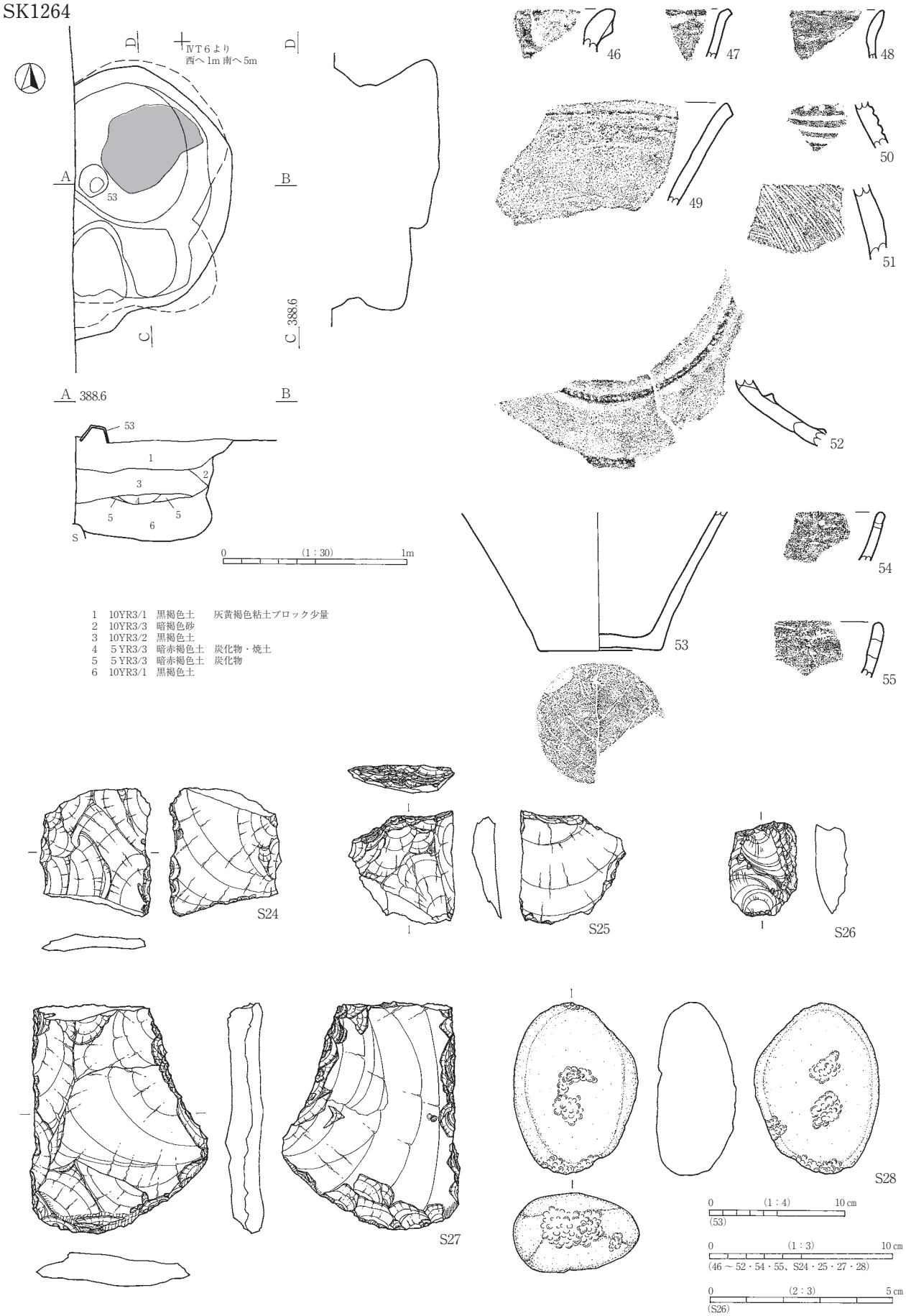
SK1275　（第７・15 図）　⑩区ⅣN25

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、北側に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状を呈し、底部は平坦である。埋土は複層である。埋土中より土器片がわずかに出土している。

出土遺物（第 15 図 56　　PL7）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

56 は、前期末無文の壺の口縁部破片で、口縁部は外反し、口唇に刺突が施される。



第 14 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図８

SK1282　（第７・15 図）　⑩区ⅣO21

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈し、北側に浅い部分をもつ。断面形は緩やかなＵ字状を呈し、底部はほぼ平坦である。埋土は複層である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 15 図 57・58　　PL7）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

58 は、前期末条痕文系の壺と思われる。頸部から肩部の破片で、肩部には突帯が巡らされる。57 は、中期中葉の甕の口縁部と思われる。口縁は波状を呈し、頂部は押圧されている。口縁部には沈線による変形工字文が施される。

SK1283　（第７・15 図）　⑩区ⅣO21

XⅣ層上面で明瞭に検出した。SK1580 を切る。平面形は円形を呈し、南西側に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・微細な炭化物・シカの臼歯破片が出土している。

出土遺物（第 15 図 59 ～ 61、S29・S30　　PL8・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土で、60 には、SK1264 から出土した破片が接合している。

59・61 は、前期末の土器である。59 は在地系無文の壺の口縁部で、口唇に押圧が施される。61 は条痕文系の甕で、口縁部と胴部の境に稜をもつ器形である。稜より下方に縦方向の条痕文を施す。60 は、中期中葉条痕文系の壺の胴部である。縦方向の条痕文が施されている。

S29 は刃器。石鍬と考えられる石器の欠落した表皮を素材とし、剝離面側に簡単な加工を施し刃器に仕上げた資料。刃縁には摩耗痕が認められる。凝灰岩材で 14.5g が測られる。S30 は黒曜石材の剝片を利用した小形の刃器。

SK1293　（第７・16 図）　⑩区ⅣT1

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。底部の一部に、径 10 ～ 30㎝程の礫が敷かれていた。墓壙と思われる土坑である。1・2・3 層の埋土をそれぞれ２～５箇所、計 10 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。水洗して採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 514 ～ 384 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 16 図 S31　　PL18）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S31 は、黒曜石材の凹基有茎式鏃。側辺は鋸歯状で、先端及び片側の脚部が欠損している。

SK1301　（第７・16 図　　PL2・4）　⑩区ⅣT6

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、南東側の一部を除く開口部に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状で、北側の一部で袋状を呈す。底面は平坦であるが、壁際が一段高くなる。埋土は複層である。２層から土器片や径５～ 15㎝程の礫がやや多く出土している。埋土の堆積状況から、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。1 ～ 6 層の埋土をそれぞれ１～４箇所、計 15 箇

所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、１層下層の中心部分と２層中心部分からリン酸・カルシウムの成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。水洗して採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行ったが、少量であったため分析できなかった。

出土遺物（第 16 図 62・63　　PL8）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

62 は、中期中葉無文の小形壺の口縁部と思われ、口縁部に２条の沈線が施される。63 は、前期末の条痕文系の壺の胴部破片である。

SK1302 （第７・16 図　　PL4） ⑩区ⅣT6

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。上層にXⅣ層由来の埋土があり（２層）、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。埋土の堆積状況から、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・サクラ属サクラ節の炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。水洗して採取したサクラ属サクラ節の炭化核の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 541 ～ 398 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 16 図 64　　PL8）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

64 は、中期中葉の壺の胴部と思われる。沈線文が施されている。

SK1303 （第７・17 図　　PL2・4） ⑩区ⅣT6

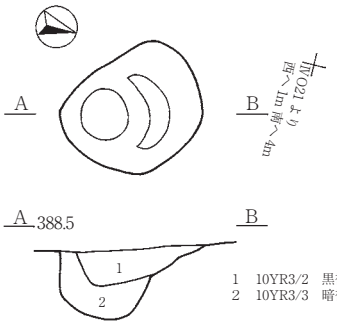
XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形はＵ字状で北側の一部で袋状を呈す。底面は平坦である。埋土は複層である。１層に径 0.5 ～ 7㎝程の礫が多量に混入している。また、XⅣ層由来の埋土が中層（３・５層）に認められるなど埋土の堆積状況から、複数回掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。１～９層の埋土をそれぞれ１～３箇所、計 14 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・石製品・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・焼人骨・赤色顔料が出土している。出土した人骨は 4.22 ｇで、焼けた骨片あるいは歯片である。焼けた歯はヒトのものであり、下顎の切歯や、臼歯の歯根が見られるが、歯種は特定できない。水洗して採取した３層から出土した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 511 ～ 386 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 17 図 S32・S33　　PL18・19）

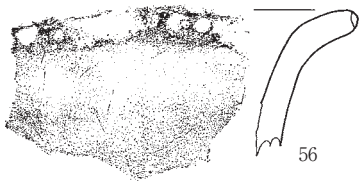
掲載した遺物は、S32 は、基部が本遺構の埋土からの出土で、SK1307 の埋土から出土の先端に近い部分の破片と接合した。S33 は、半分が本遺構の埋土からの出土で、SK1392 の埋土から出土の破片と接合した。

S32 は凝灰岩材の平基有茎式鏃で、先端と舌部が欠損している。鋸歯側辺で精巧な作りである。S33 は砂岩材の有穴石製品。1/2 程度の欠損資料とみられ、全体の形状は不明だが、「チョウネクタイ」状を呈していた可能性がある。中央と考えられる部分に１穴があり、側辺には鋸歯状の刻みがある。

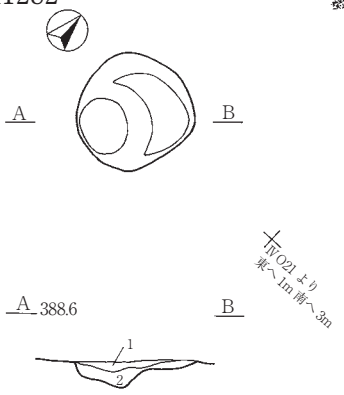
SK1275



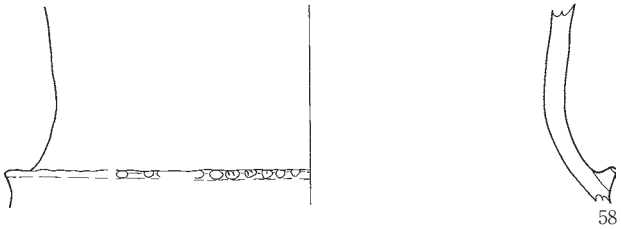
1　10YR3/2　黒褐色土　暗褐色土φ2㎝前後のブロック少量
2　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色土φ3㎝前後のブロック少量

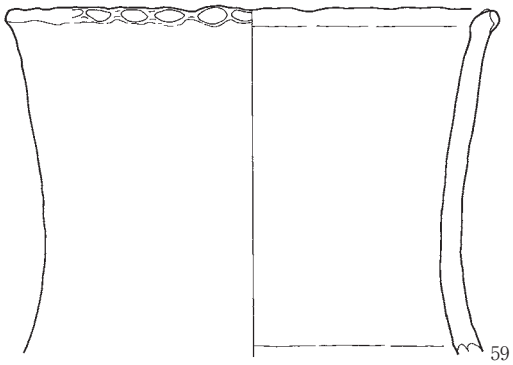


SK1282

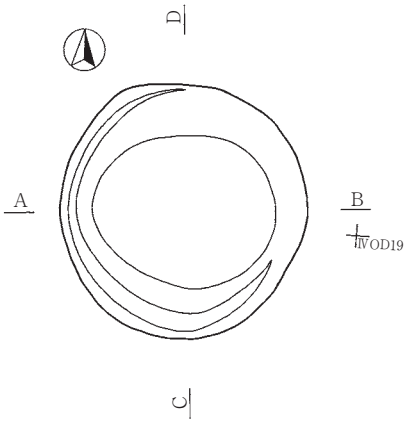


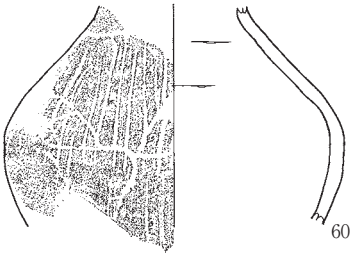
1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR3/3　暗褐色土

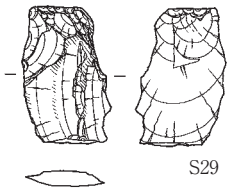


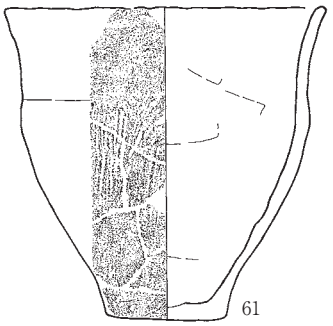


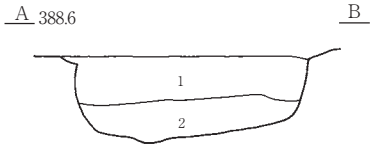
SK1283



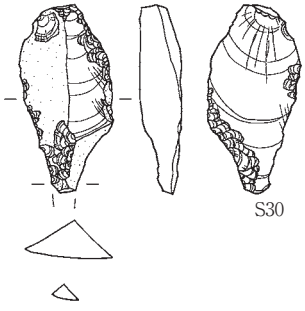


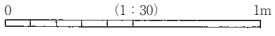


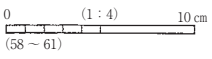


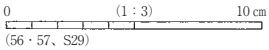


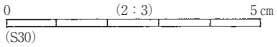
1　10YR2/2　黒褐色土　暗褐色土φ3㎝前後のブロック少量
2　10YR2/2　黒褐色土　φ2～5㎝程の砂利





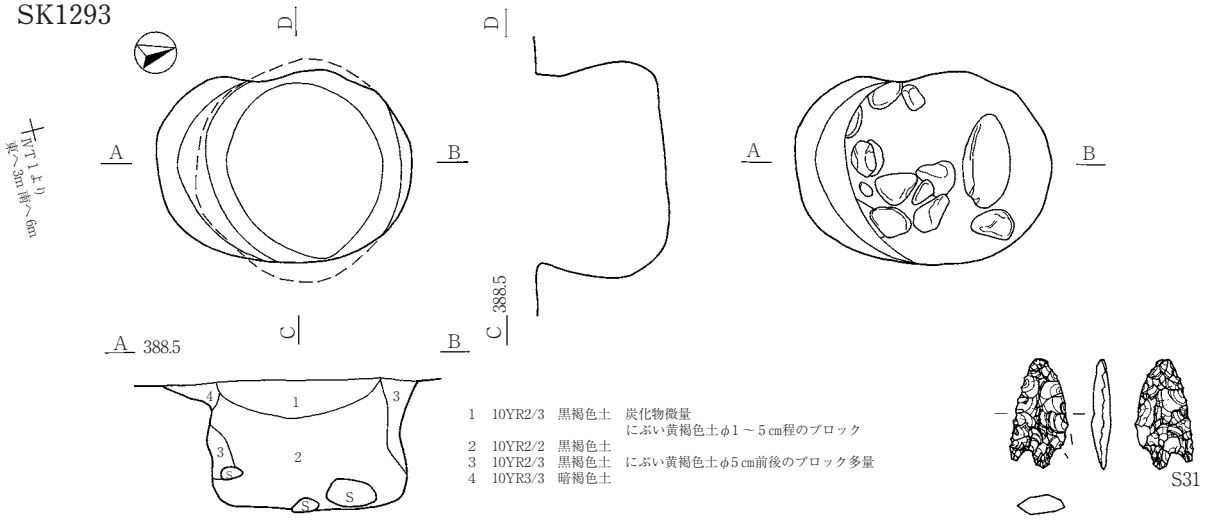




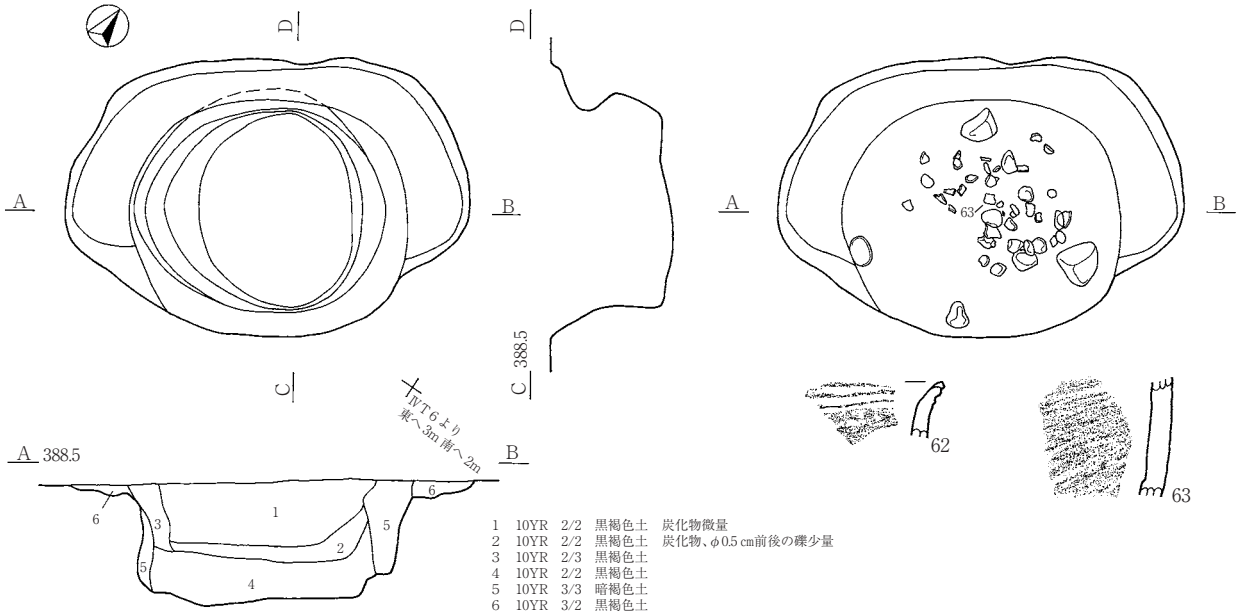


第 15 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図９

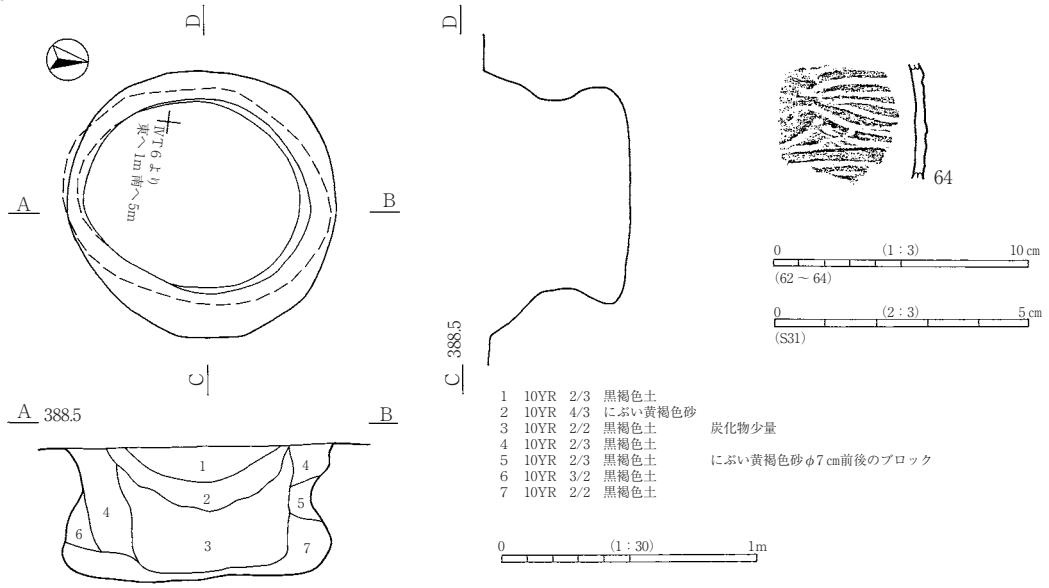
SK1293



SK1301



SK1302



第 16 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 10

SK1305 （第７・17 図　　PL2・5） ⑩区ⅣT6

XW層上面で明瞭に検出した。SK1307 を切る。平面形は楕円形を呈し、西側に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。検出面に径 10 ～ 30㎝程の礫が重なることなく、ほぼ全面に渡り水平に敷き詰められている。礫の出土状況などから、掘り込みはさらに高い位置からであったと思われ、SK113 と同じような構造をとる可能性が考えられる。その構造などから、再葬の残余焼人骨の埋納など、何らかの遺体処理の儀礼が行われた可能性が考えられる土坑である。礫層と、その直下（1 層）から焼骨片が多数出土している。埋土の 1 層から 6 箇所、埋土の 2 層と遺構外から各 1 箇所、計 8 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、礫層直下（1 層）からリン酸の成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・骨角器・焼人骨が出土している。出土した焼人骨は 55.12 ｇで、細片が多数出土している。中にヒトの指の骨や歯が含まれている。第 1 指の基節骨、順位不明の中節骨があり、歯の破片にはエナメル質は残っていない。8 点が確認できるが、歯種は判定できない。水洗して採取した炭化材とオニグルミの炭化核の一部で、炭素年代測定を行った。炭化材と種実では、結果に若干のばらつきがみられたが、1 年生の種実であるオニグルミの測定結果である紀元前 560 ～ 380 年の中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 17 図 S34、骨角器　　PL18・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

S34 は黒曜石材の石鏃の先端破片。

骨角器は、針か簪の一部と思われるが、基部が欠損しているためはっきりしない。シカ角製の可能性も考えられるが不明である。全体的に被熱している。

SK1306 （第７・17 図） ⑩区ⅣS10・T6

XW層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈し、南東側に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状で、南側の一部で袋状を呈す。底面は平坦に近い形状である。埋土は複層である。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片と石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・イノシシの歯の破片が出土している。

出土遺物（第 17 図 65　　PL8）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

65 は、中期中葉の小形の壺の口縁部破片と思われる。

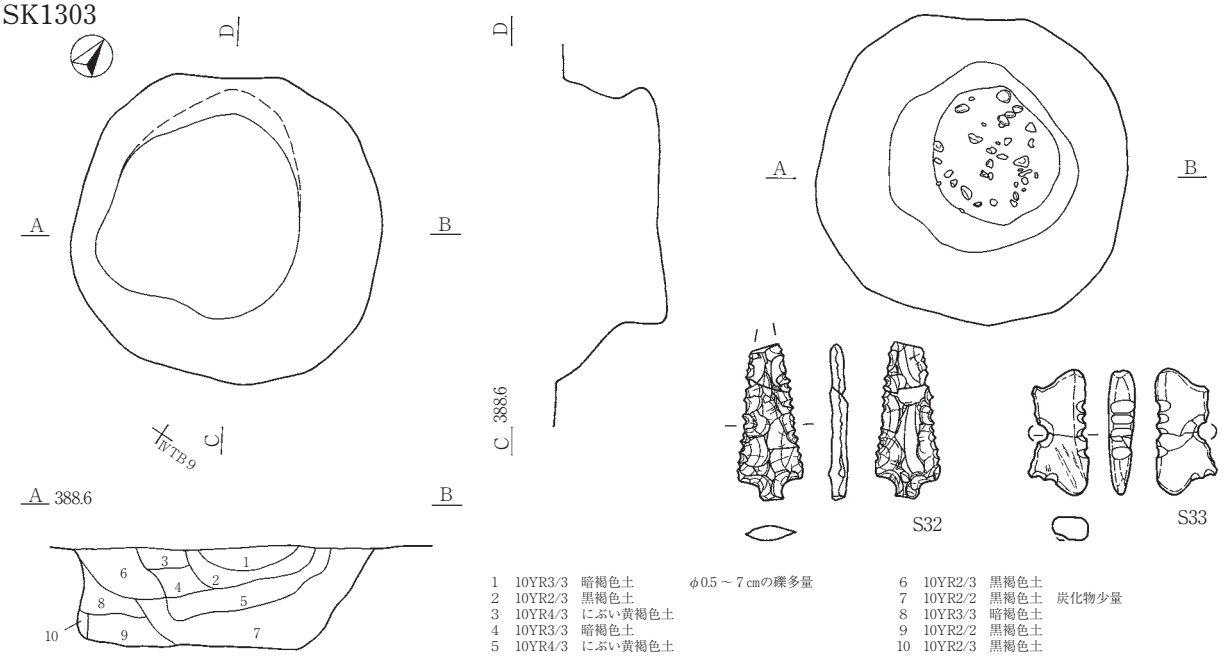
SK1307 （第７・18 図　　PL2・5） ⑩区ⅣT6

XW層上面で明瞭に検出した。SK1305 に切られる。平面形は円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層で人為的に埋め戻されたと思われる。墓と思われる土坑である。埋土の上層 1・中層 1・下層 3 の計 5 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、中層と下層からカルシウムの成分が顕著に認められた。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片やミニチュア土器・石器・管玉・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。埋土から出土した石鏃破片が SK1303 出土の石鏃に接合した（S32）。

出土遺物（第 18 図 66 ～ 68、S35　　PL1・8）

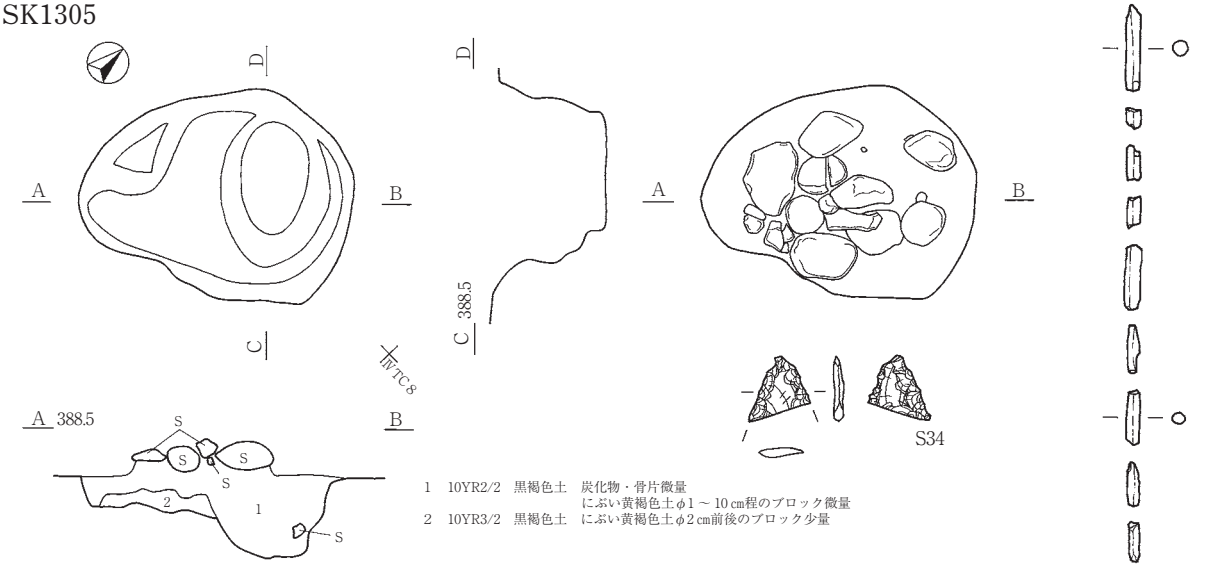
掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

SK1303



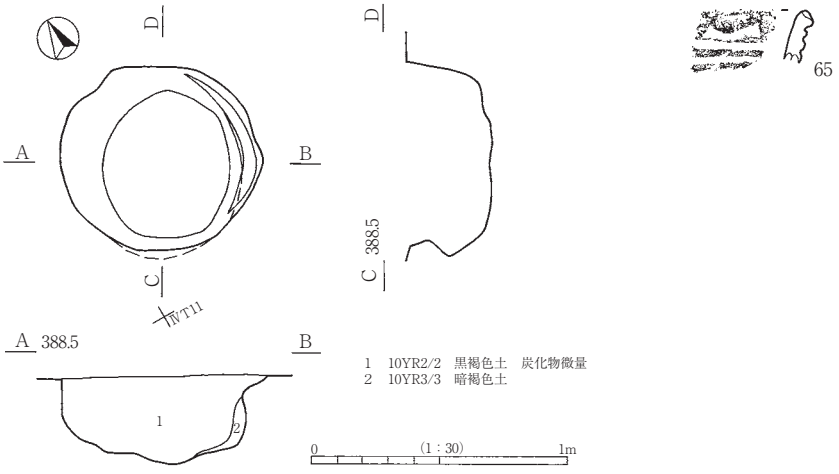
1　10YR3/3　暗褐色土　　φ0.5 ～ 7㎝の礫多量
2　10YR2/3　黒褐色土
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土
4　10YR3/3　暗褐色土
5　10YR4/3　にぶい黄褐色土
6　10YR2/3　黒褐色土
7　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
8　10YR3/3　暗褐色土
9　10YR2/2　黒褐色土
10　10YR2/3　黒褐色土

SK1305

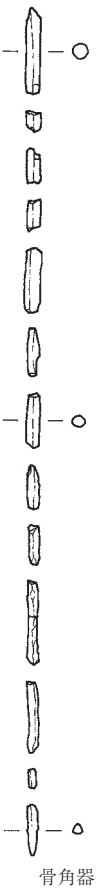


1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物・骨片微量
　　にぶい黄褐色土φ1 ～ 10㎝程のブロック微量
2　10YR3/2　黒褐色土　にぶい黄褐色土φ2㎝前後のブロック少量

SK1306



1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR3/3　暗褐色土


骨角器

0　(1：30)　1m
0　(1：1)　2㎝　(骨角器)
0　(1：3)　10㎝　(65、S33)
0　(2：3)　5㎝　(S32・34)

第 17 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 11

66 ～ 68 は、前期末の土器で、66 は甕の口縁部である。口縁は波状を呈し、頂部には突起が設けられている。67・68 は、条痕文系の壺である。67 は底部破片で、底面に布目痕が残る。68 は、頸部から胴部にかけての破片である。頸部に縦方向の、胴部に斜方向の条痕文を施し、その間に無文帯を設けている。無文帯の上下、条痕文との境に押圧を施した突帯が巡り、4 単位と思われる縦位の突帯により連結する。

S35 はメノウ製の細形管玉、半欠品。

SK1309 （第 7・18 図） ⑩区ⅣT6

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈し、北東側の一部を除く開口部に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状で、東側の一部で袋状に近い形状を呈する。底面は平坦である。埋土は複層である。上層（1 層）と底部付近に径５～ 40㎝程の礫がやや多く混入している。上層（1 層）は堆積状況から、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。1 ～ 3 層の埋土をそれぞれ 1 ～ 3 箇所と、小形甕（69）内埋土の計 7 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や土製品・石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。水洗して採取したオニグルミの炭化核の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 403 ～ 354 年で、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 18 図 69・70、S36　　PL8・16・17）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

69 は、中期中葉の小形の甕でほぼ完形である。口縁部と胴部には、棒状工具によると思われる条痕文が施され、頸部には無文帯を設けている。70 は、土製の匙である。いずれも底面付近からの出土である。

S36 は、凝灰質砂岩材の大形剝片。

SK1313 （第 7・19 図） ⑩区ⅣS5

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈し、南側に浅い部分をもつ。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は単層である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 19 図 71　　PL8）

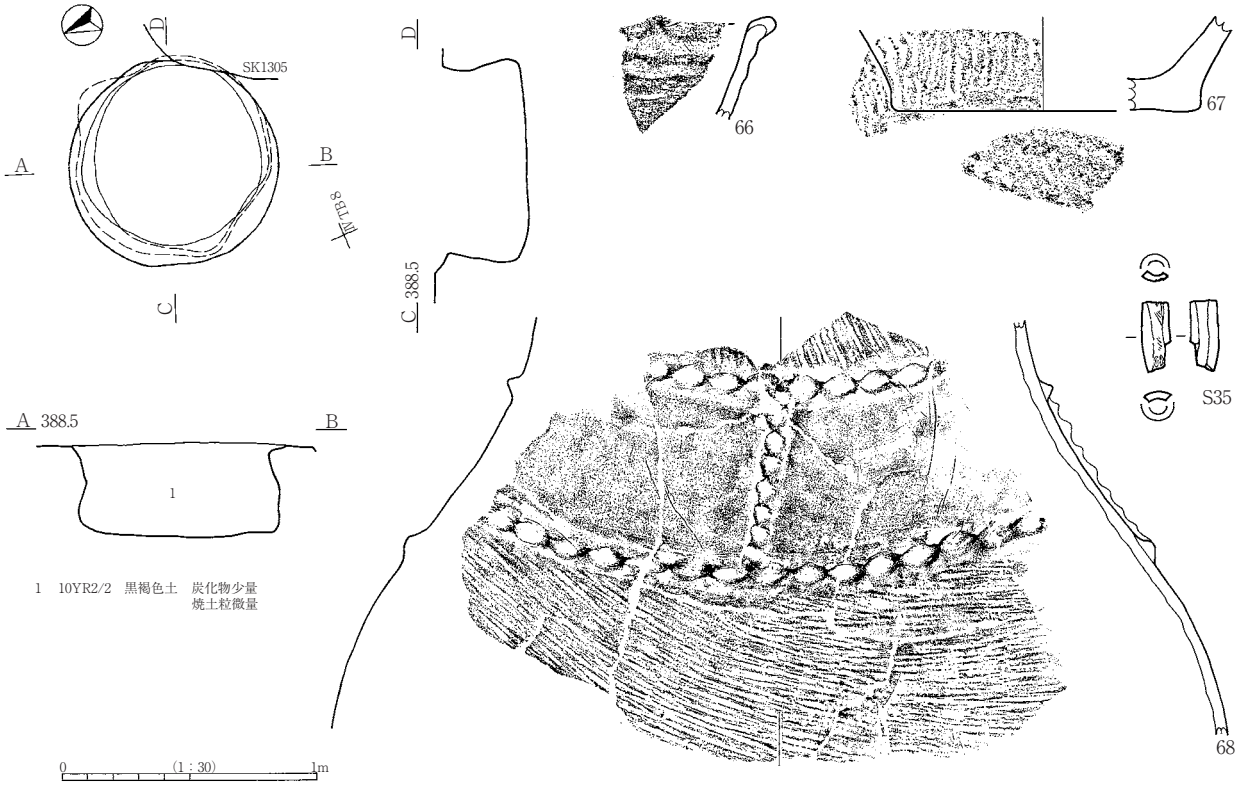
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

71 は、前期末在地系の無文の甕である。

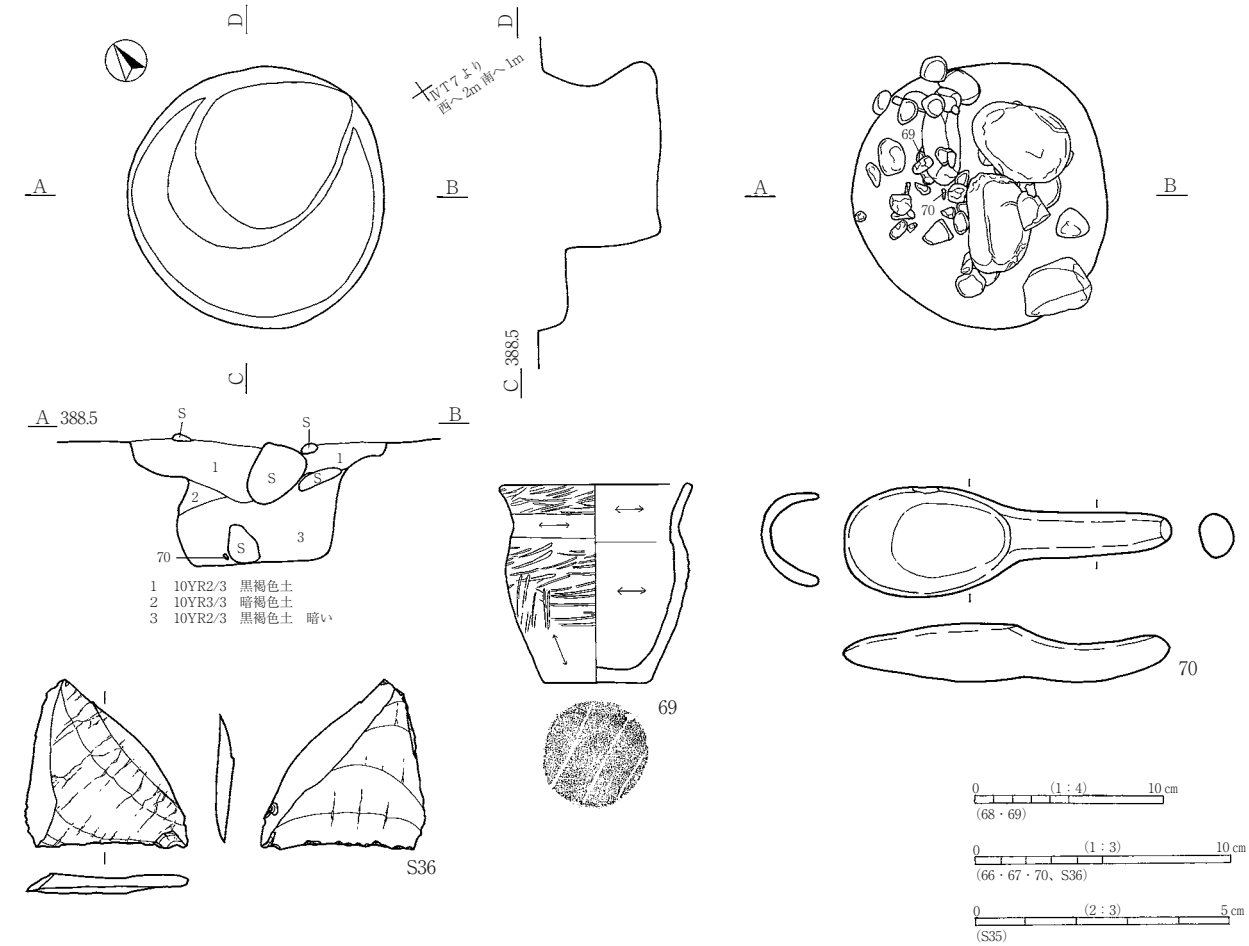
SK1314 （第 7・19 図　　PL5） ⑩区ⅣT11

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。SK1593 を切る。平面形は楕円形を呈し、開口部に浅い部分が一周する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、上層（2 層）には径５～ 20㎝の礫が多量に混入している。礫層である 2 層や、Ⅻ層由来の中層（3・4 層）の堆積状況は、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。1・2・5 層の埋土をそれぞれ２～４箇所、計８箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、中央付近の 1 層下層からリン酸・カルシウムの成分が顕著に認められ、生物遺体が存在していた可能性が高いことが分かった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・イノシシの下大臼歯の破片が出土している。

SK1307

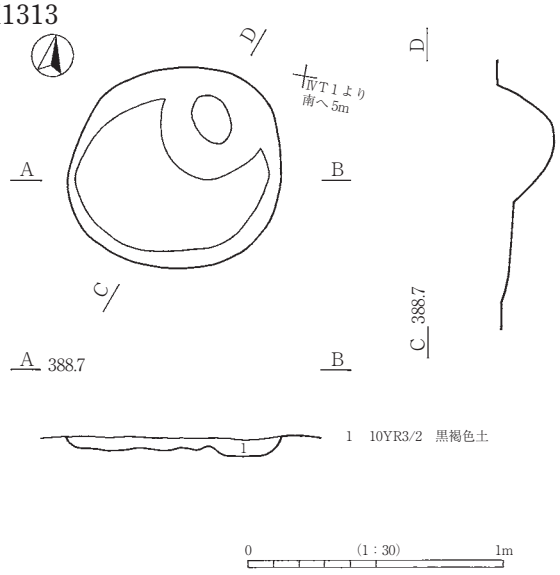


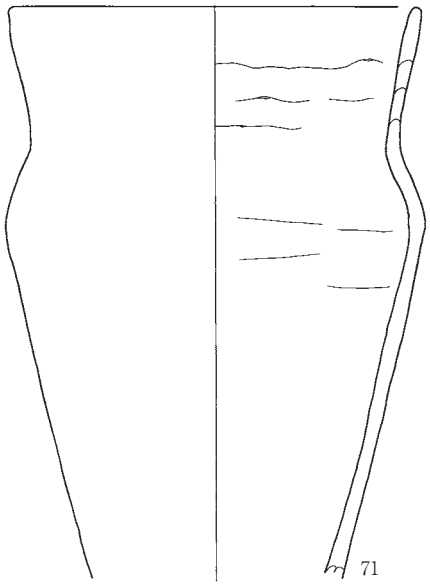
SK1309



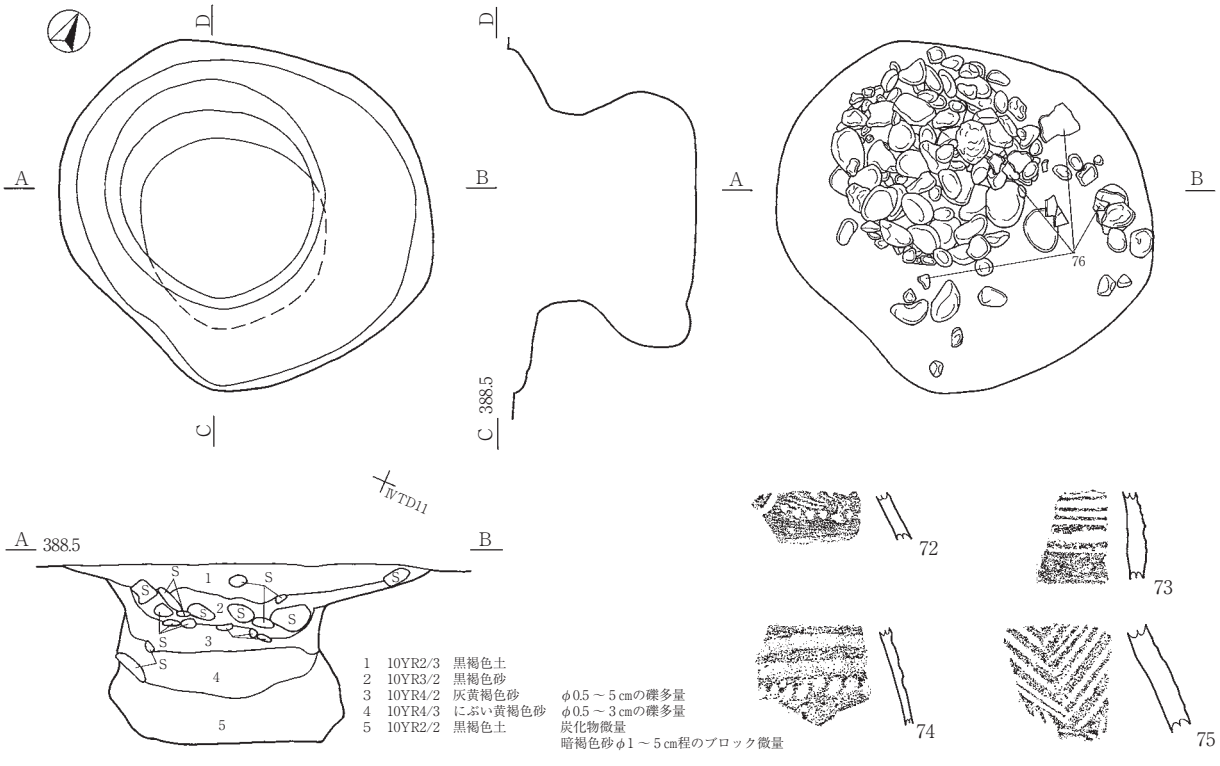
第 18 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 12

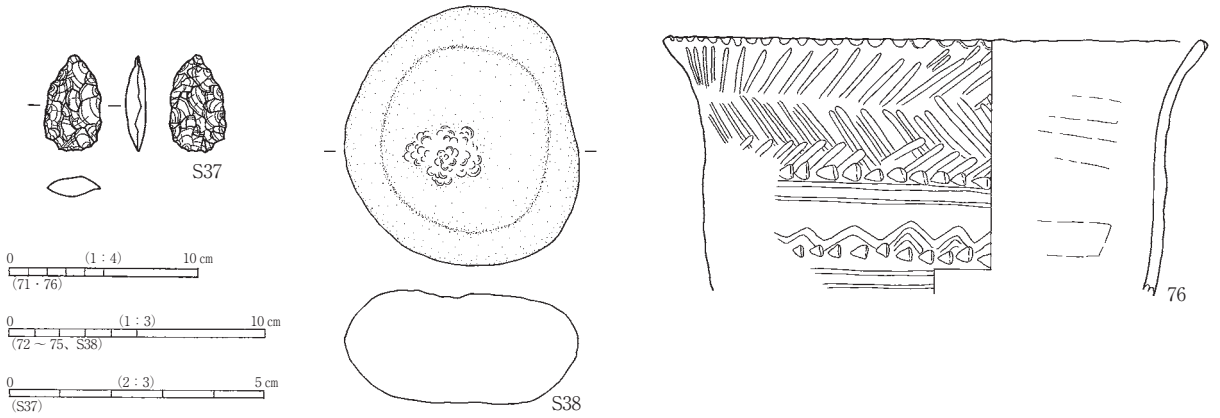
SK1313





SK1314





第 19 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 13

出土遺物（第 19 図 72 ～ 76、S37・S38　　PL8・18・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

72 ～ 76 は、中期中葉の土器で、72 ～ 75 は、壺の胴部破片である。76 は甕の口縁部から胴部上半の破片である。76 は、口唇部に刻みを施し、口縁部には横位の羽状文、胴部には刺突と 2 条の平行する沈線を巡らし、その間に鋸歯状の沈線文が施される。

S37 は、黒曜石材の石鏃。円基鏃のような形状であるが、有茎式の未完成品の可能性が高い。S38 は、安山岩材の凹石。表面にアバタ状の凹部があり、先端部には敲打痕がある。

SK1315 （第 7・20 図）　⑩区ⅣT11

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。北東側の一部を除く開口部に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状で西側の一部で袋状に近い形状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況から、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。

出土遺物（第 20 図 77 ～ 82、S39・S40　　PL8・17）

掲載した遺物は、77 ～ 78 は埋土中からの出土である。82 は、SK1320 埋土からの出土であるが、81 と同一固体と思われるため、この項に掲載した。

77 ～ 79 は、前期末の土器である。77 は小形の無文の壺の口縁部破片で、口縁に 4 単位と思われる突起をもつ。78 は条痕文系の壺の口縁部で、口縁下に突帯が巡る。79 は、在地系無文の甕の口縁部である。口縁は波状を呈する。

80 ～ 82 は、中期中葉の壺である。80 は、条痕文系の壺の胴部下半の破片で、縦方向の細い条痕が施される。81・82 は小形の壺で、接点がないものの同一個体と思われる。胴上部には変形工字文が、胴下半部には縄文が施されている。

S39 は、凝灰質砂岩材の楔形石器か。剝片の両端に細かな挟み撃ちとみられる潰れが認められる。S40 は、石鏃の基部破片で、頭部と刃部を欠損している。

SK1372 （第 7・20 図）　⑩区ⅣT16

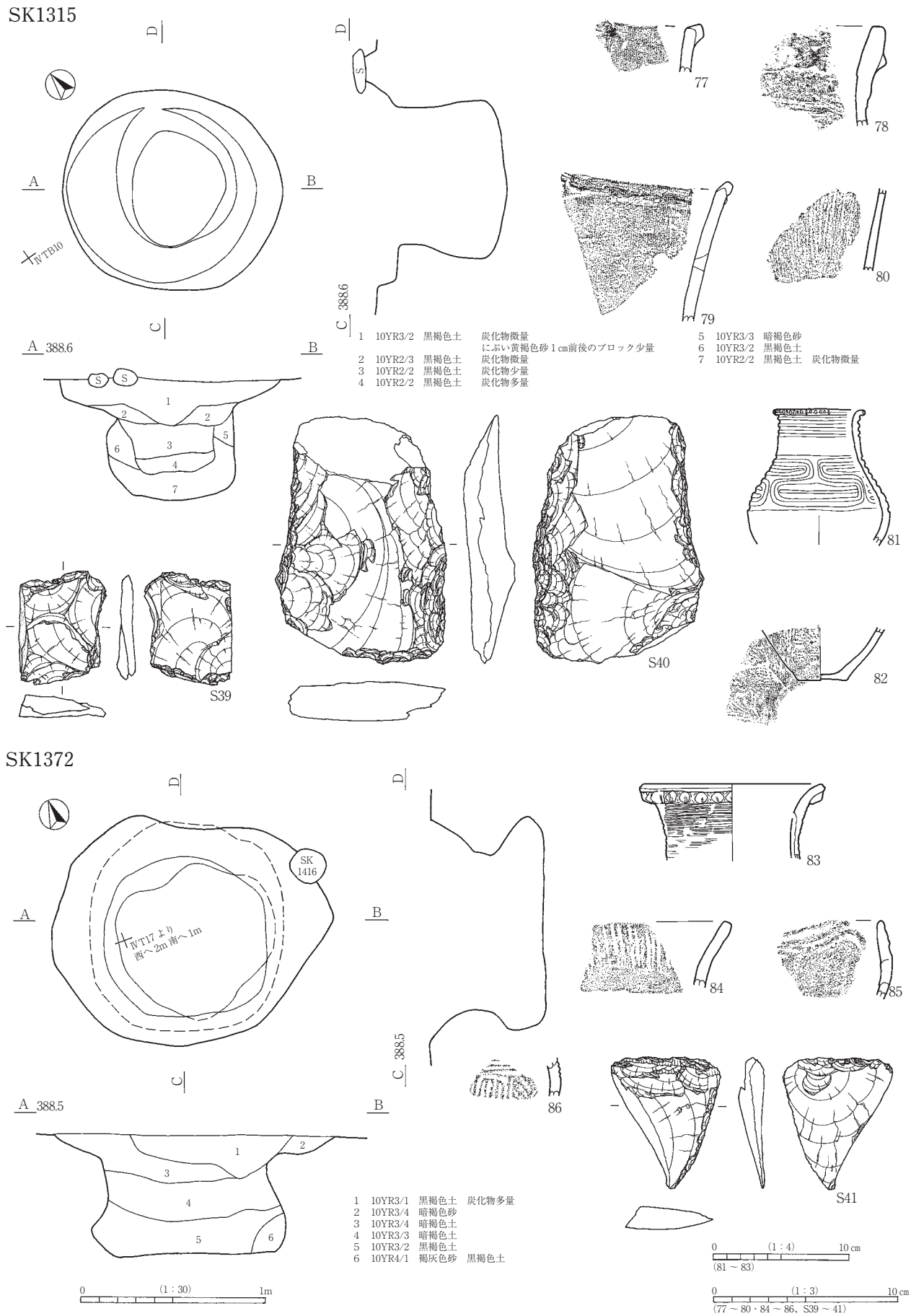
Ⅻ層上面で明瞭に検出した。SK1416 に切られる。切り合いは、掘り下げ途中で、土の差により判断した。平面形は楕円形を呈し、開口部に浅い部分が一周する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況は、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片と石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。

出土遺物（第 20 図 83 ～ 86、S41　　PL8・17）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

83 は、前期末条痕文系の壺の口縁部である。口縁下に突帯を巡らせ、頸部には、棒状工具により横方向の条痕が施されている。84 ～ 86 は中期中葉の土器で、84 は甕の口縁部で、縦方向の条痕文が施されている。85・86 は、小片であるためはっきりしないが、85 は無頸の壺の口縁部、86 は壺の胴部であると思われる。

S41 は、石鏃などの表皮剝落と考えられる縦長の剝片。



第 20 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 14

SK1384 （第７・21 図　　PL5） ⑩区ⅣT16

XW層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形はU字状で開口部が緩やかに立ち上がる形状で、西側の一部が袋状を呈する。底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況から、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。1 ～ 3 層の埋土をそれぞれ 2・3 箇所、計 8 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。1 層下層で土偶（88）が出土している。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片やミニチュア土器・石器・コナラ属の炭化子葉・微細な炭化物・シカ・イノシシの歯の破片が出土している。

出土遺物（第 21 図 87・88　　PL8・16）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

87 は、中期中葉の無文の甕の口縁部である。口縁は波状を呈し、頂部には押圧が施される。88 は、土偶の頭部の破片である。頭髪部分に隆帯を張り付け、耳にあたる部分には円孔が施される。

SK1387 （第７・21 図） ⑩区ⅣT16

XW層上面で検出した。SD145 を切る。切り合いは、はっきりしなかったが、わずかな土の差により検出面で判断したため、検討を要する。平面形は楕円形を呈する。断面形は東側が袋状を呈し、西側は垂直に近く立ち上がる。底面は平坦である。埋土は複層である。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。水洗して採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 769 ～ 506 年とかなり幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 21 図 89、S42　　PL8・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

89 は、前期末条痕文系壺の肩部破片である。

S42 は凹基有茎式鏃で、黒曜石材。

SK1391 （第７・22 図） ⑩区ⅣT11

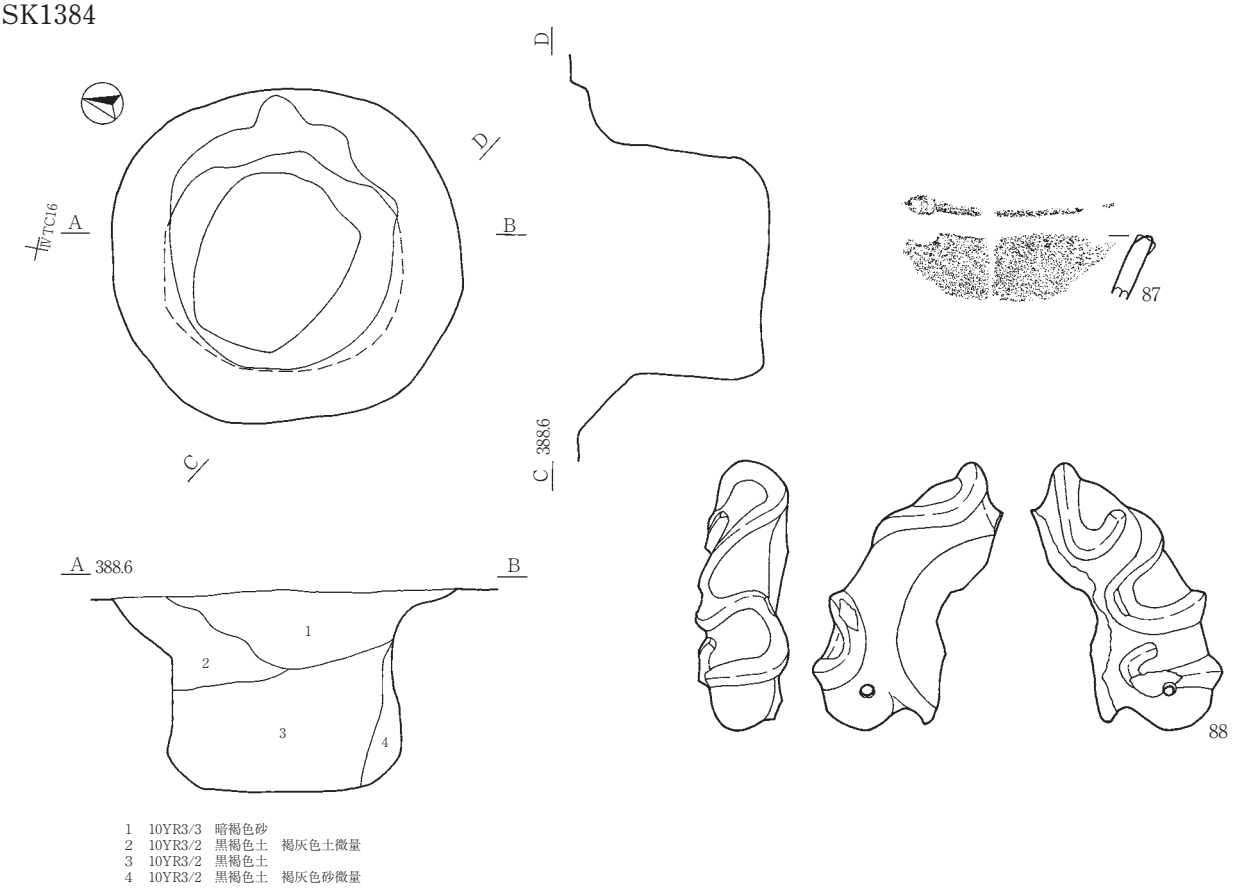
XW層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。墓と思われる土坑である。1 ～ 3 層の埋土をそれぞれ 1 ～ 4 箇所、計 6 箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行った結果、3 層下層中央付近からカルシウムの成分が顕著に認められた。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。

出土遺物（第 22 図 90　　PL8）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

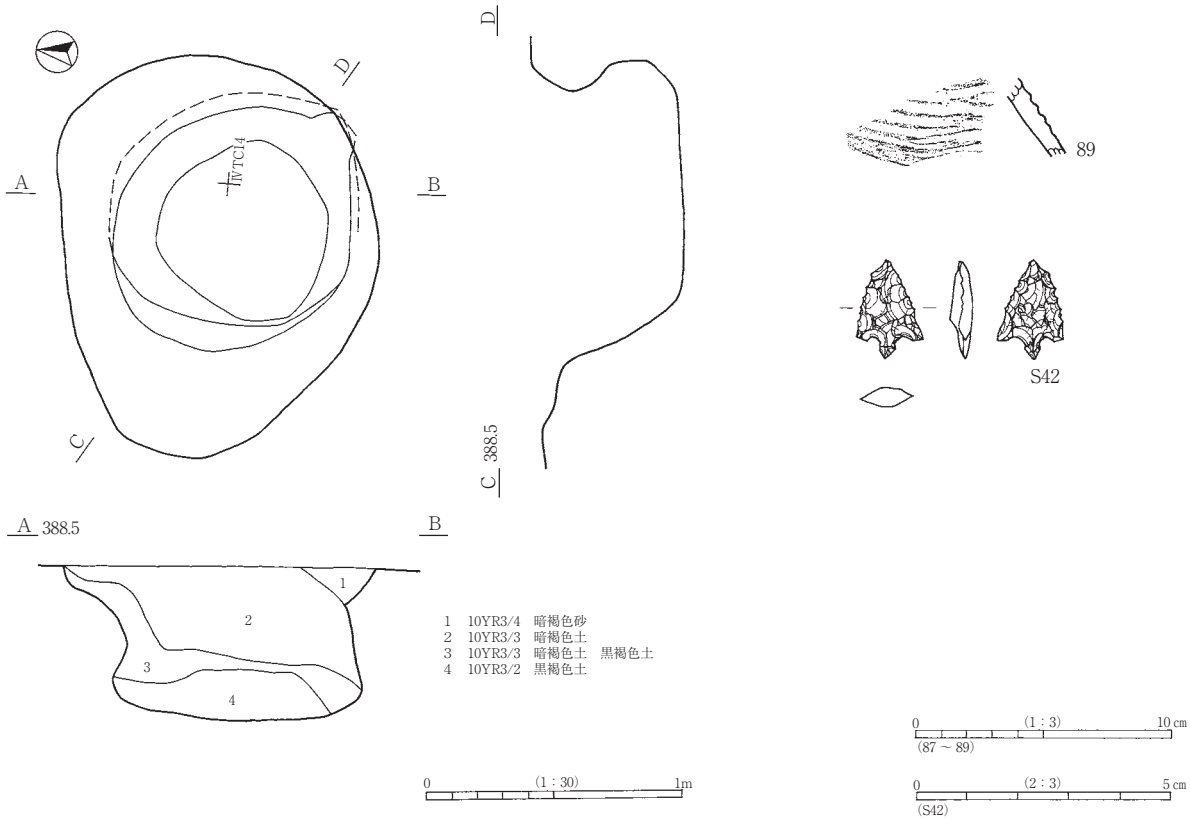
90 は、中期中葉無文の壺の口縁部で、口唇にキザミが施される。

SK1384



1　10YR3/3　暗褐色砂
2　10YR3/2　黒褐色土　褐灰色土微量
3　10YR3/2　黒褐色土
4　10YR3/2　黒褐色土　褐灰色砂微量

SK1387



1　10YR3/4　暗褐色砂
2　10YR3/3　暗褐色土
3　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色土
4　10YR3/2　黒褐色土

第 21 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 15

SK1392 （第７・22 図　　PL5） ⑩区ⅣT11

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈し、北側と南側の開口部に浅い部分をもつ。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況は、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。埋土から出土した石製品が SK1303 出土の石製品に接合した（S33）。

出土遺物（第 22 図 S43　　PL17）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S43 は黒色凝灰質頁岩材の刃器。刃部とみられる部分に細かな刃こぼれ状の剝離痕がある。

SK1393 （第７・22 図） ⑩区ⅣT16

XⅣ層上面で明瞭に検出した。SD23 に切られる。平面形は楕円形を呈し、北側の開口部に浅い部分をもつ。断面形は袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況は、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物がわずかに出土している。水洗して採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 770 ～ 503 年とかなり幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 22 図 91、S44　　PL8・17）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

91 は、中期中葉甕の口縁部である。口縁部に３条の沈線が巡る。

S44 は、打製石包丁状の刃器もしくは武器形石製品の未完成品か。両端部を欠損しており、全体形が不明なため器種の認定が難しい。厚さが 0.8cm 程度で、表裏面に平坦剝離が施されている点から、打製石鏃とは考えられない。また現存する両端部が鋭利に作出されていることから、武器形石製品の可能性もある。

SK1399 （第７・23 図） ⑩区ⅣS15

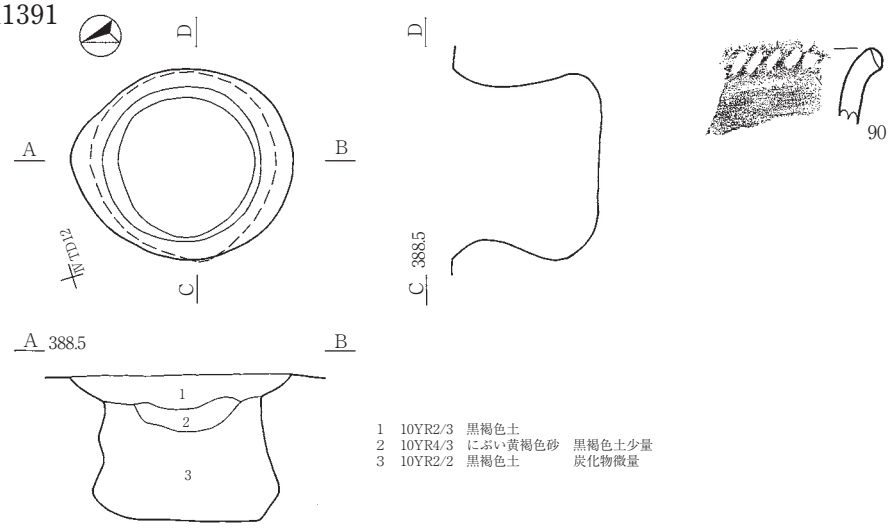
XⅣ層上面で明瞭に検出した。SD145 に切られる。西側は調査区外となるが、平面形は円形を呈すると思われる。断面形は U 字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況から掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。

出土遺物（第 23 図 92　　PL9）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

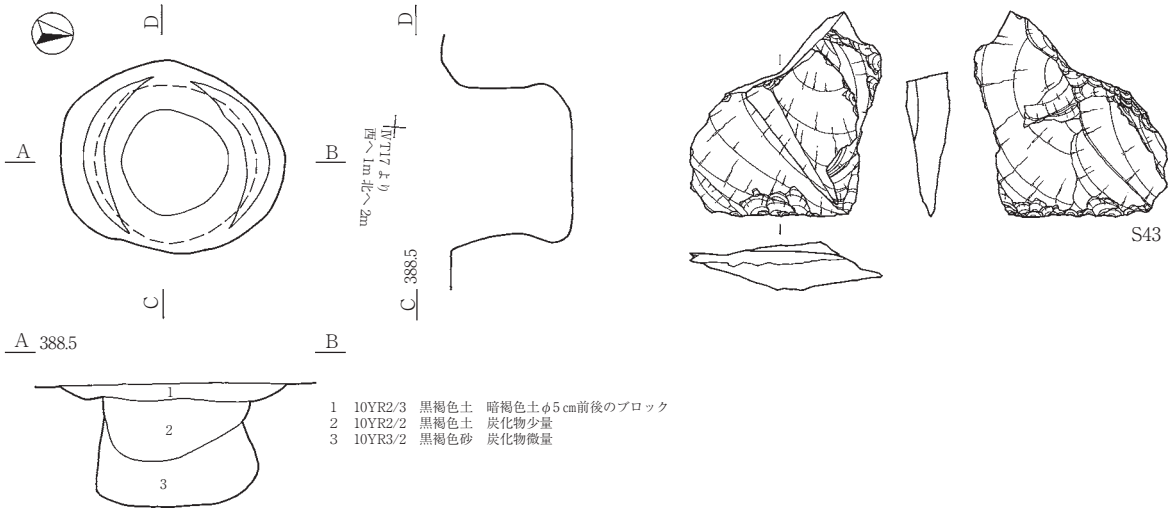
92 は、中期中葉壺の底部と思われる。胴部に浅く太い沈線を巡らせ、外面は赤彩されている。

SK1391



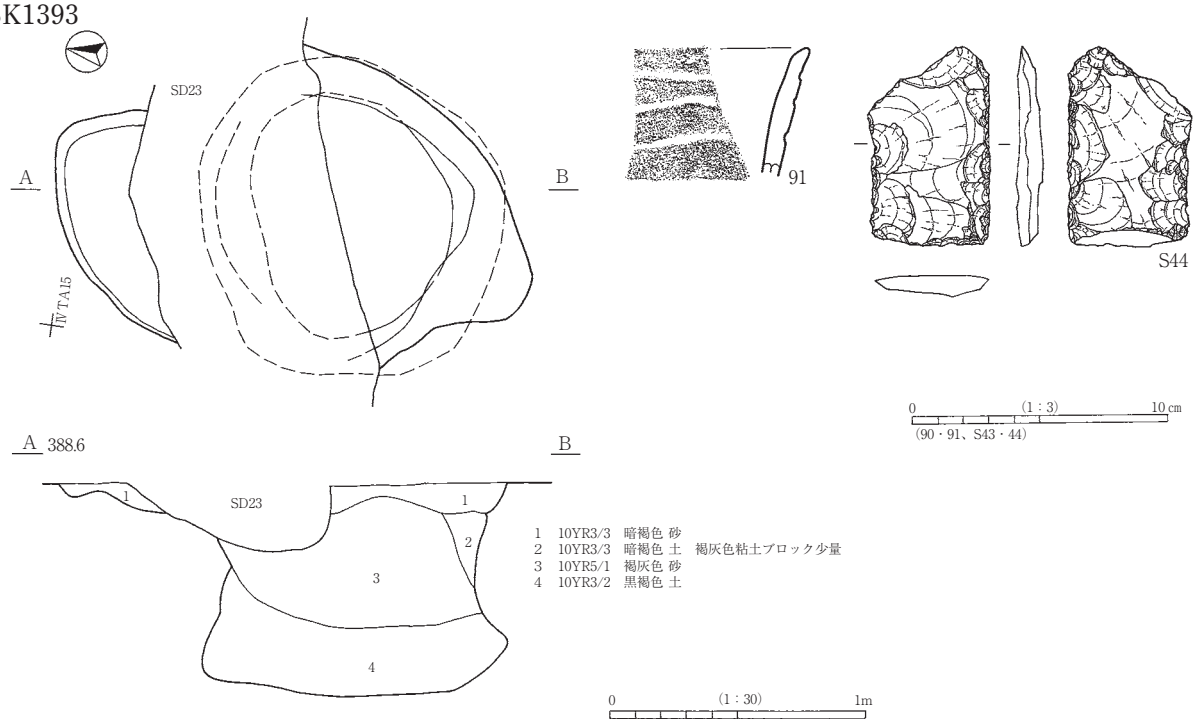
1　10YR2/3　黒褐色土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色砂　黒褐色土少量
3　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量

SK1392



1　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土φ5㎝前後のブロック
2　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
3　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物微量

SK1393



1　10YR3/3　暗褐色 砂
2　10YR3/3　暗褐色 土　褐灰色粘土ブロック少量
3　10YR5/1　褐灰色 砂
4　10YR3/2　黒褐色 土

第 22 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 16

SK1404 （第７・23 図　　PL2・5） ⑩区Ⅳ T6

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。SK1458 を切る。平面形は楕円形を呈し、北西側の開口部に浅い部分をもつ。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で、埋土の堆積状況から、土坑内部の遺骸等の腐敗により、本来水平に堆積していたものが落ち込んだと考えられる。また、底部で確認された径５～ 30㎝の礫は、中央部分に長方形の空白があり、木棺等の施設が埋納されていた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。１～４層の埋土をそれぞれ１～３箇所、計９箇所サンプリングしてリン酸・カルシウム分析を行ったが、生物遺体の存在を示すような結果は得られなかった。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片と石器・玉・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。

出土遺物（第 23 図 93、S45・S46　　PL1・9・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

93 は、前期末条痕文系の甕である。口唇部が欠損していてはっきりしないが、波状を呈すると思われる。口縁部に３条の横位の沈線が巡らされており、頸部には、無文帯が設けられる。胴部には、斜方向の粗い条痕が施される。

S45 は凝灰質砂岩の横長剝片。S46 は碧玉製の臼玉。1.2cm × 0.7cm × 0.4cm、0.9g。

SK1405 （第７・24 図） ⑩区Ⅳ T16・21

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は袋状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は複層である。埋土の堆積状況から、掘り返しが行われた可能性が考えられる。墓と思われる土坑である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・炭化米・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片・赤色顔料が出土している。水洗して３層から採取した炭化米の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 1134 ～ 977 年と他の遺構の測定値よりかなり古い年代となった、この年代をそのまま本遺構の埋没年とすることはできないが、測定した他の遺構よりも古い時期に相当する遺構であると推定できよう。

出土遺物（第 24 図 94 ～ 98、S47　　PL9・18）

掲載した遺物は、94 ～ 97、S47 は埋土中からの出土である。98 は、検出面からの出土であるが、97 と同一個体と思われるため、本項に掲載した。

95・97・98 は、前期末の土器片で、95 は、無文の鉢の口縁部である。97・98 は遠賀川系の壺の頸部から肩部の破片で、頸部と肩部に沈線を巡らす。94・96 は、中期中葉の土器片で、94 は条痕文系の壺の口縁部で、口唇に押引文が施され、口縁下に突帯が巡らされる。96 は、無文の甕の破片である。

S47 は黒曜石材の凹基有茎鏃。

SK1412 （第７・24 図） ⑩区Ⅳ T6

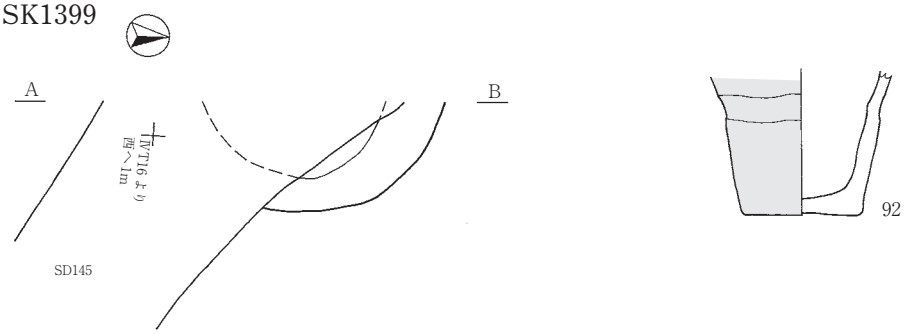
Ⅻ層上面で明瞭に検出した。SK1591 を切る。平面形は楕円形を呈する。断面形は緩やかなＵ字状を呈し、底面は凸凹である。埋土は単層である。埋土はすべて水洗して遺物を採取した。埋土中より土器片や石器・オニグルミの炭化核・微細な炭化物・骨細片が出土している。

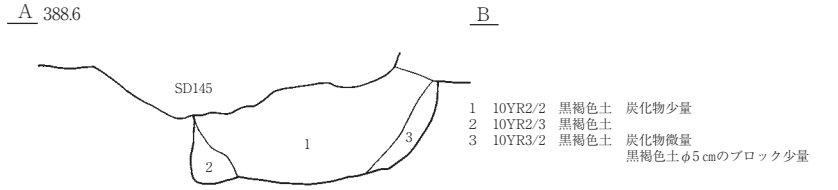
出土遺物（第 24 図 S48　　PL18）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

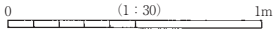
S48 は黒曜石材の楔形石器。長さ 3.2cm で 9.61g が測られる。

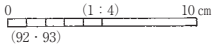
SK1399

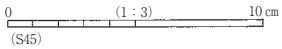


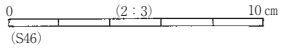


1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
2　10YR2/3　黒褐色土
3　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量
　　黒褐色土φ5㎝のブロック少量

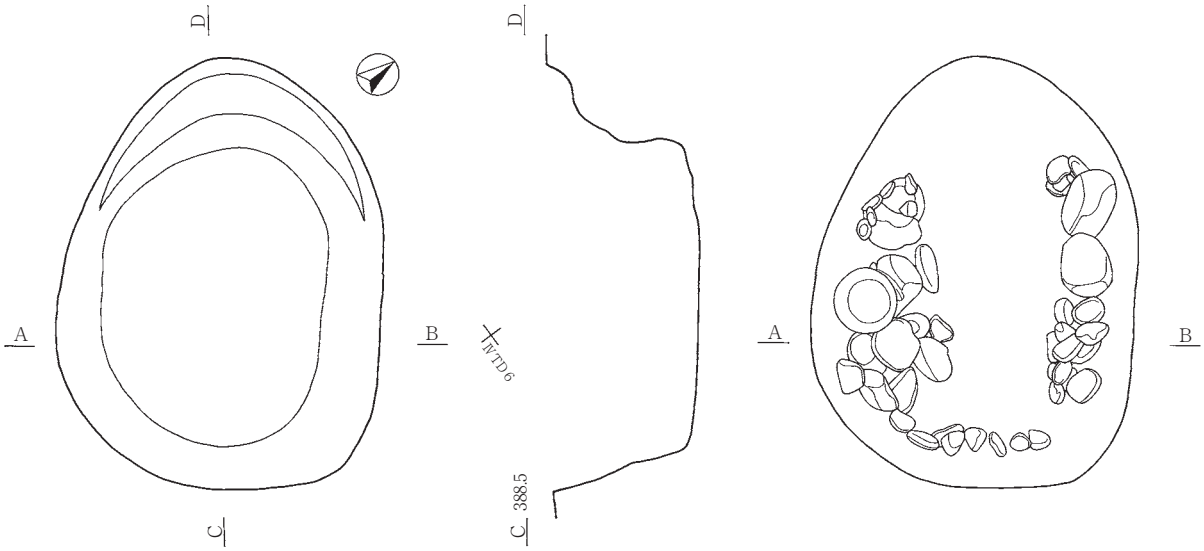


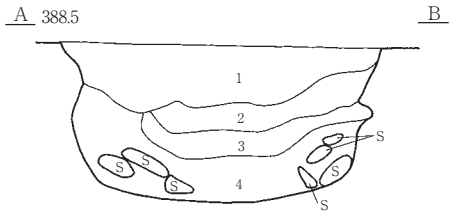




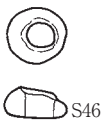


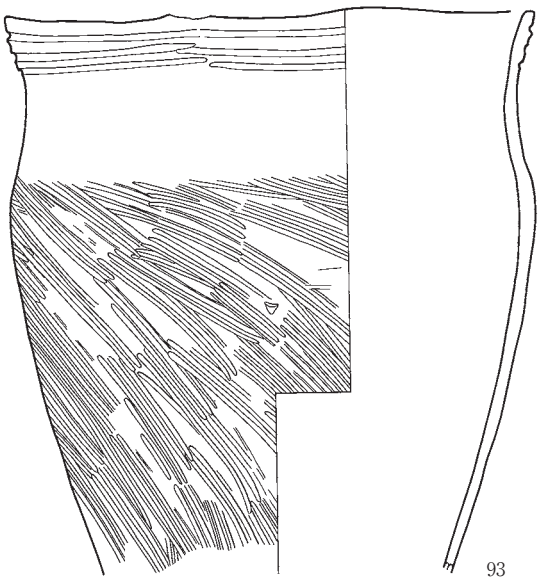
SK1404





1　10YR3/3　暗褐色土
2　10YR3/2　黒褐色土
3　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
4　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量





第 23 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 17

SK1425 （第７・24 図） ⑩区ⅣT11・12

XW層上面で明瞭に検出した。遺構検出面より約 10㎝上面で、SF3 を検出しており、SK1425 埋没時あるいは、それ以降に火焚き行為が行われたと思われる。遺構は、調査区を東西に分けて調査したその境に位置し、東側の部分は平面の形状を確認した後検出面から 10㎝程の所までしか調査できなかったので、西側の形状から推定した。平面形は円形を呈し、南側の開口部に浅い部分をもつ。断面形は U 字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。墓と思われる土坑である。埋土中より土器片と石器がわずかに出土している。

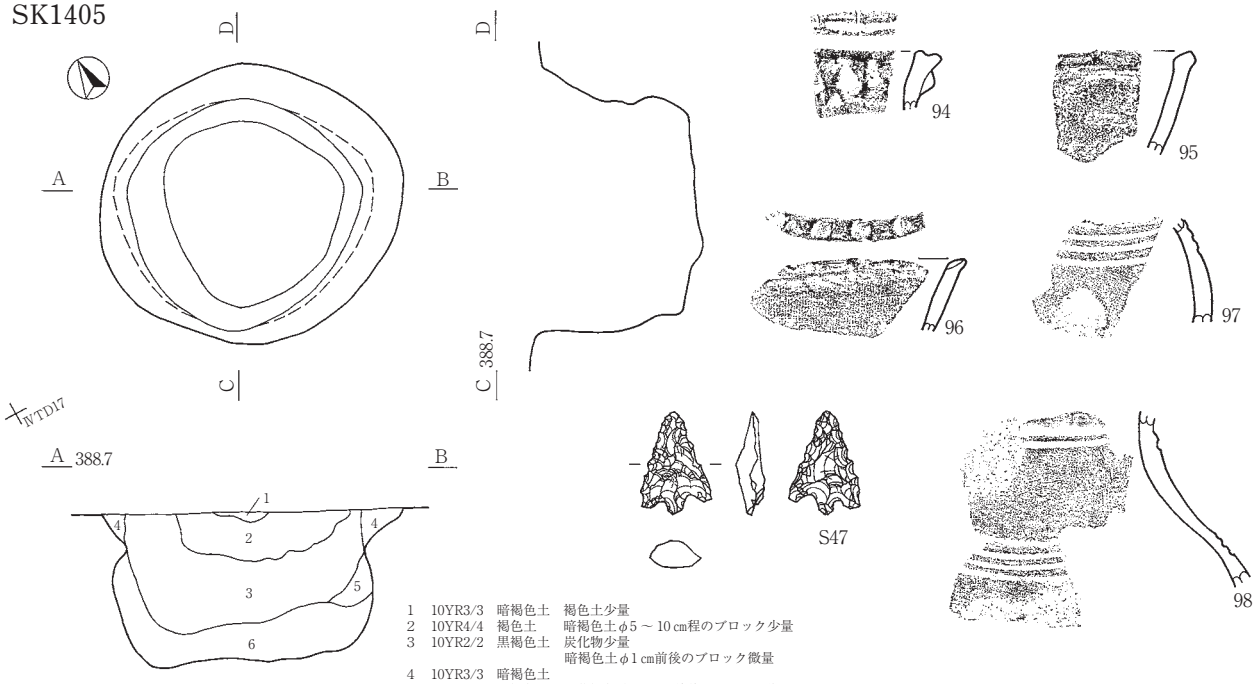
出土遺物（第 24 図 99、S49　　PL9・19）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

99 は、前期末条痕文系の壺の胴部破片である。

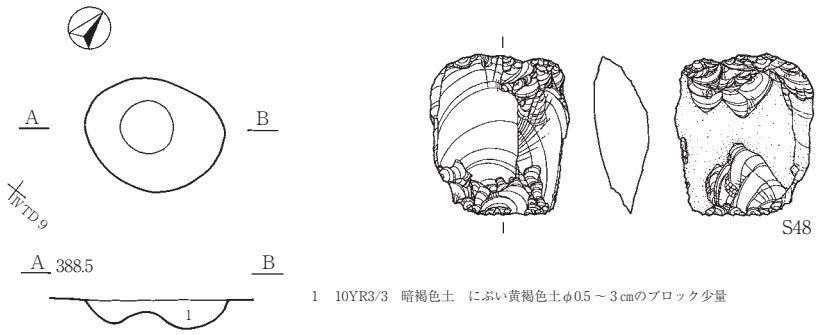
S49 は閃緑岩材の太型蛤刃石斧。刃部を欠損している。

SK1405



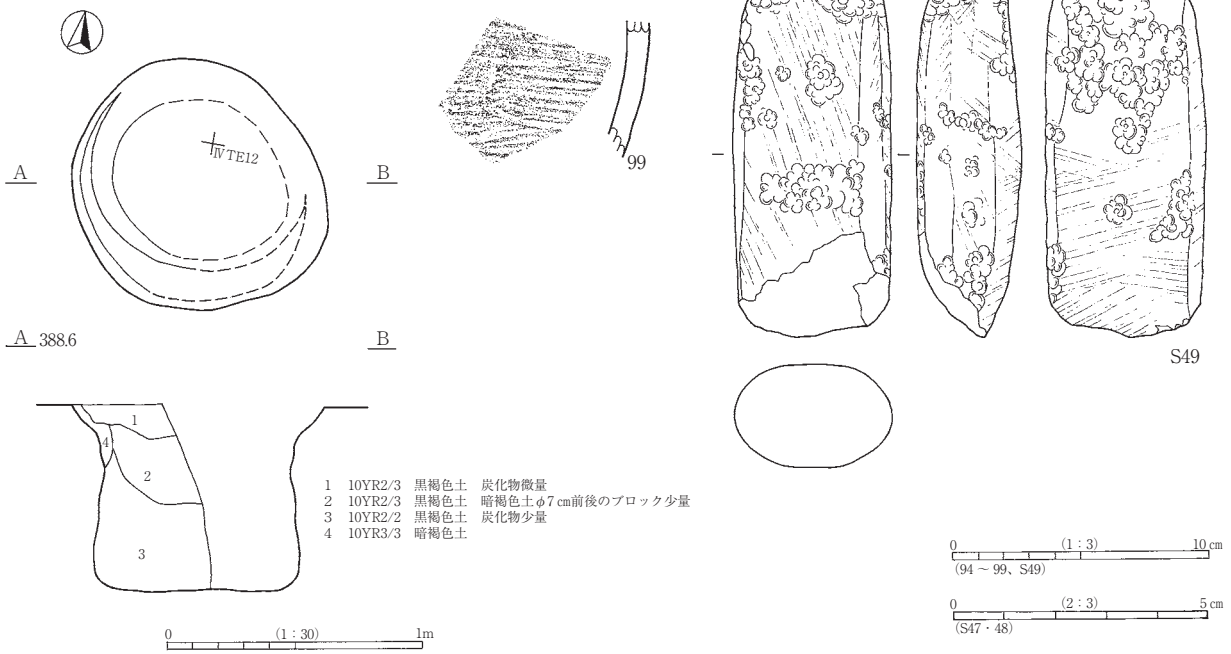
1　10YR3/3　暗褐色土　褐色土少量
2　10YR4/4　褐色土　暗褐色土φ5 ～ 10㎝程のブロック少量
3　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　暗褐色土φ1㎝前後のブロック微量
4　10YR3/3　暗褐色土
5　10YR2/3　黒褐色土　灰黄褐色砂φ10㎝前後のブロック微量
6　10YR2/3　黒褐色砂

SK1412



1　10YR3/3　暗褐色土　にぶい黄褐色土φ0.5 ～ 3㎝のブロック少量

SK1425



1　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土φ7㎝前後のブロック少量
3　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
4　10YR3/3　暗褐色土

0　(1：30)　1m
0　(1：3)　10㎝
(94 ～ 99、S49)
0　(2：3)　5㎝
(S47・48)

第 24 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 18

４　遺物集中

⑩・⑬区で検出されたSXあるいはSHとした遺物及び礫の集中地区および不整形の自然な落ち込みをこの項で扱う。

SX2（第６図）　⑩区ⅣY17・18

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は不整形を呈する。深さは15cm前後で底面は凸凹である。自然な地形の窪みに包含層が落ち込んだものと思われる。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第25図100、S50～S52　　PL9・17・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

100は、前期末無文の甕の口縁部である。口唇にはキザミが施され、口縁には沈線を巡らす。

S50は凝灰岩材の横長剝片。S51は刃器。刃辺に連続した細かな剝離痕がある。S52は石鏃。全体形を長方形状に整えた資料と考えられるが、基部及び刃部の一部を欠損している。

SX3（第６図）　⑩区ⅣY6・7・11・12

XⅣ層上面で明瞭に検出した。平面形は不整形を呈する。深さは15cm前後で底面は凸凹である。自然な地形の落ち込みに包含層が落ち込んだものと思われる。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第25図101～108、S53～S55　　PL9・17・18）

掲載した遺物は、いずれも埋土中からの出土である。

106・107は、前期末の壺である。106は、遠賀川系の壺で頸部に４条の沈線を巡らす。107は、頸部に押圧された突帯を巡らす。101～105・108は、中期中葉の土器である。101は、条痕文系の甕の口縁部と思われる。102は、縄文が地文となる壺の胴部破片である。103は、無頸壺の胴部破片である。小片であるためはっきりしないが、沈線による変形工字文が施されていると思われる。104は、条痕文系壺の胴部である。上部の肩部に近い部位は斜方向の、胴部には横方向の条痕が施されている。105は壺の胴部破片で、重楕円や重四角沈線文が施されている。108は、条痕文系甕の底部である。胴部には斜方向の粗い条痕が施され、底部には布目圧痕が残る。

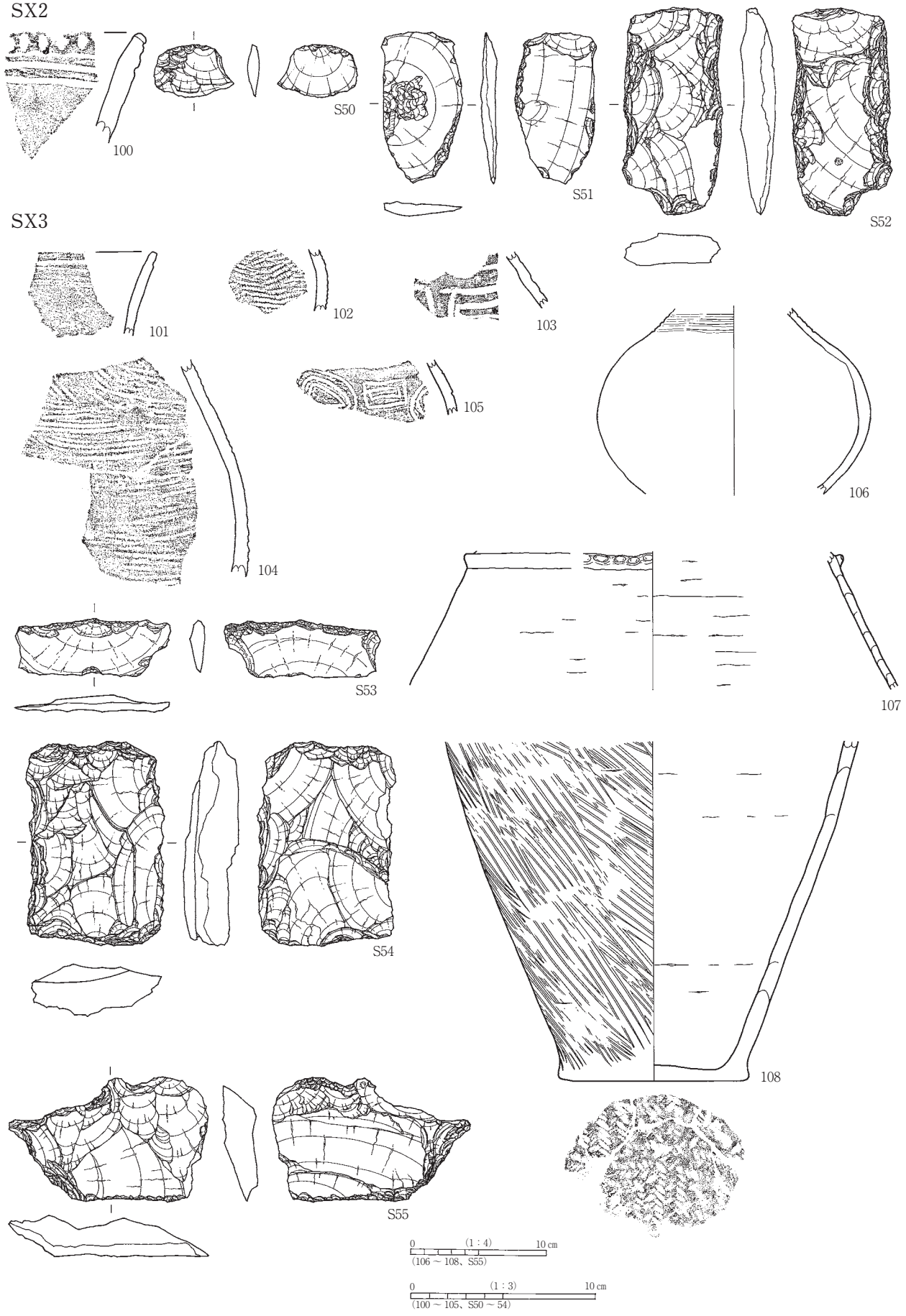
S53は横刃形の刃器。両端部を欠損するが、頭部をていねいな剝離加工で作出し、剝片の鋭い端辺を刃部としている。S54は凝灰質砂岩材の石核。本来は石鏃であったと考えられるが、欠損した基部を挟み撃ちあるいは直接打撃により剝片を剝取している。S55は刃器。凝灰岩材の横長剝片を素材とし、剝片の端辺を刃部とする。

SX16（第７図　PL3）　⑩区ⅣT11

XⅢ層中で検出した遺物の集中である。掘り込みは確認できなかった。遺物の広がりは、墓と思われる土坑が集中する位置にあり、SK埋没時に葬送の儀礼などが行われた場である可能性も考えられる。土器片や石器・獣骨（シカあるいはカモシカの歯）が出土している。

出土遺物（第26・27図109～121、S56　　PL9・10・18）

掲載した遺物は、すべて中期中葉の土器である。109～113は長頸壺である。109は胴部破片で、条痕文を地文とし、沈線や刺突で文様を描いている。110・111は、同一個体と思われる。110は肩部破片で、縄文を地文とし幅広の工具により、刺突と沈線を交互に巡らし、その下位に三角形の文様を描いて



第 25 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 19

いる。111 は胴部破片で、上位は縄文、下位は横方向の条痕文を地文とし幅広の工具による沈線で、円形や三角形の文様を描く。内面にはハケ調整が残る。112 は、頸部から胴部にかけての破片である。頸部には縄文が充填され、肩部には沈線を巡らし、下位には沈線による三角形の文様が横方向に連繋する。113 は肩部破片で、縄文を地文とし棒状工具により、沈線や三角形の文様を描いている。114 ～ 121 は、甕である。114 は、口唇にキザミが施され、口縁部には縦方向の条痕文、頸部には横方向の条痕文が施されている。115・116・118 は、共に横羽状文が施され、115 の口唇には縄文を施文したのちに押圧が、116 には刺突が、118 にはキザミがそれぞれ施される。また、118 には胴部に刺突が巡らされている。117 は、胴部破片で、上位には斜め方向の、下方には横方向の粗い条痕が施される。119 は、口縁の外側にはキザミが、内側には縄文が施され、胴部上位には縦方向の条痕が中位には斜め方向の条痕が施される。また、胴部には刺突が巡らされている。120・121 は、縦羽状文が施されている。120 は、口唇に縄文が施され、口縁部と胴部に押圧文が巡る。121 は、口縁の外側にキザミが、内側には縄文が施されている。

S56 は、微細な剝離痕のある黒曜石材の石屑。

SX23・24（第 6 図）　⑬区Ⅶ D18・23

Ⅻ層中で検出した。不整形に広がる焼土や炭化物の広がりを SX23・24 とした。掘り込みは確認できなかった。検出面では、焼土や炭化物の集中が二つに分かれているようだったので、遺構名を二つ付したが、同一の遺構と思われる。土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 27 図 122　　PL10）

122 は、中期中葉の壺の肩部破片である。肩部に緩やかな波状を描く沈線を巡らし、その沈線より上位には、そのカーブに合わせるような横方向の条痕が施され、下位には同じ工具により、横方向の粗い条痕が施される。外面は、全体的にミガキが施されているようであるが、表面が磨滅しておりはっきりしない。

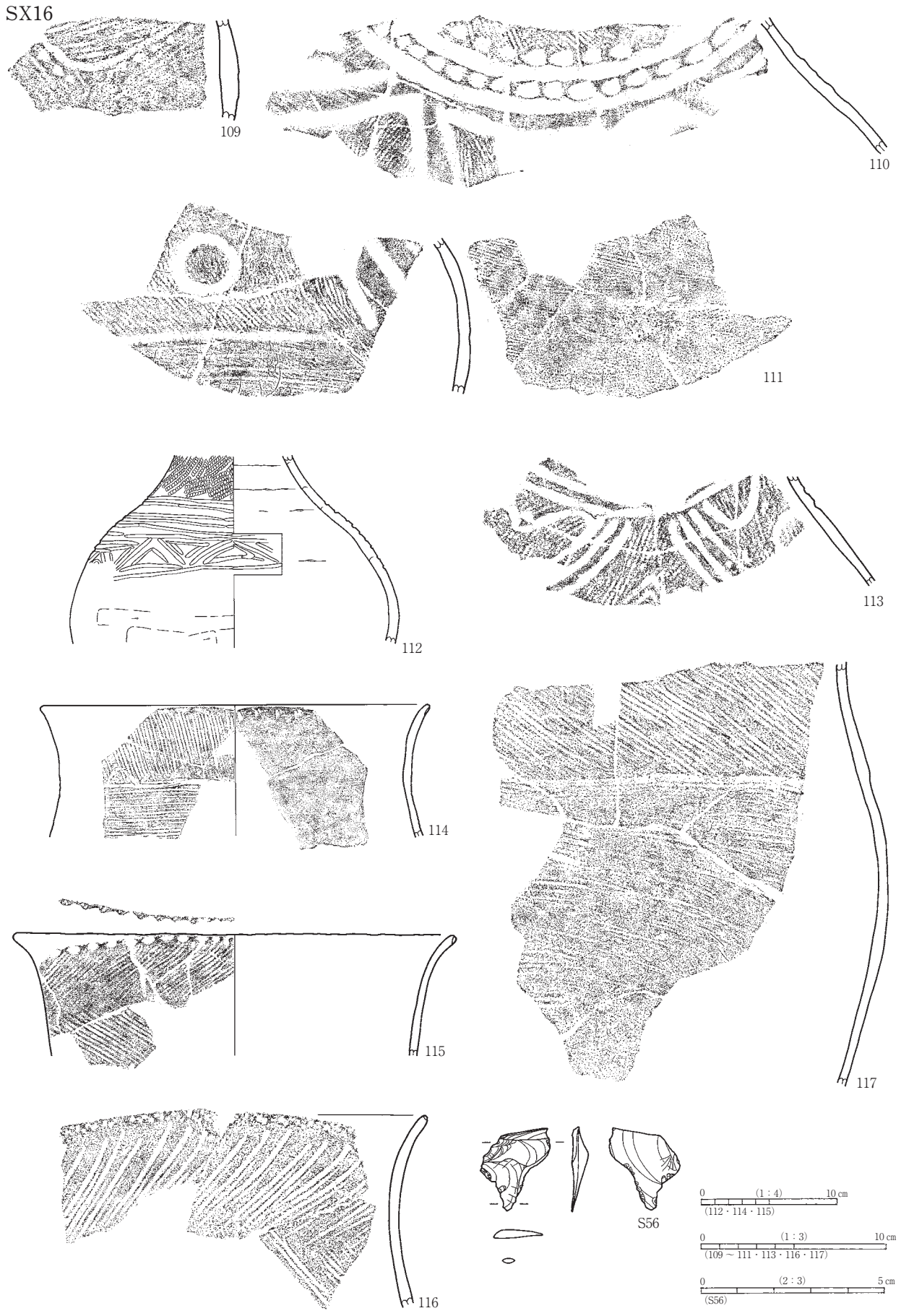
SH3（第 7 図）　⑩区Ⅳ T12

Ⅻ層上面検出した。礫の集中をとらえて遺構としたが、周囲の状況などから礫の集中は自然の堆積と思われる。掘り込みは確認されなかった。土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 27 図 123・124、S57・S58　　PL10・17・18）

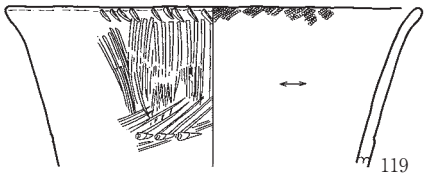
123 は、前期末の浅鉢である。口縁部が外傾し、肩が張る器形である。沈線により変形工字文が施される。SK250 の上層と SK1384 から出土した小破片が接合している。124 は、中期中葉の長頸壺である。口縁部と頸部と胴部に横方向の条痕を施し、それ以外の部位を縦方向の条痕で充填している。

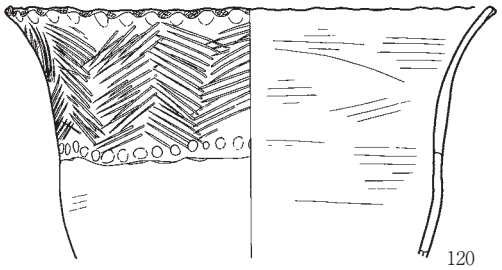
S57 は凝灰岩材の刃器。刃部には細かな刃潰れが観察できる。S58 は凝灰質砂岩材の石鍬。S58 は基部破片と考えられるが、器種の大部分を欠損しており、認定は少し難しい。

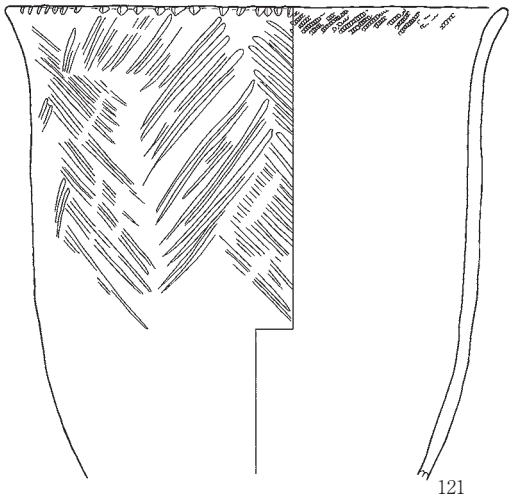


第 26 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 20

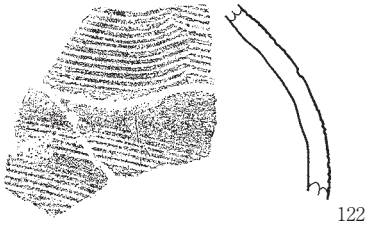
SX16

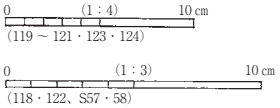




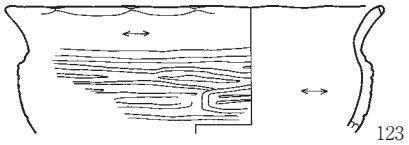


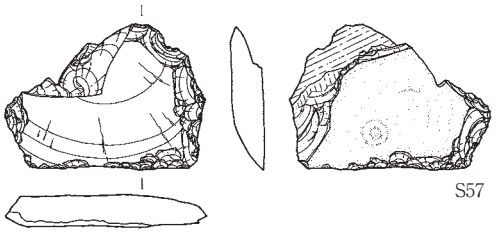
SX23・24

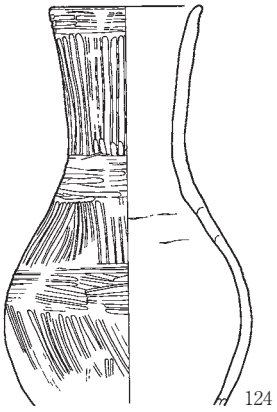


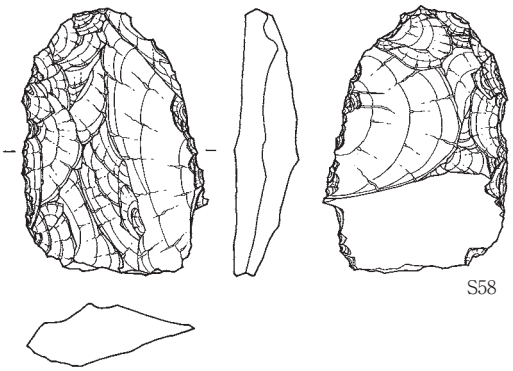


SH3









第 27 図　弥生時代前期末～中期中葉の個別図 21

５　包含層出土遺物　（第 28 ～ 40 図 125 ～ 397、S59 ～ S110　　PL1・10 ～ 19）

包含層および、他時期の遺構から出土した当該期の遺物を本項に掲載した。

125 ～ 188 は前期末に相当する土器である。

125 ～ 139 は、条痕文系の壺である。125 ～ 136 は、口縁部破片で、口縁下に突帯が巡らされる。125 は、口縁内側に沈線が一条巡る。138・139 は、頸部付近の破片で、138 は頸部に波状文が施され、直下には横方向のさらに下位には斜方向の条痕が施されている。139 は、頸部に突帯が巡らされる。140 は、条痕文系の甕の口縁部破片と思われる。141・142 は、無文の壺の口縁部である。141 は、口縁部が直角に近く外反し、口唇に刺突が施される。143 ～ 152 は、鉢と思われる口縁部破片であるが、小片のため検討を要するものも含まれる。153・154・156 ～ 158・160・161 は、変形工字文が施された土器である。153・154 は、壺の頸部破片で、浮線により文様が施されている。156 は短頸の壺で、157・158 は、無頸の壺である。157・158 は浮線により文様が施され、156 は、沈線により文様が施されている。160 は壺の、肩部破片で、沈線により文様が施されている。161 は、浅鉢の胴部破片で、沈線により文様が施されている。155・159 は遠賀川系の壺である。155 は、頸部に細い隆帯が一条巡らされており、159 は、胴部に細い隆帯が 2 条巡らされている。162 ～ 185 は、甕の口縁部破片であるが、小片のため検討を要するものも含まれる。164 ～ 168・171・177・182 は、波状を呈する。186 ～ 188 は、胴部破片であるが、小片であるため器種は不明である。細めの棒状工具により、沈線や刺突を施し、三角形などの幾何学文を描いている。同一個体である可能性も考えられる。

189 ～ 193 は中期前葉に相当する土器である。

189 ～ 191・193 は、条痕文系の壺の口縁部である。いずれも口縁下に突帯が巡らされている。189 は、口唇が面取りされ、口縁内側に横位の沈線が巡らされている。192 は、条痕文系の壺の胴部破片で、斜方向および横方向の条痕文で三角形の無文部を作り出している。

194 ～ 370 は中期中葉に相当する土器である。

194 ～ 216・218 ～ 284・288 ～ 304・321 ～ 323 は壺で、217・316 ～ 320・324 ～ 370 は甕、285・286・305 ～ 315 は鉢であるが、小片のため検討を要するものも含まれる。287 は、台付甕の台の部分と思われる。198 は、条痕文系の壺の口縁部破片である。口縁下に突帯が巡らされていたと思われるが、欠落している。214 が壺の口縁部、215 が底部である。接合しないものの、同じような縦方向の細い条痕が施されており、同一個体と思われる。242 ～ 244 は、いずれも壺の肩部から胴部にかけての破片で、同一個体と思われる。280 は、長頸壺の肩部の破片で、地文の縄文が磨り消されている部分が赤彩されている。

371 ～ 375 は、ミニチュア土器である。374 は、ほぼ完形で、丸底の無頸壺のような器形である。外面は沈線により文様が施され、口縁部には 1 対の円孔が設けられている。375 は、匙のミニチュアと思われる。

376 ～ 388 は、土偶である。376・377 は、顔面の破片である。378・379・381 は、髪の毛の一部と思われる。380・383 は腕の 384 ～ 388 は、胴部から脚部にかけての破片である。377・383・386 は、胎土が似ていることから同一の個体と思われる。389 ～ 392 は、土偶や容器形土偶の一部か、異形の土器の破片と思われる。393 は容器形土偶の後頭部であると思われる。頭頂部はほぼ平坦で、頭頂部や後頭部に隆帯や、突起を貼り付けることにより頭髪を表現していると思われる。耳にあたる部分には円孔が 2 箇所設けられている。

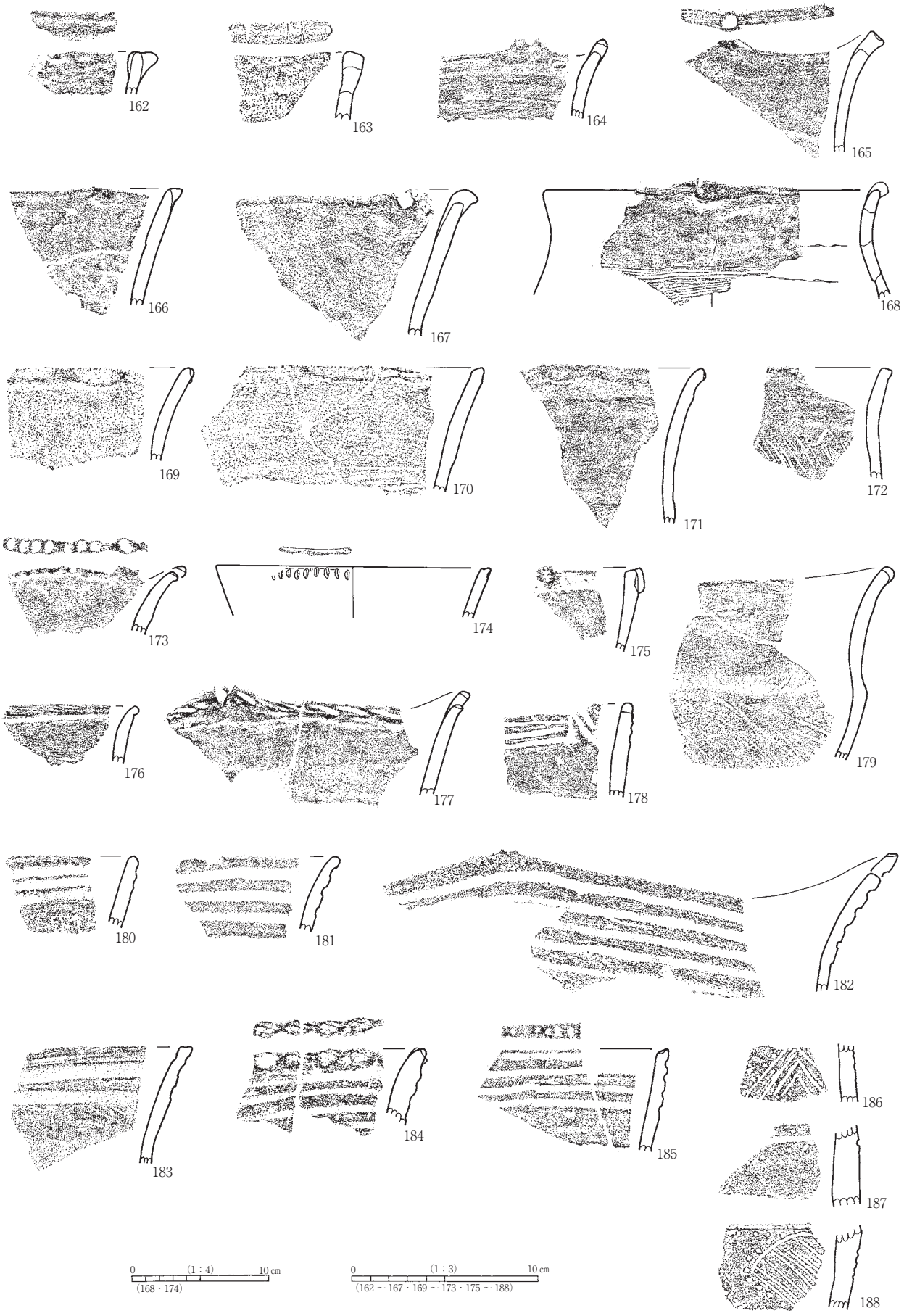
394 ～ 396 は、加工円盤でいずれも条痕文を施した土器の破片を加工している。

397 は、2 次的な焼成を受けた土器片である。当該期に所属するかは、検討を有する。

S59 ～ S62 はいずれも凝灰質砂岩材の石鏃。S59 から S61 は全体形を「しゃもじ形」に仕上げた資料で、いずれも基部端を欠損する S60 の刃部には明瞭な摩耗痕が認められる。63 は図の右側辺を刃部とする刃器。左側辺は全体を直接打撃により加工し、右側辺には抉入状の調整加工を一部に施し、刃部は無加工のまま使用され、摩耗痕が認められる。S64 は磨製石包丁の欠損品を再加工した資料で、全周に剝離調整がみられる。刃器または別の器種を製作しようとしたものか。S65 は横長剝片を素材とした刃器。刃部は使用により著しく摩耗している。S66 は磨製石器の表皮部分を再利用した刃器で、右側の端部はていねいに加工処理されている。S67 は横長剝片素材の刃器。S68 は凝灰質砂岩材の大形の刃器。刃部以外はていねいな剝離加工で作られ、刃部は無加工で、使用による摩耗痕が認められる。痕跡はいわゆる「ロー状光沢」に近い。S69 ～ S83 は打製石鏃。S69・S71・S73 ～ S83 までは、凹基有茎式鏃。S75 と S83 は凝灰岩材で、他はすべて黒曜石材である。S69 は長身で、側辺が緩やかに内湾する東海地方を中心に分布する型式である。S84 ～ S89 は打製の石錐。S84 は紡錘形。S85 は身厚ではあるが S69 のような石鏃の先端部の可能性もある。S86 の先端には明瞭な磨滅痕が認められる。S90 は黒曜石材の楔形石器。S91 と S92 は微細な剝離痕ある剝片。S92 は左端部に細かな剝離痕があり、錐部のような作り出しとなっている。押錐状の石器の可能性もある。S93 は使用した剝片。刃部に細かな連続する剝離痕があり、摩耗痕がある。S94 は楔形石器もしくは石核。上下左右に挟み打ちの痕跡がみられる。S95 はしっかりと頭部調整した横刃形の刃器で、刃部は使用により著しく摩耗している。S96 から S104 は磨製石斧。S96 は閃緑岩材の磨製石斧。刃部を中心に研磨する技術系で仕上げられている。厚さは 4.1cm、重さ 631g が測られる。S97 は乳棒状型式の刃部破片。S98 は基部破片を楔状に再利用した例。幅狭でノミ状の形態とみえるが、磨製石棒等の先端部破片の可能性もある。S99 は凝灰質頁岩材の扁平両刃石斧。S100 は刃部と基部端を欠失する資料で、研磨工程は確認できるものの、未完成品の可能性がある。S101 と S102 は扁平両刃石斧。S101 は楔状に使用され、表裏の剝落が激しい。S103 は自然石を素材とし刃部を中心に研磨加工を施す技術系。S104 は自然石素材のノミ状石器としたが、左側辺にコブ状の突起がみられ、いわゆる「独鈷状の石器」の可能性も高い。刃部は斜刃で明瞭な摩耗痕が認められる。S107 は扁平な磨製石斧の刃部を欠損する例と考えたが、断面がカマボコ状に仕上げられ、別に武器形の石製品を想定すべきかもしれない資料。S108 はメノウ製の細形管玉。S105 は安山岩材の凹石。S106 は碧玉の原石。S109 と S110 は環状石器。S109 は閃緑岩材の 1/4 残欠で、側辺は剝離状の痕跡がみられる。S110 は安山岩材で 1/2 残欠で、側辺には敲打状の潰れがみられるが、表裏面はよく研磨されている。

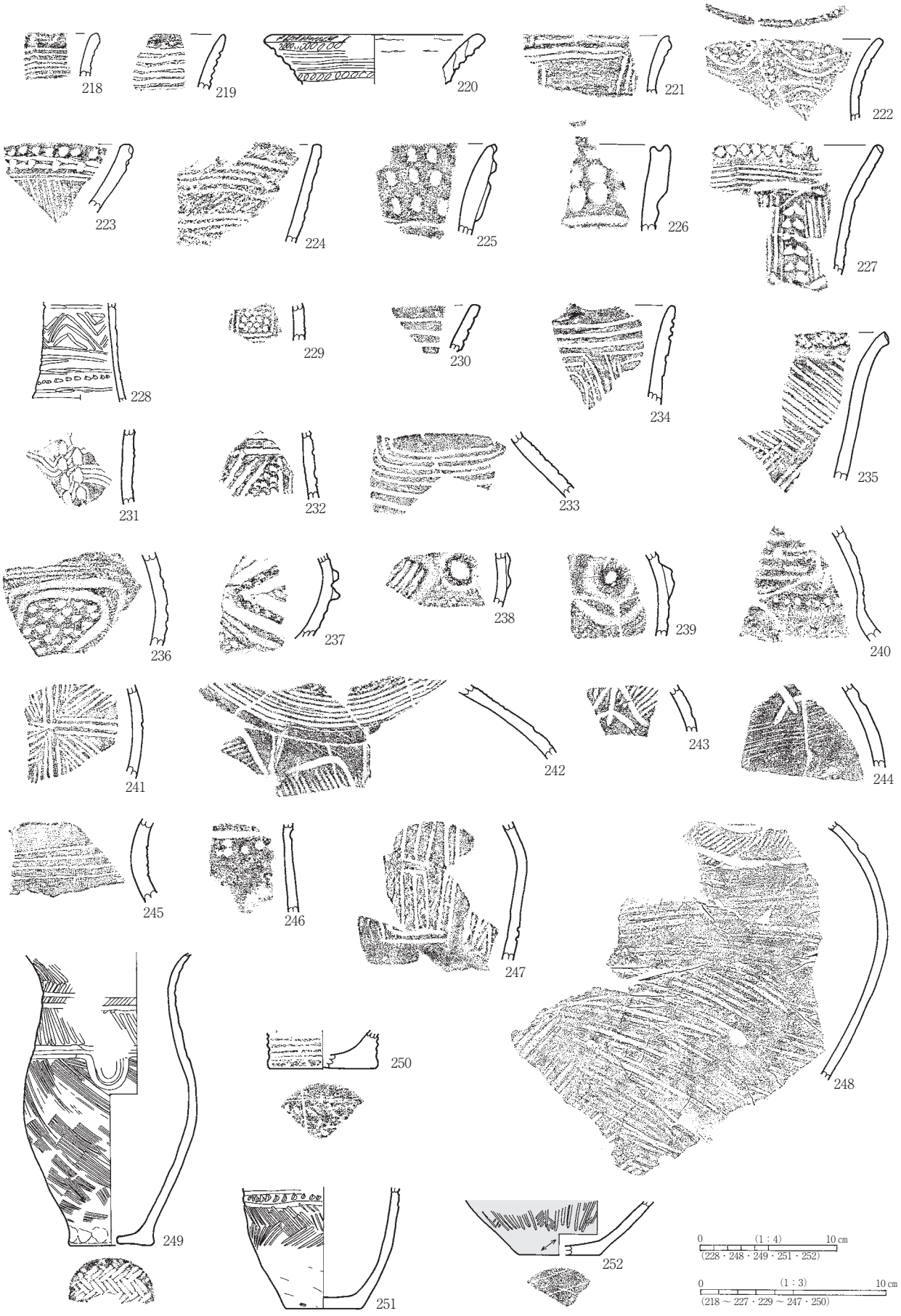
＊1　佐藤由紀男氏・永井宏幸氏のご教授による。

第 28 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器１

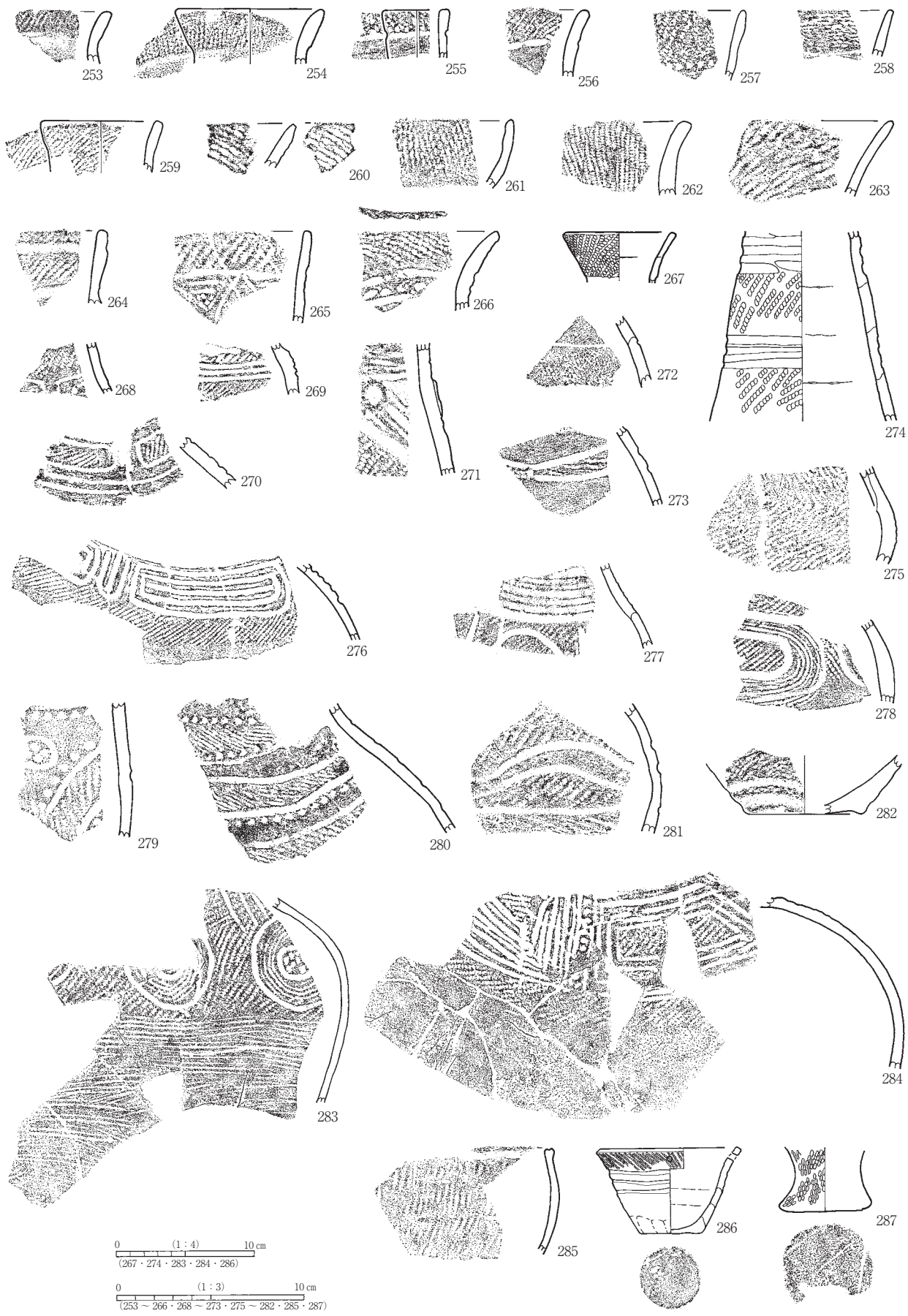


第 29 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器２

第 30 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器３

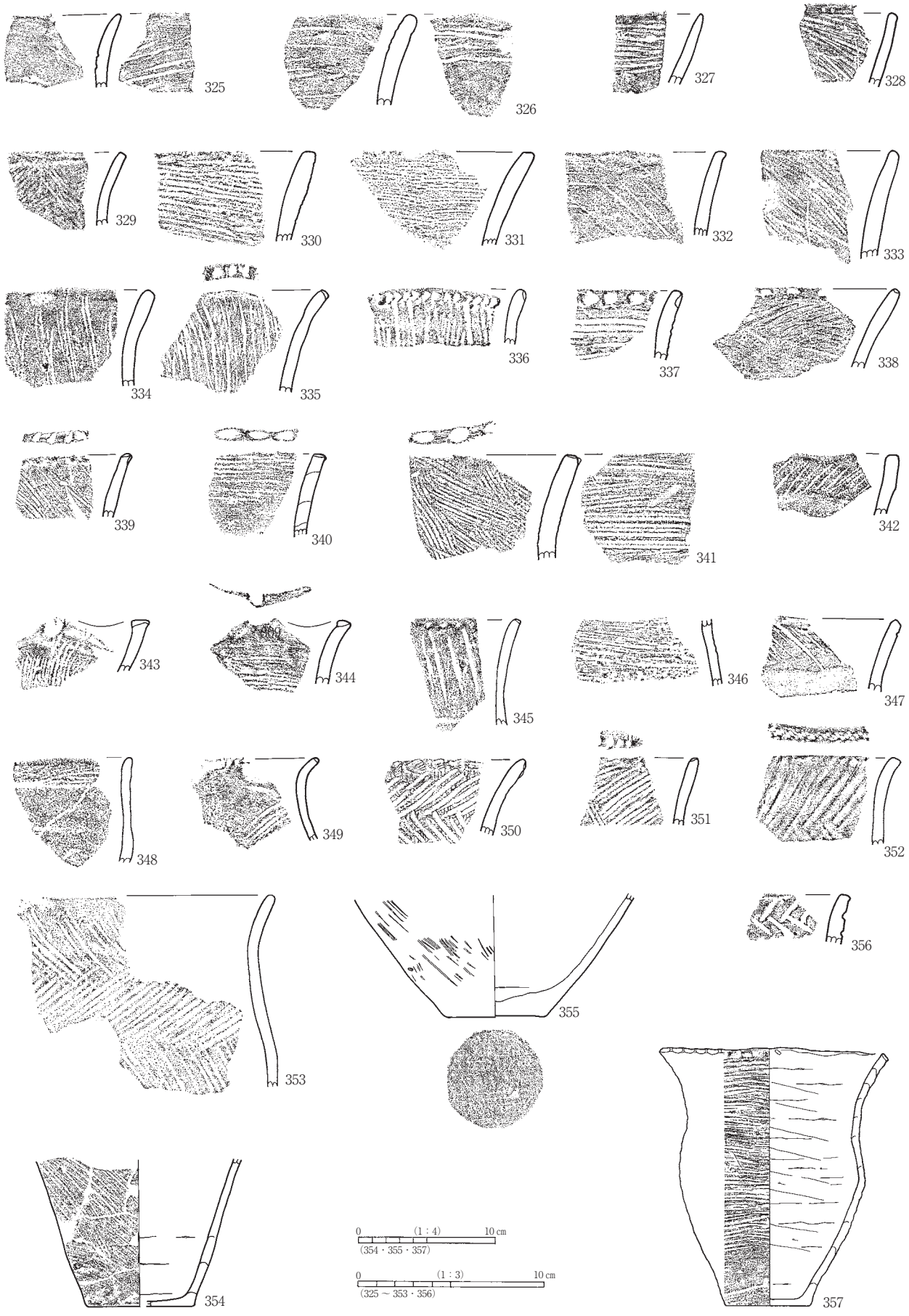


第 31 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器４

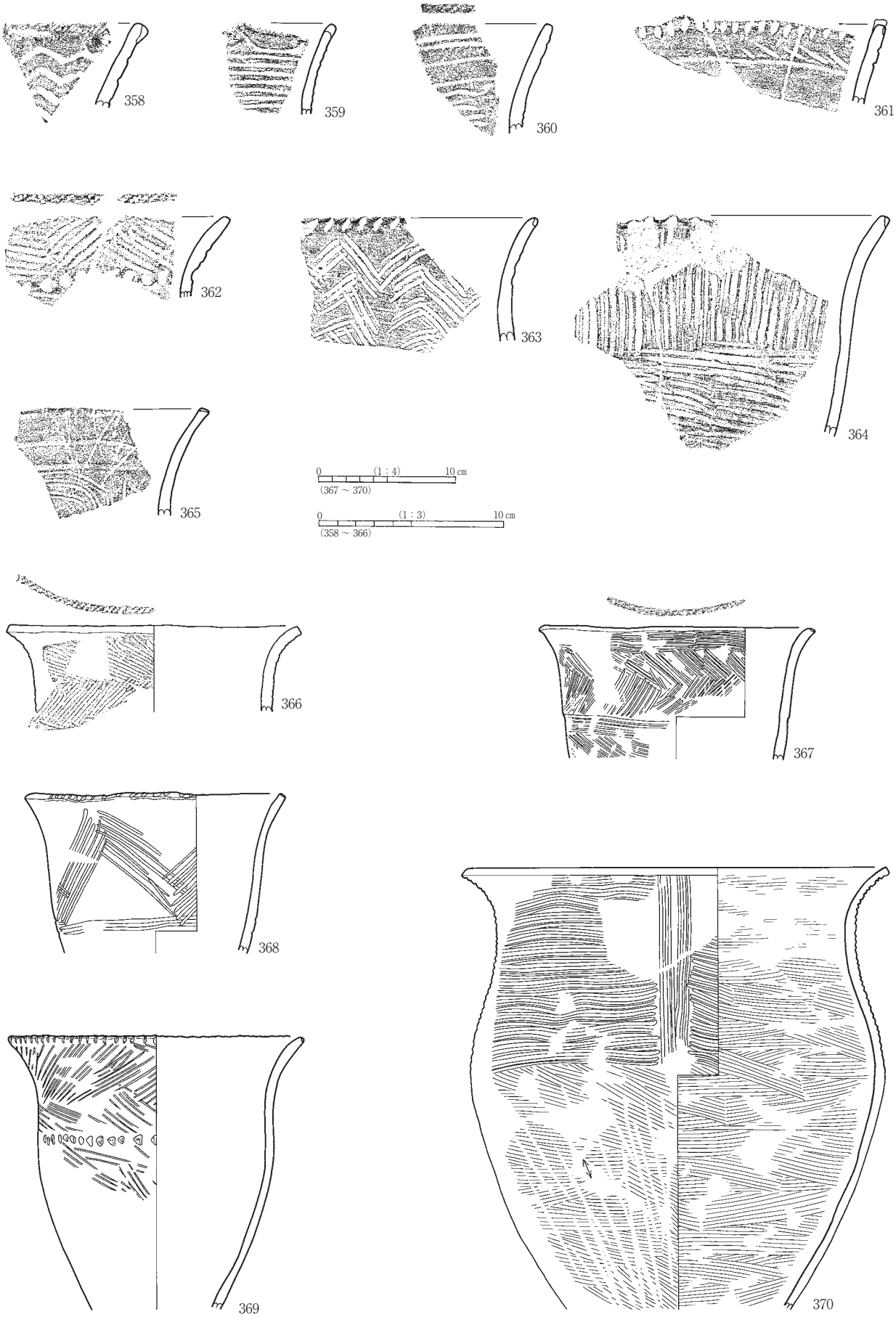


第 32 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器５

第 33 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器６

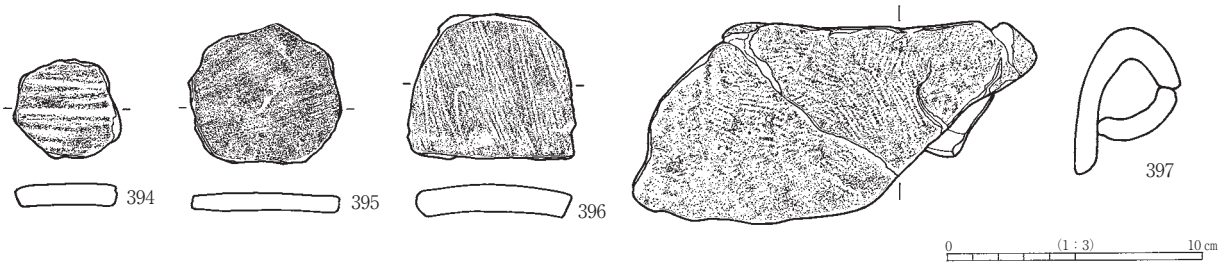


第 34 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器７

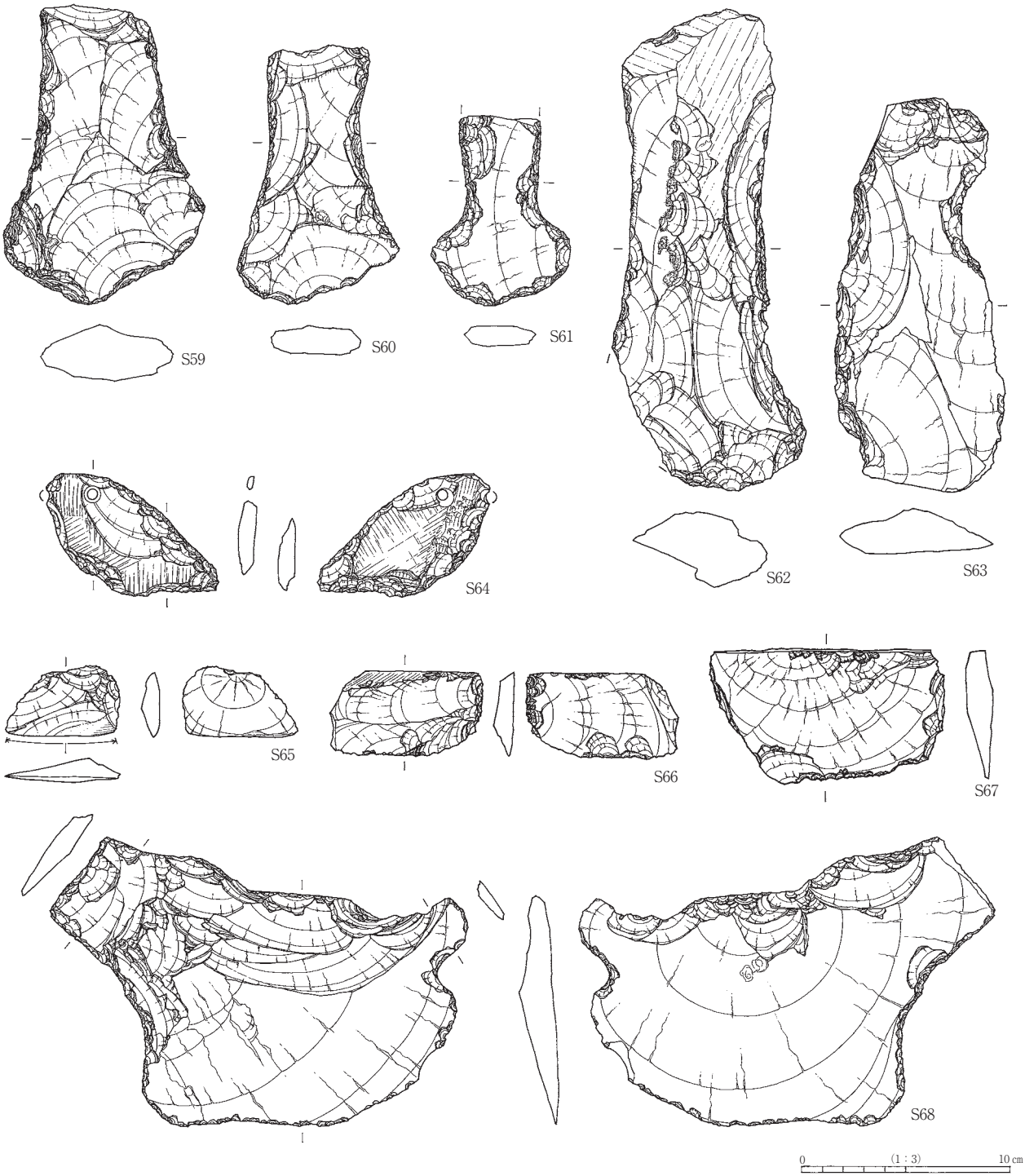


第 35 図　弥生時代前期末～中期中葉の土器８

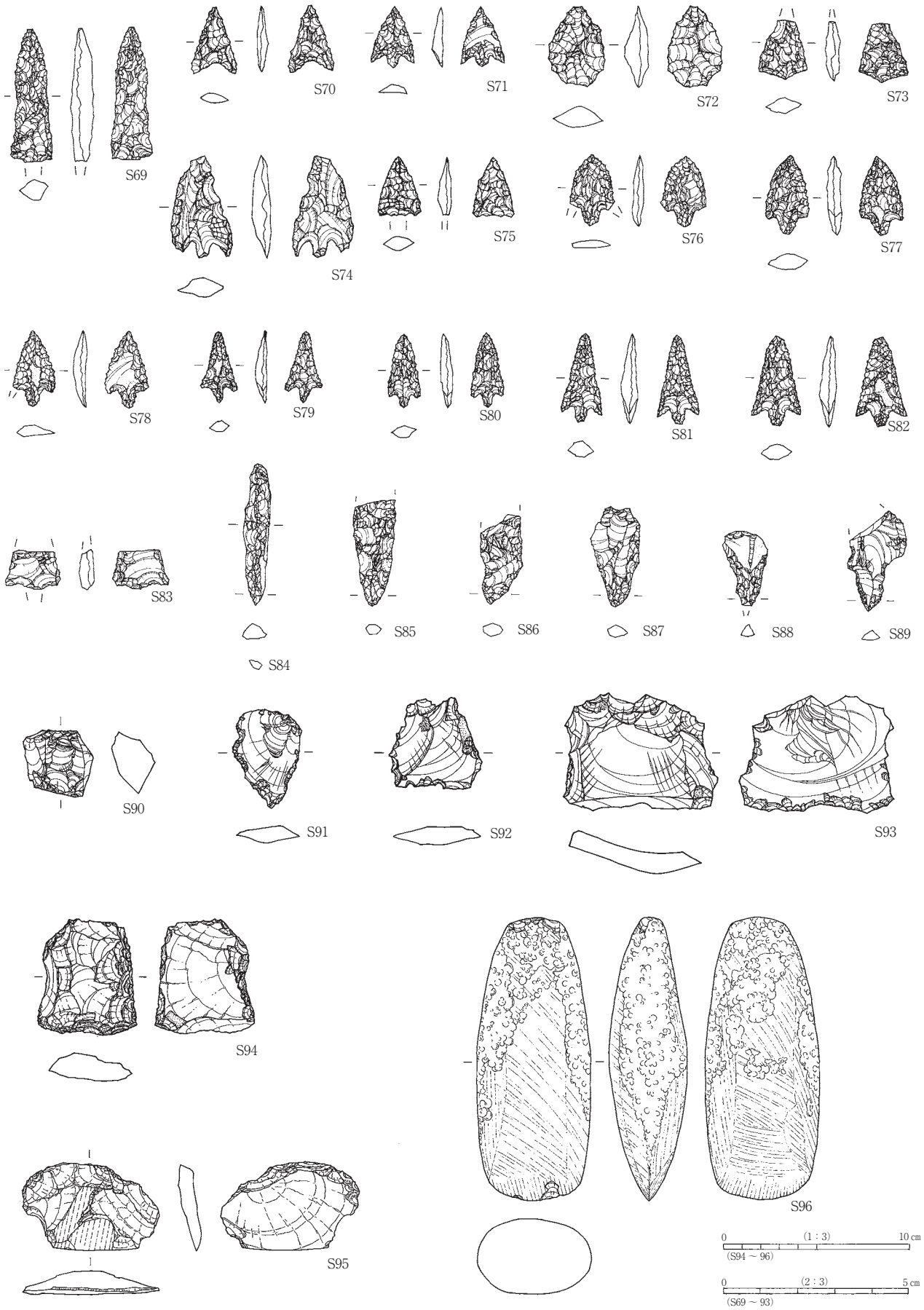
第 36 図　弥生時代前期末～中期中葉の土製品 1



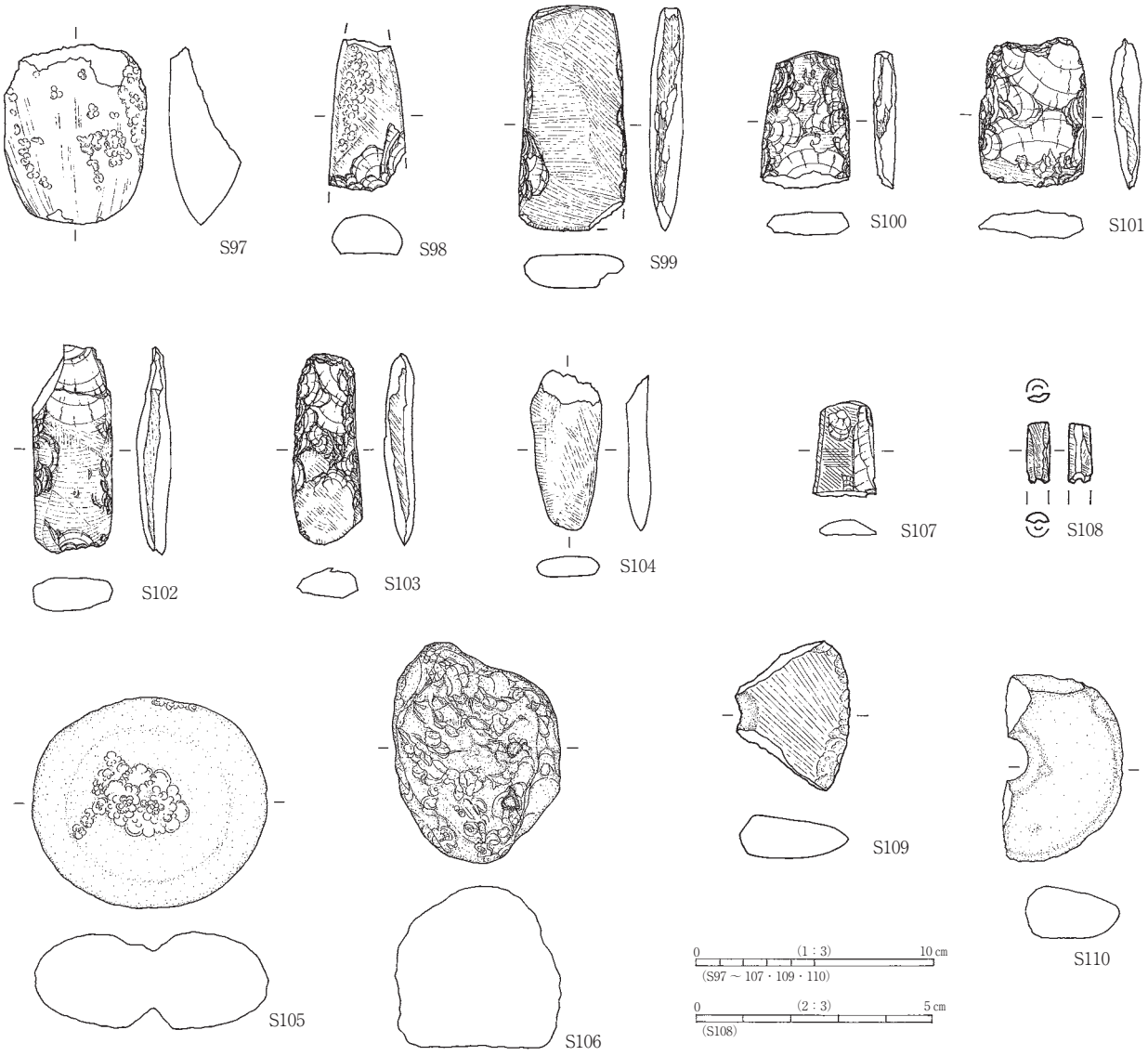
第 37 図　弥生時代前期末～中期中葉の土製品２



第 38 図　弥生時代前期末～中期中葉の石器１



第 39 図　弥生時代前期末～中期中葉の石器２



第 40 図　弥生時代前期末～中期中葉の石器３

第３節　弥生時代中期後葉

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は基本土層のⅫ層上面で検出された遺構で、弥生時代中期後葉に属する遺構である。微高地に当たる⑥区で竪穴住居跡が５軒まとまって検出された他は、⑤・⑥・⑧・⑨・⑪・⑬区で溝跡や土坑などがわずかに検出されただけである。当該期に属する遺構は、⑥区の竪穴住居跡以外は遺物の出土も少なく、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。検出された主な遺構は、竪穴住居跡５軒、溝跡 35 条、土坑 55 基である。

２　竪穴住居跡

⑥区でのみ検出された。検出された竪穴住居跡は、SB60 を除いて全て⑥区西側の調査区境に位置し、集落は調査区外に広がっていた可能性が考えられる。

SB40　（第 41・43 図）　⑥区ⅢD7・12

Ⅻ層上面での検出で、遺構埋土との土層の差異が明確でなかったため、トレンチ及び調査区境の土層断面により床面および壁の立ち上がりを確認した上でプランを確定していった。古墳時代～古代の SD38 や SK402 等の弥生時代後期の遺構に切られている。一部が調査区外となるが北東－南西方向を主軸とする楕円形プランを呈すると考えられる。

規模は、残存長径 4.34 m、短径 5.04m、深さ 0.06m を測る。埋土は、炭化物を含む単層で、自然埋没と考える。床面は、全体に堅緻で、壁周辺以外は貼り床が施され硬化している。炉は、長軸 70cm、短軸 55cm の不整形の地床炉で、深さ約 5cm を測る。床面のほぼ中央に位置し、炉床は部分的にわずかに被熱赤化している。４本の主柱穴が想定され、その内３本の主柱穴を確認した。いずれも掘り方が柱痕跡と同等の太さ・形状であることが特徴といえよう。

埋土中より土器片や土偶・石器・骨片が出土している。本住居跡の時期は、炉から出土している壺（399）より、中期後葉栗林期と認定される。

出土遺物（第 43 図 398 ～ 402、S113 ～ S115　　PL21・22）

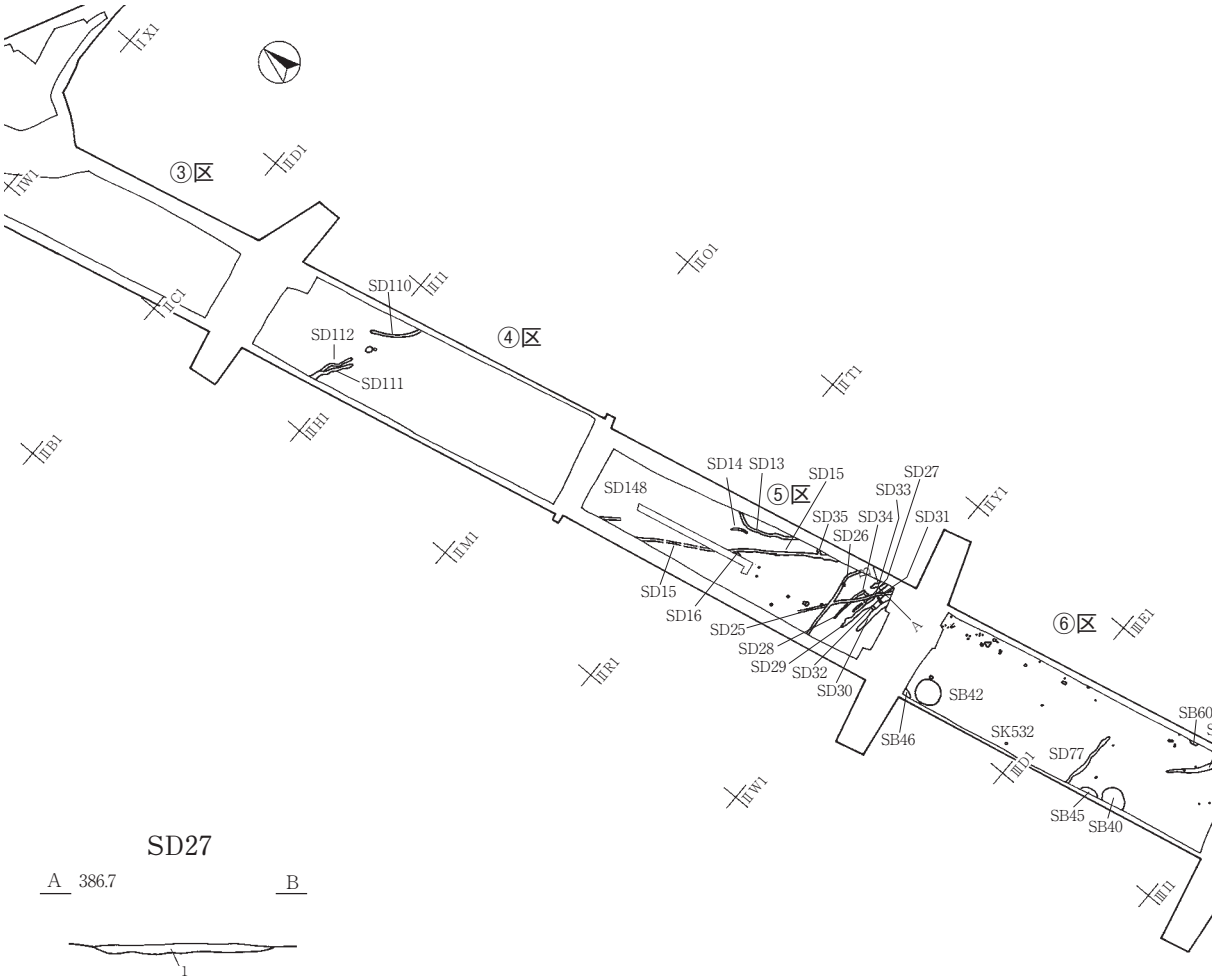
掲載した遺物は、398・402 は床面、399 は炉内、411・S115 はピット２内、S113・S114 はピット３内、その他は埋土中からの出土である。

398 は、内外面ともヨコミガキされた浅鉢で、内面に穀物の圧痕が確認された。399 は、壺の頸部で横走沈線文により横帯区画され縄文が充填される。400・401 は甕の胴部で、400 は縦羽状文が、401 は櫛描波状文が施されている。402 は、黥面土偶の顔面の破片で、沈線により文様が描かれる。

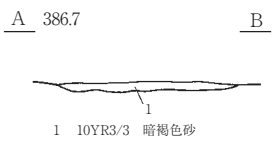
S113 は凝灰岩材、磨製石鏃の研磨段階初期の未成品。S114 は凝灰質砂岩材の刃器。横長の剝片を利用し、刃部には明瞭な摩耗痕が認められる。S115 は凝灰質砂岩材の楔形石器。上下に明瞭な両極剝離痕がみられる。

SB42　（第 41・44 図　　PL20）　⑥区ⅡX6

Ⅻ層上面での検出で、遺構埋土との土層の差異が明確でなかったため、トレンチ調査による土層断面で

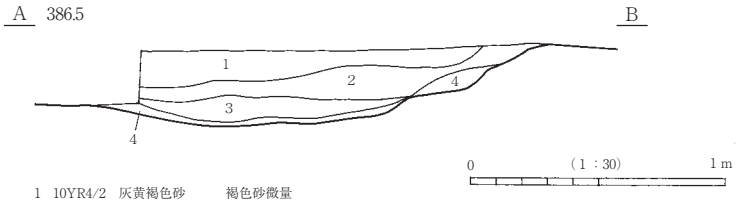


SD27



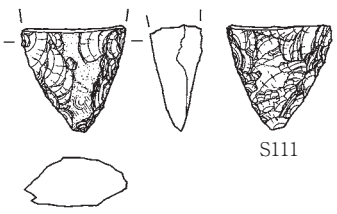
1　10YR3/3　暗褐色砂

SD161

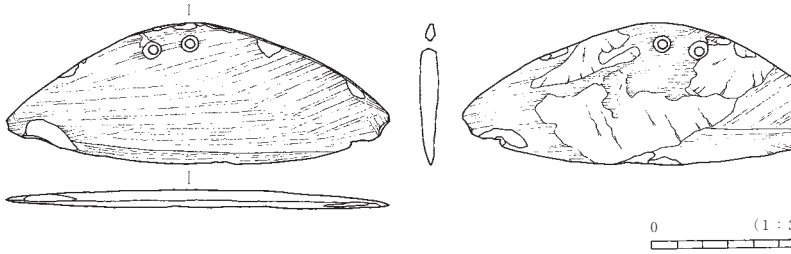


1　10YR4/2　灰黄褐色砂　　褐色砂微量
2　10YR3/2　黒褐色土　　灰黄褐色砂微量、炭化物微量
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂
4　10YR3/2　黒褐色土　　中層に厚さ 0.1 ～ 0.5 cmの炭化物層

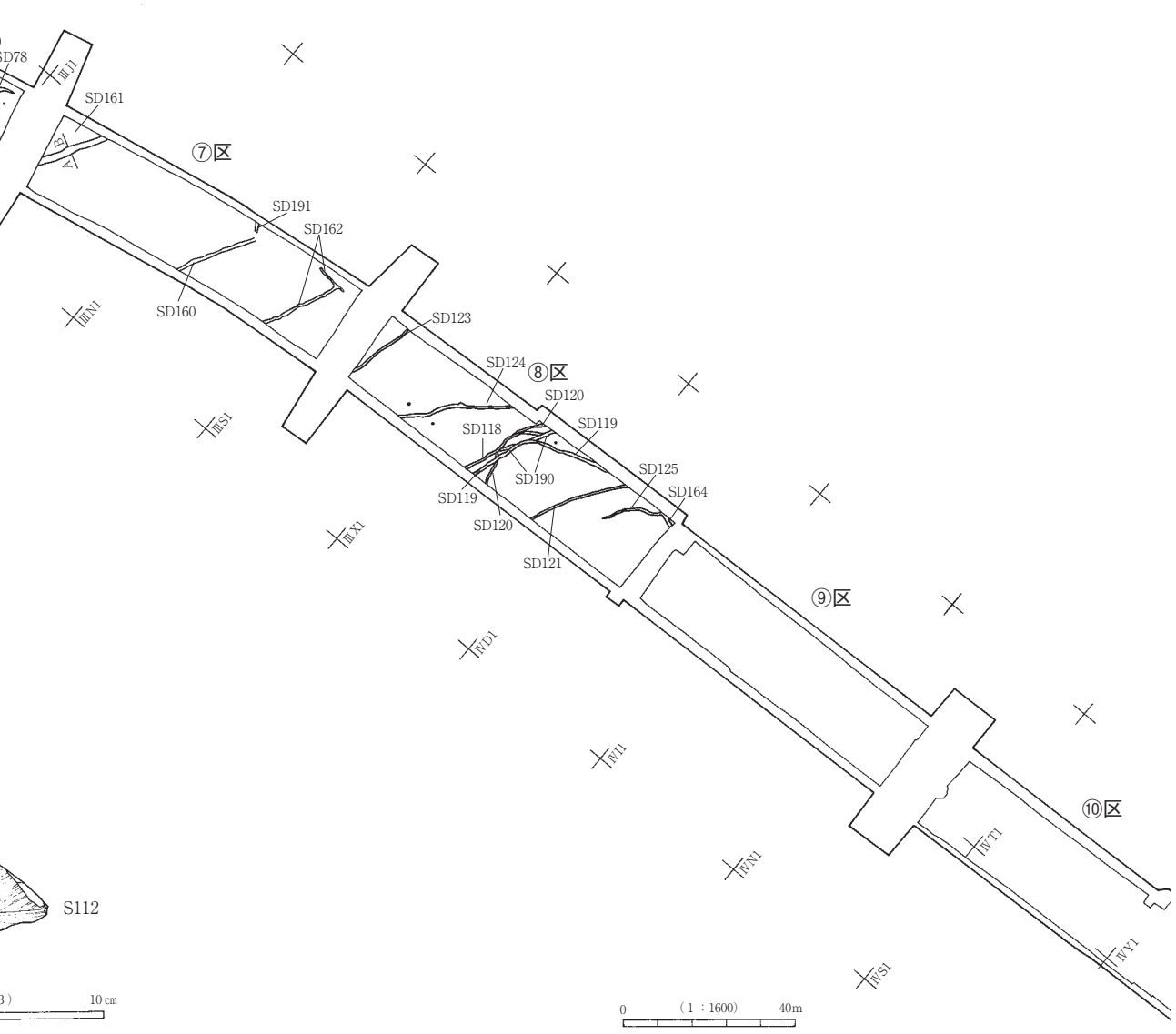
SD27



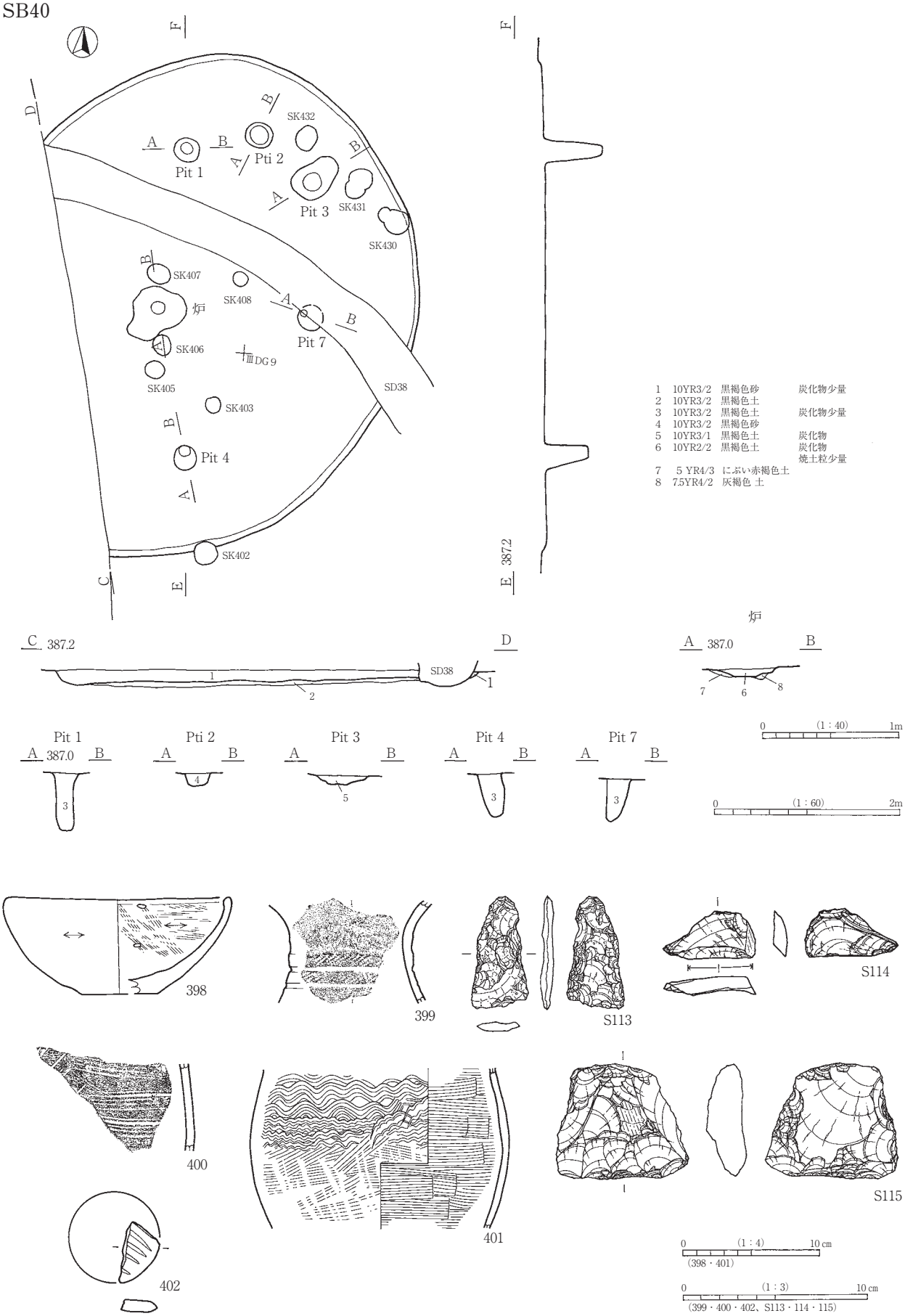
SD161



第 42 図　弥生時代中期後葉の個別図 1



第 41 図　弥生時代中期後葉の遺構全体図



第 43 図　弥生時代中期後葉の個別図２

床面および壁の立ち上がりを確認し、プランを確定していった。SB21・SK561 等、弥生時代後期の遺構に切られている。一部が SB21 に切られるが、円形プランを呈する。

規模は、径 5.82 m、深さ 0.10m を測る。埋土は単層で、自然埋没と考える。床面は、全体に堅緻で、壁周辺以外は貼り床が施され硬化している。炉は、弥生時代後期の SK637 に切られるが、長軸約 55cm、短軸 48cm の楕円形を呈する地床炉で、深さ 8cm を測る。床面中央、やや北東寄りに位置し、炉床は部分的に被熱赤化している。炉北東側の床面には炭化物層が広がっている。床下の調査で 3 本の柱穴（ピット 1・6・7）が確認され、そのうちピット 1・7 の 2 本が主柱穴と判断される。

埋土中より土器片や石器、シカの歯の破片が出土している。本住居跡の時期は、床面から出土している甕より、中期後葉栗林期と認定される。

出土遺物（第 44・45 図 403 ～ 411 、S116 ～ S121　　PL21・22）

掲載した遺物は、404・408・409・411 は床面、S116・S117・S120・S121 はピット 6 内、S119 は床下、その他は埋土中からの出土である。

403 は、高坏の坏部で、内外面ともに赤彩されている。404・405 は、壺の頸部で、横走沈線文により横帯区画され縄文が充填され、405 には、さらに波状沈線文が施文される。406・407・410 は、台付甕である。407 は、櫛描波状文を施した上から、鋸歯状の沈線文が施文される。410 は、頸部に簾状文を巡らし胴部には、櫛描波状文が施されて口唇部には縄文が施されている。406 は、台付甕の台部である。

408・409・411 は、甕である。408・409 は口縁部で、口唇には縄文が施されている。408 は、口縁部に波状沈線文が 2 条巡らされており、胴部には櫛描波状文が施される。409 は縦羽状文が施されていたと思われる。411 は、肩部に波状沈線文が、胴部上位には縦羽状文が施される。

S116 と S117 は磨製石鏃の剝離段階の未成品。S116 は先端部を欠損し、S117 は先端と基部を欠損している。S117 は SB40 の S113 と同材。S118 は 1 穴式の磨製石鏃の基部破片。S119 は「しゃもじ形」をした打製石鍬。刃部は使用により摩耗している。S120 は凝灰質砂岩材の自然石の先端部に両刃状に剝離がみられる資料。刃部の作出とすれば、ノミ状あるいは柱状の石斧未完成品か。15.2cm × 3.0cm × 2.7cm、170g。S121 は軽石材の砥石。表裏に半円形の使用面がある。

SB60 （第 41・45 図　　PL20） ⑥区ⅢD14・15

Ⅻ層上面での検出で、遺構埋土との土層の差異が明確でなかったため、トレンチ及び調査区境の土層断面により床面および壁の立ち上がりを確認した上でプランを確定していった。床面付近からは炭化材が多量に出土しており、いわゆる焼失家屋と判断して調査を進めた。弥生時代後期の SD114 に切られている。

形状や規模は、大半が調査区外となるため不明。埋土は、複層に分層され、堆積状況から自然埋没と考える。床面は、堅緻な部分もあるが、全体的にはっきりしない。炉および柱穴は、確認されなかった。

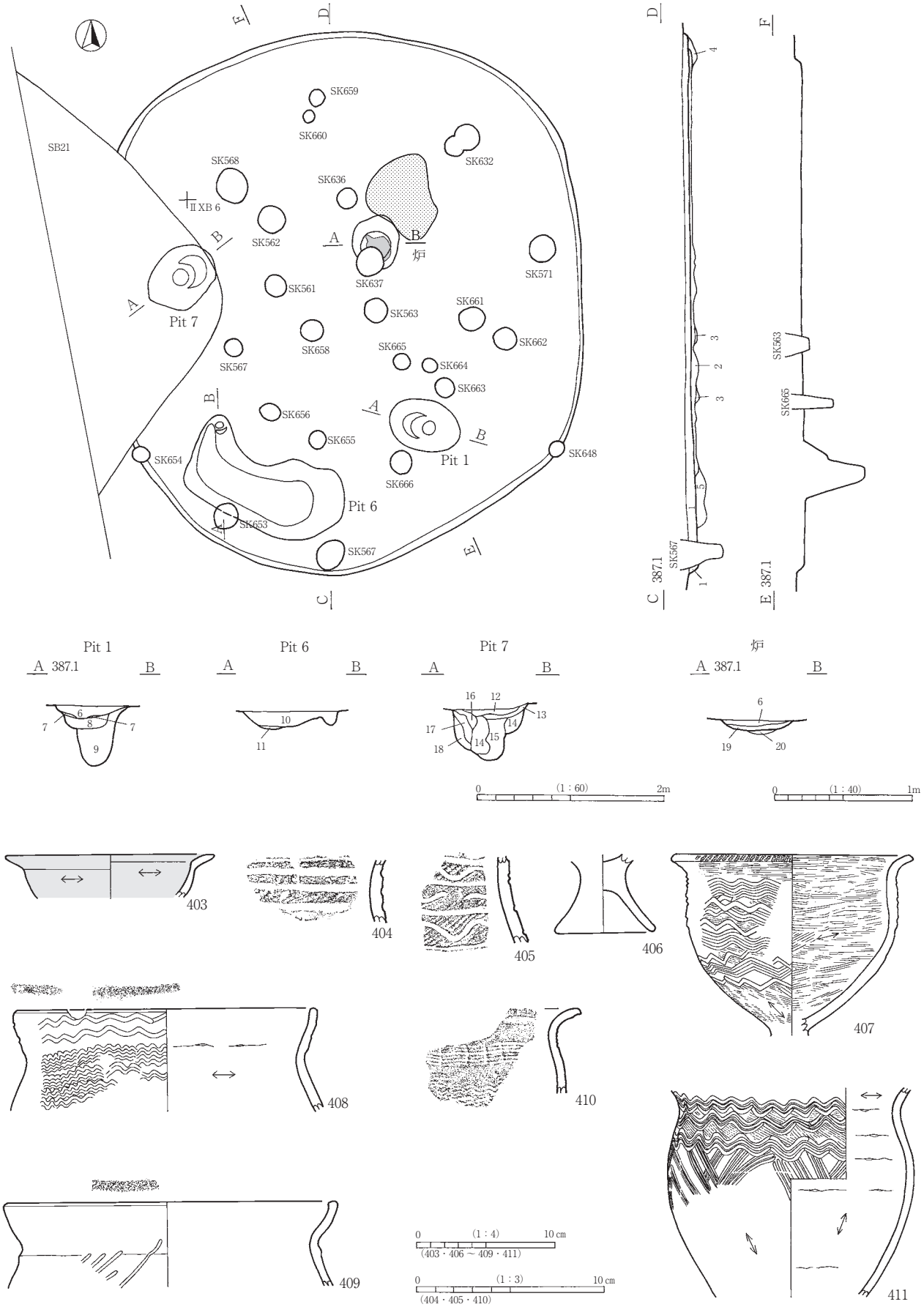
埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。本住居跡の時期は、埋土中から出土している甕より、中期後葉栗林期と認定される。サンプリングした炭化材の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 175 ～ 41 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 45 図 412　　PL21）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

412 は、甕の口縁部破片である。口唇には縄文が施され、頸部には簾状文が巡らされている。

SB42



第 44 図　弥生時代中期後葉の個別図３

３　溝跡

④～⑧区で検出された。ほとんどの溝跡は、地形に沿うように南東から北西方向に伸びており、人工的な溝跡と思われる。遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SD27　（第 41 図）　⑤区ⅡS17

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。南東から北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、東端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は単層で、自然埋没と思われる。人工的な溝跡と思われる。埋土中より石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 42 図 S111　　PL22）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S111 は、打製の石槍状の石器、もしくは尖頭器の基部破片か。直接打撃により表裏面に加工を施し、三角錐状に仕上げてある。

SD161　（第 41 図）　⑦区ⅢI3・4・9

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。SD37 に切られる。南東から北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は複層で、自然埋没と思われる。人工的な溝跡と思われる。埋土中より石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 42 図 S112　　PL22）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S112 は、凝灰岩質の石包丁である。2 穴の外湾刃半月形で、刃は両刃である。穴間は 14mm 程で狭い。

４　土坑

④～⑥・⑧区で検出された。当該期に属する土坑は遺物の出土も少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

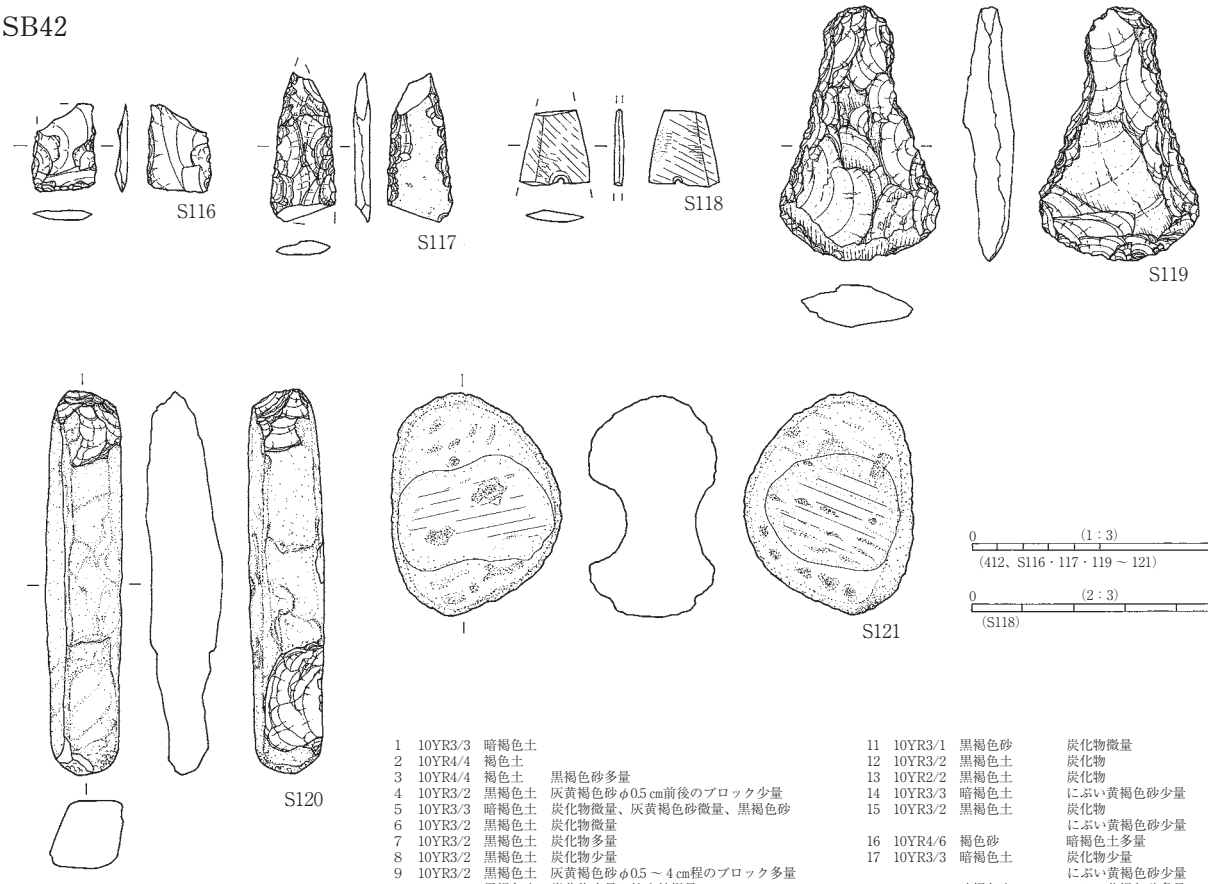
SK532（第 45 図　　PL20）　⑥区ⅡX16

Ⅻ層上面で明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。土坑中央に、壺の頸部（413）が、逆位の状態で埋置されていた。本遺構の時期は、埋置されていた壺より、中期後葉栗林期と認定される。

出土遺物（第 45 図 413　　PL21）

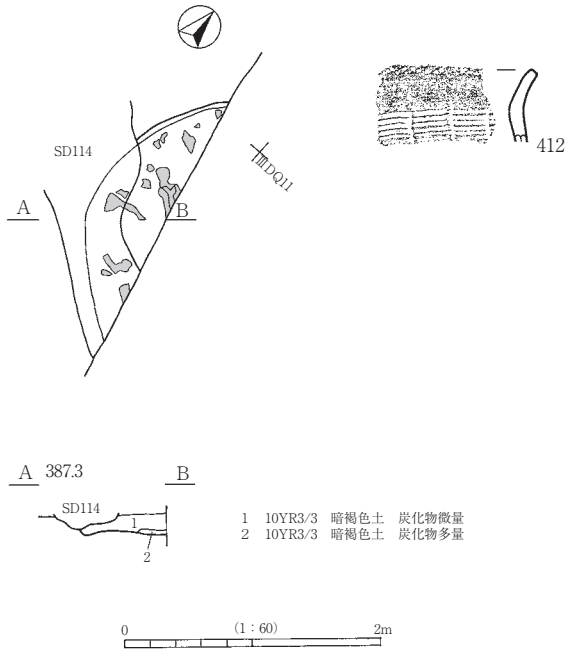
413 は、長頸壺の口縁部～頸部にあたり、口唇部には縄文が施さる。頸部文様帯は、縄文を地文とし横走沈線文により横帯区画され、さらに波状沈線文が施される。

SB42



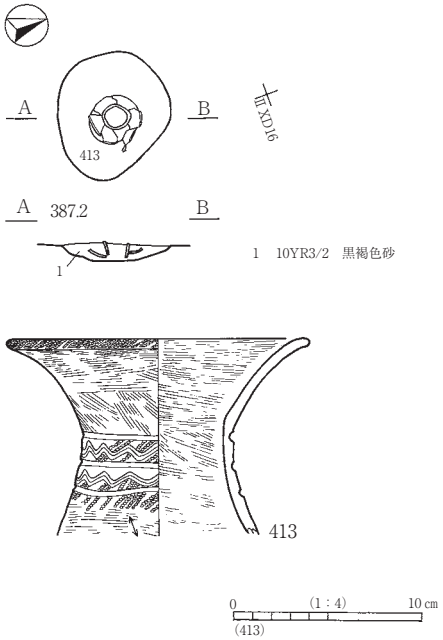
1　10YR3/3　暗褐色土
2　10YR4/4　褐色土
3　10YR4/4　褐色土　黒褐色砂多量
4　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
5　10YR3/3　暗褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂微量、黒褐色砂
6　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量
7　10YR3/2　黒褐色土　炭化物多量
8　10YR3/2　黒褐色土　炭化物少量
9　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5～4㎝程のブロック多量
10　10YR3/2　黒褐色土　炭化物少量、焼土粒微量
11　10YR3/1　黒褐色砂　炭化物微量
12　10YR3/2　黒褐色土　炭化物
13　10YR2/2　黒褐色土　炭化物
14　10YR3/3　暗褐色土　にぶい黄褐色砂少量
15　10YR3/2　黒褐色土　炭化物
にぶい黄褐色砂少量
16　10YR4/6　褐色砂　暗褐色土多量
17　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量
にぶい黄褐色砂少量
18　10YR3/4　暗褐色土　にぶい黄褐色砂多量
19　10YR3/2　黒褐色土　炭化物多量、焼土粒微量
20　5YR4/3　にぶい赤褐色土

SB60



1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物微量
2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物多量

SK532



1　10YR3/2　黒褐色砂

第 45 図　弥生時代中期後葉の個別図４

５　包含層出土遺物（第 46・47 図 414 ～ 466、S122・S123　　PL21・22）

包含層および、他の時代の遺構から出土した当該期の遺物を本項に掲載した。いずれも中期後葉栗林式の土器である。

414 ～ 441 が壺、442 ～ 466 が甕である。

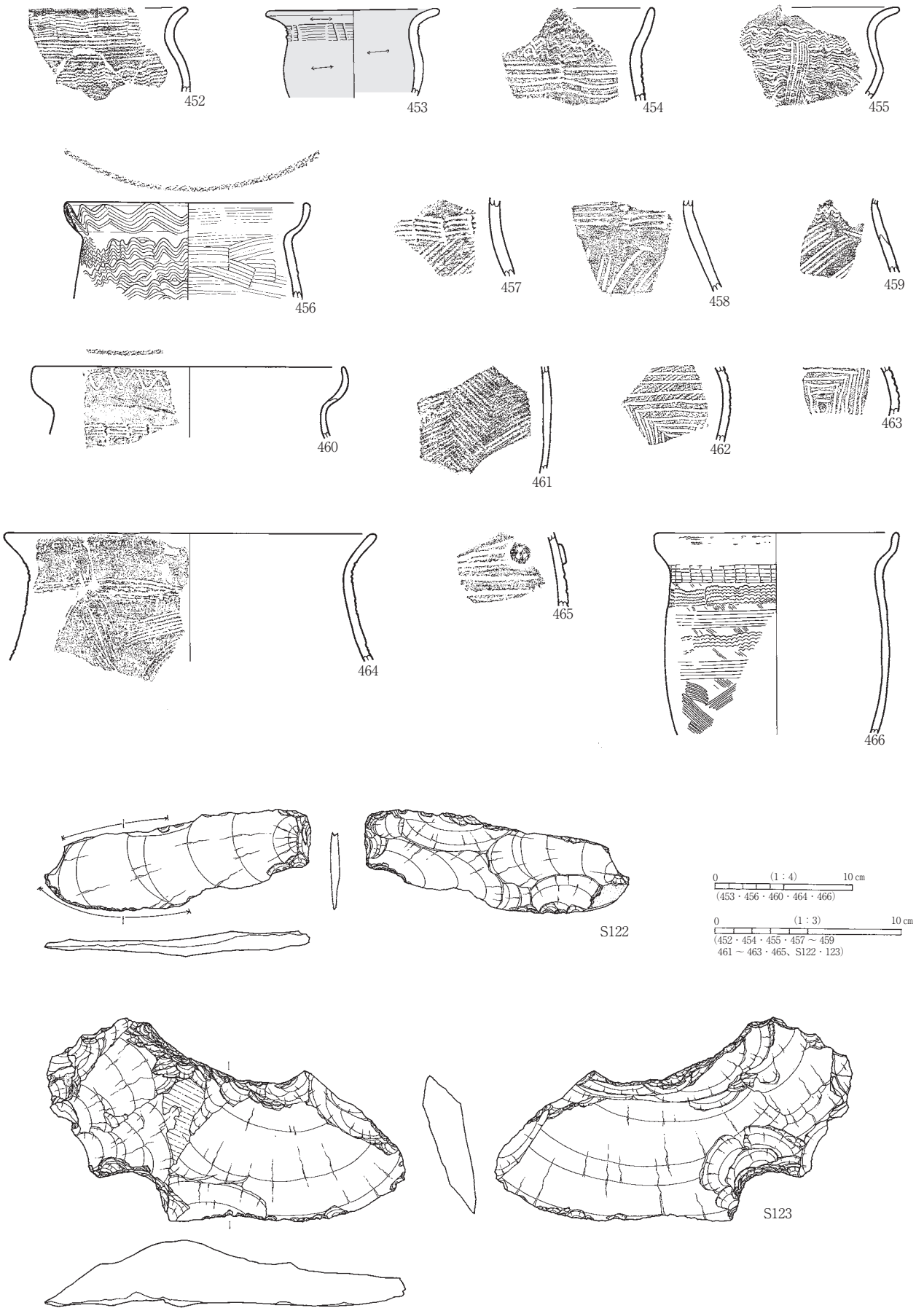
414 ～ 417 は、壺の口縁部破片である。415 は、口唇に縄文が施され、口縁部内側には鋸歯状の沈線文が巡らされ地文は縄文が施される。418 ～ 421・434・439 は、頸部破片である。439 は、横走沈線文および押し引きにより横帯区画された頸部文様帯の下位に、押し引きにより縦方向に区画された文様帯の中に縦方向の櫛描波状文を充填する。文様帯の外側は赤彩されている。422 ～ 433・435 ～ 438 は胴部破片である。441 は、壺の底部と思われ、底部が楕円形を呈する。

442 ～ 445・449・456・460・466 は、受口状口縁を呈する甕である。453 は、口縁が外反し、頸部には廉状文が施される。内外面とも赤彩されている。457 ～ 459・461 ～ 463・465 は、甕の胴部破片である。465 は、円形浮文が設けられる。

S122 と S123 は刃器。S122 は基部端に剝離加工を施して仕上げた刃器で、刃部は無加工。摩耗痕が認められる。S123 は側辺部に抉り状の加工を施した資料で、未完成の可能性がある。「独鈷状の石器」あるいは刃器になると考えられる。

包含層

第 46 図　弥生時代中期後葉の土器



第 47 図　弥生時代中期後葉の土器・石器

第４節　弥生時代後期

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は基本土層のⅦ層を剝いで検出された遺構で、弥生時代後期に属する遺構である。遺構は、調査区のほぼ全域で検出された。微高地に当たる④・⑤・⑥・⑨～⑪区で 58 軒の竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡が集中する⑤・⑥区に中心となる集落があったと思われ、その集落は、北側が⑤区の中心付近を南東から北西方向に延びる SD1、南側が⑥区と⑦区の境を東西に横切る SD192（自然流路）に区画された中で営まれていたものと思われる。当該期に属する遺構のうち小規模な土坑など、遺物の出土が認められなかったような遺構には、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものがあり、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。検出された主な遺構は、竪穴住居跡 58 軒、掘立柱建物跡６棟、溝跡 51 条、土坑 841 基等である。

２　竪穴住居跡

④・⑤・⑥・⑨～⑪区で検出された。検出された竪穴住居跡は、⑤・⑥区に集中しており集落の中心はこの地区にあったものと思われる。遺構は調査区境に位置するものも多く、集落が東西の調査区外に広がっていたものと考えられる。また、竪穴住居跡は切り合っていて、弥生時代後期の中でも時期差があると思われる。

SB1　（第 48・49 図）　⑤区ⅡS21・22

Ⅶ層を剝いで検出。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。SD22 との重複関係は平面検出時に本址が新しいことを確認した。

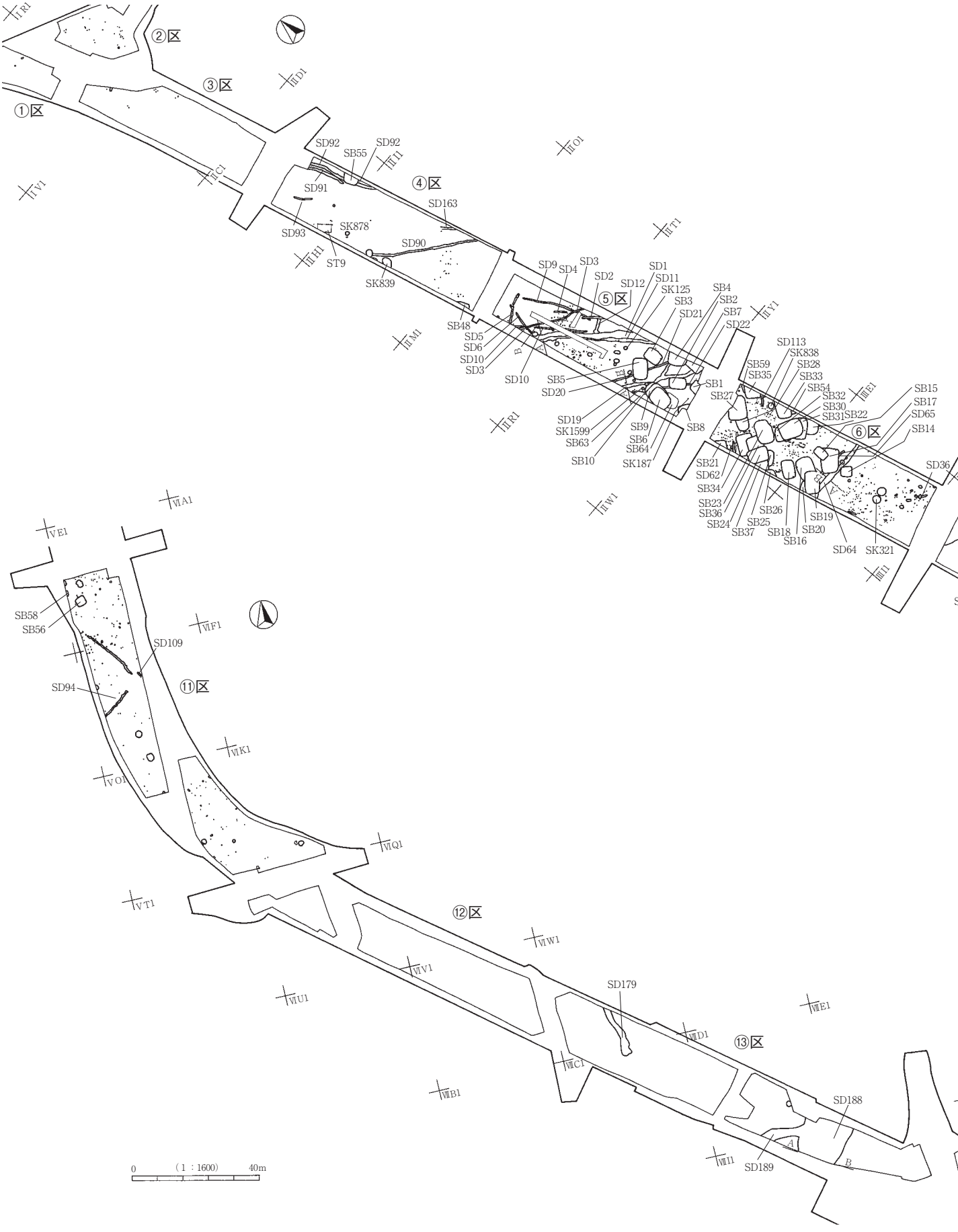
南半部が調査区外となるが、南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると推定される。規模は、残存長軸 2.56m、短軸 3.44m、深さ 0.31m を測る。埋土は、４層に分層できるが、いずれも砂質土で、炭化物を含む土層が竪穴中央部に堆積している。自然埋没と考える。床面は、全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は、長軸 40cm、短軸 34cm の不整楕円形を呈する地床炉で、深さ 4cm を測る。炉床は酸化・被熱が著しい。主柱穴間のやや内側に位置し、主柱穴間は炭化物層が広がる。４本の主柱穴が想定されるが、奥壁側の２本の主柱穴のみ確認した。断面形状はいずれも漏斗状を呈するが、柱痕跡等は確認できなかった。

埋土中より土器片や土製品・磨製石斧等の石器・骨細片が出土している。床面近くからは大形の土器片が出土している。本住居跡の時期は、床付近から出土している壺（469）より、後期箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB3・6 と同時期に存在していた可能性がある。

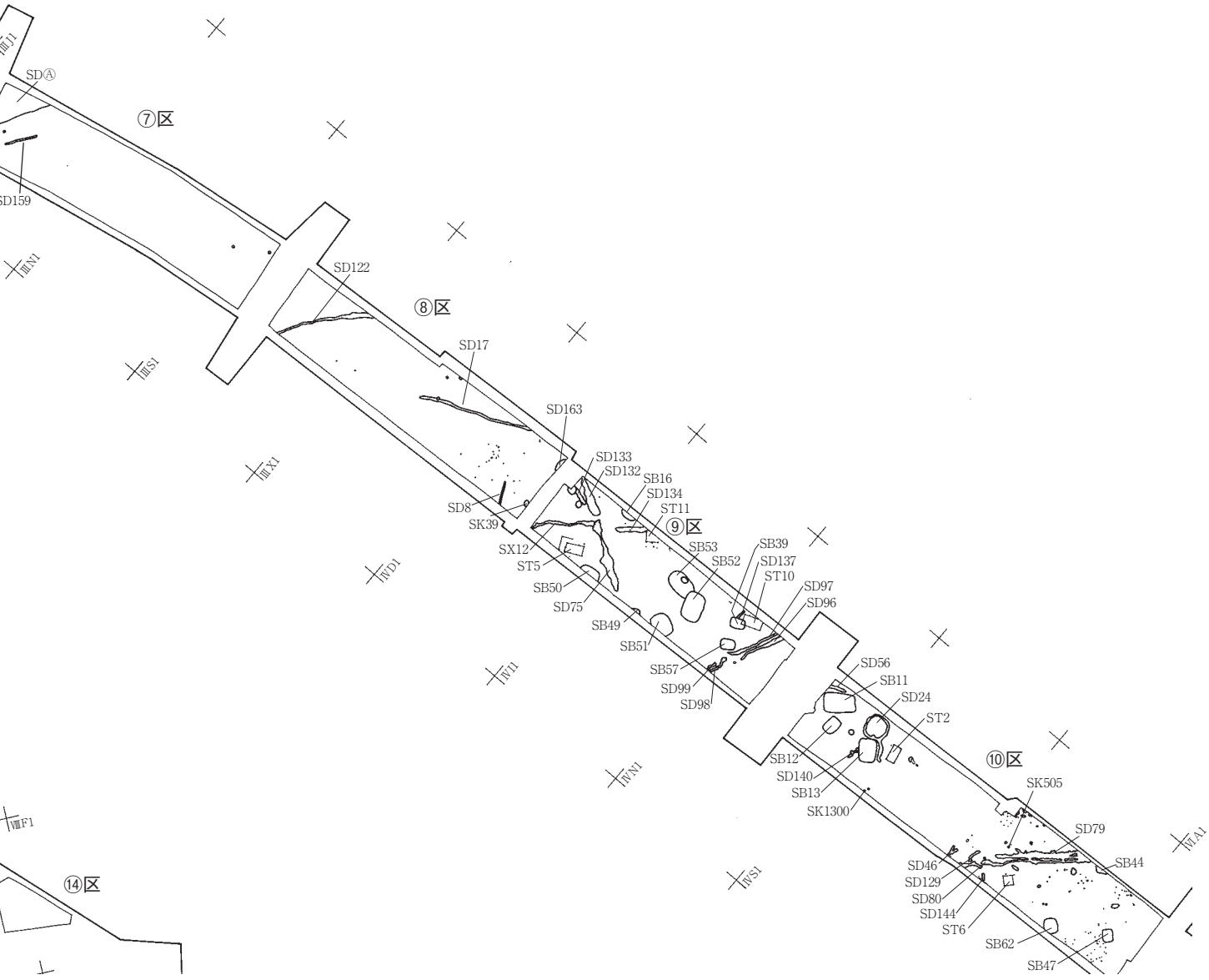
出土遺物（第 49 図 467 ～ 480、S124・S125　　PL28・42・45）

掲載した遺物は、468・469・S125 は床面付近、471・474 はピット１内、その他は埋土中からの出土である。

467・468 は高坏である。467 は坏部で、内外面とも赤彩されている。468 は脚部で、赤彩されている。469 は壺の頸部破片で、頸部文様帯には２条１組の垂下文によりＴ字文が施される。口縁部内側のみ赤彩される。470 は甑である。471 ～ 473 は甕の口縁部破片で、口縁部には櫛描波状文が充填さる。471・



第 48 図　弥生時代後期の遺構全体図


SD159
SD122
SD17
SD163
SD133
SD132
SB16
SD134
ST11
SD8
SK39
SX12
ST5
SB50
SD75
SB49
SB51
SB57
SD99
SD98
SB53
SB52
SB39
SD137
ST10
SD97
SD96
SD56
SB11
SD24
ST2
SB12
SD140
SB13
SK1300
SK505
SD79
SB44
SD46
SD129
SD80
SD144
ST6
SB62
SB47
⑦区
⑧区
⑨区
⑩区
⑭区

473 頸部には簾状文がわずかに認められる。474 は、甕の胴部破片で、櫛描波状文が充填されハケ調整が残る。475 は、胴部下半が欠損しているが、台付甕と思われる。口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

476 ～ 480 は、加工円盤である。476・479 は甕の、477・478・480 は壺の破片を加工して作られている。

S124 は、凝灰質砂岩材の磨製石鏃未成品。全体を剝離成形した段階の資料で先端部を欠損する。S125 は太型蛤刃石斧の胴部破片。輝緑岩材か。

SB2 （第 48・50 図　　PL23） ⑤区ⅡS16・17・21・22

Ⅶ層を剝いで検出。東側は SD19 と重複していたため、サブトレンチを入れ、本址のプラン及び SD19 との新旧関係を調査し、本址が SD19 より新しいことを確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。SD22 との重複関係は平面検出時に本址が新しいことを確認した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 5.56m、短軸 3.72m、深さ 0.24m を測る。埋土は単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は、長軸 48cm、短軸 36cm の楕円形を呈する地床炉で、深さ 8cm を測る。炉床は、部分的に強く酸化・被熱している箇所があるが、全体的にあまり酸化は認められない。主柱穴間のやや内側に位置し、主柱穴間は炭化物層が広がる。また、床面中央部に強く酸化・被熱している部分が確認されたが、周囲に炭化物層の広がりは認められなかった。４本の主柱穴と、出入口施設に関わる柱穴が南壁に３本確認された。いずれの柱穴も比較的浅い。

床面および埋土中より多くの土器片が出土している。また、埋土中より土製品や石器・獣骨片がわずかに出土している。ピット４直上からほぼ完形の甕（494）が出土した。本住居跡の時期は、床付近から出土している甕（494）より、後期後葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB4 と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 51 図 481 ～ 494　　PL28・29）

掲載した遺物は、482・484・490・494 は床面付近、その他は埋土中からの出土である。

481 は小形の鉢で、輪積み痕が残る。482 は、内外面とも赤彩された鉢である。483 は、小形の壺の底部と思われる。485・489 は壺で、頸部文様帯には直線文が巡らされる。485 は赤彩され、489 は赤彩されない。484 は甑である。486 ～ 488・490 ～ 494 は甕である。491・494 は胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、491 は頸部の屈曲点が明瞭でない。492・493 は大形の甕である。いずれの甕も口縁部と胴部に櫛描波状文を充填し、頸部に簾状文が巡らされる。

SB3 （第 48・52 図　　PL23） ⑤区ⅡS11・12

Ⅶ層を剝いで検出。東側は SD19 と重複していたため、サブトレンチを入れ、本址のプラン及び SD19 との新旧関係を調査し、本址が SD19 より新しいことを確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。SD22 との重複関係は平面検出時に本址が新しいことを確認した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 5.18m、短軸 4.26m、深さ 0.36m を測る。埋土は単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。炉は径 48cm の円形を呈する地床炉で、深さ 6cm を測る。主柱穴間のやや内側に位置し、炉

床は酸化・被熱が著しい箇所が部分的に確認された。また、床面中央部に強く酸化・被熱している部分が確認されたが、周囲に炭化物層の広がりは認められなかった。４本の主柱穴と、出入口施設に関わる柱穴が南壁に２本確認された。

床面および埋土中より土器片や土製品・石器・イノシシの歯（＊1）等が出土している。ピット１は埋め土中に礫が集中し、礫の下からは土器片が多く出土したほか、炭化物に混じって骨片が出土している。本住居跡の時期は、床付近から出土している高坏（498）より、後期箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等からSB1・6と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第52図495～502　　PL29・42）

掲載した遺物は、498は床面付近、497はピット１内、その他は埋土中からの出土である。

495・496は鉢で、495は口縁部、496は底部の破片である。いずれも内外面とも赤彩されている。497は甑である。498は高坏の脚部で、赤彩されている。499～501は、甕の口縁部で口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

502は、鉢の破片を加工して作られた加工円盤である。

SB4　（第48・53図）　⑤区ⅡS12・17

Ⅶ層を剝いで検出。SB7・SD20・21と重複していたため、SB7とはサブトレンチを入れ、SD20・21とは平面で本址との新旧関係を確認し、本址がいずれの遺構よりも新しいと判断した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

北西－南東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸6.18m、短軸3.36m、深さ0.16mを測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は長軸42cm、短軸33cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmを測る。炉床中央は酸化・被熱している。主柱穴間のやや内側に位置し、主柱穴間には炭化物層が広がる。４本の主柱穴と、地床炉奥に浅い柱穴（ピット5）が１基検出された。ピット５は柱穴配置から屋内棟持柱の可能性があるが、柱穴と見なすには浅すぎる。奥壁側の２本の主柱穴掘り方は、外側に傾斜をつけており、柱を落とし込む斜路として使用された結果とも考えられる。

埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。本住居跡の時期は、ピットから出土している高坏（503）より、後期箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等からSB2と同時期に存在していた可能性がある。

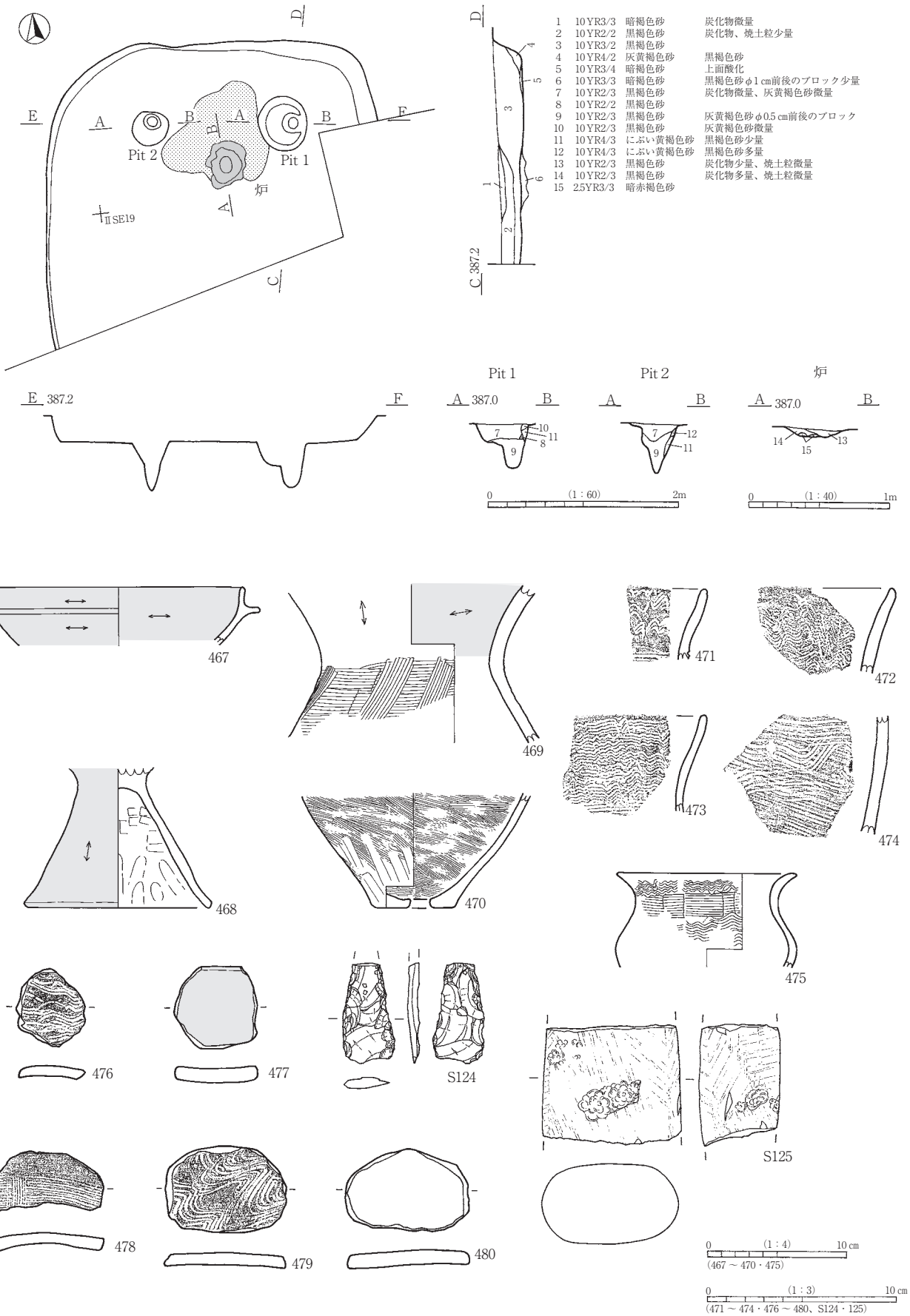
出土遺物（第53図503・504、S126・S127　　PL29・45・47）

掲載した遺物は、503はピット５内、その他は埋土中からの出土である。

503は、高坏の脚部で、赤彩されている。504は、甕の口縁部破片で、口縁部には櫛描波状文が充填されている。

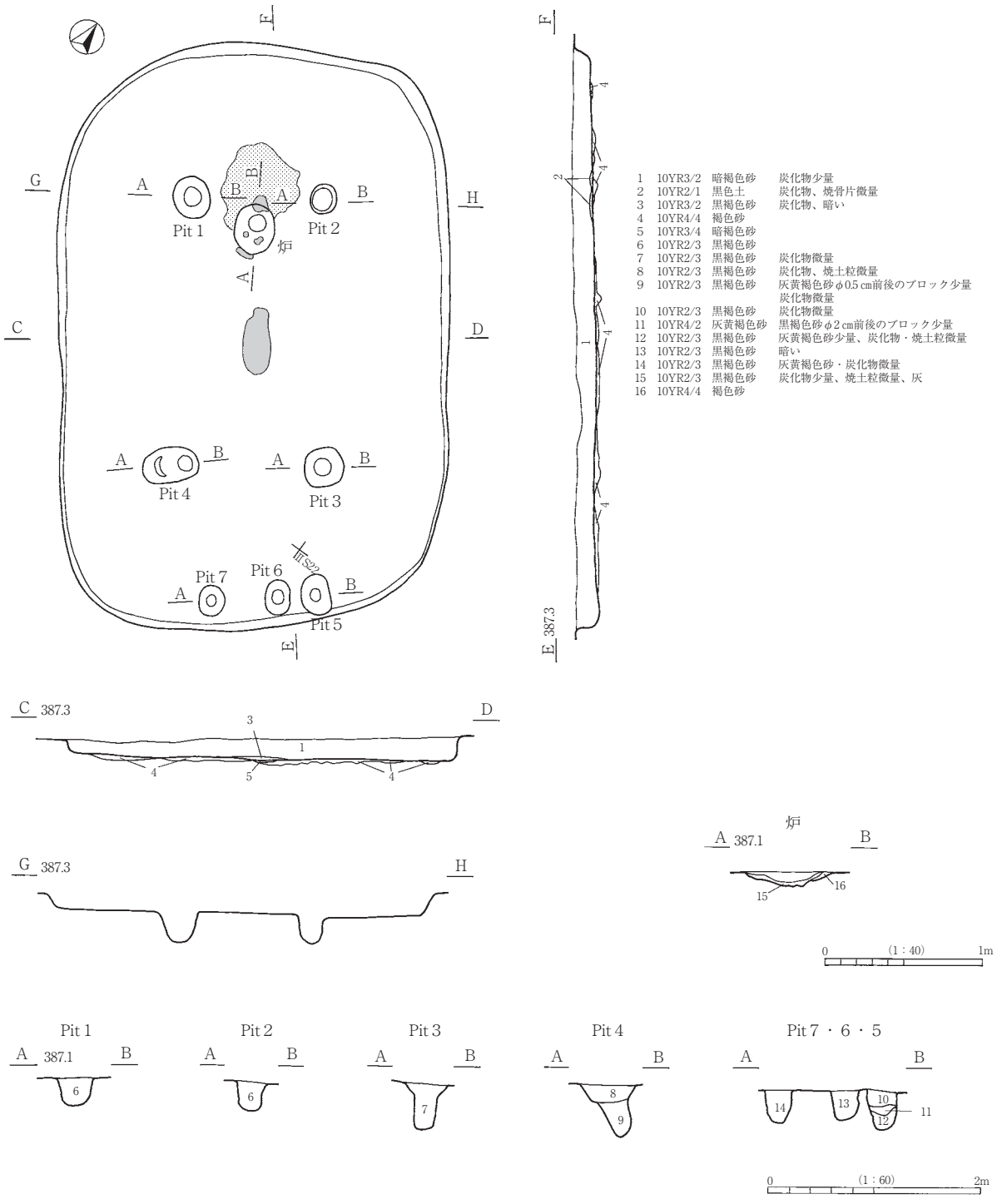
S126は、独鈷石の刃部破片。刃部は使用に伴うものか比較的短く、先端は明瞭に研ぎ出され、摩耗痕が認められる。全体には赤色顔料の付着痕がみられる。S127は硬砂岩材の敲石で、上下両端に敲打痕が認められる。

SB1



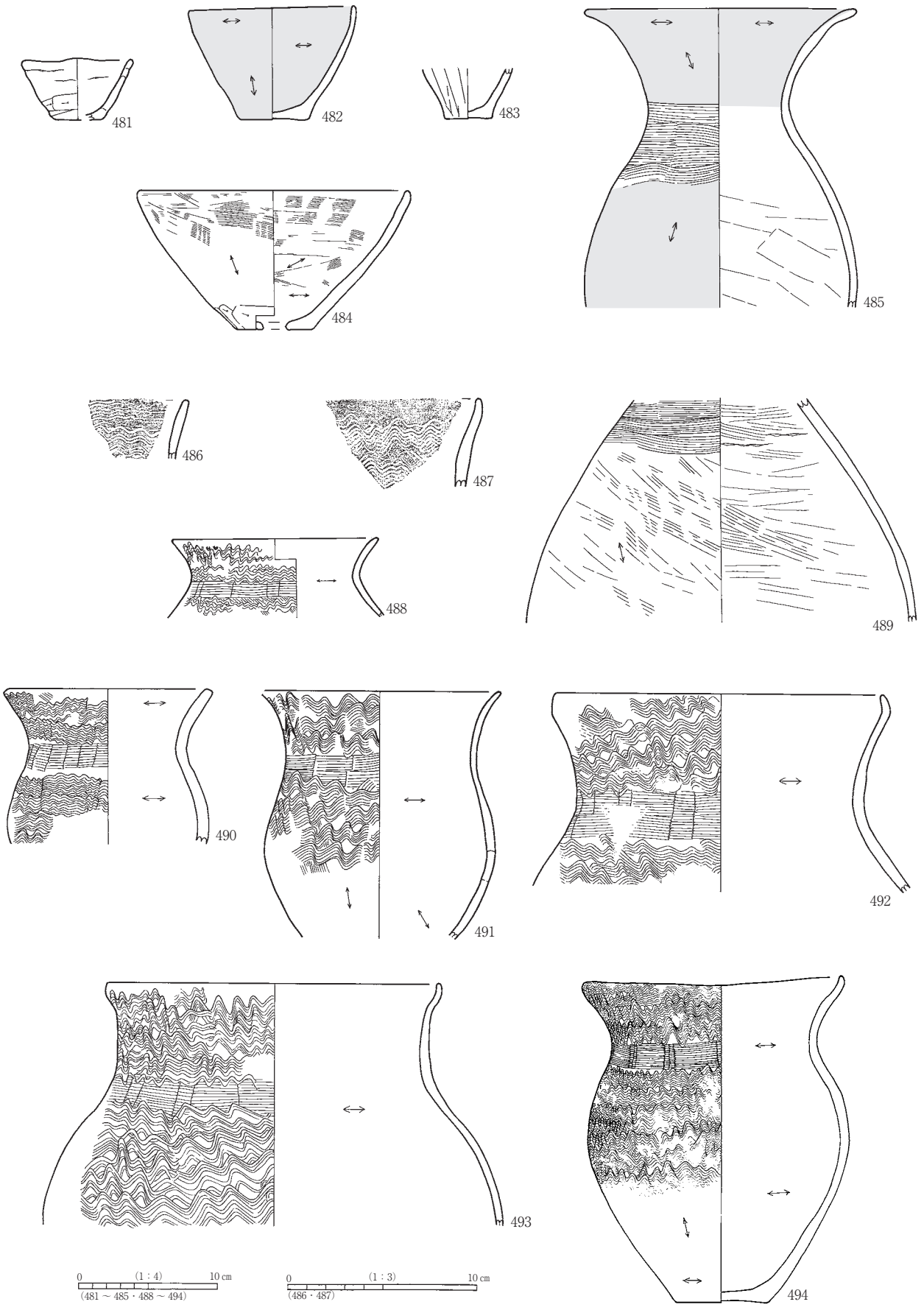
第 49 図　弥生時代後期の個別図 1

SB2



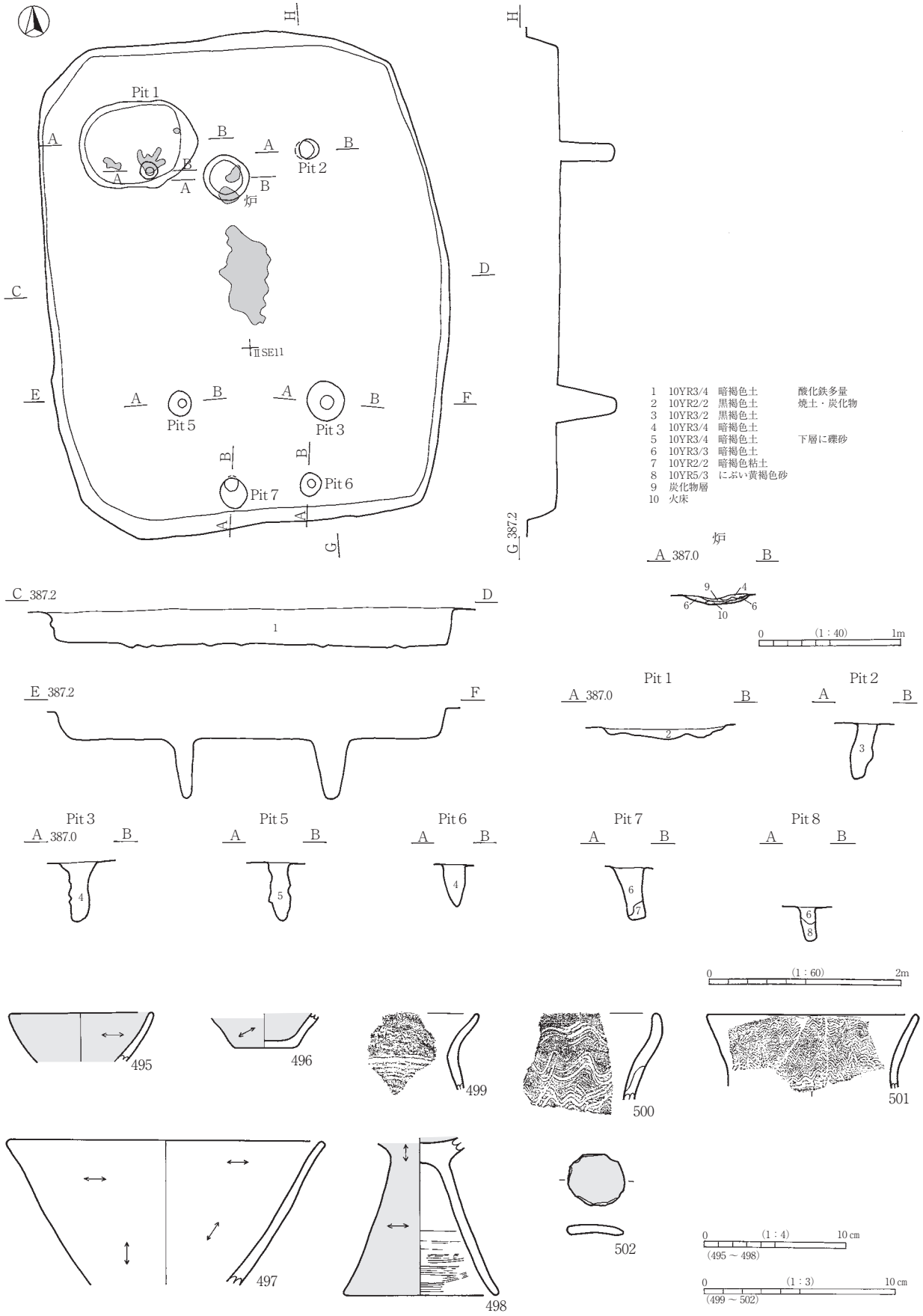
1	10YR3/2	暗褐色砂	炭化物少量
2	10YR2/1	黒色土	炭化物、焼骨片微量
3	10YR3/2	黒褐色砂	炭化物、暗い
4	10YR4/4	褐色砂	
5	10YR3/4	暗褐色砂	
6	10YR2/3	黒褐色砂	
7	10YR2/3	黒褐色砂	炭化物微量
8	10YR2/3	黒褐色砂	炭化物、焼土粒微量
9	10YR2/3	黒褐色砂	灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量 炭化物微量
10	10YR2/3	黒褐色砂	炭化物微量
11	10YR4/2	灰黄褐色砂	黒褐色砂φ2㎝前後のブロック少量
12	10YR2/3	黒褐色砂	灰黄褐色砂少量、炭化物・焼土粒微量
13	10YR2/3	黒褐色砂	暗い
14	10YR2/3	黒褐色砂	灰黄褐色砂・炭化物微量
15	10YR2/3	黒褐色砂	炭化物少量、焼土粒微量、灰
16	10YR4/4	褐色砂	

第 50 図　弥生時代後期の個別図２

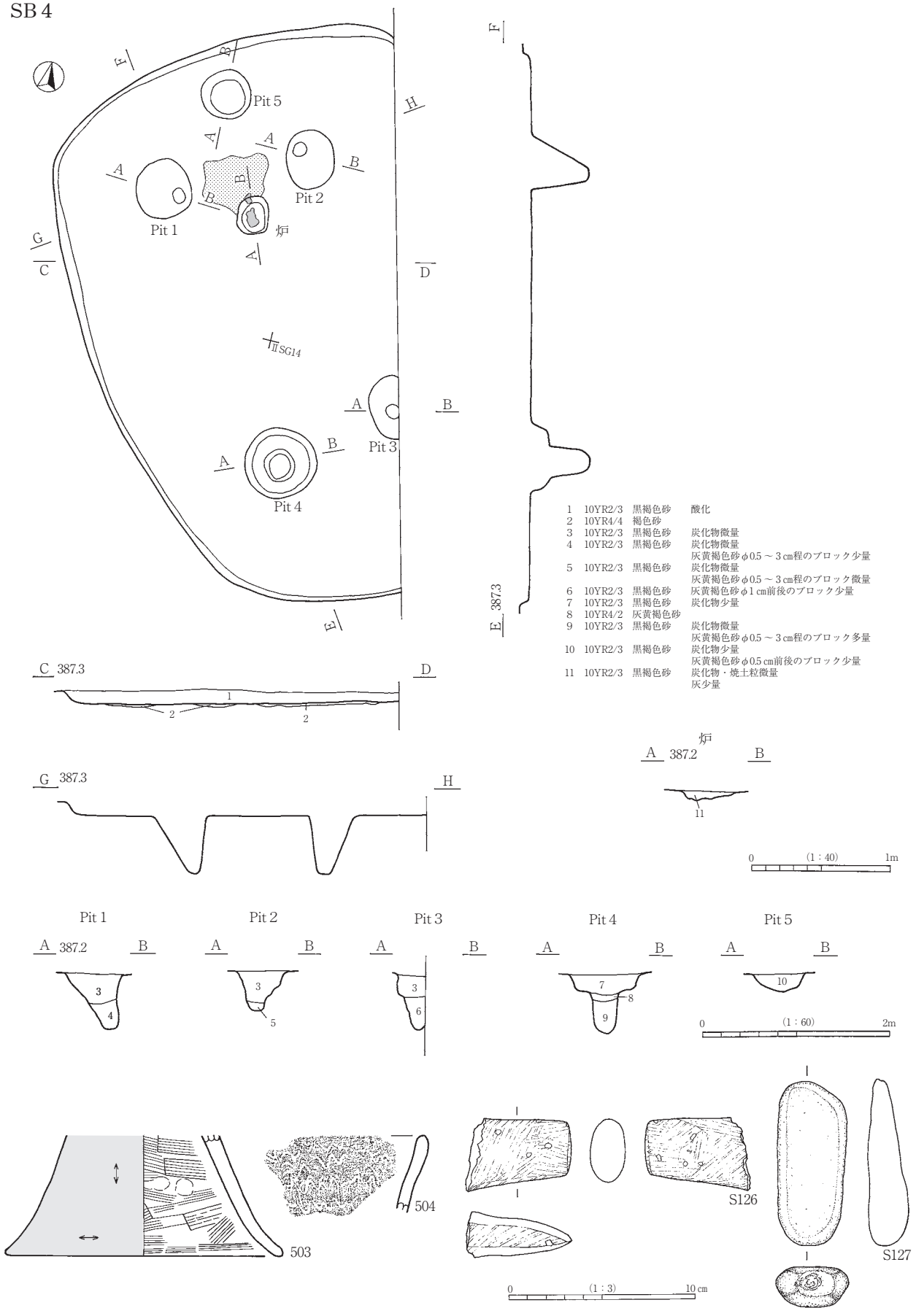


第 51 図　弥生時代後期の個別図３

SB３



第 52 図　弥生時代後期の個別図４



第 53 図　弥生時代後期の個別図５

SB5 （第 48・54・55 図　　PL23） ⑤区ⅡS6・11、ⅡR15

Ⅶ層を剝いで検出。SD20 と重複していたが、平面精査で本址が新しいことを確認した。床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手しようと十字に先行トレンチを入れたところ、床面近くから炭化材の出土がおびただしく、床面が強く酸化・被熱している部分も確認された。炭化材は、竪穴長辺では主軸方向に垂直に、竪穴短辺では放射状に遺存しており、焼失住居であると判断した。

北東－南西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 6.7m、短軸 4.7m、深さ 0.22m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから焼失後に自然埋没したと考える。また、床面は炭化材に覆われ、強く酸化・被熱している箇所が床面中央部を中心に数多く確認された。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。炉は、長軸 48cm、短軸 45cm の不整楕円形を呈する地床炉で、深さ 8cm を測る。また、竪穴中央側には、礫が配されており、炉縁石として利用されていたと思われる。炉床は、一部に酸化・被熱した箇所が認められたが、全体的にあまり酸化は認められなかった。主柱穴間のやや内側に位置する。４本の主柱穴と、地床炉奥に浅いピットが１基検出された。ピット 2・3・5 からは、柱材の一部が出土している。柱材の樹種は、いずれもカヤである（＊2)。

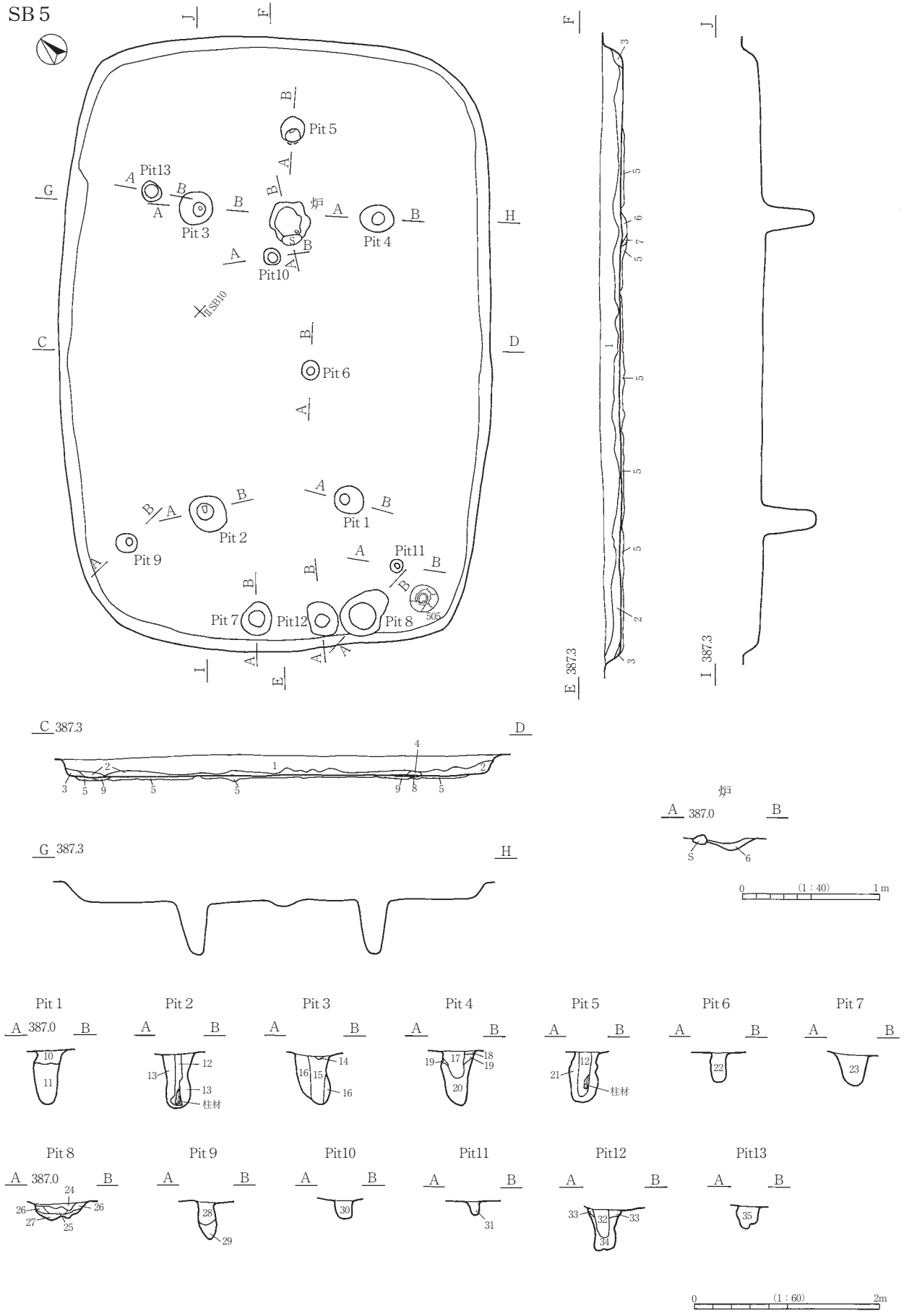
埋土中より土器片や石器が出土している。住居跡南角の床面に、壺（505）の胴部上半が、正位に置かれた状態で出土している。本住居跡の時期は、床から出土している壺（505）より、後期中葉箱清水期と認定される。住居跡の規模や主軸の方向等が、隣接する SB2 ほかと異なり、出土土器群の様相からも SB2・4 等よりも古い時期に所属すると考えられる。床面から出土した炭化材の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 55 ～紀元後 59 年と他の遺構の測定値よりかなり古い年代となった、この年代をそのまま本遺構の埋没年とすることはできないが、測定した他の遺構よりも古い時期に相当する遺構であると推定できよう。

出土遺物（第 55 図 505 ～ 511、S128・S129　　PL29・45・46）

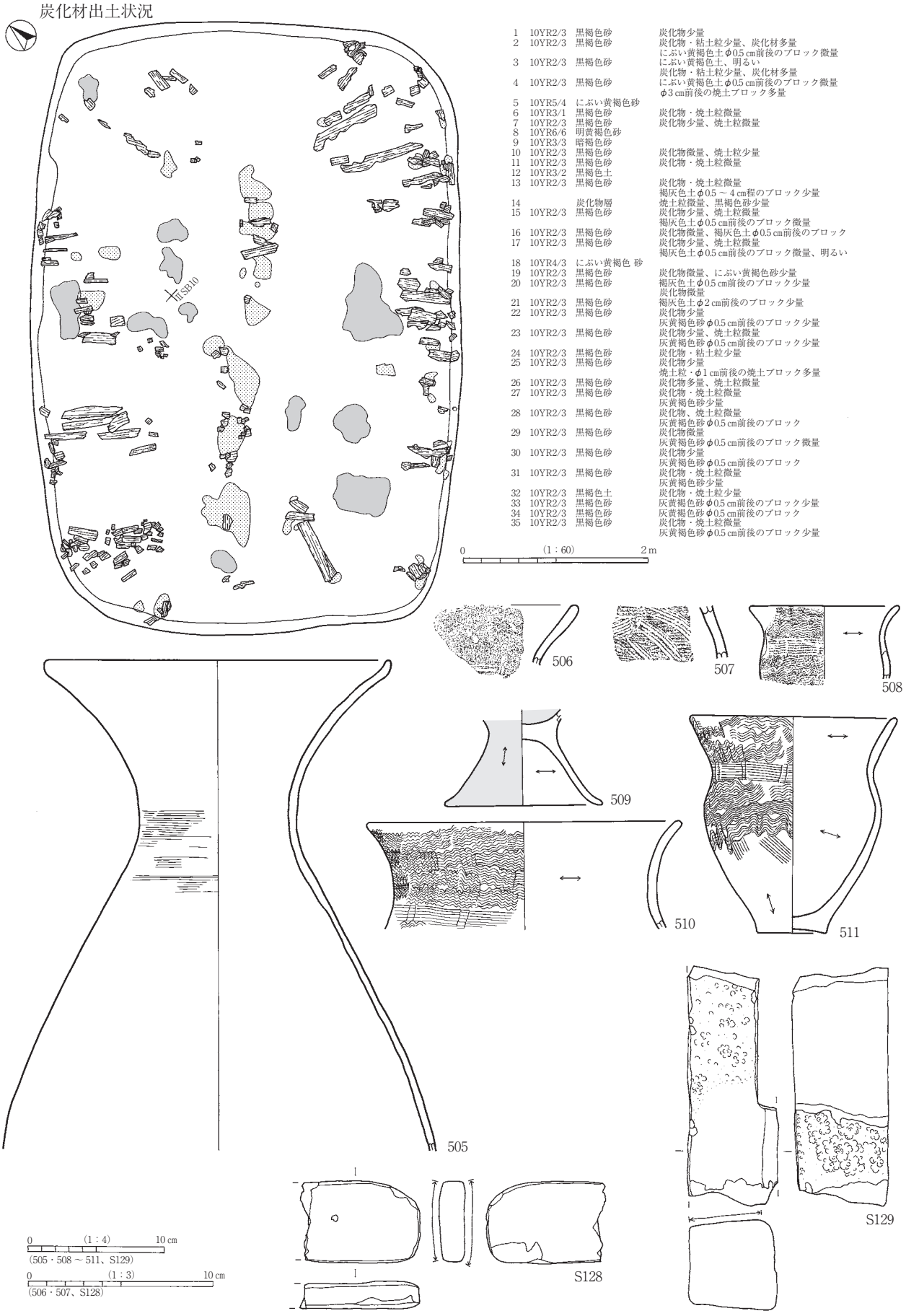
掲載した遺物は、505 は床面、S 129 はピット 8 内、その他は埋土中からの出土である。

505 は胴部が無花果形を呈する壺で、頸部文様帯には直線文が巡らされる。赤彩は認められない。506 は小形の壺の口縁部で、頸部文様帯にはＴ字文が施される。509 は、高坏の脚部で、赤彩が施される。507・508・510・511 は甕である。507 は胴部破片で、縦羽状文が施されている。511 は口縁部が短く外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文を充填させ、頸部には簾状文が巡らされる。

S128 は砥石。細粒砂岩材で 1/2 欠。表裏側面、すべての面が使用されている。S129 は細粒砂岩材の置き砥石兼台石で、長軸の両端部を欠損している。



第 54 図　弥生時代後期の個別図６



第 55 図　弥生時代後期の個別図７

SB6・9・10　（第 48・56・57 図）　⑤区ⅡR20、ⅡS16・21

調査区の関係で、平成 14 年度に東側半分、17 年度に西側半分の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB9・10 及び SB64・SD18 と重複関係があり、SB9・10 とはトレンチを入れ、断面観察により本址の方が新しいことを確認した。SB64 は平成 17 年度の調査で新たに重複関係が確認され、本址が新しいことを確認した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。SB6 の規模は、長軸 6.78m、短軸 5.24m、深さ 0.42m を測る。SB9 の長軸は残存値で 6.22 m、短軸 5.14 m、深さ 0.32 m を測る。SB10 の長・短軸とも残存値で 1.72 m・4.26 m、深さは 0.18 m を測る。埋土は、いずれの住居跡も砂質土の単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。SB6 の竪穴中央部に炭化物の分布が認められる。SB6 の床面は、中央に被熱硬化した焼土があり、この部分を中心に床面は堅緻であるが、南側や壁周辺は堅緻な面が認められなかった。SB9・10 ともに貼り床が確認されている。SB ６の炉は、土器敷き炉である。炉床は酸化・被熱が著しい。主柱穴間のやや内側に位置し、炉北側の床面に炭化物層が広がる。SB9 の炉は、SB6 構築により破壊されていたが、炉の周囲の床面に広がる炭化物層が残存していた。SB6 では、４本の主柱穴が確認されたほか、出入り口施設を構成する２本の柱穴が確認された。SB9 では３基確認された内、ピット５は屋内棟持ち柱の柱穴と想定される。SB10 では主柱穴と考えられるピット１が、SB9 の床下調査の際に確認された。

３軒の住居跡とも、埋土中より土器片や石器片が出土している。その他に SB6 の埋土中からは土製品や木片・骨片が出土している。SB6 では、主柱穴に隣接するピット 15 から、完形に近い台付き甕が１個体出土している。また、SB9 からは金属製品の小破片が出土しているが、上層からの混入の可能性が考えられる。本住居跡の時期は、炉に敷かれていた甕（523・525）より、後期後葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB6 は、SB1・3 と同時期に存在していた可能性がある。

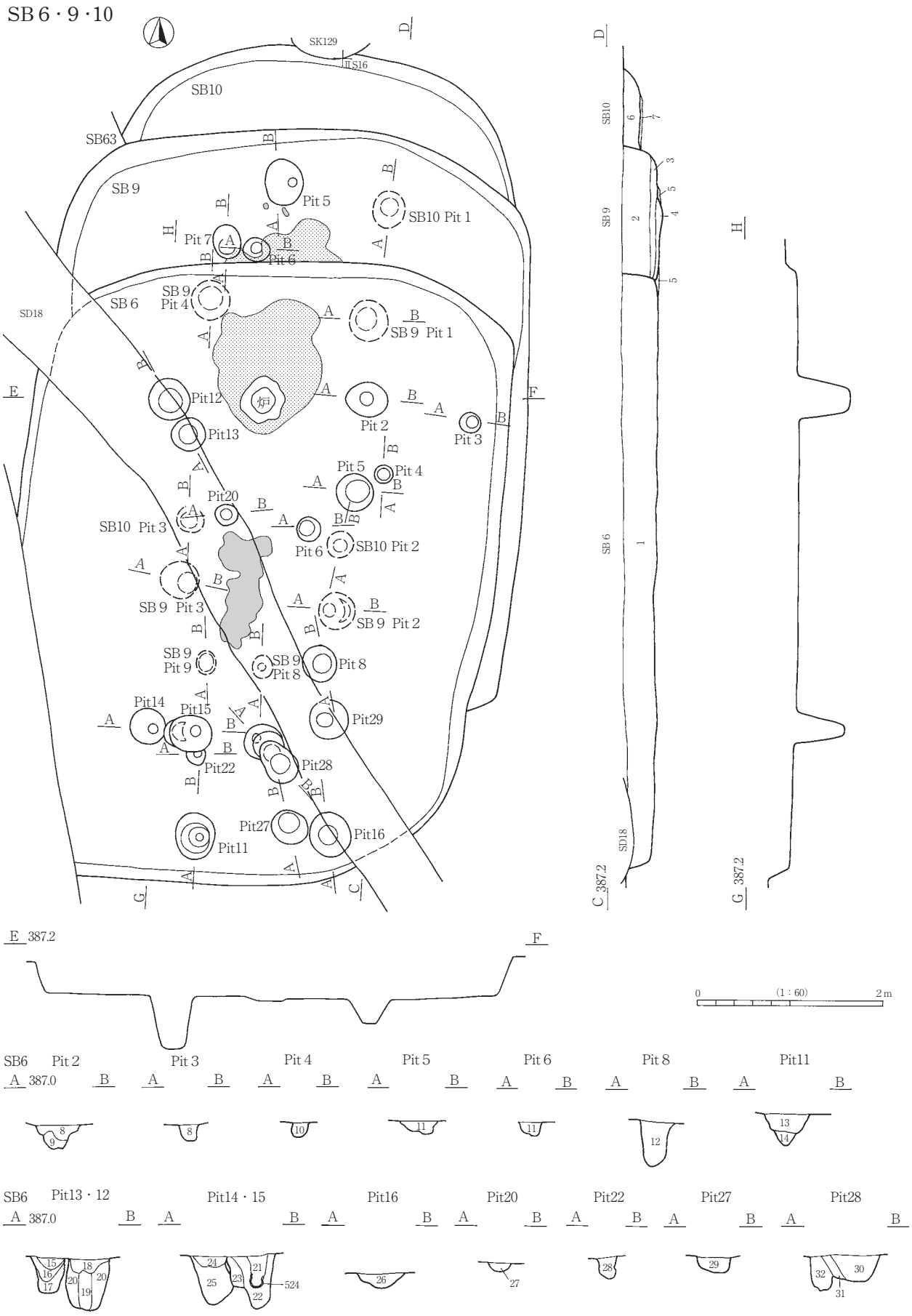
出土遺物（第 57・58 図 512 ～ 535、S130 ～ S137　　PL1・29・30・42・44・45・47）

掲載した遺物は、512 ～ 533・ S130 ～ S136 が SB6 から、534・535・S137 が SB10 からの出土である。531・534・535 は床面、523・525 は炉内、524 はピット 15 内、531 はピット７内、528 はピット 14 内、526 は床下、その他は埋土中からの出土である。

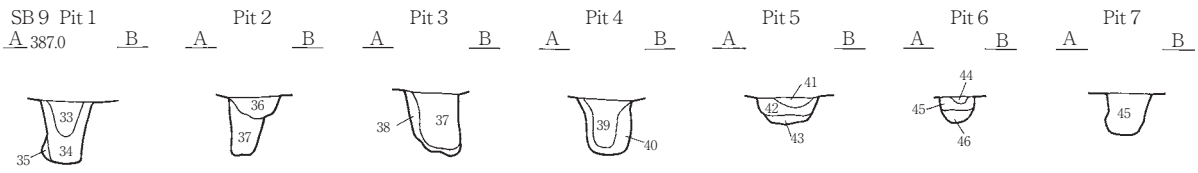
512 ～ 514 は鉢で、512 は底部、513・514 は口縁部破片である。512・514 は赤彩される。515 は、小形の壺の胴部下半で外面は赤彩され、内外面ともに穀物の圧痕が認められた。534 は壺で、頸部文様帯にはＴ字文が施される。赤彩は認められない。516 ～ 525・535 は、甕である。523・525 は胴部から口縁部が弓状に大きく外反する甕である。口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。524・535 は台付甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

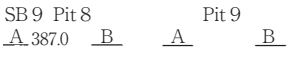
526 はミニチュア土器、527 ～ 533 は加工円盤である。加工円盤は、甕や壺などの破片を加工して作られている。

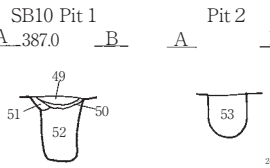
S130 ～ S133 は磨製石鏃。S130・S131 ともに研磨段階の未成品。S133 は全面に研磨が及んだ段階で、側辺部に刃の研ぎ出しがないため、未完成品の可能性が高い。S132 は製品の先端部破片。S134 は２穴式の磨製石包丁、欠損品。破片２点の接合例であるが、１点は赤褐色である。S135 は敲石で、長軸の端部に敲打痕があり、表裏には凹部が認められる。安山岩材。S136 は、暗赤色の碧玉の素材。S137 は円盤状の石製品で、表裏と側面の一部が研磨されている。



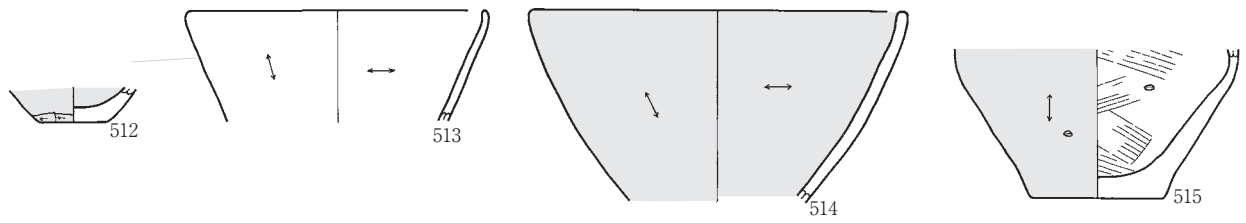
第 56 図　弥生時代後期の個別図８

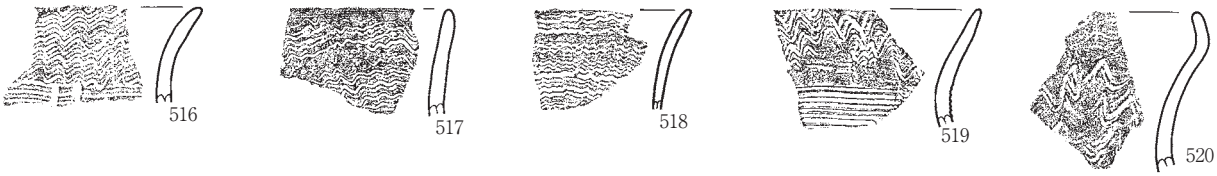


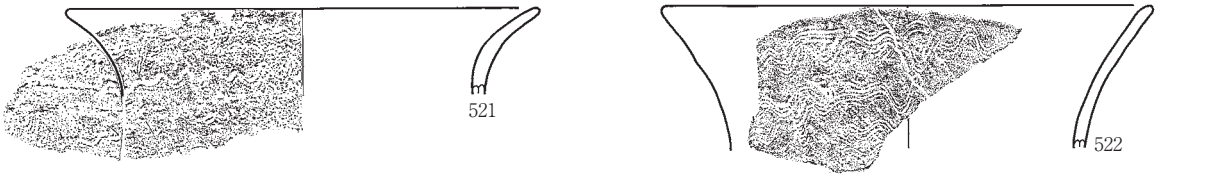


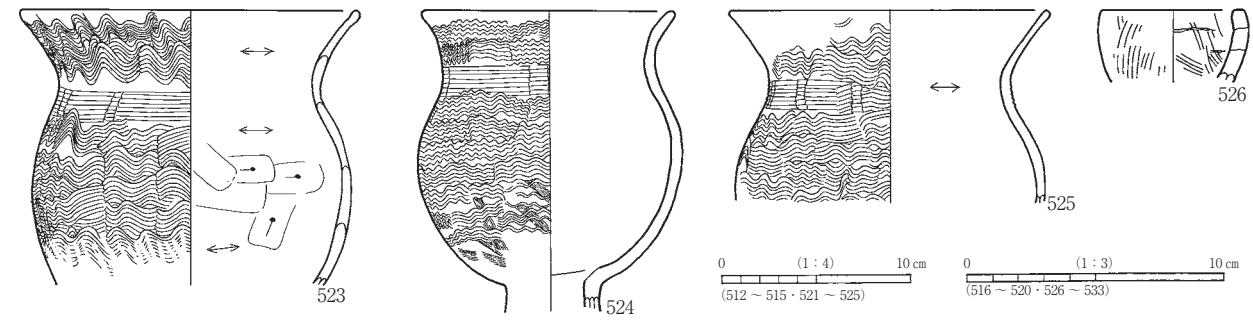


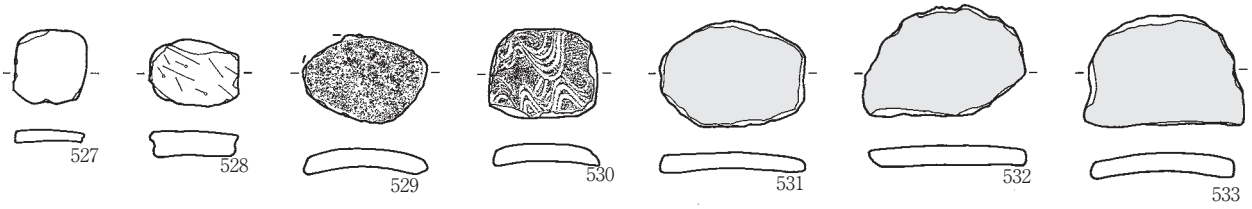
1　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量、酸化
2　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量、明るい、酸化
3　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量
4　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物少量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
5　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色砂微量
6　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量、明るい、わずかに酸化
7　10YR3/4　暗褐色砂　わずかに酸化
8　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
9　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量、φ1 cm前後のブロック少量
10　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ5 cm前後のブロック微量
11　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ5 cm前後のブロック少量、暗い
12　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
　φ0.5 cm前後の礫少量
13　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量、φ0.5 ～ 8 cm程の礫
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量
14　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、φ1 ～ 5 cm程の礫
15　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物少量、φ0.5 cm前後の礫少量
　黒褐色土φ3 cm前後のブロック少量
16　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量、φ1 cm前後の礫微量
　灰黄褐色砂φ5 cm前後のブロック少量
17　10YR4/2　灰黄褐色砂　φ1 cm前後の礫微量
　黒褐色土φ0.5 cm前後のブロック
18　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量、φ1 cm前後の礫少量
　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック少量
19　10YR2/3　黒褐色土
20　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ1 cm前後のブロック少量
　φ0.5 ～ 8 cmの礫少量
21　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量、φ1 cm前後の礫少量
　灰黄褐色砂少量
22　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ1 cm前後のブロック
　φ0.5 cm前後の礫
23　10YR2/2　黒褐色土　0.5 cm前後の礫微量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm程のブロック微量
24　10YR3/1　黒褐色土　灰黄褐色砂・炭化物微量
　φ1 cm前後の礫少量
25　10YR4/2　灰黄褐色砂　φ0.5 ～ 8 cm程の礫多量
26　10YR3/1　黒褐色土　炭化物・焼土粒微量
27　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック
28　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
29　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　φ1 ～ 10 cm程の礫
30　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　φ0.5 ～ 3 cm程の礫
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
31　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ1 cm前後のブロック
　φ0.5 ～ 3 cm程の礫多量
32　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 前後のブロック微量
33　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
34　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック
35　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂
36　10YR2/2　黒褐色土　炭化物・φ1 cm前後のブロック少量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量
37　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量、φ0.5 cm前後の礫少量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
38　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ0.5 cm前後のブロック少量
39　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量、φ0.5 cm前後の礫少量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック
40　10YR4/2　灰黄褐色砂　φ0.5 ～ 3 cm程の礫少量
　黒褐色土φ0.5 ～ 5 cm程のブロック少量
41　10YR3/1　黒褐色土　炭化物・灰黄褐色砂微量
42　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック
43　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック微量
44　10YR3/1　黒褐色土　炭化物、灰黄褐色砂
45　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 ～ 5 cm程のブロック
46　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂少量
47　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量
48　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量、明るい
49　10YR3/1　黒褐色土　炭化物・焼土粒微量
50　10YR4/2　灰黄褐色砂
51　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量
　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック少量
52　10YR3/1　黒褐色土
53　10YR3/1　黒褐色土　φ1 cm前後の礫少量
　灰黄褐色砂φ0.5 ～ 3 cm程のブロック
54　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック多量



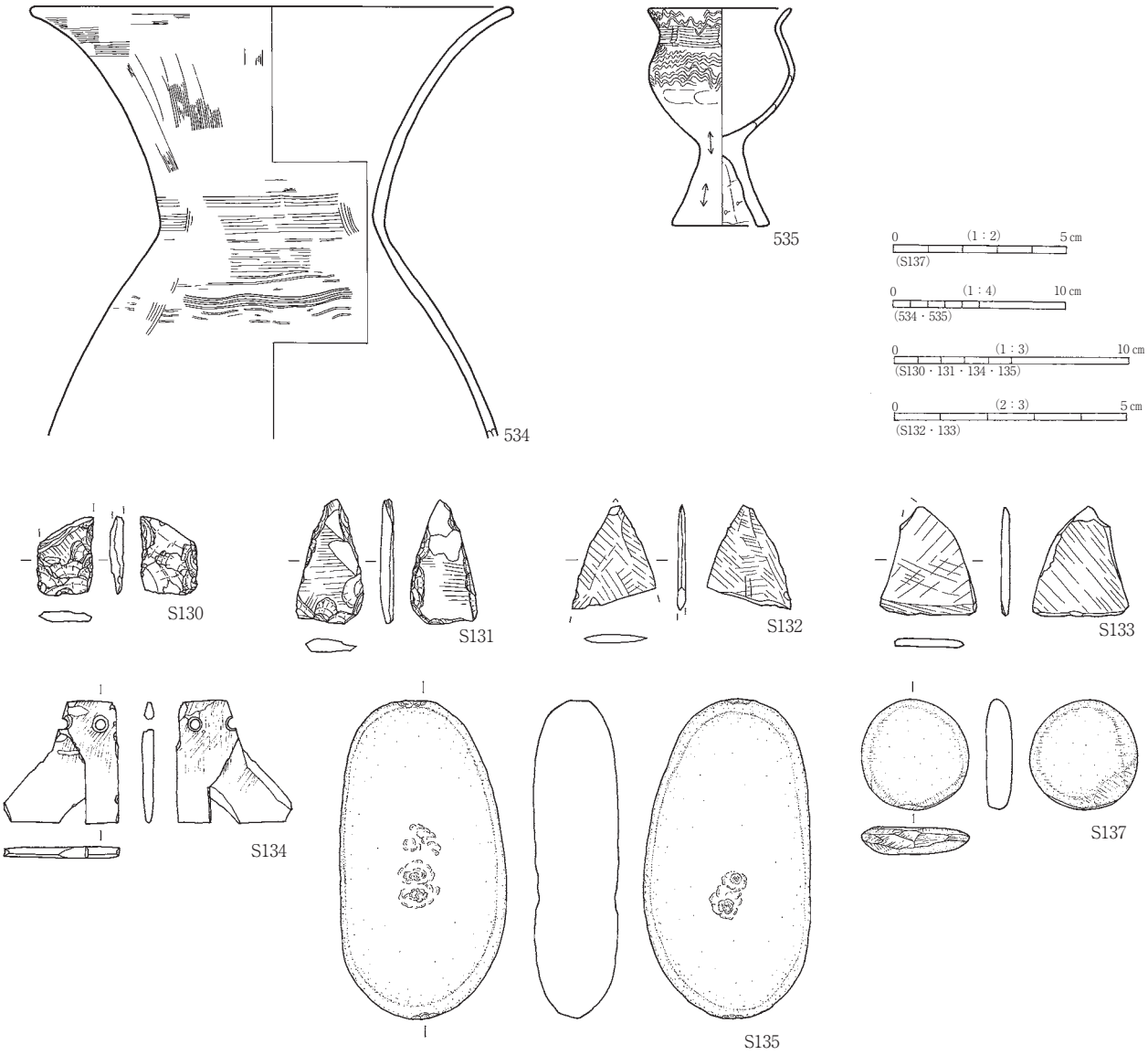








第 57 図　弥生時代後期の個別図９



第 58 図　弥生時代後期の個別図 10

SB7 （第 48・59 図） ⑤区ⅡS17・22

Ⅶ層を剝いで検出。SB4・SD19 と重複していたため、SB4 とはサブトレンチを入れ、SD19 とは平面で本址との切り合いを確認し、SD19 →本址→ SB4 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

大半が調査区外となるが、南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると推定される。規模は、残存部で長軸 3.1m、短軸 2.76m、深さ 0.24m を測る。埋土は、２層に分層できるが、いずれも砂質土で、炭化物を含む土層が竪穴全体に堆積している。堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は、長軸 45cm、短軸 24cm、深さ 6cm を測る不整楕円形を呈する地床炉が床面のほぼ中央で検出されたが、上面に貼り床が施されているため、本址機能の最終段階には使用されていなかったことが明らかである。この炉床は酸化・被熱が著しい。いずれにしろ、本遺跡で確認された該期の住居跡の炉の位置とは大きく異なっている。４本の主柱穴が想定されるが、主軸西側の２本の主柱穴のみ確認した。断面形状はいずれも漏斗状を呈するが、柱痕跡等は確認できなかった。南壁際に浅いピットが２基あり、位置からして出入り口部の柱穴と捉えた。

埋土中より土器片や石器片・イノシシの歯（＊3）が少量出土している。竪穴南西側の床面近くから、やや大きめの土器片が少量出土している。本住居跡の時期は、床から出土している甕（536・537）より、後期中葉箱清水期と認定される。

出土遺物（第 59 図 536 ～ 538　　PL30・42）

掲載した遺物は、536・537 は床面、538 は埋土中からの出土である。

536 は、胴部から口縁部が弓状に大きく外反する甕であるが、頸部の屈曲点は不明瞭である。口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。537 は大形の甕で、胴部は球状を呈する。頸部に簾状文を巡らせ、胴部には単斜線文が施され、ハケ調整が残る。

538 は、加工円盤である。

SB11 （第 48・60 図　　PL23） ⑩区ⅣO16・17・22

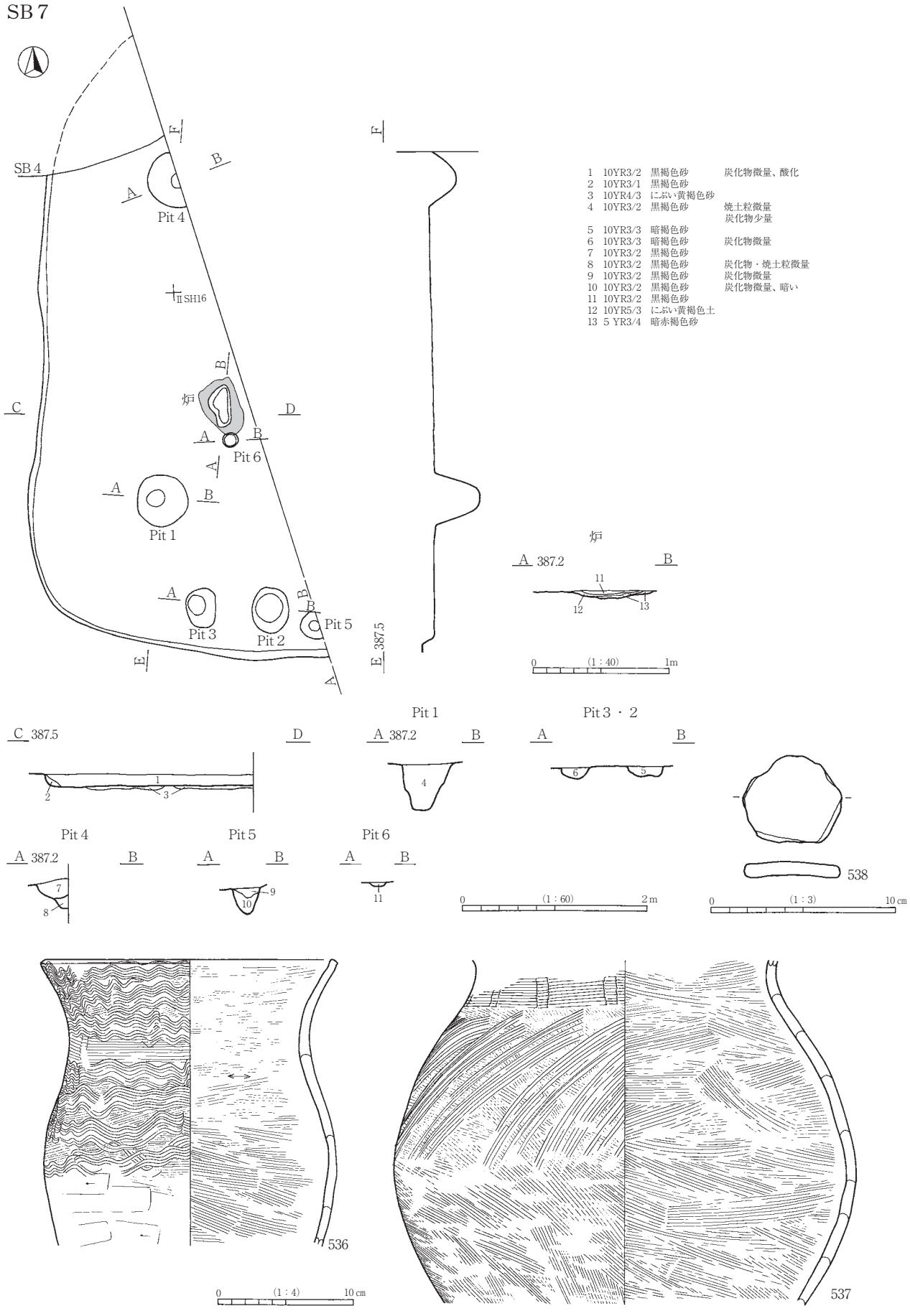
本址周辺のⅦ層中には礫が大量に含まれており、礫の出土状況を記録化した上で礫を除去し、本址を検出した。掘り込み面はⅦ層中にあることは確実であるが、竪穴のプランが明瞭に確認できるのはⅫ層上面である。

北西－南東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.8m、短軸 5.1m、深さ 0.30m を測る。埋土は、黒褐色シルトの単一土層で、堅く締まる。レンズ状の堆積層が認められないことから、人為的な埋め戻しが想定される。床面は、竪穴掘り方は砂礫層まで掘りこんでおり、にぶい黄褐色土を 5cm ほど敷き入れ床面を構築している。炉の掘り込みは明確に認められないが、北側の主柱穴間にわずかに酸化した焼土面が３箇所確認されており、炉跡と認定しておきたい。４本の主柱穴と奥壁に屋内棟持ち柱と想定される柱穴が確認されたほか、出入り口部の柱穴を２本確認した。

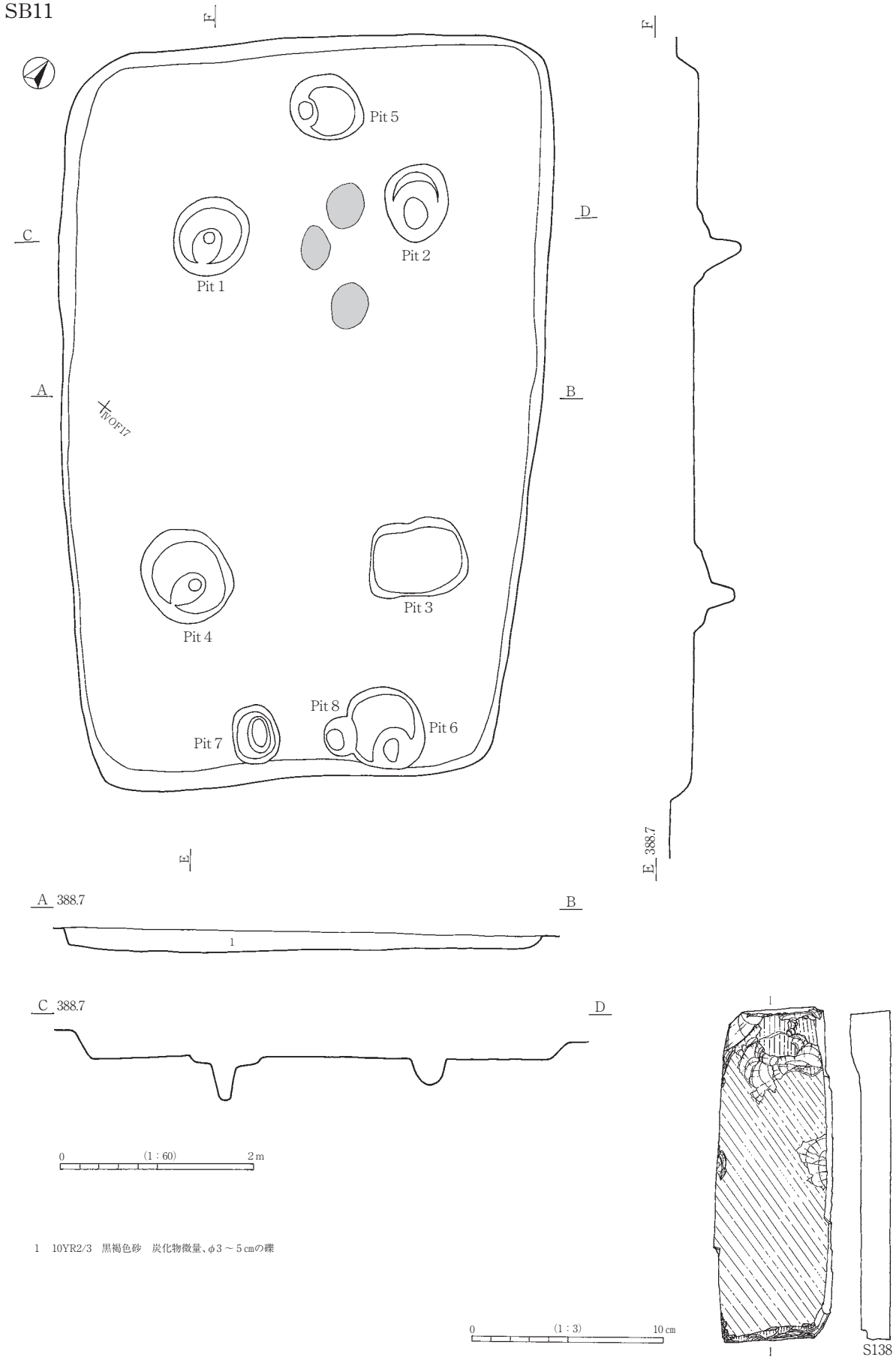
埋土中より土器片や土製品・石器がわずかに出土している。出入り口部左側の床面上に、完形に近い土器が潰れた状態でまとまって出土している（539・542・545・549）。本住居跡の時期は、床面から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。床面出土の土器等から、SB13 と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 60・61 図 539 ～ 549、S138　　PL30・31・42・44・47）

掲載した遺物は、539・542・545・546・549 は床面、543 はピット１内、その他は埋土中からの出土である。

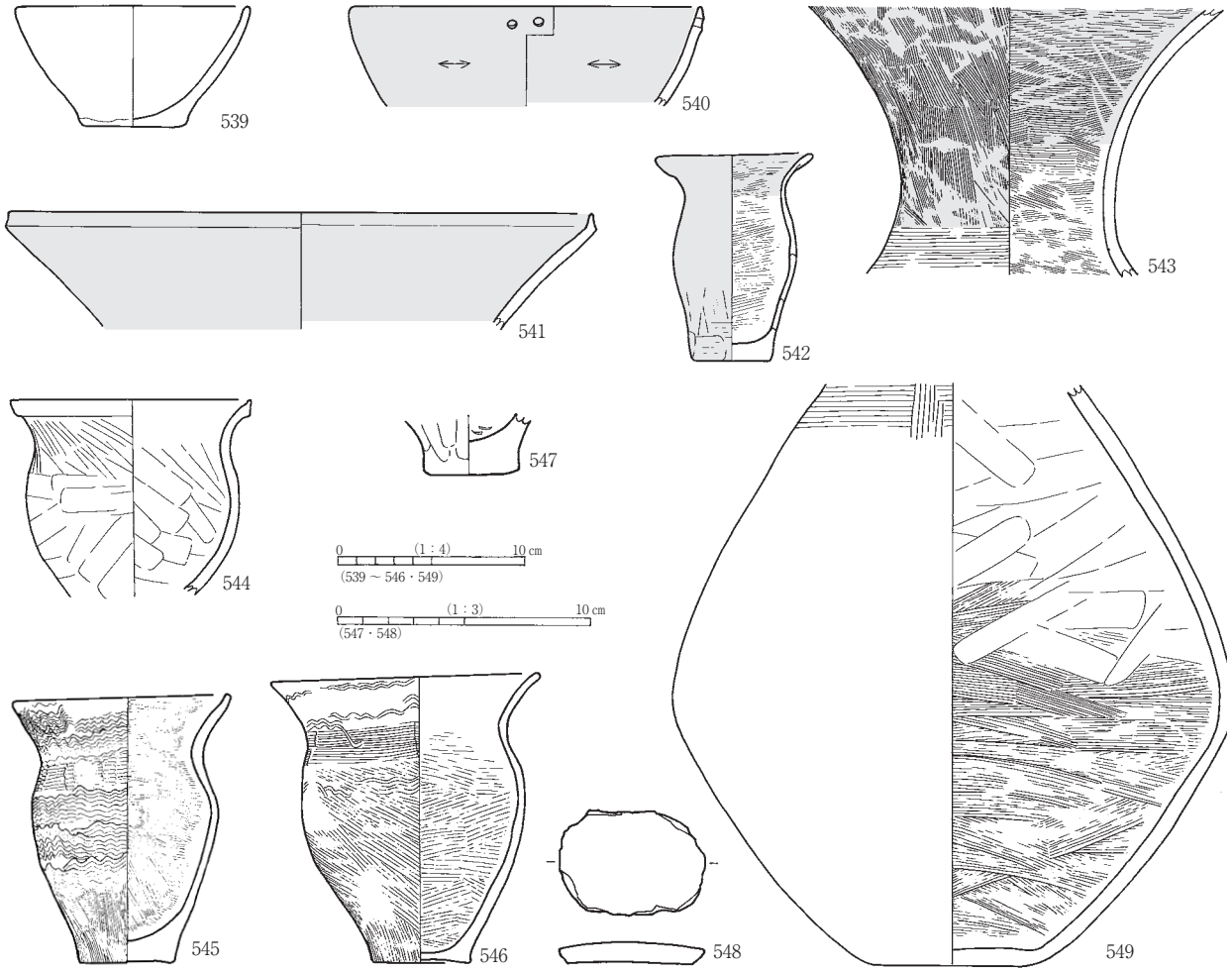


第 59 図　弥生時代後期の個別図 11



1　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量、φ３～５㎝の礫

第 60 図　弥生時代後期の個別図 12



第 61 図　弥生時代後期の個別図 13

539・540 は鉢で、539 は赤彩されない。540 は、鉢の口縁部で、内外面とも赤彩されている。口縁部には一対の円孔が設けられている。541 は、高坏の口縁部と思われる破片で、内外面とも赤彩される。542・543・549 は壺である。542 は小形の壺で、口縁部が大きく開く。口縁内側と、外面が赤彩される。543 は、頸部から口縁付近で、頸部文様帯には直線文が巡らされる。口縁内側と外面が赤彩される。549 は、頸部から底部で、頸部文様帯にはＴ字文が施される。赤彩は認められない。544 は、口縁部が面取りされた北陸系の甕である。545・546 は、口縁部が短く外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填される。頸部には簾状文が巡らされている。

547 はミニチュア土器、548 は加工円盤である。

S138 は、のべ板状を呈した黒色頁岩の素材。

SB13 （第 48・62 図） ⑩区ⅣT1･2

調査区の関係で、平成 14 年度に東側半分、16 年度に西側半分の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。本址周辺のⅦ層中には礫が大量に含まれており、礫の出土状況を記録化した上で礫を除去し、本址を検出した。掘り込み面はⅦ層中にあることは確実であるが、竪穴のプランが明瞭に確認できるのはⅫ層上面である。

北東－南西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。埋土は単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、竪穴中央部分は硬化しているが、他ははっきりしない。炉は、長軸 30cm、短軸 24cm の楕円形を呈する地床炉で、深さ 6cm を測る。炉床は、一部に酸化・被熱した箇所が認められたが、全体的にあまり酸化は認められなかった。主柱穴間のやや内側に位置する。４本の主柱穴が確認されたほか、出入り口部の柱穴を２本確認した。

埋土中より土器片や土製品・石器・骨片がわずかに出土している。本住居跡の時期は、床付近から出土している壺（551）より、後期中葉箱清水期と認定される。床面出土の土器等から、SB11 と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 62・63 図 550 ～ 554、S139 ～ S146　　PL31・44・45）

掲載した遺物は、550 はピット４内、551・ S142・S140・S145・S146 は床面付近、その他は埋土中からの出土である。

550 は坏部が椀形を呈する高坏の坏部で、内外面とも赤彩される。551 は壺で、頸部文様帯には直線文が巡らされ、口縁部は内外面とも赤彩される。552・553 は甕である。552 は口縁部がやや内湾するもの、553 は口縁部が短く外反するもので、口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。554 は、甑である。

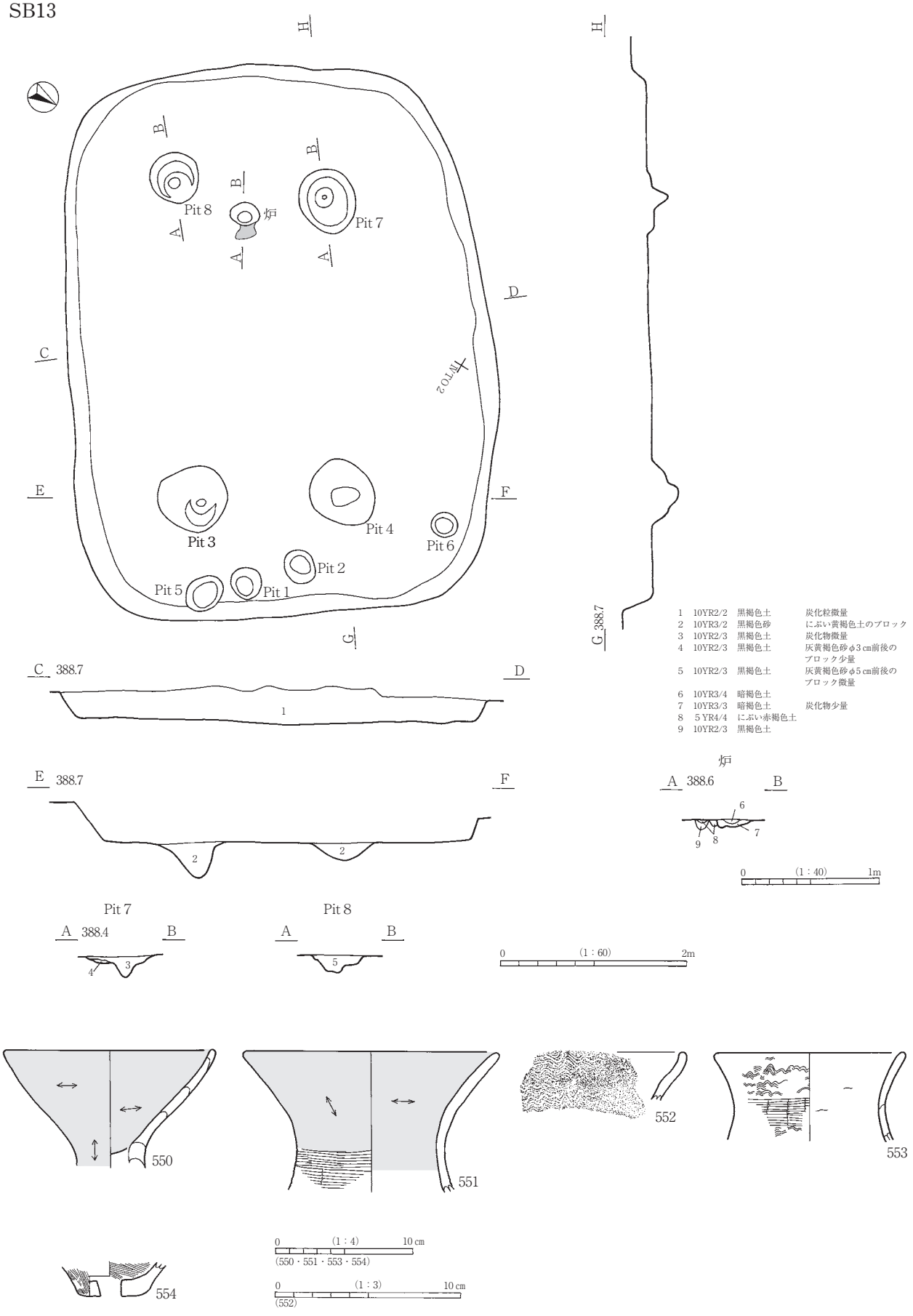
S139 は、黒曜石材の石核。全体は風化面に覆われ、作業面は 90 度の打面転移を伴い２面ある。103g が測られる。S140 は磨製石鏃未成品。S141 は凝灰岩材の楔形石器。挟み打ちは不明瞭だが、上下両端に対向する剝離痕がみられる。S142 は凹基無茎式鏃の欠損例、黒曜石製。S143 は黒曜石材の石錐か。S144 は微細な剝離痕のある石屑、黒曜石材。S145 は凹石か。拳大の礫の端部に、筋状の潰れ痕が２箇所にある。S146 は置き砥石兼台石。表面と側面に明瞭な砥面が形成されている。

SB15 （第 48・64 図　　PL23） ⑥区ⅡX23

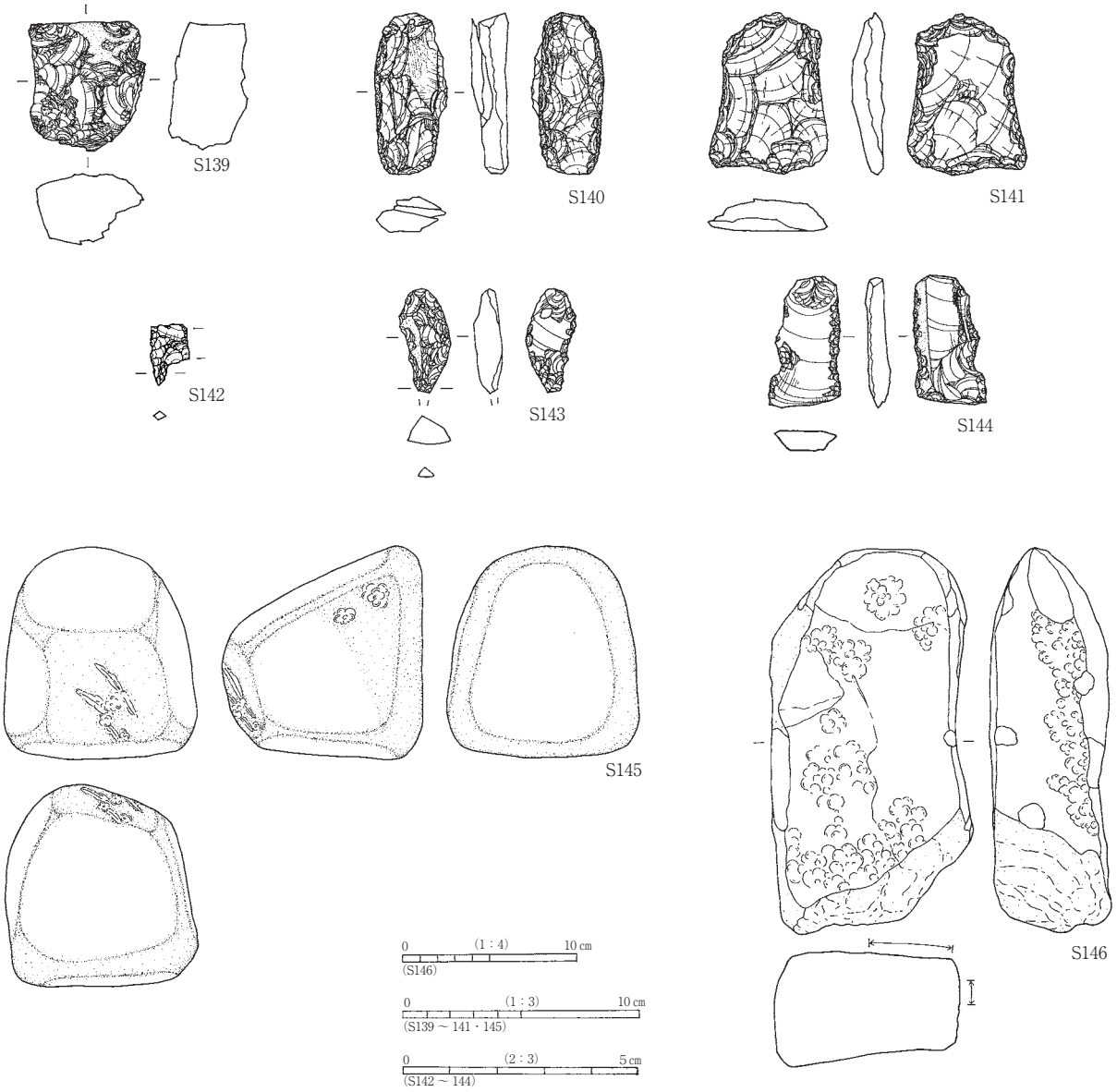
Ⅶ層を剝いで検出。SD48・49 に切られ、SB17 を切って構築されている。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 4.34m、短軸 2.76m、深さ 0.20m を測る。埋土は単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、壁周辺以外は全面硬化する。炉は、明確な掘りこみを伴わない地床炉が北側の床面ほぼ中央で検出された。柱穴は確認できなかった。

埋土中より土器片や土製品・石器が出土している。竪穴南西側の床面近くから、やや大きめの土器片が少量出土している。本住居跡の時期は、床から出土している土器（557・558）より、後期後葉箱清水期と認定される。



第 62 図　弥生時代後期の個別図 14



第 63 図　弥生時代後期の個別図 15

出土遺物（第 64 図 555 ～ 563、S147　　PL31・42・45）

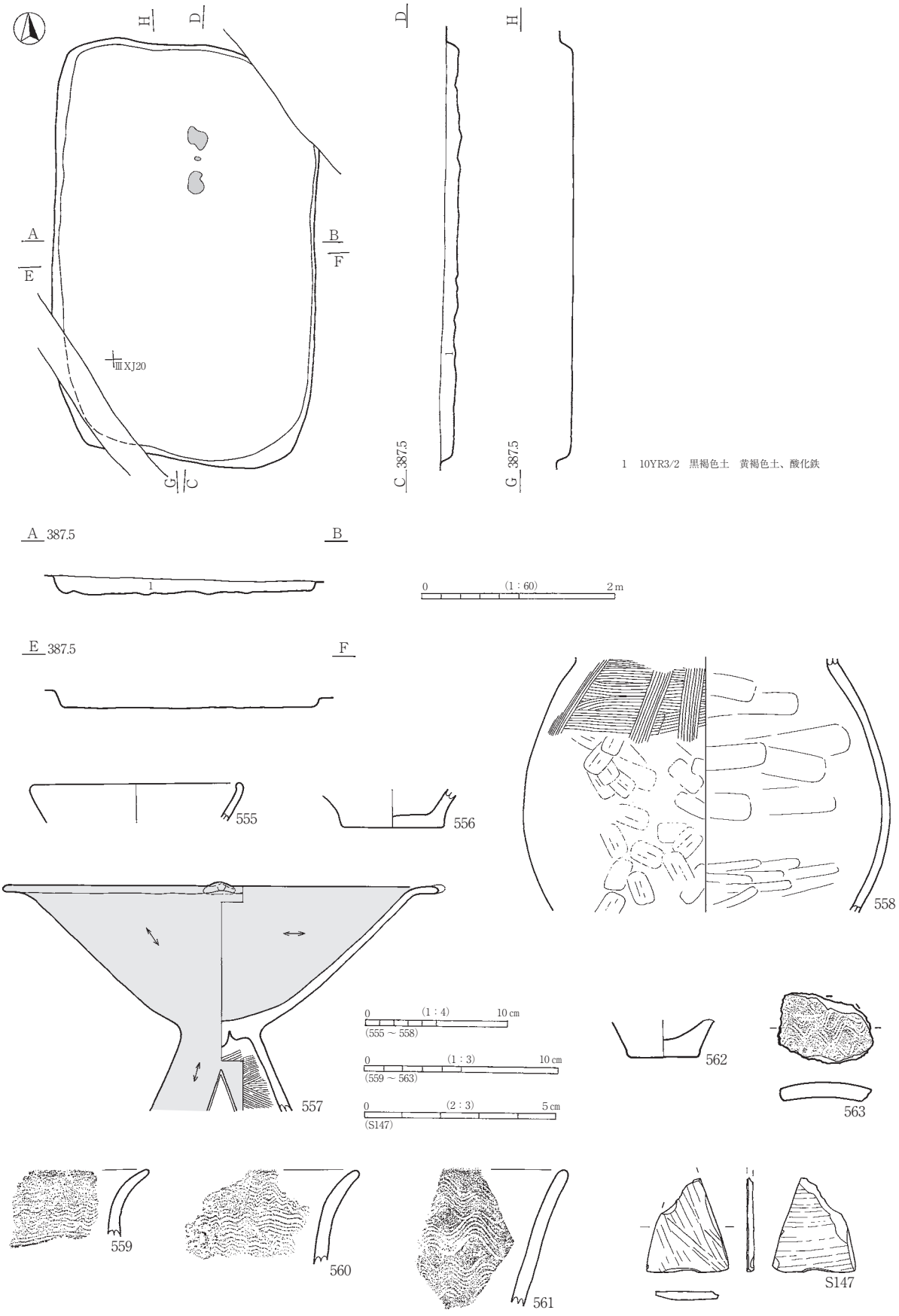
掲載した遺物は、557・558 は床面、その他は埋土中からの出土である。

555 は鉢である。556・558 は壺である。558 は、球胴の壺で、頸部文様帯には 2 条 1 組の垂下文により T 字文が施される。557 は、口縁部が水平に屈曲する鍔状口縁高坏で、脚部に三角透かしをもつ。赤彩されている。559 ～ 561 は、甕の口縁部破片で、いずれも櫛描波状文が充填され、559 は頸部の簾状文がわずかに残る。

562 はミニチュア土器、563 は甕の破片を加工して作られた加工円盤である。

S147 は、凝灰岩材の磨製石鏃未成品。表裏面と側辺部に研磨がみられ、刃部の研ぎ出しはない。

SB15



第 64 図　弥生時代後期の個別図 16

SB16 （第 48・65 図） ⑥区ⅡX22

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出を行い、遺構調査は平成 15 年度に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB19 と重複していたため、サブトレンチを入れ、断面で本址との切り合いを確認し、本址→ SB19 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、出入り口部の柱穴位置から推定して長軸は 7.02m、短軸 5.58m、深さ 0.26m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。土層断面及び炉の作り替え等から、最低２回の床の貼り替えが認められる。炉は、径 45cm、深さ 4cm を測る円形を呈する地床炉で、主柱穴間のやや外側に位置する。土層断面等から２回の作り替えが認められるが、当初及び２回目の炉は土器敷き炉であった。４本の主柱穴と屋内棟持ち柱と想定される柱穴を１本、出入り口部の柱穴を２本把握した。SB19 の床下で確認した柱穴もあり、その位置および埋土から本址に伴う柱穴と判断した。柱穴の位置を替えることなく、床及び炉の作り替えが実行されたと考える。

埋土中より土器片や石器片・骨片が出土している。本住居跡の時期は、炉から出土している土器（571 ～ 573）より、後期中葉箱清水期と認定される。

出土遺物（第 66 図 564 ～ 573、S148・S149　　PL31・32・44・47）

掲載した遺物は、571 ～ 573 は炉内、564 はピット 8 内、S149 はピット 4 内、その他は埋土中からの出土である。

564 は鉢、565 は赤彩深鉢である。566・571 は壺である。566 は、底部で赤彩されている。571 は、壺の頸部から胴部で、頸部文様帯にはＴ字文が施される。567 ～ 570・572・573 は甕である。567 ～ 570 は口縁で、櫛描波状文が充填される。572 は頸部から胴部で、櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文がわずかに残る。573 は底部である。

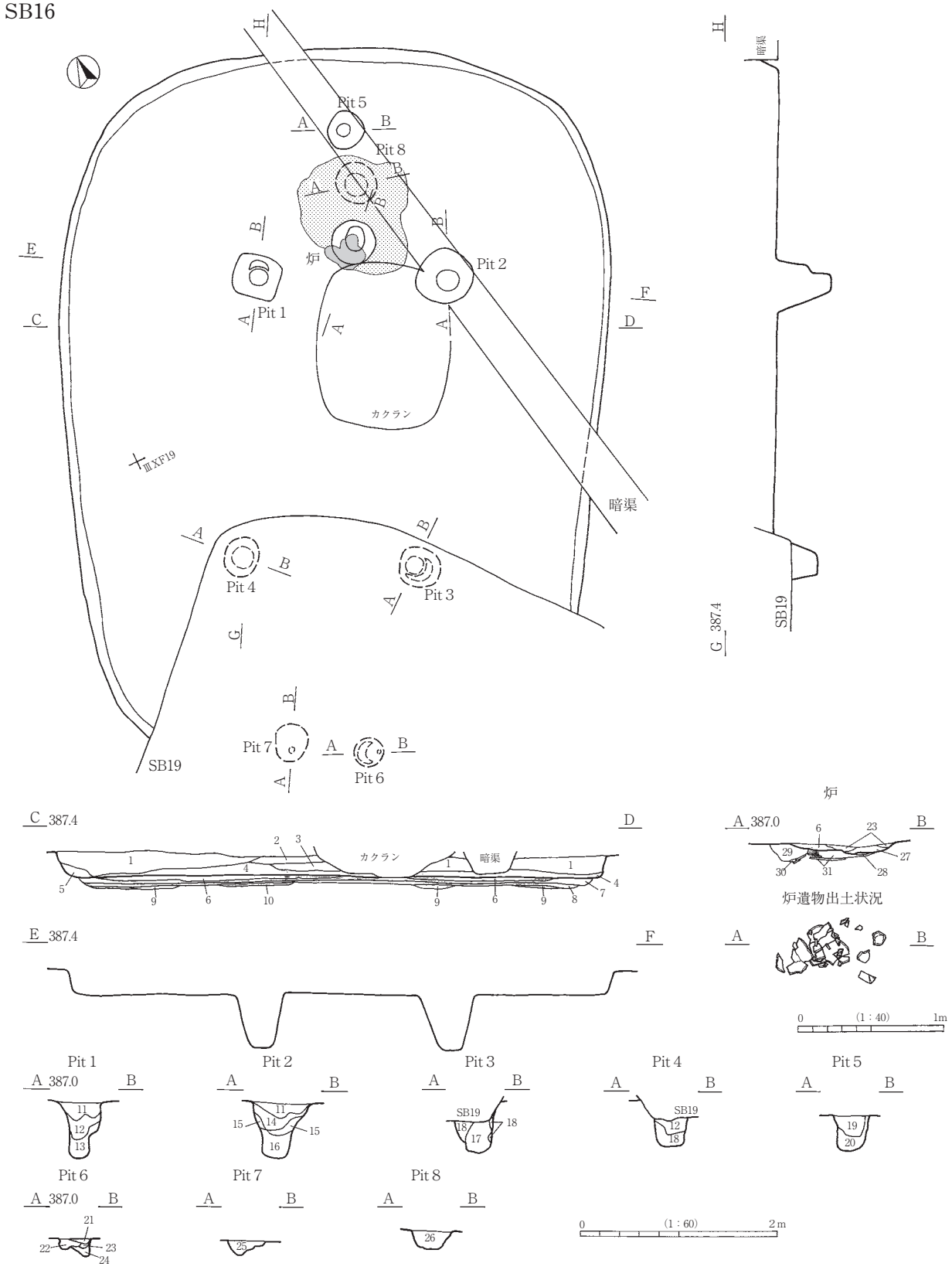
S148 は、黒曜石材の有茎式鏃。側辺部に張り出し部を有する形態。S149 は石英岩材の敲石。

SB17 （第 48・67 図　　PL24） ⑥区ⅡX22・23、ⅢD2・3

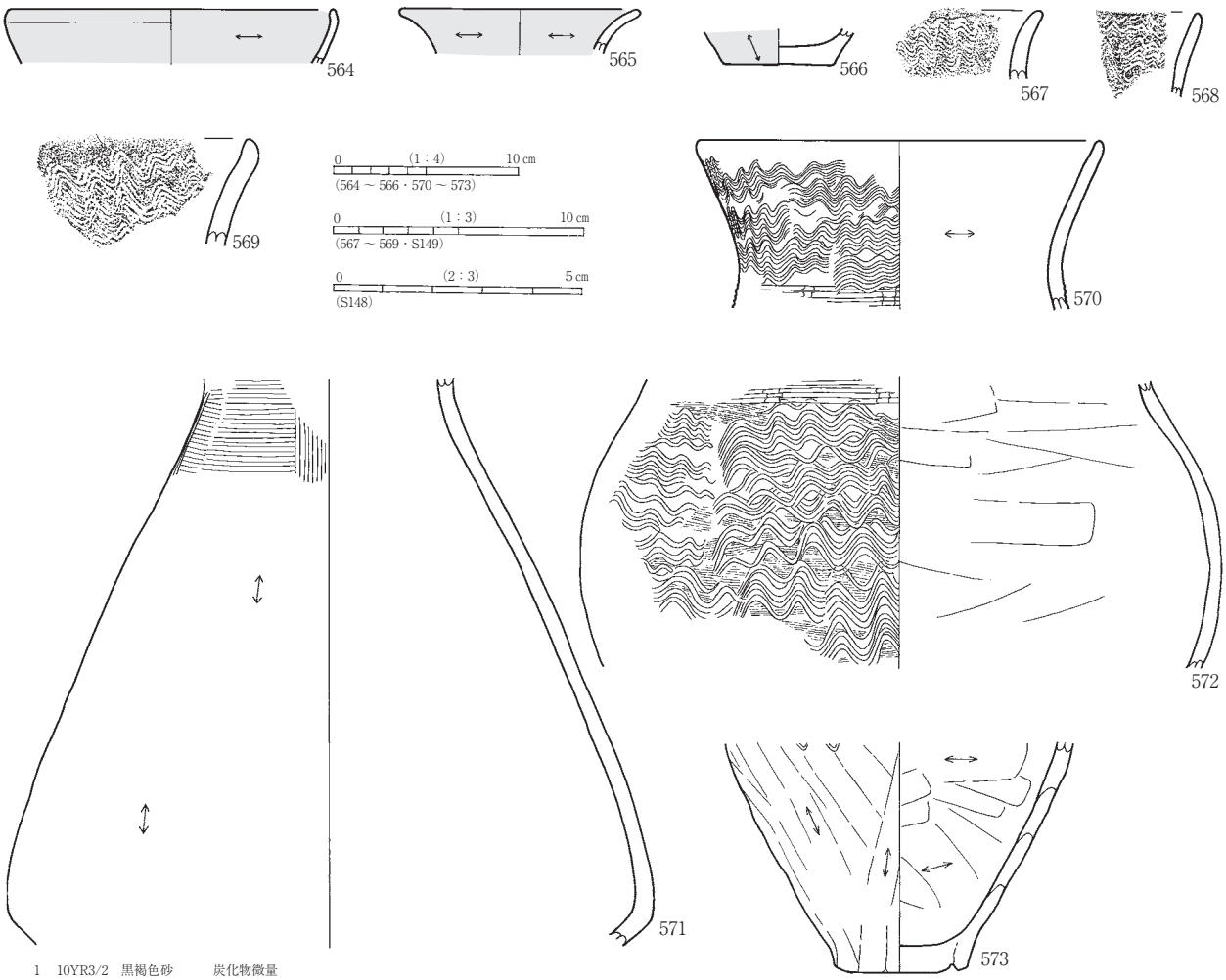
調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出を行い、遺構調査は平成 15 年度に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。明確な新旧関係で本址（旧）と SB15、SD48、SK307（新）は捉えられたが、遺構検出当初はさらに、２軒の住居跡が重複しているものと判断していた。遺構の調査を進めていく上で、同一住居の作り替えと確認できた。

北西－南東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 8.0m、短軸 5.34m、深さ 0.22m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、炉周辺を中心に硬化している。炉は、地床炉から土器敷き炉へと作り替えられている。敷かれている土器片は、同一個体の甕形土器で、故意に割られ三重に重ねて敷かれている。土器及び火床は強く被熱。炭化物が炉の南西部に大きく広がる。４本の主柱穴が想定されるが、奥壁側の主柱穴は新旧２箇所で、主軸方向でみれば主柱穴間の距離は短縮される。旧主柱穴は人為的に埋め戻している。上屋全体の規模が縮小されたかどうかは不明であるが、主柱の建て替えと炉の作り替えが呼応していたと考える。その他、出入り口部に関わる柱穴や屋内棟持ち柱と想定される柱穴等が確認されている。

埋土中より土器片や土製品・石器が出土している。本住居跡の時期は、炉から出土している甕（588）より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB18 と同時期に存在していた可能性があり、本址は、規模の大きさや建て替えの状況から集落の中で中核的な役割を持っていたことが予想され

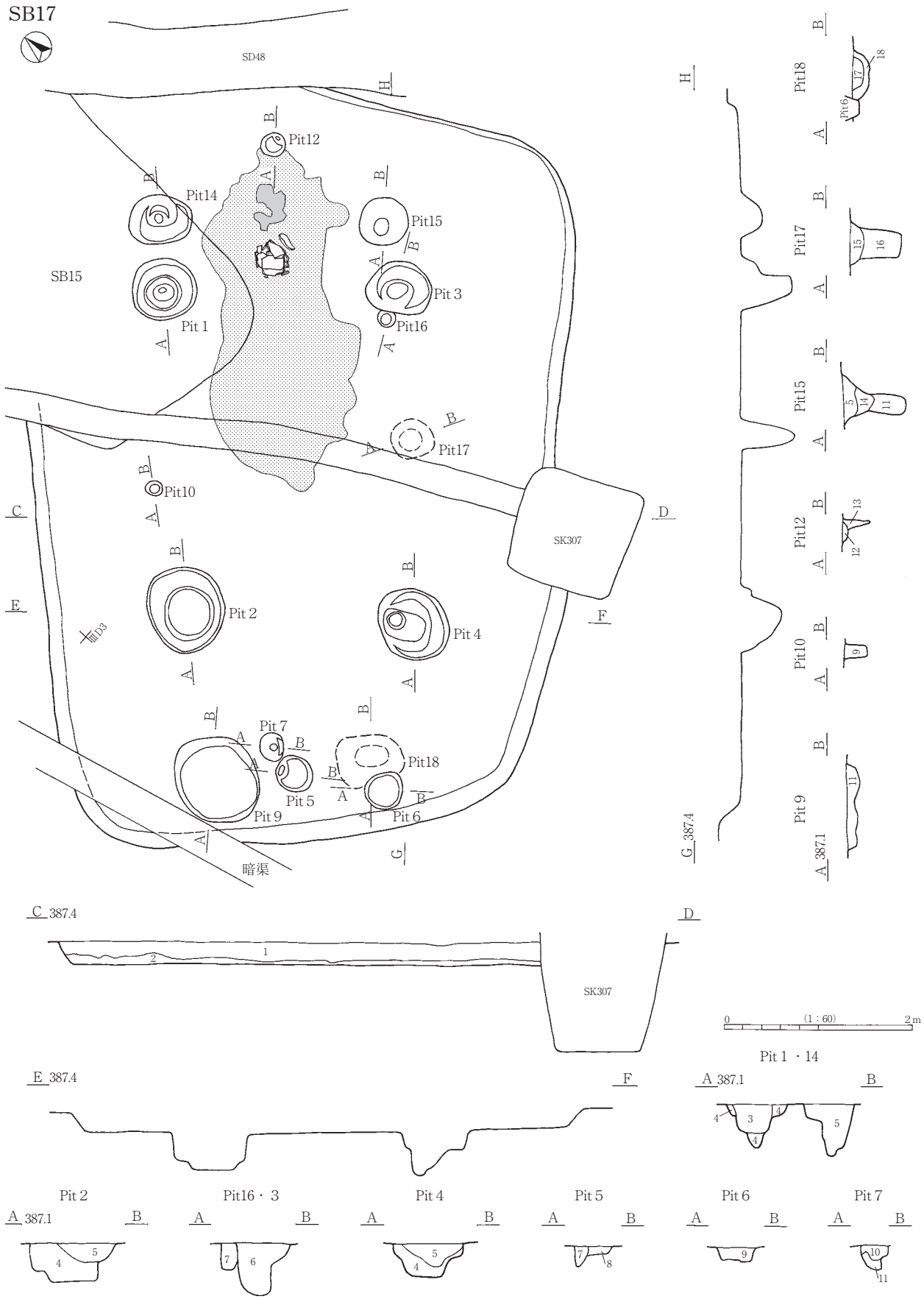


第 65 図　弥生時代後期の個別図 17

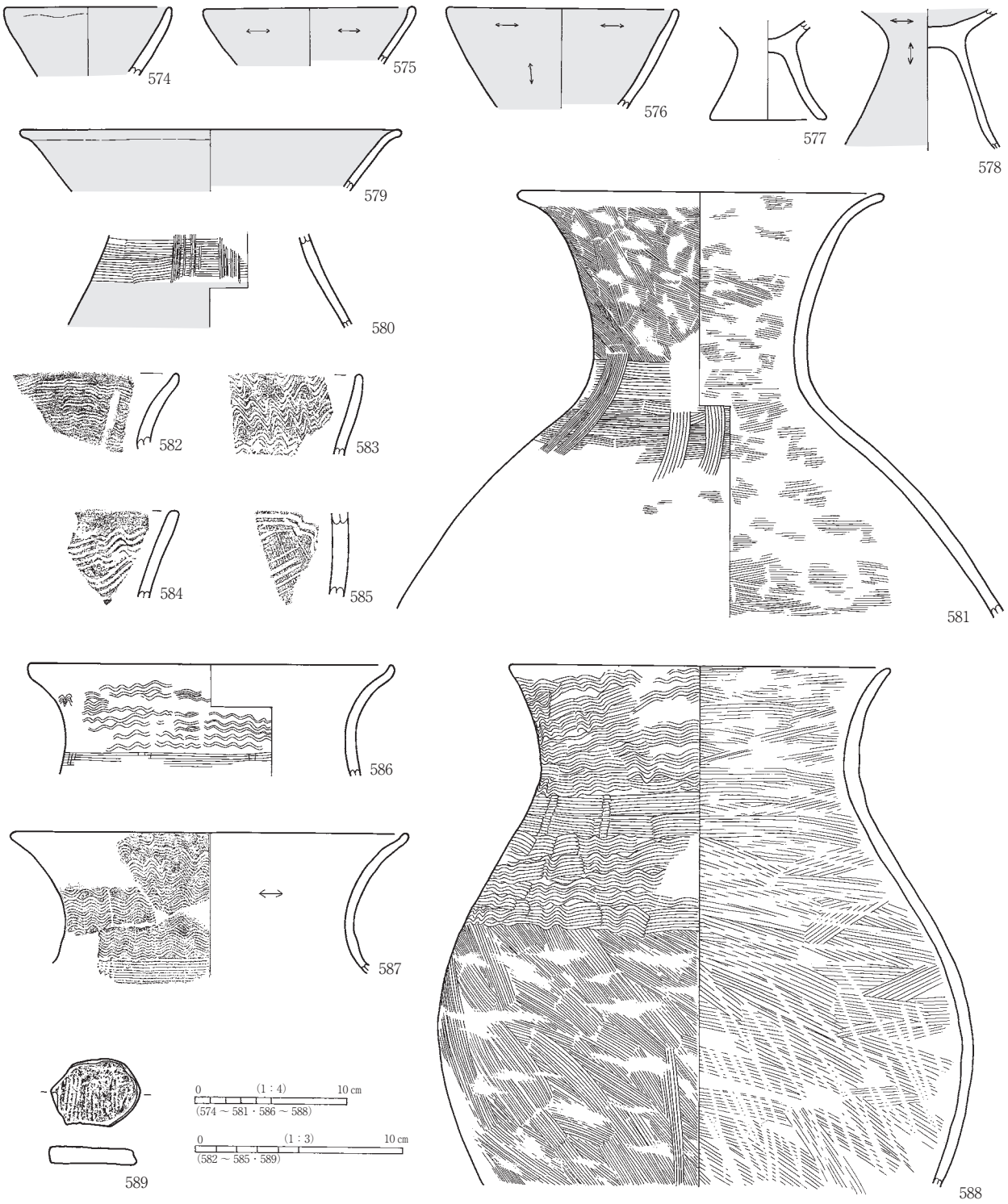


1　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物微量
2　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物微量
3　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物微量、明るい
4　10YR3/1　黒褐色土
5　10YR3/2　黒褐色砂　にぶい黄褐色砂φ3 cm前後のブロック微量
6　10YR3/4　暗褐色土
7　10YR3/1　黒褐色土　下層に厚さ0.5 cm前後の炭化物層
8　10YR3/1　黒褐色土　下層に厚さ0.5 cm前後の炭化物層、明るい
9　10YR3/1　黒褐色砂　灰黄褐色φ0.5 cm前後のブロック少量
10　10YR3/1　黒褐色土　下層に厚さ0.5 cm前後の炭化物層
11　10YR3/3　暗褐色土　酸化鉄
12　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
13　10YR2/2　黒褐色土　にぶい黄色砂
14　10YR2/2　黒褐色土
15　10YR4/4　褐色土　黒褐色土ブロック多量
16　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、にぶい黄色砂多量
17　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、にぶい黄色砂ブロック
18　10YR4/4　褐色土　黒褐色土多量
19　10YR3/2　黒褐色土　にぶい黄色砂ブロック
20　10YR2/2　黒褐色土　にぶい黄色砂ブロック多量
21　10YR3/2　黒褐色土　黒褐色土少量
22　10YR3/3　暗褐色土　にぶい黄色砂多量
23　10YR3/2　黒褐色土
24　10YR3/2　黒褐色土　にぶい黄色砂多量
25　10YR3/2　黒褐色土　にぶい黄色砂ブロック多量
26　10YR2/2　黒褐色土　にぶい黄色砂・黒褐色土多量
27　10YR3/2　黒褐色土　炭化物少量
28　5YR2/3　極暗赤褐色土
29　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
30　炭化物層
31　10YR3/2　黒褐色土

第 66 図　弥生時代後期の個別図 18

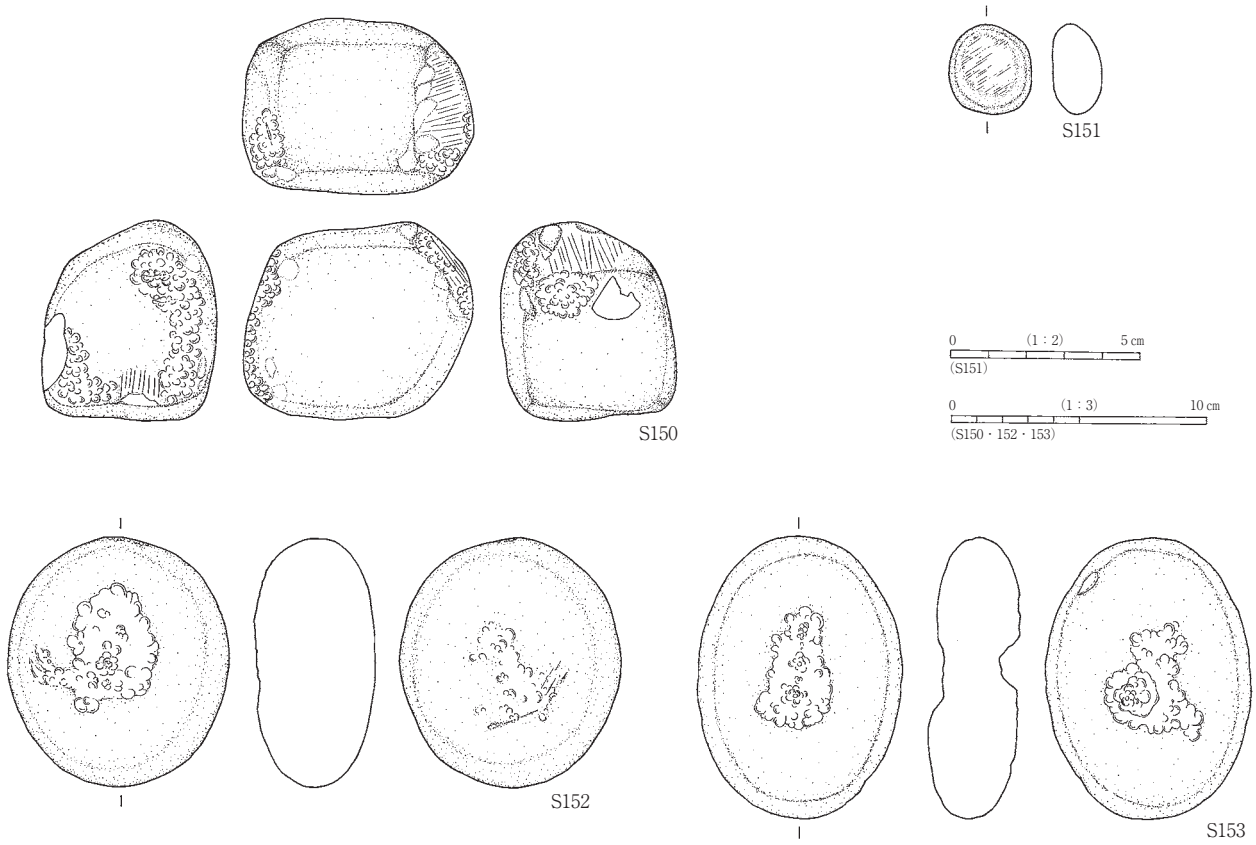


第 67 図　弥生時代後期の個別図 19



1　10YR3/3　暗褐色土　酸化鉄
2　10YR3/4　暗褐色土
3　10YR2/3　黒褐色土　φ0.5～2cm炭化物微量、φ2～4cm礫
　　φ2～6cmにぶい黄褐色土ブロック少量
4　10YR3/3　暗褐色土　φ0.2cm炭化物微量
　　にぶい黄褐色土多量
5　10YR2/3　暗褐色土　φ0.5～2cm炭化物微量
　　にぶい黄褐色土微量、φ2～4cm礫
6　10YR2/3　暗褐色土　φ0.5cm炭化物微量
　　φ2～4cmにぶい黄褐色土ブロック微量
7　10YR2/3　黒褐色土　にぶい黄褐色土微量
8　10YR3/3　暗褐色土　にぶい黄褐色土
9　10YR2/3　黒褐色土　φ0.2cm炭化物微量
10　10YR2/3　黒褐色土　φ0.2～0.3cm炭化物微量
　　φ2～3cmにぶい黄褐色土ブロック微量
11　10YR2/3　黒褐色土　にぶい黄褐色土少量
12　10YR2/3　黒褐色土　φ0.5～2cm炭化物少量
　　0.5～2cmにぶい黄褐色土ブロック少量
13　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量、にぶい黄褐色土少量
14　10YR2/3　黒褐色土　にぶい黄褐色土少量、暗い
15　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物微量、灰黄褐色砂
16　10YR3/2　黒褐色砂　灰黄褐色砂多量
17　10YR3/2　黒褐色砂　灰黄褐色砂φ3cm前後のブロック
18　10YR3/2　黒褐色砂　灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック少量

第68図　弥生時代後期の個別図20



第 69 図　弥生時代後期の個別図 21

る。炉南西側の炭化物層内から出土した炭化したモモの核で、炭素年代測定を行った。測定値は 214 ～ 355 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本遺構の埋没年と考える。

出土遺物（第 68・69 図 574 ～ 589、S150 ～ S153　　PL32・42・45・47）

掲載した遺物は、581・ S150 は床面、588 は炉内、その他は埋土中からの出土である。

574 ～ 576 は鉢で、すべて赤彩されている。577 は台付甕である。578・579 は高坏である。579 は鍔状口縁高坏の口縁部で赤彩されている。580・581 は壺で、頸部文様帯には 2 条 1 組の垂下文により T 字文が施される。580 は赤彩されている。582 ～ 588 は甕である。582 ～ 584 は、口縁部破片で、櫛描波状文が充填される。585 は、小片ではっきりしないが、単斜線文が施される胴上部の破片と思われる。586 ～ 588 は、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされるもので、588 は胴部が球胴である。

589 は、甕の破片を加工して作られた加工円盤である。

S150 は硬砂岩材の敲石。拳大で、凸状の端部を使用している。299g が測られる。S151 は玉石で、表面がツルツルしている。S152 と S153 は凹石で、ともに安山岩材。S152 はアバタ状の凹部で、S153 はロート状の凹部である。

SB18 （第 48・70 図　　PL24） ⑥区ⅡX16・17・21・22

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出を行い、遺構調査は平成 15 年度に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

北西－南東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 6.1m、短軸 4.06m、深さ 0.28m を測る。埋土は単層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。床面中央に強く被熱赤化した箇所が確認でき、出入り口やや北西側の床面には「赤色顔料」粒が層をなして確認された。炉は土器敷き炉で、深さ 6cm を測る。炉床は酸化・被熱が著しい。主柱穴間のやや内側に位置し、炉を中心として炭化物層が広がる。４本の主柱穴と屋内棟持ち柱と想定される柱穴を１本、出入り口部の柱穴を２本把握した。本址の場合、位置からいって屋内棟持ち柱と想定することが可能だが、SB19 同様、規模も小さく、炉に係る施設として捉えた方が良いかもしれない。また、床下の調査によって、主柱穴に相当する２本の柱穴を確認した。主軸方向でみれば主柱穴間の距離は延長され、上屋の規模も拡大した可能性が考えられる。なお、主柱穴の建て替えに呼応する炉の作り替えは確認できない。

埋土中より土器片や土製品・石器片・柱材が出土している。床面から完形の土器や石器が出土している。本住居跡の時期は、炉から出土している壺（594）より、後期箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB17 等と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 70 図 590 ～ 597　　PL32・42）

掲載した遺物は、593・596 は床面、594 は炉内、その他は埋土中からの出土である。

590・591 は鉢である。594 は壺で、頸部文様帯にはＴ字文が施され、胴部と口縁部内側が赤彩される。592・593・595・596 は甕である。596 は、底部が欠損しているが、台付の甕と思われる。口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

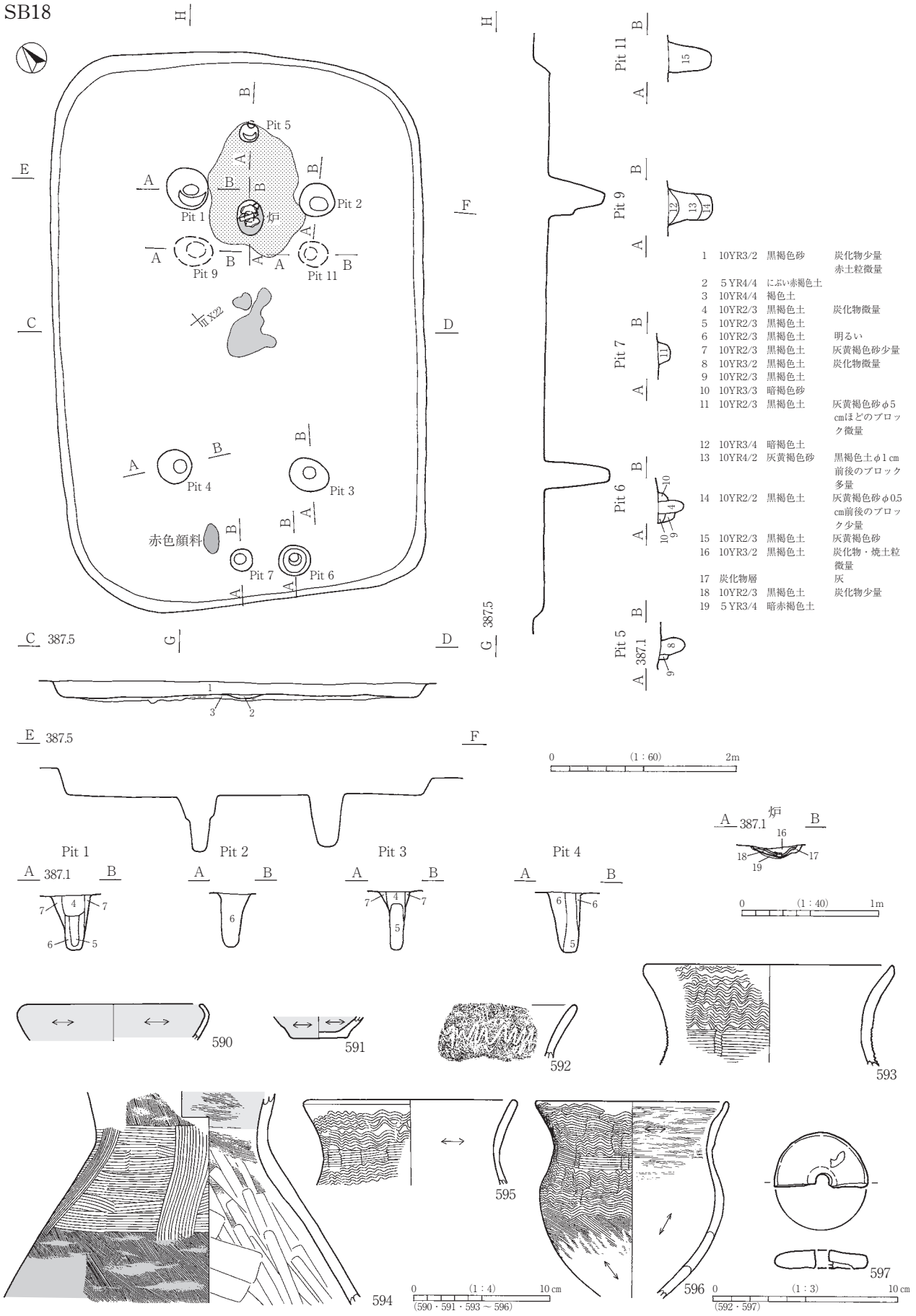
597 は、土製紡錘車の破片である。

SB19 （第 48・71 図　　PL24） ⑥区ⅡX21・22、ⅢD1・2

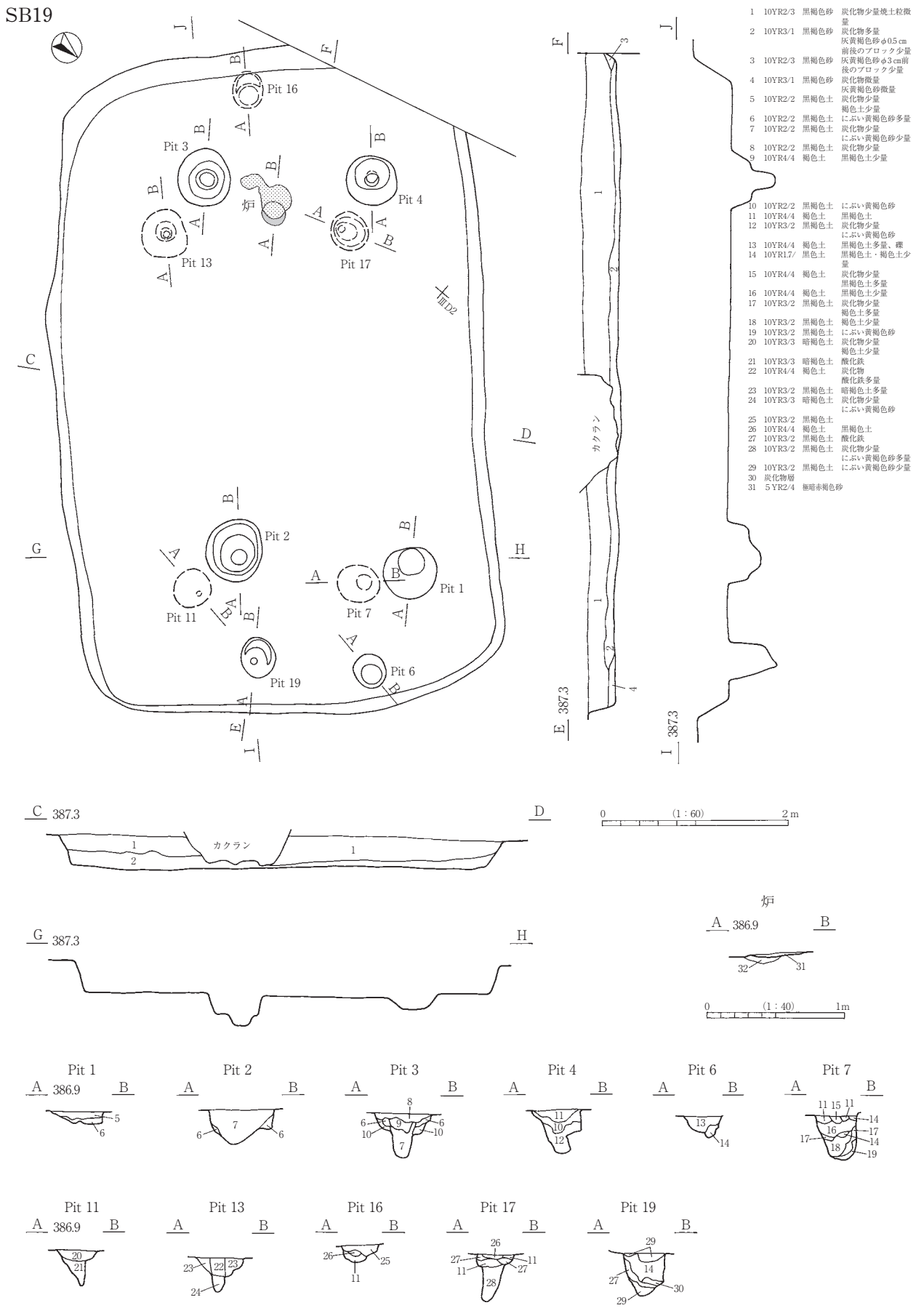
調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出を行い、遺構調査は平成 15 年度に実施した。にぶい黄褐色土層上面で検出。SB16・20 と重複していたため、サブトレンチを入れ、断面で本址との切り合いを確認し、SB16・20 →本址という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南西－北東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.24m、短軸 4.72m、深さ 0.42m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、中央付近でやや堅緻な部分がある。炉は、径 26cm の円形を呈する地床炉で、深さ 2cm を測る。炉床は被熱赤化が著しい。主柱穴間のやや内側に位置し、炉の奥壁側の床面に炭化物層が広がる。４本の主柱穴と屋内棟持ち柱と想定される柱穴を１本、出入り口部の柱穴を２本把握した。主柱穴の断面形状は漏斗状を呈する。また、床下の調査によって、主柱穴に相当する４本の柱穴を確認した。主柱穴間の距離を延長して建て替えており、上屋の規模も拡大した可能性が考えられる。なお、主柱穴の建て替えに呼応する炉の作り替えは確認できない。

埋土中より土器片や土製品・石器・石製品・イノシシの歯の破片（＊3）が出土している。竪穴北東壁際の床面からは、砥石や台石など３個体（S159 ～ S161）がまとまって出土している。本住居跡の時期は、床面から出土している甕（613）より、後期箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向が、SB17・18 と同方向であるが、出入り口の方向が他の住居跡と反対方向であり、集落構成を考える上で興味深い。

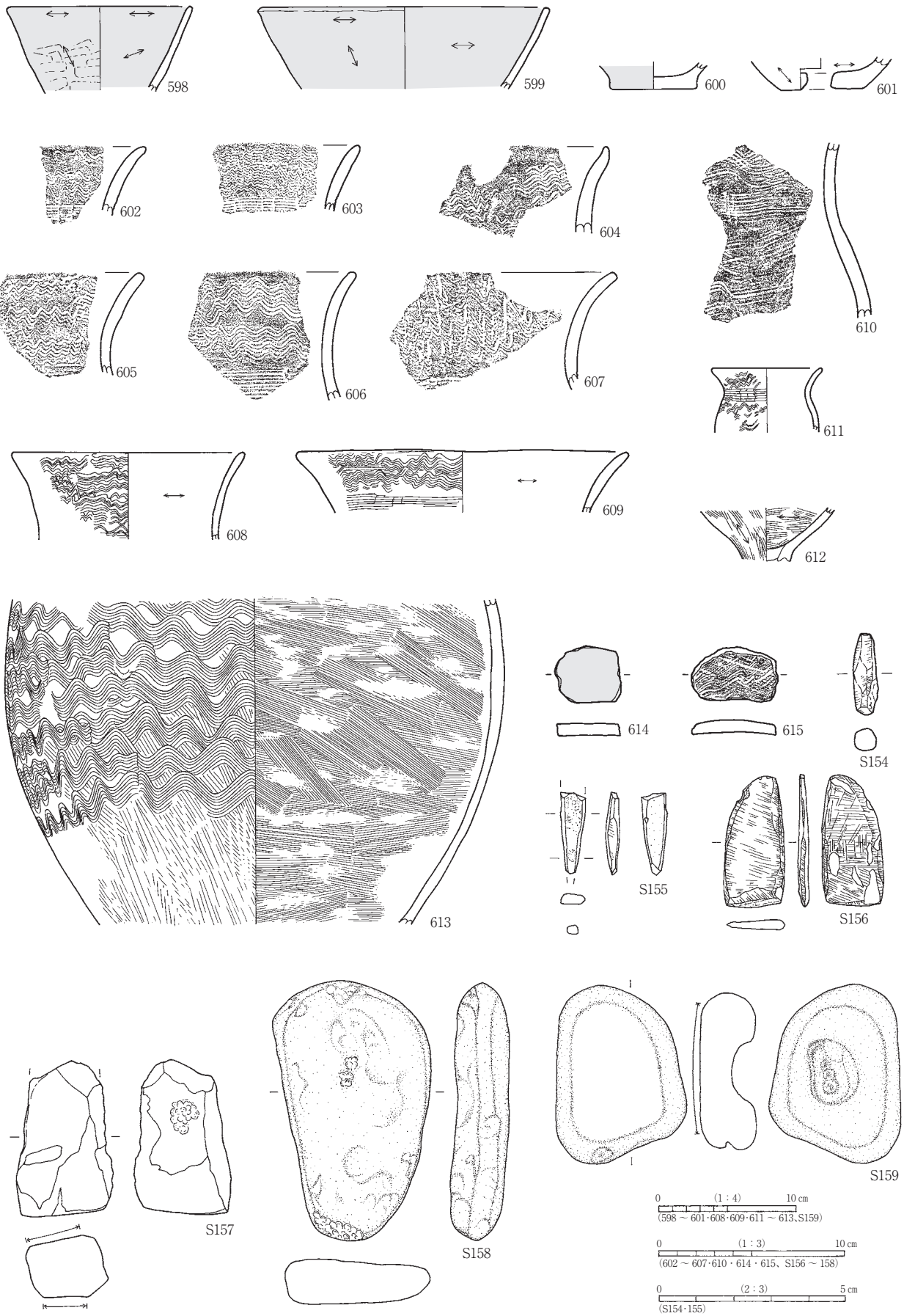


第 70 図　弥生時代後期の個別図 22

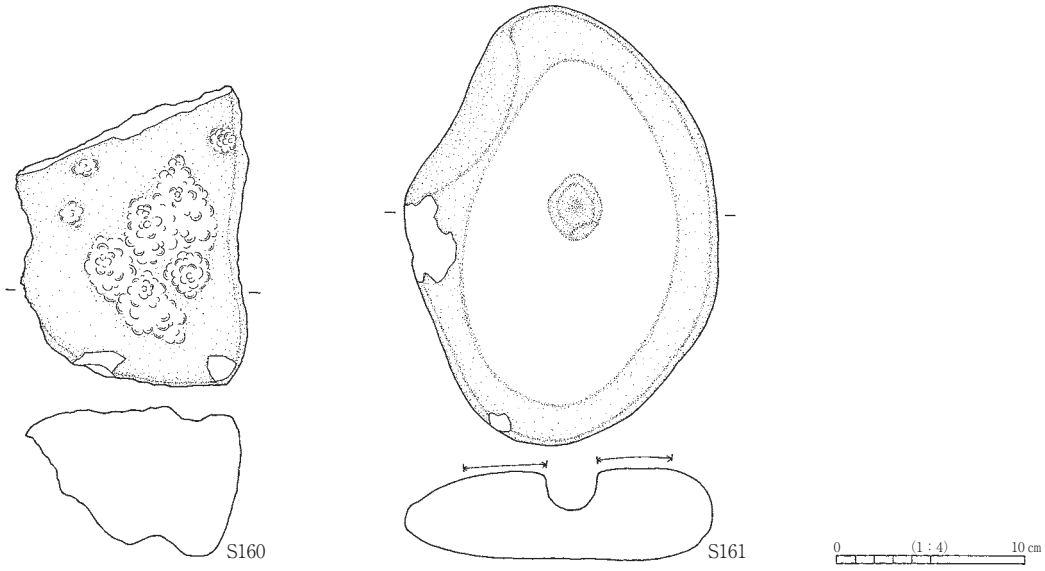


1 10YR2/3 黒褐色砂 炭化物少量焼土粒微量
2 10YR3/1 黒褐色砂 炭化物多量 灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
3 10YR2/3 黒褐色砂 灰黄褐色砂φ3㎝前後のブロック少量
4 10YR3/1 黒褐色砂 炭化物微量 灰黄褐色砂微量
5 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量 褐色土少量
6 10YR2/2 黒褐色土 にぶい黄褐色砂多量
7 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量 にぶい黄褐色砂少量
8 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量
9 10YR4/4 褐色土 黒褐色土少量
10 10YR2/2 黒褐色土 にぶい黄褐色砂
11 10YR4/4 褐色土 黒褐色土
12 10YR3/2 黒褐色土 炭化物少量 にぶい黄褐色砂
13 10YR4/4 褐色土 黒褐色土多量、礫
14 10YR1.7/ 黒色土 黒褐色土・褐色土少量
15 10YR4/4 褐色土 炭化物少量 黒褐色土多量
16 10YR4/4 褐色土 黒褐色土少量
17 10YR3/2 黒褐色土 炭化物少量 褐色土多量
18 10YR3/2 黒褐色土 褐色土少量
19 10YR3/2 黒褐色土 にぶい黄褐色砂
20 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量 褐色土少量
21 10YR3/3 暗褐色土 酸化鉄
22 10YR4/4 褐色土 炭化物 酸化鉄多量
23 10YR3/2 黒褐色土 暗褐色土多量
24 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量 にぶい黄褐色砂
25 10YR3/2 黒褐色土
26 10YR4/4 褐色土 黒褐色土
27 10YR3/2 黒褐色土 酸化鉄
28 10YR3/2 黒褐色土 炭化物少量 にぶい黄褐色砂多量
29 10YR3/2 黒褐色土 にぶい黄褐色砂少量
30 炭化物層
31 5YR2/4 極暗赤褐色砂

第 71 図　弥生時代後期の個別図 23



第 72 図　弥生時代後期の個別図 24



第 73 図　弥生時代後期の個別図 25

出土遺物（第 72・73 図 598 ～ 615、S154 ～ S161　　PL1・33・42・44・45・46・47）

掲載した遺物は、601・613 ・S158 ～ S161 は床面、614 はピット 1 内、その他は埋土中からの出土である。

598・599 は鉢、600 は壺、601 は甑である。602 ～ 613 は甕である。602 ～ 609 は口縁部破片で、口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。610・613 は胴部破片で、613 は胴部が球胴である。611・612 は、台付甕である。

614 は壺の、615 は甕の破片を加工して作られた加工円盤である。

S154 と S155 は磨製石錐。S154 は凝灰岩材で管玉状を呈する。側面の面取りや全体がやや紡錘形であることから石錐としたが、管玉の未成品の可能性もあるか。S155 は先端及び基部端を欠損する。珪質凝灰岩材。S156 は磨製石鏃の未成品か。半月形に近い形状で、図右半分及び下半は磨り切り（折り取り）の可能性がある。S157 は細粒砂岩材の砥石破片。裏面の敲打痕跡様の凹みがあるが不明瞭。S158 は扁平な自然石。敲き石のようでもあるが痕跡は不明瞭。S159 は安山岩材の磨り石で、片面は明瞭に摩耗している。裏面の凹みは「ポットホール」状で使用の結果ではない。S160 は粗粒の砂岩材の置き砥石。側面部を戸面として使用し、表裏には径 2.5cm 大の凹みがある。

S161 は扁平な台石で、表面の摩耗は不明瞭、凹み部は S159 と同様な現象である。

SB22 （第 48・74 図） ⑥区ⅡX18・19

調査区の関係から、遺構の西側と東側とで分割調査をせざるを得なかった。さらに調査工程上の関係で、遺構西側の調査は、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。遺構東側の調査は、平成 15 年度後半に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB31 と重複していたため、サブトレンチを入れ、断面で本址との切り合いを確認し、本址→ SB31 という新旧関係を確認した。東西に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

北西－南東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、遺構の重複及び調査区外に延びることなどから残存値で長軸 4.96 m、短軸 4.46 m、深さ 0.42m を測る。埋土は複層で、中位層に灰層が確認されており、竪穴が自然埋没する過程で、何らかの用途に使用された可能性がある。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。炉は、長軸 33cm、短軸 27cm の楕円形を呈する地床炉で、深さ 10cm を測る。炉床は被熱赤化が著しい。床面中央より北東側に位置し、炉の北東側の床面に炭化物層が広がる。出入り口側の２本の主柱穴と出入り口部の柱穴を２本把握した。奥壁側の主柱穴は、炉跡の位置からいっても調査区外に存在することが予想される。ピット 7・8・9 及びピット 1 は補助柱または間仕切りに関わる柱穴と想定されるが、主柱穴も含め柱痕跡が明確に確認される。なお、出入り口部と判断したピット 2・3 は床下の調査によって確認できた柱穴である。

埋土中より土器片や石器・骨片が出土している。床面からは完形に近い土器や大形の破片が出土している。本住居跡の時期は、床付近から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB17 などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 74 図 616 ～ 622　　PL33）

掲載した遺物は、616・619・622 は床付近、617 は床下、その他は埋土中からの出土である。

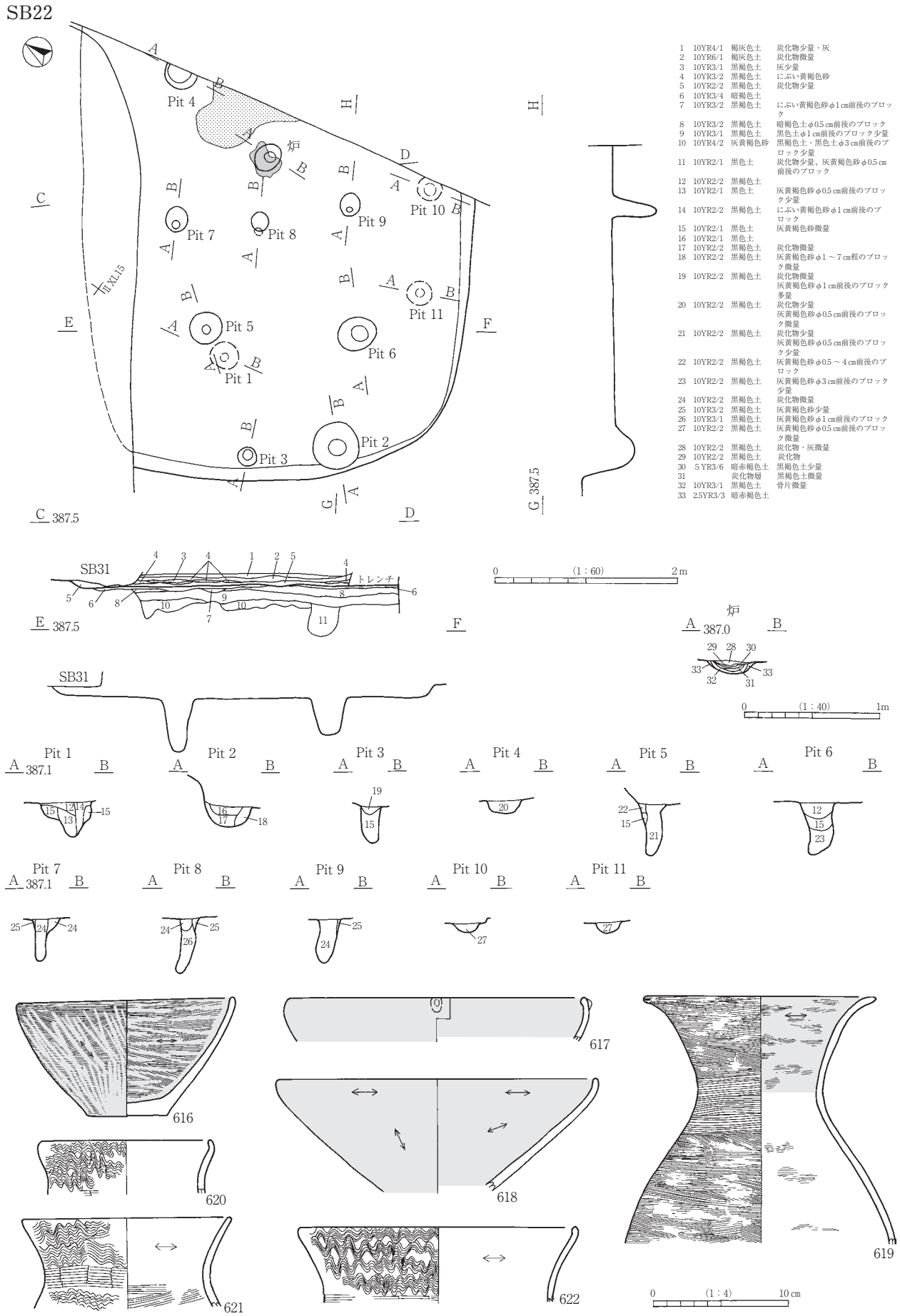
616・617 は赤彩された鉢で、617 の口縁部には、楕円形の突起が貼り付けられる。618 は、坏部が椀形を呈する高坏で、赤彩されている。619 は壺で、頸部文様帯には直線文が巡らされ、口縁部の内側だけが赤彩される。620 ～ 622 は、甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

SB23 （第 48・75 図　　PL24） ⑥区ⅡX7･12

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB36・SD48 と重複関係が認められ、SB36 とはサブトレンチによる土層断面観察で、SD48 とは平面精査で、SB36 →本址→ SD48 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.80m、短軸 5.22m、深さ 0.46m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、床面中央付近は硬く敲き締められているが、他ははっきりしない。炉址周辺以外の床面にも炭化材や炭化物層が確認された部分がある。炉は、一辺 36cm の方形に近い形状を呈する地床炉で、深さ 4cm を測る。炉床は被熱赤化が著しい。主柱穴間のほぼ中央に位置し、炉の奥壁側の床面に炭化物層が広がる。炉の北東側には、楕円形に被熱していない部分があり、炉縁石が抜き取られた痕跡と思われる。４本の主柱穴と、床下の調査による壁際のピット２基が確認された。主柱穴の掘り方は２段になっている。

埋土中より土器片や土製品・石包丁ほかの石器が多く出土している。また、埋土中からは木細片・イノシシの歯の破片（＊3）・赤色顔料などもわずかに出土している。本住居跡の時期は、炉から出土している



1	10YR4/1	褐灰色土	炭化物少量・灰
2	10YR6/1	褐灰色土	炭化物微量
3	10YR3/1	黒褐色土	灰少量
4	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂
5	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量
6	10YR3/4	暗褐色土	
7	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂φ1cm前後のブロック
8	10YR3/2	黒褐色土	暗褐色土φ0.5cm前後のブロック
9	10YR3/1	黒褐色土	黒色土φ1cm前後のブロック少量
10	10YR4/2	灰黄褐色砂	黒褐色土・黒色土φ3cm前後のブロック少量
11	10YR2/1	黒色土	炭化物少量、灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック
12	10YR2/2	黒褐色土	
13	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック少量
14	10YR2/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂φ1cm前後のブロック
15	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色砂微量
16	10YR2/1	黒色土	
17	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量
18	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ1～7cm程のブロック微量
19	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ1cm前後のブロック多量
20	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック微量
21	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック少量
22	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ0.5～4cm前後のブロック
23	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ3cm前後のブロック少量
24	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量
25	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色砂少量
26	10YR3/1	黒褐色土	灰黄褐色砂φ1cm前後のブロック
27	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ0.5cm前後のブロック微量
28	10YR2/2	黒褐色土	炭化物・灰微量
29	10YR2/2	黒褐色土	炭化物
30	5YR3/6	暗赤褐色土	黒褐色土少量
31		炭化物層	黒褐色土微量
32	10YR3/1	黒褐色土	骨片微量
33	2.5YR3/3	暗赤褐色土	

第 74 図　弥生時代後期の個別図 26

高坏（632）より、後期後葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等からSB16などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第76・77図623～649、S162～S174　　PL33・34・42・44～47）

掲載した遺物は、627・642は床面、632は炉内、630はピット１内、その他は埋土中からの出土である。

623・624・627は鉢である。625・632～633は高坏である。625・632は、口縁部が水平に屈曲する鍔状口縁高坏で、赤彩されている。626・628～631は壺である。628は、折り返し口縁をもつ球胴の太頸の壺で、頸部文様帯には簾状文を巡らし、その直下には櫛描波状文を充填させ円形浮文が貼り付けられる。樽式に相当する壺である。630は頸部破片で、頸部文様帯には２条１組の垂下文によりＴ字文が施され、櫛状工具による刺突が設けられた円形浮文が貼り付けられる。634は、台付赤彩深鉢の台の部分かと思われる。635～646は甕である。645は胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

647～649は、壺や鉢の破片を加工して作られた加工円盤である。

S162は、磨製石鏃の未成品。先端部を欠損する。図の右側辺部は切断面と思われる面が残る。S163は黒曜石材の凹基有茎式鏃で、茎部と一方の脚部を欠損する。S164は一孔式の磨製石包丁。細粒の凝灰岩材で、歪な横長剝片に粗雑な研磨と一孔を穿っている。刃部は使用により摩耗しているとみられる。S165は玉石。チャート材で表面には光沢がある。S166は凝灰質砂岩材の楔形石器。両極剝離痕を留めるが端部はつぶれ状ではない。S167は凝灰岩材で表裏面及び側辺部を研磨している。円盤状の石製品ともみられるが、欠損面は製作以前のものである可能性が高い。まち側辺部も鋭利に研ぎ出した箇所もある。S168は凹石。側面部は使用による敲打痕があり、表裏面は摩耗している。S169は砂岩材の縦長剝片。使用の痕跡は不明。S170は砂岩材の砥石。S171は敲石。凸部は例外なく使用による敲打がみられる。S172は凹石。S173は角柱状の砥石。砥面とともに凹部がある。S174は安山岩材の台石。表面は使用により著しく摩耗しツルツルしている。

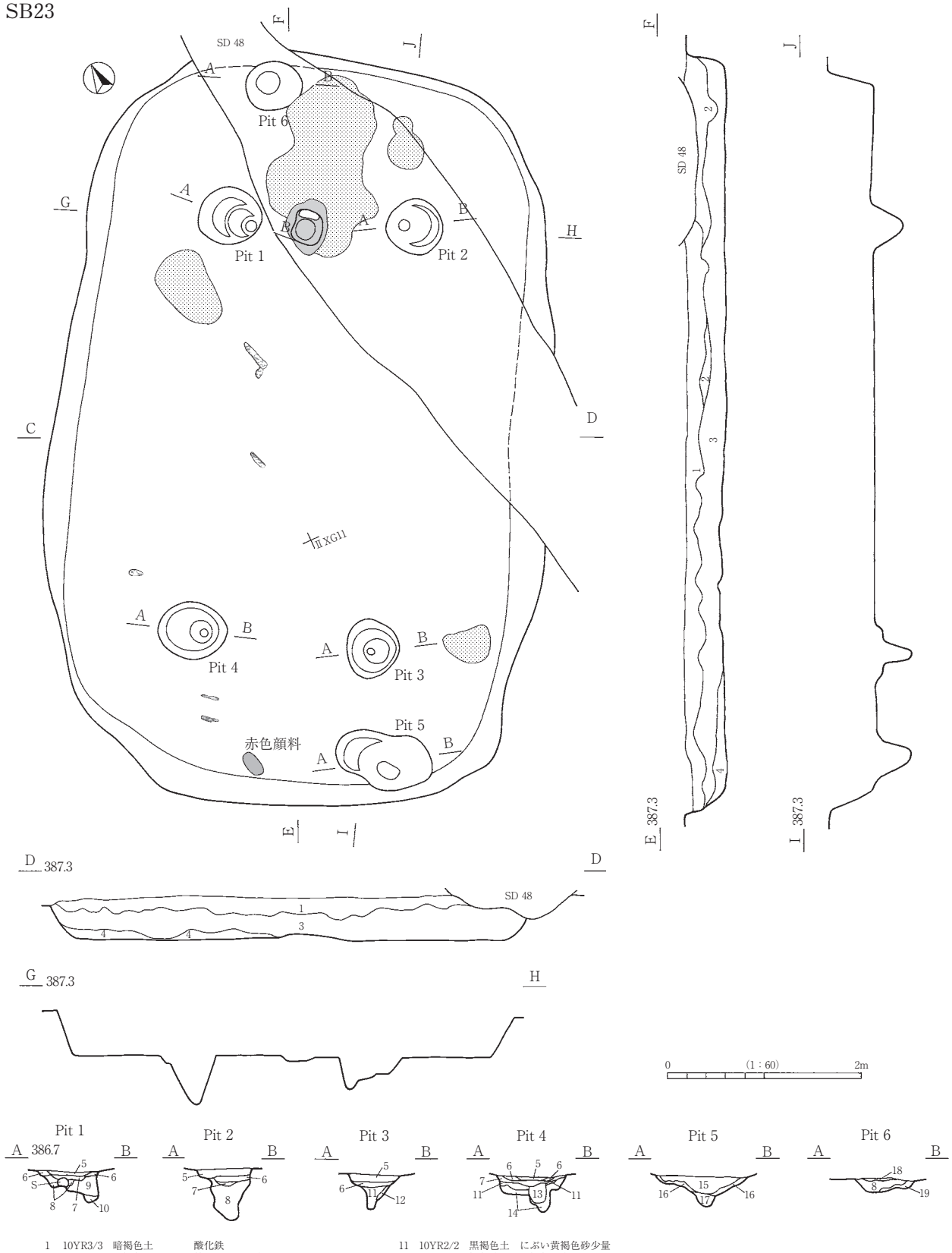
SB24　（第48・78図　　PL24）　⑥区ⅡX11・12・16・17

調査工程上の関係で、平成14年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成15年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB25・34・36・37と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察で、本址が最も新しいことを確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸6.50m、短軸4.34m、深さ0.32mを測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。炉は、２箇所で確認された。炉１は、長軸33cm、短軸30cmの不整楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmを測る。炉縁石として機能していたと考えられる礫が１点原位置を保って出土した。炉床は被熱赤化が著しい。土層断面の観察から、ほぼ同じ位置で少なくとも１回の作り替えが認められる。主柱穴間のほぼ中央に位置し、炉址周囲の床面に炭化物層が広がる。炉２は、長軸49cm、短軸42cmの不整楕円形の床面中央付近に位置する地床炉である。本遺跡では、床面の中央部が酸化・被熱している住居跡が複数確認されているが、本址の場合、それらとは浅い掘り込みを伴う点で異なっており、炉址とした所以でもある。４本の主柱穴とも掘り方は２段になっている。床下の調査によって確認された壁際のピット２基は出入り口部を構成する柱穴と考えられる。

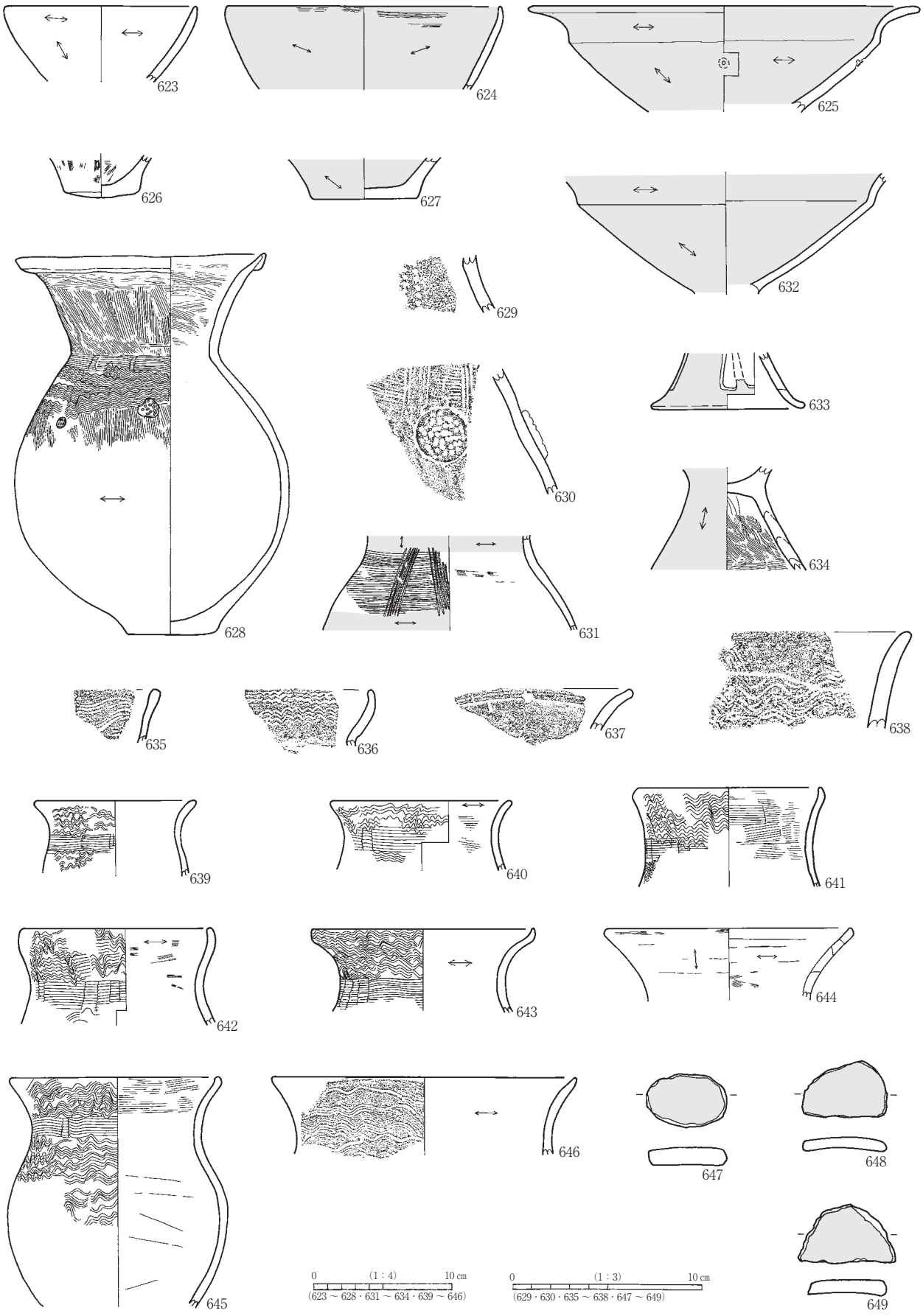
埋土中より土器片や土製品・石器・骨片が出土している。南西隅の床面より、甕（668）の上半部が正

SB23

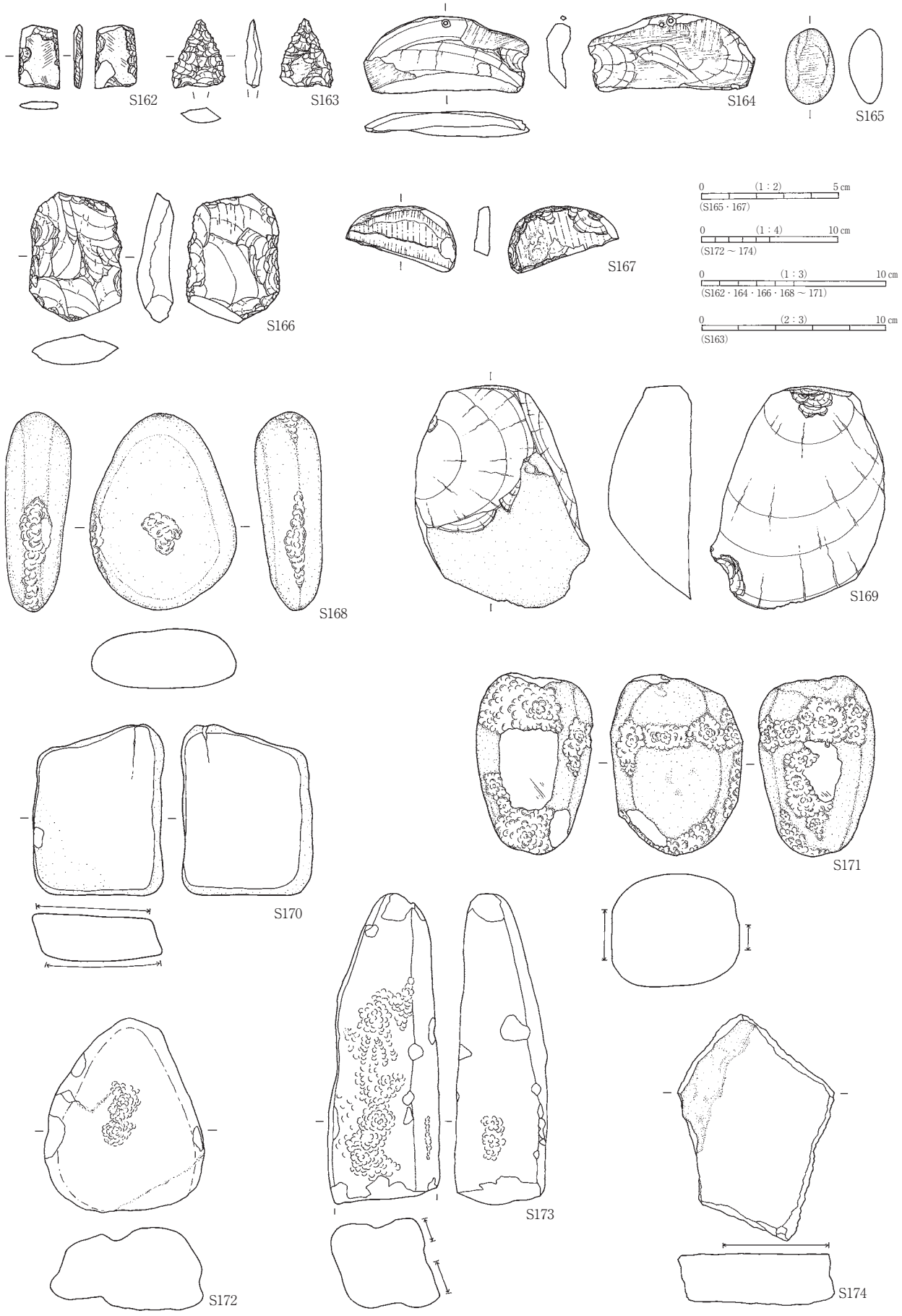


1	10YR3/3	暗褐色土	酸化鉄
2	10YR3/1	黒褐色土	粘土ブロック少量
3	10YR2/2	黒褐色土	酸化鉄
4	10YR2/2	黒褐色土	炭化物
5	10YR4/2	灰黄褐色土	炭化物粒微量、鉄分ブロック微量
6	10YR3/1	黒褐色土	炭化物多量、鉄分小ブロック にぶい黄橙色砂ブロック
7	10YR6/3	にぶい黄橙色砂	黒褐色土大小ブロック
8	10YR3/2	黒褐色土	炭化物少量
9	10YR2/2	黒褐色土	褐色土
10	10YR4/4	褐色土	にぶい黄褐色砂
11	10YR2/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂少量
12	10YR4/4	褐色砂	黒褐色土少量
13	10YR3/2	黒褐色土	
14	10YR2/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂多量
15	10YR3/1	黒褐色土	灰黄褐色土ブロック
16	10YR4/4	褐色土	にぶい黄褐色砂・黒褐色土多量
17	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂少量
18	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土 灰黄褐色土ブロック少量
19	10YR4/4	褐色土	黒褐色土

第 75 図　弥生時代後期の個別図 27

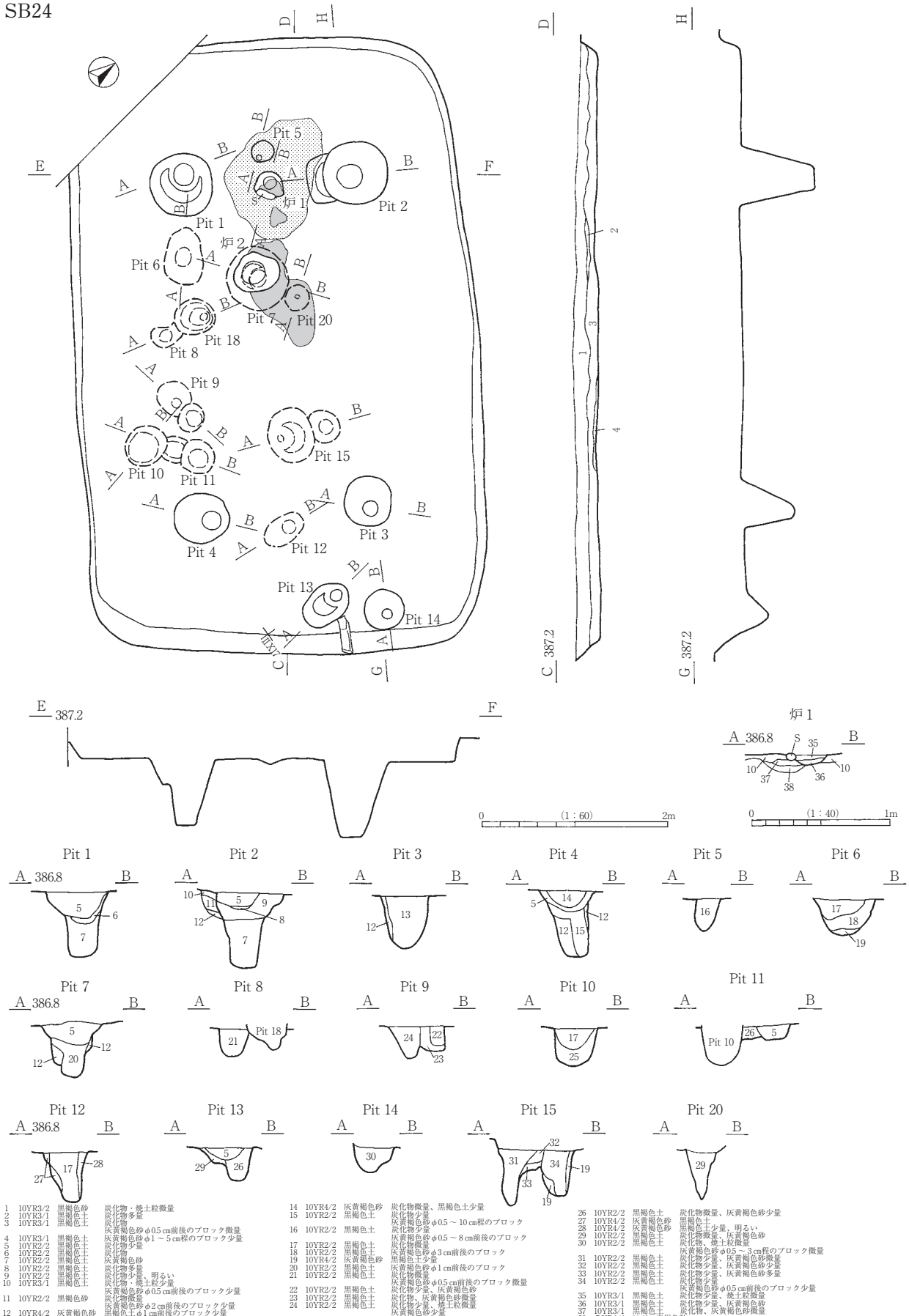


第 76 図　弥生時代後期の個別図 28



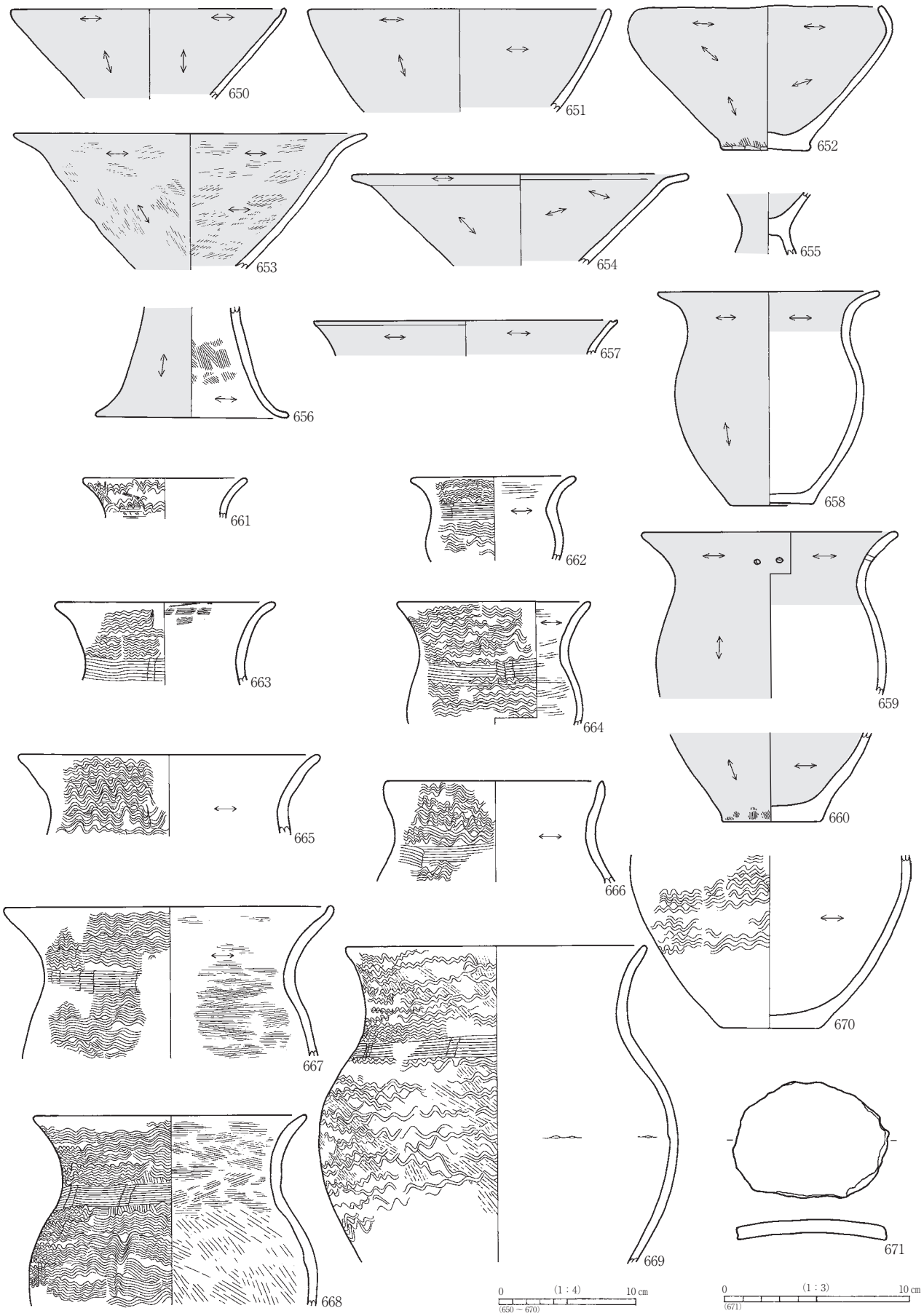
第 77 図　弥生時代後期の個別図 29

SB24

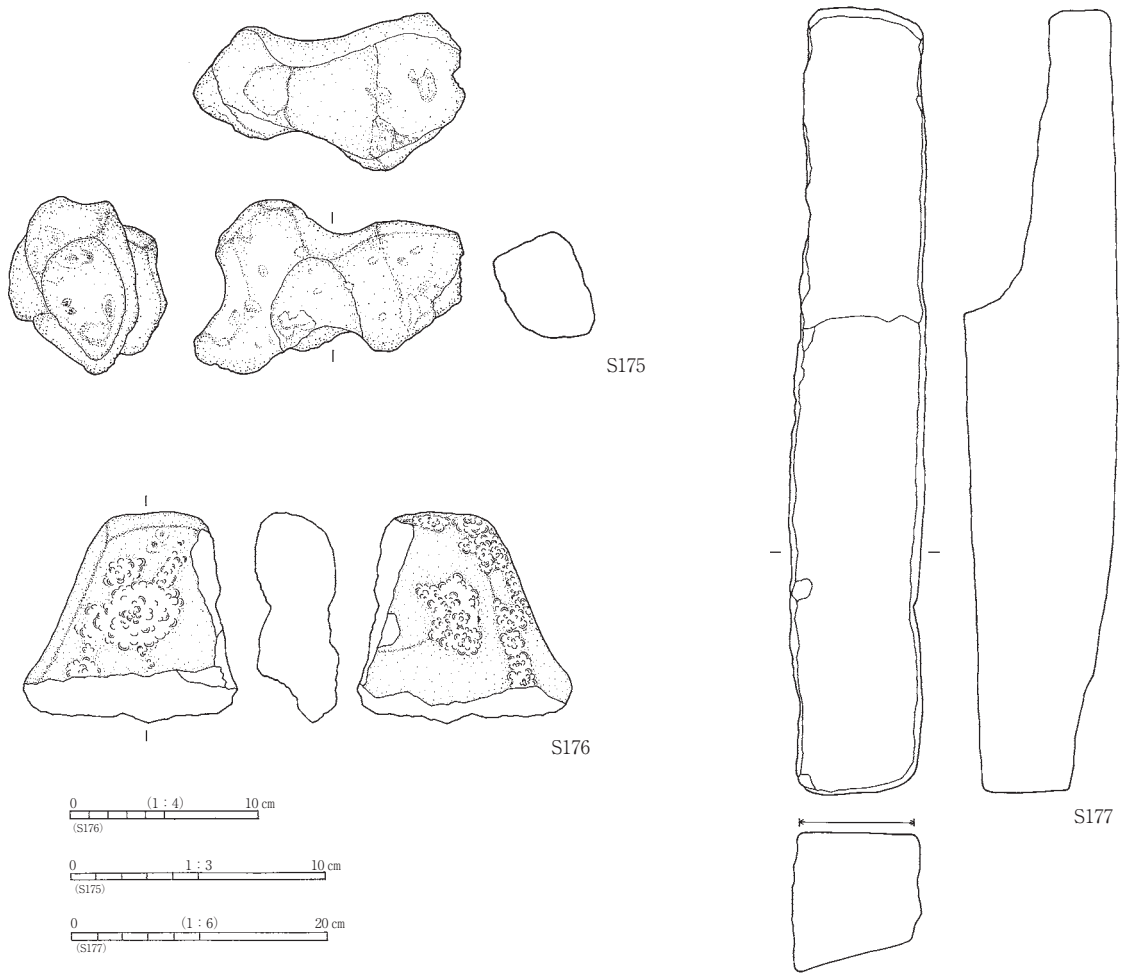


1　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物・焼土粒微量
2　10YR3/1　黒褐色土　炭化物多量
3　10YR3/1　黒褐色土　炭化物
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック微量
4　10YR3/1　黒褐色土　灰黄褐色砂φ1～5㎝程のブロック少量
5　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
6　10YR2/2　黒褐色土　炭化物
7　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂
8　10YR2/2　黒褐色土　炭化物多量
9　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、明るい
10　10YR3/1　黒褐色土　炭化物・焼土粒少量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
11　10YR2/2　黒褐色砂　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ2㎝前後のブロック少量
12　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ1㎝前後のブロック少量
13　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック微量
14　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量、黒褐色土少量
15　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　　灰黄褐色砂φ0.5～10㎝程のブロック
16　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　　灰黄褐色砂φ0.5～8㎝前後のブロック
17　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
18　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ3㎝前後のブロック
19　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土少量
20　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
21　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック微量
22　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂
23　10YR2/2　黒褐色土　炭化物、灰黄褐色砂微量
24　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、焼土粒微量
　　灰黄褐色砂少量
25　10YR2/2　黒褐色土　炭化物
　　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
26　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂少量
27　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土
28　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土少量、明るい
29　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂
30　10YR2/2　黒褐色土　炭化物、焼土粒微量
　　灰黄褐色砂φ0.5～3㎝程のブロック微量
31　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂微量
32　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂少量
33　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂多量
34　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
35　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量、焼土粒微量
36　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂
37　10YR3/1　黒褐色土　炭化物、灰黄褐色砂微量
38　5 YR4/4　にぶい赤褐色砂

第 78 図　弥生時代後期の個別図 30



第 79 図　弥生時代後期の個別図 31



第 80 図　弥生時代後期の個別図 32

位の状態で出土し、断面方形の砥石（S177）が、竪穴の南東壁に立て掛けるような状態で出土した。本住居跡の時期は、床から出土している土器（658・668）より、後期後葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB30 などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 79・80 図 650 ～ 671、S175 ～ S177　　PL33・34・35・42・46）

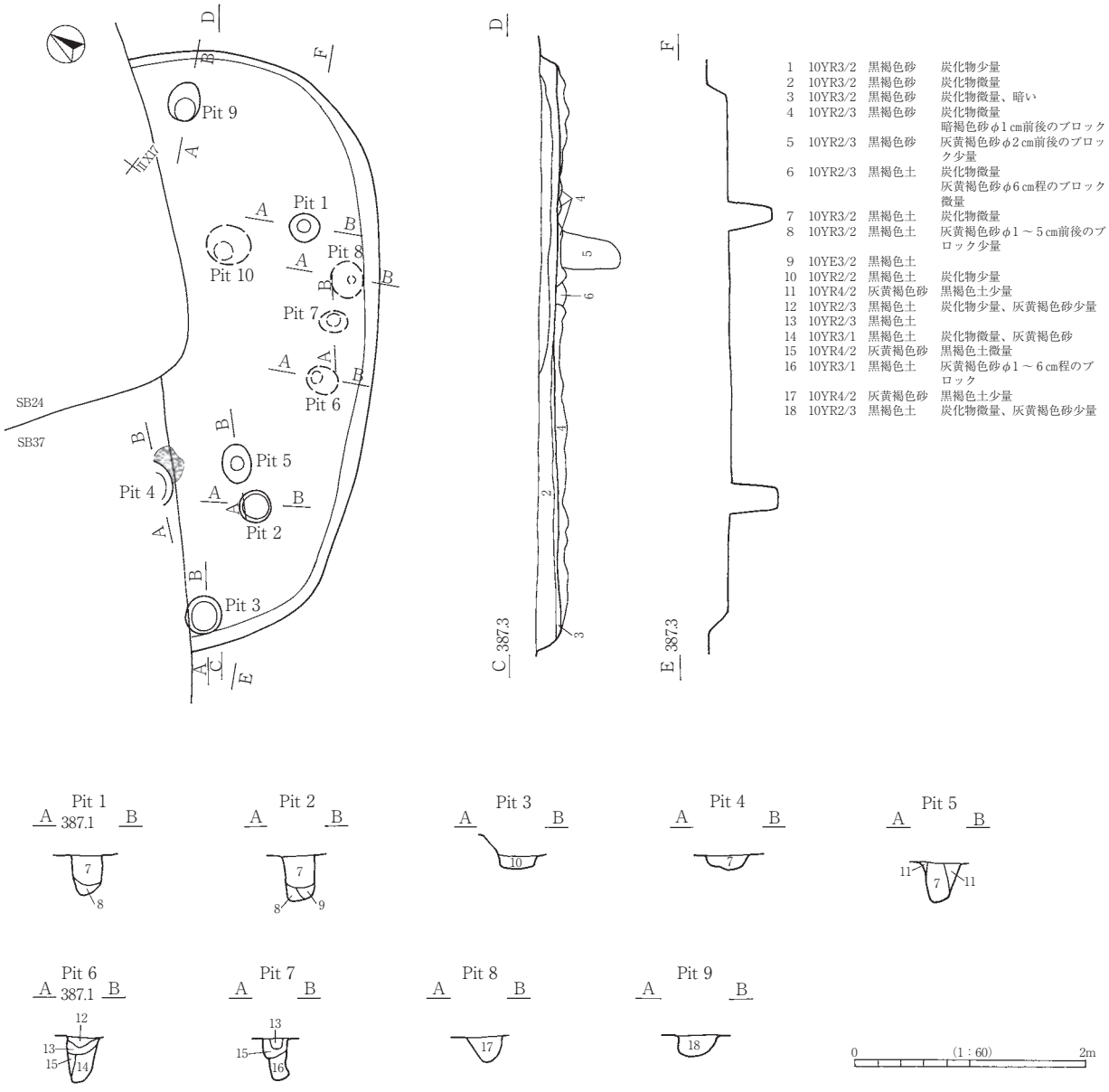
掲載した遺物は、658・668・S177 は床面、651 はピット 3 内、657 はピット 4 内、659 はピット 13 内、670 はピット 14 内、その他は埋土中からの出土である。

650・653 ～ 657 は高坏である。650 は椀形口縁高坏で、653・654 は、口縁部が水平に屈曲する鍔状口縁高坏で、653 は鍔状部の屈曲が不明瞭である。657 は、赤彩される高坏の口縁部としたが、器台口縁部の可能性も考えられ、検討を要する。651・652 は鉢である。658 ～ 660 は赤彩深鉢である。659 は、口縁部に一対の円孔が設けられている。660 の器種は検討を有する。661 ～ 670 は甕である。668 は、胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

671 は、壺の破片を加工して作られた加工円盤である。

S175 は、軽石製の砥石。多面体状を呈する。S176 は凹石。砂岩材で表裏面に凹部が形成される。S177 は砂岩材の砥石。

SB25

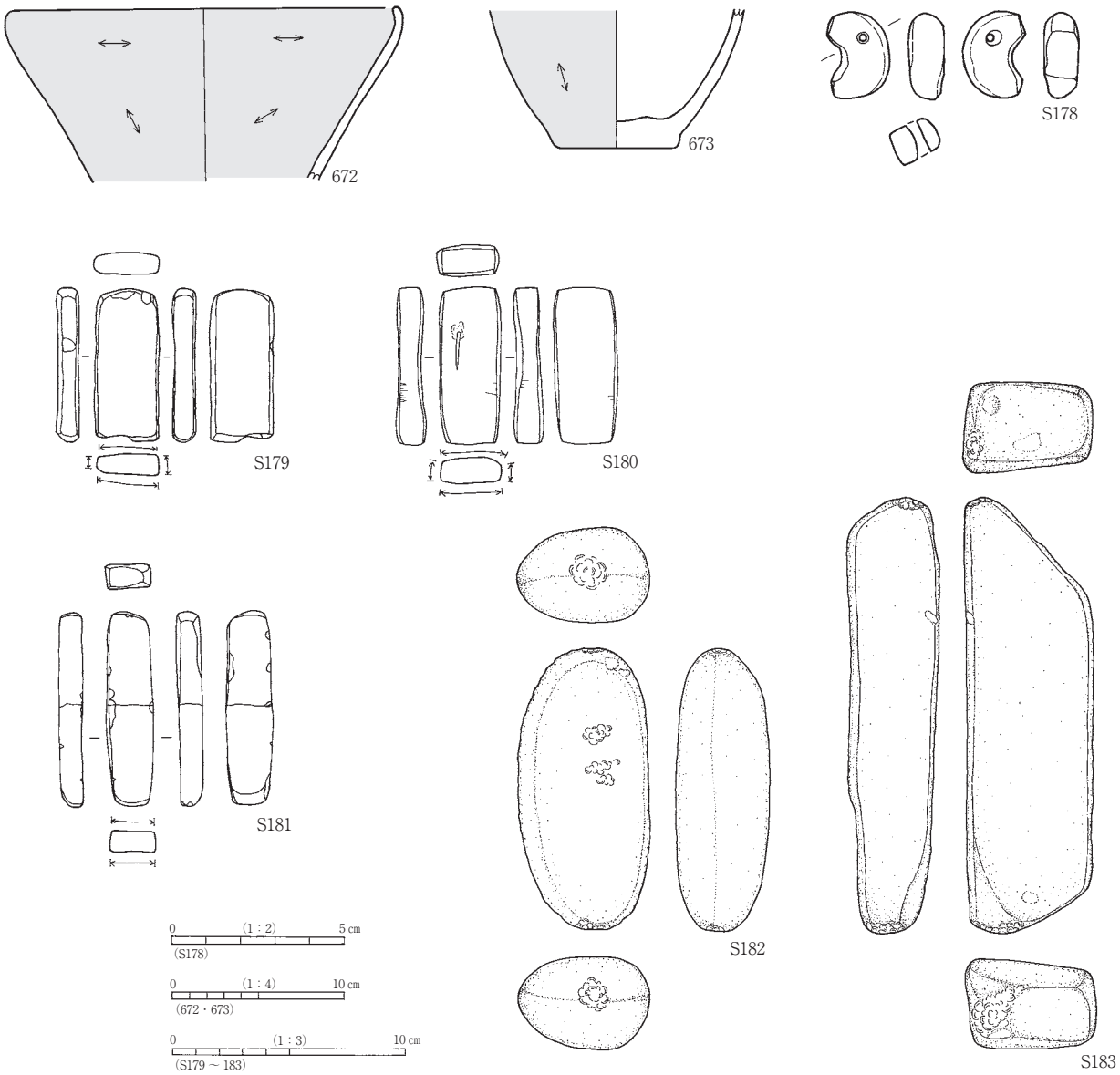


第 81 図　弥生時代後期の個別図 33

SB25 （第 48・81 図） ⑥区ⅡX11・12・16・17

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB24・37 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察で、本址が最も古いことを確認した。先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南西－北東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、複数の遺構と重複しており残存値で、長軸 5.20m、短軸 2.36m、深さ 0.16m を測る。埋土は複層に分層され、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。炉は、SB37 によって壊されているためはっきりしない部分が多いが、ピット 4 として調査した遺構を地床炉と把握した。主柱穴間のほぼ中央に位置



第 82 図　弥生時代後期の個別図 34

すると考えられ、炉址北東側の床面に炭化物層が広がる。ピット 1・2 を主柱穴と捉えた。本址の場合、床面や炉跡等、複数確認にされていないが、床下の調査で確認された柱穴のうち、ピット 5・10 の 2 基も主柱穴であった可能性を想定しておきたい。また、ピット 9 は出入り口部を構成した柱穴と考えられる。

埋土中より土器片や砥石ほかの石器が出土している。炉址周辺からは勾玉（S178）が出土している。本住居跡の時期は、床から出土している土器より、後期箱清水期と認定される。

出土遺物（第 82 図 672・673、S178 ～ S183　　PL1・34・45・47）

掲載した遺物は、672・673・S179・S183 は床面、S178 はピット 2 と 6 からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

672 は鉢で、内外面とも赤彩される。673 は壺の胴下半部で、赤彩される。

S178 は角礫岩材の勾玉。半抉状で穴は片側から 2/3 程度を穿孔している。S179 ～ S181 は扁平棒状の小形の手持ち砥石。いずれも砂岩材。S182 は安山岩材の棒状敲石。長軸の端部に敲打痕跡がある。S183 は硬質砂岩材で S182 と同様な敲石。

SB27 （第 48・83 図　　ＰＬ 25） ⑥区ⅡX2・3・7・8

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB28・SD48 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、SB28 →本址→ SD48 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.66m、短軸 5.92m、深さ 0.34m を測る。埋土は複層に分層され、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。床面中央には、強く被熱赤化している部分が認められた。また、南東壁に沿って、テラス状に高まる部分が確認された。炉は土器敷き炉である。炉縁石として機能していたと考えられる礫が 1 点原位置を保って出土した。炉床は酸化・被熱が著しい。主柱穴間のほぼ中央に位置すると考えられ、炉址周囲の床面に炭化物層が広がる。主柱穴は 4 本で、1 本は調査区外に位置すると考えられる。テラス状の高まりに付随するかのように検出されたピット 4・5 は間仕切りに関わる柱穴か。上記以外の柱穴は床下の調査で確認され、そのうち、ピット 14・17 は出入り口部を構成した柱穴と考えられる。

埋土中より土器片や土製品・石器・炭化物・骨片が出土している。断面方形の棒状の台石（S187）が、竪穴の北東壁に立て掛けるような状態で出土した。ピット 18 の検出面直上の床面からは炭化米がまとまって出土している（＊ 4)。本住居跡の時期は、炉に敷かれていた甕（690）より、後期後葉箱清水期と認定される。埋土中より出土した炭化材の一部と、床面から出土した炭化米で、炭素年代測定を行った。測定値は炭化米が 85 ～ 260 年、炭化材が 127 ～ 242 年であった。1 年生の種実であるコメの測定結果を本遺構の没年台としたいが、コメの測定値はかなり幅のある結果であったので、炭化材の測定値も考慮に入れ、3 世紀中頃を、本遺構の埋没年と考える。

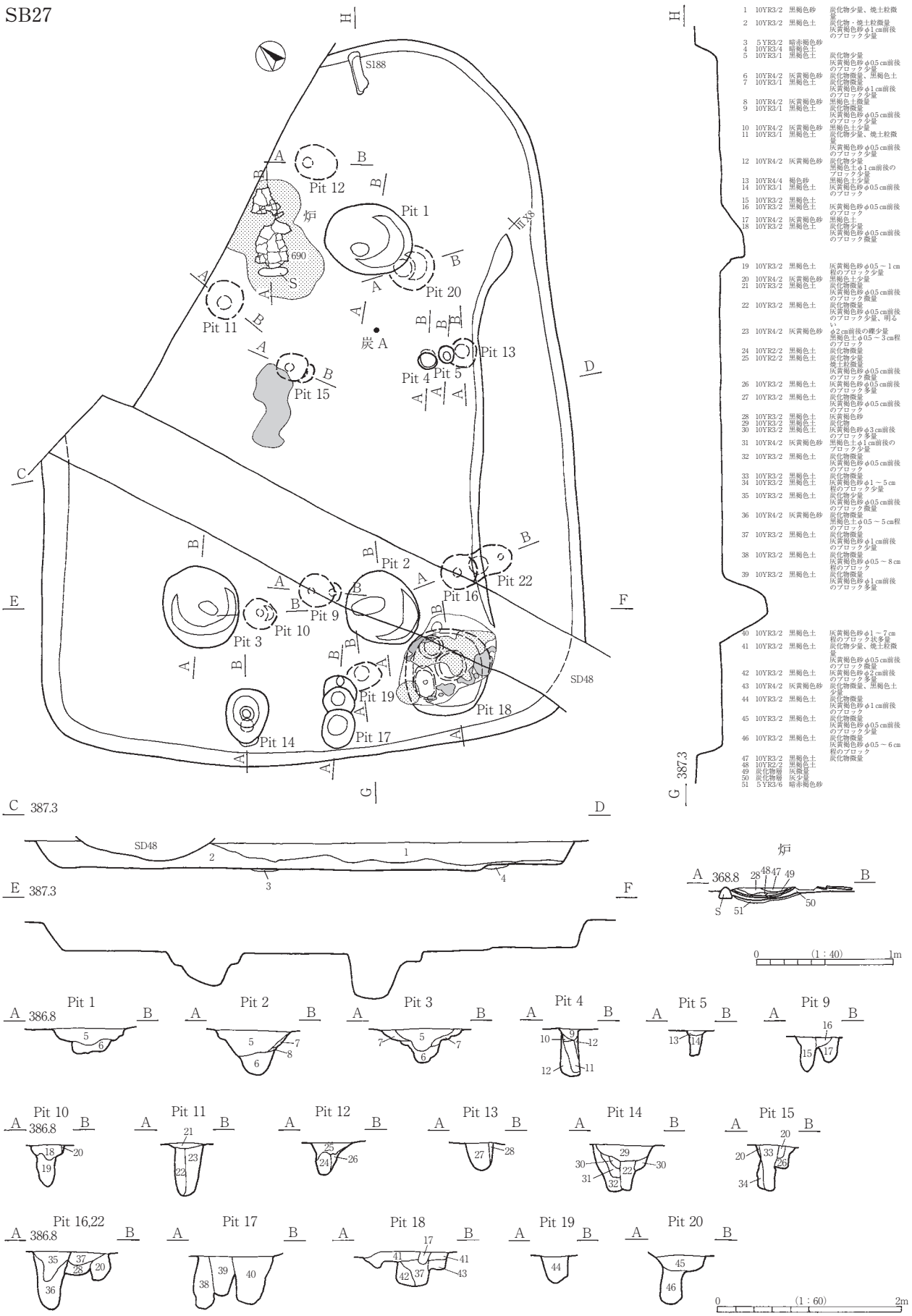
出土遺物（第 84・85 図 674 ～ 695、S184 ～ S189　　PL35・42・44・46・47）

掲載した遺物は、685・686・687・691・S174・S187 は床面、690 は炉内、682 はピット 3 内、679 はピット 12 内、678 は床下、その他は埋土中からの出土である。

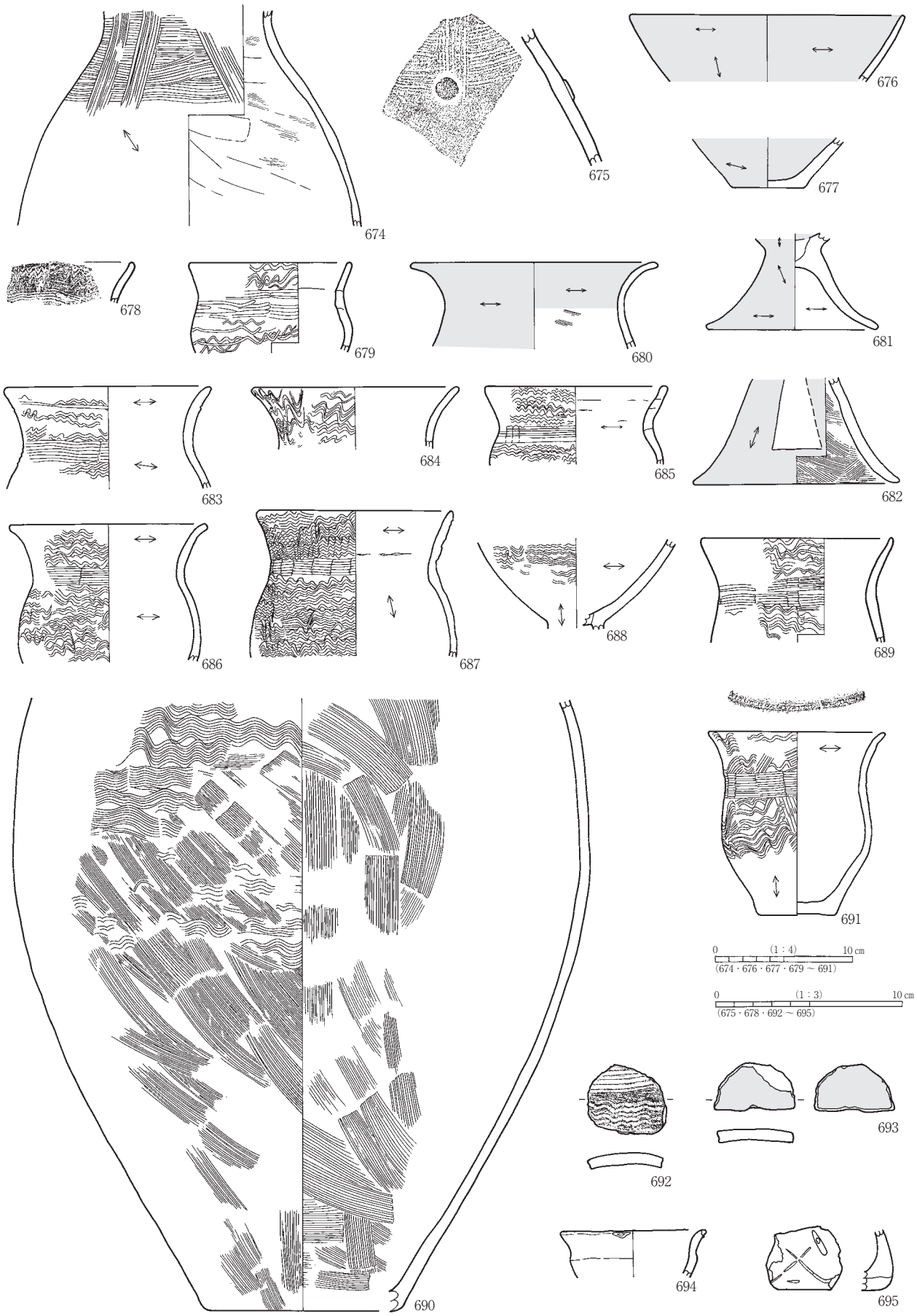
674・675 は壺の頸部で、674 は頸部文様帯に 2 条 1 組の垂下文によりＴ字文が施される。675 は、頸部文様帯にＴ字文が施され、垂下文の下端には、円形浮文が貼り付けられる。676・677 は鉢、680 は赤彩深鉢である。681・682 は高坏の脚部で、682 は三角透かしをもつ。678・679・683 ～ 691 は甕である。678・679・683 ～ 687・689 は口縁部である。688 は、台付の甕の胴部下半である。690 は、大形の甕の胴部である。胴部上半に櫛描波状文が散漫に施されており、ハケ調整が残る。691 は、口縁部が短く外反する甕で、口唇に縄文が施され、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には廉状文が施される。

692 は甕の、693 は鉢の破片を加工して作られた加工円盤である。694・695 は、ミニチュア土器と思われる破片である。

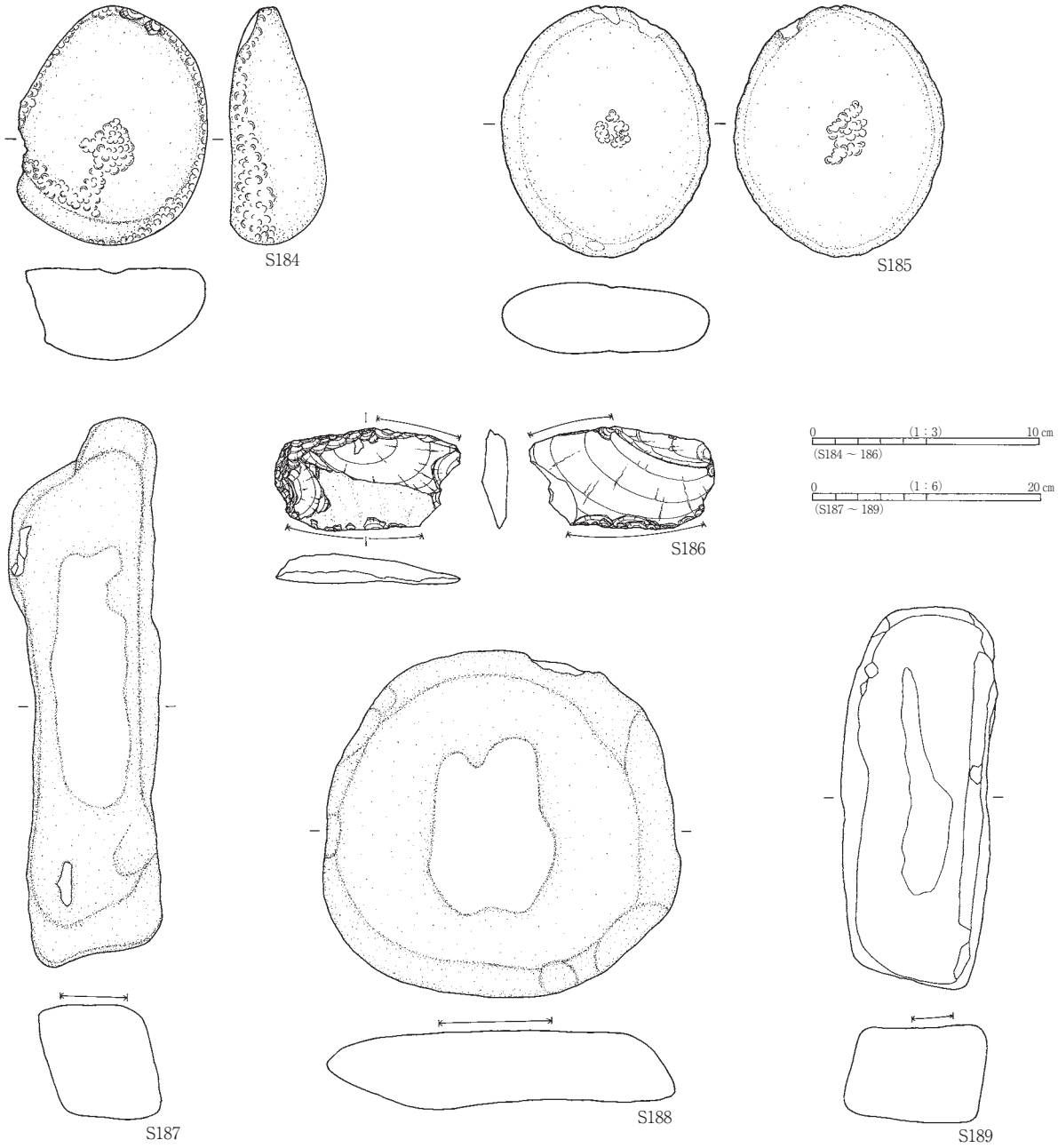
S184 は砂岩材の凹石。表面に凹部が 1 箇所あり、側辺には端部に敲打痕がある。S185 は凹石。表裏に凹部が 1 箇所ずつある。摩耗の痕跡は、微弱ながらみられるか。S186 は刃器。横長剝片を素材とし、下端の刃縁には摩耗痕がみられる。S187 は台石。所々に鼠歯状の敲打痕がみられる。S188 は台石。表面は摩耗しツルツルしている。S189 は砂岩材の砥石。表裏面に砥面が形成され、特に表面は縦位方向の細かな筋状のキズも摩耗面と併存している。また側面には鼠歯状の敲打痕があり、台石としても使用されたものか。



第 83 図　弥生時代後期の個別図 35



第 84 図　弥生時代後期の個別図 36



第 85 図　弥生時代後期の個別図 37

SB28 （第 48・86 図　　PL25） ⑥区ⅡX6・7

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB27・SK367・1165 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察で、本址が最も古いことを確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、SB27 に切られているため、長軸は残存値で 3.94m、短軸 3.80m、深さ 0.36m を測る。埋土は複層で、中位層に焼土や炭化物の層が確認されており、竪穴が自然埋没する過程で、何らかの用途に使用された可能性がある。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。炉は確認されなかった。主柱穴は 4 本で、いずれも 2 段に近い形状の掘り方を持つ。壁際で確認されたピット 5 は完形に近い土器や土器の大形破片が出土しており、貯蔵穴等の柱穴以外の機能を持った掘りこみと考えられる。

埋土中より土器片や石器が出土している。本住居跡の時期は、ピット 5 から出土している壺（699）より、後期中葉箱清水期と認定される。

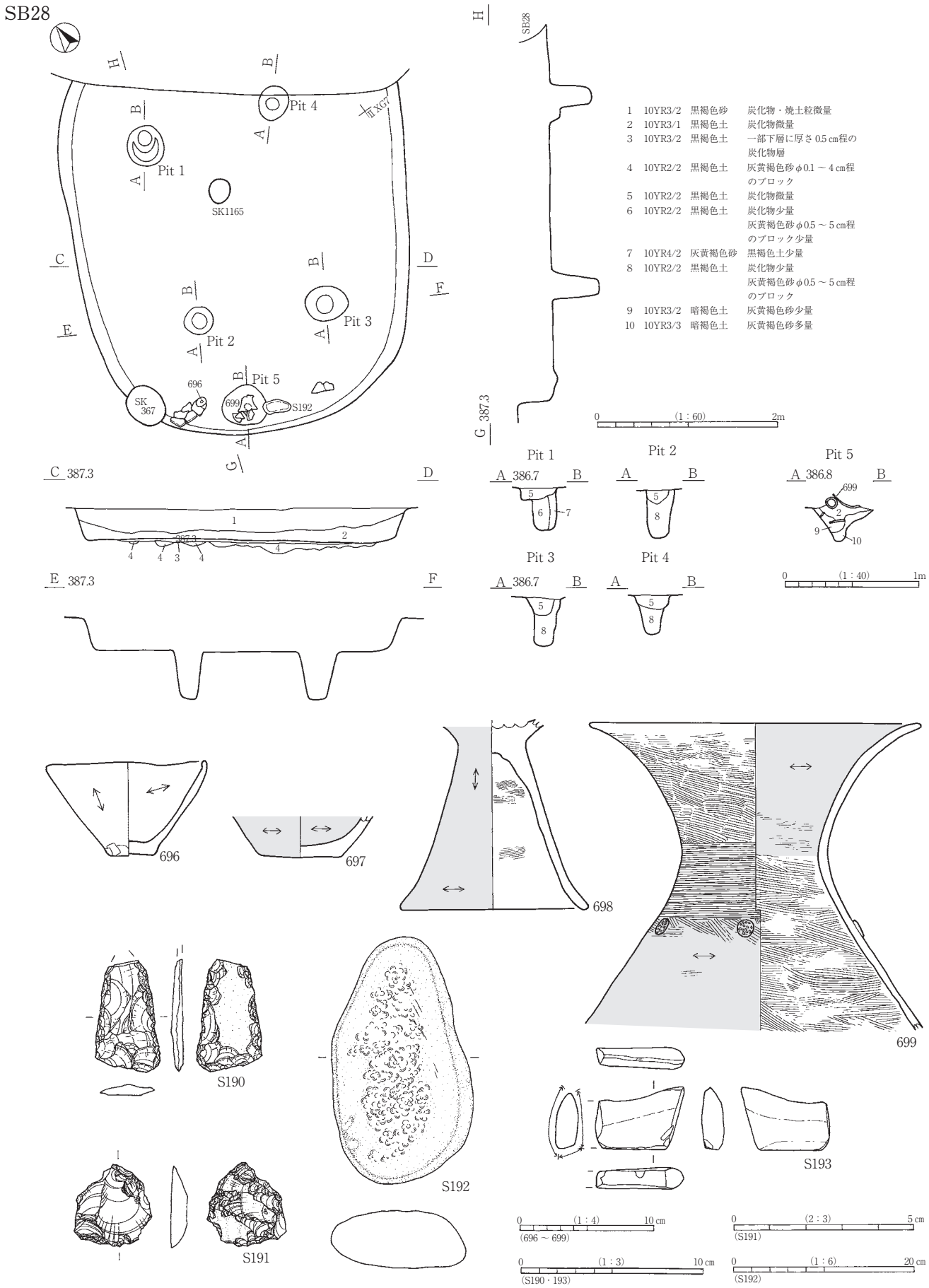
出土遺物（第 86 図 696 ～ 699、S190 ～ S193　　PL35・44・45・46）

掲載した遺物は、696 は床面、697・699 はピット 5 内、その他は埋土中からの出土である。

696・697 は鉢である。696 はほぼ完形で、赤彩されない。698 は高坏である。699 は壺で、頸部文様帯には直線文が巡らされ、文様帯直下には櫛状工具により刺突が施された円形浮文が貼り付けられる。胴部および口縁部内側が赤彩される。

S190 は凝灰岩材の磨製石鏃未成品。剝離成形段階で先端部を欠損する。S191 は楔形石器か。やや不明瞭な両極剝離痕のある黒曜石材の砕片。S192 は安山岩材の台石。表面に複数の敲打痕がみられる。

S193 は砂岩材の小型砥石。



第 86 図　弥生時代後期の個別図 38

SB30 （第 48・87 図　　PL25） ⑥区ⅡX12・13・17・18

調査区の関係から遺構の西側と東側とで分割調査をせざるを得なかった。さらに、調査工程上の関係で、遺構西側の調査は、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。遺構東側の調査は、平成 15 年度後半に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB31・32、SD48 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、SB31・32 →本址 → SD48 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

東西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.42m、短軸 5.66m、深さ 0.46m を測る。埋土は複層で、中位層に焼土や炭化物の層が確認されており、竪穴が自然埋没する過程で、何らかの用途に使用された可能性がある。床面は、中央付近など、一部堅緻で硬化する部分も認められるが、全体的にはっきりしない。また、床面中央には強く被熱赤化している部分が確認されている。炉は、甕の胴部以下を埋設した埋甕炉。主柱穴間のほぼ中央に位置し、竪穴中央側の床面が酸化・被熱し、奥壁側に炭化物層が広がっている。主柱穴は 4 本で、いずれも 2 段に近い形状の掘り方を持つ。床下調査で検出された壁際のピット 14・20 は出入り口部を構成する柱穴と考えられる。

埋土中より土器片や土製品・石器がやや多く出土している。また、埋土中より木片・シカの歯の破片（＊3）がわずかに出土している。炉址の南側床面から粒子状になった「赤色顔料」が出土した。本住居跡の時期は、炉から出土している甕（727）より、後期後葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB24 などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 88・89 図 700 ～ 729、S194 ～ S200　　PL35・36・42・44・45・47）

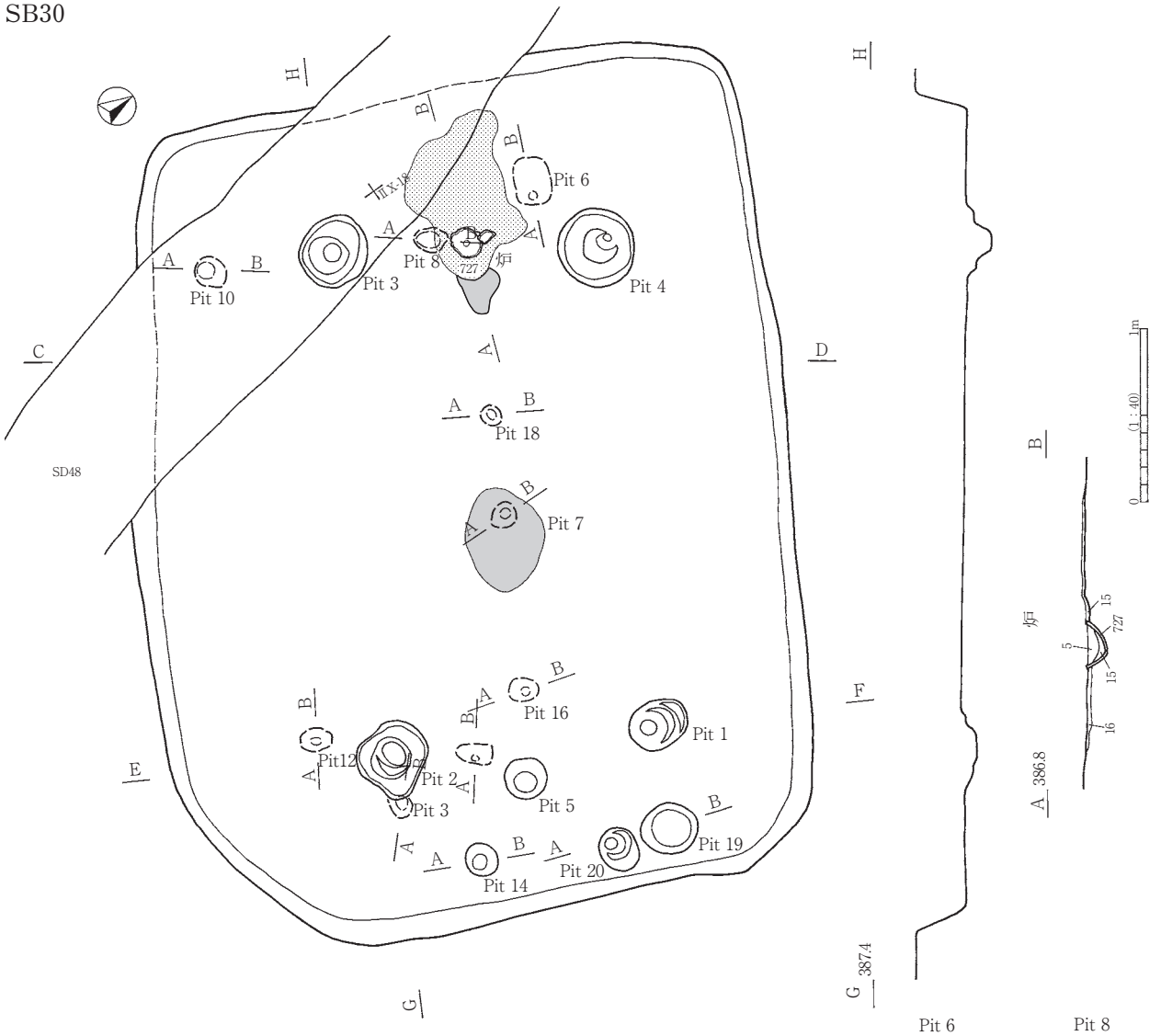
掲載した遺物は、702・703・706・710・719・723・724 は床面、727 は炉内、712 はピット 6 内、713 はピット 3 と床下、719 はピット 19 内、724 はピット 3 と 19、526 は床下、その他は埋土中からの出土である。

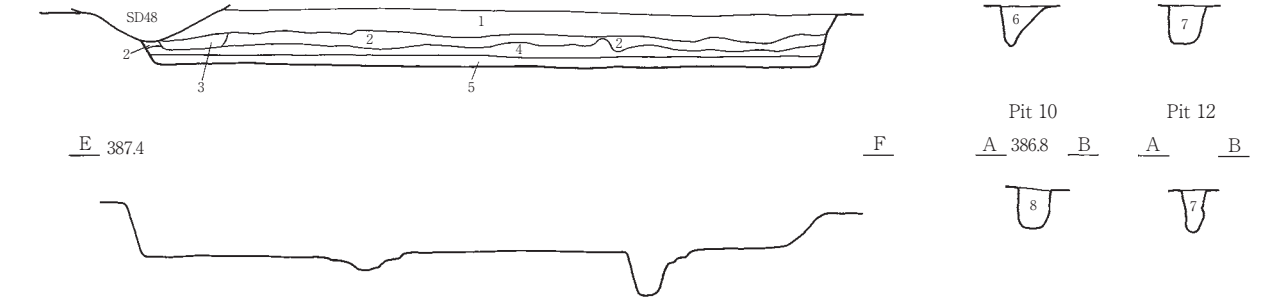
700・701 は鉢である。700 は口縁部破片で、口縁部に一対の円孔が設けられている。702・703・705・706・712 は高坏である。702 は、椀形口縁高坏の坏部で赤彩されている。703 は鍔状口縁高坏であるが、口縁部の屈曲は不明瞭である。706 は高坏の脚部で、三角透かしをもつ。704・707 ～ 710・714 は壺である。707 は壺の頸部で、頸部文様帯にはＴ字文が施され口縁部の内外面とも赤彩される。708 は胴部から底部で、底部付近は赤彩されない。710 は、北陸系の短頸壺と思われる。ハケ調整が残り、赤彩されている。711・715 は赤彩深鉢である。713 は、赤彩された蓋の破片で、一対と思われる円孔が設けられている。716 ～ 727 は甕である。716 ～ 718 は口縁部破片で、櫛描波状文が充填されている。723 は、口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。724 は、頸部の屈曲点から口縁部が外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。727 は、甕の胴部から底部で、胴部には櫛描波状文が充填され、底部付近と内面は丁寧にミガキ調整が行われている。

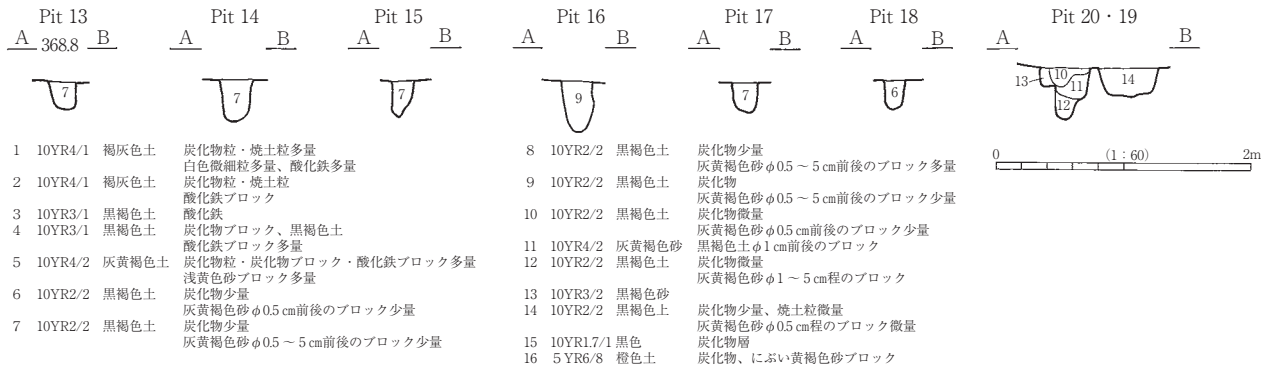
728 は甕の、729 は壺の破片を加工して作られた加工円盤である。

S194 は凝灰岩材の剝片。S195 ～ S197 は磨製石鏃の未成品。S195 は表裏に磨り切り施溝痕のある資料で、磨製石鏃の素材と考えられる。S196 は剝離成形段階で、基部を欠損する。S197 は凝灰岩材の横長剝片を使用し、側面と表裏面に研磨痕跡がある。適切な剝離成形段階を欠いた資料である。S198 は 1 穴式の磨製石包丁。刃部は片刃だが、研磨により部分的に偏両刃となる箇所がある。S199 は頁岩材の横長剝片を利用した刃器。刃縁は使用により摩耗している。剝離成形段階で先端部を欠損する。S200 は砂岩材の棒状敲石で、長軸の両端部に敲打痕がみられる。

SB30

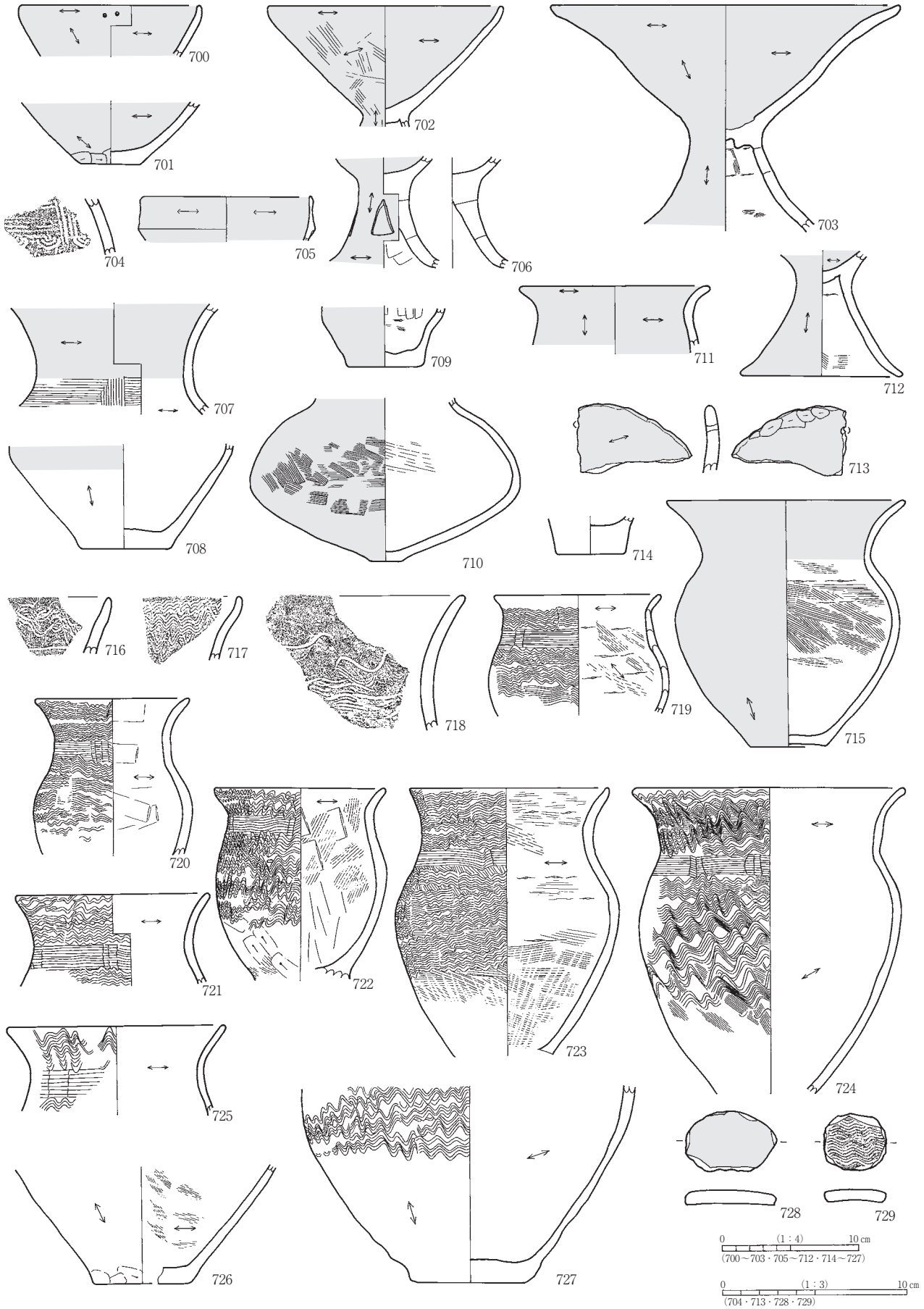




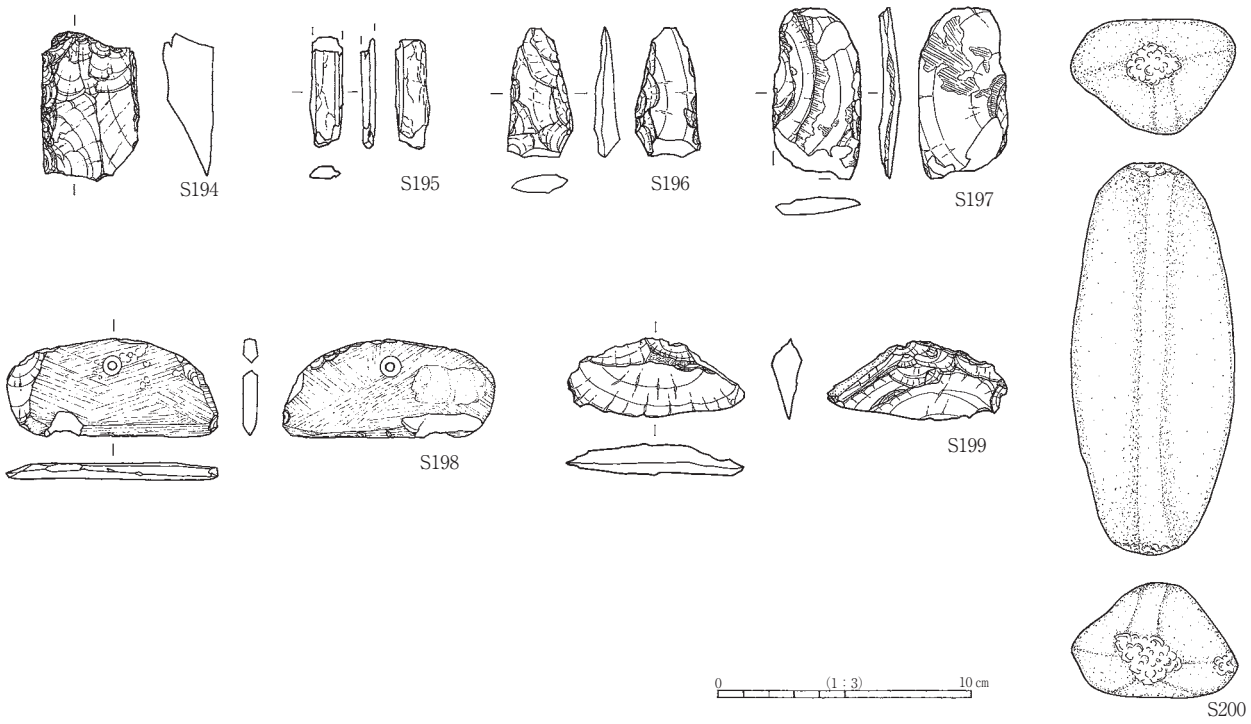


1	10YR4/1	褐灰色土	炭化物粒・焼土粒多量 白色微細粒多量、酸化鉄多量
2	10YR4/1	褐灰色土	炭化物粒・焼土粒 酸化鉄ブロック
3	10YR3/1	黒褐色土	酸化鉄
4	10YR3/1	黒褐色土	炭化物ブロック、黒褐色土 酸化鉄ブロック多量
5	10YR4/2	灰黄褐色土	炭化物粒・炭化物ブロック・酸化鉄ブロック多量 浅黄色砂ブロック多量
6	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
7	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5～5㎝前後のブロック少量
8	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5～5㎝前後のブロック多量
9	10YR2/2	黒褐色土	炭化物 灰黄褐色砂φ0.5～5㎝前後のブロック少量
10	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
11	10YR4/2	灰黄褐色砂	黒褐色土φ1㎝前後のブロック
12	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ1～5㎝程のブロック
13	10YR3/2	黒褐色砂	
14	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量、焼土粒微量 灰黄褐色砂φ0.5㎝程のブロック微量
15	10YR1.7/1	黒色	炭化物層
16	5YR6/8	橙色土	炭化物、にぶい黄褐色砂ブロック

第 87 図　弥生時代後期の個別図 39



第 88 図　弥生時代後期の個別図 40



第 89 図　弥生時代後期の個別図 41

SB33　（第 48・90 図）　⑥区ⅡX8・13

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB54 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、SB54 →本址という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

東側が調査区外となるが、南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると推定される。規模は、長軸は残存値で 5.88m、短軸 4.64m、深さ 0.42m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、一部堅緻で硬化する部分も認められるが、全体的にはっきりしない。炉は、確認されなかった。調査区外に位置していると考えられる。主柱穴は 4 本と想定されるうちの 2 本が確認されている。いずれも 2 段に近い形状の掘り方を持ち、柱痕跡が認識される。床下調査で検出された壁際のピット 1・2 は出入り口部を構成する柱穴と考えられる。

埋土中より土器片や土製品・石器・骨片が出土している。床面より、大形の土器片や碧玉の原石などが出土している。本住居跡の時期は、床から出土している壺（734）より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB18 などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 91 図 730 ～ 736、S201 ～ S208　　PL1・37・42・44・45）

掲載した遺物は、731・S201 ～ S207 は床面、734 は床面と SB35 埋土中、その他は埋土中からの出土である。

730 ～ 733 は甕である。732 は、頸部の屈曲点から口縁部が外反する甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。734 は大形の壺で、胴下半部のくびれがはっきりしている。頸部文様帯には 2 条 1 組の垂下文によりＴ字文が施され、横走する直線文の最下位は櫛描波状文となる。胴部中央が穿孔される。

735 は甕の、736 は壺の破片を加工して作られた加工円盤である。

S201 ～ S206 は碧玉材で、玉作り関連資料と考えられる。S201 ～ S203・S205 は剥片で、S203 は石核素材となる可能性もあるか。S204 と S206 は石核。S207 は流紋岩材の小型磨製石斧で、扁平な両刃。縄文的な石斧である。S208 は石鏃の刃部破片。

SB34 （第 48・92 図） ⑥区ⅡX6・7・11・12

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剥いで検出。SB24・36 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、本址→ SB36 → SB24 という新旧関係を確認した。さらに、床面下の精査をしていく中で、新たに炉跡及び柱穴等が確認され、それらの配置から本址とは主軸方向が直行する住居跡の存在が確認された。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 6.88m、短軸 4.30m、深さ 0.38m を測る。埋土は複層に分層され、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、一部堅緻で硬化する部分も認められるが、全体的にはっきりしない。炉は確認されなかった。柱穴は、床面の精査でははっきりと確認できなかったものの、床面下の精査で明確にプランを把握した。４本の主柱穴と２本の出入り口部を構成する柱穴を確認した。ピット５からは、柱材の一部が出土している。柱材の樹種は、カヤである（＊2）。

埋土中より土器片や土製品・石器・柱材・モモの種子・金属製品・骨片が出土している。本住居跡の時期は、床面から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB18 などと同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 93・94 図 737 ～ 759、S209 ～ S216、金属製品１　　PL1・36・37・42 ～ 45・47）

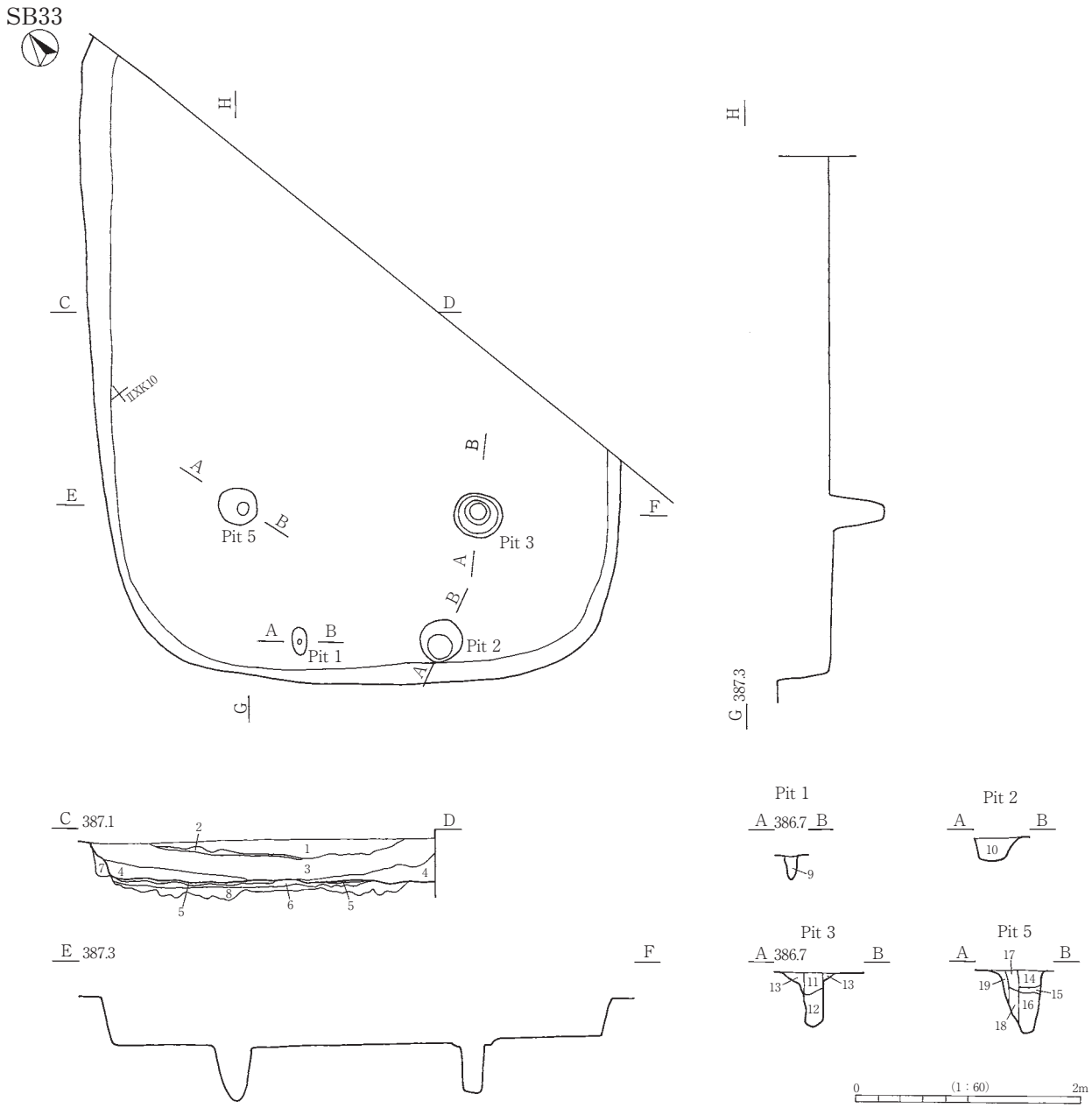
掲載した遺物は、738・743・746・752・754・S212・S213・S217・S218 は床面、745 はピット７内、758・759 は床下の炉内、744・749・755 は床下、その他は埋土中からの出土である。

737 は鉢である。738・742 ～ 746 は高坏である。742 は、鍔状口縁高坏の坏部で鍔状部の外反が強い。743 は、有段口縁高坏の坏部で、坏部有稜部までの深さが深く、口縁部立ち上がりが直立傾向にある。739 ～ 741 は壺である。740 は頸部破片で、頸部文様帯には直線文が施され、その下位に鋸歯文が付加される。741 は壺の肩部で、頸部文様帯には直線文が施され、胴部は赤彩される。747 は甑、748 ～ 754 は甕である。

755・756 は壺の、757 は鉢の破片を加工して作られた加工円盤である。758・759 は、土製の玉である。

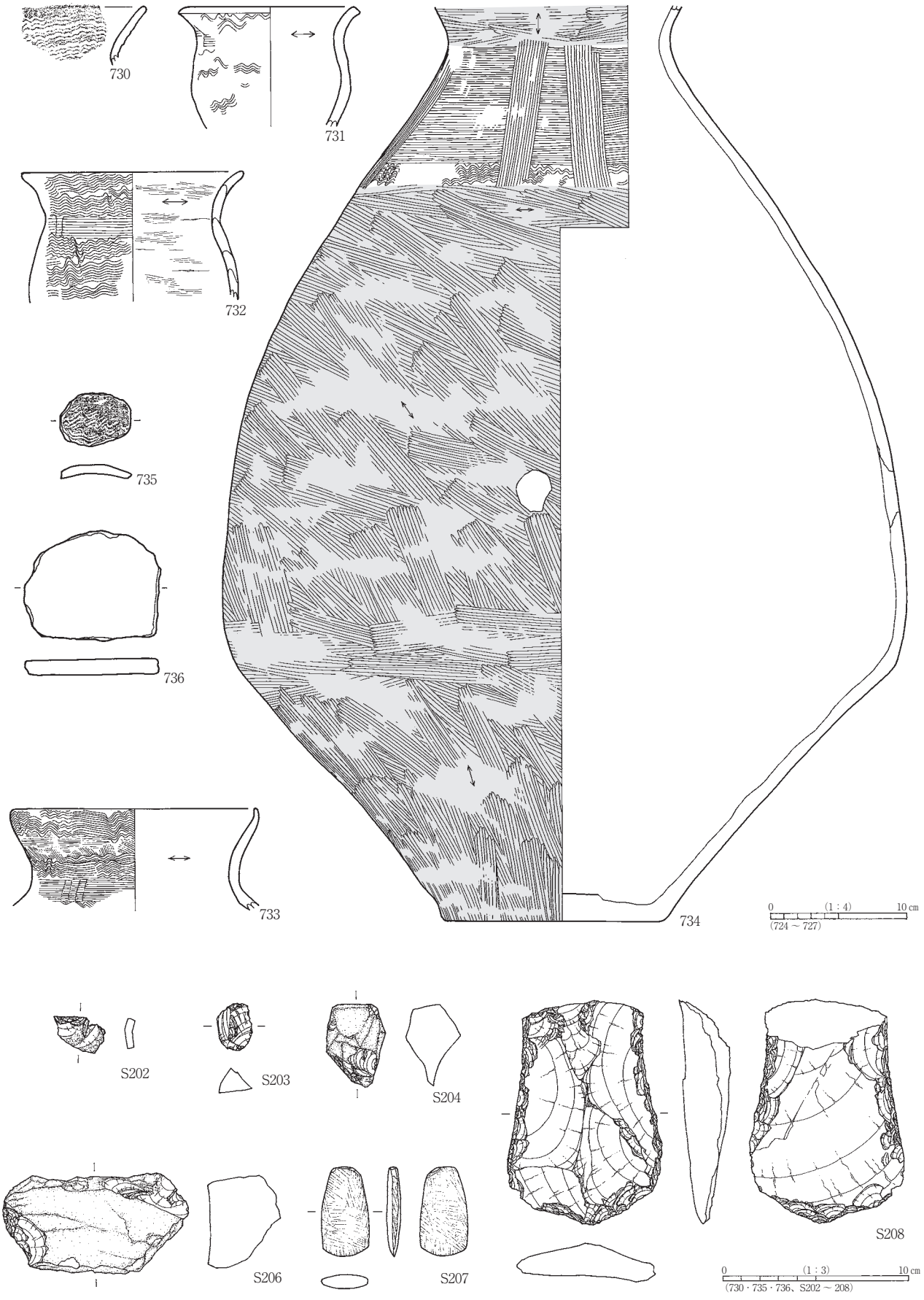
金属製品１は、釘と思われるが、上層からの混入の可能性が考えられる。

S209・S210 は凝灰岩材の磨製石鏃未成品。ともに剥離成形段階であり、S210 はその初期的な例、S209 はていねいな剥離加工が及んだ例だが、基部を欠損する。S211 は黒曜石材の平基有茎式石鏃。S212 はチャート材の磨き石。S213 は凝灰岩材の石核。大きさから推定して、磨製石鏃の素材を剥離したものと考えられる。S214 は砥石。細粒の砂岩材を用い、端部を砥面とする。また側面には敲打の痕跡がある。S215 は敲石。下端は敲打と摩耗面が認められ、頭部にも敲打痕がある。S216 は安山岩材の凹石で、表面は使用によるものか摩耗している。S217 はメノウ、S218 は石英の原石である。

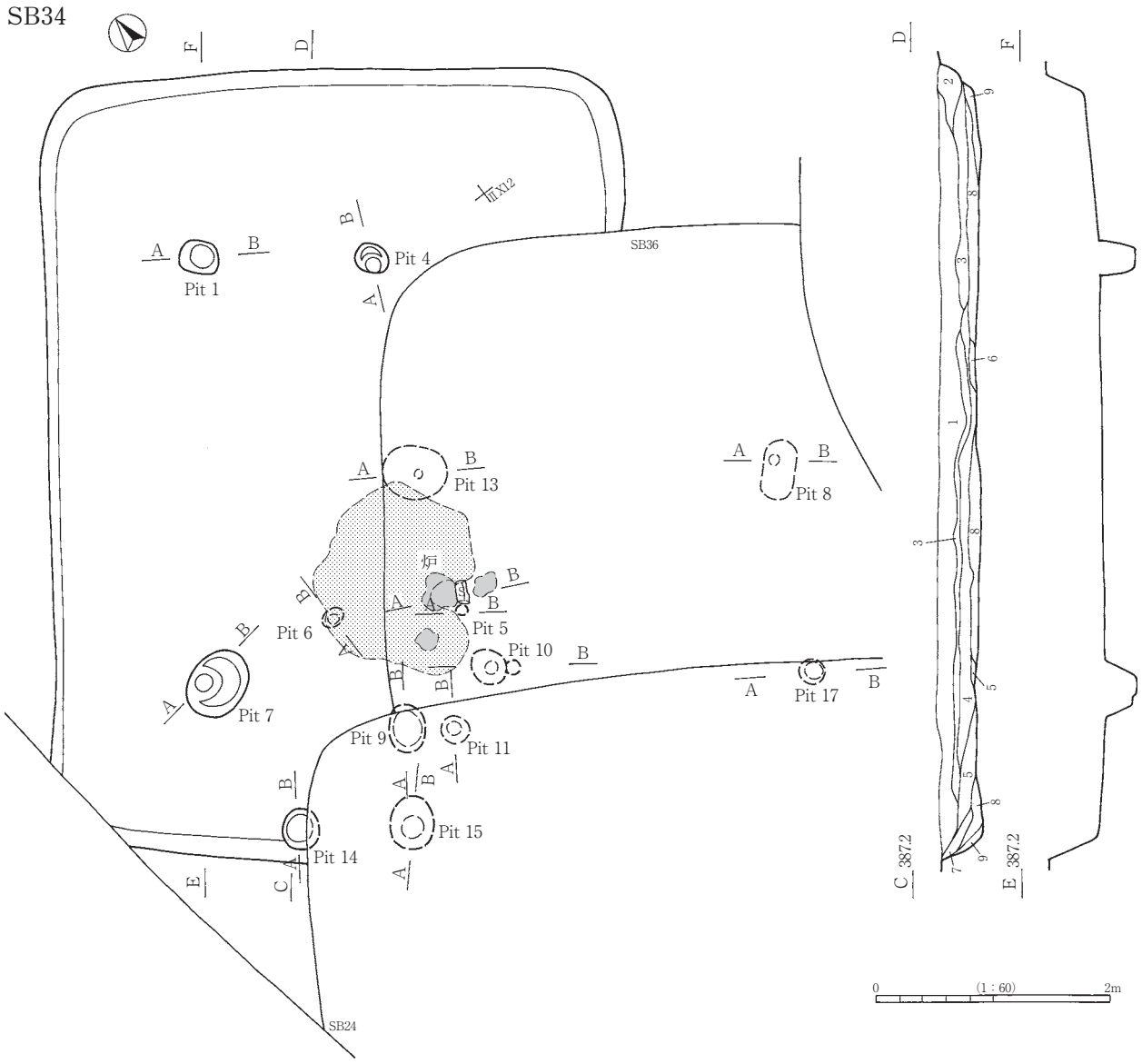


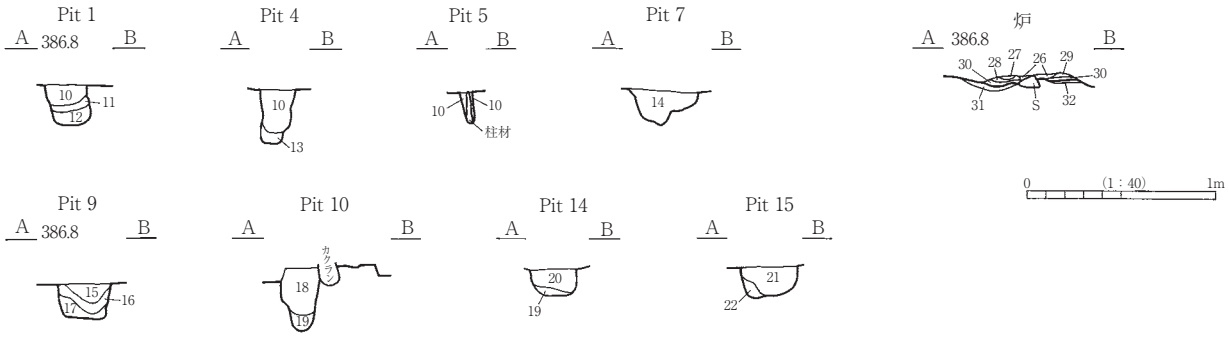
1　10YR2/3　黒褐色土　炭化物・焼土粒微量
2　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
　　焼土粒及びφ1～5㎝前後の焼土ブロック
3　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、焼土粒微量
4　10YR2/1　黒色土　炭化物
5　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　にぶい黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
6　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　灰黄褐色土φ0.5㎝前後のブロック少量
7　10YR3/2　黒褐色土
8　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5～5㎝程のブロック炭化物微量
9　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
10　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック微量
11　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
12　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ3㎝前後のブロック
13　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
14　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック
15　10YR3/2　黒褐色砂　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック微量
　　黒褐色土少量
16　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
17　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂微量
18　10YR3/2　黒褐色砂　炭化物微量、黒褐色土
19　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック多量

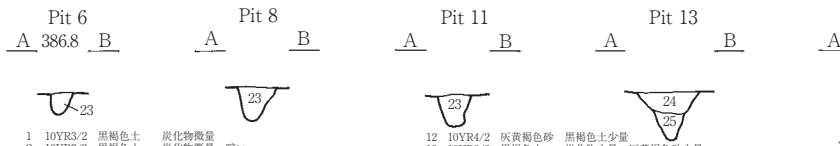
第 90 図　弥生時代後期の個別図 42



第 91 図　弥生時代後期の個別図 43

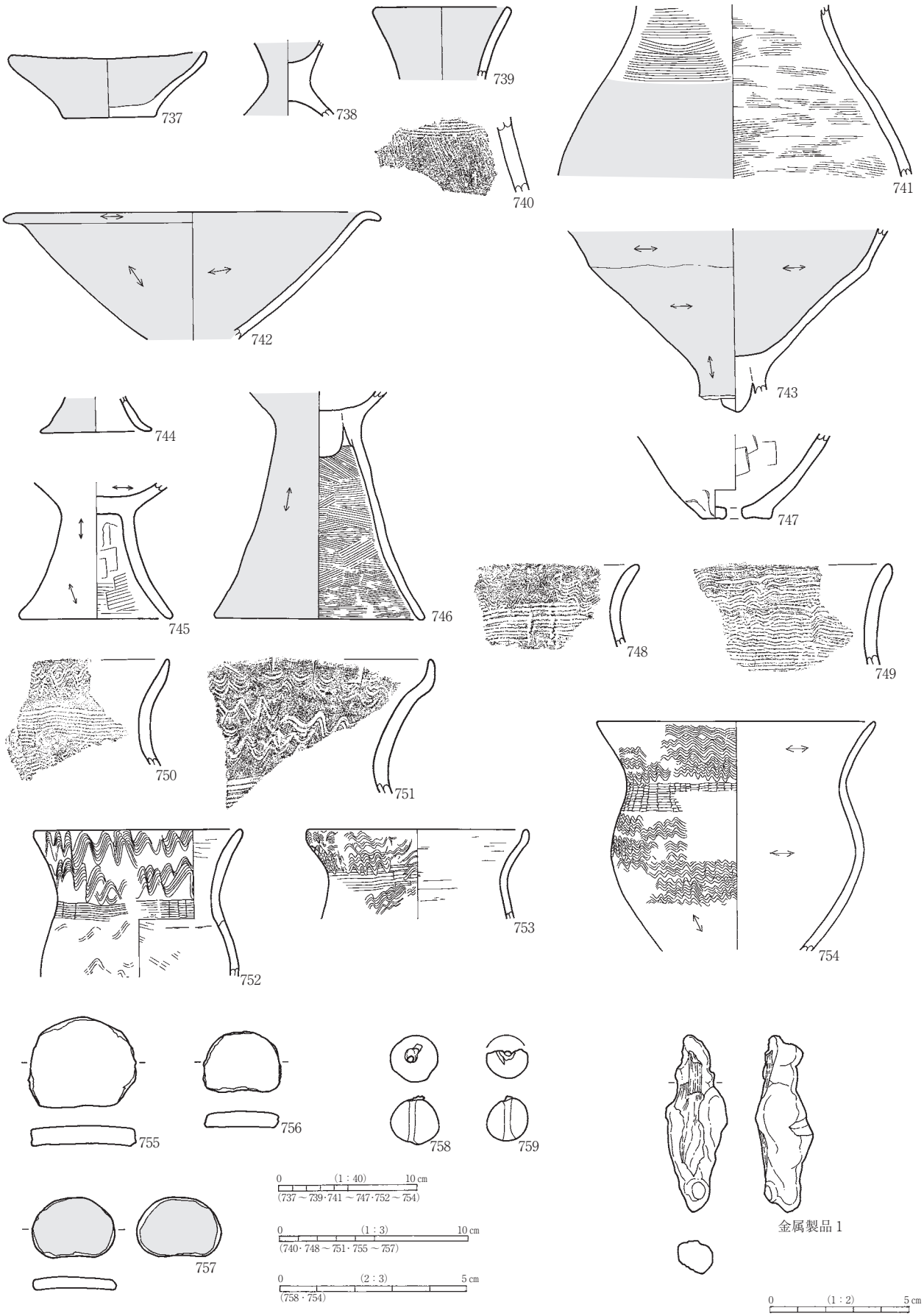




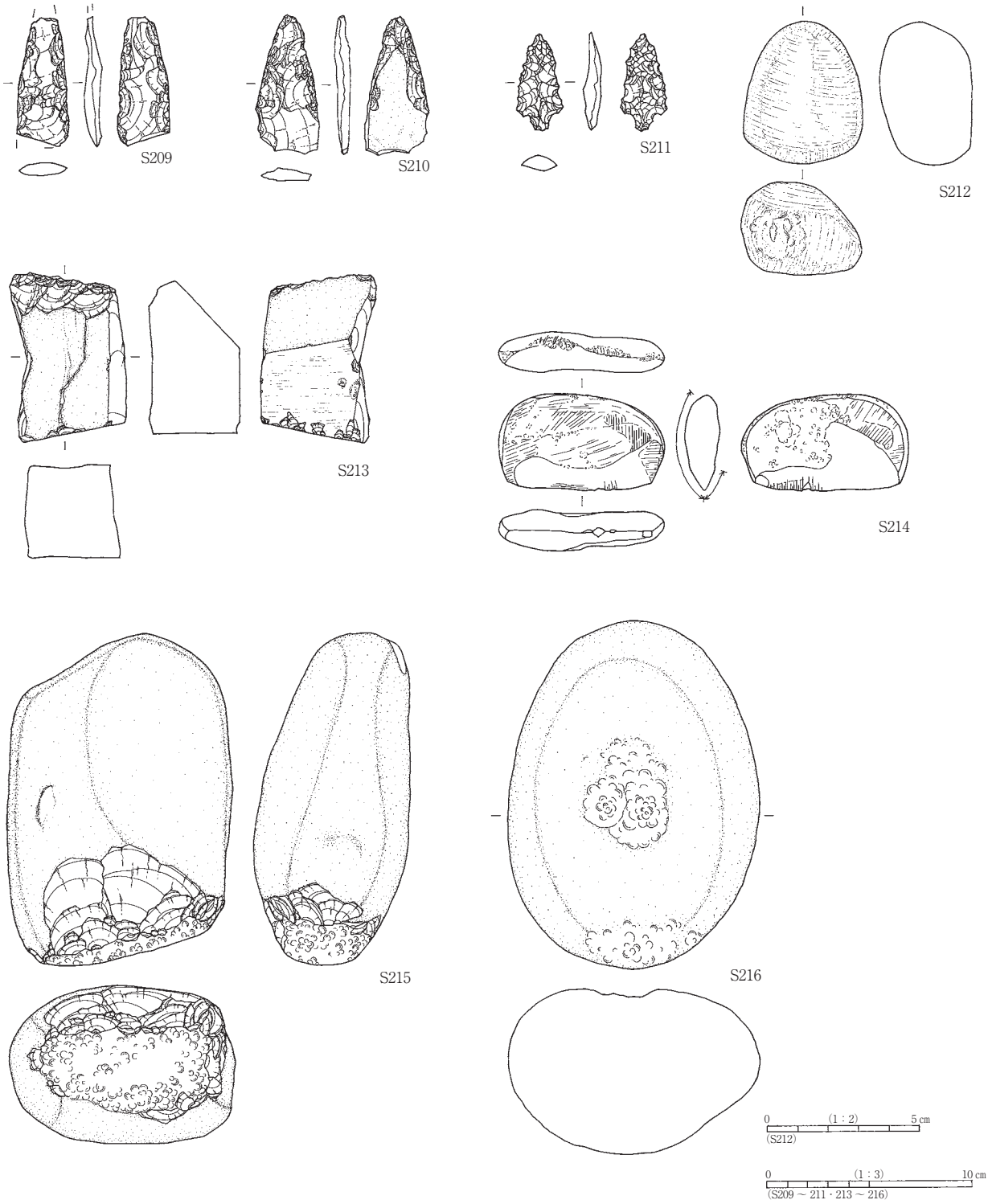


1　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量、暗い
3　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量
　にぶい黄褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
4　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量
5　10YR3/1　黒褐色土　炭化物少量
　にぶい黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
6　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量、にぶい黄褐色砂多量
7　10YR3/1　黒褐色土　にぶい黄褐色砂少量
8　10YR3/1　黒褐色土　炭化物微量
9　10YR3/1　黒褐色土　にぶい黄褐色砂
10　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
11　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土
12　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土少量
13　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂少量
14　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック微量
15　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂微量
16　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
17　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ0.5㎝前後のブロック少量
18　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量
　灰黄褐色砂φ0.5～4㎝程のブロック少量
19　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土少量
20　10YR2/2　黒褐色土　炭化物微量、灰黄褐色砂微量
21　10YR2/2　黒褐色土　炭化物
　灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
22　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量、灰黄褐色砂多量
23　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
　灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック微量
24　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量
25　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色砂多量
26　10YR2/3　黒褐色土　焼土粒、灰多量
27　5YR4/8　赤褐色土
28　5YR4/4　にぶい赤褐色土
29　10YR2/3　黒褐色土　焼土粒・炭化物微量
30　10YR2/3　黒褐色土　炭化物、焼土粒微量
31　5YR4/3　にぶい赤褐色土
32　5YR4/4　にぶい赤褐色土

第 92 図　弥生時代後期の個別図 44



第 93 図　弥生時代後期の個別図 45



第 94 図　弥生時代後期の個別図 46

SB35 （第 48・95 図　　PL25） ⑥区ⅡX3・8

調査区の関係から遺構の西側と東側とで分割調査をせざるを得なかった。さらに、調査工程上の関係で、遺構西側の調査は、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。遺構東側の調査は、平成 15 年度後半に実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB59、SD113・117、SK1074・1077 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、本址が最も新しいことを確認した。床面は炭化材に覆われており、焼失住居と捉えた。北西の壁際では壁面と直行する方向で炭化材が検出されている。

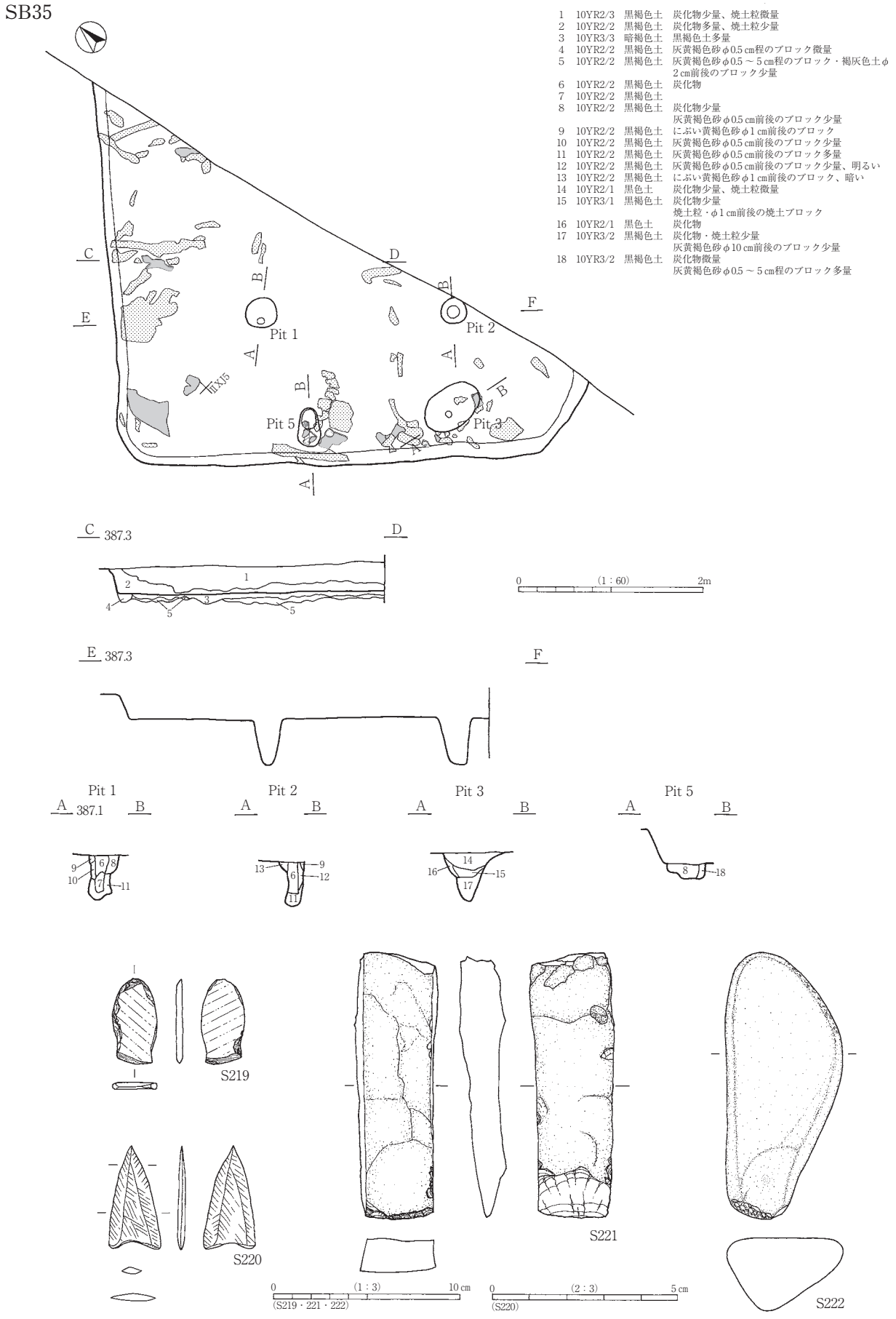
大半が調査区外のため明確でない部分もあるが、柱穴配置から言っても北東－南西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると考えられる。規模は、検出された範囲で長軸 4.36m、短軸 5.10m、深さ 0.34m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。炭化材や炭化物層に覆われており、部分的に強く被熱赤化している。炉は確認されなかった。調査区外に位置していると考えられる。主柱穴は 4 本と想定されるうちの 2 本が確認されている。いずれも、柱痕跡が認識される。床下調査で検出された壁際のピット 5 は出入り口部を構成する柱穴と考えられる。ピット 3 はその位置から貯蔵穴の可能性がある。

埋土中より土器片や石器・シカの歯の破片（＊3）が出土している。南西の壁際付近でまとまって出土した土器片は SB33 床面出土の壺（734）に接合した。

出土遺物（第 95 図 S219 ～ S222　PL44・45・47）

掲載した遺物は、S221・S223 は床面、S222 はピット 3 内、S220 は床下、その他は埋土中からの出土である。

S219 は頁岩材の扁平小型石斧。剝片の端部を中心に研磨した部分磨製の両刃。S220 は凝灰岩材の磨製石鏃で完形品。S221 はやや扁平で核柱状の頁岩の原材。端部が欠けているが、石器としての刃部か否かは不明である。S222 は砂岩材の敲石。長軸の一方の端部に摩耗を伴う敲部がある。



第 95 図　弥生時代後期の個別図 47

SB36 （第 48・96 図） ⑥区ⅡX11･12

調査工程上の関係で、平成 14 年度に遺構の平面プラン検出から掘り下げを行い、平成 15 年度前半に床面精査遺構の調査を実施した。Ⅶ層を剝いで検出。SB23・24・34 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、SB34 →本址→ SB23・24 という新旧関係を確認した。さらに、床面下の精査をしていく中で、新たに焼土址及び柱穴等が確認され、それらの配置から本址とは主軸方向が直行する住居跡の存在が確認された。

南北方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸は残存値で 4.12m、短軸 5.22m、深さ 0.34m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、炉周辺が堅緻な部分も認められるが、全体的にはっきりしない。炉は、長軸 21cm、短軸 15cm、深さ 12cm を測る楕円形の地床炉で、奥壁側の主柱穴間ほぼ中央に位置する。炉床は被熱赤化が著しく、炉跡とピット３の間の床面に炭化物層が広がる。柱穴は、床面の精査でははっきりと確認できなかったものの床面下の精査で主柱穴（ピット 5・10）のプランを把握した。また、SB24 の床下調査で２基の柱穴が確認され、合わせて４本の主柱穴と判断した。なお、ピット３は、屋内棟持ち柱の柱穴と想定される。

埋土中より土器片や土製品・石器・骨片が出土している。

出土遺物（第 96 図 760 ～ 767、S223　　PL38・47）

掲載した遺物は、766 は床面、761・764 は床下、その他は埋土中からの出土である。

760 は赤彩深鉢である。761 は、北陸系の鉢の口縁部と思われるが、検討を要する。762 は壺の頸部破片で、頸部文様帯には横走する直線文と櫛描波状文が交互に施文される。763 ～ 766 は甕である。

767 は、ミニチュア土器である。

S223 は砂岩材の敲石。表裏側面に浅い擂鉢状の凹部があり、側面や端部も摩耗を伴う敲打部がある。

SB37 （第 48・97 図　　PL26） ⑥区ⅡX11･16

Ⅶ層を剝いで検出。SB24・25・26 と重複関係が認められたが、サブトレンチによる土層断面観察等で、SB25 →本址→ SB24・26 という新旧関係を確認した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

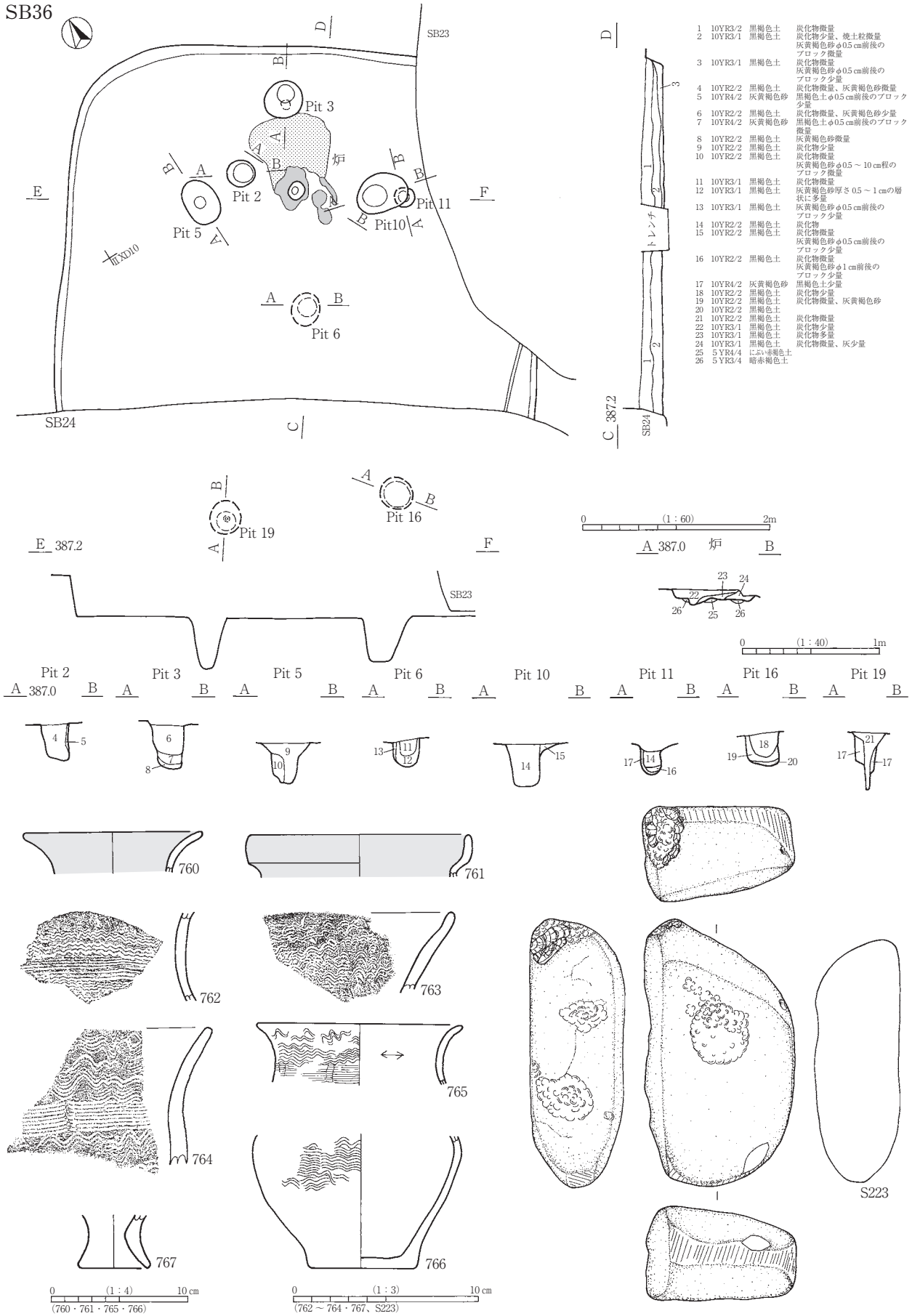
遺構の重複により全体形状がつかめないため主軸方向や平面形等は不明である。規模は、検出された範囲で長軸 4.54m、短軸 3.78m、深さ 0.30m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。長さ約 70cm、幅約 30cm、高さ約 5cm の土手状に土が堅く締まっている部分が床面上で確認され、何らかの機能を有した施設の一部と考えられる。また、床面には炭化材や強く酸化・被熱した部分が認められた。炉は確認されなかった。床面で確認された３基（ピット１～３）の柱穴の内、ピット３は主柱穴と考える。

埋土中より土器片や石器が出土している。床面からは、完形に近い土器片が数個体出土しているほか、炭化材や「赤色顔料」が出土している。本住居跡の時期は、床から出土している土器（769・771）より、後期中葉箱清水期と認定される。

出土遺物（第 97 図 768 ～ 771　　PL37・38）

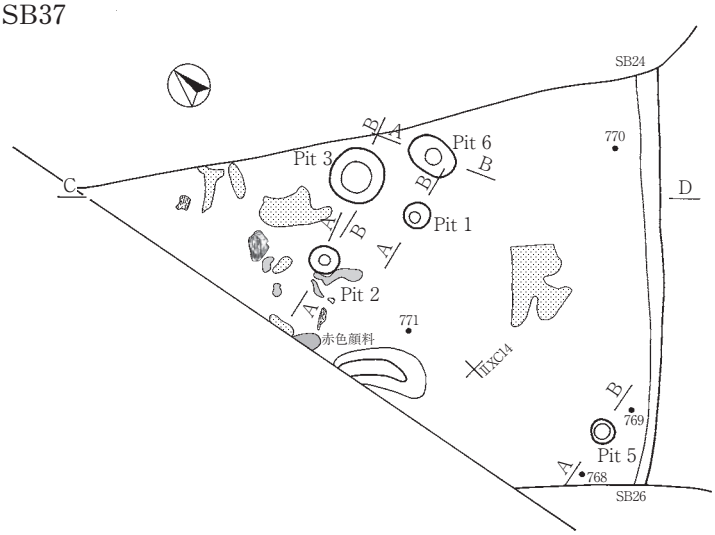
掲載した遺物は、769 ～ 771 は床面、その他は埋土中からの出土である。

768 は鉢である。769・770 は高坏である。769 は鍔状口縁高坏で、赤彩される。771 は台付の甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

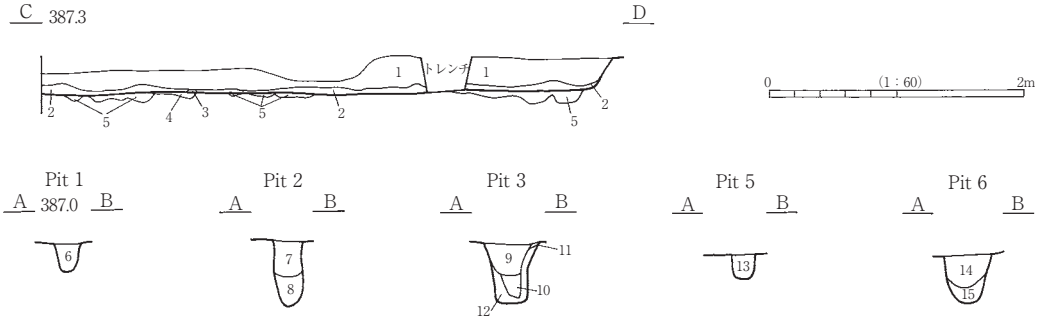


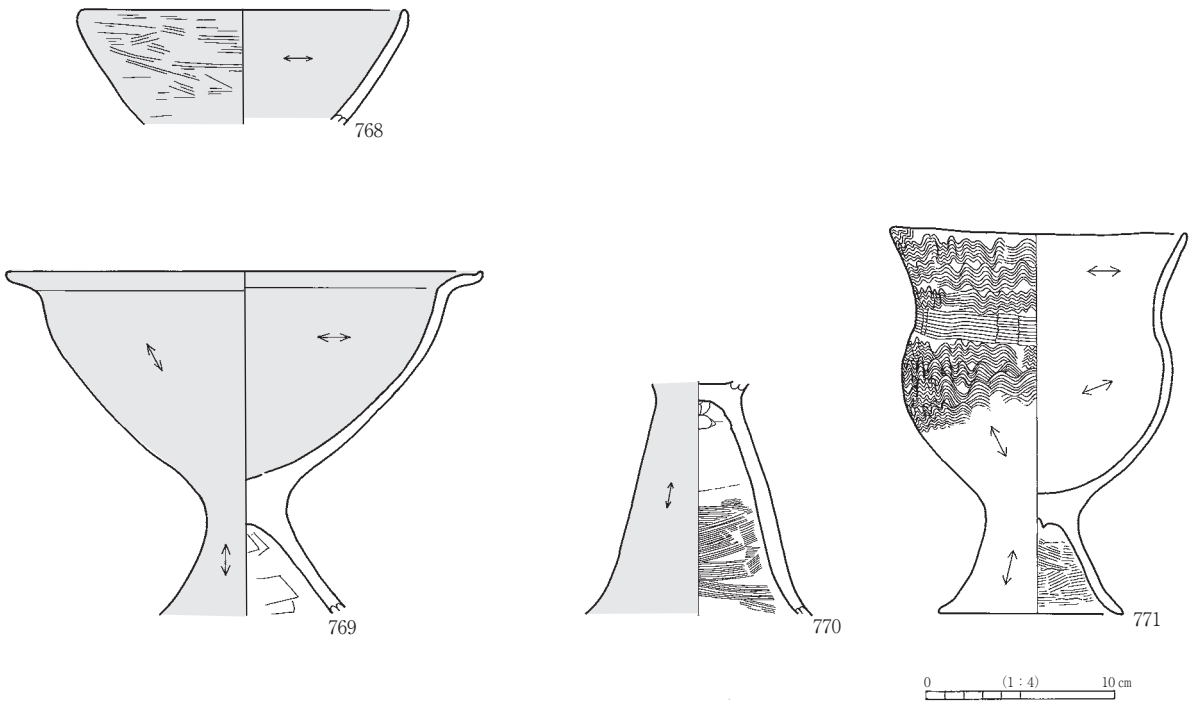
第 96 図　弥生時代後期の個別図 48

SB37



1	10YR3/2	黒褐色砂	炭化物層微量
2	10YR3/1	黒褐色土	
3	10YR3/1	黒褐色土	炭化物多量 φ1 cm前後の焼土ブロック少量
4	5YR4/4	にぶい赤褐色土	
5	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
6	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
7	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ5 cm前後のブロック微量
8	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量 灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック
9	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック
10	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック多量
11	10YR3/2	黒褐色土	
12	10YR4/2	灰黄褐色砂	黒褐色土φ1 cm前後のブロック少量
13	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック少量
14	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック
15	10YR2/2	黒褐色土	灰黄褐色砂多量





第 97 図　弥生時代後期の個別図 49

SB47 （第 48・98 図） ⑩区ⅣY22、VE2

Ⅶ層を剝いで検出。他遺構との重複関係は認められない。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

北東－南西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 3.26m、短軸 2.80m、深さ 0.29m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、全面に厚さ３～ 5cm の貼り床が施されている。床面中央に炭化物層の広がりが認められる。炉１は、長軸 24cm、短軸 19cm、深さ 4cm を測る楕円形の地床炉で、炉２は、長軸 35cm、短軸 29cm、深さ 5cm を測る楕円形の地床炉である。竪穴長軸方向に並んで確認された。新旧関係は明確ではないが、炭化物層の広がりや土器の出土状況等から、炉２→炉１の変遷を想定する。炉２は床面中央からみて外側に、炉１は内側に強く焼けている部分が残っており、いずれも反対側に炭化物層の広がりが認められる。使用の過程で、掻き出し行為があったものと解釈され、炉２と炭化物層との間に隔たりがあることが新旧の証左となろう。深さを伴ったしっかりとした柱穴は認められなかった。

埋土中より土器片が出土している。北東側の炉周辺から土器の大形破片が、竪穴南隅から甕型土器底部が出土している。本住居跡の時期は、床から出土している土器より、後期箱清水期と認定される。竪穴の規模・形状等から SB62 と同時期に存在していた可能性がある。

出土遺物（第 98 図 772 ～ 776　　PL38）

掲載した遺物は、772・774・776 は床面、その他は埋土中からの出土である。

772 は壺の胴部で、赤彩は認められない。773 ～ 776 は甕である。773 は頸部付近の破片で、胴部には櫛描波状文が充填され、頸部文様帯には、横走する直線文を縦方向の垂下文で区画するＴ字文が施される。

SB51 （第 48・99 図　　PL26） ⑨区ⅥI15・20、ⅣJ11

Ⅶ層を剝いで検出。上層で調査した古代の SD72 に切られる。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

古代の SD72 に切られ、また一部が調査区外となるため、全体の 1/3 ほどを調査したことになろうか。柱穴配置から言って、北東－南西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると考えられる。規模は、検出された範囲で長軸 4.35m、短軸 5.08m、深さ 0.11m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、主柱穴に囲まれた範囲の外側では明確に分層することはできなかったが、内側では３枚の貼り床面が観察された。貼り床はいずれも厚さ 1cm 程度。炉は、奥壁側２本の主柱穴間の中央に位置する地床炉で、３枚の床面に対応するように２回の作り替えが確認された。炉跡周囲は炭化物層が広がる。４本の主柱穴が確認された。

埋土中より土器片や石器・シカの歯の破片（＊3）が出土している。南西の壁際床面に、炭化物の厚い堆積と土器片が混在する部分が確認された。本住居跡の時期は、埋土中から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の主軸方向等から SB53 などと同時期に存在していた可能性がある。

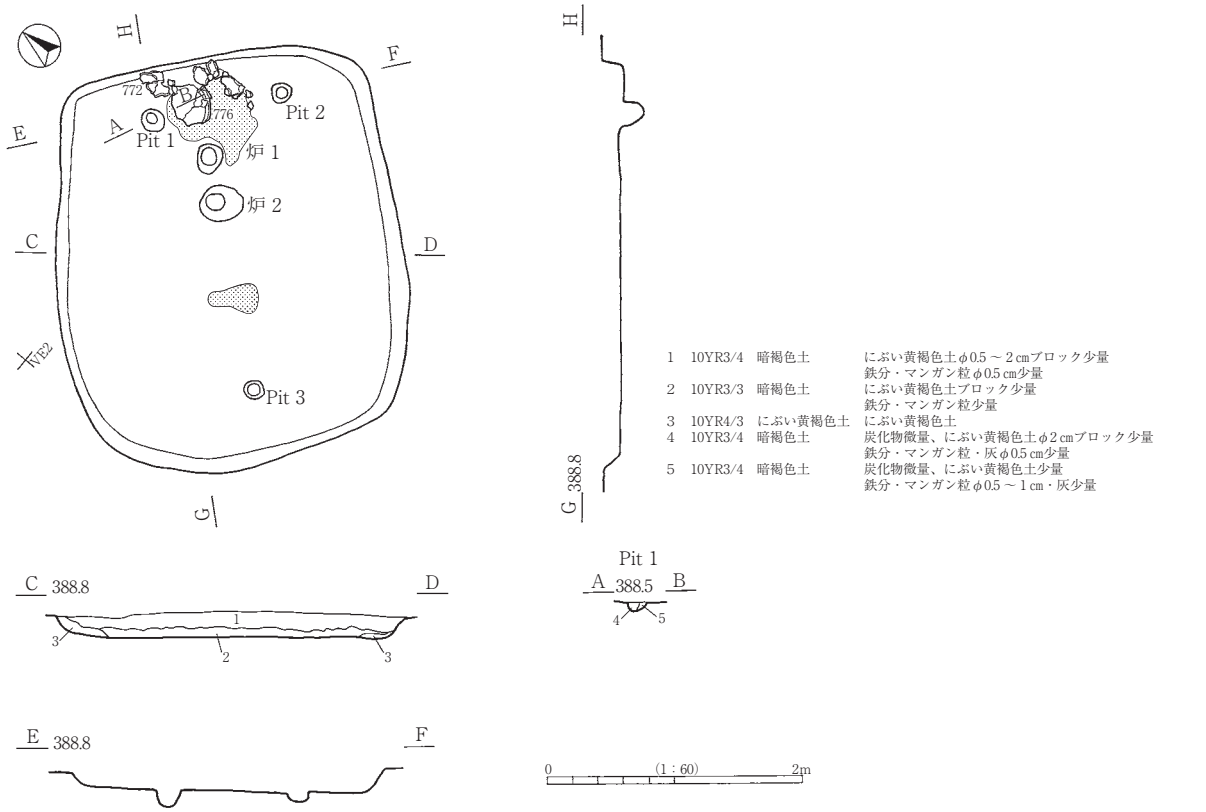
出土遺物（第 99 図 777 ～ 781、S224 ～ S225　　PL38・46）

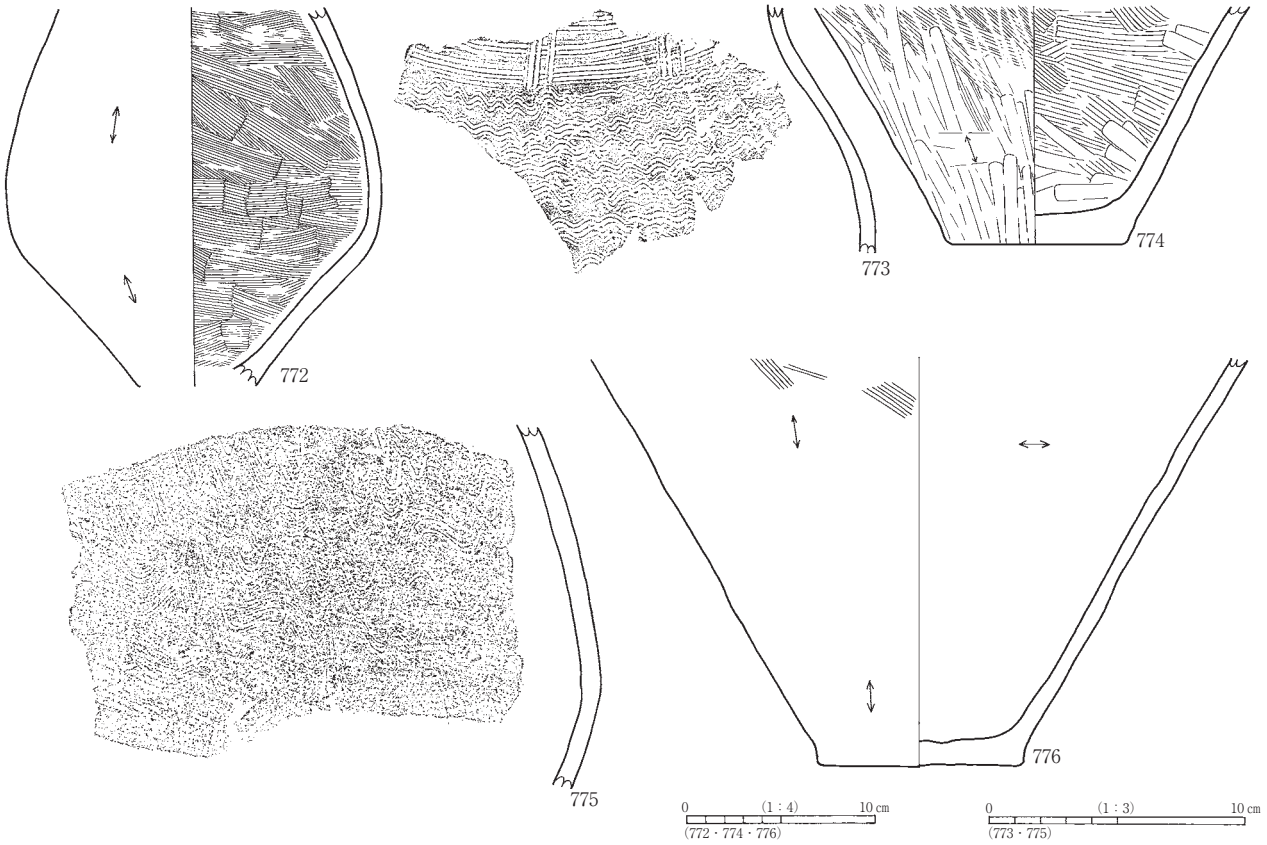
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

777 は片口の鉢で、内外面とも赤彩される。778 は壺の肩部付近で、頸部文様帯には直線文が巡らされる。赤彩は認められない。779 は鍔状口縁高坏の坏部であるが、鍔状部の屈曲は不明瞭である。赤彩されている。780 は甑、781 は甕である。

S224 と S225 は軽石製の砥石。表裏面に機能部がある。

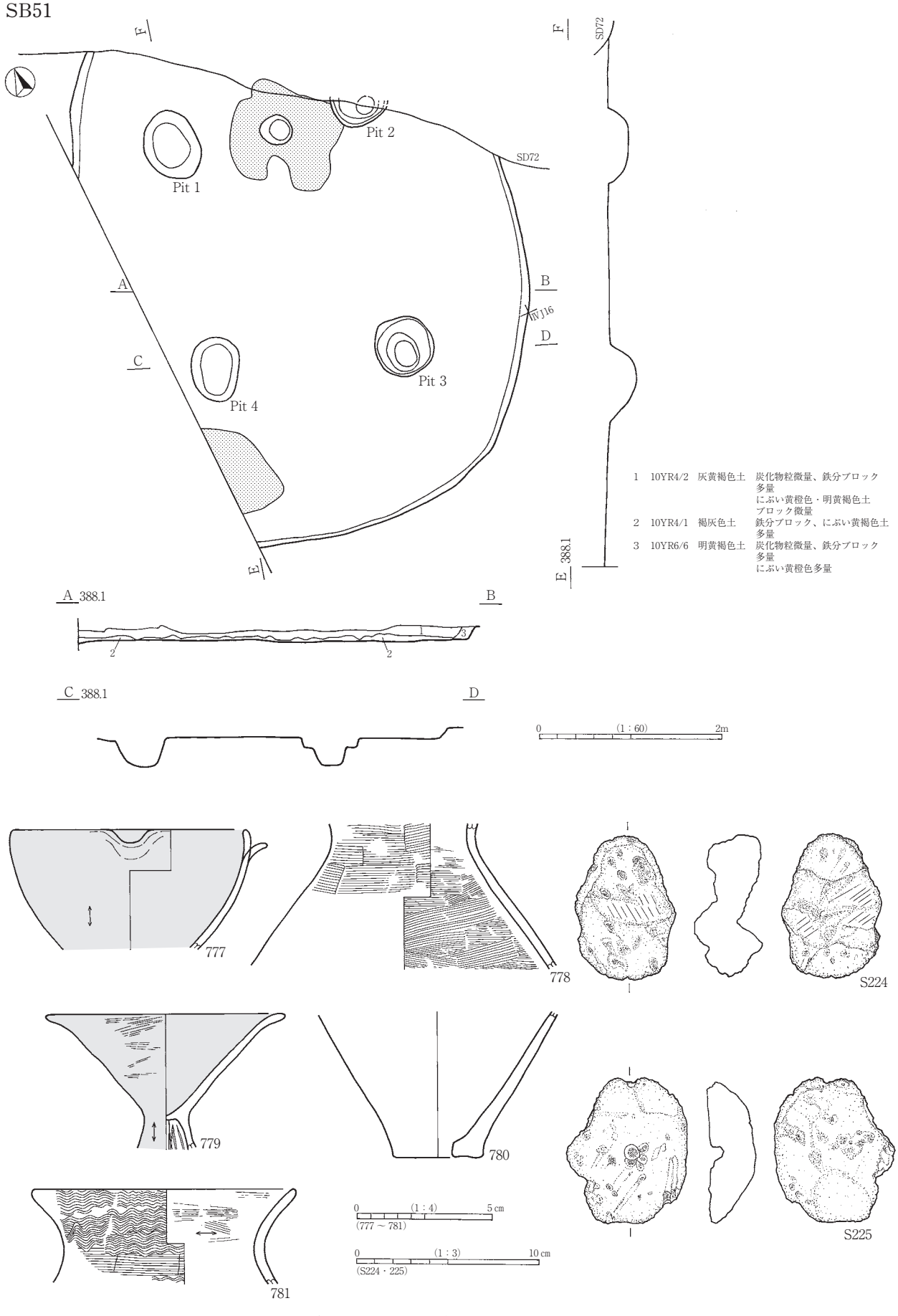
SB47





第 98 図　弥生時代後期の個別図 50

SB51



第 99 図　弥生時代後期の個別図 51

SB52 （第 48・100 図　　PL26） ⑨区Ⅳ J11・12・16・17

Ⅶ層を剝いで検出。古代の溝跡（SD67・71・72）に切られ、SB53 を切る。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

東西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 7.10m、短軸 5.0m、深さ 0.38m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、主柱穴に囲まれた範囲の外側では明確に分層することはできなかったが、内側では 3 枚の貼り床面が観察された。貼り床はいずれも厚さ 2cm 程度。炉は、2 本の主柱穴間の奥壁側に位置する地床炉で、3 枚の床面に対応するように 2 回の作り替えが確認された。炉跡周囲は炭化物層が広がる。4 本の主柱穴が確認された。

埋土中より土器片や石器が出土している。本住居跡の時期は、埋土中から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。 SB53 を切ることから、SB51 をはじめとした一群の住居址群よりも新しい。床面から出土した炭化材の一部で、炭素年代測定を行った。測定値は紀元前 2 ～ 87 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本構造の埋没年と考える。

出土遺物（第 100 図 782・783　　PL38）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

782・783 は甕である。783 は、頸部に簾状文を巡らせ、胴部には櫛描波状文を充填するが、口縁部には文様は充填されない。

SB55 （第 48・101 図） ④区Ⅱ C19・24

Ⅶ層を剝いで検出。SD92 と重複していたため、サブトレンチを入れ、断面で本址との切り合いを確認し、SD92 →本址という新旧関係を確認した。

大半が調査区外となるが、東西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると推定される。規模は、長軸は残存値で 1.68m、短軸 4.76m、深さ 0.35m を測る。埋土は、複層に分層され、堆積状況から自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化している。炉は、調査範囲の中では検出されていない。主柱穴は 4 本と想定されるうちの 2 本が確認されている。ピット 3 は、土層断面から、住居機能時には開口していた可能性が認められ、なおかつその位置から貯蔵穴の可能性がある。

埋土中より土器片や土製品・石器が出土している。本住居跡の時期は、埋土中から出土している土器より、後期箱清水期と認定される。他の住居跡群とは離れて単独で検出されているため、他遺構との同時性等については不明と言わざるを得ない。

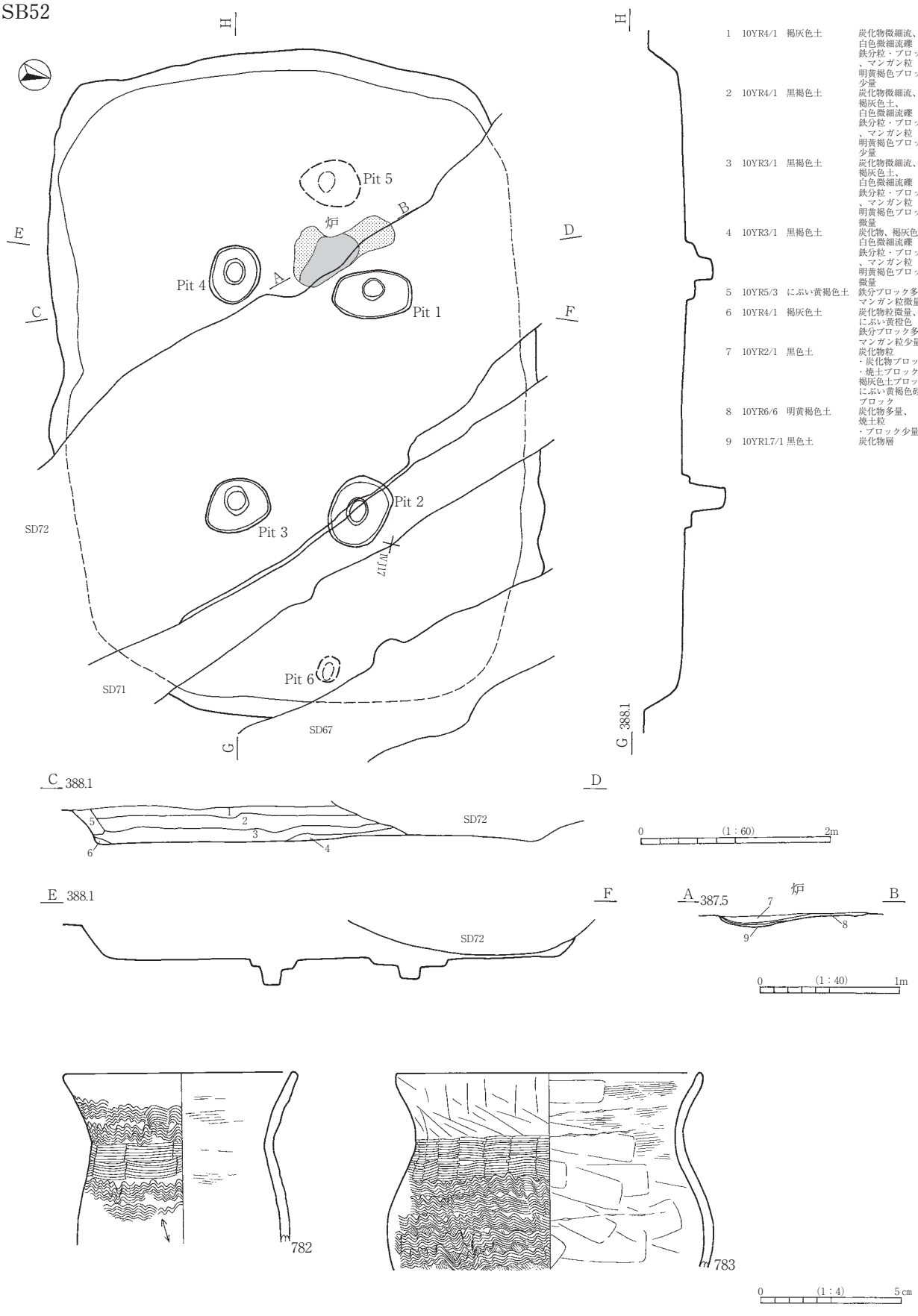
出土遺物（第 101 図 784 ～ 789、S226 ～ S228　　PL39・42・44・47）

掲載した遺物は、784 は床下、その他は埋土中からの出土である。

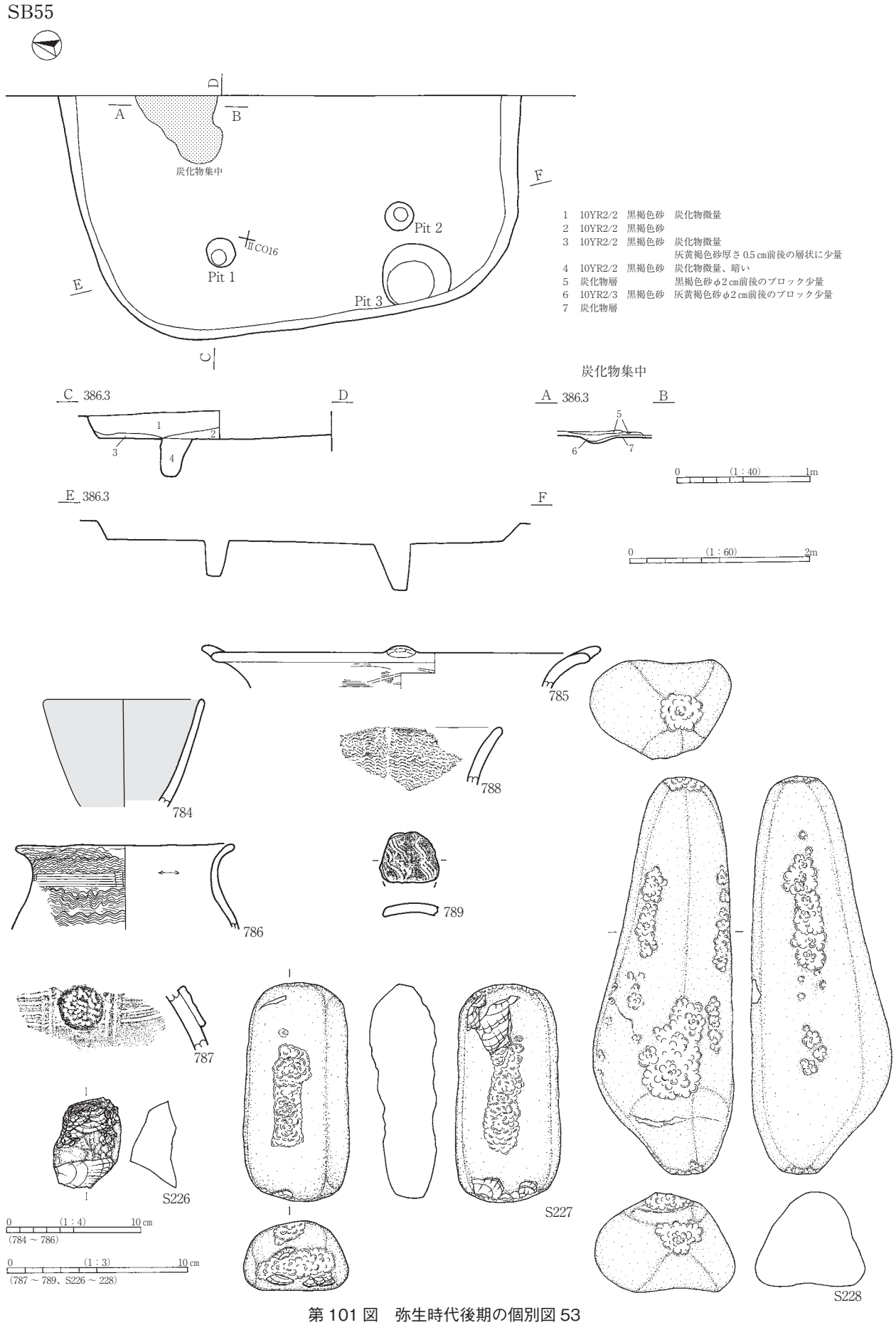
784 は鉢、785 は高坏である。787 は壺の頸部の破片で、頸部文様帯には 2 条 1 組の垂下文により T 字文が施され、櫛状工具により刺突が施された円形浮文が貼り付けられる。786・788 は甕である。

789 は甕の破片を加工して作られた加工円盤である。

S226 は、凝灰質砂岩材の石核である。S227 と S228 は敲石。ともに表裏面に凹部が、側辺の端部に摩耗を伴う敲打部がある。



第 100 図　弥生時代後期の個別図 52



第 101 図　弥生時代後期の個別図 53

SB56 （第 48・102 図　　PL26） ⑪区ＶE11・16

Ⅶ層を剝いで検出。他遺構との重複関係はみられない。十字にベルトを残し、それぞれを内側から掘り進めた。竪穴東南部では埋土と床面及び壁との区別がつきにくかったが、床面近くから土器や炭化物が出土した範囲では貼り床が施されていたため、床面については容易に判断できた。

東西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 3.58m、短軸 3.22m、深さ 0.36m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は、長軸 38cm、短軸 30cm、深さ 10cm を測る不整楕円形を呈する地床炉が床面の中央、西寄りで検出された。床面中央からみて内側に強く焼けている部分が残っており、炭化物層の広がりと対峙する。使用の過程で、掻き出し行為があったものと解釈される。柱穴は、１基のみ検出された。柱の太さは、土層断面で把握した柱痕跡から、径 11cm 程と推定される。床面付近から出土した炭化材の出土状況から、上屋が西側から東側へ向けて、またはこの柱穴に向かって倒れるような状況が想定される。

埋土中より土器片や石器が出土している。本住居跡の時期は、埋土中から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。

出土遺物（第 102 図 790 ～ 793　　PL38・39）

掲載した遺物は、790 は床面、その他は埋土中からの出土である。

790 は壺である。791 ～ 793 は甕である。791 は球胴の甕で、胴部には櫛状工具により格子目文が施され、頸部には簾状文が巡らされる。793 は球胴の甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

SB61 （第 48・103 図） ⑨区ＶE22

Ⅶ層を剝いで検出。東西方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

柱穴配置から東西方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈すると予想される。規模は、検出された範囲で長軸 1.06m、短軸 4.06m、深さ 0.26m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は、全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。ピット１とピット２の間の床面頂上に「赤色顔料」の薄い層が検出された。炉は確認されなかった。４基確認された柱穴の内、ピット２・３は出入り口部を構成する壁際の柱穴と考える。

埋土中より土器片や石器が出土している。本住居跡の時期は、床面やピット４から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。

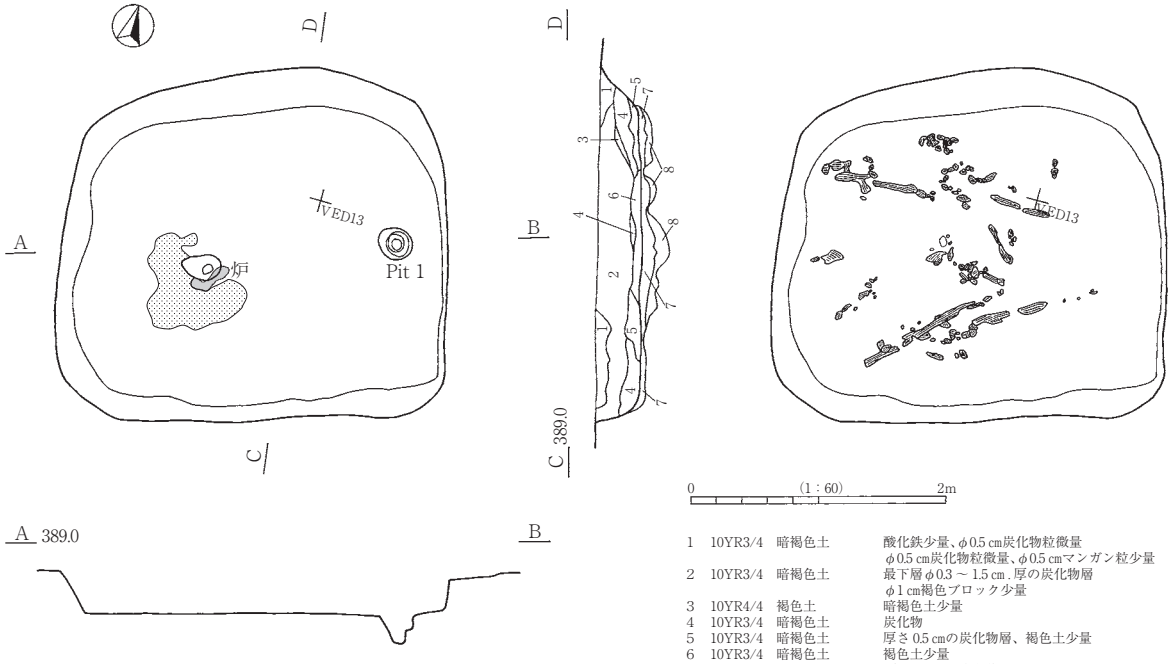
出土遺物（第 103 図 794 ～ 798、S229・S230　　PL39・46・47）

掲載した遺物は、794 は床面、798・S230 はピット１内、795 はピット４内、その他は埋土中からの出土である。

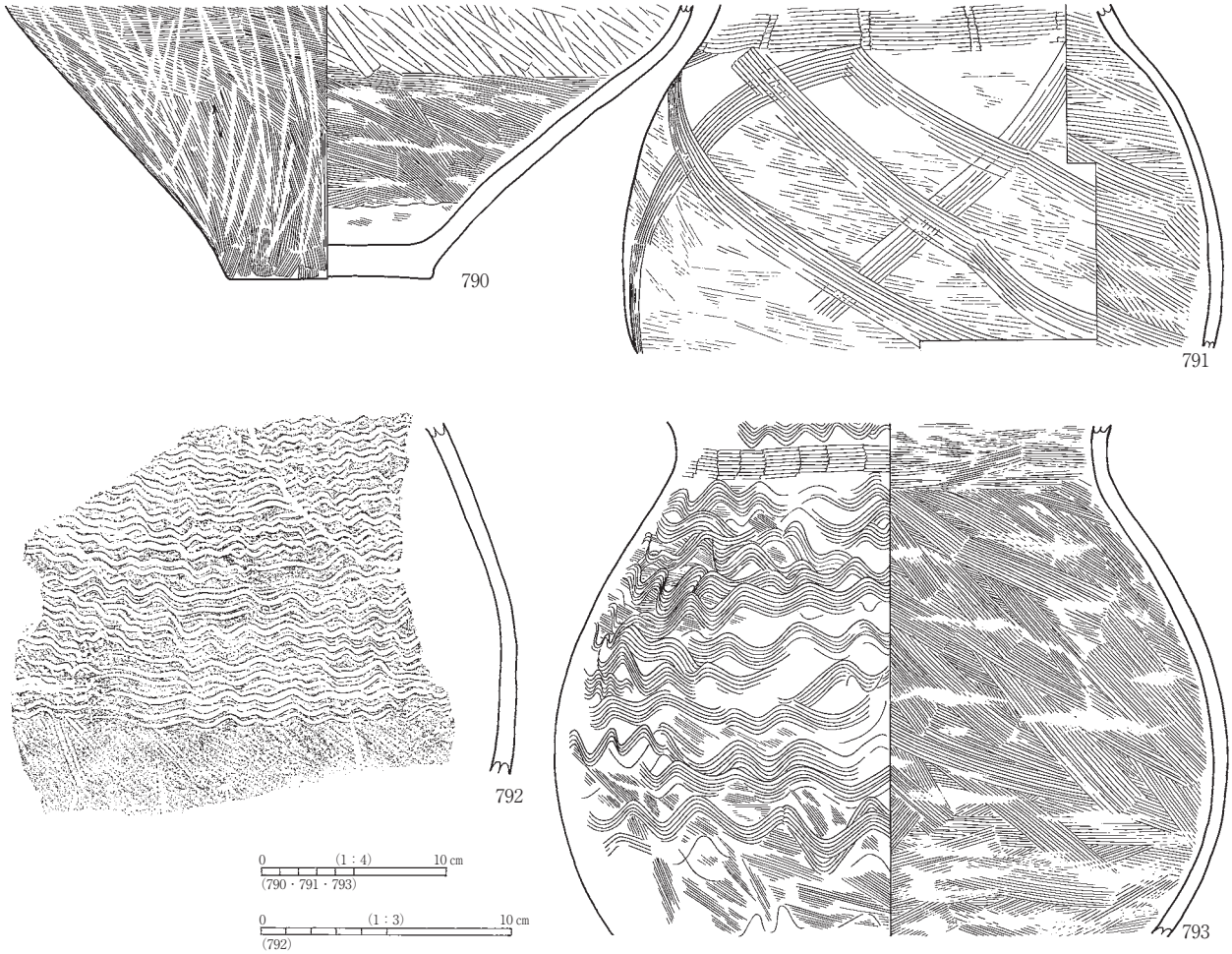
794 は碗形口縁高坏の坏部であると思われ、赤彩される。795 は壺の頸部から胴部の破片で、頸部文様帯には直線文が巡らされ、赤彩は認められない。796 ～ 798 は甕である。797・798 は台付の甕である。796 は胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

S229 は敲石。側面部に敲打痕がある。長軸の端部は摩耗を伴う敲打である。S230 は砂岩材の砥石もしくは台石か。表面には摩耗とみられる痕跡が２箇所にある。

SB56

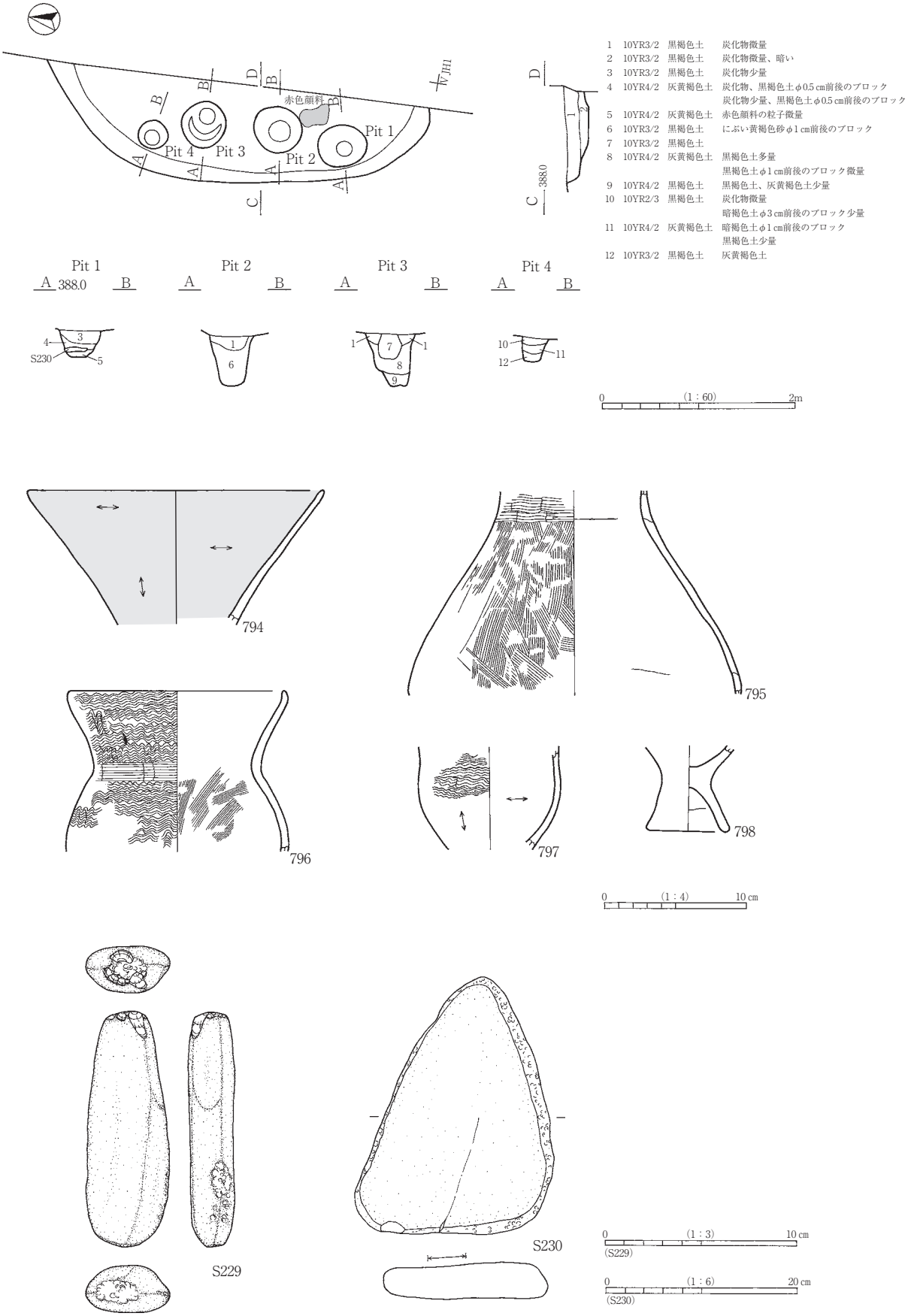


1　10YR3/4　暗褐色土　　酸化鉄少量、φ0.5㎝炭化物粒微量
　　φ0.5㎝炭化物粒微量、φ0.5㎝マンガン粒少量
2　10YR3/4　暗褐色土　　最下層φ0.3～1.5㎝.厚の炭化物層
　　φ1㎝褐色ブロック少量
3　10YR4/4　褐色土　　暗褐色土少量
4　10YR3/4　暗褐色土　　炭化物
5　10YR3/4　暗褐色土　　厚さ0.5㎝の炭化物層、褐色土少量
6　10YR3/4　暗褐色土　　褐色土少量
　　厚さ0.5㎝の炭化物層、明るい
7　10YR4/4　褐色土　　酸化鉄、灰黄褐細砂少量
8　10YR4/3　にぶい黄褐色土　灰黄褐細砂ブロック、酸化鉄少量



第 102 図　弥生時代後期の個別図 54

SB61



1　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量、暗い
3　10YR3/2　黒褐色土　炭化物少量
4　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物、黒褐色土φ0.5㎝前後のブロック
炭化物少量、黒褐色土φ0.5㎝前後のブロック
5　10YR4/2　灰黄褐色土　赤色顔料の粒子微量
6　10YR3/2　黒褐色土　にぶい黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
7　10YR3/2　黒褐色土
8　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土多量
黒褐色土φ1㎝前後のブロック微量
9　10YR4/2　黒褐色土　黒褐色土、灰黄褐色土少量
10　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
暗褐色土φ3㎝前後のブロック少量
11　10YR4/2　灰黄褐色土　暗褐色土φ1㎝前後のブロック
黒褐色土少量
12　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色土

第 103 図　弥生時代後期の個別図 55

SB62　（第 48・104 図　　PL26）　⑩区ⅣY16

Ⅶ層を剝いで検出。上層で SD61 を検出した際には本址を確認できなかったので、本址より SD61 の方が新しいと判断できる。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げに着手した。

南西北東方向に主軸を持つ隅丸長方形プランを呈する。規模は、長軸 3.84m、短軸 3.32m、深さ 0.32m を測る。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と考える。床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面が硬化しているが、部分的に貼り床を施している。炉は、床面のほぼ中央に土器敷き炉が位置し、奥壁側に炭化物層が広がる。土層断面観察から複数回の作り替えが推測される。４本の主柱穴（ピット 1・5・10・11）と出入り口部を構成する壁際の柱穴群（ピット 6・7 他）、屋内棟持ち柱と想定される柱穴（ピット 12）を確認した。いずれも比較的浅く、小規模である。

埋土中より土器片や土製品・石器・樹皮片等が出土し、床面より完形に近い土器や大形破片が出土している。ピット 1 北側の床面で「赤色顔料」が検出された。本住居跡の時期は、炉やその周辺から出土している土器より、後期中葉箱清水期と認定される。竪穴の規模・形状等から SB47 と同時期に存在していた可能性がある。

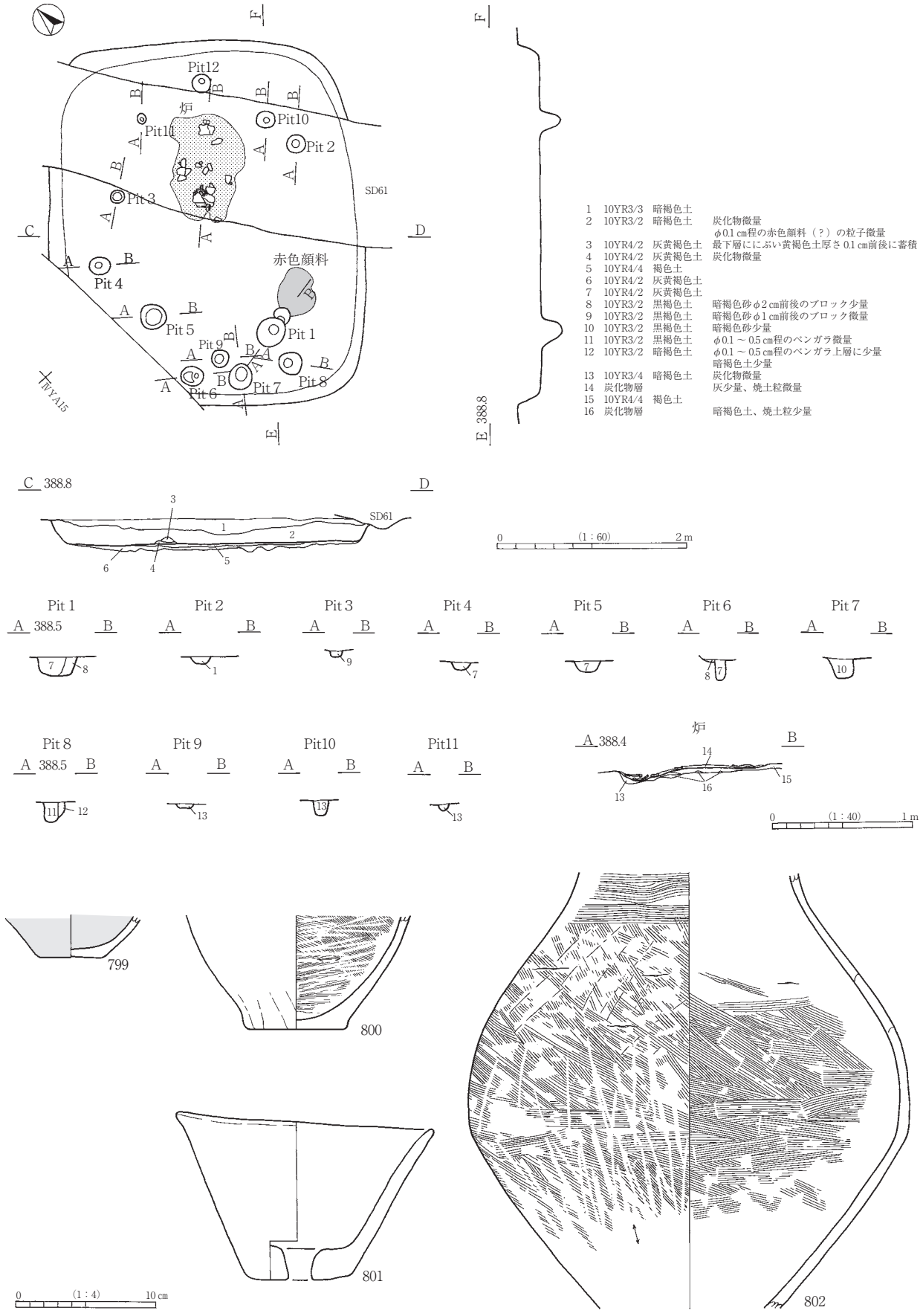
出土遺物（第 104・105 図 799 ～ 808　　PL39・40・42）

掲載した遺物は、800・801 は床面、805 は炉内、804・802 は炉周辺、806 はピット 8 内、その他は埋土中からの出土である。

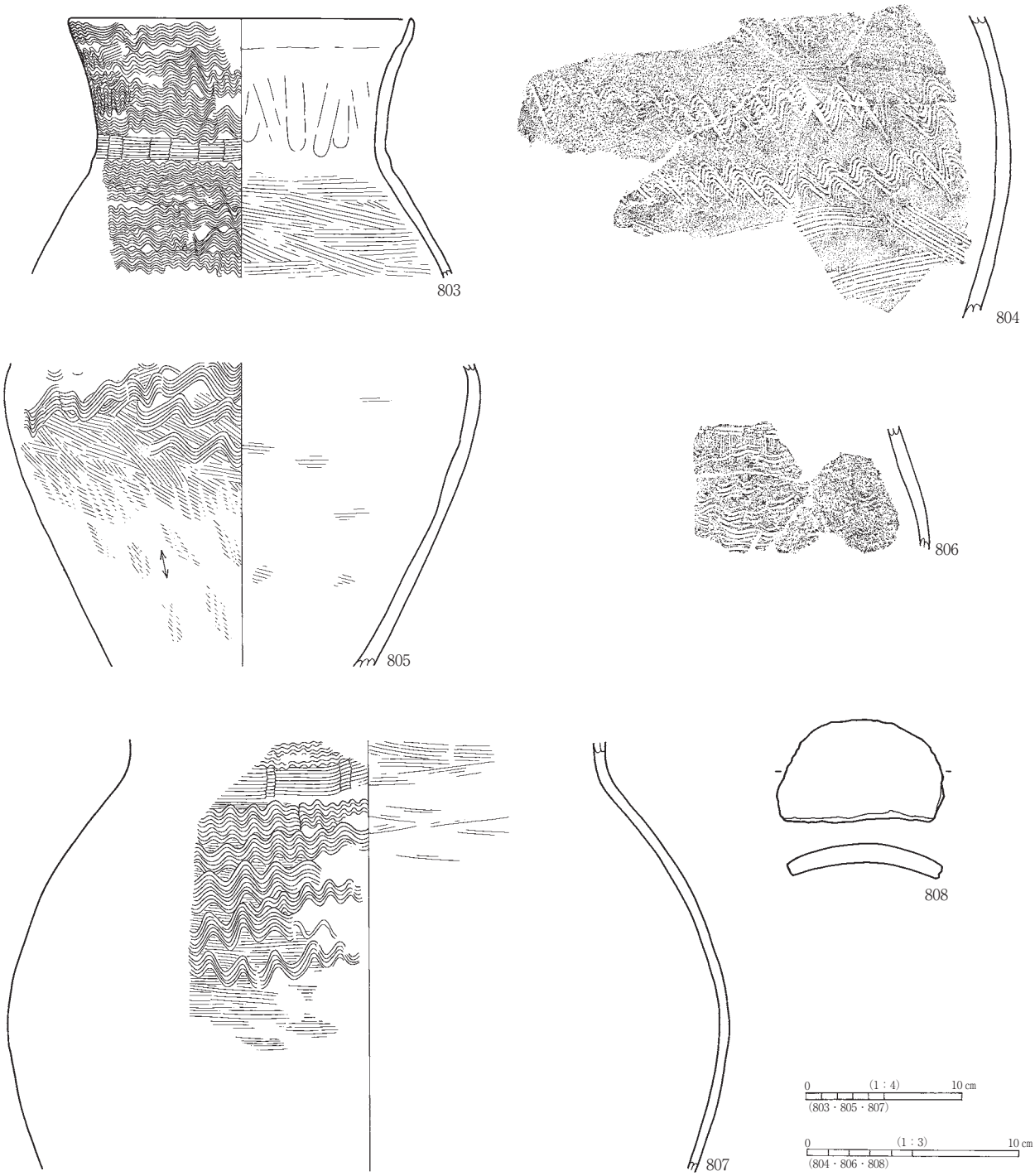
799 は鉢である。800・803 ～ 807 は甕である。803 は胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。804 は甕の胴部破片で、胴部上半には櫛描波状文が充填され、胴部下半には格子目文が施されている。807 は大形の甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。801 は甑である。802 は壺の頸部から胴部で、頸部文様帯には直線文が巡らされ、赤彩は認められない。

808 は、甕の破片を加工して作られた加工円盤である。

SB62



第 104 図　弥生時代後期の個別図 56



第 105 図　弥生時代後期の個別図 57

３　掘立柱建物跡

④・⑨・⑩区で検出された。ほとんどの掘立柱建物跡は、集落の縁辺部にあたるような位置で確認されている。遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

ST2　（第 48・106 図）　⑩区ⅣT2・7

Ⅶ層を剝いで検出した。南北１間、東西２間の建物で、軸は西へ約 13° ふれている。ピット 7・8 は、棟持柱の可能性が考えられる。柱間寸法は南北方向が 200 ～ 230cmとやや不規則で、東西方向はほぼ 200 cmと一定である。掘り方は円形に近く、深さは 20 ～ 40cmである。埋土は単層で、柱痕は認められなかった。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

ST5　（第 48・107 図　　PL26）　⑨区ⅣD20・25、E21

Ⅶ層を剝いで検出した。北西側を「コ」の字形に囲む SA1 として調査したピットも、庇あるいは柵など ST5 に付属する施設と思われるので合わせて ST5 として掲載した。南北３間、東西２間の建物で、軸は西へ約 25° ふれている。柱間寸法は南北方向が約 150cmで、東西方向は約 120cmと一定である。掘り方は円形に近く、深さは 12 ～ 20cmである。埋土は単層で、柱痕は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST6　（第 48・108 図　　PL26）　⑩区ⅣY6

Ⅶ層を剝いで検出した。1 間、1 間の建物で、軸はほぼ 90° ふれていて、それぞれの柱が東西南北に位置する。柱間寸法は一辺が 250cmもう一辺が 240cmである。掘り方は円形で、深さは 50 ～ 65cmである。柱痕はピット２～４にみられ、径 10cmほどで円形である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。ピット４からは、柱材の一部と思われる木片がわずかに出土している。

出土遺物（第 108 図 809　　PL40）

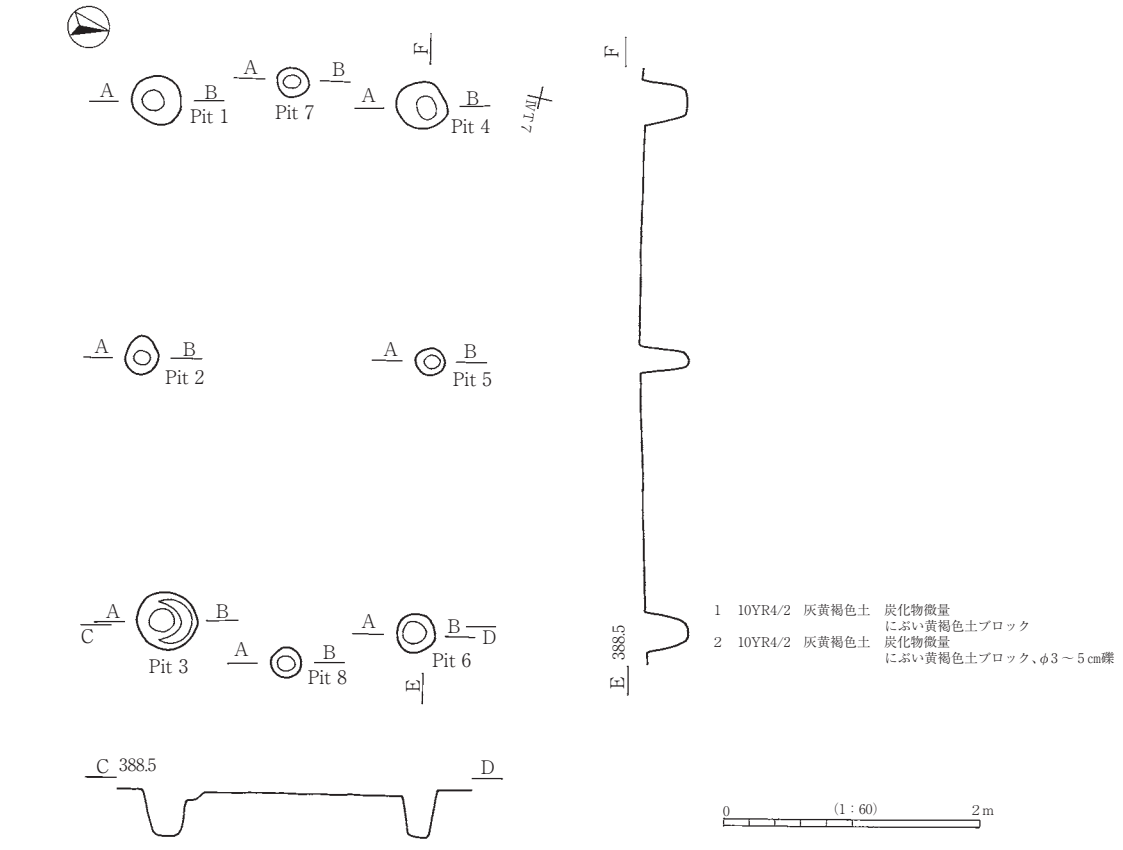
掲載した遺物は、ピット１埋土中からの出土である。

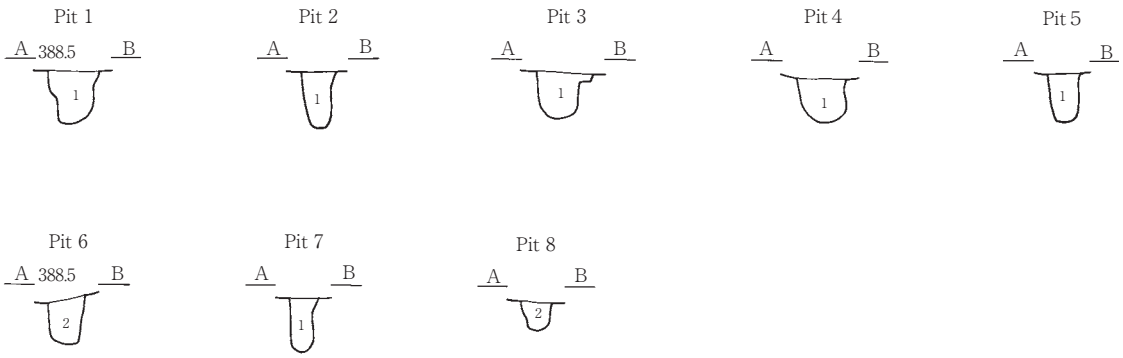
809 は、壺の頸部破片で、頸部文様帯には直線文が施され、赤彩は認められない。

ST9　（第 48・109 図）　④区ⅡC17・22

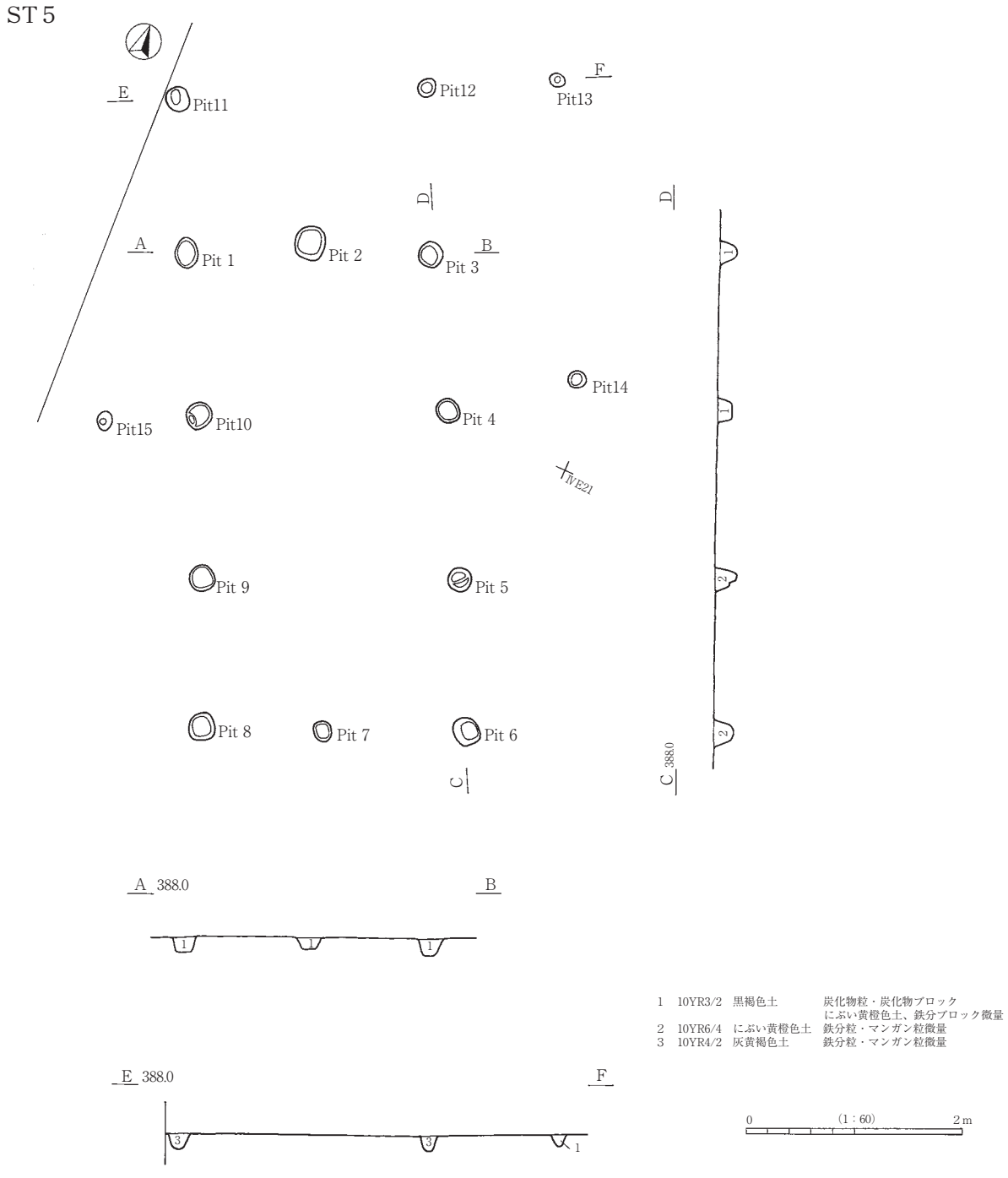
Ⅶ層を剝いで検出した。SK873 に切られる。SK868・1854 を切る。いずれの切り合いも平面でははっきりしなかったので、半裁して断面より切り合いを確認した。調査段階では、それぞれを単独の土坑として調査したが、整理作業時に掘立柱建物跡とした。北西の一部が調査区外となるが、南北３間、東西１間の建物と推定される。軸は西へ約 37° ふれている。柱間寸法は南北方向が 140 ～ 150cmで、東西方向は 240cmである。掘り方は円形に近く、深さは 12 ～ 30cmである。柱痕はピット 2・5 にみられる。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST 2



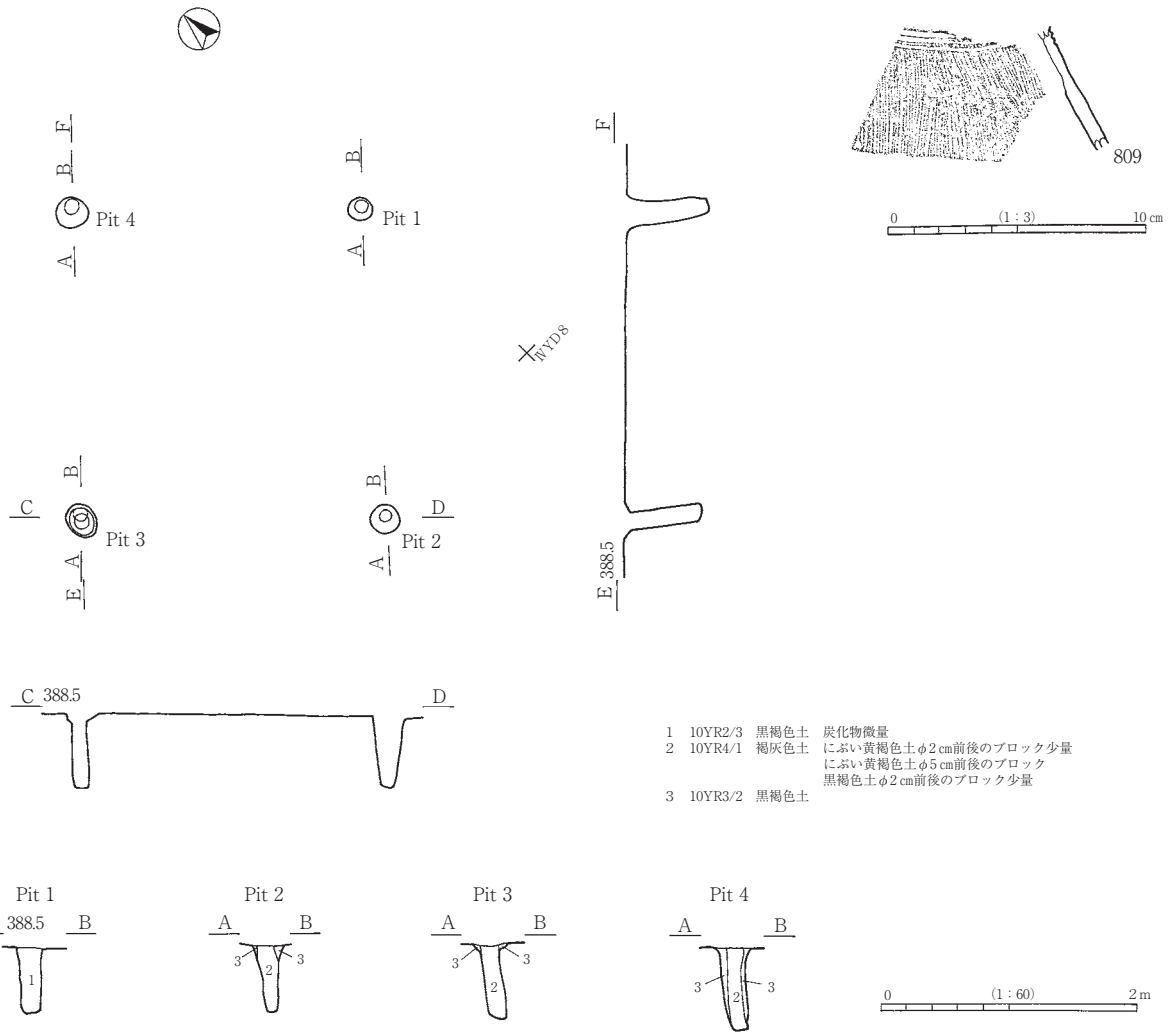


第 106 図　弥生時代後期の個別図 58



第 107 図　弥生時代後期の個別図 59

ST６



第 108 図　弥生時代後期の個別図 60

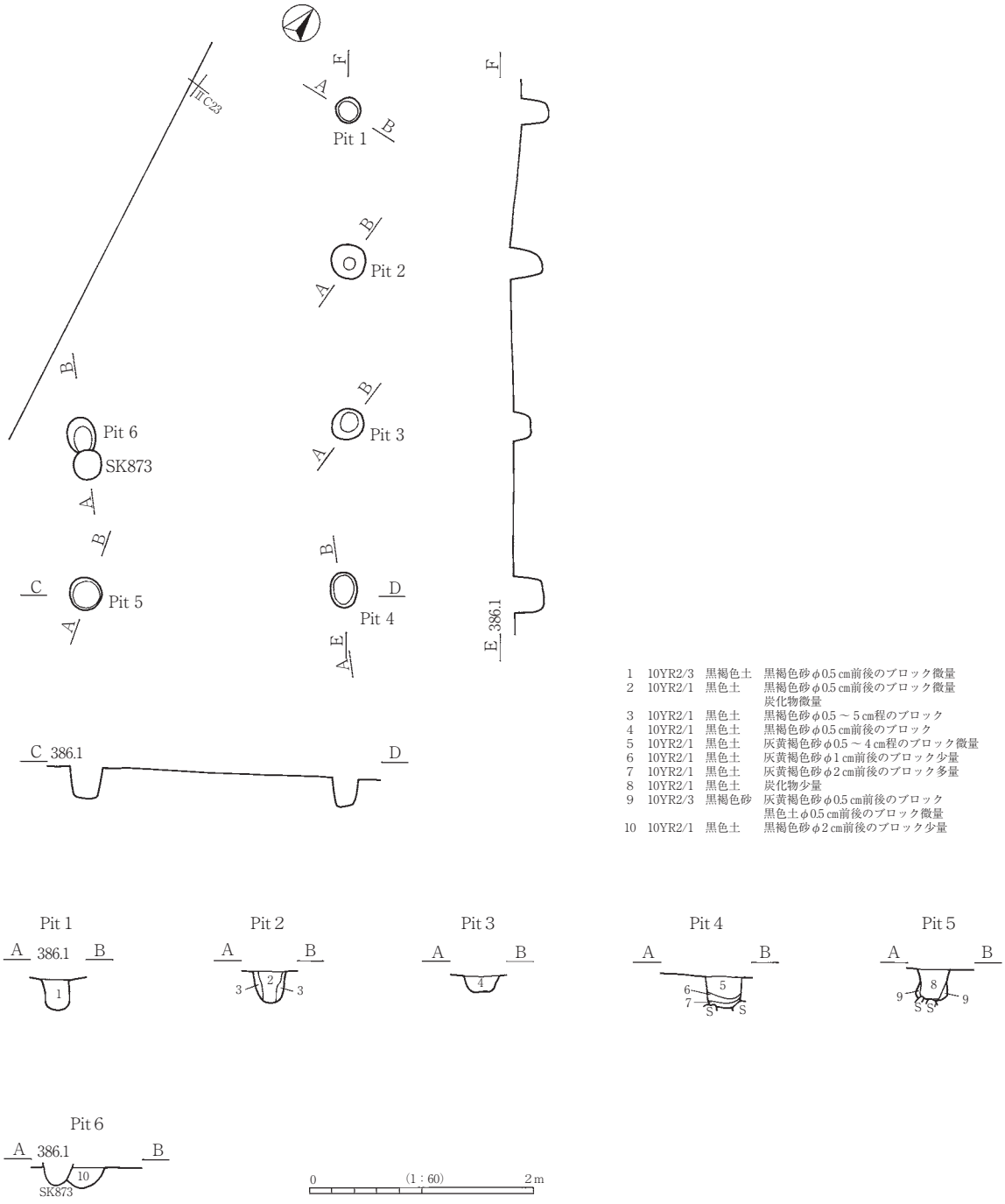
ST10　（第 48・110 図）　⑨区ⅣJ22、O2

Ⅶ層を剝いで検出した。SB39 を切る。平面でははっきりしなかったが、わずかな土の差などから新旧を判断した。調査段階では、それぞれを単独の土坑として調査したが、整理作業時に掘立柱建物跡とした。調査工程上の関係で、地区を東西に分けて調査したため、その調査区境に位置していたと思われる北西隅の柱穴は確認できなかった。また、南東の一部が調査区外となるが、南北４間、東西１間の建物と推定される。軸は西へ約 18° ふれている。柱間寸法は南北方向が約 140cm、東西方向は約 270cmとほぼ一定である。掘り方はピット 2・3・7 が円形で、その他のピットは楕円形に近い。深さは 30 ～ 45cmである。柱痕はピット 3 にみられる。遺物は出土していない。

ST11　（第 48・111 図）　⑨区ⅣJ2・7

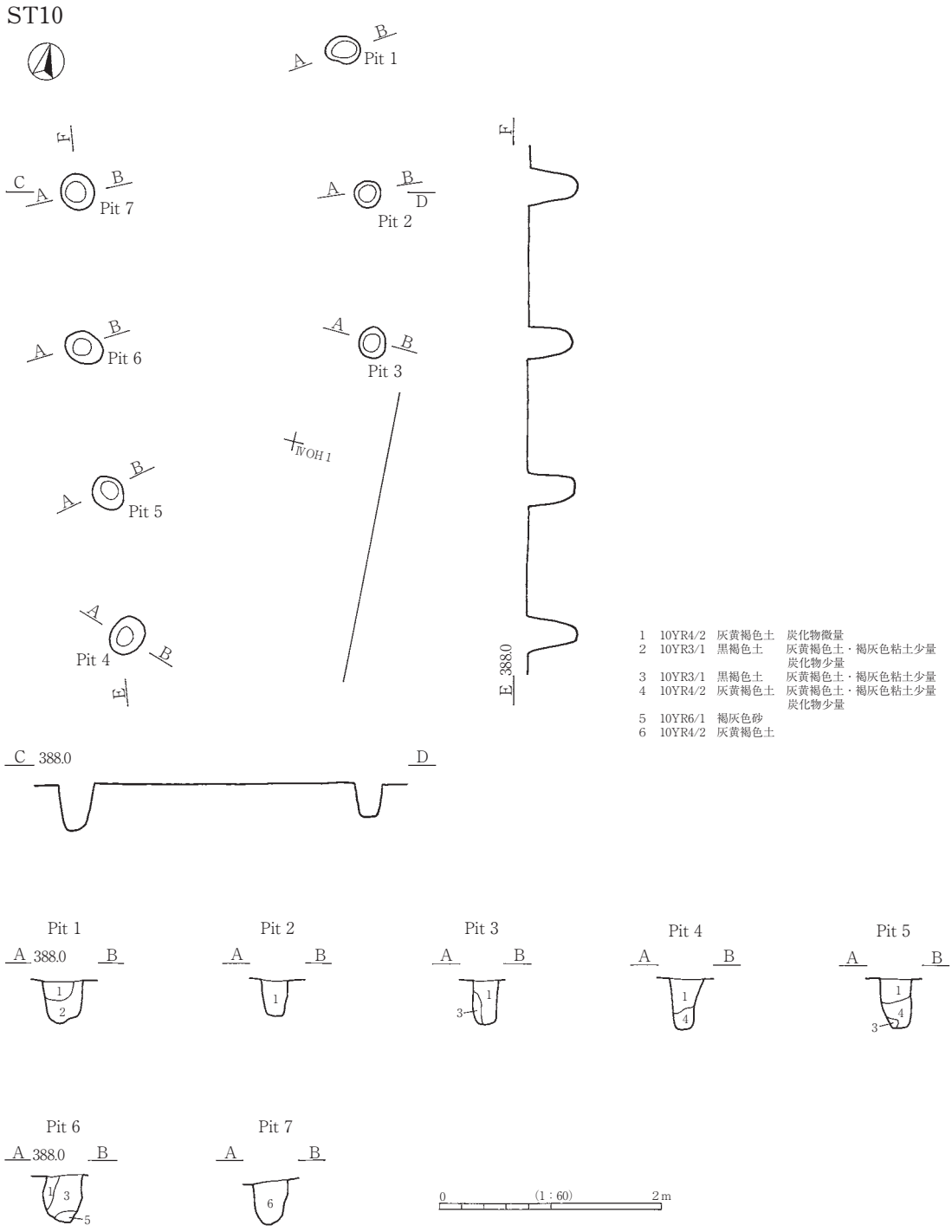
Ⅶ層を剝いで検出した。南東の一部が調査区外となるが、南北２間、東西１間の建物と推定される。軸は西へ約 38° ふれている。柱間寸法は南北方向が 150cmで、東西方向は 250cmである。掘り方は円形に近く、深さは 40 ～ 60cmである。柱痕はピット 3 にみられる。埋土中より石器がわずかに出土している。

ST９



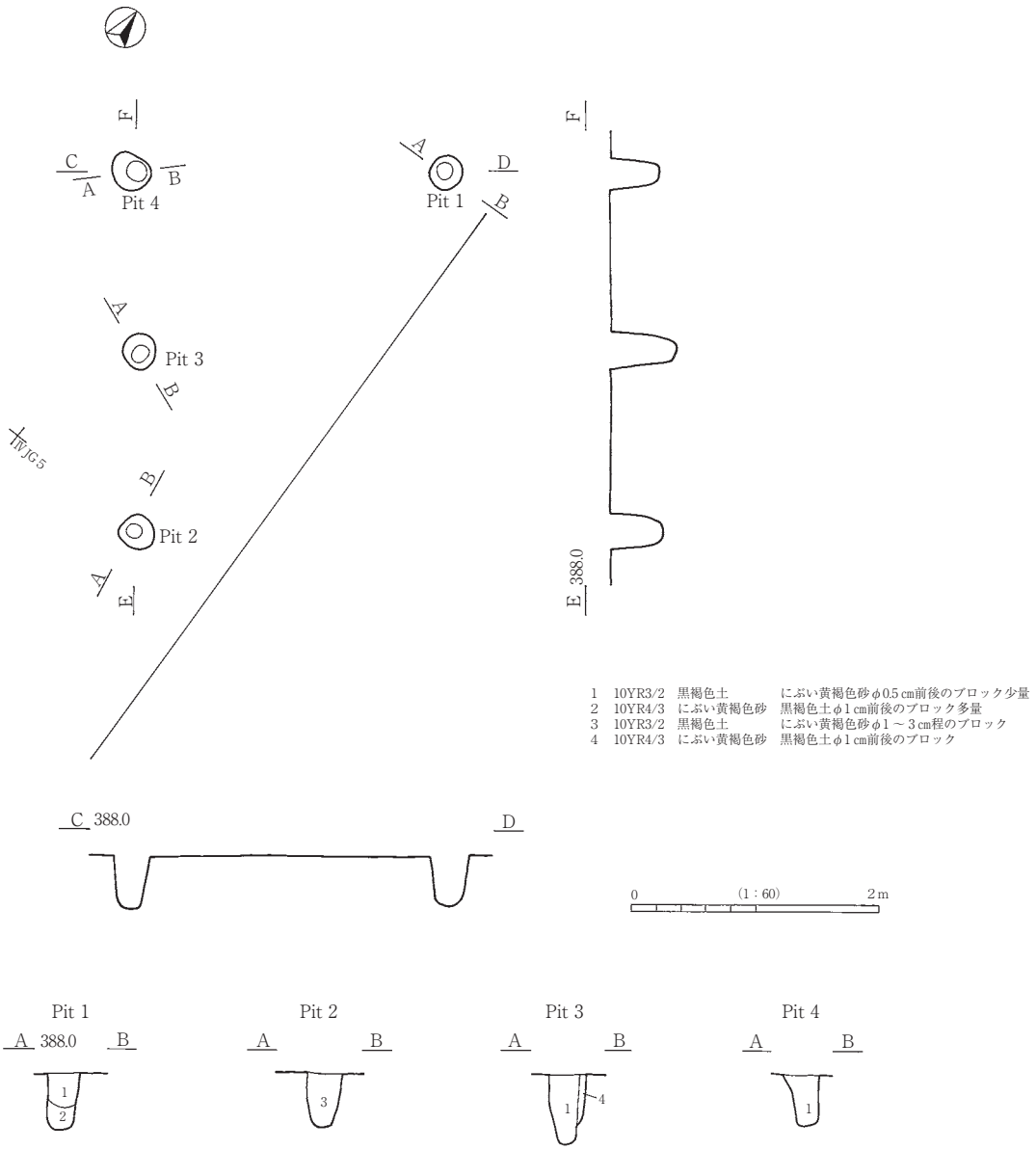
1	10YR2/3	黒褐色土	黒褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量
2	10YR2/1	黒色土	黒褐色砂φ0.5 cm前後のブロック微量 炭化物微量
3	10YR2/1	黒色土	黒褐色砂φ0.5 ～ 5 cm程のブロック
4	10YR2/1	黒色土	黒褐色砂φ0.5 cm前後のブロック
5	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色砂φ0.5 ～ 4 cm程のブロック微量
6	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色砂φ1 cm前後のブロック少量
7	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色砂φ2 cm前後のブロック多量
8	10YR2/1	黒色土	炭化物少量
9	10YR2/3	黒褐色砂	灰黄褐色砂φ0.5 cm前後のブロック 黒色土φ0.5 cm前後のブロック微量
10	10YR2/1	黒色土	黒褐色砂φ2 cm前後のブロック少量

第 109 図　弥生時代後期の個別図 61



第 110 図　弥生時代後期の個別図 62

ST11



第 111 図　弥生時代後期の個別図 63

４　溝跡

④～⑬区で検出された。そのうち⑦区で確認されたSD192、⑬区で確認されたSD188は自然の流路跡と思われるが、その他の溝跡は、人工的な溝跡と思われる。また、⑩区で確認されたSD24は、円形に巡る溝で、平地式住居の可能性も考えられるが柱穴や炉跡などが確認されなかったので、建物跡とは認識できなかった。SD1以外の溝跡は遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SD1　（第48・112図　　PL27）　⑤区ⅡM19・20・25、N21、R5、S1・2・6・7

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。SD11・12を切る。SK128・1602に切られる。SK128との切り合いは平面で土の差により明瞭に判断できた。その他の切り合いは、はっきりしない部分もあったが、トレンチを入れて断面より新旧を判断した。南東から北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈す。埋土は複層で、自然埋没と思われる。人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や石器・骨細片が出土している。本遺構の時期は、埋土中から出土している土器より、後期後葉箱清水期と認定される。

出土遺物（第113図810～819　　PL40）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

810・811は壺である。810は小形の壺で、頸部文様帯には直線文が施され、赤彩は認められない。811は、大形の壺で口縁部の内外面とも赤彩される。812は蓋である。813・814は、高坏の脚部と思われるが、検討を有する。815～819は甕である。818は胴部から口縁部が弓状に外反する甕で、口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。819は大形の甕で、胴部最大径に対し、頸部および口縁部の径が小さい。口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

SD19　（第48・112図）　⑤区ⅣR15、S11・16・17・22

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。SB2・7・10・SK121・129に切られる。切り合いは平面で土の差により明瞭に判断できた。SD21との切り合いは不明で、同時に存在していた可能性が考えられる。南東から北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈す。埋土は単層で、自然埋没と思われる。人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第113図820　　PL41）

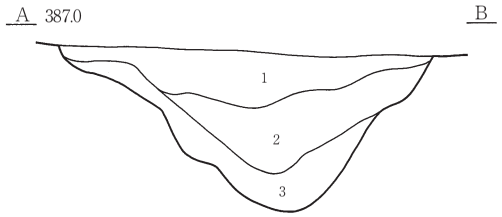
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

820は、高坏あるいは器台の脚部かと思われるが、検討を有する。器面はミガキ調整が施されるが、赤彩は認められない。

SD64　（第48・112図）　⑥区ⅣD2～4

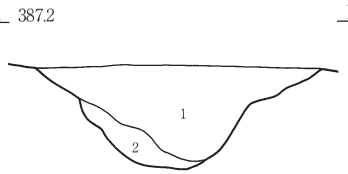
Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。SB17・19・SD48・49・SK461・1063・1855に切られる。SK1855以外の遺構との切り合いは平面で土の差により明瞭に判断できた。SK1855との切り合いは、はっきりしない部分もあったが、トレンチを入れて断面より新旧を判断した。東西方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びると推定される。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は単層で、自然埋

SD 1



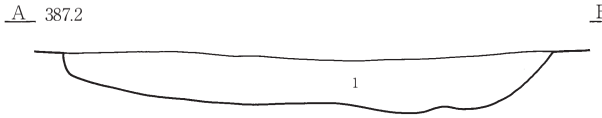
1　10YR2/1　黒色土　　白色粒子、酸化
　　黄褐色細礫（φ1㎝以下）・φ2～3㎝の円礫少
2　10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量、酸化
3　10YR3/3　暗褐色土　炭化物微量、酸化
　　細礫多量

SD19

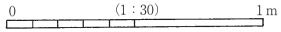


1　10YR2/3　黒褐色 土
2　10YR2/3　黒褐色 土　明るい

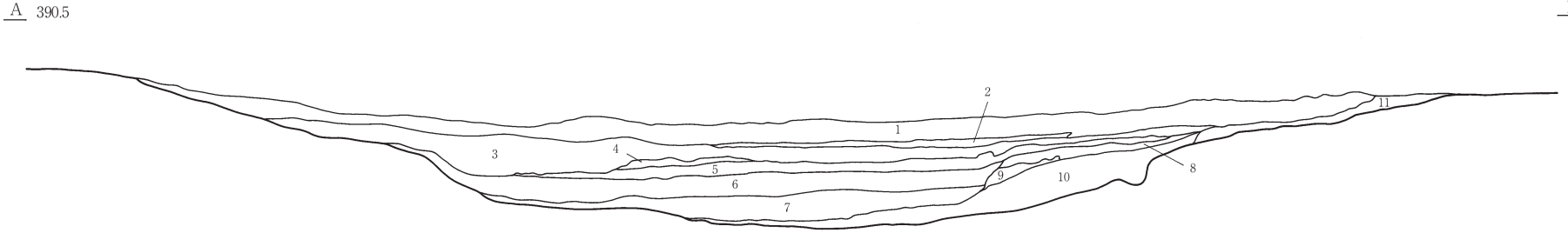
SD64



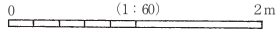
1　10YR4/3　にぶい黄褐色 砂　黒褐色砂をφ3㎝前後のブロック状に微量



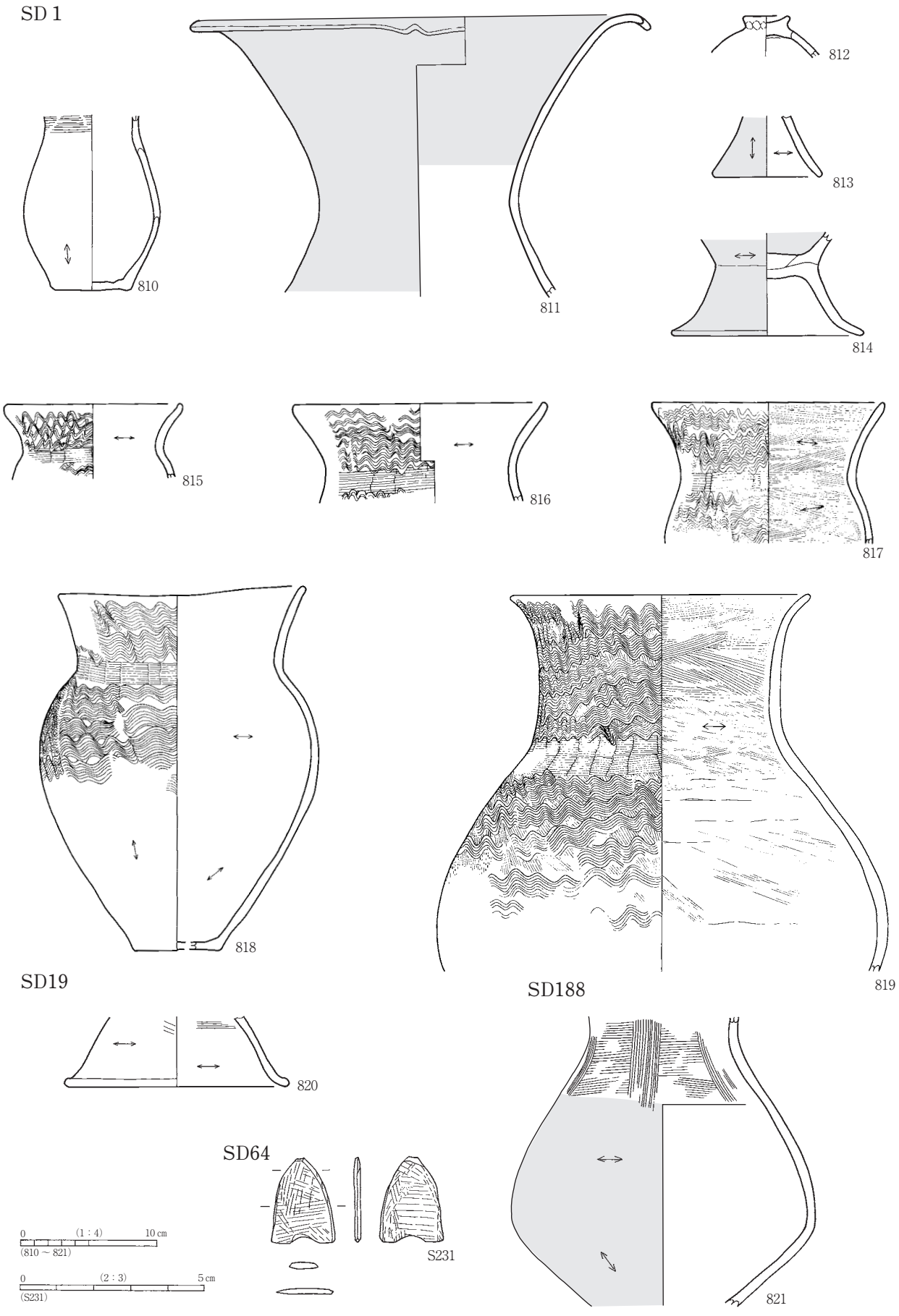
SD188



1　10YR7/1　灰白色土　　黄色～淡黄色土の薄層を帯状に挟む
2　10YR6/3　にぶい黄橙色砂　炭化物
3　10YR5/1　褐灰色土　　炭化物少量
4　10YR3/1　黒褐色土
5　10YR7/2　にぶい黄橙色土　炭化物を帯状に挟む
　　下層ににぶい橙色土の薄層
6　10YR7/2　にぶい黄橙色土　灰白色土
7　10YR6/1　褐灰色砂　　細礫・軽石の小礫少量
8　10YR5/2　灰黄褐色土　炭化物
　　黄橙褐色土のブロック少量
9　10YR8/6　黄橙色土
10　5Y 7/2　灰白色土　　炭化物
　　にぶい黄橙色土・淡黄色土のブロック多量
11　10YR4/1　褐灰色土　　黒褐色土ブロック



第112図　弥生時代後期の個別図64



第 113 図　弥生時代後期の個別図 65

没と思われる。人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 113 図 S231　　PL45）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S231 は磨製石鏃。先端をわずかに欠損する、ほぼ完成品。

SD188　（第 48・112 図）　⑬区Ⅶ D24・25、E21、I4・5・10、J1

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。SD189 との切り合いは不明で、同時に存在していた可能性が考えられる。南から北の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は複層で、自然埋没と思われる。自然流路と思われる溝跡である。埋土中より土器がわずかに出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している壺（821）より、後期箱清水期と認定される。

出土遺物（第 113 図 821　　PL41）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

821 は壺で、頸部文様帯には T 字文が施され、胴部は赤彩されている。

５　土坑

①・⑪・⑬区で検出された。④・⑥・⑨区では、井戸跡と思われる遺構が、6 基確認された。確認された井戸跡と思われる土坑のほかは、遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SK39（第 48・114 図）　⑧区Ⅳ D10

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。南側が調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。埋土中より土器片や石器が出土している。

出土遺物（第 114 図 S232　　PL44）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S232 は凝灰質砂岩材の刃器。形状は小さな石鎌状で先端部を欠損するが上側に突起状の部位がみられ、石小刀の可能性もある。

SK125（第 48・114 図）　⑤区Ⅱ S6

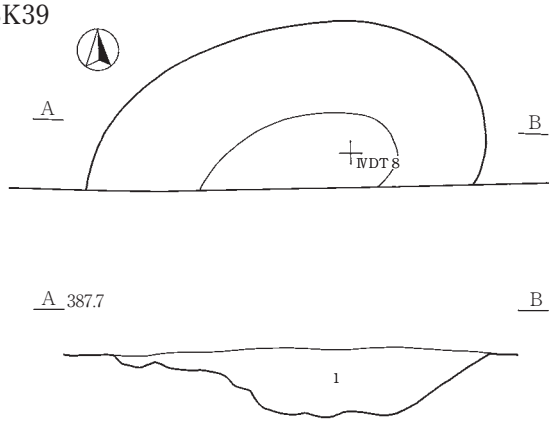
Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形はＵ字状に近い形状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。埋土中より土器が出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している甕（822・823）より、後期箱清水期と認定される。

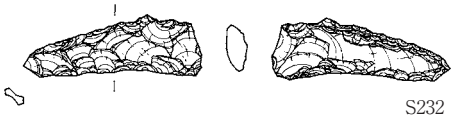
出土遺物（第 114 図 822・823　　PL41）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

822 は、口縁部が短く外反する甕で、口縁部には文様が充填されない。頸部には廉状文が巡らされ、胴部には櫛描波状文が充填される。823 は、口縁部が弓状に外反する甕で、頸部の屈曲点は明瞭である。口縁部には、櫛描波状文が充填され、頸部には廉状文が巡らされる。

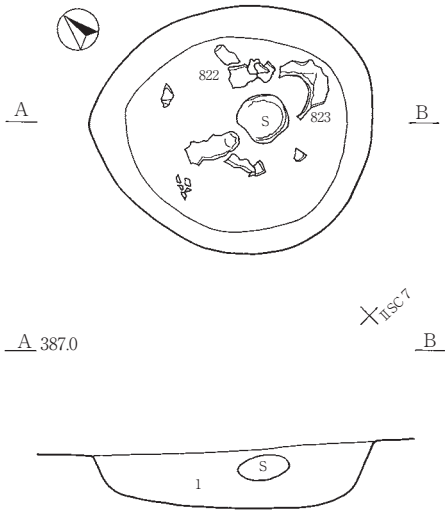
SK39

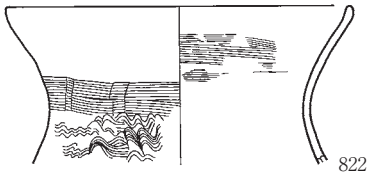


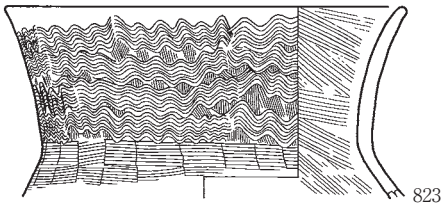

S232

1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物少量

SK125

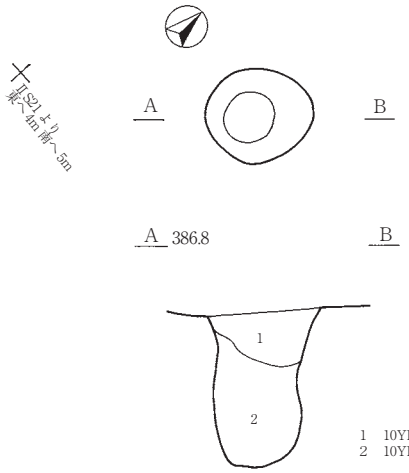


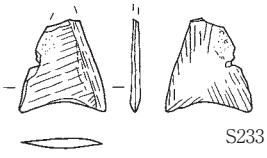

822

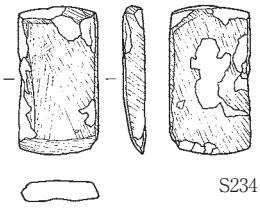

823

1　10YR2/3　黒褐色砂　炭化物少量、酸化

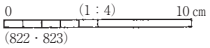
SK187



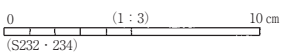

S233


S234

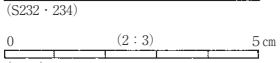
1　10YR3/2　黒褐色砂
2　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色土φ0.5㎝前後のブロック微量



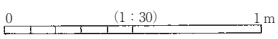
(822・823)



(S232・234)



(S233)



第 114 図　弥生時代後期の個別図 66

SK187（第 48・114 図）　⑤区ⅡS21

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 114 図 S233・S234　　PL45）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S233 は、先端部を欠損する磨製石鏃。S234 は扁平片刃石斧、完形品。斑岩材で、全面を研磨仕上げするが、剝離成形段階の痕跡が所々に残る資料である。

SK321（第 48・115 図　　PL27）　⑥区ⅢD13

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。暗渠と SD38 に切られる。新旧関係は、平面で土の差により判断した。平面形は円形を呈する。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層で自然埋没と思われる。木組の井戸跡と思われる土坑である。井戸枠材（＊5）の腐食が進んでいて、井戸枠の形態ははっきりしないが、楕円に近い形状が推定できることなどから刳り抜きの井戸、あるいは 1/2 程の刳り抜き材を組み合わせた井戸と推定される。作り変えられたためか、井戸枠材は一部で２重になる。埋土中より土器片や石器・木製品・オニグルミ核・モモ核が出土している。底部付近からは、井戸枠材の一部が元位置を保って出土している。埋土中から出土したオニグルミとモモの核で、炭素年代測定を行った。測定値は 132 ～ 261 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本構造の埋没年と考える。

出土遺物（第 115 図木製品１・２　　PL43）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

木製品１は、芯持丸木材（＊6）の柄の端部である。木製品２は、柾目材（＊7）の板材で、曲げ物の底板かと思われるが、検討を有する。

SK505（第 48・116 図）　⑩区ⅣY2

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 116 図 S235　PL45）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S235 は、閃緑岩材の扁平片刃石斧であろうか。基部の破片と考えられるが、全面良好に研磨され、形状は基部が幅狭となる。別な器種である可能性もあるが、判断できない。

SK597（第 48・116 図）　⑥区ⅢD14

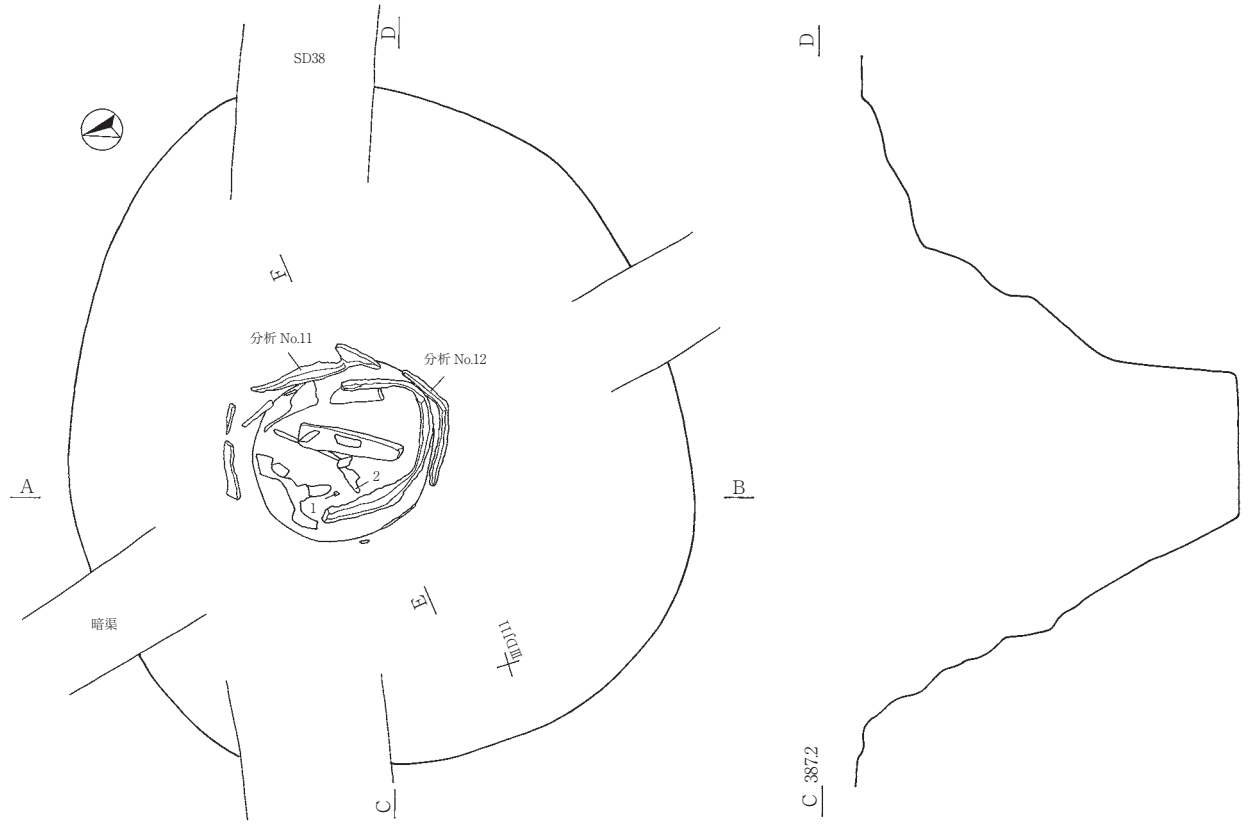
Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は複層である。埋土中より石器が１点出土している。

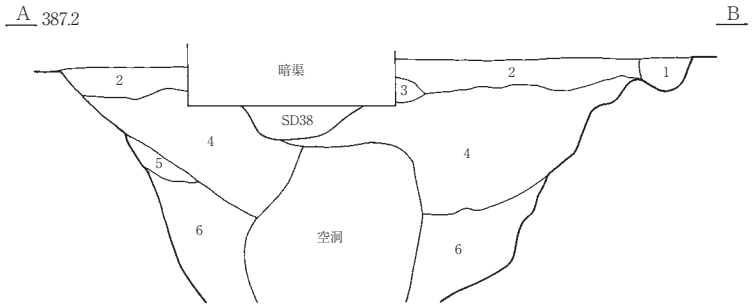
出土遺物（第 116 図 S236　PL45）

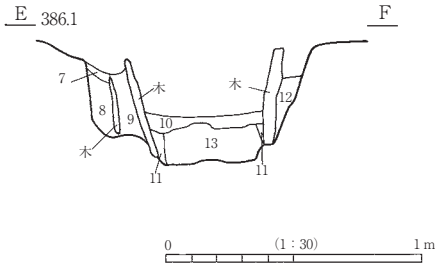
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S236 は、細粒凝灰岩材の磨製石鏃。

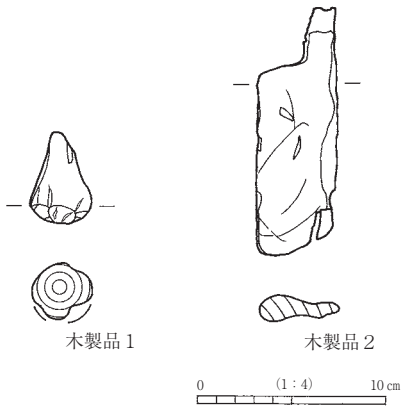
SK321





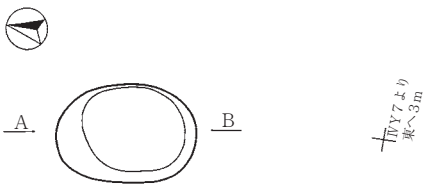


1	10YR2/3	黒褐色土	炭化物微量、灰黄褐色砂微量
2	10YR2/3	黒褐色砂	炭化物微量
3	10YR4/2	灰黄褐色砂	
4	10YR3/1	黒褐色土	炭化物少量 灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
5	10YR4/1	褐灰色土	黒褐色土φ1㎝前後のブロック微量
6	10YR2/1	黒色土	炭化物少量 褐灰色土φ1㎝前後のブロック
7	7.5YR2/1	黒色土	炭化物微量
8	7.5YR3/1	黒褐色砂	黒色土微量
9	7.5YR2/2	黒褐色砂	
10	7.5YR2/2	黒褐色砂	9層に比して粒子細かい
11	7.5YR3/1	黒褐色砂	
12	7.5YR3/1	黒褐色砂	暗い
13	10YR4/2	灰黄褐色砂	φ5㎝前後の礫多量

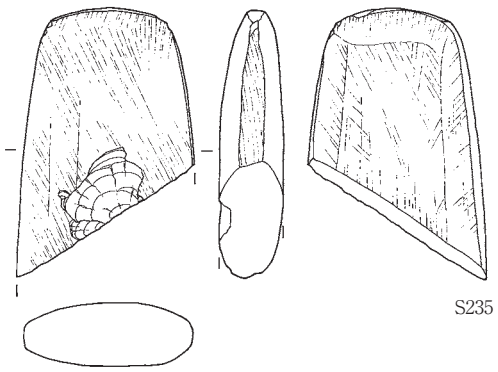


第 115 図　弥生時代後期の個別図 67

SK505

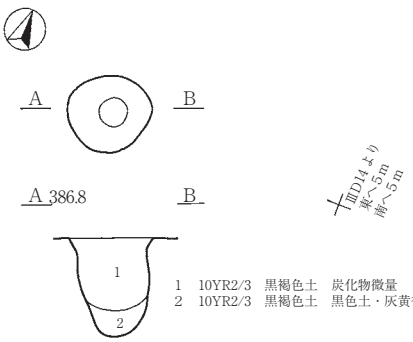


1　10YR3/4　暗褐色土　にぶい黄褐色土少量
　　鉄分・マンガン粒微量

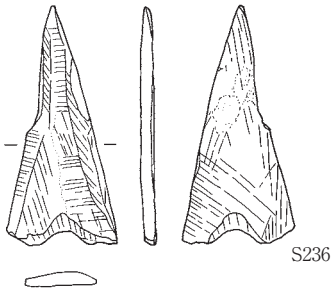


S235

SK597

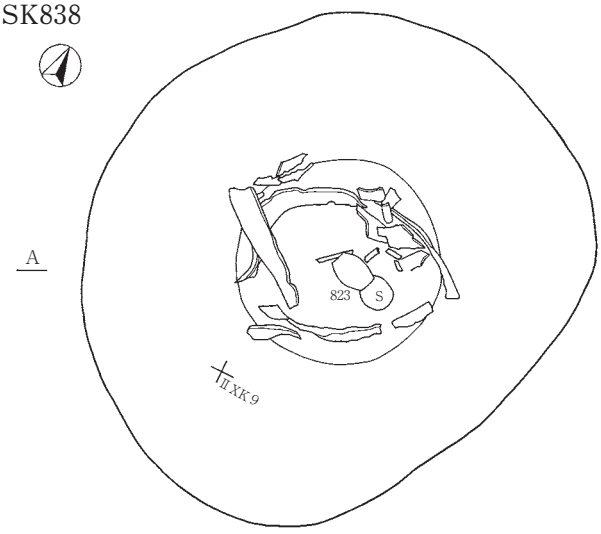


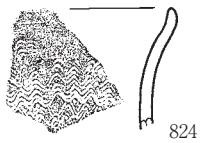
1　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
2　10YR2/3　黒褐色土　黒色土・灰黄褐色砂を厚さ0.5㎝前後の層状に混



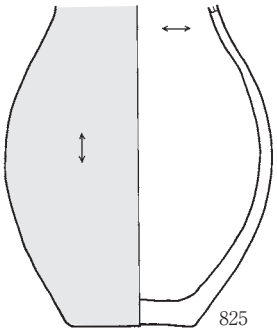
S236

SK838

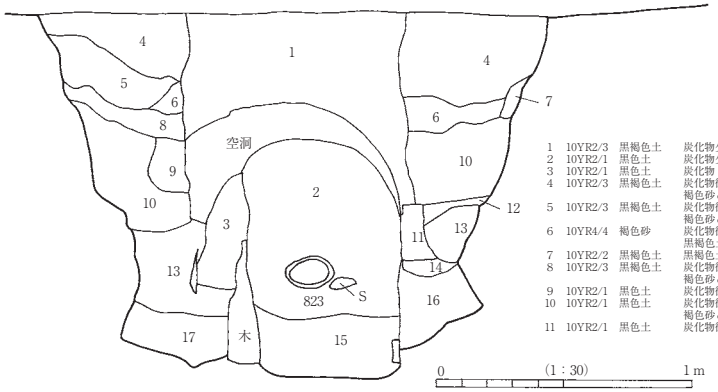




824



825



1　10YR2/3　黒褐色土　炭化物少量
2　10YR2/1　黒色土　炭化物少量
3　10YR2/1　黒色土　炭化物
4　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
　　褐色砂φ1㎝前後のブロック
5　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
　　褐色砂φ1㎝前後のブロック
6　10YR4/4　褐色砂　炭化物微量
　　黒褐色土φ2㎝前後のブロック
7　10YR2/2　黒褐色土　黒褐色土φ2㎝前後のブロック微量
8　10YR2/3　黒褐色土　炭化物微量
　　褐色砂φ0.5～6㎝程のブロック少量
9　10YR2/1　黒色土　炭化物微量、褐色砂微量
10　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　褐色砂φ0.5～5㎝程のブロック多量
11　10YR2/1　黒色土　炭化物微量、褐色砂少量
12　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　褐色砂φ1㎝前後のブロック少量
13　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　褐色砂φ2㎝前後のブロック多量
14　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
　　褐色砂φ0.5㎝前後のブロック少量
15　10YR4/1　褐灰色砂　炭化物少量
　　黒色土φ1㎝前後のブロック
16　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒色土厚さ0.5㎝前後の層状・φ1～7㎝程のブロック少量
17　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒色土φ1㎝前後のブロック少量
　　褐灰色φ1㎝前後のブロック

0　(1：4)　10㎝
(825)

0　(1：3)　10㎝
(824、S235)

0　(2：3)　5㎝
(S236)

第116図　弥生時代後期の個別図68

SK838（第 48・116 図　　PL27）　⑥区ⅡX8・13

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状に近い形状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。4 ～ 14・16・17 は、井戸構築時に掘り方を埋め戻した人為的な堆積と思われ、1・2・3・15 は、自然堆積と思われる。木組の井戸跡と思われる土坑である。井戸枠材（＊8）の腐食が進んでいて、井戸枠の形態ははっきりしないが、楕円に近い形状が推定できることなどから刳り抜きの井戸、あるいは 1/2 程の刳り抜き材を組み合わせた井戸と推定される。作り替えられたためか、井戸枠材は一部で 2 重になる。埋土中より土器片や石器・木片・モモ核が出土している。底部付近からは、井戸枠材の一部が元位置を保って出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している壺（825）より、後期箱清水期と認定される。埋土中から出土したモモ核で、炭素年代測定を行った。測定値は 17 ～ 132 年とやや幅のある結果となったが、この中の一時点を、本構造の埋没年と考える。

出土遺物（第 116 図 824・825　　PL41）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

824 は甕の口縁部破片で、櫛描波状文が充填される。825 は壺で、赤彩される。

SK839（第 48・117 図）　④区ⅡH7・8・12・13

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。西側が調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。断面形はＵ字状を呈し、開口部に浅い部分が一周する。底面は平坦である。埋土は複層で、堆積の状況などから、人為的に埋め戻されたと思われる。規模などから井戸跡と思われるが、構造は不明である。埋土中より土器片や石器が出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している土器より、後期箱清水期と認定される。

出土遺物（第 117 図 826 ～ 829・S237 ～ S239　　PL1・41・46・47）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

826 は高坏の脚部で、赤彩される。827 は壺の頸部破片で、頸部文様帯には T 字文が施されている。828・829 は、口縁部が弓状に外反する甕で、828 は頸部の屈曲点が不明瞭で、829 は屈曲点が明瞭である。いずれも口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が施される。

S237 は緑色凝灰岩材の石核。図左の左側面側が打面で正面側は主剝離面である。 S238 は表裏面に凹部のある敲石。S239 は砂岩材の砥石。表面には面的な砥面と筋状の砥面が形成されている。

SK878（第 48・118 図　　PL27）　④区ⅡC22、H2

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状に近い形状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。埋土中より土器片や石器が多く出土している。また、埋土中より炭化材・オニグルミ核・モモ核が出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している土器より、後期箱清水期と認定される。

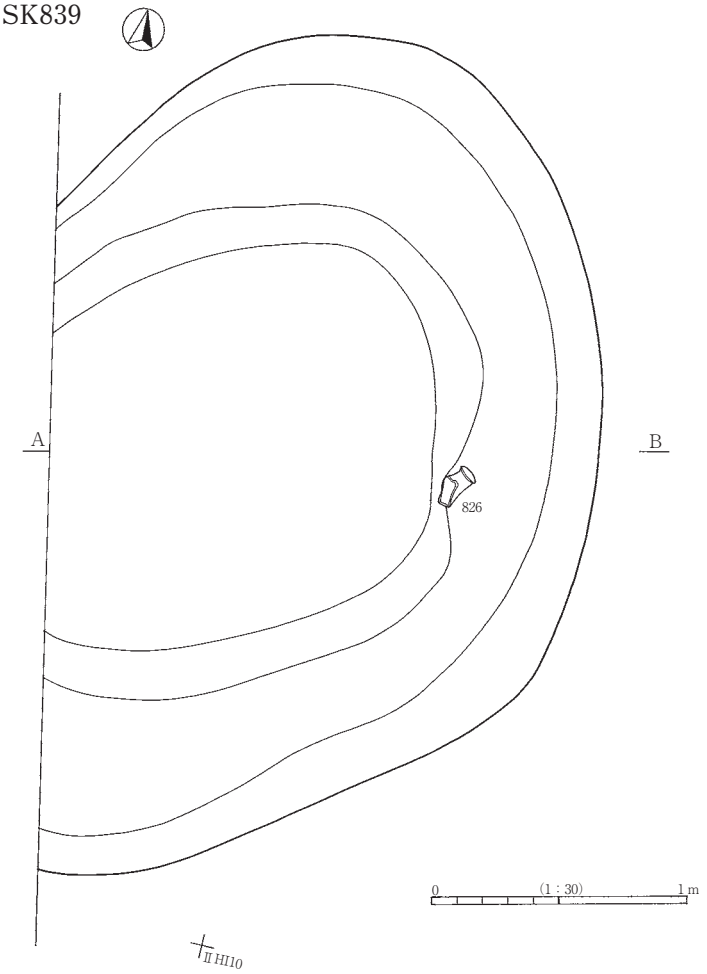
出土遺物（第 118 図 830 ～ 834、S240 ～ S242　　PL41・46・47）

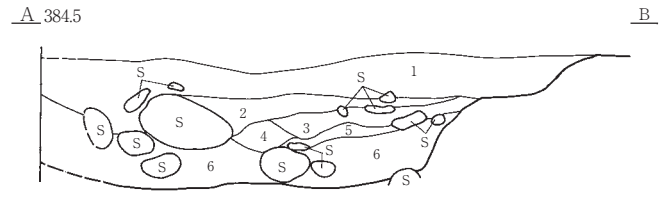
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

830 は、有段口縁の高坏で、赤彩される。831・832 は壺である。832 は壺の頸部から胴部にかけての破片で、頸部文様帯には 2 条 1 組の垂下文により T 字文が施される。口縁部の内外面と、胴部が赤彩される。833・834 は甕である。833 は口縁部、834 は頸部の破片である。

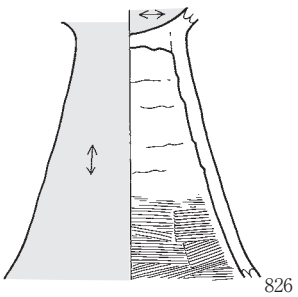
S240 は砂岩製の砥石。表裏面と側面に面状の砥面がある。S241 と S242 は表裏面に凹部をもち、長軸の端部に敲打痕のある敲石である。S242 は端部が摩耗痕を伴う敲打痕である。

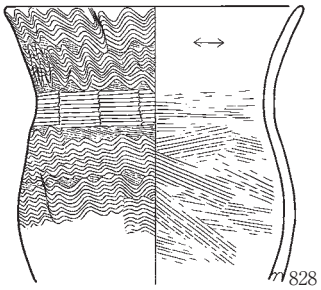
SK839

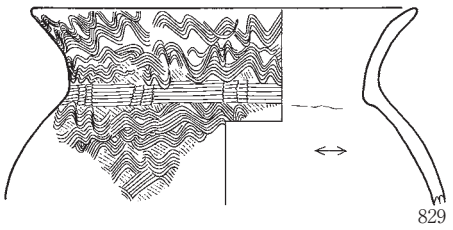




1　10YR2/2　黒褐色土　　灰黄褐色砂少量、φ2～10㎝程の礫
2　10YR2/2　黒褐色土　　炭化物微量
3　10YR2/2　黒褐色土　　灰黄褐色砂、φ1～10㎝程の礫微量
4　10YR3/2　黒褐色土　　灰黄褐色砂・黒褐色土φ3㎝前後のブロック少量
5　10YR4/2　灰黄褐色砂　黒褐色土φ3㎝前後のブロック微量
6　10YR3/2　黒褐色土　　灰黄褐色砂少量、φ1～20㎝程の礫多量



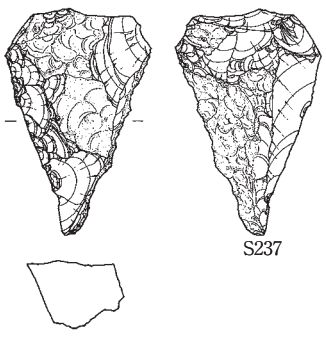


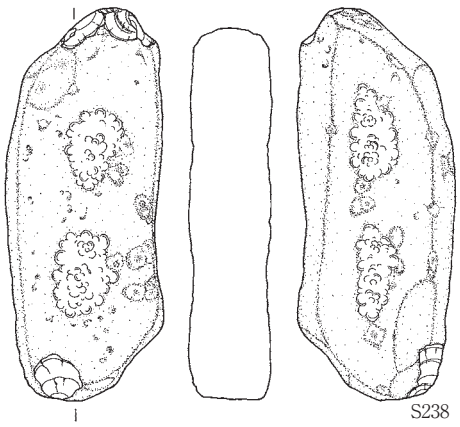


0　(1：4)　10㎝
(826・828・829)

0　(1：3)　10㎝
(827、S237・238)

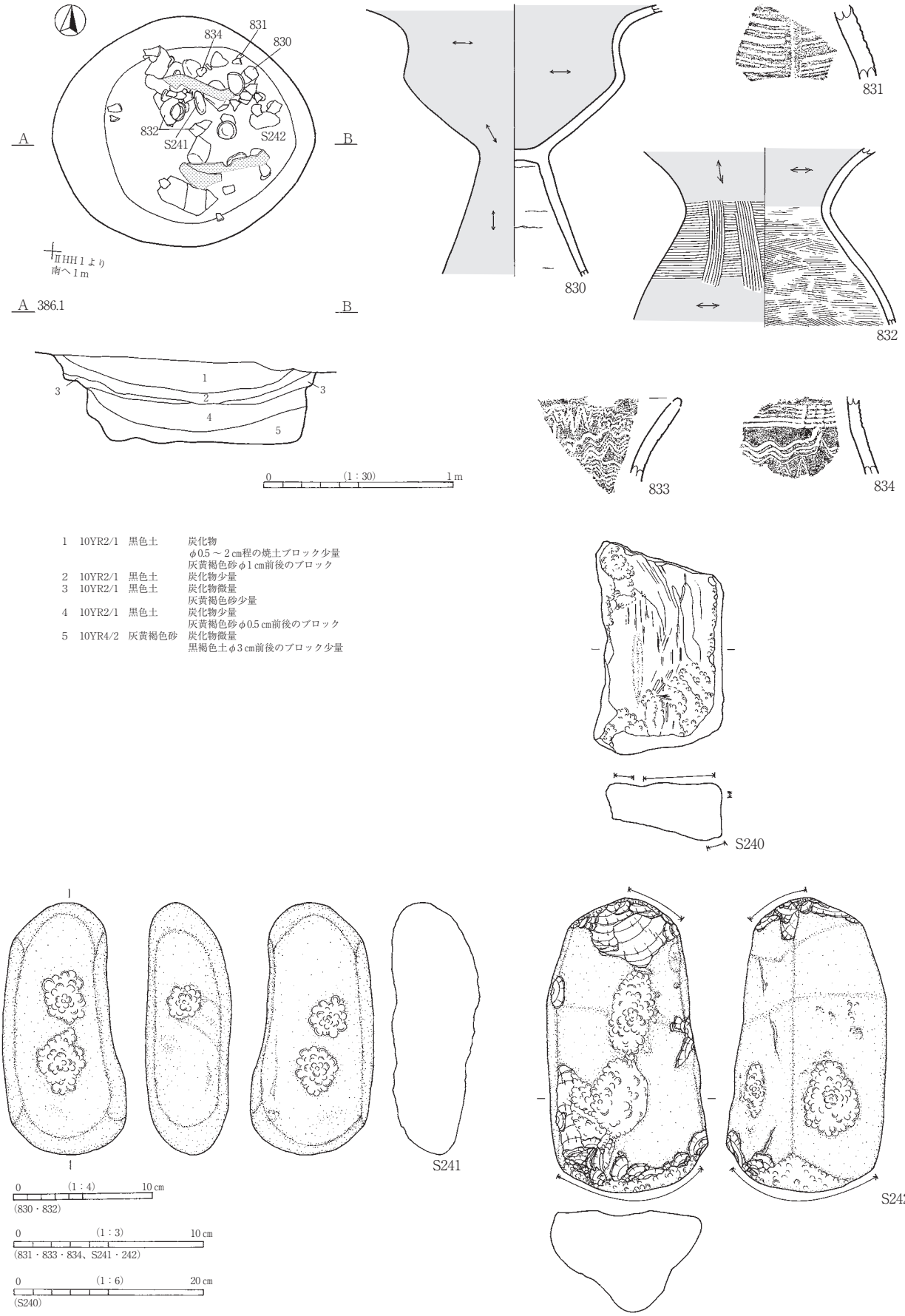
0　(1：6)　20㎝
(S239)





第 117 図　弥生時代後期の個別図 69

SK878



1　10YR2/1　黒色土　炭化物
φ0.5 ～ 2㎝程の焼土ブロック少量
灰黄褐色砂φ1㎝前後のブロック
2　10YR2/1　黒色土　炭化物少量
3　10YR2/1　黒色土　炭化物微量
灰黄褐色砂少量
4　10YR2/1　黒色土　炭化物少量
灰黄褐色砂φ0.5㎝前後のブロック
5　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量
黒褐色土φ3㎝前後のブロック少量

第 118 図　弥生時代後期の個別図 70

SK1300（第 48・119 図）　⑩区ⅣS10

Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形はＵ字状を呈し、南側に浅い部分を持つ。底面は平坦である。埋土は単層で、堆積状況などから人為的に埋め戻された可能性が考えられる。埋土中より大形の土器片が出土している。本遺構の時期は、埋土から出土している甕（836）より、後期箱清水期と認定される。

出土遺物（第 119 図 835・836　　PL41）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

835 は、高坏の脚部で赤彩される。836 は大形の甕で、口縁部と胴部に櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が施される。

SK1599（第 48・119 図）　⑤区ⅡR15

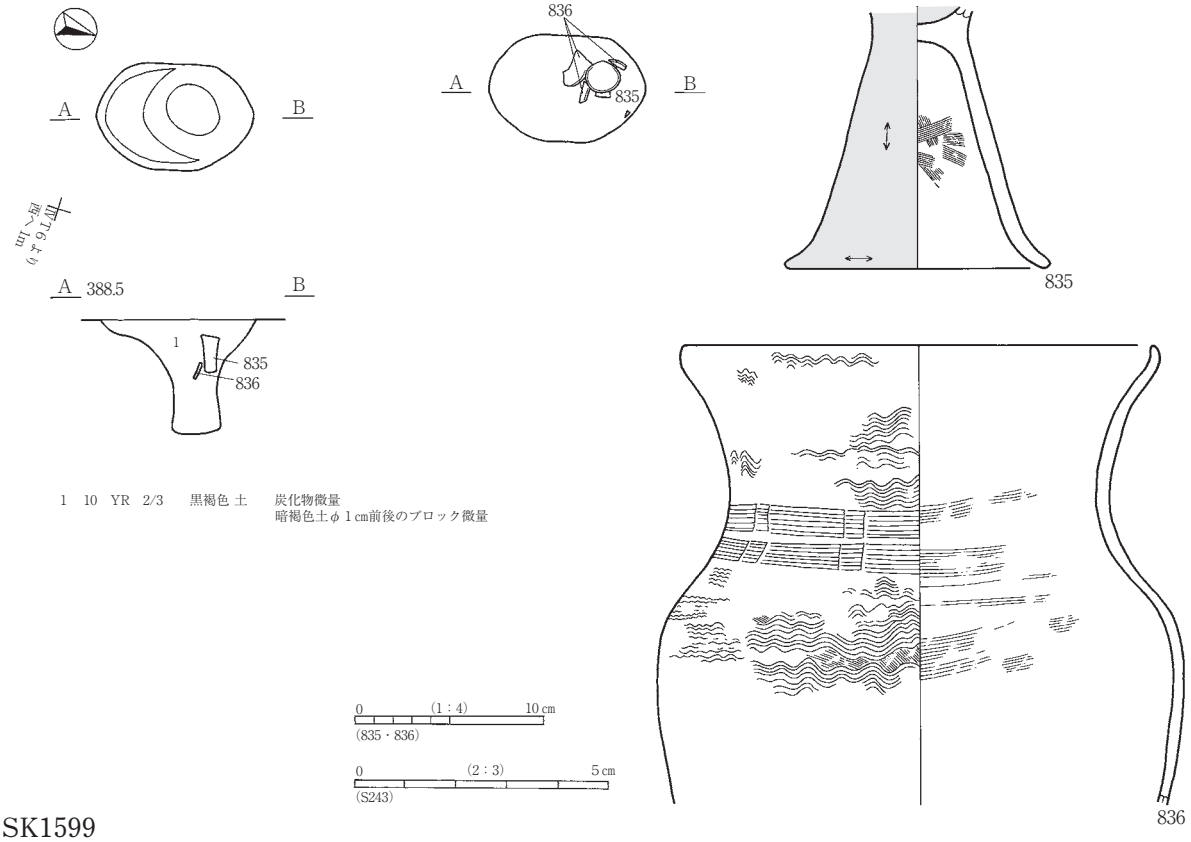
Ⅶ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形は緩やかなＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、北西側に一部が円形に窪む。埋土は複層である。埋土中より土器片や石器がわずかに出土している。

出土遺物（第 119 図 S243　　PL45）

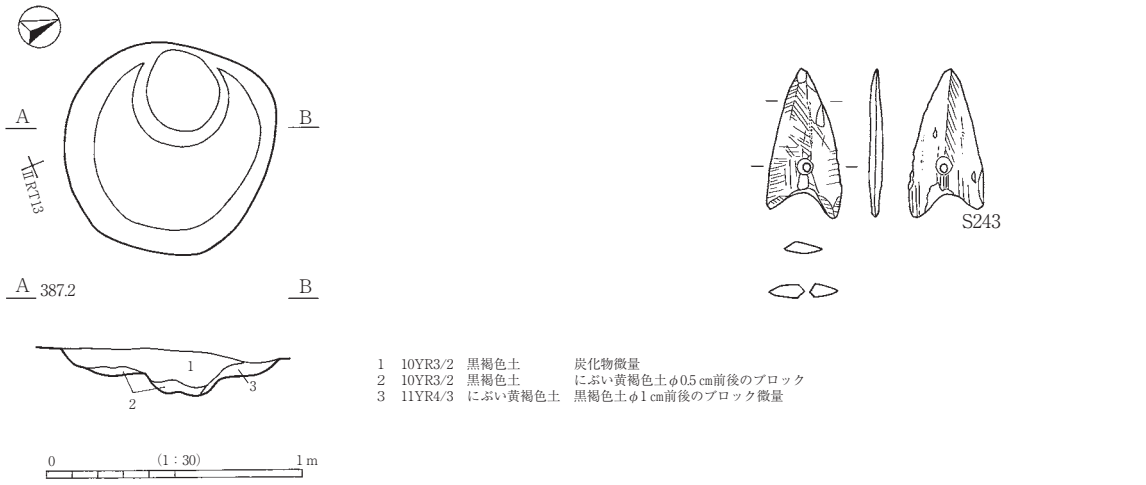
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

S243 は１穴式の磨製石鏃。凹基式の無茎鏃で完形品である。

SK1300



SK1599



第 119 図　弥生時代後期の個別図 71

６　包含層出土遺物（第 120・121 図 837 ～ 858、S244 ～ S260　　PL1・41・42・43・44・45・46）

包含層から出土した当概期の遺物を本項に掲載した。

837・838 は鉢、839 は蓋、840 は甑、841 ～ 847 は高坏、848・849・851 は壺、850・852 は甕である。841 は、有段口縁高坏の坏部で、外面が赤彩される。北陸系の仏法式に相当すると思われる。845 は、高坏の口縁部でない面は赤彩されるが、外面は磨滅していて赤彩の有無は不明である。846 は、高坏の脚部で、三角透かしをもつ。849 は壺の頸部で、頸部文には簾状文が施され、文様帯の下位には、4 分の 1 円弧文が付加される。850 は口縁部が面取りされた北陸系の甕である。851 は、北陸系の壺の胴部で、赤彩される。852 は甕の口縁部で、口縁部には櫛描波状文が施され、頸部文様帯には、横走する直線文を縦方向の垂下文で区画する、T 字文が施される。

853 ～ 855 はミニチュア土器である。856 は土製の玉である。857 は、土偶の顔の一部と思われる破片である。刺突を施した隆帯により鼻から眉毛を表現していると思われる。当概期に属するかは、検討を有する。858 は 2 次的な焼成を受けた土器片である。当該期に所属するかは、検討を有する。

S244 と S245 は 1 穴式の磨製石包丁。S244 は図右の右端を欠損する。細粒の凝灰岩材で、使用による形状変化、とくに刃縁の後退が著しい。刃部は片刃でやはり部分的に偏両刃となる。S245 は凝灰質頁岩の剝片素材の刃部を中心に研磨仕上げした資料で、両端が欠損する。両刃で孔は片側穿孔である。S246 ～ S248 は黒曜石の原石。検出面から、まとまって出土した（PL27）。遺構の掘り込みは確認できなかった。S248 は一か所に剝離痕が認められる。意図的な剝離痕跡ではなく、遺棄（または廃棄）後にうけた 2 次的な剝離痕の可能性が高いか。S249 は刃器。SK39 出土の S232 と同様な器種の可能性もある。S250 は加工痕のある石屑でメノウ材。S251 と同様な形態を示す石鏃に関連する資料ともみられるが定かではない。S251 ～ S253 は黒曜石材の有茎式石鏃。S251 は小形の剝片の側辺のみ片側から剝離調整して仕上げられている。S254 と S255 は砂岩材の小形の手持ち砥石。ともに端部を欠損する。S256 は閃緑岩材の太型蛤刃石斧。完形品。S257 は刃器。両側辺を抉るように剝離加工し、刃部は無加工でそのまま使用し、摩耗している。S258 は石鍬の基部破片と考えられるが、欠損部位は不明瞭で、石核等に再利用された可能性もある。S259 は軽石製の砥石。機能面が全周にみられる。S260 は軟玉材の勾玉。穿孔は片面側より 2/3 以上穿たれる。S265 は珪質凝灰岩材の素材。S266 は暗緑色の、S267 は暗赤色の碧玉の素材。

＊1　茂原信生氏のご教授による。「イノシシの下顎第３大臼歯」

＊2　樹種同定の結果参照。

＊3　茂原信生氏のご教授による。

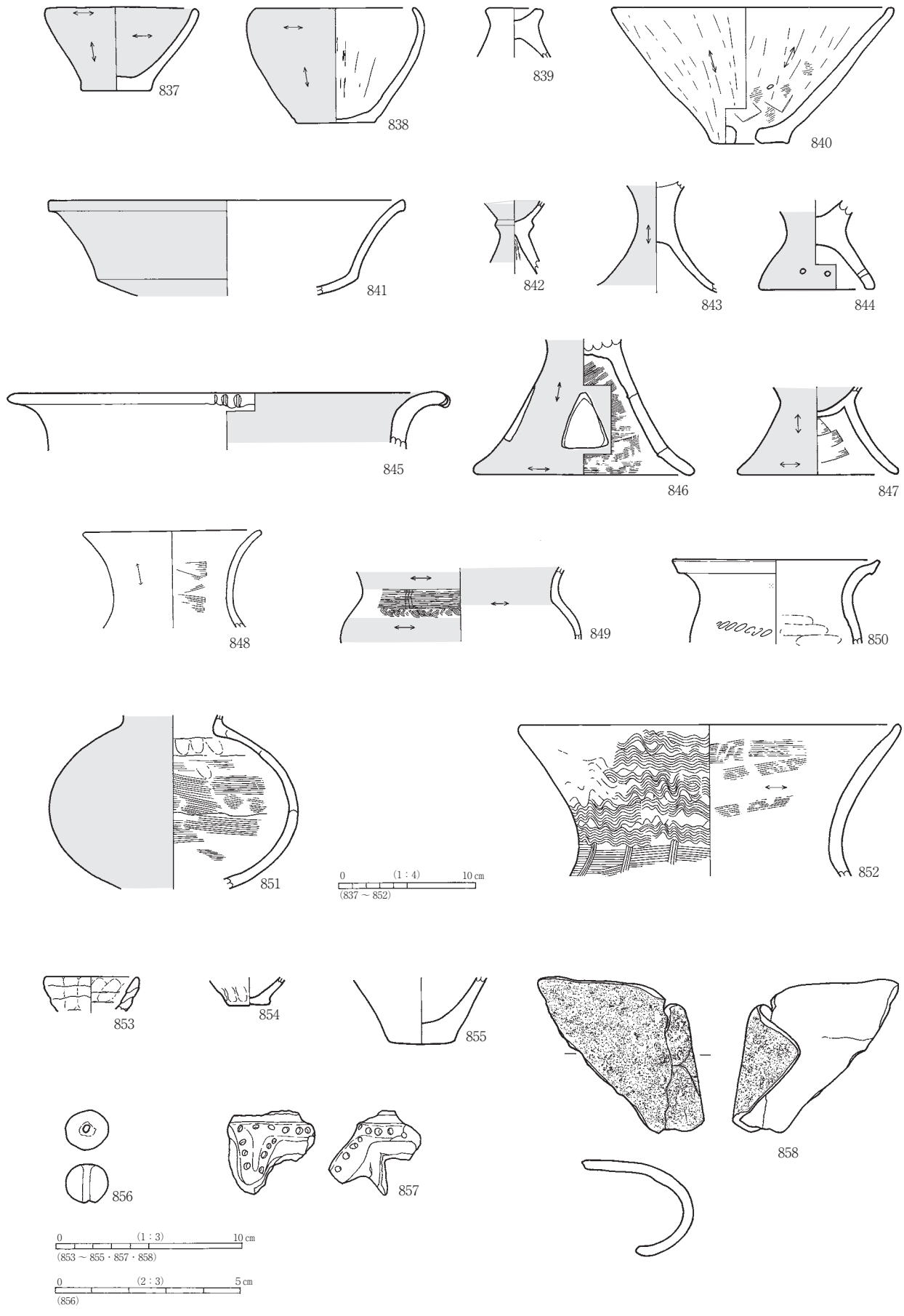
＊4　種実同定の結果参照。「イネの炭化種子（約３万点）、イネ炭化果実、キビ炭化種子など」

＊5　樹種同定の結果参照。「板目材、モミ属」

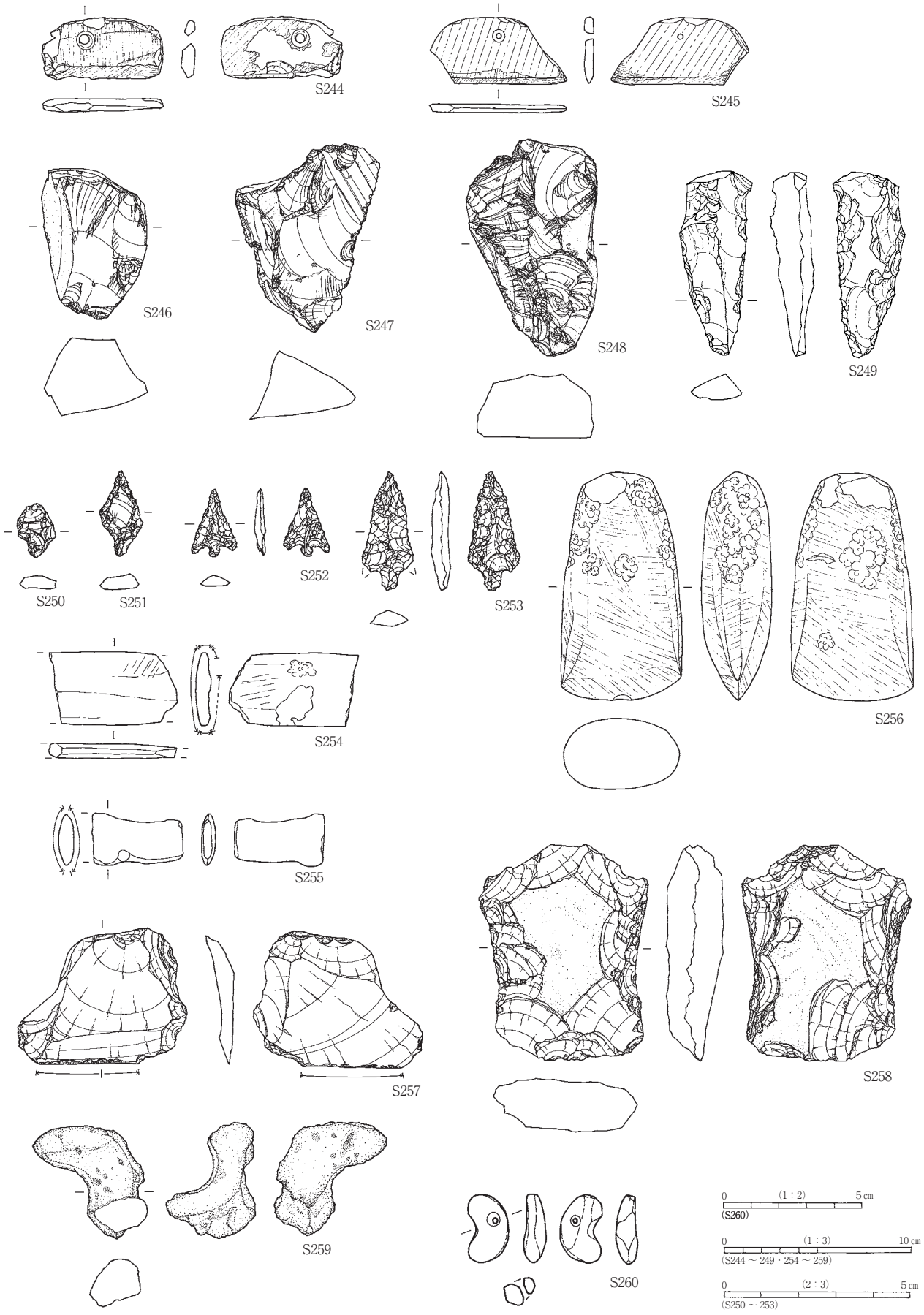
＊6　樹種同定の結果参照。「アワブキ」

＊7　樹種同定の結果参照。「モミ属」

＊8　樹種同定の結果参照。「板目材、モミ属」



第 120 図　弥生時代後期の土器・土製品



第 121 図　弥生時代後期の石器・石製品

第５節　古墳時代～古代

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は基本土層のⅤ層またはⅥ層を剝いで検出された遺構で、古墳時代～古代に属する遺構である。①区以外のすべての調査区で検出された。検出された遺構は溝跡が多く、前時期のような集落跡は検出されなかった。④・⑩・⑬区では、畦畔状の遺構が確認され水田の存在が推定されるが、いずれも断片的で、水田跡とは断定できない。当該期に属する遺構のうち小規模な土坑など、遺物の出土が認められなかったような遺構には、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものがあり、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。検出された主な遺構は、溝跡 82 条、土坑 74 基等である。

２　溝跡

①区以外のすべての調査区で検出された。そのうち⑦区で確認された SD37 や、⑧区の SD7 等は自然の流路跡と思われるが、その他の溝跡は、人工的な溝跡と思われる。ほとんどの溝跡は遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SD7　（第 122・123 図）　⑧区ⅢX15・20、Y11・16

Ⅵ層を剝いで明瞭に検出した。弥生時代後期の SD17 を切り、中世以降の SK40 に切られる。東から西の方向に緩やかに蛇行しながら伸びる溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は複層で、堆積の状況などから自然埋没と思われる。その形状などから自然流路と思われる。埋土中より土器片や石器が出土している。本遺構の時期は、埋土中から出土している土器より、古墳時代と認定される。

出土遺物（第 124 図 859 ～ 866　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

859 ～ 862 は坏、863 は高坏、864 は壺、865・866 は甕である。859・860・862 は、内面が黒色処理される。862 は、底部にヘラ書きが施されている。

SD37　（第 122・123 図）　⑥区ⅢD17・18・22・23、⑦区ⅢI3・4・5・9・10

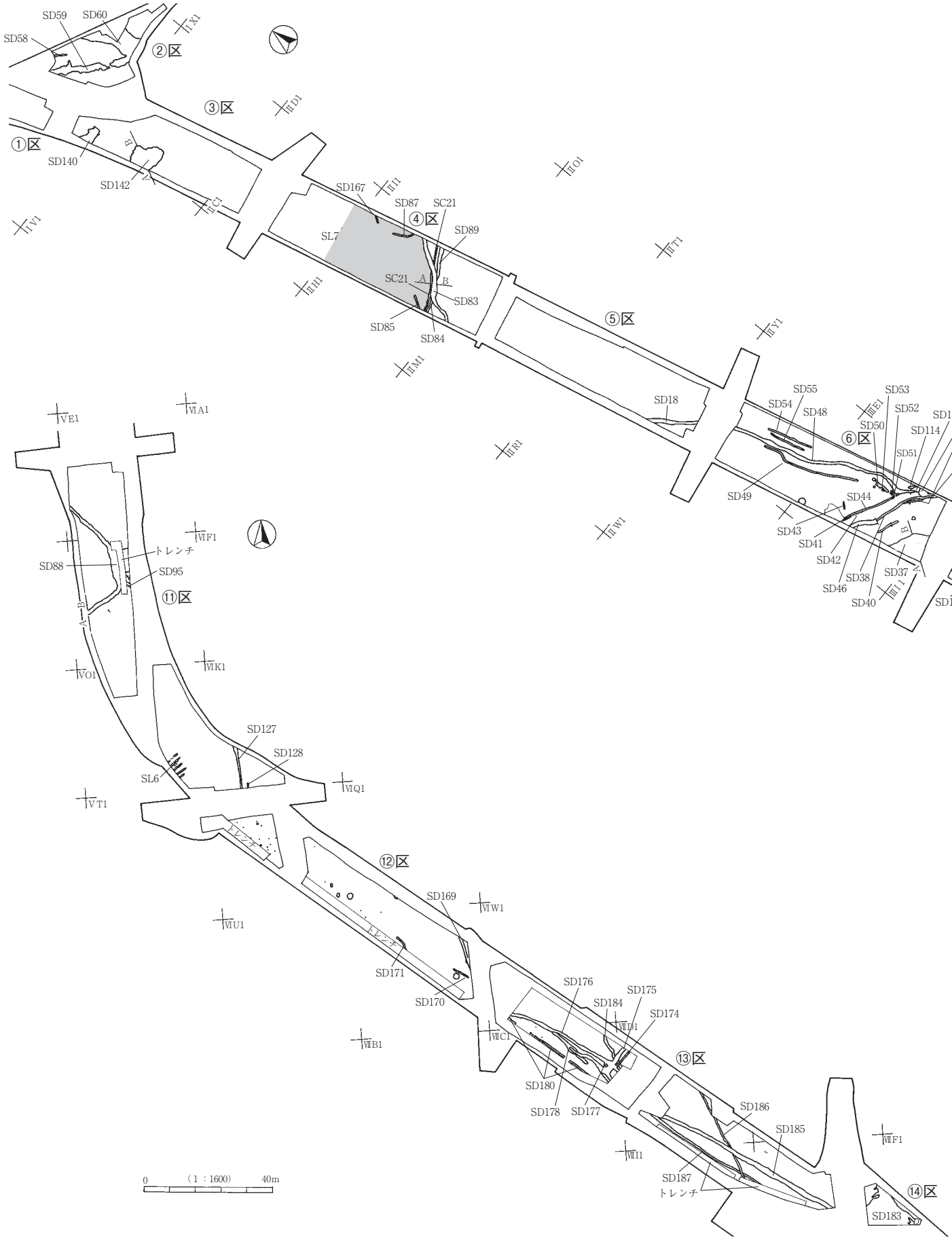
Ⅶ層中で明瞭に検出した。弥生時代中期中葉の SD161 や、弥生時代後期の SD192 を切る。南東から北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は複層で、堆積の状況などから自然埋没と思われる。その形状などから自然流路と思われる溝跡である。埋土中より土器片や石器・木製品が出土している。

出土遺物（第 124 図 867、木製品 3 ～ 5　　PL43・49）

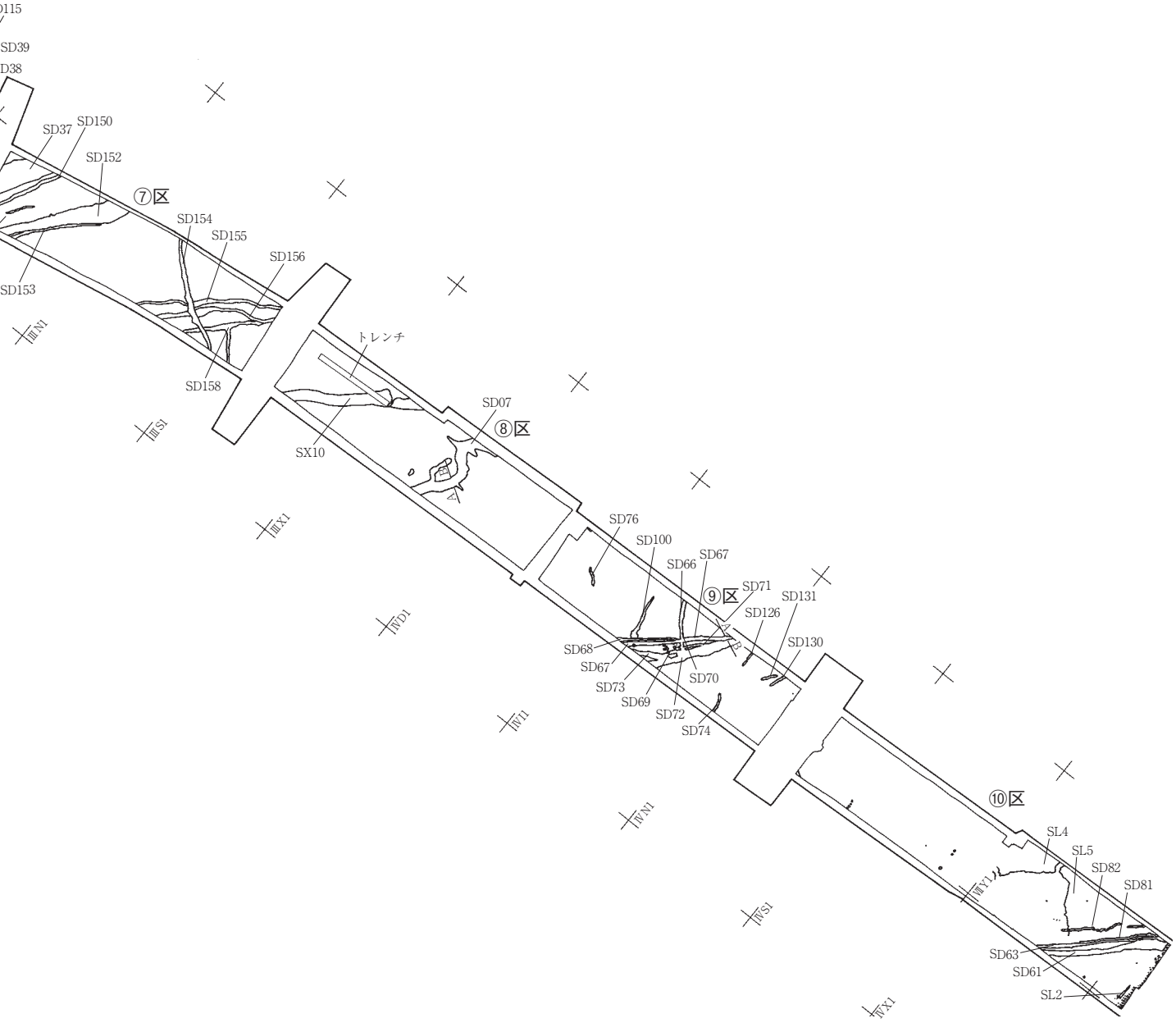
掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

867 は、赤彩された高坏の脚部で、4 単位の円形の透かしを持つ。

木製品 3 は、コナラ属クヌギ節の柾目の板材で、曲げ物の底板かと思われる。木製品 4・5 は農具の柄であると思われる。木製品 4 は、ニレ属の角材で、断面形は方形に近い形状を呈する。一端は欠損



第 122 図　古墳時代～古代の遺構全体図


D115
SD39
D38
SD37
SD150
SD152
⑦区
SD154
SD155
SD156
SD153
ⅢN1
トレンチ
SD158
SD07
⑧区
ⅢS1
SX10
ⅢX1
SD76
SD100
SD66
SD67
⑨区
SD71
SD131
SD126
SD130
SD68
SD67
SD73
SD69
SD72
SD74
SD70
ⅣD1
ⅣT1
ⅣN1
⑩区
SL4
SL5
SD82
SD81
ⅣY1
ⅣS1
SD63
SD61
SL2
ⅣX1

し、もう一端は細く整形されている。木製品５は、クリの削り出し材で、断面形は円形を呈する。一端は欠損し、もう一端は平らに整形されている。

SD67　（第 122・123 図）　⑨区ⅣI5・10、J6・11・12・17

Ⅵ層を剝いで明瞭に検出した。弥生時代後期の SB52・53 や、SD68・100 を切る。SK521 に切られる。切り合いは平面で土の差により判断した。SD66・70・71 との切り合いは不明で、同時に存在していた可能性が考えられる。北西から南東の方向に伸びる直線的な溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と思われる。その形状などから、人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や土製品・石器が出土している。

出土遺物（第 124 図 868 ～ 870　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

868 は須恵器の坏である。869 は、須恵器の高台部分であるが、器種ははっきりしない。

870 は、土製の錘である。

SD83　（第 122・123 図　　PL48）　④区ⅡH10・14・15・18・19・23

Ⅴ層を剝いで明瞭に検出した。SD84・SC21 を切る。中世の ST3・SK777 などに切られる。切り合いは平面で土の差により判断したが、はっきりしない部分はトレンチを入れて断面で新旧を判断した。南西から北東の方向に緩やかに湾曲しながら伸びる溝跡で、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈す。埋土は複層で、自然埋没と思われる。形状などから、人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や土製品・石器が出土している。本遺構の時期は、埋土中から出土している土器より、古墳時代と認定される。

出土遺物（第 124 図 871 ～ 875　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

871・872 は坏で、873・874 は鉢で、875 は甕である。871・872 は、内面が黒色処理される。

SD88　（第 122・123 図　　PL48）　⑪区ⅤE15・21・22、J2・3・7・8・11・12

Ⅰ層を剝いでわずかな土の差により検出した。南西から北東へ伸び調査区の東側境付近で、直角に近く屈曲し北西の方向に伸びる直線的な溝跡で、屈曲部にあたる部分は幅が広くなる。両端は調査区外へ延びる。底部は凸凹で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は複層で、堆積状況などから自然埋没と思われる。形状などから、人工的な溝跡と思われる。埋土中より土器片や土製品・石器が少し出土している。

出土遺物（第 124 図 876・877、S261　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

876 は、胴部が球状を呈する甕で、外面はナデ調整される。

877 は、勾玉を模造した土製品かと思われる。円孔が貫通する。

S261 は、砂岩材の敲石と思われる石器である。埋土からの出土であるため本項に掲載したが、概期の遺物ではない可能性が考えられる。

SD142　（第 122・123 図）　③区ⅠV5・10、W1・6

Ⅴ層を剝いで明瞭に検出した。西側が調査区外となるが、東西方向の溝跡あるいは自然の窪地の一部と推定される。断面形は立ち上がりが緩やかなＵ字状を呈し、北側には浅いテラス状の部分をもつ。埋土は複層で、堆積の状況などから自然埋没と思われる。埋土中より土器片や石器が出土している。

出土遺物（第 125 図 878 ～ 881　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

878 は須恵器の坏である。879 は、須恵器の短頸壺である。880 は、須恵器の長頸壺、肩部の破片である。突帯を巡らせ、4 単位と思われる耳状の突起を付す。881 は、土師器黒色土器 A の坏である。

３　包含層出土遺物（第 126 図 882 ～ 895、S262　　PL49）

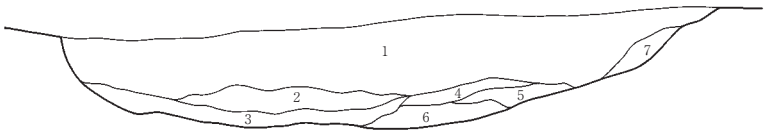
包含層から出土した当概期の遺物を本項に掲載した。

882 は高坏、883 ～ 885 は壺、886 ～ 889 は甕、890 は坏、891 は把手、892 は須恵器の甕、893 は須恵器の壺である。883・884 は、小型丸底壺の胴部である。885 は口縁部が長く直線的に広がり、外面に稜をもつ小形の壺である。886・888・889 は、器面をハケで調整する甕で、888・889 は胴部が球状を呈する。887 は、器面がヘラケズリで調整される。890 は底部破片で、内面に十文字に墨痕が施される。891 は、甑あるいは甕の把手と思われる破片である。

894・895 は、円筒埴輪かと思われる破片である。断面形が台形に近い形状の突帯をもつもの（894）と、三角形の突帯をもつもの（895）がある。表面は摩耗していて調整は不明である。隣接する坂城町上五明条里水田址から多数の埴輪片が出土しており、そこからの流れ込みと思われる。

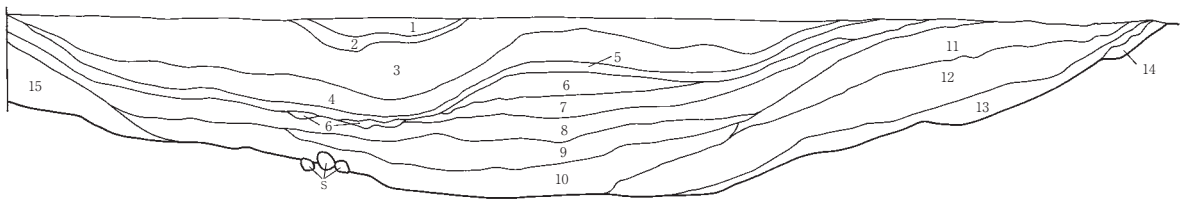
S262 は、安山岩材の石錘である。

A 388.0　SD７　B



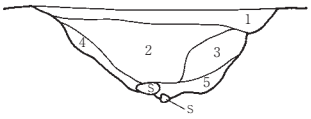
1　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量、酸化
2　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物少量
3　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量
　黒褐色土をφ１cm前後のブロック状に少量
4　10YR4/2　灰黄褐色砂　暗褐色土をφ１cm前後のブロック状に少量
5　10YR4/2　灰黄褐色砂
6　10YR4/2　灰黄褐色砂　φ0.5 cm前後の礫多量
7　10YR4/2　灰黄褐色砂　暗い

A 387.2　SD37　B



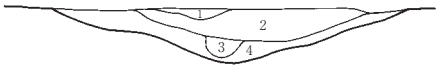
1　10YR5/2　灰黄褐色砂
2　10YR4/2　灰黄褐色土
3　10YR5/2　灰黄褐色砂　炭化物微量
4　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物を厚さ 0.5 cm前後の層状に少量
5　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物を厚さ 0.5 cm前後の層状に少量
　暗い
6　10YR4/3　にぶい黄褐色砂
7　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物を厚さ 0.5 cm前後の層状に少量
8　10YR3/2　黒褐色土　炭化物
9　10YR4/1　褐灰色土　炭化物少量
10　10YR4/1　褐灰色土　炭化物微量
11　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量
12　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量、明るい
　灰黄褐色土が層状に入る
13　10YR4/2　灰黄褐色砂
14　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色砂φ0.5 ～７cm程のブロック少量
15　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量

A 388.1　SD67　B



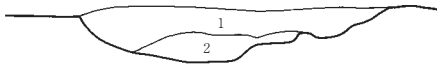
1　10YR3/3　暗褐色土　酸化
2　10YR5/1　褐灰色土　細砂微量
3　10YR5/1　褐灰色土　細砂少量
4　10YR5/1　褐灰色土　粗砂微量
5　10YR5/1　褐灰色土　粗砂少量

A 386.7　SD83　B

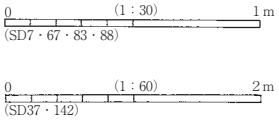


1　10YR4/2　灰黄褐色砂　炭化物微量
2　10YR4/1　褐灰色砂　下層に粗砂
3　10YR4/2　灰黄褐色砂
4　10YR4/1　褐灰色砂　炭化物微量

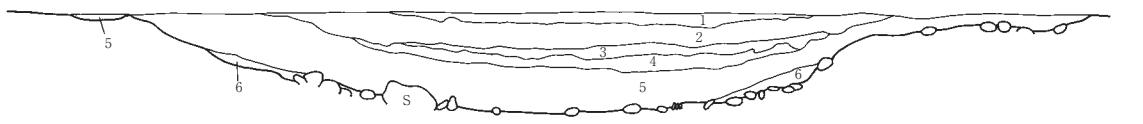
A 389.2　SD88　B



1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　φ0.2 ～ 0.5 cm程のマンガン粒微量、酸化
2　10YR4/2　灰黄褐色土　φ0.2 ～ 0.5 cm程のマンガン粒微量、酸化
　φ0.2 ～ 0.5 cm程の礫微量



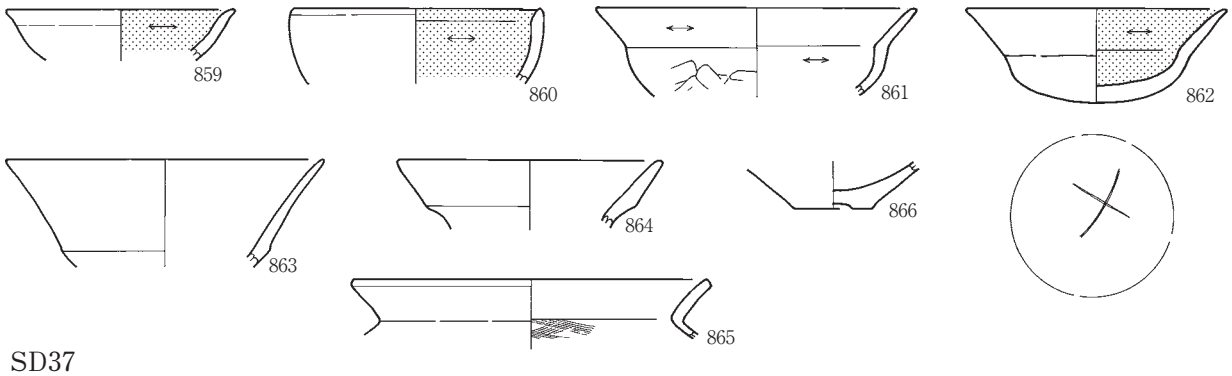
A 386.0　SD142　B



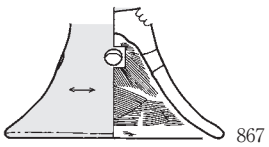
1　10YR3/1　黒褐色土
2　10YR5/1　褐灰色土
3　10YR5/1　褐灰色土　粘性強し
4　10YR5/2　灰黄褐色土
5　10YR5/2　灰黄褐色砂
6　10YR4/1　褐灰色砂

第 123 図　古墳時代～古代の個別図１

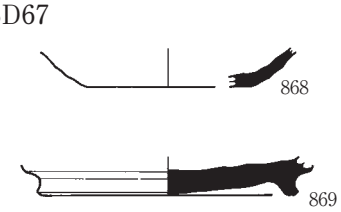
SD７

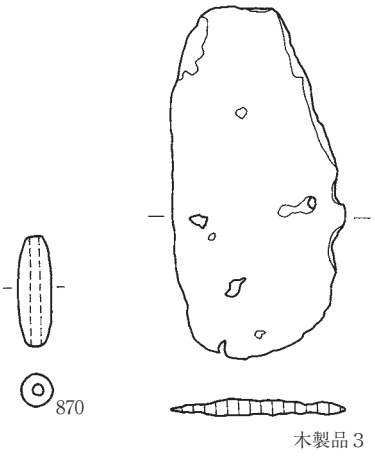


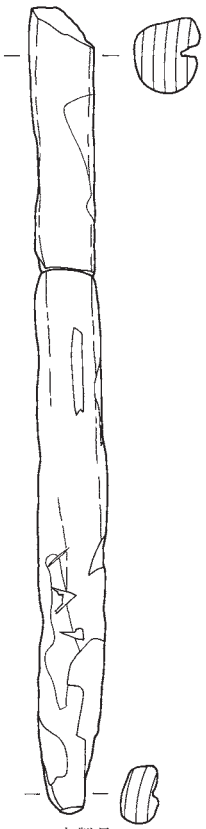
SD37

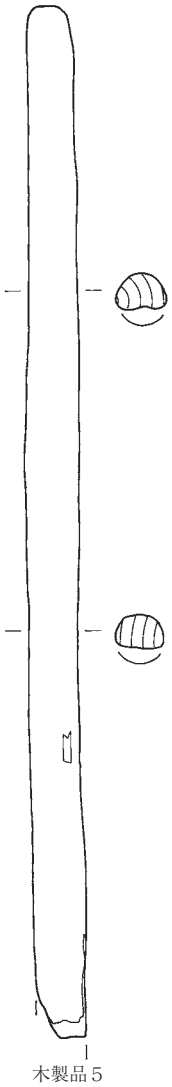


SD67

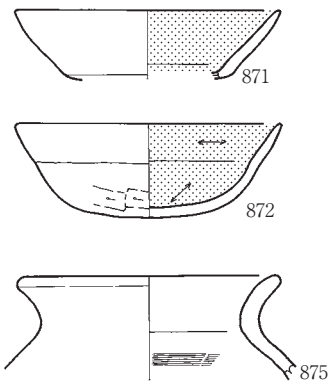


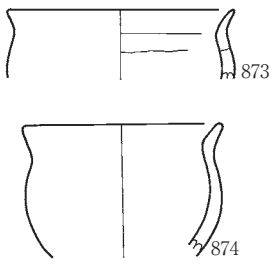




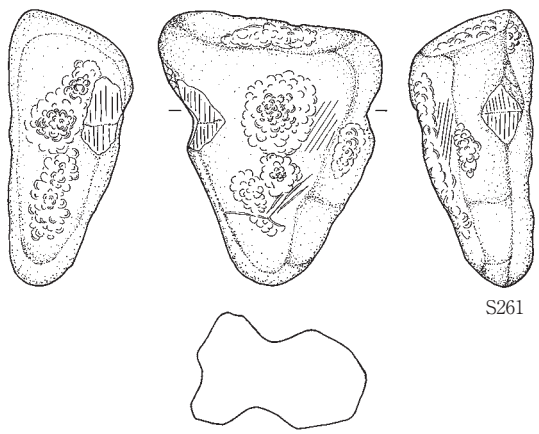


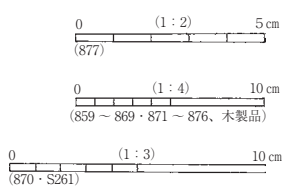
SD83





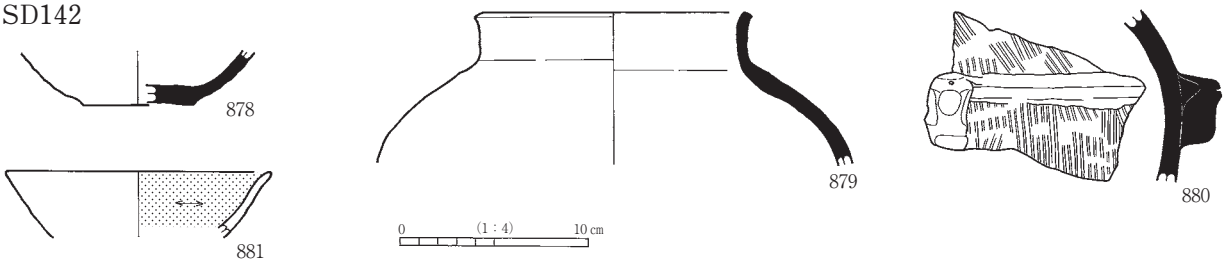
SD88





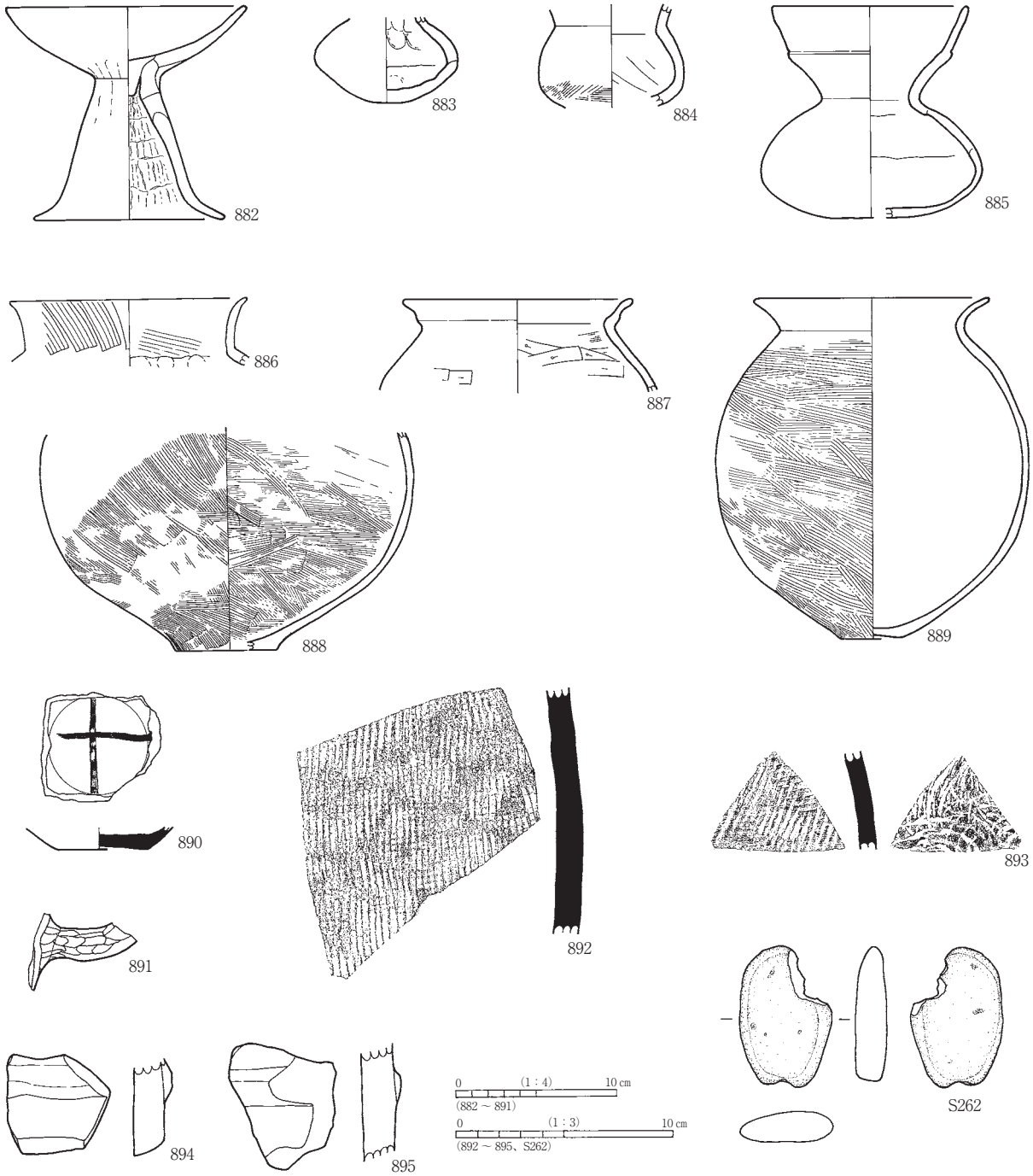
第 124 図　古墳時代～古代の個別図２

SD142



第 125 図　古墳時代～古代の個別図３

包含層



第 126 図　古墳時代～古代の遺物

第６節　中世以降

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は基本土層のⅠ層あるいはⅡ・Ⅲ層を剝いで検出された遺構で、中世から近世に属する遺構である。掘立柱建物跡が、④・⑩・⑬区で検出され、②・③区では水田跡が確認された。また、⑤区からは墓や井戸跡、⑥・⑧区でも井戸跡と思われる土坑が確認された。その他の地区は全く遺構が確認できなかったが、堆積の状況などから水田などの生産域であった可能性も考えられる。当該期に属する遺構は、遺物の出土も少なく、検出面や埋土から判断したものが多く、若干前後する遺構も含まれると思われる。検出された遺構は、掘立柱建物跡５棟、水田跡２箇所、溝８条、土坑 294 基である。

２　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、④区で３棟⑩区と⑬区で各１棟検出された。その他にも⑧区や⑪区等土坑がまとまって確認された地区では、柱痕をもつ土坑や、直線的に並ぶ土坑などがあったが、建物として組めたのは前記の５棟のみである。

ST1　（第 127・128 図　　PL48）　⑩区ⅣT22

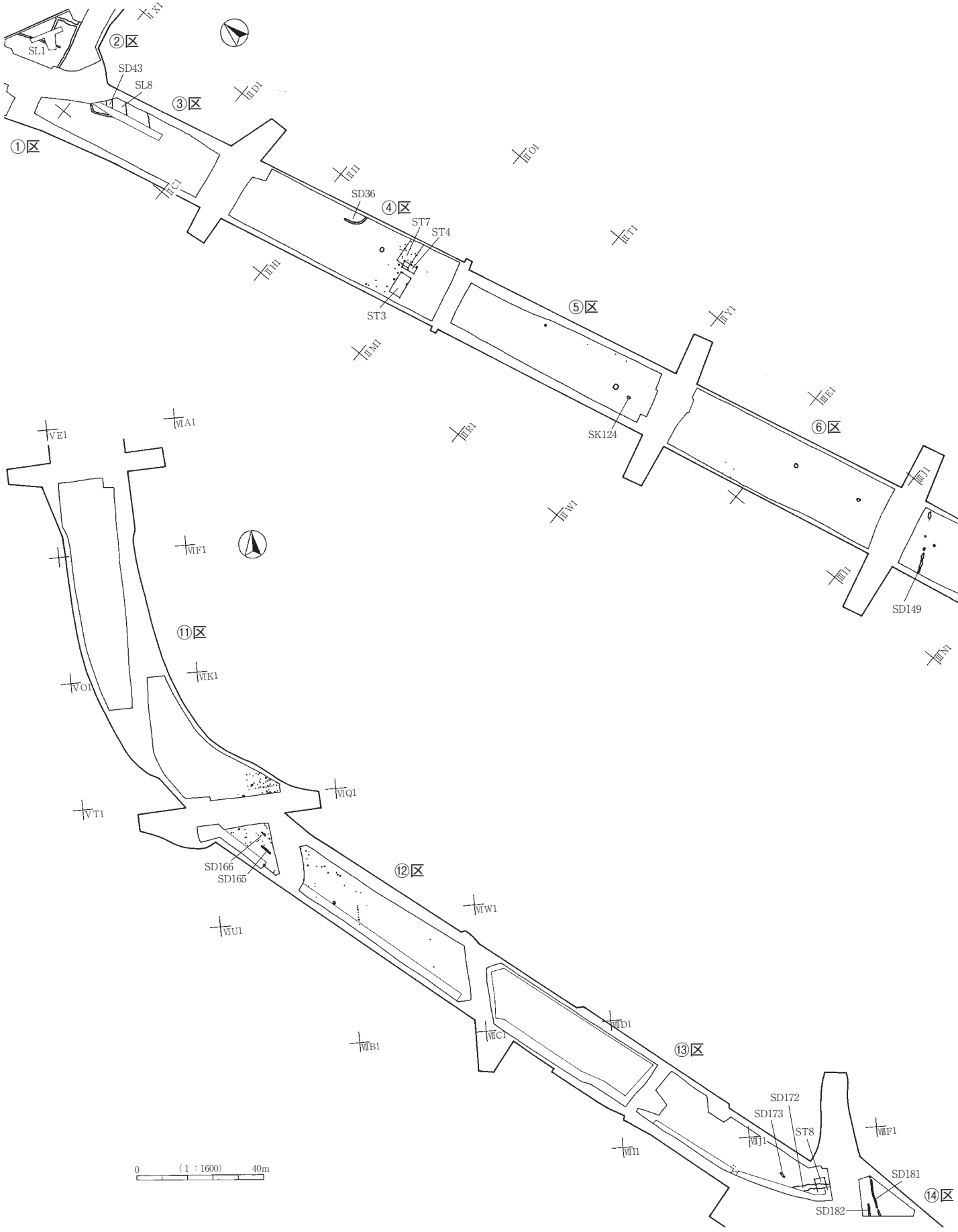
Ⅰ層を剝いで検出した。SK1862 を切る。切り合いは、平面で土の差から確認した。SK85 などとも重複しているが、新旧関係は不明である。南北２間、東西２間の総柱の建物で、軸は西へ約 6° ふれている。柱間寸法は南北方向が 160㎝と一定で、東西方向は 180 ～ 200㎝とやや不規則である。掘り方はピット２・８が楕円形、その他は円形で、深さは 16 ～ 56㎝である。柱痕はピット７・９にみられ、径 10㎝ほどで円形である。遺物は出土していない。

ST3　（第 127・129 図　　PL48）　④区ⅡH18・19・23・24

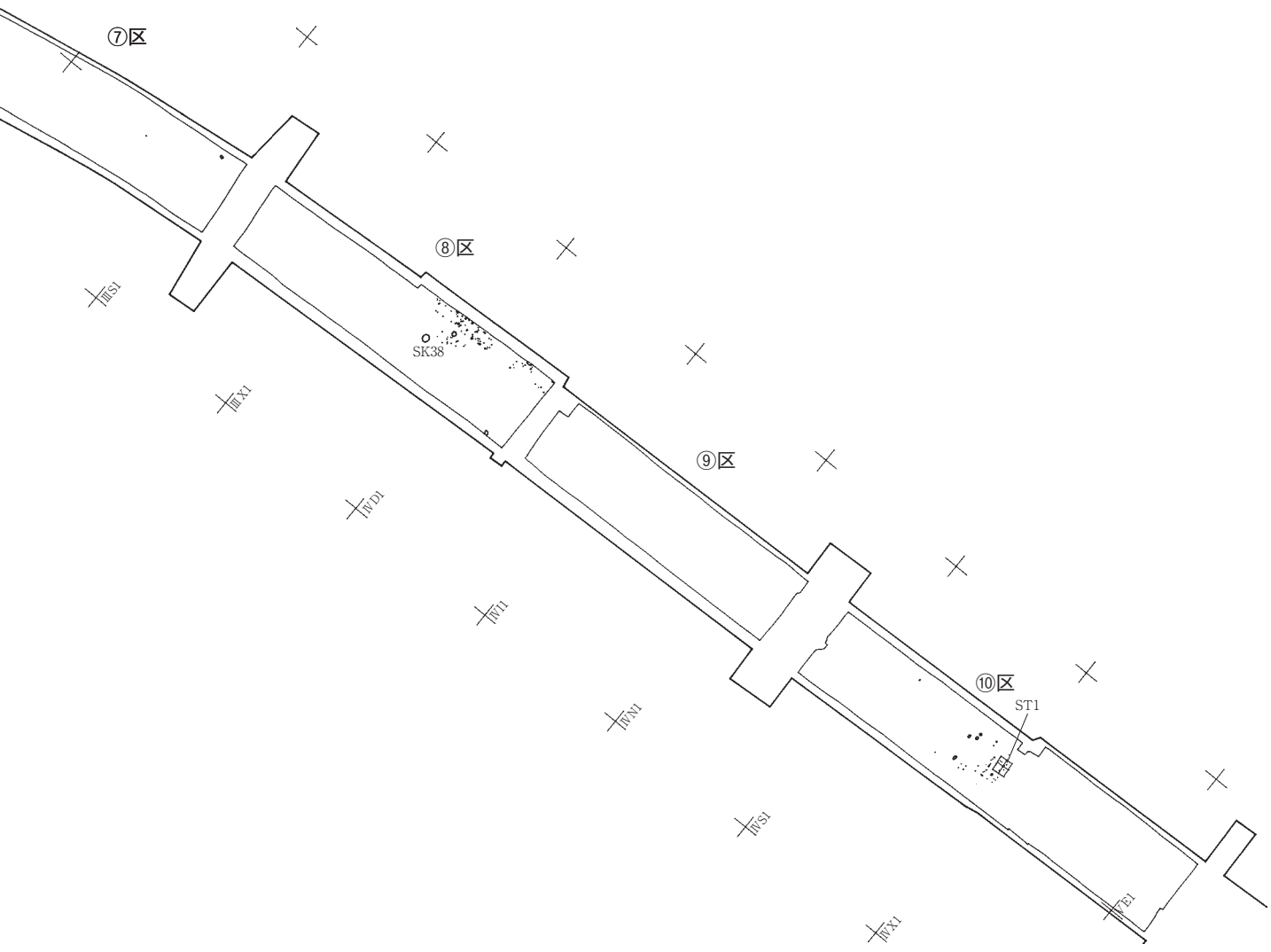
Ⅰ層を剝いで検出した。暗渠と SK1851 に切られる。切り合いは、平面で土の差から確認した。SD83 を切る。切り合いは、平面でははっきりしなかったが、断面で切り合いを確認した。SK1852 と重複しているが、新旧関係は不明である。北西の隅の柱穴が確認できなかったが、南北１間、東西３間の建物と推定される。軸は北へ約 7° ふれている。柱間寸法は南北方向が 340 ～ 360㎝、東西方向は 220 ～ 240㎝とやや不規則である。掘り方はピット２・３・６・７が円形、ピット１・４・５は楕円形で、深さは８～ 14㎝である。柱痕はピット１～４・６にみられ、ピット１・３・６は径 12㎝ほどの円形で、ピット２・４は一辺 12㎝ほどの方形に近い形状である。遺物は出土していない。

ST4（第 127・130 図　　PL48）　④区Ⅱ H19・24

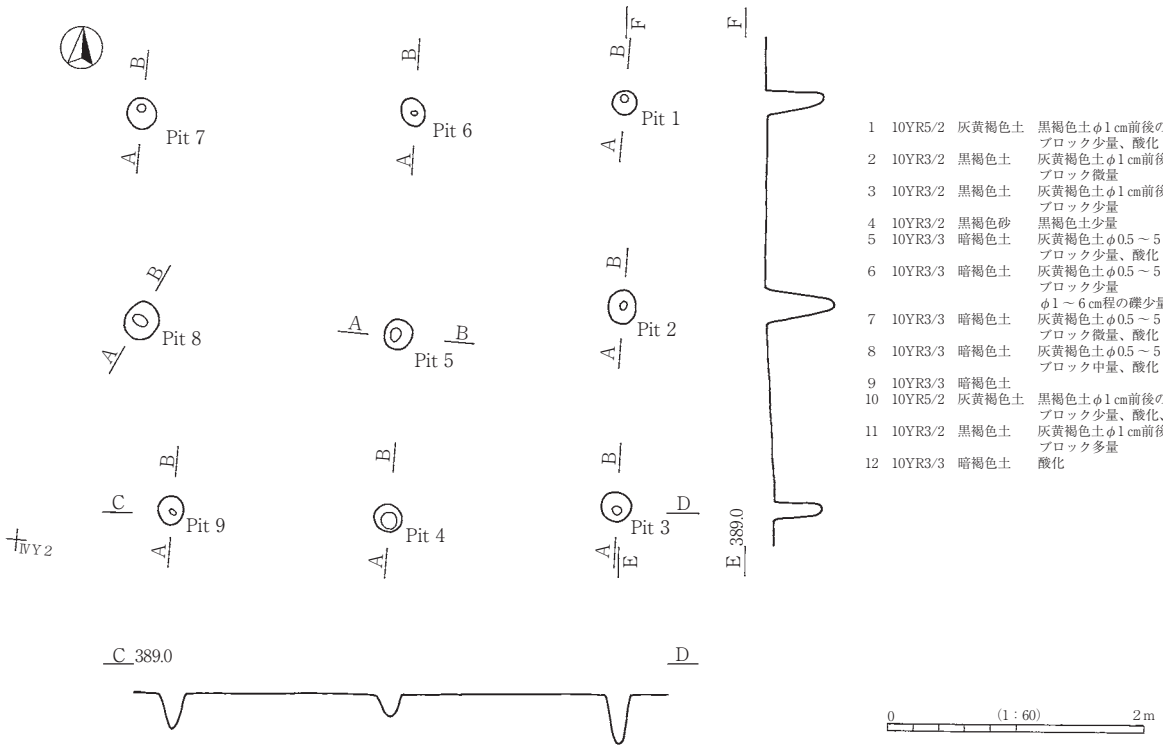
Ⅰ層を剝いで検出した。SK762 に切られる。SK1853 を切る。いずれも平面で土の差から切り合いを確認した。ST7 と重複しているが、新旧関係は不明である。南北２間、東西１間の建物で、軸は西へ約 9° ふれている。柱間寸法は南北方向が 210 ～ 230㎝とやや不規則で、東西方向はほぼ 200㎝と一定である。掘り方はほぼ円形で、深さは 12 ～ 26㎝である。柱痕はピット１・３・４にみられ、径 12㎝ほどで円形である。ピット５内には、柱を支えていたかと思われる、径 10 ～ 20㎝ほどの礫が配置される。埋土中より土

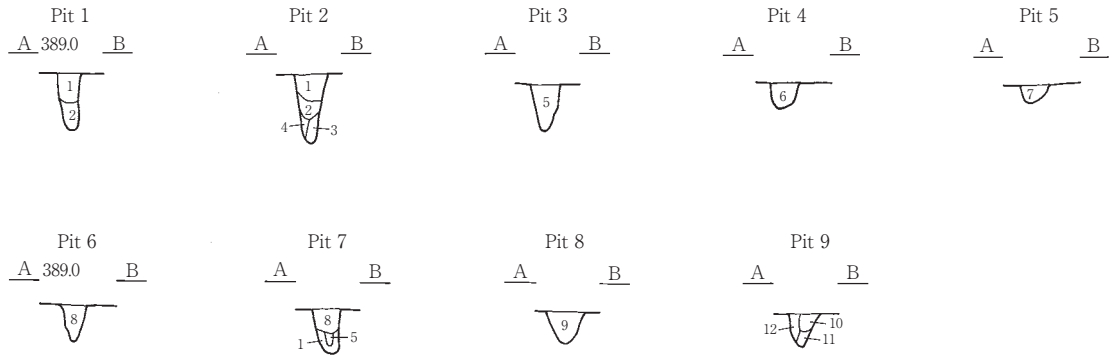


第 127 図　中世以降の遺構全体図


⑦区
⑧区
⑨区
⑩区
SK38
ST1
ⅢS1
ⅢX1
ⅣD1
ⅣT1
ⅣN1
ⅣS1
ⅣX1
ⅣZ1

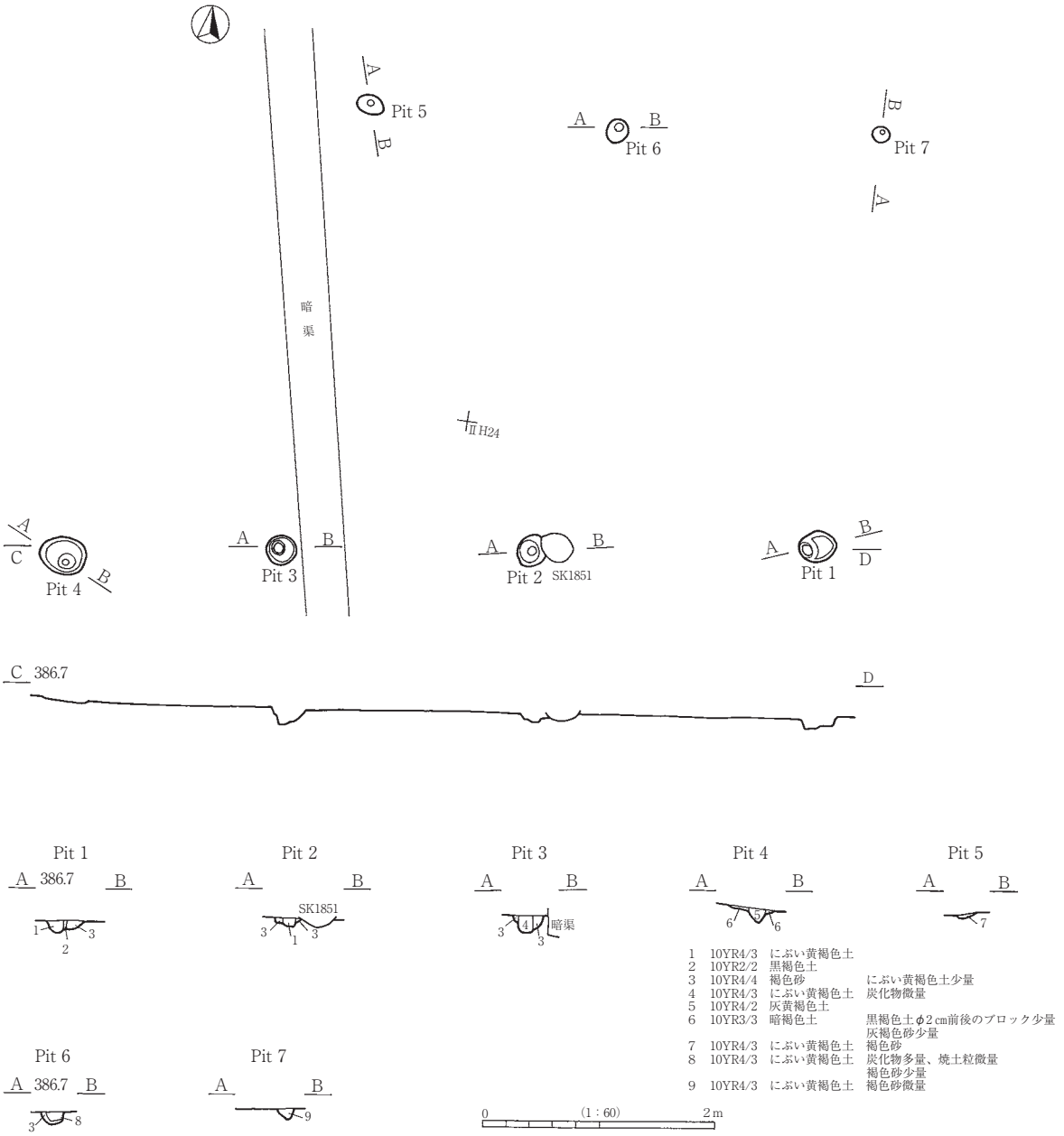
ST 1





第 128 図　中世以降の個別図１

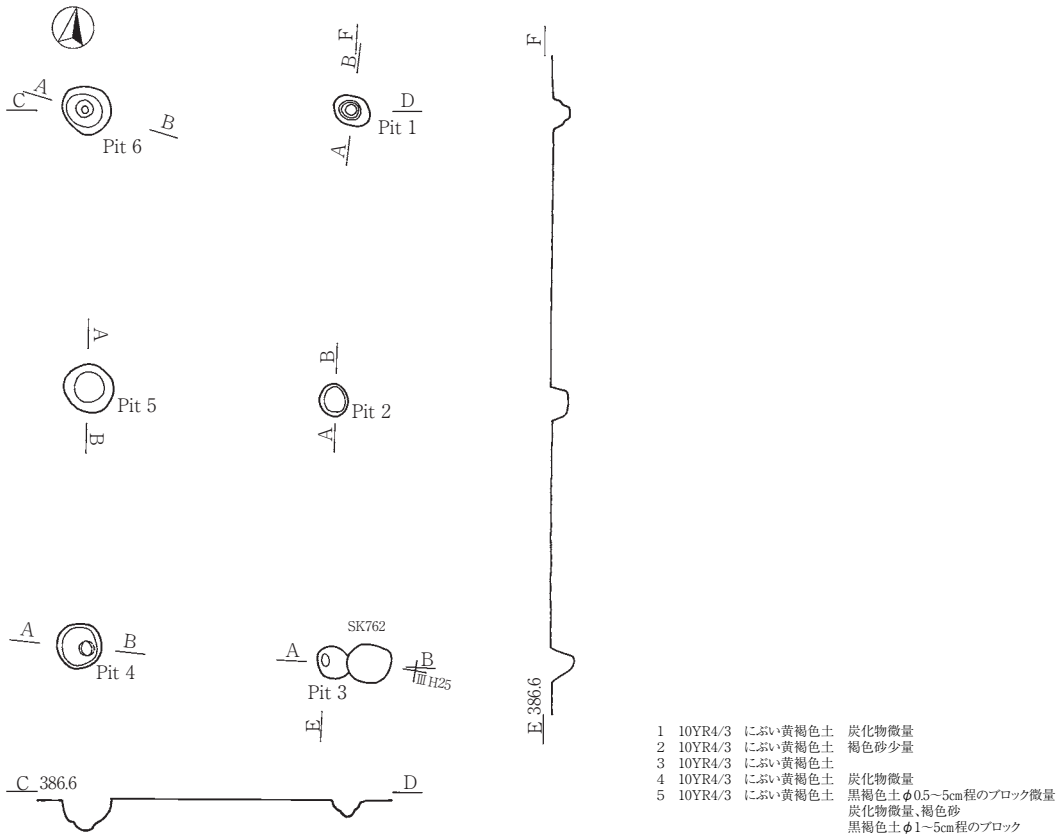
ST３

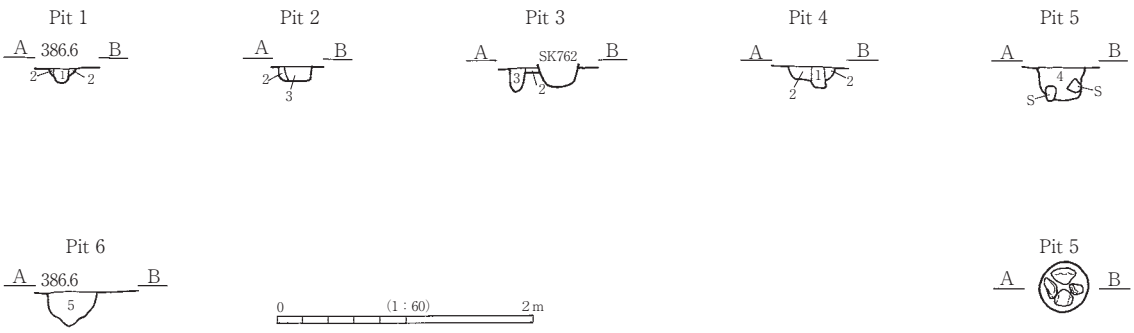


1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
2	10YR2/2	黒褐色土	
3	10YR4/4	褐色砂	にぶい黄褐色土少量
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物微量
5	10YR4/2	灰黄褐色土	
6	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土φ２㎝前後のブロック少量 灰褐色砂少量
7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	褐色砂
8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物多量、焼土粒微量 褐色砂少量
9	10YR4/3	にぶい黄褐色土	褐色砂微量

第 129 図　中世以降の個別図２

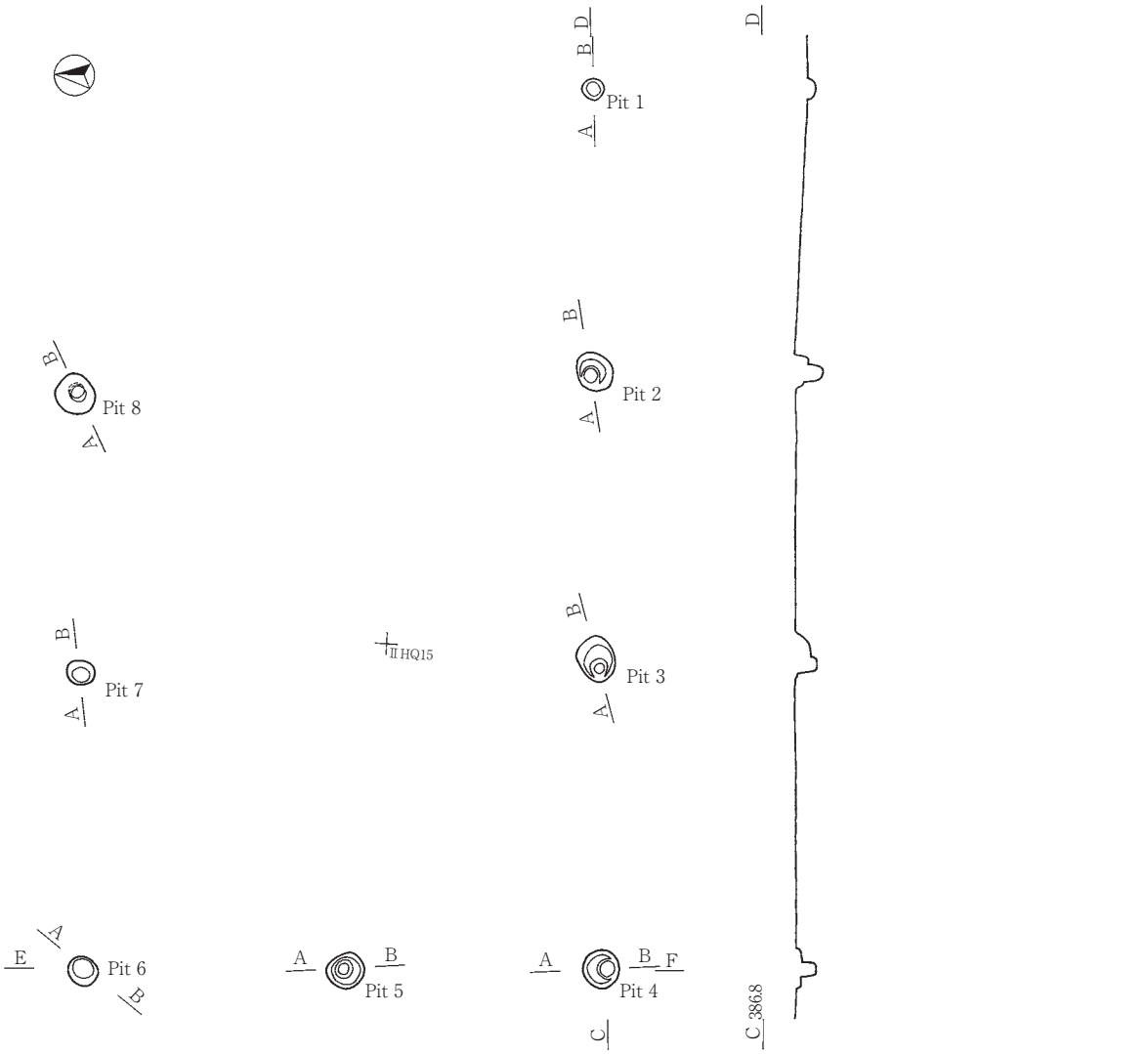
ST 4





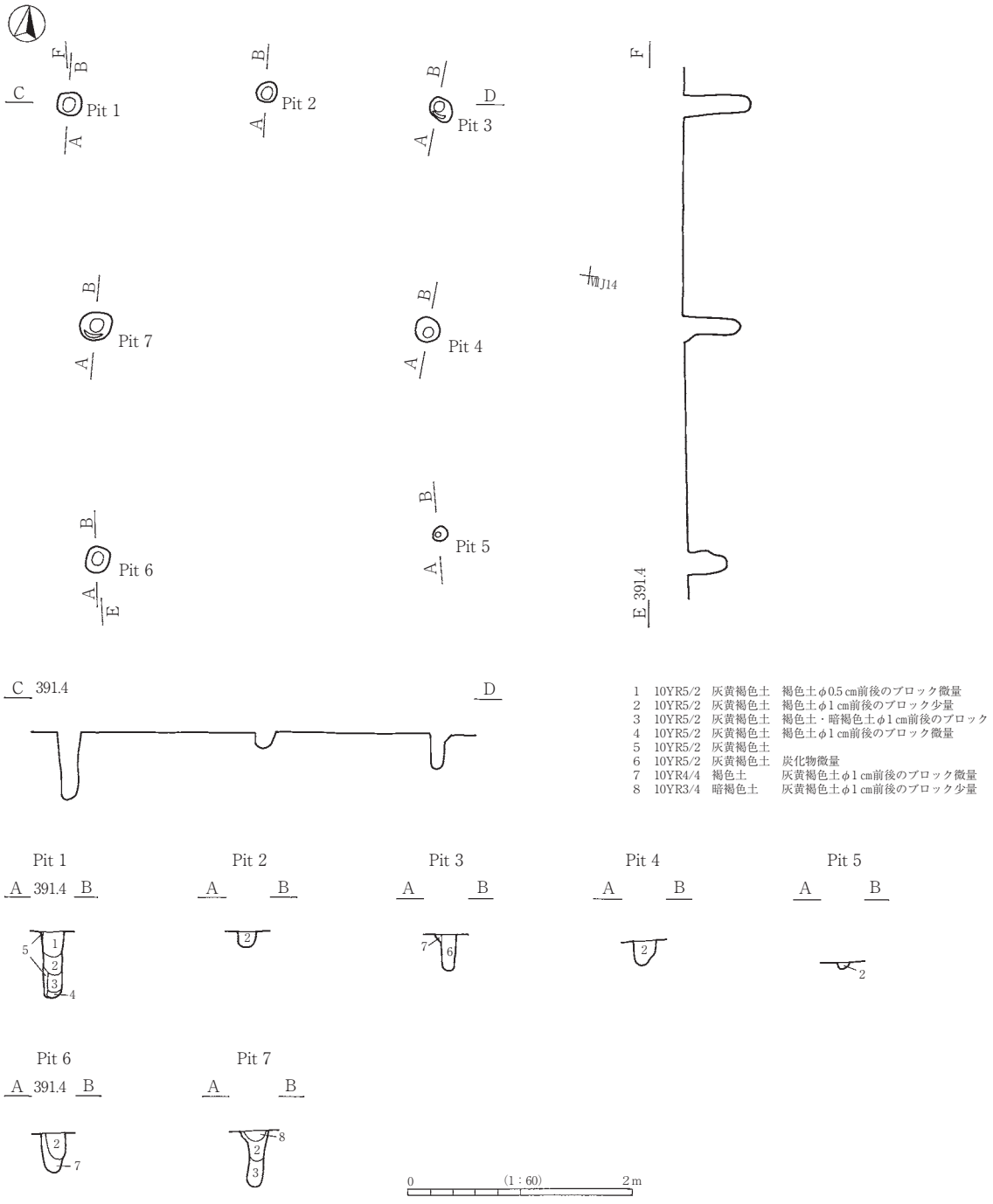
第 130 図　中世以降の個別図３

ST 7



第 131 図　中世以降の個別図４

ST８



第 132 図　中世以降の個別図５

器片がわずかに出土している。

ST7　（第 127・131 図　　PL48）　④区ⅡH19・20

Ⅰ層を剝いで検出した。SK766 を切る。平面で土の差から切り合いを確認した。ST4 と重複しているが、新旧関係は不明である。東側が調査区外となるが、南北２間、東西３間の建物と推定される。軸は北へ約 5°ふれている。柱間寸法は南北方向が 210㎝、東西方向は 230㎝とほぼ一定である。掘り方はピット 1・4 ～ 8 が円形、ピット 2・3 が楕円形で、深さは 8 ～ 22㎝である。ピット 2 ～ 5・8 の掘り方は２段になっている。柱痕はピット 2 ～ 6・8 にみられ、ピット 2・6・8 は径 12 ～ 16㎝ほどの円形で、3 ～ 5 は一辺 12 ～ 16㎝ほどの方形に近い形状である。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST8　（第 127・132 図）　⑬区ⅦJ8・13

Ⅰ層を剝いで検出した。SD172 を切る。切り合いは、平面で土の差から確認した。南北２間、東西２間分の柱穴が確認されたが、遺構の南側が調査区外となるため、南北方向にはまだ建物が続くと推定される。軸は西へ約 10°ふれている。柱間寸法は南北方向が 190 ～ 210㎝、東西方向は 160 ～ 180㎝とやや不規則である。掘り方は方形に近く、深さは 10 ～ 60㎝である。柱痕はピット 1・3・6・7 にみられた。遺物は出土していない。

３　水田跡

水田跡は、②区と③区で確認された。

SL1　（第 127・133 図　　PL48）　②区ⅠR1・6 ～ 8・11 ～ 15・17 ～ 20・23、S16・17

調査行程上の関係で、平成 14 年度に北側部分、平成 17 年度に南側部分の調査を実施した。洪水による堆積層であるⅡ層を、手作業で剝いで検出した。幅約 75㎝の東西方向の畦畔を確認した。畦畔の北側の水田跡からは、耕作痕と思われる浅い溝状の凸凹が確認された。また、水田面は幅 75 ～ 115㎝程の低く幅広の畦畔と、幅 20 ～ 45㎝程の畦畔によって細分されている。南側の水田跡の田面は、足跡状の凸凹が少し確認されたが耕作痕は確認されず、北側の水田跡に比べて平坦で、水田面を細分する畦畔も認められなかった。Ⅱ層とした同じ洪水による堆積層で覆われていることなどから、SL8 と同時期に存在していた可能性がある。水田面および水田面付近のⅡ層中より、陶磁器片と石器がわずかに出土している。

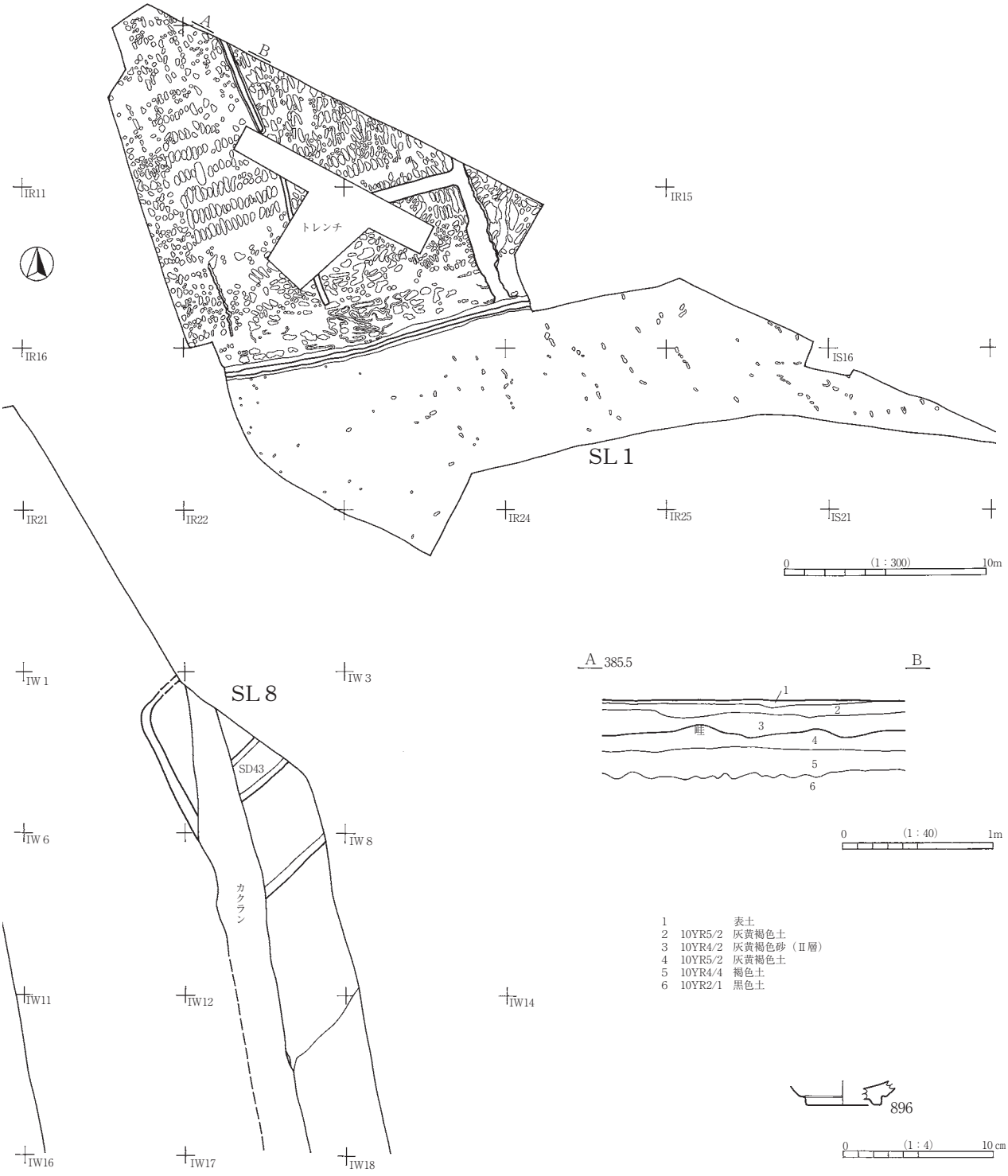
出土遺物（第 133 図 896　　PL1 － 896・897）

掲載した遺物は、896 は水田面の、897 はⅡ層中からの出土である。

896・897 は、江戸時代の陶器の碗である。

SL8　（第 127・133 図）　③区ⅠW1・2・7・8・12・13

洪水による堆積層であるⅡ層を、手作業で剝いで検出した。幅 30 ～ 60㎝程の畦畔を確認した。その規模などから、SL1 でもみつかった水田面を細分する畦畔と思われる。水田面はやや凸凹が認められるところがあるが、ほぼ平坦である。Ⅱ層とした同じ洪水による堆積層で覆われていることなどから、SL1 と同時期に存在していた可能性がある。水田面および水田面付近のⅡ層中より、陶磁器片と石器がわずかに出土している。



第 133 図　中世以降の個別図６

出土遺物（PL1 － 898）

掲載した遺物は、Ⅱ層中からの出土である。

898 は、江戸時代の陶器の碗である。

4　土坑

④～⑧・⑩～⑬区で検出された。⑤区からは墓跡が１基、④～⑥・⑨区では井戸跡かと思われる遺構が、５基確認された。確認された遺構は、遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したものが多く、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SK38（第 127・134 図）　⑧区ⅢY11・16

Ⅰ層を剝いで明瞭に検出した。平面形は円形を呈する。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は複層である。堆積状況などから人為的に埋め戻されたと思われる。その規模などから溜井、あるいは肥溜め等の可能性が考えられる。埋土中より土器片がわずかに出土している。

出土遺物（第 134 図 899　　PL49）

掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

899 は、内耳鍋の口縁部耳貼付け部分の破片である。

SK124（第 127・134 図　　PL48）　⑤区ⅡS16

Ⅶ層中で明瞭に検出した。遺構南側は検出面が遺構底面と同じ高さになってしまっているため、立ち上がりが確認できなかったが、平面形は楕円形に近い形状を呈すると推定される。断面形はＵ字状を呈し、底面は平坦である。埋土は単層である。底面より人骨（＊1）が出土している。人骨は残りが悪く、全体の様子は不明であるが、北西側に頭部が向くように埋葬されていたようである。顔の前にあたる部分から、副葬されたと思われる銭が出土している。埋土中より土器片がわずかに出土している。

出土遺物（第 134 図銭１　　PL43）

掲載した遺物は、床面からの出土である。

銭１は、３分の１ほどの破片で、銭種は不明である。

5　包含層出土遺物（第135 図 900 ～ 907、S263・S264、金属製品２・3、銭２～６、PL1・43・49）

包含層から出土した当概期の遺物を本項に掲載した。

900 は、古瀬戸のおろし皿である。901 は、陶器の山茶碗である。902 は、在地系のすり鉢である。903 は、珠洲の甕である。904・906・907 は、龍泉窯系の青磁碗である。905 は、陶器の蓋でほぼ完形である。玩具として使われていたものと思われる。

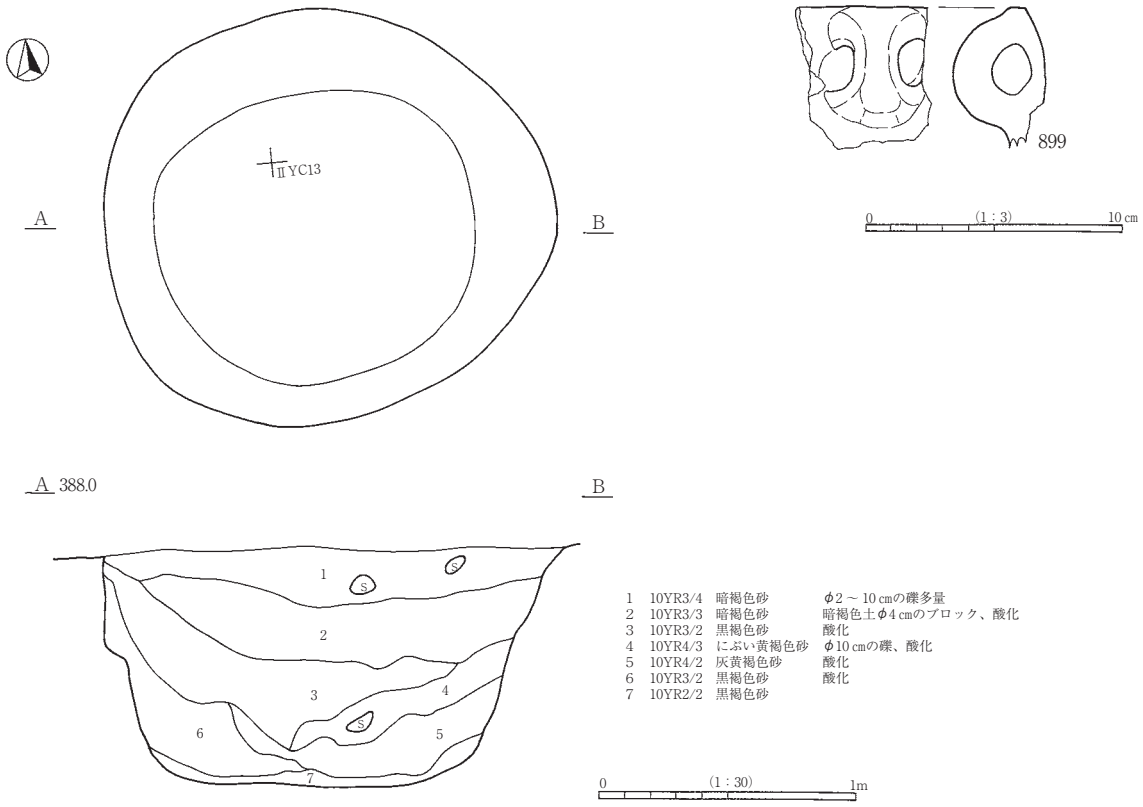
金属製品２は、釘の頭部破片である。金属製品３は、青銅製の飾金具かと思われる。小円孔が設けられている。

銭３は「永楽通寶」、銭４は「天聖元寶」、銭６は「紹聖元寶」で、その他の銭の銭種は不明である。

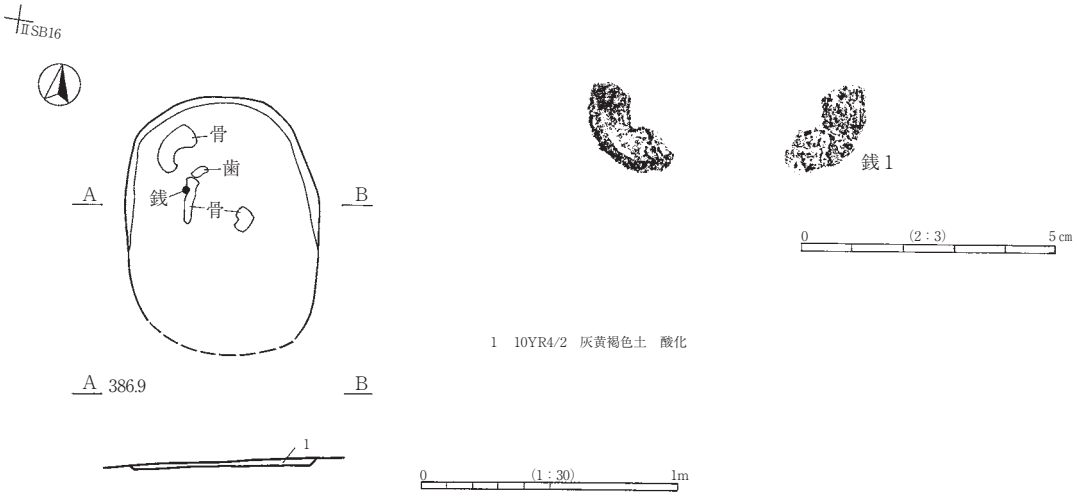
S263 は、細粒凝灰岩材の砥石である。S264 は、変質安山岩材の五輪塔である。

＊1　茂原信生氏のご教授による。「歯の細片が数十点である。いずれも歯種を判別できるほどには残っていない。一部に交合面が伺える破片もあるが、それらでは咬耗が顕著とは思えない。さほど高齢ではないだろう。」

SK38

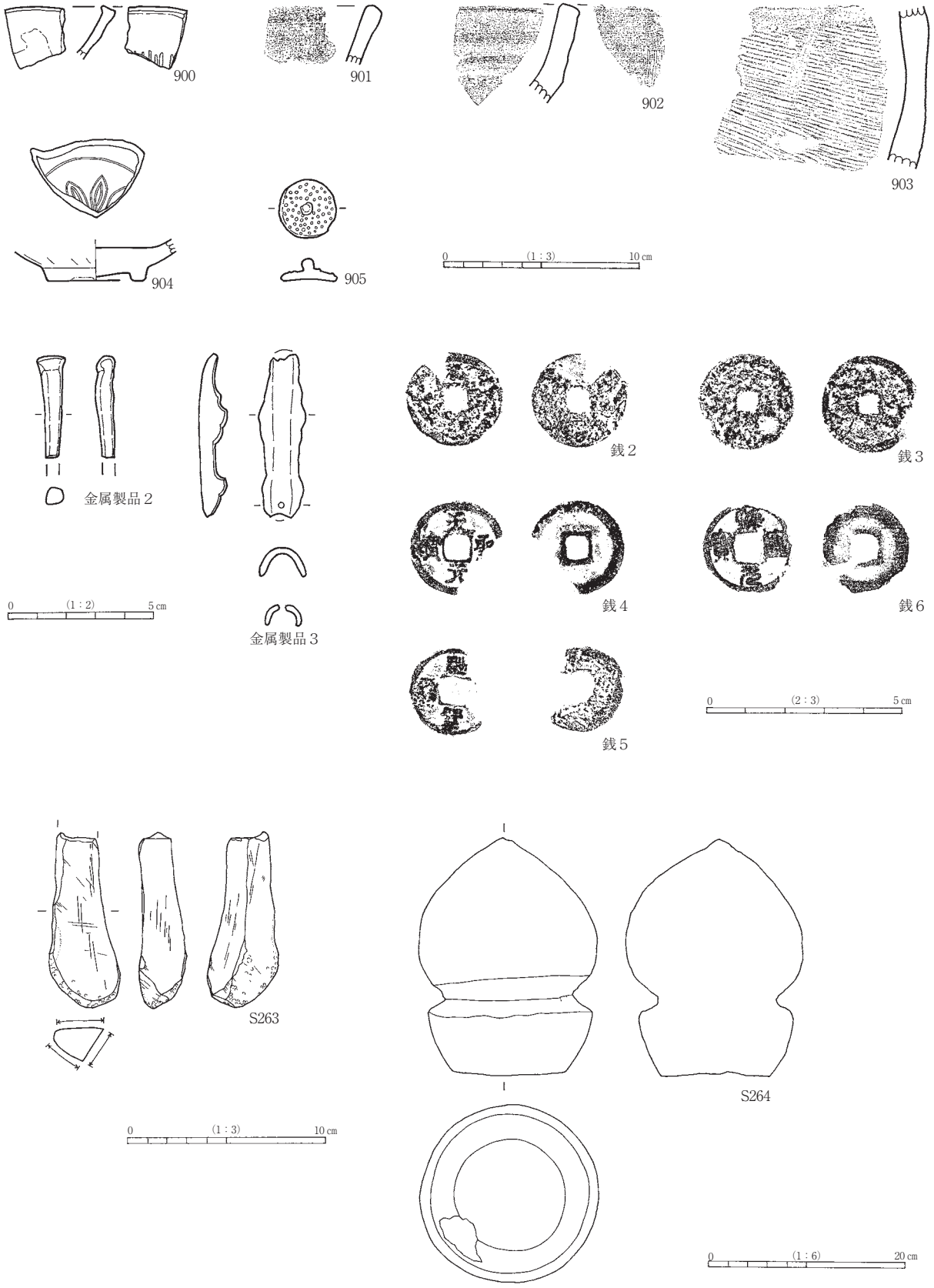


SK124



第 134 図　中世以降の個別図７

包含層



第 135 図　中世以降の遺物

第4章　まとめ

今回の発掘調査では、力石条里遺跡群の中央付近に、南北方向に20m幅のトレンチを入れるような調査が行われた。その結果、弥生時代前期末～近世にかけての遺構が確認された。注目すべきは、今まで確認されていなかった、弥生時代前期末～中期中葉の墓域を確認したこと、弥生時代後期の集落が広範囲にわたって確認されたことなど、弥生時代の千曲川中流域の様相が分かってきたことである。今後の千曲川中流域の弥生時代の研究をしていく上で貴重な資料を提供することができた。以下に、調査の成果を述べて、まとめとしたい。

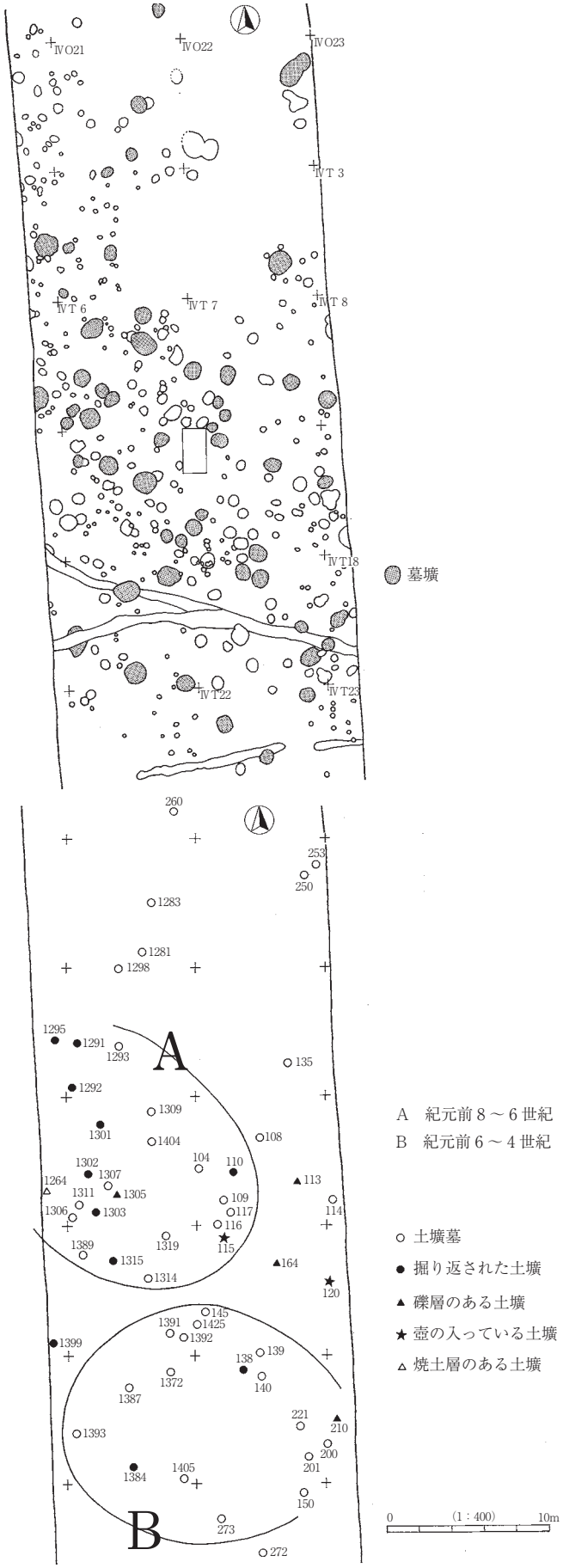
縄文時代　資料は、縄文時代後・晩期の土器片が7点と少なく、遺構も検出されなかった。昭和63～平成2年にかけての千曲市（旧上山田町）教委の調査でも同じような時期の土器が出土しており、その資料を補強することができた。

弥生時代前期末～中期中葉　⑩区とした山側の微高地にあたる地区から、該期の土坑が集中して検出され、その内の56基は、墓と思われる土壙である。人骨が出土した土壙は3基と少ないが、完形に近い壺の出土、玉や土偶など埋葬に関係する遺物が出土していること、また、埋土やその堆積状況などから墓であると判断した。

墓とした56基の土壙のほとんどは、土壙墓と思われるが、その中には再葬の過程であると思われる土壙が含まれる。SK1303など11基は、埋土の堆積状況から、掘り返された可能性があると考えられる土壙である。SK113など4基には、土壙内に礫層が確認されており、残余焼人骨の埋納など、何らかの遺体処理の儀礼が行われた土壙の可能性が考えられる。壺が出土した2基のうち、SK120は完形の壺が正位の状態で埋置されており、人骨の出土は認められなかったものの、埋土より種を特定することができないが焼骨の細片や、玉が出土しているので、選別した遺骸を壺に納め埋納した再葬墓であると判断した。壺が出土したもう一基のSK115は、壺の出土状態や被熱の状態などから、再葬の最終的な埋納土壙というよりは、骨の焼骨化が行われた土壙の可能性が考えられる。また、SK1264の中層からも、被熱した層が確認されており、骨の焼骨化が行われた土壙と思われる。

土壙墓の時期は、出土土器から前期末～中期中葉に相当する。ほとんどの土壙からは、前期末の土器と中期中葉の土器が混在してみつかっていて、土器の様相から土壙の時期を推考することは困難であった。しかし、土壙から出土した炭化米などで放射性炭素年代測定を行ったところ、測定結果はおよそA－紀元前8～6世紀と、B－紀元前6～4世紀の二つのグループに分かれた。測定された年代は、現在弥生時代の始まりとされる年代よりも大幅に古くなっており、この数値をそのまま遺構の年代とすることはできない。しかし、相対的に考えて2時期に分かれることは間違いないだろう。このことは、出土した土器の様相が、前期末と中期中葉に集中し、中期前葉の土器が少ないといったことにもつながるのかもしれない。また、中期前葉の土器も少量ではあるが出土しているということは、調査区外に中期前葉に相当する墓域が展開している可能性も考えられる。

年代測定では、土壙がA（古）・B（新）の2グループに分かれたが、SK115のように本遺跡出土の土器では古い様相である前期末の壺が埋置されている土壙が、新しいグループに属する結果になった。土器の編年とは反する結果となった理由として考えられることは、前期末の壺を使って埋葬が行われたあと、ある程度の時期がたってから掘り返され、再度遺骸の焼骨化の時に利用された。または、土器の様相が変



A　紀元前８～６世紀
B　紀元前６～４世紀

○ 土壙墓
● 掘り返された土壙
▲ 礫層のある土壙
★ 壺の入っている土壙
△ 焼土層のある土壙

第136図　弥生時代前期～中期中葉の墓壙

第３表　土壙一覧

No.	層	遺物	骨	炭化物	^{14}C	洗
104	単		—	—	×	×
108	単		—	—	×	×
109	複		—	—	×	×
110	複	土偶	不明歯	○	×	○
113	単（礫）		不明歯	○	×	○
114	複		シカ歯 不明焼骨	○	×	○
115	単	壺・垂飾り	不明焼骨	○（コメ・クルミ）	○	○
116	複		—	—	×	×
117	単		—	—	×	×
120	複	壺・玉	不明焼骨	○	×	○
135	複		—	○	×	○
138	複		不明焼骨	○（コメ）	○	○
139	複		不明焼骨	○（クルミ）	×	○
140	単		不明焼骨	○	×	○
145	単		—	○（クルミ）	×	○
150	単		不明焼骨	○	×	○
164	複（礫）	ミニチュア	不明焼骨	○	×	○
165	複		—	○	×	○
200	複		—	○	×	○
201	単		不明焼骨	○（クルミ）	×	○
210	単（礫）		不明焼骨	○（コメ・クルミ）	○	○
221	複		—	—	×	×
250	単	加工円盤	不明焼骨	○	×	○
253	単		—	○	×	○
260	単	—	—	—	×	×
272	複		—	—	×	×
273	複		—	—	×	×
1264	複	ミニチュア	不明焼骨	○（クルミ）	×	○
1281	単		不明歯	○（クルミ）	×	○
1283	複		シカ歯	○	×	○
1291	複		—	○	×	○
1292	複		—	○（コメ）	○	○
1293	複		不明焼骨	○（コメ・クルミ）	○	○
1295	複	赤色顔料	不明焼骨	○（クルミ）	×	○
1301	複		不明焼骨	○（コメ・クルミ）	—	○
1302	複	赤色顔料	不明焼歯	○（クルミ･サクラ）	○	○
1303	複	垂飾り・赤色顔料	ヒト焼歯	○（コメ・クルミ）	○	○
1305	複（礫）	骨角器	ヒト焼骨・歯	—	○	○
1306	複		イノシシ歯	○（クルミ）	×	○
1307	単	玉・ミニチュア	不明焼骨	○（クルミ）	×	○
1309	複	匙・小形土器	不明歯	○（クルミ）	○	○
1311	単	赤色顔料	—	○（クルミ）	×	○
1314	複		不明焼骨 イノシシ歯	○（クルミ）	×	○
1315	複	赤色顔料	—	○（クルミ）	×	○
1319	複		—	○（クルミ）	×	○
1372	複	赤色顔料	不明焼骨 不明歯	○（クルミ）	×	○
1384	複	土偶・ミニチュア	シカ歯 イノシシ歯	○（コナラ）	×	○
1387	複		不明歯	○（コメ・クルミ）	○	○
1389	単		ヒト歯	—	×	×
1391	複		不明焼骨	○（クルミ）	×	○
1392	複	垂飾り・赤色顔料	不明歯	○（クルミ）	×	○
1393	複		—	○（コメ・クルミ）	○	○
1399	複	赤色顔料	不明歯	○（クルミ）	×	○
1404	複	玉・赤色顔料	不明歯	○（クルミ）	×	○
1405	複	赤色顔料	不明焼骨	○（コメ・クルミ）	○	○
1425	複		—	—	×	×

註）遺物は土器・石器以外の出土遺物。炭化物は種別の分かるものは（　）内に記入した。^{14}C は炭素年代測定、洗は埋土の洗浄の実施状況。

化するようなかなり長い期間、大切に使われ続けてきた壺が、その役目を終えて葬送の道具として利用されたものであろうか。このように、再葬という葬制の性格上、複数回にわたって儀礼が行われるので、ある程度の遺物の混在は避けられないと思われるが、土壙の時期を考える上では、土器の編年だけでなく年代測定などの自然科学的な分析など多方面からの見解を総合して推考することが必要であろう。

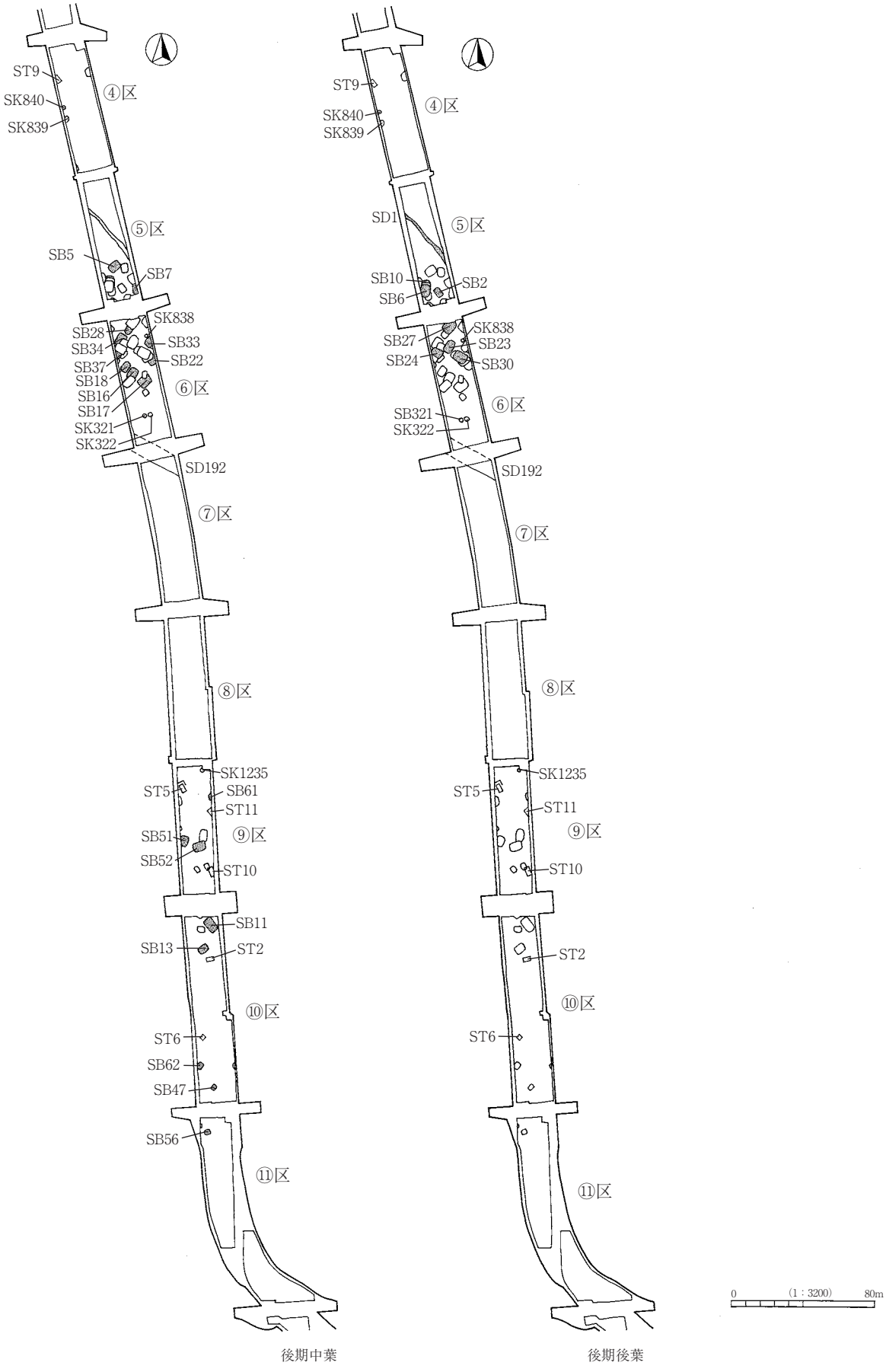
墓域の遺物包含層からは、土器や土製品・石器・剝片などの遺物が多量にみつかっている。出土した土器は、前期末～中期中葉の土器で、氷Ⅱ式をはじめとする在地の土器が主である。この時期の文様の様相は、櫛描文系・条痕文系・沈線文系などの様相が混在するという状況で、本遺跡もその例外ではない。また、出土土器の中には東海地方の水神平式の土器や、遠賀川系土器の破片も出土していて、弥生時代の始まりのころの人々の交流の様子が窺える貴重な資料となった。筆者の力不足のため、詳細な分析をすることはできなかったが、今後の調査研究のために、できるだけ多くの資料を掲載することに務めた。

弥生時代中期後葉　調査地が居住区として最初に利用されるのは、中期後葉の栗林式期に入ってからである。住居跡は⑥区で５軒が確認されただけであるが、千曲市（旧上山田町）教委による薬師堂遺跡の調査でも、⑥区の東側にあたる地区から同時期の住居跡が検出されている。このことから、調査区を東西に横切るように伸びている微高地上に、広く栗林式期の集落跡が展開していたことがはっきりした。さらに、居住区の南側にあたる後背湿地からは、同じような方向に配置された溝跡が多数確認されており、水田跡の可能性が考えられ、この集落を支える生産域が広がっていたと思われる。該期の遺構は残りが悪く、遺物も量的には少なく詳細ははっきりしないが、栗林Ⅱ式に相当する時期と思われる。

弥生時代後期　次に調査地に居住区が確認されるのは後期の箱清水期で、竪穴住居跡 56 軒、掘立柱建物跡６棟、井戸跡６基などが検出されている。集落から出土した土器の特徴より、後期中葉から後葉にかけての集落跡と思われる。後期中葉の集落跡は、大きく分けて④～⑥区と、⑨～⑪区の２地区に分かれ、それぞれに井戸跡や倉庫となる掘立柱建物跡をもつ小規模な集落が点在する形態をとる。千曲市（旧上山田町）教委による薬師堂遺跡の調査でみつかった住居跡も、この時期に相当すると思われる。後期後葉になると調査地北寄りの微高地にあたる⑤・⑥区に竪穴住居跡が集中し、比較的大きな集落に発展する。そして、それまで居住区であった南側の地区はその集落を支える水田耕作等を行う生産域へと移行していったと推考される。

集落から出土した土器は後期中葉から後葉にかけての箱清水式の土器である。その文様の様相は、長野盆地の特徴をもつものがほとんどであるが、上田盆地の地域色のひとつである、頸部に T 字文が施される甕なども出土しており、本遺跡が二つの盆地を結ぶ、いわゆる「坂城広谷」に位置するという地理的な特徴を反映していると思われる。また、北陸地方の法仏式土器の影響を受けた土器や、北関東の樽式に相当する土器などもみつかっていて、該期の交流の様子が窺われる資料となった。

古墳時代～古代　調査地からは多数の溝跡がみつかっただけで、集落跡はみつかっていない。しかし、千曲市（旧上山田町）教委による薬師堂遺跡の調査では、⑤・⑥区東側にあたる地区から、古墳時代の竪穴住居跡が確認されている。また、遺跡が展開する微高地や後背湿地より一段高い段丘面には、御屋敷遺跡で古墳時代の、坂城町上五明条里水田址で古墳時代と平安時代の集落跡が確認されている。このことから、該期には居住域が周辺地区に移行し、調査地はその集落を支える生産域となったことが推測される。この時期の遺物は少量で、古墳時代前期５世紀ごろの土器と、平安時代の土器が少量確認されたのみである。



第 137 図　弥生時代後期の遺構分布図

中世以降　調査地からは④・⑧・⑩・⑪・⑬区で掘立柱建物跡・井戸跡・土壙墓などが確認されているが、ほとんどの地区では、現代まで連続して水田耕作が行われていたと思われる。後世の耕作などにより、該期の遺構の残りは悪く遺物の出土も少ないが、千曲市（旧上山田町）教委の調査では、石組の井戸なども確認されており、今回の調査地よりは、東側の現在の力石集落側に居住区が展開していたのではないかと思われる。この時期の遺物としては、13 世紀ごろの陶磁器や、江戸時代後期の陶磁器がわずかに出土している。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご指導くださった皆様、数多くのご教示をいただいた皆様、発掘作業・整理作業に参加していただいた皆様に深く感謝申し上げます。

本書が多くの方々にご活用いただくことを念頭して、まとめとしたい。

引用・参考文献

愛知考古学談話会　1988 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題―縄文から弥生―』資料編Ⅱ・研究編

明科町教育委員会　1991 「ほうろく屋敷遺跡―川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―」『明科町の埋蔵文化財』第 3 集

赤塚次郎　2002 「弥生・古墳時代　土器Ⅱ」『考古資料大観』第 2 巻

石川日出志　2004 「再葬墓研究の現在と今後の課題」『考古学ジャーナル』524 号

石川日出志　2009 「中野市柳沢遺跡・青銅器埋納坑調査の意義」『信濃』第 61 巻 第 4 号

井上春雄ほか　1968『更級埴科地方誌』第 1 巻　更級埴科地方誌刊行会

上田市教育委員会　2009 「中の沢遺跡・半過古墳群」『上田市文化財調査報告書第 105 集』

金関　恕・佐原　眞　1987 「弥生土器Ⅱ」『弥生文化の研究』第 4 巻

上山田町教育委員会　1990 『力石条里遺構』

上山田町教育委員会　1991 『薬師堂遺跡』

上山田町教育委員会　2002 『御屋敷遺跡』

黒沢　浩　2009 「中部高地の方形周溝墓以前」『中部の弥生時代研究』

更埴市教育委員会　2003 『屋代清水遺跡Ⅱ―科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査報告書―』

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　1991「麻生田大橋遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 21 集

（財）長野県史刊行会　1988 『長野県史　考古資料編』全 1 巻 (4) 遺構・遺物

（財）長野県埋蔵文化財センター　1997 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 16　－長野市内その 4 －　篠ノ井遺跡群　成果と課題編」『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22

坂城町教育委員会　2007 「南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第 30 集』

塩野入忠雄　1991 「第 1 章 地形」『戸倉町誌』第 1 巻　戸倉町誌編纂委員会

設楽博巳　1993 「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集

設楽博巳　2004「弥生再葬墓における縄文文化の伝統」『考古学ジャーナル』524 号

品川欣也　2004「弥生再葬墓と同時代遺物集中区」『考古学ジャーナル』524 号

武末純一・石川日出志　2003 「弥生・古墳時代　土器Ⅰ」『考古資料大観』第 1 巻

千曲市教育委員会　2008 「長野県千曲市遺跡分布図」

豊川市教育委員会　1998 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』

永井久美男　1996 『日本出土銭総覧』1996 年版　兵庫埋蔵銭調査会

長野県農政部農村整備課　1989 『土地分類基本調査　坂城』

長野県埋蔵文化財センター　1998 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５－長野市内　その３－　松原遺跡　弥生・総論６　弥生後期・古墳前期」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』36

長野県埋蔵文化財センター　2002 「緊急地方道路整備Ａ（一）上室賀坂城（停）線埋蔵文化財発掘調査報告書　坂城町内　上五明条里水田址」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57

長野市教育委員会　1986 「塩崎遺跡群Ⅳ―市道松節－小田井神社地点遺跡―」『長野市の埋蔵文化財』第 18 集

春成秀爾　1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集

藤岡市教育委員会文化財課　1986 『C11　沖Ⅱ遺跡』

本間不二男　1931 『信濃中部地質誌』信濃教育会小県上田部会

松本市教育委員会　1987 「松本市　赤木山遺跡群Ⅱ」『松本市文化財調査報告』№ 47

松本市教育委員会　1998 「長野県松本市　境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ―緊急発掘調査報告書―」『松本市文化財調査報告』№ 130

三河考古学談話会　2003 『～条痕文系土器の原体をめぐって～』第１回三河考古学談話会研究集会資料集

宮下健司　2001 「流域の遺跡」『千曲川の今昔』国土交通省北陸地方整備局千曲川工事事務所

森嶋稔・米山一政ほか　1978 『更級埴科地方誌』第２巻　更級埴科地方誌刊行会

森嶋稔ほか　1999 『戸倉町誌』第２巻上　戸倉町誌編纂委員会

森嶋稔・米山一政ほか　1981 『坂城町誌』中巻　坂城町誌刊行会

写　真　図　版

弥生時代の
石器・玉類

SK120　S12
SK1404　S46
SK1307　S35
⑩区Ⅳ022　S108
SB19　S154
SB25　S178
⑥区ⅢD2　S260
⑤区ⅡS12　S250

SB33　S201 ～ 206

⑩区ⅣY3　S265
⑩区ⅣT17　S266
⑥区　S267
SK839　S237
SB6　S136
SB34　S217・218

中近世の陶磁器類

SL1　896・897
SL8　898
⑬区　904・906・907
⑧区　900
表採　905

PL 2　弥生時代前期末～中期中葉の遺構

SK1301　検出

SK1301　土層断面

SK1303　検出

SK1303　土層断面

SK1305・1307　検出

SK1305　土層断面

SK1307　土層断面

SK1404　土層断面

弥生時代前期末～中期中葉の墓壙群（H14 年度）

弥生時代前期末～中期中葉面　遺物出土状況

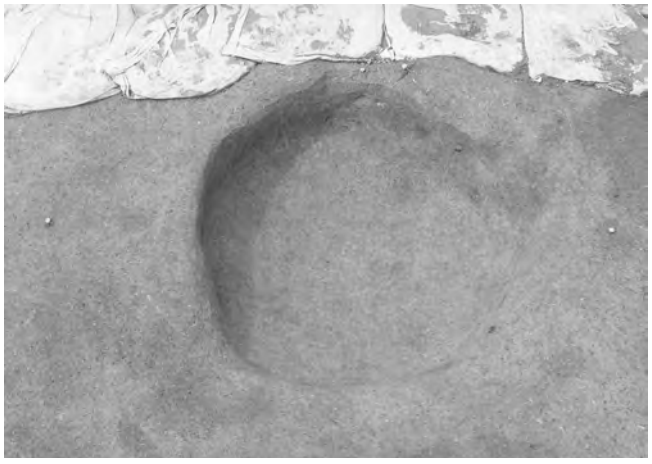
弥生時代前期末～中期中葉の墓壙群（H16 年度）

SX16　遺物出土状況

SK114

SK115　遺物出土状況

SK115　20、S８出土状況


SK115

PL 4　弥生時代前期末～中期中葉の遺構

SK120　半截

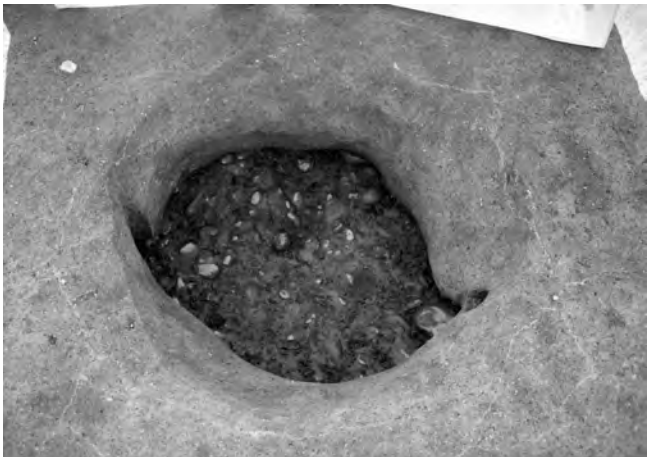
SK120　23出土状況

SK120

SK164　礫出土状況

SK164

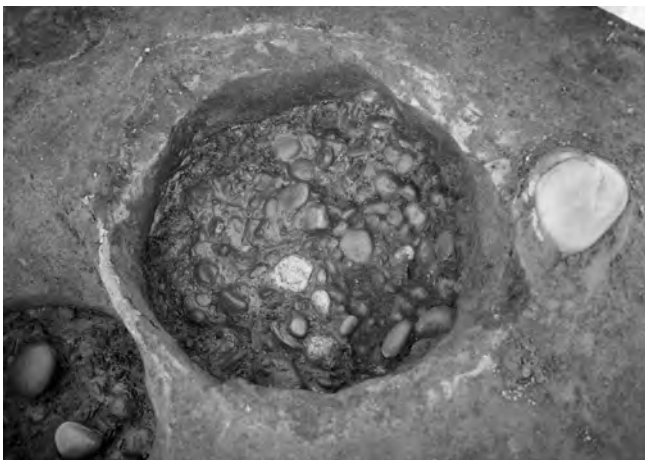
SK1301



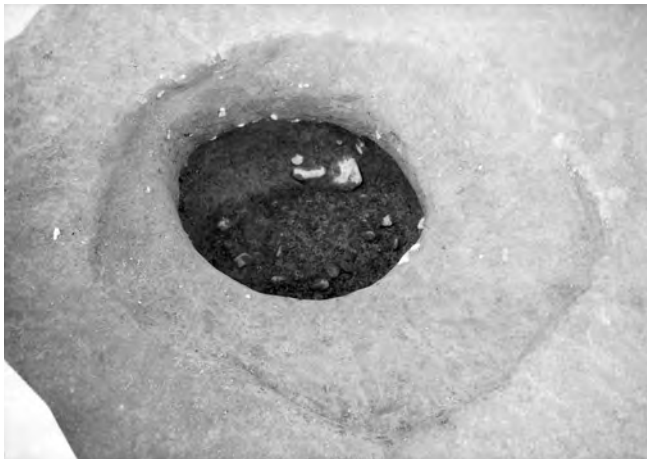
SK1302

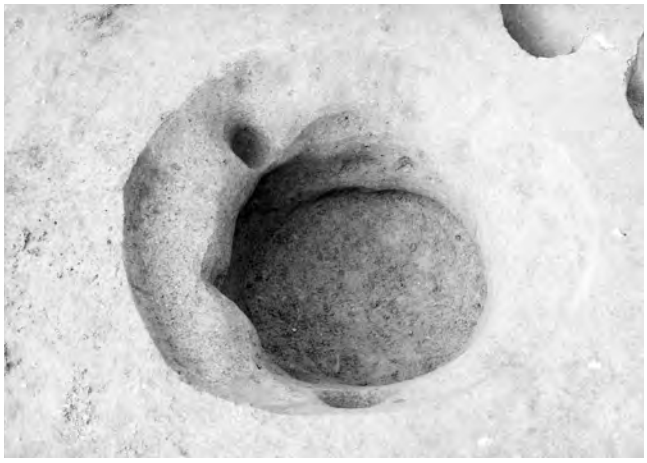
SK1303

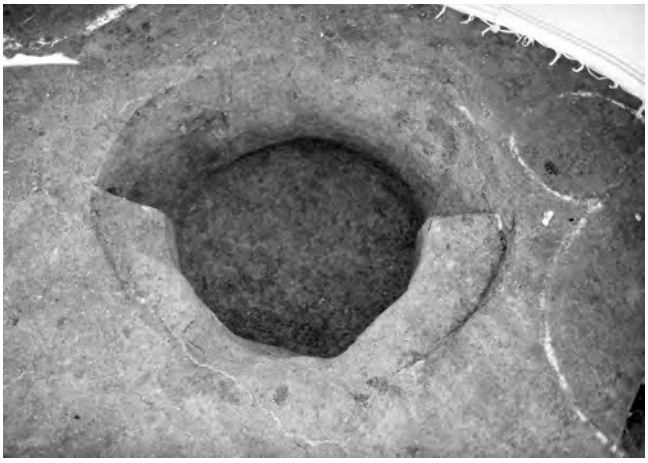
SK1305


SK1307

SK1314　礫出土状況


SK1314


SK1384


SK1392

SK1404　礫出土状況

SK1404

PL 6　縄文時代・弥生時代前期末～中期中葉の土器

縄文時代の土器
1～7

弥生時代前期末～
中期中葉の土器
SD23　8～13
SD45　14
SK113　16～18
SK114　19
SK117　21

SK115　20
SK118　22

SK138　24～30

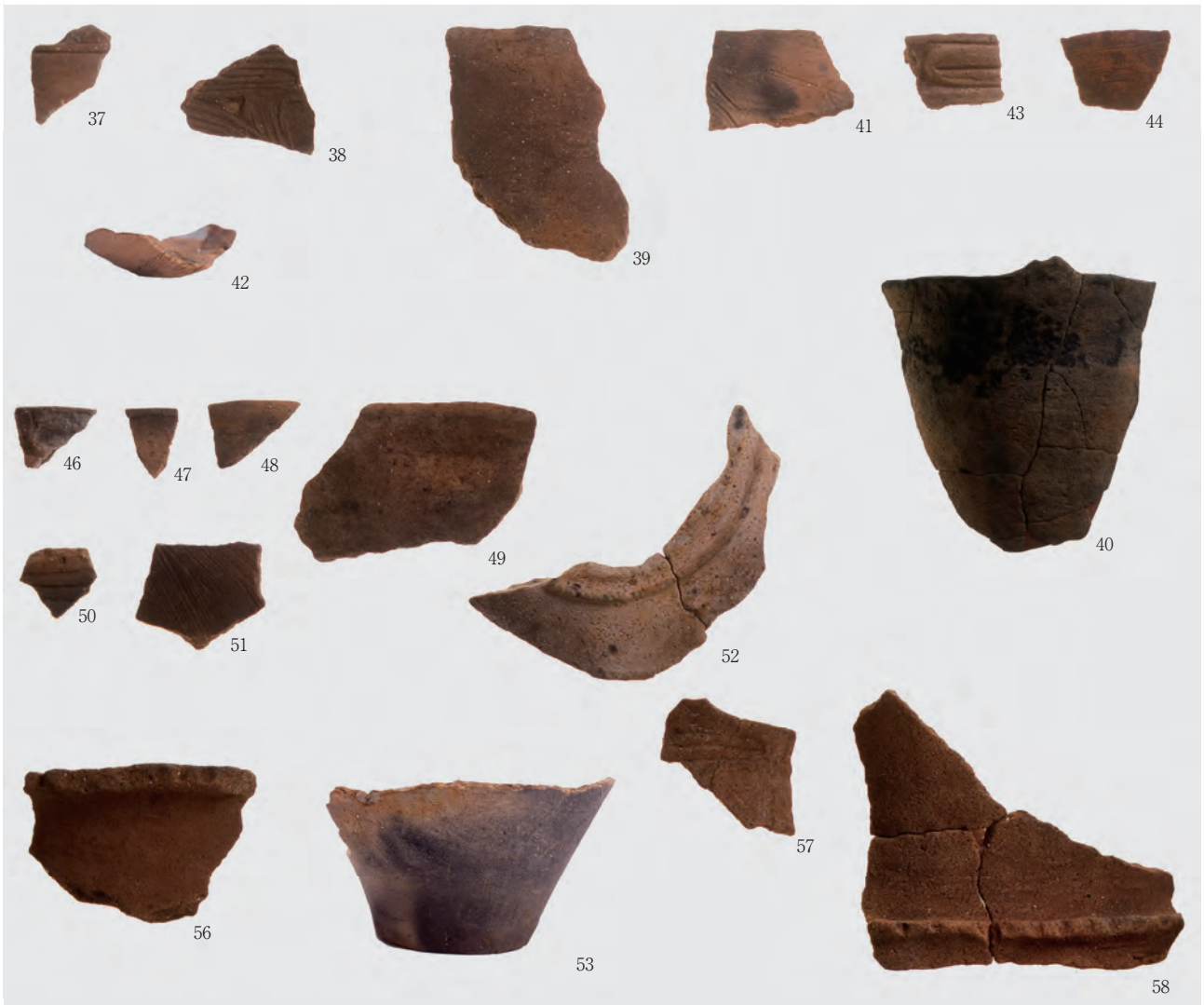
PL 7　弥生時代前期末～中期中葉の土器

SK120　23
SK139　32～36

23

32
33
35
34
36

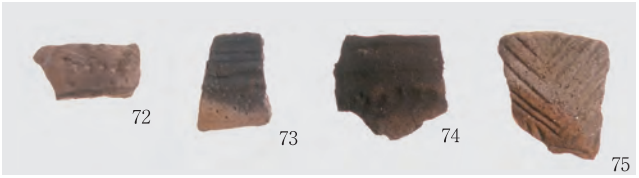
SK145　37
SK146　38・39
SK148　40
SK164　41
SK221　42
SK250　43
SK253　44
SK1264　46～53
SK1275　56
SK1282　57・58


37
38
39
41
43
44
42
40
46
47
48
49
50
51
52
57
56
53
58

PL 8　弥生時代前期末～中期中葉の土器

SK1283　59 ～ 61
SK1301　62・63
SK1302　64
SK1306　65
SK1307　66 ～ 68
SK1313　71

SK1309　69
SK1315　77 ～ 82



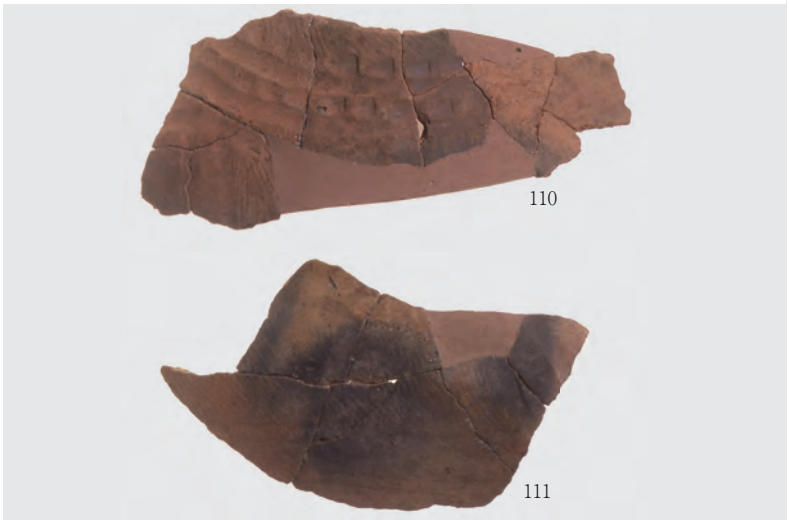
SK1314　72 ～ 76
SK1372　83 ～ 86

SK1384　87
SK1387　89
SK1391　90
SK1393　91

PL 9　弥生時代前期末～中期中葉の土器

SK1399　92
SK1404　93
SK1405　94 ～ 98
SK1425　99

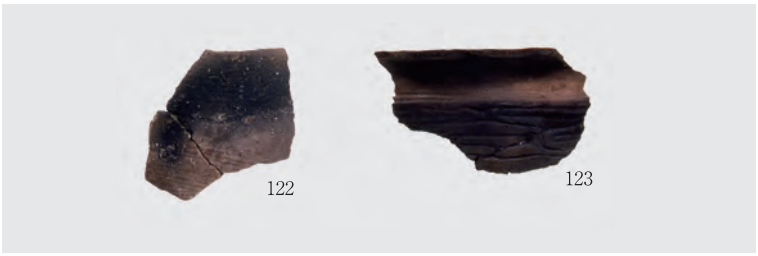
SX2　100
SX3　101 ～ 108
SX16　109 ～ 112



PL10　弥生時代前期末～中期中葉の土器

SX16　113 ～ 121

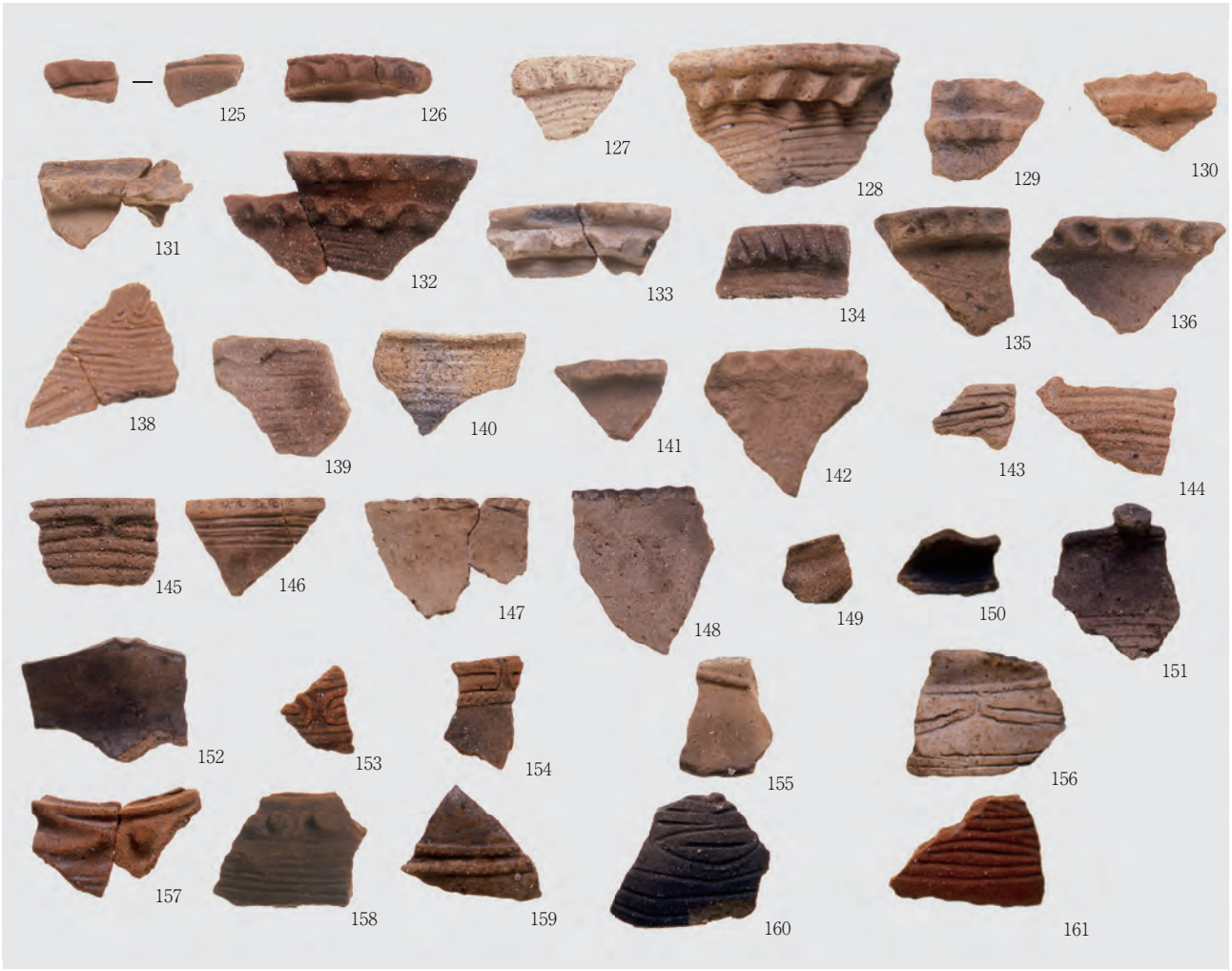
SX23・24　122
SH3　123・124



包含層ほか

PL11　弥生時代前期末～中期中葉の土器

包含層ほか



PL12　弥生時代前期末～中期中葉の土器

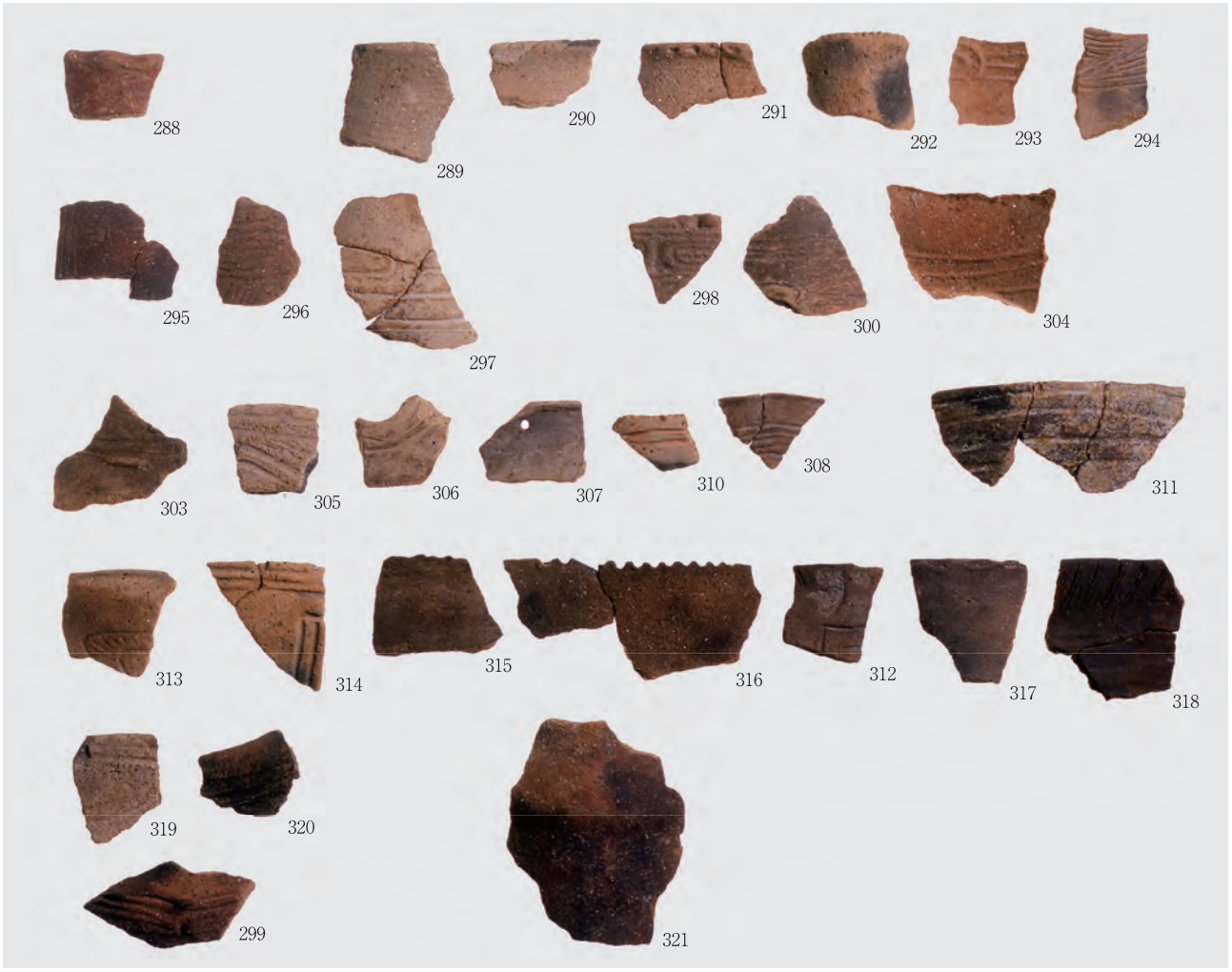
包含層ほか

PL13　弥生時代前期末～中期中葉の土器

包含層ほか

PL14　弥生時代前期末～中期中葉の土器

包含層ほか



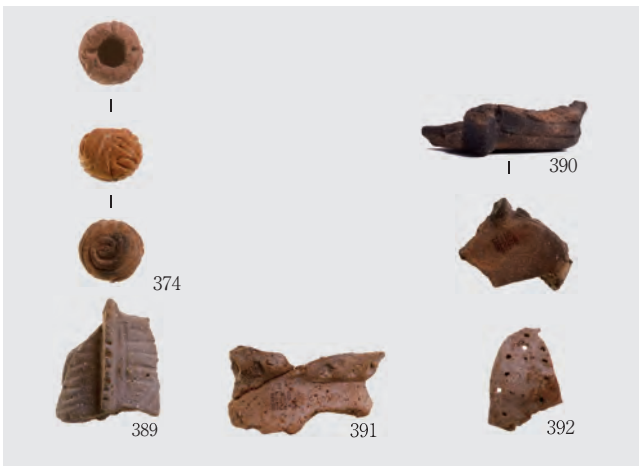
PL15　弥生時代前期末～中期中葉の土器

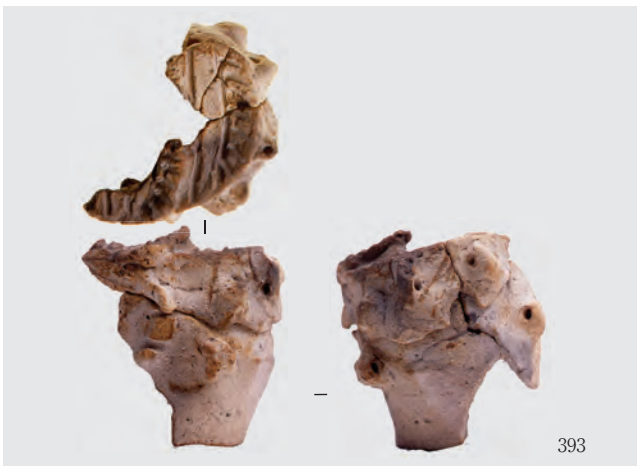
包含層ほか

PL16　弥生時代前期末～中期中葉の土製品

SK110　15
SK250　45
SK1264　54・55
SK1309　70
SK1384　88

包含層ほか





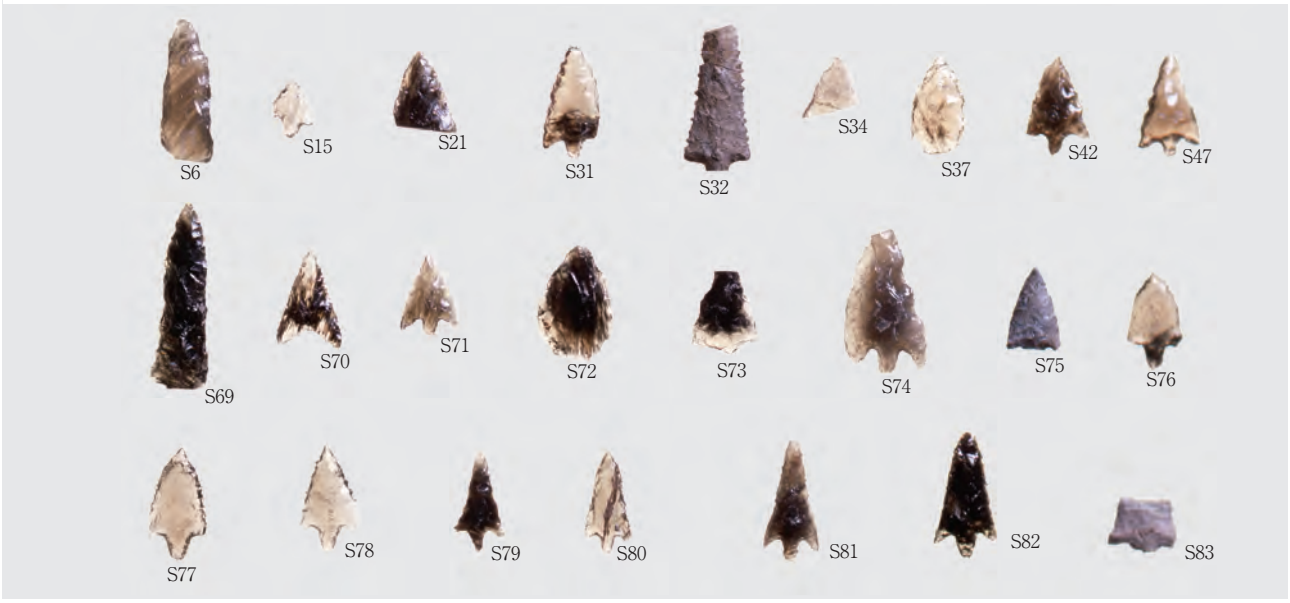
PL17　弥生時代前期末～中期中葉の石器

刃器　S1・S4
　　S14・S43
　　S44
剝片　S7・S9
　　S10・S18
　　S19・S22
　　S24・S25
　　S36・41
楔形石器
　　S39

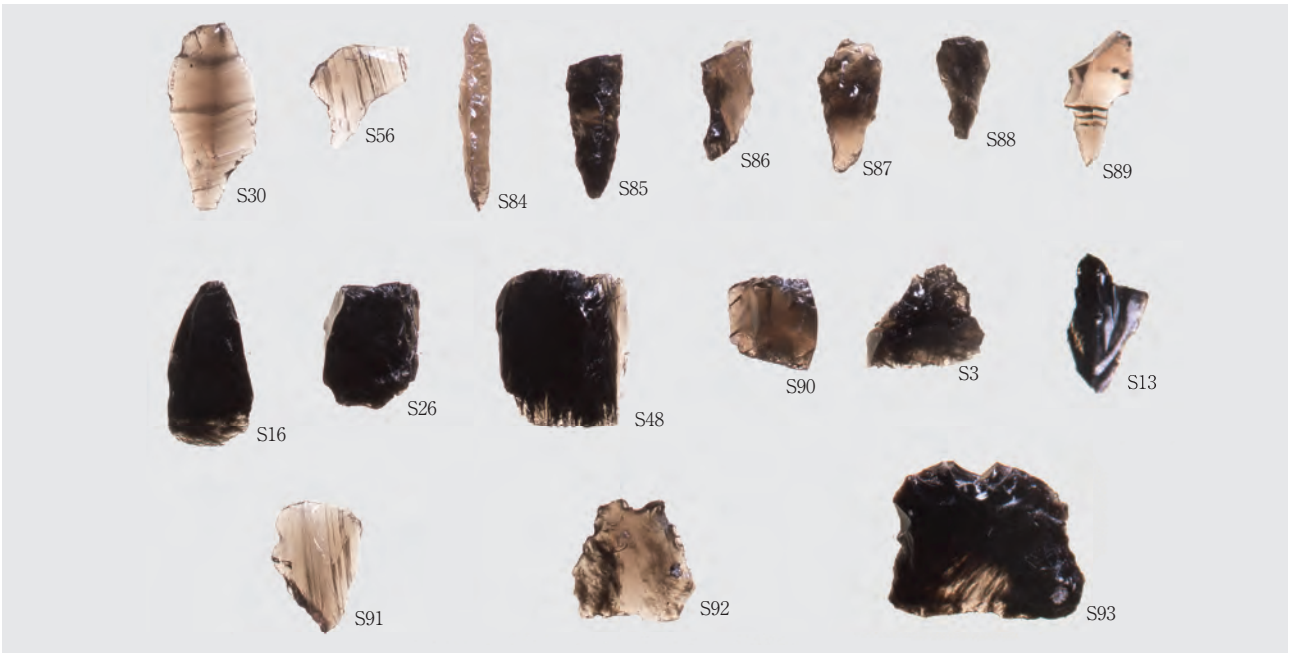
石鏃　S20・S23
　　S27・S40
　　S52・S54
　　S58～S62
刃器　S63

PL18　弥生時代前期末～中期中葉の石器

刃器　S29・S51・S53
　　S55・S57・S65～
　　S68・S95
剝片　S45・S50
楔形石器　S94



石鏃　S15・S21・S31
　　S32・S34・S37
　　S42・S47・S69～83
石錐　S6



刃器　S30
石屑　S56
石錐　S84～S89
楔形石器
　　S16・S26・
　　S48・S90
剝片　S3・S91～93
砕片　S13

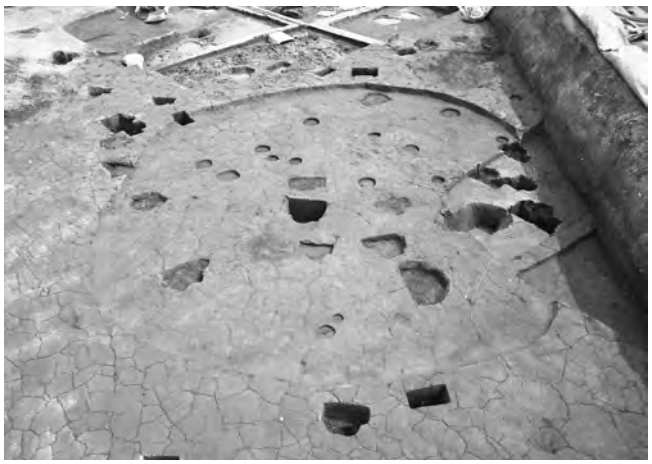
PL19　弥生時代前期末～中期中葉の石器・石製品・骨

磨製石斧
　S2・S17・S49
　S96～S104
刃器　S64

原石　S106
磨製石器　S107
環状石器
　S109・S110
石製品
　S8・S33
凹石　S5・S11
　S28・S38
　S105

SK1305 出土の
　骨角器・焼人骨

PL20　弥生時代中期後葉・弥生時代後期の遺構



SB42

SB60　炭化材出土状況

⑧区弥生時代中期後葉面全景

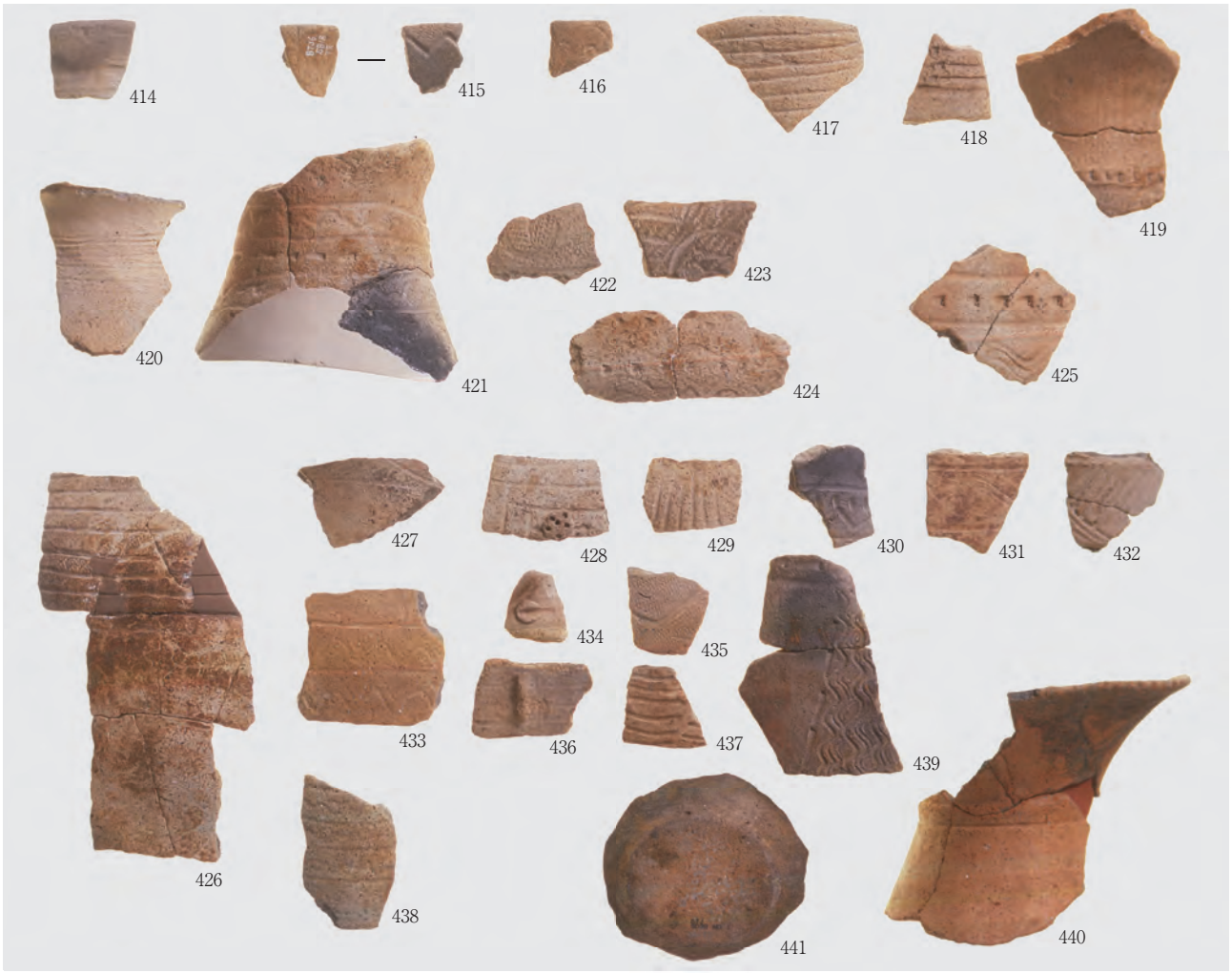
SK532　土層断面（413）

⑥区弥生時代後期面全景

PL21　弥生時代中期後葉の土器

SB40　398 ～ 401
SB42　403 ～ 411
SB60　412
SK532　413

包含層ほか

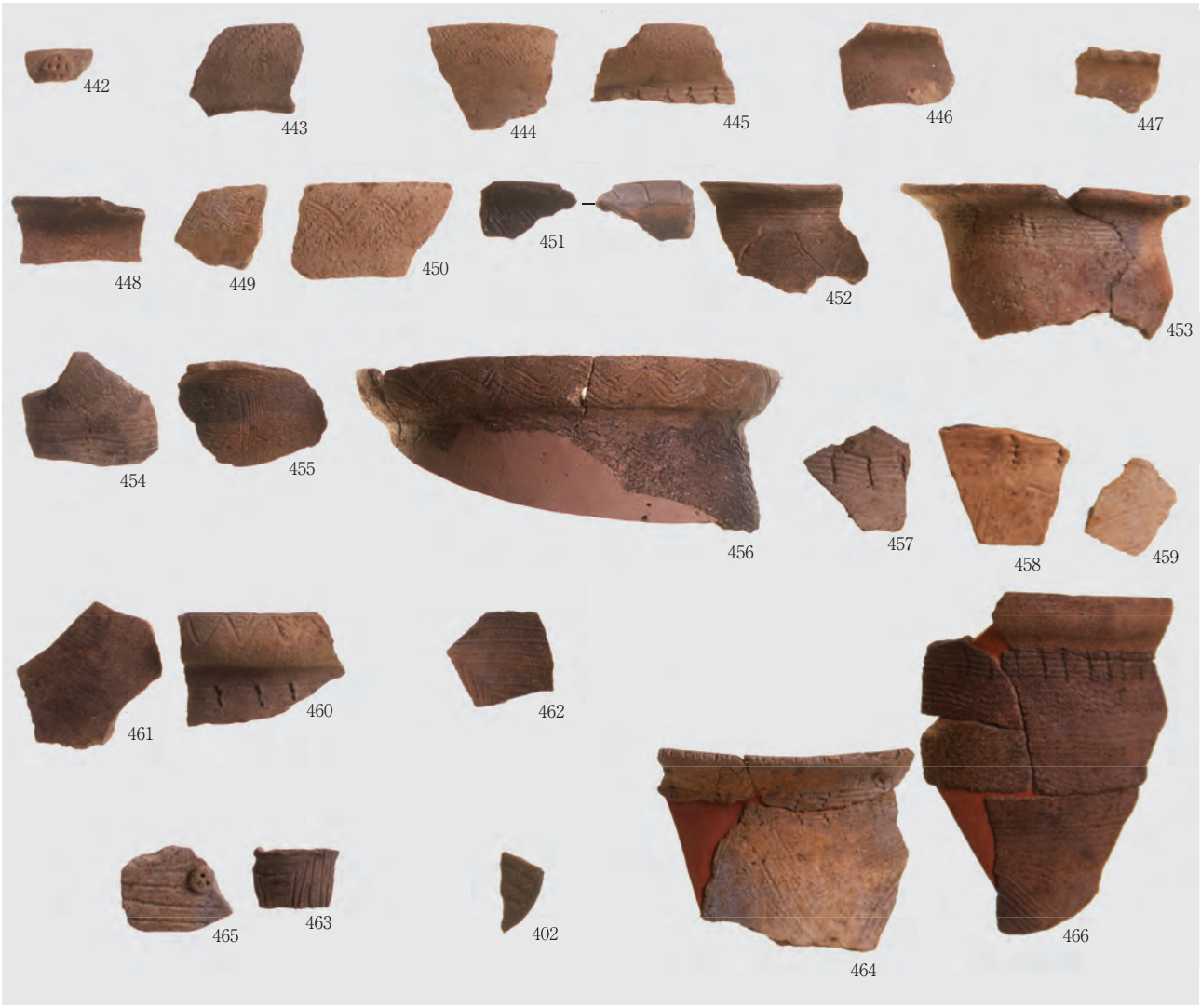


PL22　弥生時代中期後葉の遺物

土器
包含層ほか

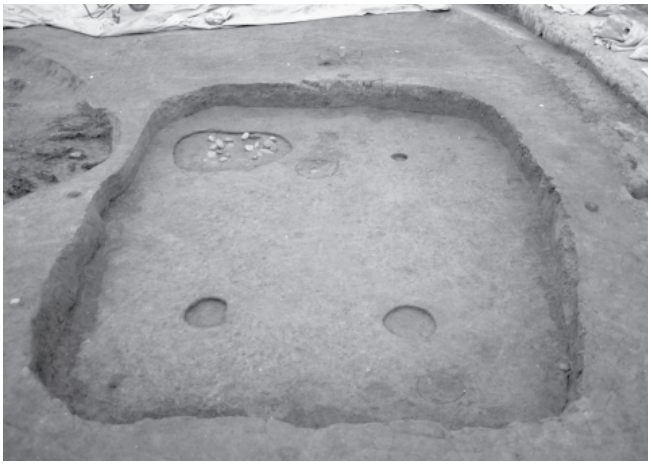
土製品
SB40　402

石器

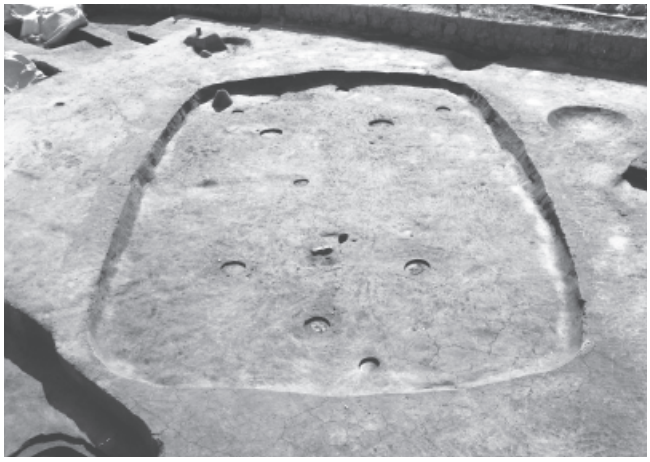


⑤区　弥生時代後期面　全景

SB 2


SB 3

SB 5　炭化材出土状況


SB 5

SB5　505 出土状況

SB11

SB15

SB17

SB17　炉

SB18

SB18　590 出土状況

SB19

SB19　S159 ～ 161 出土状況

SB23

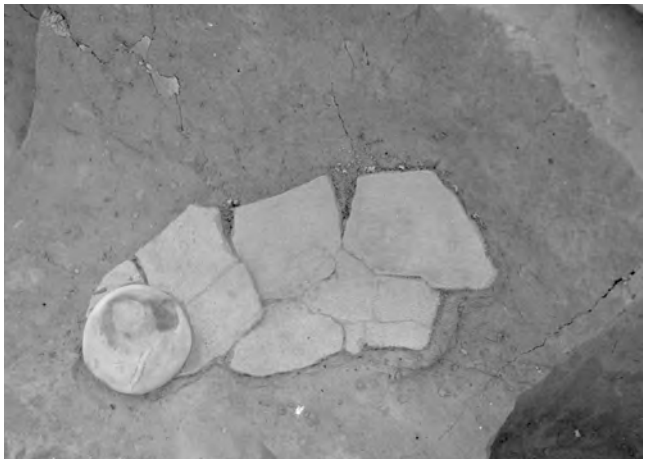
SB24

SB27

SB27　炉

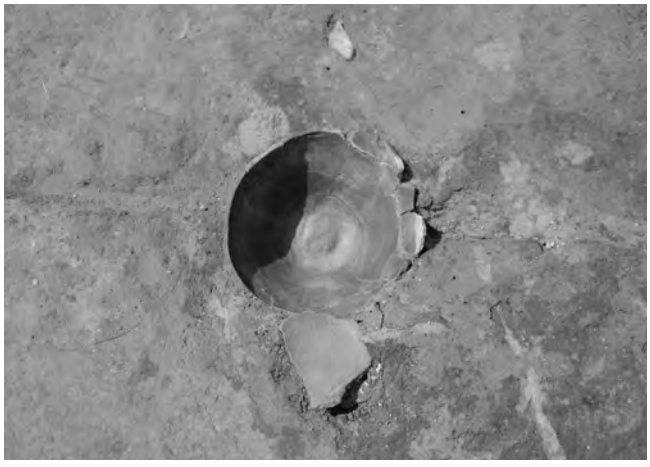
SB28

SB28　699 出土状況


SB28　696 出土状況

SB30

SB35　炭化材出土状況


SB30　炉

SB37　769 出土状況

SB37　771 出土状況

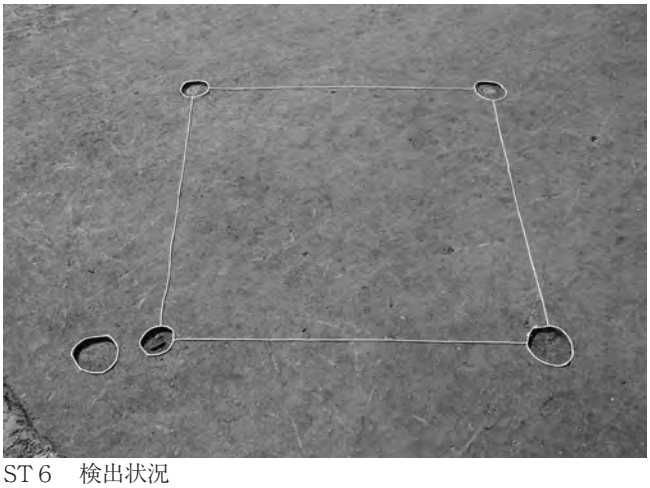
SB51

SB52

SB56　炭化材出土状況

SB62

ST 5


ST 6　検出状況

SK321

SK321　枠材出土状況

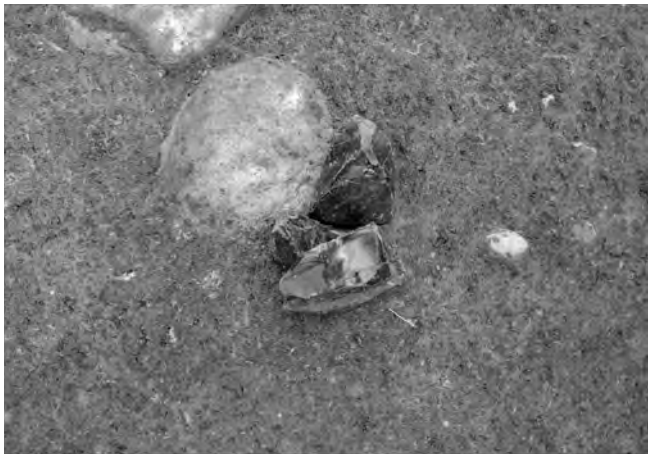
SK838　枠材出土状況

SK878　遺物出土状況

SD1　遺物出土状況

SD 1　遺物出土状況

SD24


S247 ～ 249 出土状況

PL28　弥生時代後期の土器

SB 1　467 ～ 475
SB 2　481 ～ 489
　　492

468

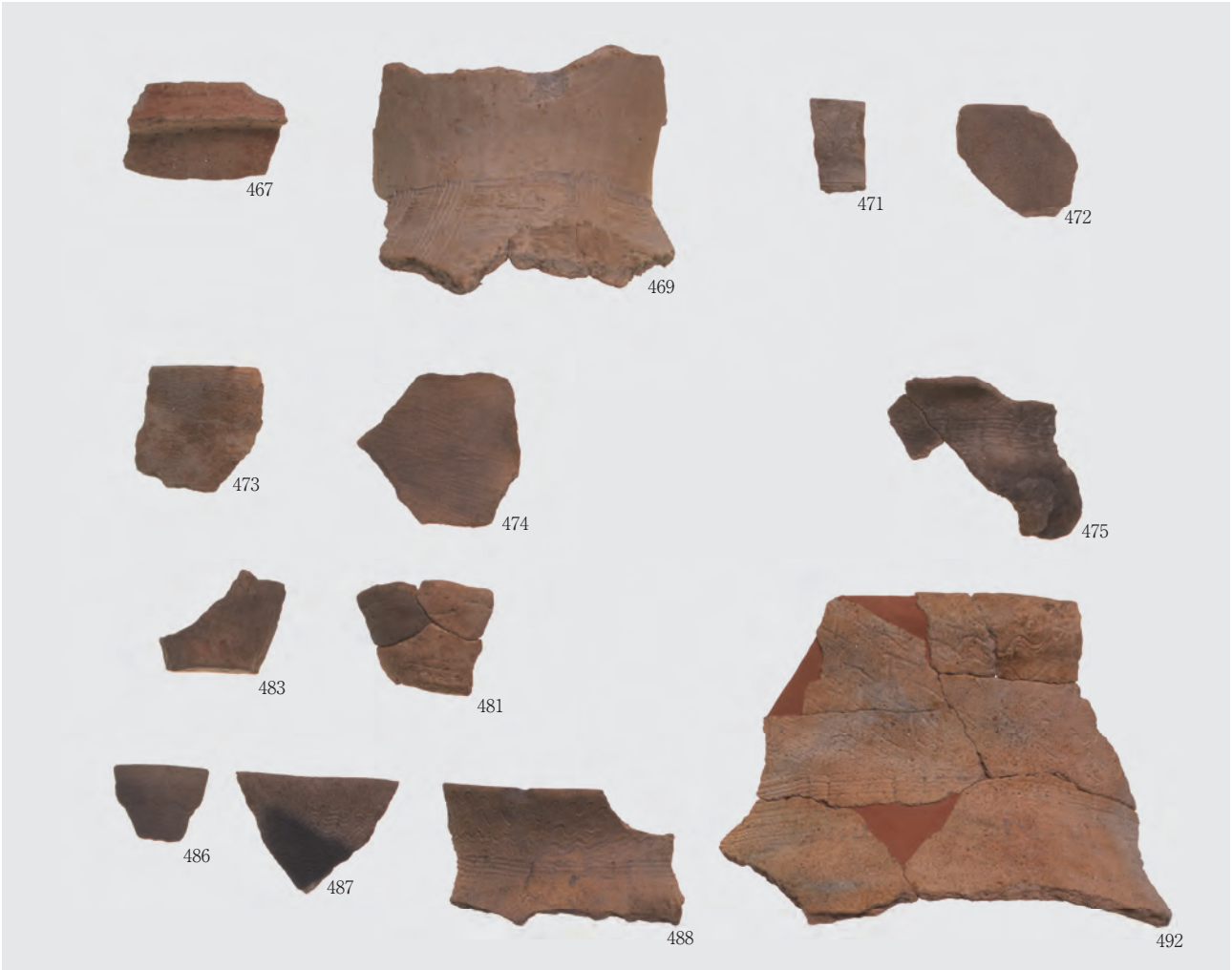
482

485

470

484

89


467
469
471
472
473
474
475
483
481
486
487
488
492

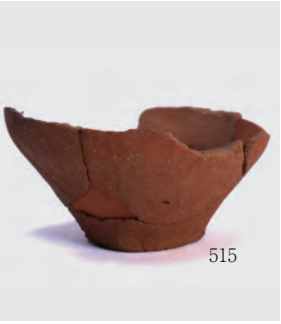
SB 2　490・491
　　493・494
SB 3　495・497
　　～ 501
SB 4　503・504
SB 5　505～511
SB 6　515・523

490

498

505

491

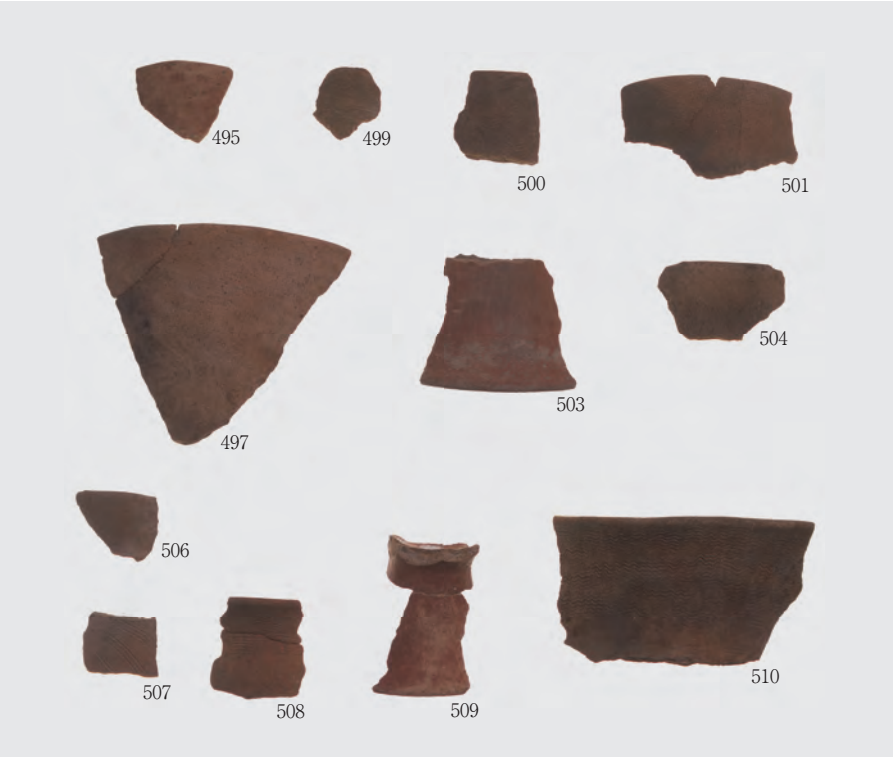

515

493

523

511

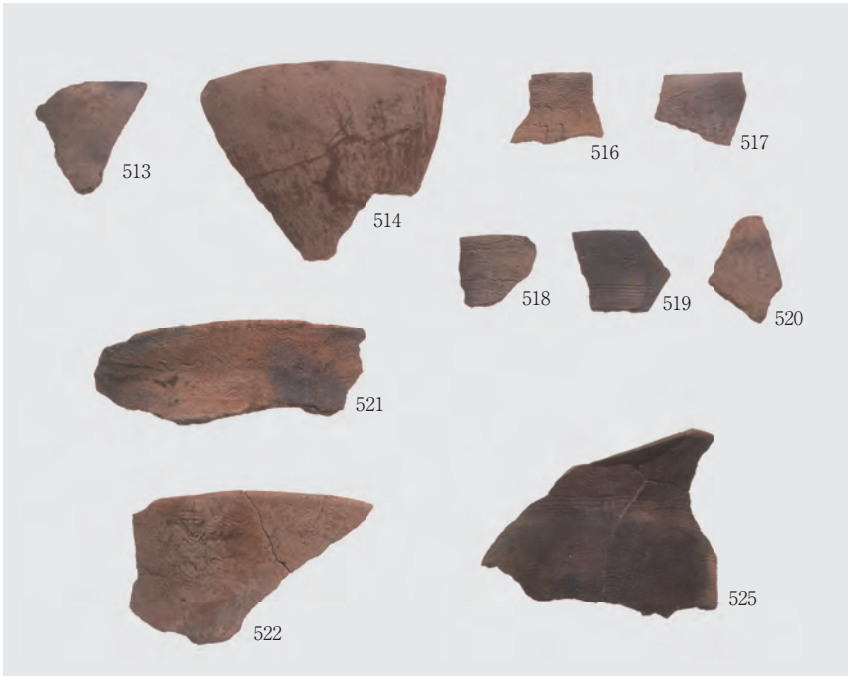
494



PL30　弥生時代後期の土器

SB 6　513・514
　　516 ～ 522
　　524・525
SB 7　536・537
SB11　539・542 ～
　　545・549

524


513
514
516
517
518
519
520
521
522
525

539

536

537

542

543

549

544

545

PL31　弥生時代後期の土器

SB11　546・540・541
SB13　550～554
SB15　555・557～561
SB16　564・565　567～570　572・573

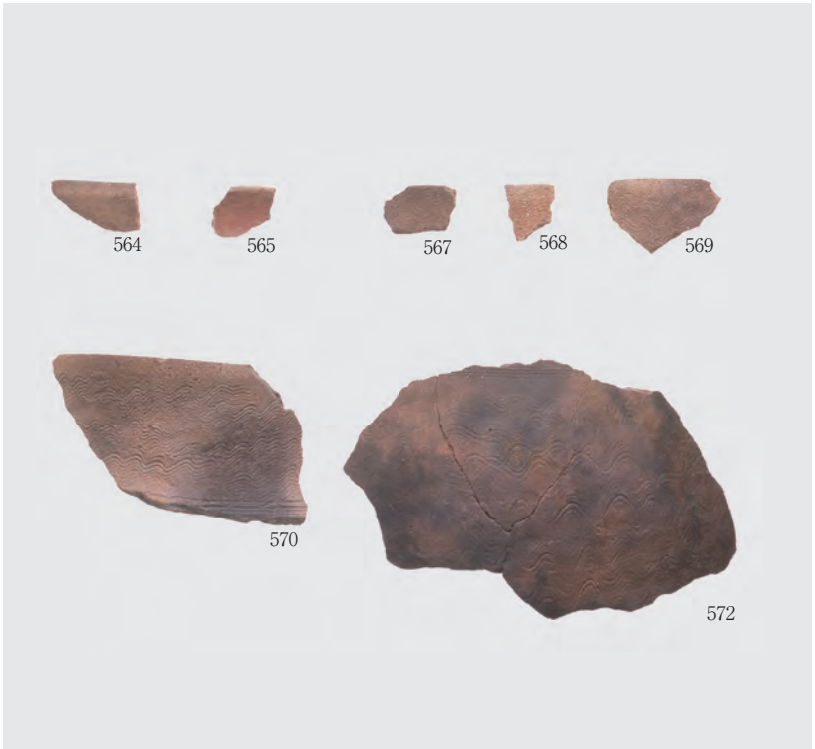
546

550

557

551

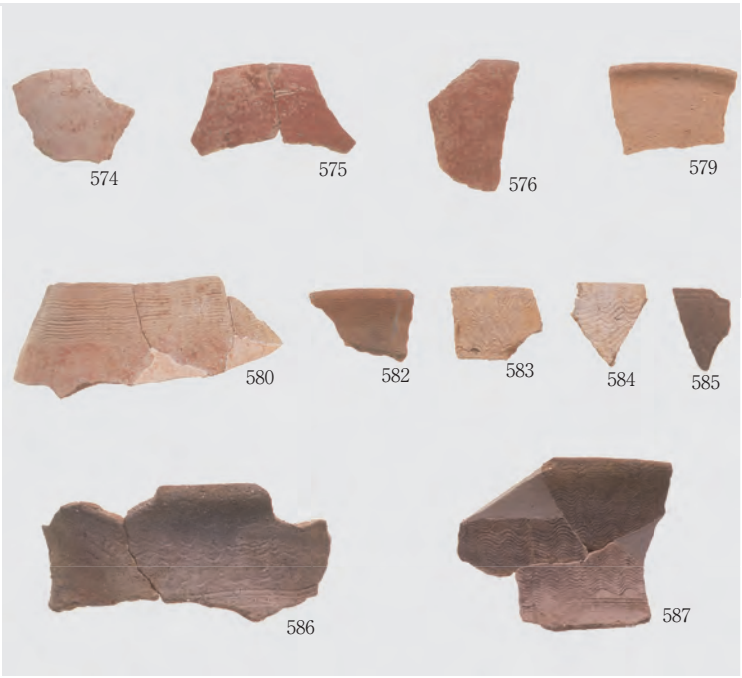
573



PL32　弥生時代後期の土器

SB16　571
SB17　574～588
SB18　590～596

571


574
575
576
579
580
582
583
584
585
586
587

581

577

578

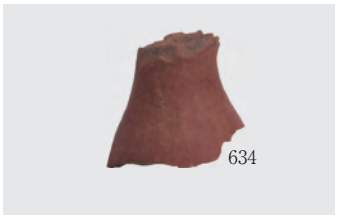
596

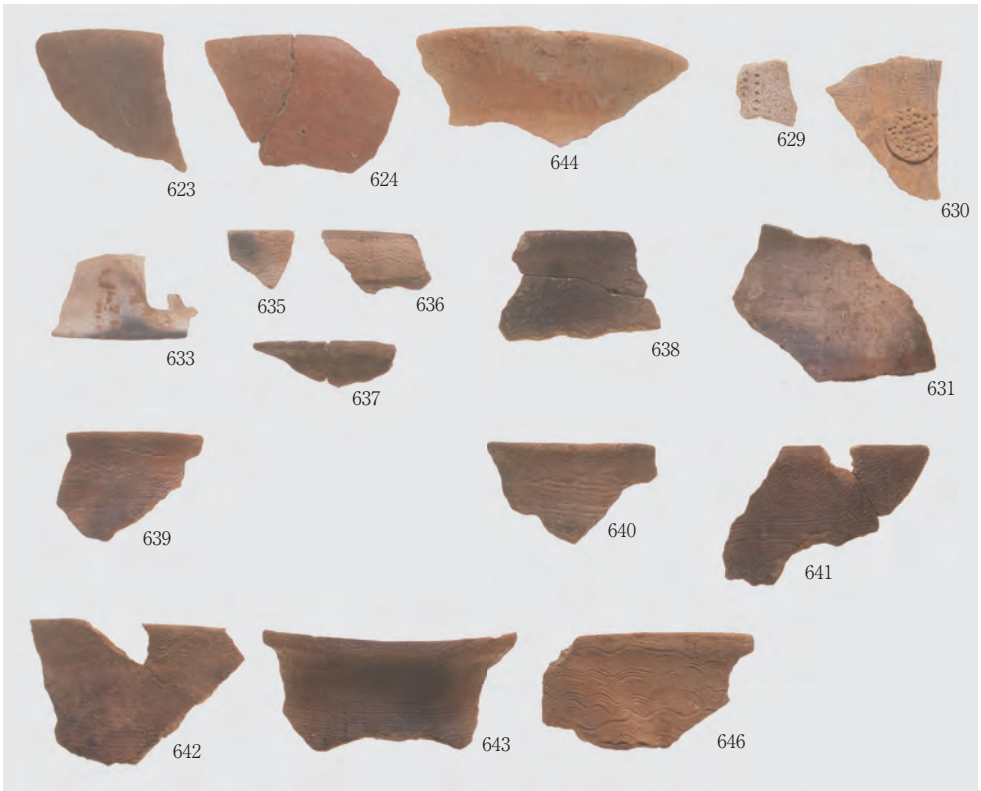
588

590
591
592
593
594
595

PL33　弥生時代後期の土器

SB19　598・599
　　601～611
　　613
SB22　616～622
SB23　623・624
　　629～631
　　633～646
SB24　656





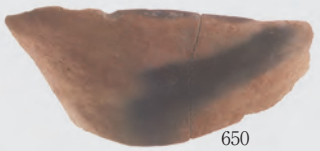
PL34　弥生時代後期の土器

SB23　625・628・632
SB24　650～655　657～659　661～667
SB25　672・673

625

632

628


650

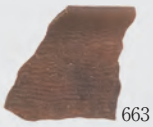
651

655

657

661

662


663

665

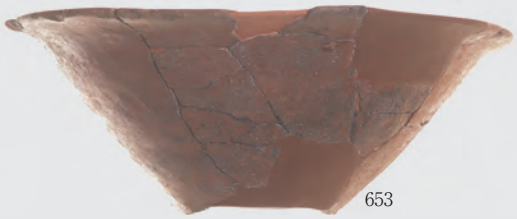
666

664

667

652

658


653

654

659

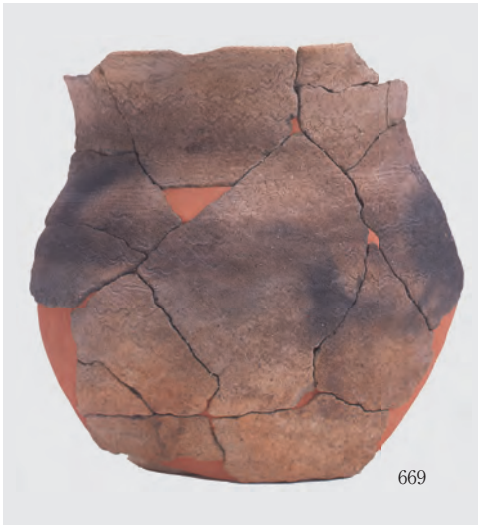
672

673

PL35　弥生時代後期の土器

SB24　668・669
SB27　674～676
　　678～691
SB28　696・698・
　　699
SB30　706・709

668


669

681

687

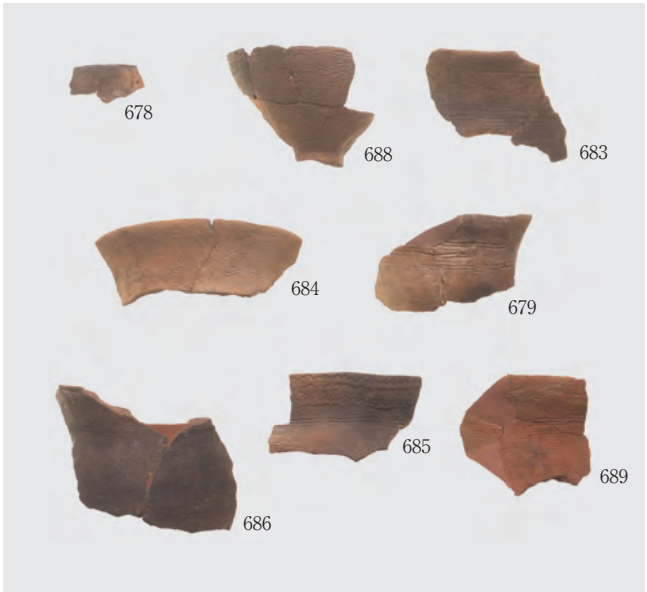
674
675
676
680
682

690

691

696

698


678
688
683
684
679
685
689
686

699

706

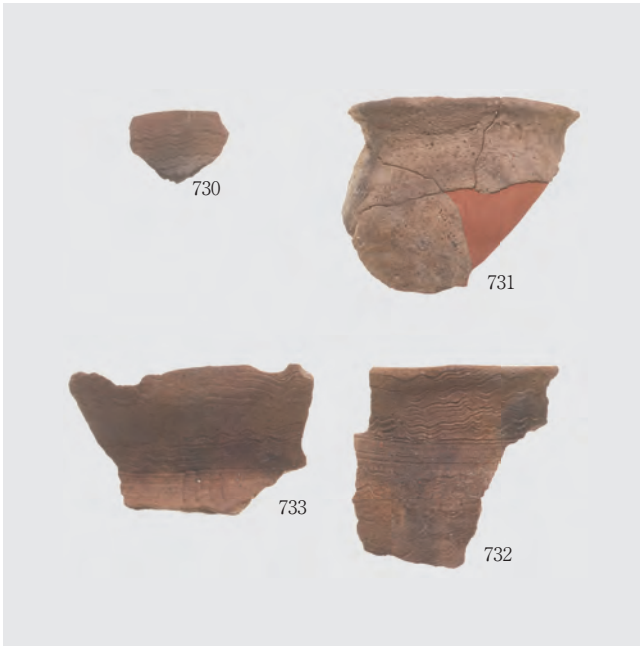
709

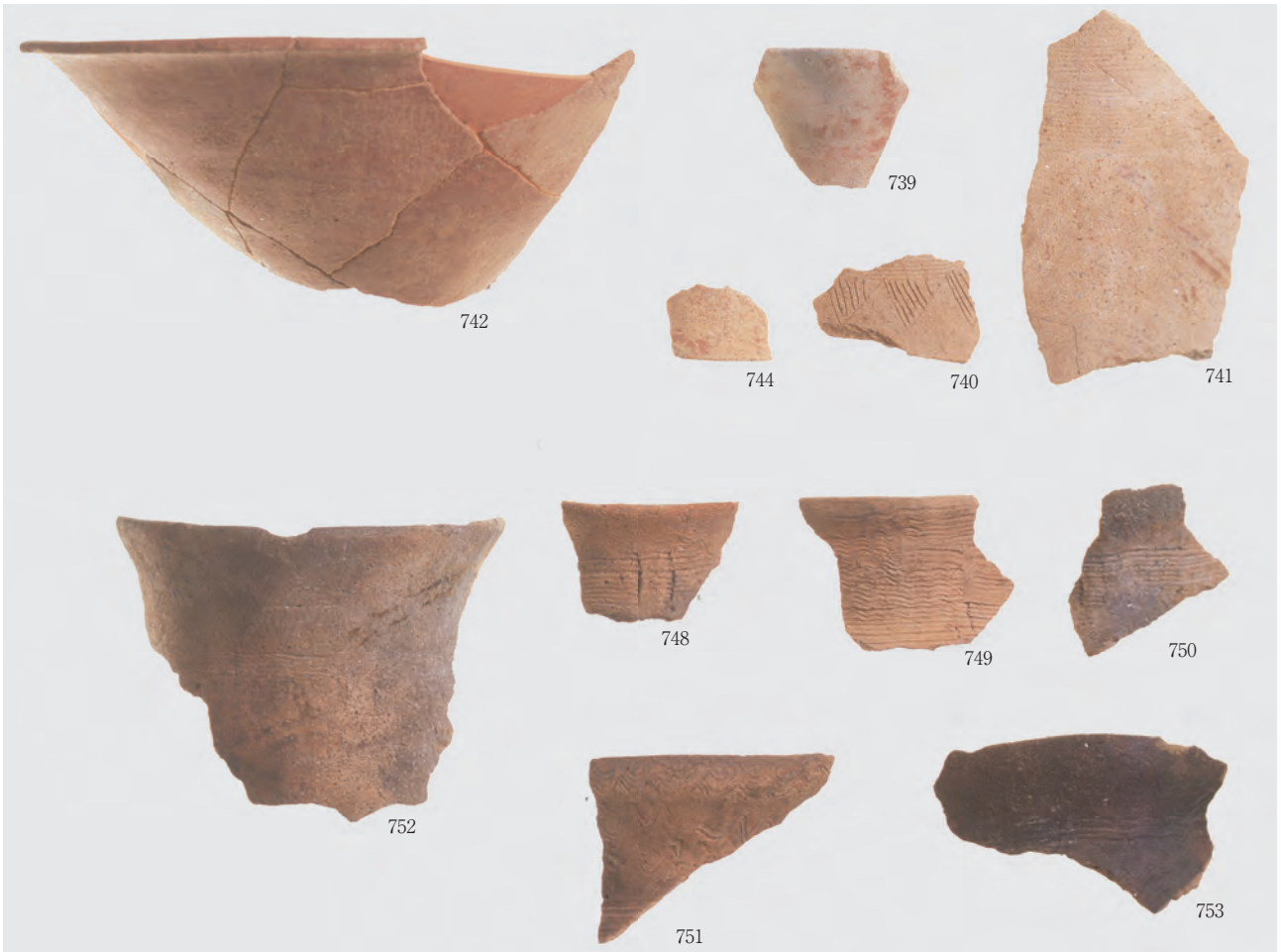
PL36　弥生時代後期の土器

SB30　700・702～705・707・710～725・727
SB34　737・738・745～747

PL37　弥生時代後期の土器

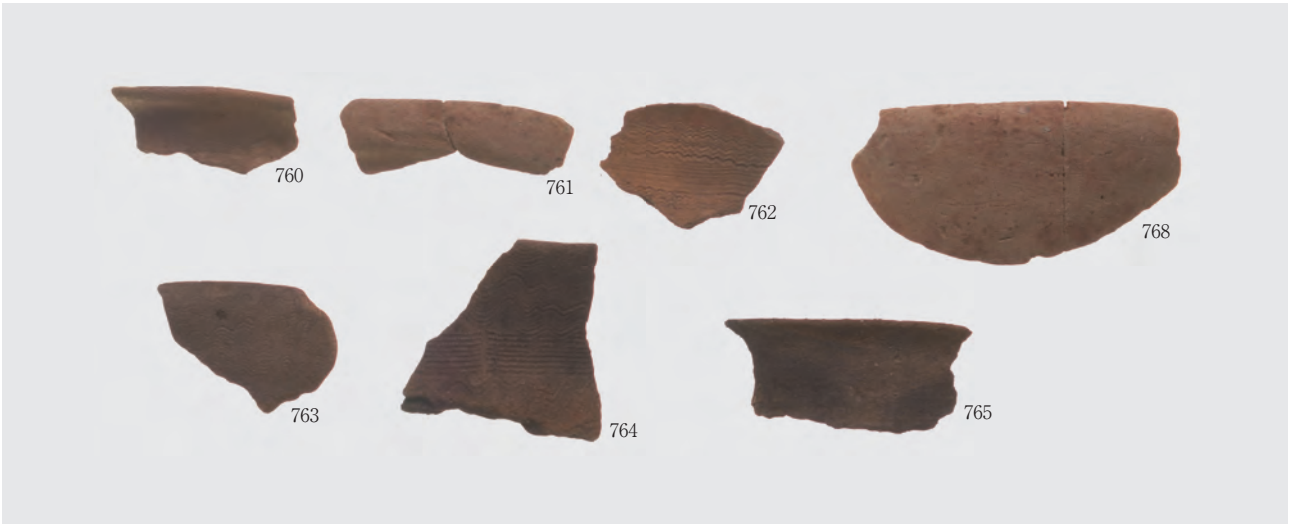
SB33　730～734
SB34　739～744
　　748～754
SB37　770

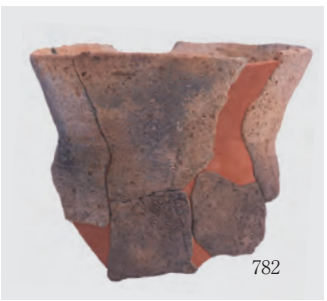




PL38　弥生時代後期の土器

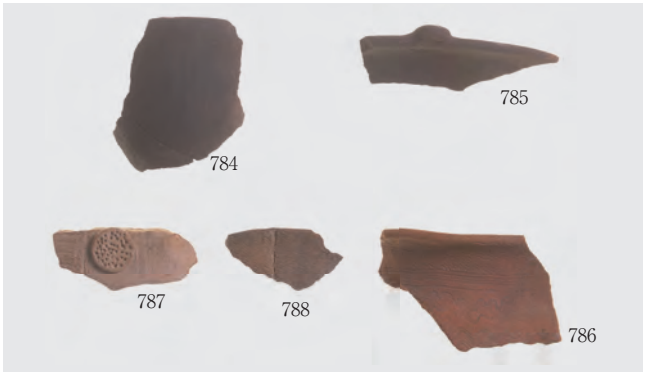
SB36	760～765
SB37	768・769・771
SB47	772・773・775
SB51	777～781
SB52	782・783
SB56	790

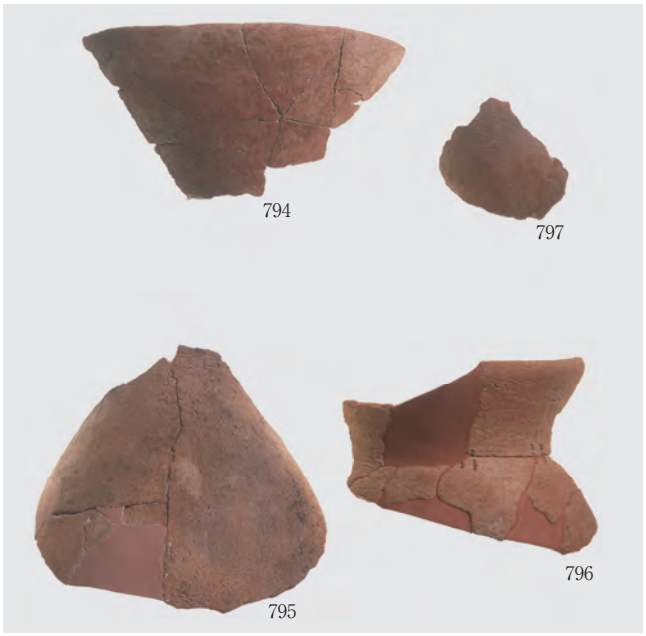


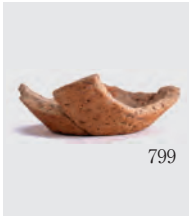


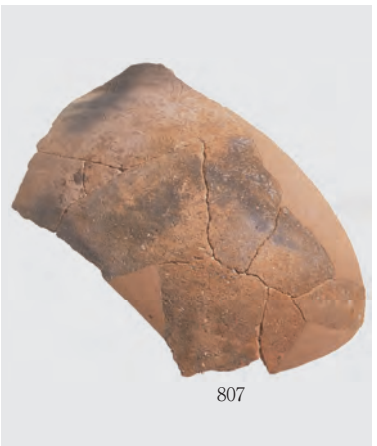
PL39　弥生時代後期の土器

SB55　784～786
SB56　791～793
SB61　794～798
SB62　799・800・802・803・807









PL40　弥生時代後期の土器

SB62	801・804～806
ST 6	809
SD 1	810～819

801

806

804

805

809

811

815

816

817

810

812

813

814

818

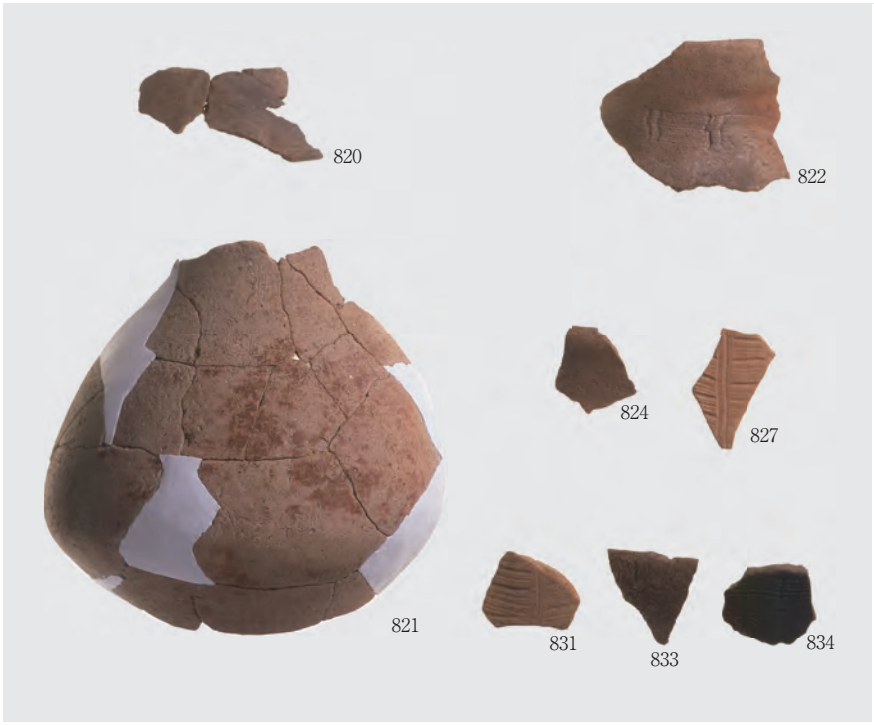
819

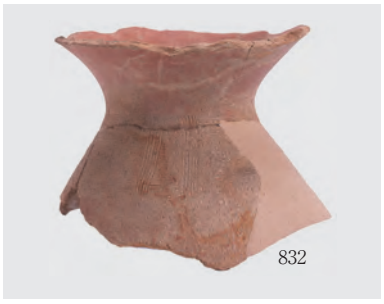
PL41　弥生時代後期の土器

SD19　820
SD188　821

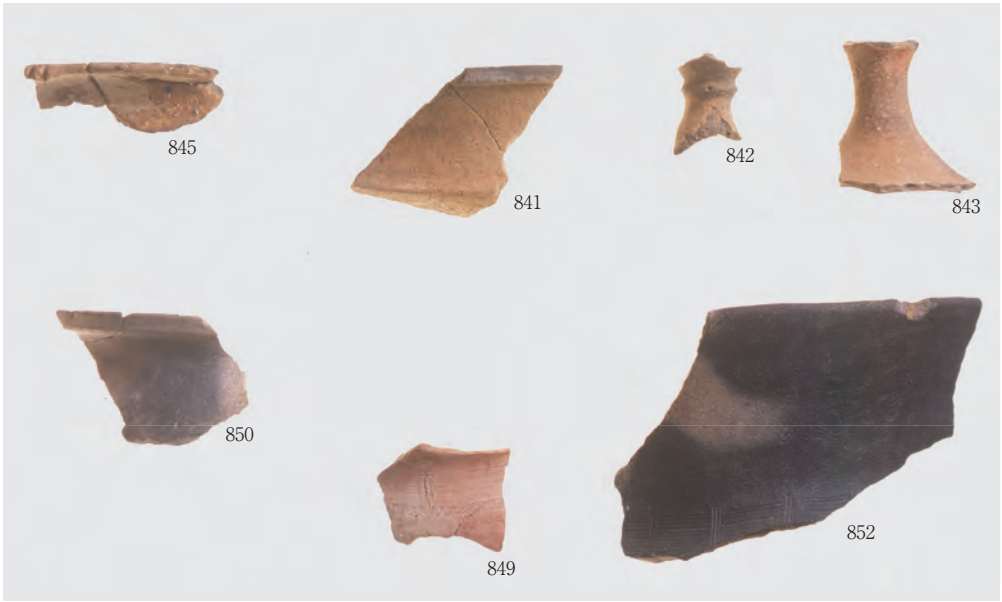
SK125　822・823
SK838　824・825
SK839　826～829
SK878　830～834
SK1300　835・836

包含層ほか
837～839
844・846～
848・851





PL42　弥生時代後期の土器・土製品



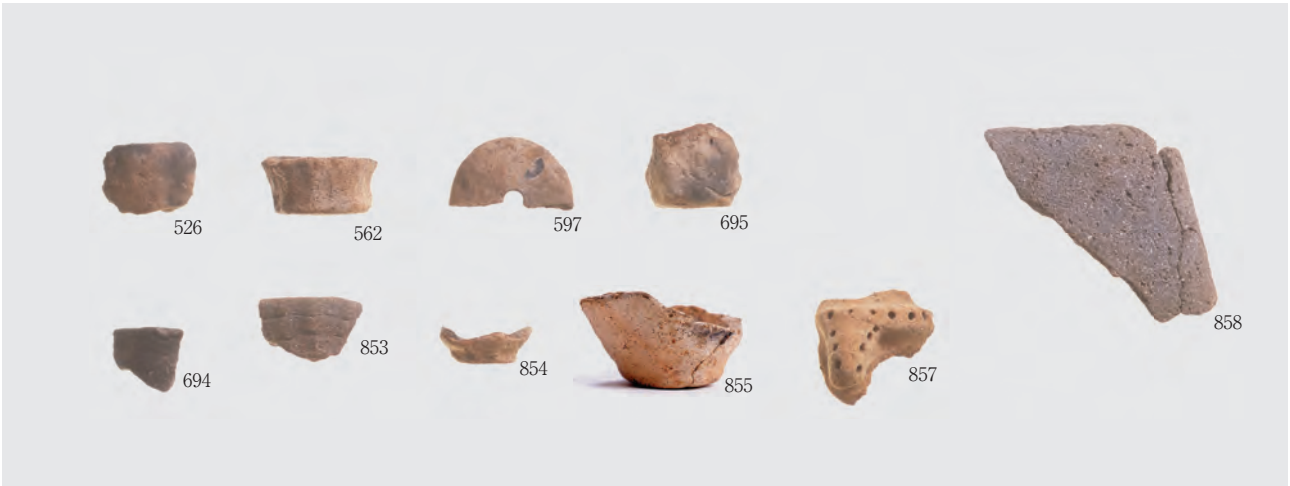
包含層ほか

土製品

SB 1	476～480
SB 3	502
SB 6	526～533
SB 7	538
SB11	548
SB15	562・563
SB17	589
SB18	597
SB19	614・615
SB23	647～649
SB24	671
SB27	692～695
SB30	728・729
SB33	735・736
SB34	755～757
SB55	789
SB62	808

包含層ほか

853～855
857・858

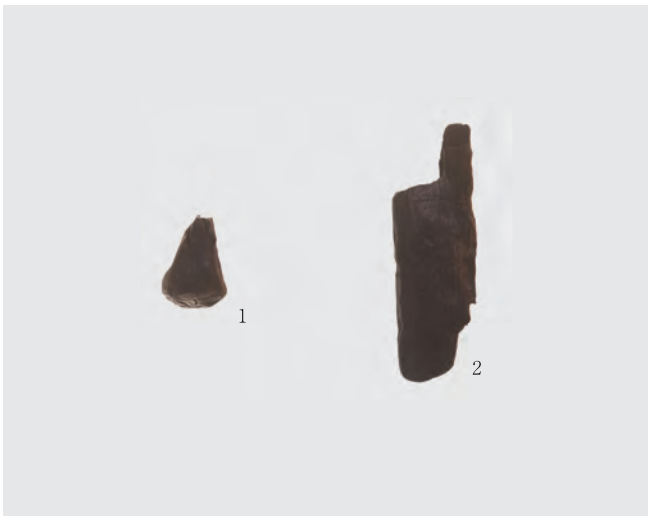


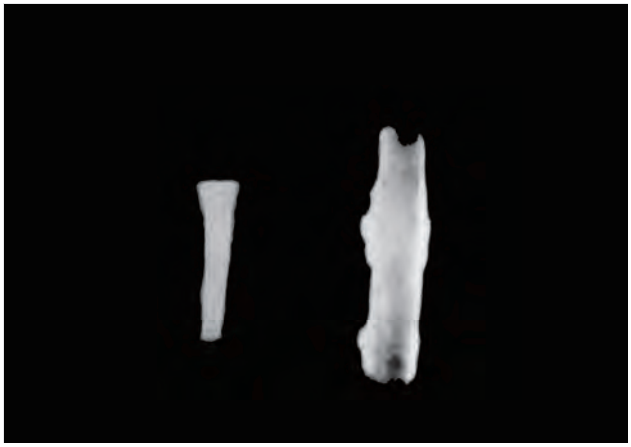
土製品
SB34　756・757
包含層　854

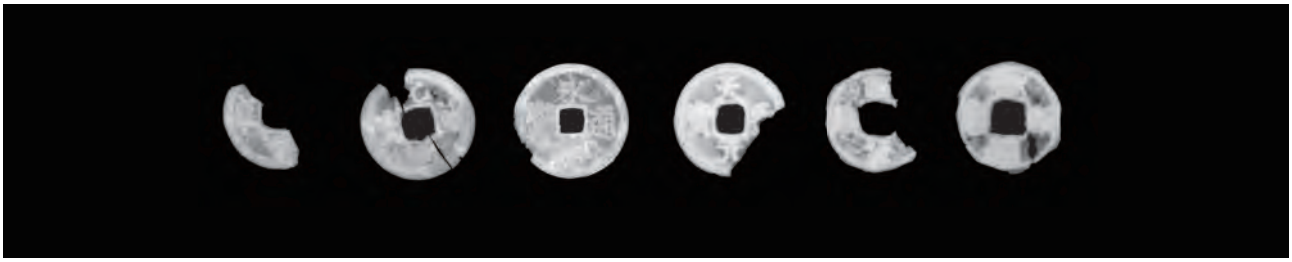
木製品
SK321　1・2
SD37　3～5

金属製品
SB34　1
⑬区　2
表採　3

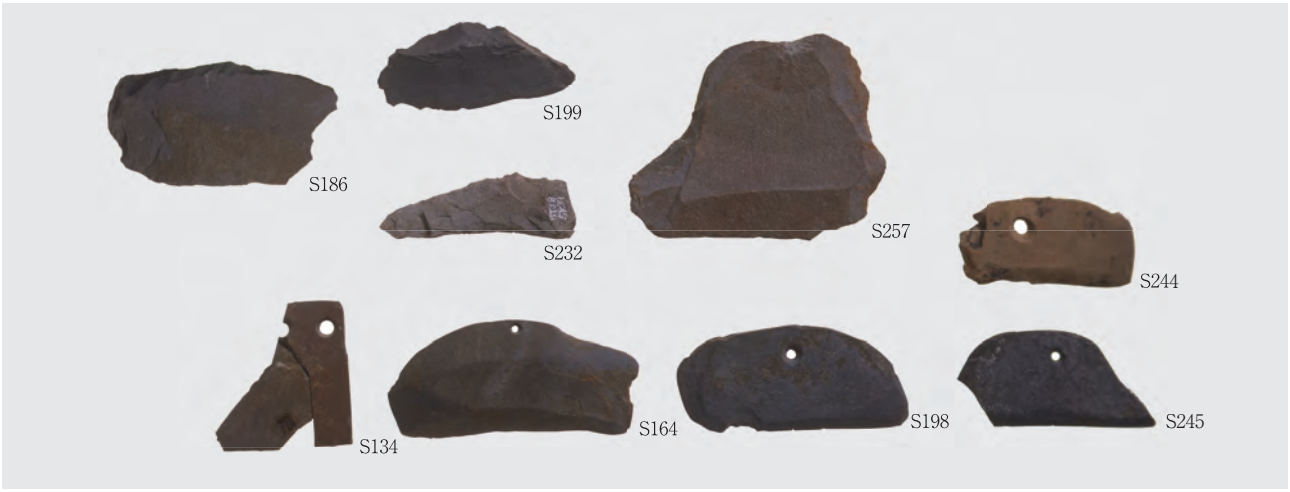
銭
SK124　1
⑤区　2・3
⑨区　4
⑬区　5・6







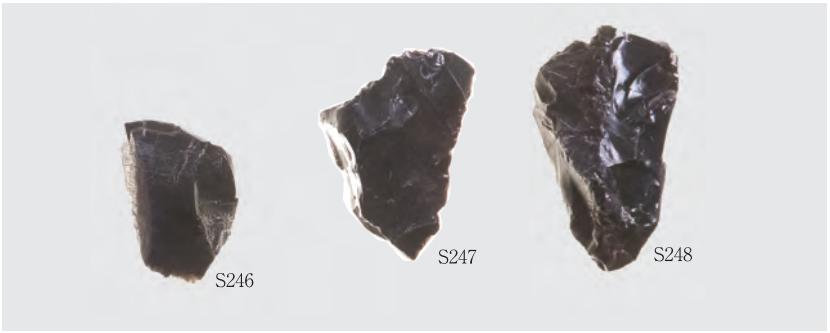
PL44　弥生時代後期の石器

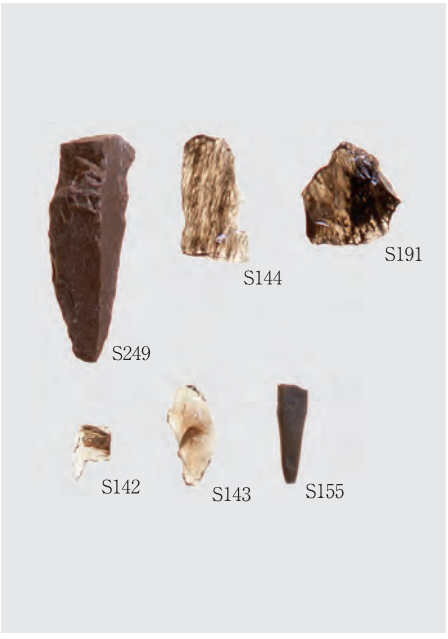


刃器　S186・S199
　　S232・S257
石包丁　S134・S164
　　S198・S244
　　S245

石鏃　S208・S258
原石　S221

原石　S138
石核　S139・S213
　　S226
剝片　S169・S194



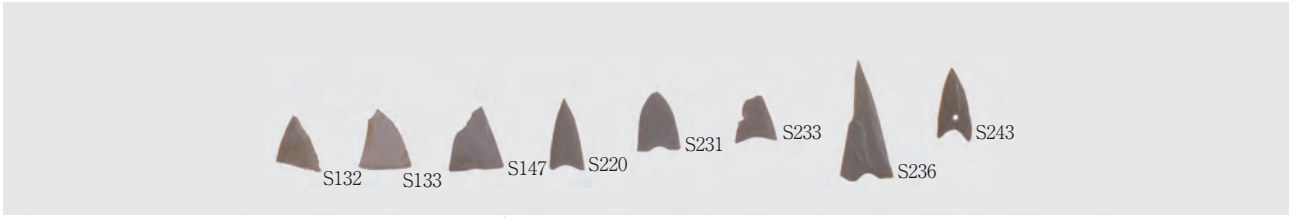


原石　S246～248
石鏃　S142・S148
　　S163・S211
　　S251～S253
石錐　S143・S155
刃器　S249
石屑　S144
楔形石器
　　S191

PL45　弥生時代後期の石器

磨製石鏃未成品
　S124・S130
　S131・S140
　S156・S162
　S190・S195
　～S197
　S209・S210
楔形石器
　S141・S166

磨製石鏃



独鈷石　S126
磨製石斧
　S125・S207
　S219・S234
　S235・S256
磨石　S212
玉石　S151・S165
石製品　S137

台石・砥石
　S128・S146
　S157・S170
　S173・S179
　～S181
　S193・S214
　S254・S255
凹石　S172

PL46　弥生時代後期の石器

S129

S159

S161

S189

S230

S177

S160

S174

S176

S187

S239

S240

S188

S192

S167

S175

S224

S225

S259

台石・砥石
- S129・S160
- S161・S174
- S175・S177
- S187 ～ 189
- S192・S224
- S225・S230
- S239・S240
- S259

磨石　S159

石製品　S167

凹石　S176

PL47　弥生時代後期の石器

敲石　S127・S135
　　S150・S149
　　S158・S171
　　S182・S183
　　S200・S215
　　S222・S223
　　S227～S229
　　S238・S241
　　S242
凹石　S152・S153
　　S145・S168
　　S184・S185
　　S216

SD83

SD88

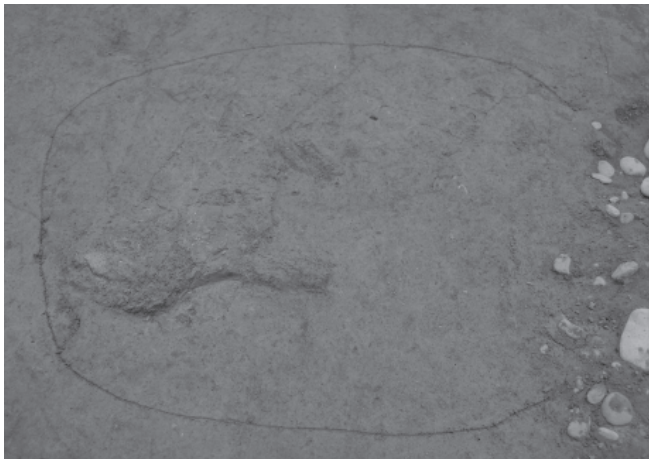
⑬区　古墳時代～古代面溝跡

SL9

ST1

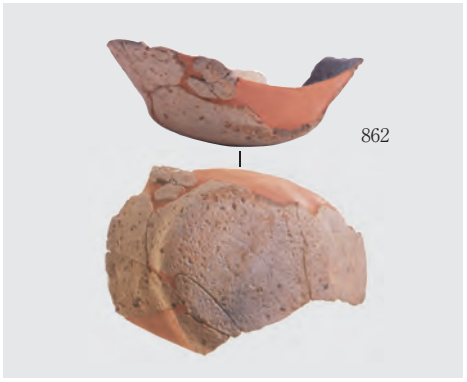
ST３・４・７

SL1


SK124　人骨出土状況

PL49　古墳時代以降の遺物

古墳時代～古代の遺物
SD 7　862
SD37　867
SD67　870
SD83　872
SD88　877・S261
SD142　879・880
包含層ほか
882～885
889～895


862

867

872

882

883

884

885

889

877
870
894
895

891
890
893
892

879
880

S261
S262

中世以降の遺物
SK38　897
包含層ほか
899・901
～ 903
S263・264

899
903
901
902

S263
S264

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどうながのうえだせんちからいしばいぱすけんせつじぎょうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ1―ちくましない―
書名	主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書1―千曲市内―
副書名	力石条里遺跡群
巻次	1
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	96
編著者名	上田典男　町田勝則　西　香子
編集機関	（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388 - 8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963 - 4　TEL 026 - 293 - 5926
発行年月日	2011年3月11日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
力石条里遺跡群（ちからいしじょうり いせきぐん）	長野県（ながのけん）千曲市（ちくまし）上山田（かみやまだ）字薬師堂（あざやくしどう）97他（97ほか）	20216	401	36° 27′ 47″（世界測地系） 36° 27′ 35″（旧測地系）	138° 09′ 25″（世界測地系） 138° 09′ 36″（旧測地系）	20001205 ～ 200121717 20010601 ～ 2001226 20020407 ～ 20021222 20030413 ～ 20031130 20040419 ～ 20041206 20050417 ～ 20051215 20071002 20080430 ～ 20081212	27,284㎡	主要地方道長野上田線力石バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
力石条里遺跡群	集落跡 水田跡 墓跡	弥生時代前期末～中期中葉	墓56、溝跡14、土坑467	土器・石器・土偶・玉類・骨角製品	再葬墓や土壙墓などが多数確認された。墓域からは、多数の土器や石器・土偶などの遺物が出土。
		弥生時代中期後葉	竪穴住居跡5、溝跡35、土坑55	土器・石器	
		弥生時代後期	竪穴住居跡58、掘立柱建物跡6、溝跡51、井戸跡6、土坑835	土器・石器・玉類	微高地に展開する、掘立柱建物跡・井戸跡などを備えた集落跡。
		古墳～古代	溝跡82、土坑74	土器・石器・木製品	
		中世以降	掘立柱建物跡5、水田跡2、溝跡8、土坑294		
要約	弥生時代の墓域と集落域が捉えられた。墓域は前期末～中期中葉に相当し、土壙墓だけでなく、再葬墓と思われる土坑や、焼骨化が行われた土坑などが確認され、該期の葬制を推考する上で貴重な資料である。また、墓域の包含層からは土器や石器･土偶などの土製品といった遺物が多く出土している。出土した土器は、在地の土器に加え、東海地方の条痕文系土器や遠賀川系土器が混在しており、今まで資料が少なかった千曲川流域のこの時期のまとまった資料であり、該期の交流の様子が窺われる。集落跡は中期後葉栗林期に相当するものと、後期中葉から後葉の箱清水期に相当するものである。後期中葉の時期は、井戸跡や掘立柱建物跡をもつ小規模な集落が点在していたが、後期後葉になると調査地北寄りの微高地に集落は集中し、比較的大きな集落に発展する。そして､その周辺地区は集落を支える水田耕作等を行う生産域へと変化する､といった集落景観が復元できる。また、集落から出土した土器の中には、北陸地方の影響を受けた土器や、北関東の樽式の土器などもみつかっていて該期の交流の様子が窺われる。					

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 96

主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書１

―千曲市内―

力石条里遺跡群

発　行　　平成２３（２０１１）年３月１１日
発行者　　長野県千曲建設事務所
　　(財)長野県文化財振興事業団
　　長野県埋蔵文化財センター
　　〒387-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
　　TEL　026-293-5926　FAX　026-293-8157
　　E-mail　info@naganomaibun.or.jp
印　刷　　株式会社Ｑプレス
　　TEL　026-233-3174　FAX　026-233-0304